日本建築協会80年史

1917－1996

日本建築協会80年史

1917－1996

設立のこころざし

我が關西建築協會は、時代の機運に促がされ、建築技術家の覺醒に由り、大戰亂第四年の春、梅が香薫る關西の天に呱々の聲を上げたり。

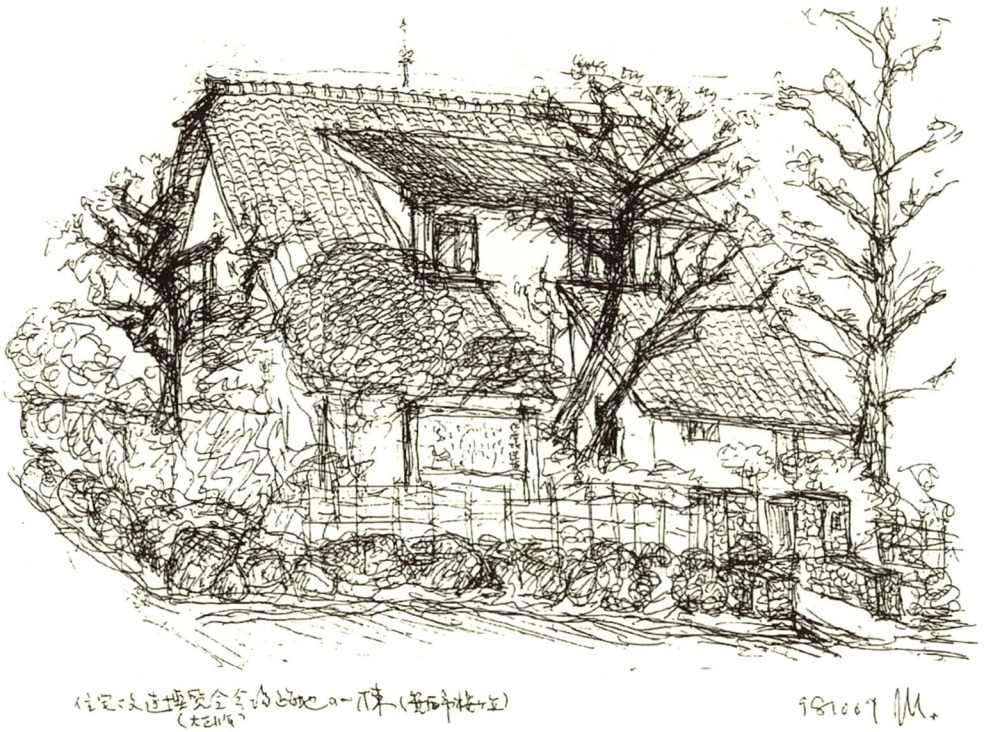
思ふに、明治維新以來、我が國の文物は其のあらゆる方面に亘りて、空しく苟且主義の上に樹てられ、少しも確固たる基礎を有せず、所謂過渡時代の混沌たる狀態にありしが、時は絶ゑ間なく進みて黎明の氣は天地に漲りぬ、曉の鐘將に高く鳴らんとす。

此の進展期に際し、社會を指導する大抱負の下に、我が國建築界の堅實なる發展を期し、科學的に組織ある文明的都市の建設を計るべき急要の時期なるを覺悟し、以て將に鳴らんとする曉鐘第一の金鋼杵たらんと欲す、蓋し、其の事や大にして其の責や亦重しと云はざるべからず。

我が關西在住の建築技術家は茲に結束して起ちぬ、偏に其の任務の輕からざるを感じながら、專ら斯の偉いなる目的遂行に熱中し、從來我が國一般に措いて問はざりし都市建築の拘束改良、家屋政策、其の他文明的施設の刻下急要の問題にして苟くも建築に關連せるものは、凡て之が研究調査をなし、之を社會に發表して啓蒙の位置に立たんと期す。

天下有識の士、幸に此の誠意に同情し、斯の事業の成功に協力せらるゝあらば、豈獨り我が關西建築協會の利益のみなるならんや。

片岡　安



大正11年、日本建築協会が主催した「住宅改造博覧会」の出品住宅のいくつかは、今も大阪府箕面市桜ケ丘に残る。この住宅は少し改装されているようだが、箕面市教育委員会がその会場跡地であるとの標示板を庭に立てている。

スケッチ／松井　昭光

序

日本建築協会は大正６年(1917)３月30日、理事長に片岡安を擁して38名の建築家が相寄り、「我が国建築界の堅実なる発展を期して」その名も当初は関西建築協会として呱々の声を上げた。２年後の大正８年には、全国を視野に活動を展開すべく名称を日本建築協会と改め、大正15年10月には公益法人としてはわが国ではじめての認可を得て、名実ともに建築を通じて社会に貢献する全国団体としての地位を確立した。

創立30周年を迎える1947年（昭和22年)、かの第二次世界大戦によって廃墟と化した都市の再建の渦中にあって、おおよそ建築にかかわるすべての分野が一団となり総意を結集して事に当たるべきことの重要性を痛感し、定款を改正して建築界の各団体をつなぐ総合団体としての道を歩みはじめて以来50年、1997年（平成９年）３月30日、めでたく創立80周年を迎えたのである。

「日本建築協会80年史」は、この創立80周年記念事業の一環として企画されたのであるが、当初は予定に入っていなかった。企画委員会において記念事業の規模や内容の検討に入ったのは約１年半の余裕を見越した平成７年９月である。当時は、記念式典をはさんだ２年先の日本の経済が、まさか大手都市銀行の倒産などを含む金融システムの破局とともに中堅建設業の倒産の続出に波及するとまでは思い及ばなかったが、すでに、いわゆるバブル崩壊の暗雲のなかで先の見通しも定かならず、記念行事を行うには極めて厳しい情勢というのが当時の建築界の姿である。このような時にこそ盛大にとの考えもないわけではなかったが、建築界あっての建築協会としては過度の盛大な記念行事は控えるべきであるとして、大筋は前回の70周年を参考にしつつも、なお若干の簡素化をはかることとなった。そしてそのお手本とした70周年記念事業に年史はなかったのである。

創立以来これに類する企画としては、50周年記念の会誌に「建築協会50年の歩み」と題する特集がある。50周年の次は100周年と考えるのが普通かも知れないが、これまでの30年でも、その間の技術の進歩、建築界の変化の激しさはその前の50年の比ではない。これからの20年はなおさらであろう。ましてや21世紀への大きな節目が目前に迫っている。わが協会だけがもつ総合団体としての特色を生かし、建築を通じて広く社会に貢献するという責務に変わりはないとしても、今、この大きな節目を前にして過去の業績を振り返り、20世紀に訣別して100周年に向かっての新しい進路を検討するためにも80年史の重要なことは言うまでもない。悔いをあとに残さぬことを願い、遅ればせながら80年略史の編纂が追加決定されたのは、記念日も間近に迫った平成８年12月の理事会においてであった。

編纂委員会は、長谷部朔郎氏に委員長をお願いし、各常設委員会からの推薦による６名の委員によって平成９年５月12日に第１回委員会が、さらに10月からは研究、執筆等のため神戸芸術工科大学名誉教授の坂本勝比古先生を代表とする11名の方々にワーキンググループをお願いして進めていただいた。

当初は平成９年度末を目途にスタートしたのであるが、この種の事業にしてはあまりにも短すぎる。その後10年度末に変更はされたが、それでも日々が時間との競争であった由であり、資料の収集その他、皆様にいかにご苦労をおかけしたかは察するに余りある。お蔭様で当初予想した略史の範囲をはるかに超える充実した80年史を皆様にお届けできることは、私どもにとってはこの上ない喜びであり、ここに年史編纂の経緯をご報告申し上げ、ご尽力いただいた委員、ワーキンググループの皆様に心からの感謝を申し上げる次第である。

社団法人　日本建築協会会長　　市　川　　宏

目次

総論　日本建築協会の遺産と功績／坂本勝比古 ……9

第1編　日本建築協会80年の記録

第1章　沿革 ……27
第2章　委員会活動 ……33
第3章　事業と業績 ……61
第4章　諸団体と協会 ……83

第2編　それぞれの時代を担った人々の活動

第1章　草創期の人々

人物年表……95
片岡　安（坂本勝比古）……96
設楽　貞雄（坂本勝比古）……98
武田　五一（桐浴邦夫）……100
池田　實（和田康由）……102
波江　悌夫（吉田高子）……104
竹腰　健造（坂本勝比古）……106
尾崎　久助（梅宮弘光）……108
東畑　謙三（橋寺知子）……110
塚本　猛次（酒井一光）……112
福田　朝生（石田潤一郎）……114
佐野　正一（石田潤一郎）……116
葛野壯一郎（植松清志）……118
横濱　勉（吉田高子）……119
松本　禹象（山形政昭）……120
宗　兵蔵（坂本勝比古）……121
園部　文雄（植松清志）……122
日高　胖（坂本勝比古）……123
野村　一郎（酒井一光）……124
古宇田　實（梅宮弘光）……125
松室　重光（石田潤一郎）……126
松井貴太郎（坂本勝比古）……127

安井　武雄（石田潤一郎）……128
中澤誠一郎（和田康由）……129
坂　　靜雄（梅宮弘光）……130
今林彦太郎（坂本勝比古）……131
井上　新二（和田康由）……132
松本　儀八（山形政昭）……133
池田　宮彦（酒井一光）……134
錢高　輝之（橋寺知子）……135
中西　六郎（梅宮弘光）……136
大林　芳郎（山形政昭）……137
鴻池　藤一（吉田高子）……138
伊東　五郎（和田康由）……139
竹中　錬一（安達英俊）……140
鷲尾　健三（安達英俊）……141
松村　雄吉（桐浴邦夫）……142
横尾　義貫（桐浴邦夫）……143
足立　　孝（橋寺知子）……144

第２章　21世紀へ語り継ぐ激動の昭和
—戦中戦後の協会活動をふり返って—……147
尾亀清四郎／大林　芳郎／小西　　岬
佐野　正一／横尾　義貫／三品　哲夫

第３編　年表（1917～1996）

日本建築協会の80年……160

資料編

日本建築協会会則……192
社団法人日本建築協会定款・細則……193
役員名簿……198
総会・評議員会・理事会の開催……212
支部の設立と支部規程……214
支部役員名簿……218
会員数・収支決算等の推移……224
青年建築家及び青年技術者の顕彰……228

総論

日本建築協会の遺産と功績

坂本勝比古

日本建築協会は大正６年（1917）の創立以来80周年を迎えた。80周年と一言で言うのは易いが、実際にこの80年の歳月の重みは大変なものだと思う。建築協会（以下、「日本」を省略する）の発行する機関誌“建築と社会”の発行延べ号数は、80周年を迎えた1997年３月末発行の４月号で実に901号に達している。まさにこの数字の大きさに驚くとともに、会員並びに事務局が払ってきた努力の数々に一入（ひとしお）感慨を禁じ得ないものがある。その間、太平洋戦争による用紙の不足から発行が中断した時期や、建築学会との合併が議論されたとき、また敗戦による物資欠乏の時代を乗り越えて今日に至る道のりは、決して平坦なものではなかった。

また建築協会が我が国の都市計画や建築法規の貧困さを憂えて、建築学会や建築士会などに呼びかけ都市計画法や市街地建築物法の制定に大きく貢献したことは、何人たりともこれを認めるところである。さらに大正11年の桜ケ丘住宅改造博覧会の大事業は、大都市郊外の住宅地開発の模範的手法を実物の住宅分譲を通して提示したもので、これを建築協会が独力で計画し多くの参加者の協力を得ながらも民の力で実行した事業であるだけに、その成果は近代住宅史にさん然と輝くものである。

またこのような住宅改良の運動は、これにとどまらず、度重なる住宅コンペや入選作の展覧会を開いて、市民に住宅改良の必要性を説き、市民生活の向上に寄与してきた。

このたび日本建築協会80年史の刊行に当たって、表題のようなテーマについて所見を求められた。大変光栄に存ずると同時に、この機会に改めて初代会長片岡安の果たした役割を回顧し、その不屈の足跡に新たな光を当てることができたらと願っている。また主として大正、昭和戦前期の協会の活動を通して、多くの先輩たちが求めてやまなかった理想とは何か、建築と社会との結びつきの重要性を彼らがどのようにとらえ、主張してきたかを理解することの一助となれば幸いである。

なお紙面の都合で、大きな流れの中で、いくつかの主要な動きを要約して考察することとした。また取り上げるべき多くの会員の方々の功績を割愛せざるを得なかったことを残念に思っている。

関西建築協会創設のころ

この協会が創設されたころの関西における社会、経済的背景はいかなるものであったであろうか。その草創期の大阪を中心とした当時の社会的状況の中に、協会が生まれるべくして生まれた必然性があったのではないかと思う。“オキナ会”とか“建坊会”といったグループの存在が、大同団結したというプロセスはよく語られているが、もっと根源的には、大正デモクラシイとか、大正ロマンとか言われるように、格式張った秩序や因習から解き放たれて、自由な空気を吸い、自らの理想を都市や建築を通じて実現したいという強い願望が、大阪を中心に集まった建築家たちの胸中にあったからである。しかも当時の大阪の都市的景観は余りにも貧困で、密集した低層の木造建築の混乱した姿や、急激に人口が増大する都市環境の悪化に、見るに見かねた前途有為な建築家たちの鼓動が、この協会を産む大きな原動力になったのではないかと思う。

時はあたかも、突如勃発した第一次世界大戦の影響で好景気となって、大阪の産業界を潤していた時期であった。我が国が開国して半世紀がたとうという時代になっても、東京の市区改正は一向にはかどらず、大阪においてはようやく、市区改正への取り組みが動き始めようとする段階に差しかかっていた。このような時期に、片岡安は檄文“同窓建築技術家に告ぐ”の小冊子を広く諸建築家に頒布し、また建築学会誌に公表した。その中で彼は、“殊に東京大阪等の大都市が何等都市建築大改造の方針を樹てざるが如き、又道路拡築や建築法規の制定を怠りつゝあるが如きは、到底之を文明時代の正道と見る譯にゆかない”と断じ、このような大問題に対して“僅かに一建築学会を唯一機関とするは、決して当を得たものではない。よろしく各地に又各方面に、団体を組織し、会員各自の切磋をなし、他団体又は社会との連絡を考へ、内容の充実と外界の接触とを計るを急務と思ふのである”と述べ、明らかに学会とは別に新しい組織をつくることを宣言している。この時期、東京でも“ドンブリ会”（東大明治36年組、佐野利器、佐藤功一、田辺淳吉、北村耕造ら）を中心に、辰野金吾学会長の多選を阻もうとする動きがあった。辰野の

会長任期が長過ぎると言うのである（建築と社会　昭和７年10月　創立満十五周年記念号、その頃を語る座談会より）。結局その年、辰野は再選され、翌大正７年に曾禰達蔵に替わった。これは明治のころには考えられないことで、このような自由な発言が認められるような社会の変化が、大正時代の潮流ではなかったかと思う。

一方、大阪の大正時代は、建築界では大阪市役所庁舎（明治45年３月～大正元年８月）と、大阪市公会堂（明治45年４月～大正元年10月）の二つの大きなコンペによって幕開けとなった。なかでも公会堂のコンペは、そうそうたる建築家を集めての指名コンペで、入選作の決定は応募者13名による互選の方法がとられ、１等岡田信一郎、２等長野宇平治、３等矢橋賢吉で決まった。このコンペの結果、中央公会堂は岡田信一郎の原案を修正し、辰野金吾の指導の下に辰野・片岡事務所で実施案をつくり、大正７年完成した。また大阪市庁舎もコンペの１等入選は小川陽吉案であったが、片岡、牛村喜勇、今林彦太郎によって実施案がつくられ、大正10年に完成する。これらはいずれも中之島に建てられたものであり、中央公会堂は百万円を寄付した相場師岩本栄之助が、その完成を見ずしてピストル自殺するという話題性を



大阪市公会堂



大阪市役所庁舎

含んで、先に建った日銀大阪支店（明治36年）、府立中央図書館（明治37年）などとともに、既存の市街地景観の中では突出して見事な都市景観を形成することとなった。

建築協会が生まれたころ、すなわち大正時代の初めは、大阪が近代的な商工業都市として大きく飛躍できる好機に恵ま



大阪紡績三軒屋工場

れていた。近世以来天下の台所として繁栄してきた大阪の商勢は、明治維新によって一時的に衰退するが、やがて大阪商人のど根性は、新しい時代に適応した商運の開拓に乗り出すこととなる。明治16年に我が国で最初の蒸気機関による１万台を超える紡錘機を備えた大阪紡績会社は、大阪が紡績業を通して発展する先駆けとなった。

このあと、つぎつぎと民間資本による紡績会社が興り、この国の産業革命の先駆的役割を担う。このため大阪はやがて東洋のマンチェスターと言われるまでになり、明治20年代に早くも民間建築事務所が出現する。滝大吉（東大明治16年卒）、茂庄五郎（東大明治24年卒）らがそれで、なかでも茂は産業界との結びつきが強かった。彼が大正３年死去したとき、綿業界の著名な人物・山辺丈夫（大阪紡績社長）、菊池恭三（尼崎紡績社長）、佐分利隆（日本紡績社長）、竜村竹男（大阪モスリン紡績社長）など紡績界の経営者らが深い弔意を表している。

また産業の発展は金融資本と結びついて、大阪の経済界は蓄積された富が、銀行、証券、保険会社の設立に波及していった。辰野・片岡事務所の明治・大正期のおびただしい数の銀行、生命保険、取引所、駅舎、工場などの作品にそのすう勢を見ることができる。

さらに民間の設計事務所の例に、桑原政工業所があった。桑原は工部大学校鉱山学科の出身、同大学校の助教授を勤めるが、藤田組の招きに応えて民間に転じた異色の人物であった。明治27年ごろ創業した工業所建築部には山口半六や逓信省を辞して大阪に移った河合幾次（東大明治25年卒）が同30年ごろ、さらに設楽貞雄も帝室京都博物館のあと、この工業所に在籍していたことがあった。なお山口半六は32年に独立して設計事務所を営み、31年大阪市の依頼を受けて32年“大阪市新設市街設計書”を提出し、大阪の市区改正計画にかかわっている。

大阪商人発祥の地であり、大阪の経済を牛耳っていた“船場”について、経済学者・宮本又次は次のように述べている。

“大阪に船場がなかったら大黒柱のない建物のように、中心がなくなって、妙なものになるだろう。煙の都大阪の巨大なる胃袋はその工場であり、機械であろう。近代的機械、それは精密な科学的研究の上に組み立てられ、精確に数量的に計算し得る力によって動き、実に合理主義の権化といってよかろう。煙の都大阪の敏感な神経中枢は実にそのビルディングにあり、取引所にあり、会社にあろう。木と紙と布とを素材とした問屋の建築は、鉄と硝子とセメントを主材として構成されるビルディングに転化した。…（中略）…かつて狭くて混雑していたことで余りにも有名であった大阪の道路は、幅員を拡張し、街路樹の立派さを誇るようになった。かくて船場もまったく変貌した。旦さんやお家はんや御寮さんの船場はもうどこにもない。しかしなお歴史はのこる。臍は臍として厳としてある。船場はだから、ツンとすましたオフィスの街でもないし、単なるビジネスの巷でもない、それは「商内」の場であり、いまも商戦の戦場である”と。

この船場の盛衰、変化とその経営者、大阪商人の心、そして大阪市の都市計画や市民の生活環境と深く結びついていたのが建築協会の活動であり、協会のメンバーたちの関心の的であった。

片岡安の熱意
都市計画法・市街地建築物法の早期成立へ

片岡安が都市計画についてかくも熱心に取り組むようになった理由について、そのいきさつをみてみたい。

片岡安は旧姓細野安で、明治９年６月４日加賀藩士だった父・細野直重、母・文の次男として金沢に生まれた。幼少のころから英才で知られ、27年７月第四高等中学校本科を、引き続いて帝国大学工科大学造家学科を30年７月、21歳の若さで卒業した。これはまさに異例の若さであった。因みに同期生だった武田五一は25歳であった。

一時彼は大学院へ進学し衛生工学を学ぶ予定であったが、日本銀行技師のポストを得て、門司支店勤務となる。しかしなぜかその年の11月に同行大阪支店に転勤することとなった。これが彼と大阪を結びつけるきっかけとなったのである。



片岡直温



片岡安

彼は32年、ちょうど日銀の大阪支店長だった片岡直輝の目にとまり、直輝の弟で日本生命保険会社の副社長であった片岡直温の長女盈衛の婿養子として片岡家に入籍する。片岡家は土佐藩の出身で、家庭は貧しかったが、苦学して学問を身につけ仕官して社会的地位につき、兄弟で大阪に出て活躍した実業家であった。岳父の直温は後に日本生命社長から



井上友一

衆議院議員、商工大臣、大蔵大臣まで上りつめた人物、直輝は大阪瓦斯社長や阪神電鉄社長などを務め、関西財界に大きな影響を持った人物で、片岡安が後に大阪経済界で活躍するうえで力強い後ろ楯となった。

片岡安が都市計画に関心を抱くようになったのは、内務官僚であった井上友一との交遊に始まる。井上は片岡と同じ金沢の出身で、片岡より少し先輩に当たり、明治23年７月第四高等中学校から、帝国大学法科大学英法科に進んで、26年７月卒業して内務省に入ったエリート官僚であった。井上友一が注目されるのは、彼が日本で最初と言える“田園都市”なる書を明治40年に内務省地方局有志の名で刊行したからである。この書は、彼が主となって若手官僚を督励して出版したと言われる。ただし、この書はイギリス人Ｅ・ハワードの著作“Garden Cities of To-morrow”（1902）に影響を受けたとされるが、実際はA.R. ゼンネットの著書“Garden Cities in Theory and Practice”（1905）なる大著にヒントを得て、その一部を引用しながら、日本の地方都市や農村の発展改良を意図して刊行されたもので、ハワードの著書の直訳ではなかった。ただ井上はハワードの思想に想いを寄せ、田園都市への興味から、当時内務省の嘱託であった社会事業家の生江孝之の渡欧に際し、最初の田園都市となったレッ

チワースにハワードを訪ねることを勧めた。このため、生江は明治41年の渡英のとき日本人として初めてレッチワースを訪れ、ハワードと出会っている。翌42年に帰国後、田園都市について、生江は文筆や講演でその意義あることを喧伝した。この後、田園都市問題は我が国でも盛んにとりあげられることになるが、その火付け役となったのが井上友一であった。

片岡は自ら、次のように語っている。“…（前略）…丁度其の頃内務省に井上と云ふ私の先輩が居りまして、私がこのスタディを始める時分には東京府知事に転任しました。この人は内務省で段々調べるとどうもガーデン・シティと云うことが非常に緊要な問題のやふに思ふけれども、今迄は良く分らぬ、それで内務省ではゼンネットと云ふ人の書物を譯して居るが、これは君等の方で研究すべきものぢゃないか、と斯う言はれて、それから私はゼンネットの本を見ると、これは大部のものですが、主として家屋政策から住宅改良を説いて居る。…（後略）…”とあり、彼が井上の示唆で都市計画に関心を持つに至った経緯を述べている。（建築雑誌　臨時増刊　建築学会創立50周年記念号、昭和11年10月10日　第２回座談会より）

また彼が我が国で初めて都市計画に関する専門的研究書“現代都市之研究”を書いたときも、その序文は井上友一であった。そこには次のように記されている。

“畏友片岡工学士は予と同郷の人なり。多年建築学の研究に従事し、斯道の蘊奥を極め、今や方に其の實成って茲に此の著あり。是れ単り、学界の権威たるのみならず。また以て、自治開発上に寄与するところ大ならずしばあらず。予久しく官に在りて、地方改良の事を食とするも、尚ほ能く任を尽くし得ざることを愧づ。偶此の書に接し、此に之れを紹介するを喜び、請に応じて一言を寄する所以なり。大正五年十二月　法学博士　井上友一”

片岡安がいよいよ都市計画の問題にのめり込む最初の動きは、当時内務大臣を務めていた大物政治家・後藤新平との出会いであった。後藤新平は大正５年10月寺内内閣の内相に任じられていた。後藤は今は都市計画法成立の功労者のひとりとして知られるが、最初からこの方面について認識が深かったわけではない。この後藤を口説くのに、片岡は少なからぬ助言をしたひとりであった。

彼は都市計画についての著書ができた大正５年の暮れに、この書を後藤新平に送った。しかしただこの書を送っただけでは十分な効果が得られるはずもなかったと思われるが、そのときのことを、彼は次のように述べている。

“越えて大正６年の春、寒い時でしたが、その当時都市協会と云ふものがありまして、藤原俊雄君が幹事役で、内務省関係、都市に関係した人々を集めて講演会を折々やって居ると見えて、私に丁度君があの本を書いたのだから、後藤さんも来るし鉄道院の総裁その他色々な関係者が来るから、講演をしないかと言われたので、其處へ行って私は講演をやりました。その講演は、都市はこの儘ではいかぬと云うことを指摘して、これは内務行政の重要なものである、これは建築家の理想だと云はれるかも知れぬけれども、斯う云う状態ではいかぬ、と云うので大体のことを説いたのです。それを後藤さんが聞いて居られて、後で云はれた。君のやうな議論も宜いけれども、ちょっと実行出来ぬよ、と大分ひやかして居られたが、これは軈（やが）て分る時があるだろうと思って其の時は私は余り議論もしなかったのです”と。（前掲建築雑誌創立50周年記念号第２回座談会より）

この講演会の時期や場所については明らかでないが、片岡は同じ年の３月に“同窓建築技術家に告ぐ”との檄文を草して建築協会を設立したことは先に述べた。

この大正６年という年は、欧州戦乱の影響が大阪産業界にまともに表れ、開戦後一時的に沈滞した貿易、産業、金融界は一転して好況を迎え、都市人口の急激な増大と商工業の繁栄は、大阪の都市的性格を一段と強め、大阪の市区改正は焦眉の急なる事態を招いていた。したがって大阪市では、大正３年７月に東京高商（現一橋大学）教授で都市問題に明るい関一を高級助役に迎え、市区改正に積極的に取り組む姿勢を示し、同年４月11日都市改良計画調査会を設置し、関一を委員長とした都市改造計画の策定に入った。

片岡安はそのメンバーのひとりに選ばれている。片岡安と関一との関係は、後にも触れるが、きわめて深かった。この調査会が設けられる直前の４月２日、関日記によると、この日の午后関は小山健三と面会し、その夜片岡氏の招宴があったことを記している。この片岡とは恐らく、安ではないであろうか。片岡安はその３日前の３月30日、関西建築協会の旗揚げを行ったばかりであった。

この時期、すなわち我が国の都市計画並びに市街地建築物法が成立する大正５年ごろから同９年に至る数年間は、両法にとって歴史的にも重要な時期であり、またそれにふさわしい人物が登場する。それは片岡安、関一、後藤新平、池田宏（内務省初代都市計画課長）、佐野利器らである。その動きは、次の四つの系譜に分類することができる。

１．片岡安を中心とした関西建築協会の活動
２．関一を中心とした大阪市の行動
３．後藤新平、池田宏を中心とした内務官僚の動き
４．佐野利器を代表とする日本建築学会の協力

である。

この四者はそれぞれ立場を異にしながらも、法の成立のため、緊密な連携の下に活動した。

片岡が自ら書いたという意見書は、大正７年１月25日、日本建築学会の建築条例実行委員会に付議され、同委員会の賛同を得た。そして日本建築士会会長野宇平治、都市協会幹事藤原俊雄と関西建築協会理事長片岡安、建築学会会長辰野金吾の四者連名による建議が行われた。この建議は２月６日に四会の代表者が寺内内閣総理大臣（病気中にて代理秘書官面会）、内務大臣、陸軍大臣を歴訪して提出され、調査会設置の急務たることを陳述した。

片岡安はそれに先立って、１月25日ごろ、単独で後藤新平に出会い説得している。彼の談によると、その前日の24日日本建築士会の求めに応じて上京し、建築士会を訪れて協力の約束を取り付けており、このあと都市協会の幹事で東京市会参事会員で内務大臣とも親しいという藤原俊雄の世話で後藤内相の都合を確かめ、帝国ホテル跡の内務大臣官舎に行き建議案を出して説明した。彼の言によると、

“所が後藤さんは、それは技術家論で、世の中の事は複雑なものでさう簡單なものぢぁないよと一蹴する。諄々と説いてこれは書生論でも技術家論でもない、世界各國の都市とも建築物法のない所はない、建築物は現代文化の中心をなすんだから、さう云ふ貴下のやうな事を云っては困る。貴下は技術家であって、さう云ふ事は判る筈だけれども一寸おかしい、内務省に最近、都市計画課と云ふものが出来たが（引用者注；実際に都市計画課ができたのは同年の５月22日であった）、此骨は市区改正であるが、同時にパラレルに行くものは建築で、都市計画課を内務省に作った位ならどうしてもかう云うものは當って置く必要がある。よくどうか下僚とも御協議下さいと云って私はもう直ぐ大阪に帰った。後藤内相も直ぐ次官の水野錬太郎氏、都市計画課長の池田宏氏に、此案をそっくり見せた。さうすると水野氏も池田氏も之は内務行政の中樞をなすべき問題であって、内務行政は之から此方に向っていかなければならぬと思ってゐる、それを建築の方面の人がさう云ふ事を云って来たのは渡りに舟で大いに盡力して貰はなければならぬと云ふので、後藤さんはびっくりして直ぐ會ひたい、いつ會へるかと云ふて向ふから云って来た。そこで二月六日（大正七年）に會った（引用者注；この日が先に述べた四会が一緒になって会った陳情の日に当たる）。さうするともうすっかり話が変わって居ってね。それは内務省は大賛成だ、君等に教へて貰ったやうだが、自分達も何とかやり度いと思って居ったから、大いに盡力して呉れ、至急調査会の豫算を取るから、豫算は其當時通過して居った。不思議なことですが其年だけ何かの都合で、豫算を早く審査して、一月の末には通常豫算を通過して了ってゐた。特別豫算でもって、豫算をどうしても総理大臣に話をして無理にも取


後藤新平

るから、君等一つ努力して呉れ、君等の云ふ通りにすると云ふので委員も原案の通りに詮衡して調査委員會の豫算も原案の通りに取ったが、それから間もなく後藤さんは外務大臣になって了った”と、その当時の内情を語っている（“その頃を語る座談会＝本会創立当時の懐旧＝”建築と社会、昭和７年10月号）。

このように後藤新平はいったん議会を通過してしまっていた本予算に、追加予算として調査会予算を計上するなど、通常の官僚では考えられない強引な政治力で、議会の承認を得るところに、彼の大物政治家としての片鱗がうかがえるが、このときの追加予算のお陰で、都市計画法や物法を審議する“都市計画調査会官制”が発布され（同年５月31日）、また内務省内に初めて、都市計画課が設置された（同年５月22日）、とみることができる。

またこのとき大阪市が求めてやまなかった市区改正条例は、関一を長とする都市改良計画調査会の検討による“大阪市街改良法草案”の作成があり、関一はこの件で、在阪代議士を招待して協力を依頼している。さらに関日記によると、関一は２月２日に上京し衆議院にて土木局長に面会。市区改良法の件を相談し、同４日午前内務省にて池田書記官と会見し、市区改正法について協議した。このとき“大阪のみの問題として進行するとすれば、本議会にて法律通過の見込みあり”との言質を得ている。さらに同月５日、関一は横浜に赴いて同市長と面会し、再び東京に戻って内務大臣を訪問する。内務省では水野次官に会い改正法提出の件についてほぼ承諾を得て、夜はホテルで大阪関係代議士を招待したと記している。加えて翌６日、再び内務省に立ち寄り池田書記官に面接して、改正法提出の省議決定の由を聞いている。ちょうどこの日は、建築四団体の面々、片岡安のほか塚本靖、長野宇平治、藤原俊雄らが総理大臣、陸相、内相を歴訪した日であった。このように、この年１月下旬から２月上旬にかけて、片岡安、関一はそれぞれの立場で目まぐるしく行動し

たことがうかがえる。

その結果は同年３月12日の衆議院における審議を経て、同７年４月、法律第36号を発布し、“東京市区改正条例及東京市区改正土地建物処分規則ヲ京都市、大阪市及内務大臣ニ於テ指定シタル市ニ準用シ得ル法律案”として成立することとなった。この東京市区改正条例の準用という扱いは、大阪市にとって必ずしも好ましいものではなかったが、次の新しい制度への暫定的なものとして了承したと思われる。

いずれにしてもこの時期の片岡安の活動は目覚ましいものであった。この片岡安の活動を客観的に評価した内田祥三の片岡に対する讃辞を、少し長くなるが紹介することとしたい。

“只今片岡さんから都市計画及び建築物法規の起源に就いてお話がありましたが、私は、この片岡さんと云う方は、現代のこの日本の都市計画に就いて最大の功労者だと思います。建築学会がやりました社会運動の中で、前に議院建築に関することなど色々お話がありましたが、さう申しては失礼ですが、この都市計画に関する事項が最も重要なものであり、又最も成功を収めたものだと存じます。都市計画法及市街地建築物法の制定は吾国の都市計画に一新紀元を劃したものであることは間違いのない事実でありまして、此の両法制定の直接の原因を爲したのは大正６年の暮当時の関西建築協会の会長であられた片岡博士が建築学会に対して法律制定の運動を起こそうと云うことを申し込まれたのに起因するのであります。この運動の先達を務められた片岡博士は吾国建築界に於ける最大功労者の１人として常に私共が尊敬致して居るのであります。

同博士はずっと以前から都市計画のことを色々と調べられて居り、それが著書となって現れた程でありまして、一般の人々が余り斯かることを考へて居ない時分から是非根本法の制定の必要を痛感して居られたので、世間でも追々と其の必要を感ずる様になって参りまして、機運が熟して来たのを見て此の提議をせられたことと思います”。(前掲　建築雑誌　創立50周年記念号　第２回座談会より)

これは片岡安の努力に対する最大の賛辞でもあった。

なお、内務省に関連した動きであるが、大正６年10月に創設された都市研究会は、後藤新平を初代会長とし、池田宏を理事、阿南常一を幹事として発足し、翌７年４月に“都市公論”を創刊し、都市計画、都市問題の啓発活動を開始している。


池田宏

内務省で中心的役割を果たしたのは池田宏であった。池田宏は明治14年静岡県に生まれる。一高を経て同38年京都大学法律科を終え、内務省に入省した官僚で、大正２年から３年にかけて欧米を視察。同年東京市区改正委員会の幹事となり、都市計画に関係を持つようになった。池田は都市計画の理論構築の第一人者で、内務省の都市計画法の原案を作成した。同７年７月、後藤内相の後を受けた水野錬太郎会長の下に都市計画調査会が組織され、各省事務次官クラスの委員に加えて、専門家として建築学会から佐野利器、関西から関一、片岡安が参加することとなるが、この会議の幹事役として池田宏がその運営に当たった。調査会は７月８日に第１回、同10日に第２回、12月７日、同24日に第４回の会議を開き、活発な議論が展開された。片岡安はその全部に出席し、関一も24日の最終回を除いて出席し、意見を戦わせている。なお市街地建築物法については、やはり12月に主として佐野利器が出席して幾度が開かれている。

これらの法案は、第41回帝国議会の賛同を得て、都市計画法は大正８年４月４日法律第36号をもって公布され、同９年１月１日より施行となり、市街地建築物法も大正８年４月４日法律第37号をもって公布され、同年11月同法の施行令が都市計画調査会に諮問され、佐野、片岡ら特別委員の審議を経て、同９年12月１日施行されるに至った。

これは片岡安らが行動を起こしてから３年目のことであった。片岡は“もしあの時に真剣な行動をしなかったならば恐らく10年は遅れたでしょう。これは10年を早めただけは確かにあると思う”と語っている。

なお、池田宏は、大正９年内務省社会局長、東京市助役、同12年帝都復興院計画局長、同13年京都府知事、同15年神奈川県知事を歴任して退官後、昭和５年大阪商科大学講師、同市政学会会長の職につき、大阪市政にも協力した時期があった。

関一と日本建築協会

大阪の名市長として知られた関一は、大正３年７月東京高商の教授から大阪市に招かれて、高級助役として着任した。彼の交通政策論や工業政策研究についてはすでに各界から高い評価を得ており、彼の都市問題に対する高い見識は、多くの著述を通して汲み取ることができる。


関　一

彼は大阪市助役として赴任する前、大正２年１月に“花園都市ト都市計画”なる論文を発表している。この表題は後に田園都市の名で、広く取り上げられるガーデン・シティを花園都市と訳し、都市計画なる用語の使用例としても早い時期に相当する。またこの中で彼はガーデン・シティに対するE・ハワードの理念を正確に伝えており、文中にハワードの著作である1898年刊の“明日．Torrow（ママ）（此書ハ其後改題シテ Garden Cities of Torrow（ママ）トセリ）”の記述があって、彼がこの書を読了したうえでの論文であることがうかがえる。

これは関一の、都市問題や住宅問題に対する関心の高さを示す早い例であるが、さらに彼の田園都市に対する関心の強さは、彼の日記の中にも見ることができる。それは彼の日記の大正５年10月１日の項に、つぎの記述が見られることからも明らかである。

“10月１日(日)、終日在宅、Raymond Unwin, Townplanning in Practices ヲ読ム”とある。

R. アンウィン（1863～1940）は、もっとも先進的な近代イギリス都市計画の代表的な建築家であり、都市計画家であった。彼が手がけた最初のガーデン・シティであるレッチワースや、ロンドン郊外のハムステッド、ガーデン・サバーブの見事な居住環境については定評のあるところである。

この著書は、1909年（明治42年）に初版が出されており、田園都市や良好な住宅環境、集落、ランドスケープをテーマに実例を交えて解説した大部の著作であり、専門家の間でも高い評価を得ていた書であった。

このようなアンウィンの著作を大正初期の段階で入手し、高級助役という激職の中で読破していることに驚きを禁じ得ない。彼の学者市長としての片鱗がうかがえるのである。

片岡安は、このように都市問題について造詣の深い関一を大阪に迎え、随分心強く、かつ協力関係にあったことは想像に難くない。またこの二人の関係は、別の意味でも深いものがあった。

例えば、関一が大阪市の助役に招聘されるうえで仲介の労を取ったのは第三十四銀行の頭取小山健三であったが、小山健三について宮本又次は“大阪銀行界の重鎮であり、大阪財界のまとめ役で、前半生は教育界ですが、後半は大阪財界の大立物として活躍した”とする（宮本又次“関西財界外史（戦前）”より）。この小山健三は文部省の次官のとき、東京高商の校長を兼務しており、関一が高商時代海外留学への労を取った人物である。以来、関一が一身上のことで何かと相談を寄せた先輩でもあった。小山はまた、片岡安にとっても日銀から第三十四銀行の技師になったときの上司であり、彼の義理の伯父に当たる片岡直輝もまた大阪財界の大物で、小山と親交のあった人物であった。

したがって片岡安の幅広い人脈の中でも、関一とはお互いに深い関係にあったことがうかがえる。片岡が大正６年３月関西建築協会を発足させた翌４月に、関一は大阪市としては異例の早さで都市改良計画調査会を設置し、市区改正の


御堂筋建設予定地の淀屋橋北詰め


御堂筋の拡幅後

ための大綱の審議を始めるが、大藤高彦（京都帝国大学工科大学教授・土木工学系）、伊藤真雄（大阪高等商業学校教授）とともに、片岡安も委員に名を連ねた。

この調査会は4月19日の第1回委員会で将来の大方針をたてるための基本調査の項目を決定し、精力的な調査を進めるが、その方針として緊急調査事項と普通調査事項とに分け、同7年4月18日の最終調査会まで11回にわたって委員会が開催された。ここでは膨大な調査内容と街路系統の検討がなされ、例えば、1等道路として“南北幹線道路、梅田停車場ヨリ大江橋、淀屋橋ヲ経テ一直線ニ南下シ、難波停車場ノ西方ヲ通リ、南海鉄道線路ニ並行シテ住吉公園ニ達ス”とし、幅員が18間という大街路（現在の御堂筋線で、この幅員は24間に改められる）などが提案されている。

大阪の密集した低層木造家屋、狭隘な道路の拡幅は、大阪市区改正の最重要課題であった。調査会は同7年4月18日市長に報告書を提出するが、同時に執行機関として同年4月市役所内に市区改正部（のちに都市計画部）が設置され、引き続き事業の推進を受け持つこととなった。この市区改正部で計画案の調査を進め、大正8年12月基準計画を大阪市区改正設計として内閣の認可を受け、これによって街路の新設及び拡築、路幅の整理、路面の舗装等、市内道路改良の基準が決定された。そして、この基準計画を実施に移すため、第一次都市計画事業が同10年3月内閣の認可を経て決定をみるのである。

片岡は関一の大阪市区改正の施策について協力を惜しまず、また片岡は大正7年12月5日開催の関西建築協会主催による第1回大会通俗講演会に関一を講師として招いている。このとき関は“都市住宅問題”をテーマに、新築なった大阪中央公会堂で約2000人の聴衆を前に講演し、その中で住宅問題は国家的事業であると説き、さらに田園都市の経営や、土地政策、公共団体が貸家を建てること、交通、高速交通機関の建設など、今日でも通用する都市問題への提起がなされた。

このほか関一が「建築と社会」に寄稿した論文は、主なものだけでも、

・都市住宅政策　大正8年5月号
・都市政策の財政観　大正9年1月号
・分散主義の都市建設　大正11年1月号
・集中主義の都市建設　大正11年2月号
・伯林郊外の発達に関する研究　上、中、下　大正11年5月、6月、7月号
・田園都市（口述による）　大正11年11月号
・田園都市〔再び〕（口述による）　大正11年12月号
・震災を予想して街路の擴築と慘害の緩和　大正13年9月号

など8篇10回に上っている。

このように、関一は建築協会の機関誌に寄稿する労を厭わなかった。その中で田園都市については、その土地を投機の対象としないことは、中世の経済組織を復活させようとするもので、それは今日では全く間違った考えであると思う。しからば田園都市運動は何ら意義がないかと言うと、そうではなく、田園都市の運動は一面において非常に意義のある運動であると思うと言っている。そして今のように大都市に人口が集中し仕事をするために職工が電車に1時間も乗って来るようなことはよくない。工場も地方に分散せしめるべきだとする。さらに住宅が和風であるか洋風であるかはわれわれ技術者でないものの目からみると大した問題ではない。むしろタウンプランニングやハウジングプロブレムが大切であるとする。そしてガーデン・サバーブ（郊外住宅地）を大いに研究すべきだとしている。加えて大都市周辺に衛星都市をいくつかつくって、あたかも太陽系のように、太陽を真ん中にしてその周囲を地球・その他の衛星が回るようにするのが理想ではないか。その意味において、田園都市運動の主唱者に向かって大いに敬服しなければならぬとしている（田園都市「再び」より）。

また、“建築家、美術家は其努力の結果たる大厦高楼の美を誇る許りでなく、文化生活の爲に民衆の福祉の爲に一段の努力をなすべき”とも述べている（分散主義の都市建設より）。

関一は昭和10年1月26日死去するが、協会はその死を悼んで“関大阪市長の長逝を悼む”と題して大阪市公園課長椎原兵市の名で追悼文を掲載した。その中で椎原は都市環境の悪化を防ぐため、大阪都市協会が行った大大阪緑化運動や煤煙防止会は関一の発案によるもので、なかでも大阪城天守閣の建設や城公園の建設は彼の最大の功績として讃えた。

桜ケ丘住宅改造博覧会の成功

都市計画法、市街地建築物法の成立に大きな役割を果たした建築協会は、次の新たな目標として大阪の北部箕面郡桜ケ丘に実物の住宅展示を兼ねた住宅改造博覧会を計画した。住宅問題は、建築協会が掲げた建築と社会とを結びつける最も重要なテーマであり、この博覧会の成功に向けて協会は、新しい組織を挙げて全力で取り組むこととなった。

この時代の社会的な背景として、大正9年に設立された「生活改善同盟会」があり、生活改善の第一歩は住宅改善に

あるとして、活動を開始している。また同11年７月に第一次世界大戦終了を祝した“平和記念博覧会”が上野で開催されるのに合わせ、実物の住宅展示会を行うなどの動きも見られた。

しかしこの住宅展示会が、建築協会のそれと根本的に異なる点は、上野の場合は仮設であって、真の意味の住宅環境と一体となったものではなかったこと。東京の場合は東京府主催による官主導の事業であったのに対して、大阪の場合は全く民間の拠金、寄付金などの資金により、実際の住宅が敷地とともに分譲されるため、住宅のみならずその配置、街路、庭園、生垣の構成がすべて現実に即して進められたことである。したがって桜ケ丘住宅改造博覧会は、我が国最初の環境を生かした本格的な住宅博覧会であったと言うことができる。また桜ケ丘の場合は、協会が行った改良住宅設計図案懸賞募集の入選作の中から優秀作品を選んで建てられた住宅が含まれている。そのうちの一つで現存する日本建築協会第一号住宅は、平成10年５月、“澤村家住宅”として国の登録文化財に指定保存されることとなった。

この博覧会に対する協会の準備はどのようなものであったかを見ると、総裁に後藤新平、顧問に村山龍平（朝日新聞社長）、本山彦一（毎日新聞社長）を迎え、会長片岡安、幹事長葛野壮一郎、常務幹事に波江悌夫、小笠原鈅を配し、出品係委員長宗兵蔵、宣伝係委員長横濱勉、設備係長舟橋喜一、財務係委員長片岡安で、住宅改造博覧会規則を定めて細部にわたる取り決めをしたうえで開催に臨んだ。

また出品者の内訳を見ると、竹中工務店、田村地所部、大林組、鴻池組、清水組、錢高組などの請負会社、片岡、横河、葛野、あめりか屋などの設計事務所、それに建築協会出品を合わせ25棟が建てられた。さらに建物にともなう室内装飾、家具などその展示品を含めると膨大な数にのぼる商品が出品され、そのための展示場を特別に建てている。

大正12年12月に刊行された“住宅改良博覧会報告書”の中で、注目される会計について見ると、

収　入	寄付金	132,628.40（円）
	入場料	20,847.15
	出品料	9,071.00
	実物住宅売却代	93,455.46
	本館売却代	15,000.00
	余興館其他付属建物売却代	5,000.00
	絵端書、図集雑誌売上代	7,033.87
	雑品売却代并雑収入金	2,790.62
	合　計	287,150.68
支　出	本館建築費	48,232.18（円）
	土木工費、周囲垣工費、庭園費	7,619.19
	実物住宅建築費	97,632.18
	造作費	6,980.00など
	合　計	267,994.78
差引剰余金		19,155.90（円）

この剰余金は、全部協会へ引き継がれたという。しかもこれだけの事業を行って、２万円近い黒字を出していることはさすがである。

これはやはり片岡安の優れた統率力、あるいは組織力とも言えるものであり、もちろんこの目的を成功させるために会員がそれぞれ大きな努力を払ったことが読み取れるのである。また寄付金の多いことについて、額の高い寄付者の顔触れを見ると、最高で5,000円の寄付をした氏名の中に、個人名で片岡安、大林義雄、竹中藤右衛門の名がある。片岡は、大林、竹中と並んで、率先して高額の寄付をしていたことが分かる。ある設備業者の回顧談の中で、このときの片岡の寄付への依頼はかなり強引であったと語っている。片岡はこの博覧会を成功させるためには、その責任感のため、自ら高額の寄付をし、多くの賛同者を求めたものであったと思われる。

博覧会は大正11年９月29日から同11月26日まで開かれた。出品住宅25戸をはじめ、展示用本館と周辺道路や庭園を含み、さまざまなスタイルの木造２階建洋風住宅が建ち並んで、見事な住宅地景観を生むことに成功した。なお、これらの住宅は、博覧会終了後に分譲されている。入場者数は延べ67,657人で、１日の最高入場者数3,476人にのぼり、なかでも家庭婦人の入場者が多く、住宅改良に少なからず影響を与えた。開会式には後藤新平総裁が一場の演説をなし、関一も臨席して祝辞を述べた。

住宅改良への啓発活動

建築協会の活動の中でとくに目を引くのは、住宅をテーマにした記事や事業の多さである。協会雑誌の発刊の辞の中で“従来我が國一般に措いて問はざりし都市建築の拘束改良、家屋政策、其の他文明的施設の刻下急要の問題にして”云々とあるように、家屋政策すなわち住宅問題は、協会が取り組むべき最重要課題であった。

住宅問題といっても、その範囲は広く、住宅政策に関することから、住宅文化論、住宅様式論、住宅地計画、住宅技術、住宅作品、婦人の住宅観など多彩なテーマが誌面を賑わした。

昭和２年１月は住宅特輯号として二度目の企画であったが、片岡安は“我国将来の住宅”と題して、和洋の混在が物事をあいまいにしている。すべからく住宅の改良は座式をやめて椅子式に改めるべきとし、日本人はその日を無事に過ごせば足れりとする現実主義で、将来をより理想的にしたいという考え方に乏しいとした。

また村野藤吾も一文を寄せ“現代文化住宅の煩悶”と題し、かなり重い論考を発表した。彼はその中で、文化住宅の名の起こりは東京の平和博における文化村に由来するとし、同時に行われた桜ケ丘住宅改造博にも触れて、そこに出品された住宅が“文化村に比し一段の進歩を見せ、殊に疊を含む二重生活に對し建築上の具體的意見が何れの建築にもあらわれその苦心のあとを認めることが出来た。而し、今にして思へば、當時の企てが中産以上の生活を爲す者のために、洋風住宅の模型を示した様な感じがして、今日多數の者が切實に求めて居る合理的な住宅に對する具體案を見せて貰へなかったことについて、遺憾に思ふ”と述べ、協会の出品作品に対する批判をしながら、当時声高となっていた文化住宅のあるべき姿に対して彼なりの考えを論述している。また彼は“實際、今日の文化住宅位ちぐはぐなものはない”と述べ、それは同情すべきものでもあり、日本の現状からしてやむを得ないものとも言う。この問題に対する彼の悩みが表題として示された。村野藤吾は先に“様式の上にあれ”と題した論文を大正８年５月から４回にわたって発表した。これは彼が当時渡辺節事務所員であったころで、渡辺節から様式建築の指導を徹底して受けていた時代であり、彼の心境がよくうかがえる論文である。

この後、住宅特集は昭和４年５月、６月の２回にわたり小住宅研究第１集、第２集として出された。また住宅改善に関する諸問題についても毎年特集号が組まれ、中産階級、庶民層に向けての住宅水準向上への努力が重ねられた。

もうひとつの住宅をテーマとした対策は、住宅設計のコンペであった。協会では頻繁に住宅の図案懸賞設計を募集し、若い建築技術者が競ってこのコンペに応募している。協会が行った最初の住宅コンペは、大正10年８月の第１回改良住宅設計図案懸賞募集で、応募は118通に及んだ。その入選作の一部は、先の博覧会に実物を建て出品されたことはすでに述べた。

この博覧会の史的評価は、日本建築協会創立70周年記念出版“住宅近代化への歩みと日本建築協会”でも触れられているが、単にこのような博覧会を催したということのみでなく、当時ようやく高まりつつあった大都市近郊の住宅地開発の手法に一石を投じたものとして、その意義はきわめて高いと言わなければならない。

このあと、協会は引き続いて住宅のコンペを続けた。昭和４年４月サンマーハウス、同年７月貸家住宅、同５年住宅室内設備、同６年小住宅、同年改善住宅、同７年メートル法に依る実用安価小住宅などの設計図案が行われる。またこの年、協会創立15周年を記念した緑ケ丘住宅設計図案（伊丹市緑ケ丘）、大美野田園都市住宅設計図案懸賞募集が行われた。大美野田園都市は、関西土地株式会社が経営した南海電鉄高野線の沿線北野田駅に近い10万坪を超える田園地域を対象に計画された良好な住宅地で、田園都市の形のうえでのイメージを生かし、道路計画、宅地の形状、上下水道、街路の舗装などにざん新な構想を打ち出したものであり、協会の15周年記念事業にふさわしい場所であった。

協会の住宅を通しての社会への啓発活動として、コンペの公開展示のほか、市民を対象とした建築展覧会を連続して開くなどの行事も行われた。

・第１回建展“建築知識普及展覧会”（大阪大丸）昭和３年９月
・第２回建展“生活改善展覧会”（滋賀県公会堂）昭和４年７月
・第３回建展“婦人と住宅に関する展覧会”（大阪大丸）昭和５年８月
・住み良い家の展覧会（南海高島屋）昭和７年11月
・女性と住生活展覧会（心斎橋大丸）昭和18年３月
・これからの住宅展（大丸百貨店）昭和24年８月
・伸びる家の展覧会（大丸百貨店）昭和25年４月
・これからの住宅展（高島屋）昭和27年11月

などがそれであり、そのほか住宅関係の出版物も少なからず刊行された。

優れた後継者たち

片岡安は、たぐい稀な活力と実行力に加えて、その強烈な個性によって多くの業績を残した。彼が果たした役割は余りにも大きく、それだけに彼の後を担うものについて、片岡と同等の役割を期待することは、本来無理があると思われがちであるが、その役割を十分果たし得る後継者が次々と登場してきたことは、協会にとって幸いなことであった。

その最初の人は、竹腰健造である。竹腰は片岡より12歳年下であったが、偶然なことながら、片岡が婿養子として入った片岡家は土佐藩の郷士の出であったのに対して、竹腰も旧姓岩村で、岩村家は土佐藩士の家柄。父・岩村高俊は明治維新に際して国事に奔走し、竹腰健造が生まれた明治21年には石川県知事となっていた。したがって片岡、竹腰とも生まれは金沢で、同じ時期に金沢に住んでいたことになる。岩村高俊はほかに愛知県、福岡県、広島県知事を歴任し、同29年男爵となり、その長男岩村透は東京美術学校の教授で、黒田清輝らの白馬会に属し、“巴里の留学生”や“芸苑雑稿”などを著し、美術評論でも知られた学者であった。欧米

の美術界の事情に明るく、健造のイギリス留学は兄・透の勧めによることを彼自身が語っていた。竹腰は大正６年３月、４年間のイギリス留学を終えて帰国し、住友総本店に入社する。彼の協会への入会時期は明らかではないが、同７年12月５日に開かれた第一回大会通俗講演会に接待係としてその名が見られるので、比較的早く入会していたと見ることができる。

片岡の炯眼はいち早く竹腰の才能を見抜いたのか、同12年には編集担当理事として起用されている。竹腰が副会長として参加するのは昭和12年であり、その後、同15、16年を除いて、同21年に片岡が急逝するまで、副会長の席にあった。とくに戦争末期になると建築学会との合併問題が持ち上がり、学会にとって個性的な片岡会長は煙たい存在にあり、もっぱら竹腰が窓口になっていたという。この問題は元来戦争が深刻化していく中で、企業や団体の合併を政府が奨励したために起こった問題で、誰もが喜ぶべき主題ではなかった。

協会側も会誌の発行に必要な用紙の統制が云々されていたため、やむなく合併を前向きに考えざるを得なかったのであるが、この問題も結局敗戦になって沙汰やみとなった。

竹腰は、日本が敗戦によって一切を失い、加えて創立者のひとりとして大きな存在であった片岡安の急逝にあって、協会が最も困難な時代に、それを乗り切るために少なからぬ努力を払った。

彼はまず定款の改正を行い、会員資格を当初は“人格、学識、経験ある建築家を以て会員とす”とあるのを、昭和22年の改正によって“正会員は建築又はこれに関係ある業務を営む者又は団体”とし、会員資格の幅を拡げるとともに、建築に関係する業務であれば多くの団体や個人が参加できるようにした。

これによって会員数は、昭和18年を合計3094名として、同22年には名誉正会員、正会員、地方会員、団体会員（口数を含め）合計5116名、同23年合計4559名、同24年3916名、同25年4262名、同26年4216名、同27年4198名となって、部分的に増減がありながらも、増加する傾向を示し、さらに同30年代から40年代にかけて大きく増加する素地を築いた（第１章　沿革“会員数の推移”参照）。

竹腰は同22年１・２月号の“建築と社会”の中で、“就任に際して”と題した一文を寄せ、“従来の如く建築の技術者丈の團體とか、施工業者丈の團體とか、又建築材料商、設備業者丈の團體で我國の建築の各分野丈を個々別々に議して居ては、國家再建の用に立たないのが現在の状勢であると思惟せられるのである”と述べ、さらに“今回の我日本建築協會の改組は將に當然あるべきものが時代の要求によって現れたものと考へ、其の將來の活動は社會的にも極めて有意義なものとなる事も期待するのである”と結んでいる。

このような竹腰の姿勢は、もともと建築協会が最初から目指していた方向をさらに充実発展させたものであった。

竹腰の本務である建築家としては、住友ビルディングを完成させた後、昭和８年住友合資会社工作部の解散、長谷部・竹腰建築事務所の創立、さらに同事務所の解消を経て、住友に戻り住友工務株式会社の社長に就任する。そして敗戦。日本建設産業株式会社を発足させ、社長に就任しながら同22年公職追放令にあって社長を辞任せざるを得ないという戦前、戦中、戦後の激動の時代にめまぐるしく翻弄された。

しかし、そのような苦境の中でも新しく双星社竹腰建築事務所を興し、建築家として、また経営者として奮闘し、さらに芸術家としても、能芸や作陶に見事な芸風、作品を生み出し枯淡の芸域にまで上りつめた。晩年は、昭和37年芸術院賞を受けるなど、まさに建築協会にとってふさわしい２代目会長であった。

しかし彼は昭和33年、協会を戦後復興の軌道に乗せ、また古稀を迎えたこともあって退任する。その後を継いだのが、尾崎久助であった。尾崎は滝沢真弓らと大正９年東大卒業の同期生であった。このクラスは分離派宣言など華々しい活動をしたグループであるが、尾崎は自作の油絵などに才能の片鱗を示しながらも、構造畑に興味を寄せていただけに派手に振る舞うタイプではなかった。

ただ彼の同期で関西に職を得た人物は、滝沢のほか森田慶一、石本喜久治、中澤誠一郎などそうそうたる顔触れが揃っていた。

尾崎は最初、辰野葛西建築事務所に滝沢と共に入所し、彼は構造を担当したという。その後、震災復興のため帝都復興院、日銀を経て、同13年長谷部・竹腰建築事務所に移り、同21年、敗戦後に設立された日本建設産業株式会社の常務からのち社長となって竹腰の後を継ぎ、さらに昭和25年、日建設計工務の社長となった。

協会へは、戦後21年に竹腰が会長になると同時に参加し、戦後復興期の協会の運営に当たった。第３代目会長・尾崎の昭和30年代は戦後の高度経済成長期に当たり、建設業界も活況を呈した。しかし一方で、歴史的建造物の消滅も激しさを増しつつあった。このため、同34年から協会内に近代建築調査委員会（委員長・滝沢真弓）が設けられ、委員には当時の協会の長老たちが顔を揃えた。幹事に政岡基次、林野全孝、委員に足立孝、浅野清、池田宮彦、今林彦太郎、岩崎甚太郎、内田成之、置塩光、桐本楠雅、近藤豊、佐野正一、設楽貞三、竹内成夫、竹中清、玉置豊次郎、塚本猛次、波江

貞夫、西山夘三、福田朝生、牧野忠、元良勲、山本潔、鷲尾九郎、渡辺道輝、末席に坂本勝比古、そして事務局から手島政男、松井昭光の参加があった。

今日ではその多くが故人であるが、明治、大正、昭和にまたがる関西建築界の盛衰について熱心に語る会が持たれた。この会は「建築と社会」に毎号、話題となった関西の近代建築の紹介を行い、近代建築に対する関心を高めるうえで、その先達となった。

また、この時期、奇しくも住友系建築家の特集号が相次いだ。竹腰健造（昭和34年１月号）、長谷部鋭吉（36年３月号）、尾崎久助（40年１月号）などである。これらの建築家は協会設立の当初から、積極的に協力し、協会主催の事業への参加、住宅コンペの審査、機関誌の編集などに労を惜しまなかった。日高胖、小川安一郎、高橋榮治らがそれであった。各会長の功績は少なからぬものがあるが、同時にこれを支えた会員建築家や技術者、業界の努力も、並々ならぬものがあった。

尾崎久助は昭和36年、体調を崩し、39年３月会長職を退き、41年５月22日逝去した。

尾崎の後を継いだのが４代目会長・東畑謙三であった。東畑は大正15年京都大学工学部建築学科を卒業し、武田五一の下で大学院に進む。大学院では武田の指導で東方文化学院京都研究所の設計に従事し、また武田五一を助けて新大阪ホテルの設計にも関与した。その後、外遊して帰国後、昭和７年東畑建築事務所を開いた。彼は戦後の竹腰会長時代に副会長を26、27、28年と連続３期、さらに同31、32年と副会長を務め、尾崎時代もその任期中副会長を務めていたので、39年、会長に就任したとき次のように述べている。

“私は日本建築協会へ入会してから40数年、副会長にえらばれてから10数年になり、その間、何かとお世話をさせていただいたので、会長に選ばれましても、今更感想とてはないのですが、この際想いを正し、心を新たにして、当協会のため十分な奉仕をいたしたく存じます”と述べている。まさになるべくしてなった会長として、ふさわしい経歴の持ち主であった。

彼は会長になるや、新たに企画委員会を発足させ、“会員の衆智を集め、当協会のあり方を再度研究し、その指針によりさらに広い視野において会の活動をいたしたい”と述べ、この考え方は今でも協会の方針決定に役立っている。

さらに関西の業界が期待していた“日本建築総合試験所”も建設省の認可を取り付け、財団法人としてこの昭和39年から発足することとなった。このことについて東畑は積極的に取り組み、実現に漕ぎつけたと言われる。

東畑の業績のひとつに協会創立50周年記念号の発行があり、同時に、記念事業の数々を行っている。記念式典、祝賀会、表彰式、慰霊祭、関西の建築50年回顧展、モントリオール万博視察、記念講演会、見学会、運動会など、多くの会員が協力参加して盛大に行われた。“関西の建築50年回顧展”は阪神百貨店丸善画廊で開かれ、このとき物故会員の建築作品と遺作では片岡、武田、設楽、長谷部、安井らの作品が展示された。50周年記念号は編集特別委員会委員長に滝沢真弓を置いて各般の準備が進められ、昭和42年３月号（1967）として発行された。そこには３つの座談会、“建築界と建築協会50年の歩み〔年表50年史〕”“建築と社会総目録〔昭和28年～昭和41年〕”“「建築と社会」誌の変遷”など、盛り沢山の記事が載せられた。

また、東畑は同45年（1970）に開かれた万国博覧会の開催に際し、会場計画委員や建設顧問として指導、助言にも当たっている。

恩師・武田五一の死に際し武田を“永遠の青年であった”と評した東畑は、同46年会長職を退き、名誉会長に就任した。彼の戦後の関西建築界の振興に果たした役割は大きく、その温厚な人柄は多くの人に慕われたが、平成10年４月29日、96歳の天寿を全うした。

東畑謙三は三重県一志郡の出身。長兄に農政学の権威である東京大学名誉教授の東畑精一、次兄に哲学者速水敬二国学院大学教授、弟に東畑四郎（食糧庁長官、農林事務次官）など各界で活躍した兄弟を持ち、謙三夫人は岩井産業社長だった岩井勝次郎の息女であった。

次いで第５代会長に就いたのは日建設計社長・塚本猛次であった。塚本は明治43年静岡県藤枝市の出身。昭和９年東京帝国大学工学部建築学科を卒業。発足間もない長谷部・竹腰建築事務所に入った。以来、長谷部・竹腰・尾崎・伊藤鑛一らと共に戦中、戦後を歩み、昭和40年、伊藤の後を継いで日建設計工務の社長となった。協会との関係では同33、



関西の建築50年回顧展

34年に編集委員長、同37年７月から38年12月にかけて運営審議会の委員長として答申案をまとめ、長期運営計画と年度運営計画を定めるため企画委員会の設置を提案した。この答申案に基づいて、彼は東畑会長の下で同39年に設けられた企画委員会の委員長となり、協会が持つ独自の性格を生かすため、協会会員の交歓、交流のため、相当規模の会館を提供するなどの案を報告している。

また同37年から41年にかけて竹中錬一、鷲尾健三と共に副会長の立場にあった。

塚本は長谷部鋭吉の息女と結婚し、早くから宝塚清荒神の長谷部邸にて住まいを共にしていた。

塚本は昭和57年まで協会会長のポストにとどまり、その間“建築と社会”600号記念号、さらに60周年・660号の発行に努力を払った。

彼の物腰の柔らかい、人ざわりの良さは人望厚く、同54年には全国の建築士事務所協会連合会の会長を務めた。建築協会では57年に会長職を辞し、名誉会長となった。

塚本の後を継いで会長となったのは、福田朝生であった。福田は兵庫県西宮市の出身で、大正６年４月生まれ。昭和15年京都帝国大学工学部建築学科卒。京都大学の講師を経て、京都工芸繊維大学助教授となり、教育研究畑で活動していたが、同31年に竹腰健造に招かれて双星社竹腰建築事務所の常務となり、同41年社長に就任した。

建築協会での福田朝生は、同43年から46年にかけて理事、46年から56年にかけて10年間副会長として塚本会長を支え、同57年第６代会長に就任する。会長に就任した福田朝生は、直ちに特別委員会を設置して協会の将来像の確立を目指すと同時に、会活動の活性化を図るため、旧近畿建築会館を売却し、大阪駅前第３ビルの現在の事務所に移転するなど、会勢拡大のための施策に取り組んだ。しかしこれからという時に、同59年10月18日、病のため急逝してしまうのである。

福田朝生の急逝にともない、次期会長を急拠選ぶ必要が起き、東畑、塚本両名誉会長の推薦を受けて、佐野正一が第７代会長に就任した。佐野会長は安井武雄の女婿であり、昭和17年東京帝国大学建築学科を卒業、鉄道省を経て、岳父の安井建築設計事務所に入所した。安井武雄の関西建築界に築いた足跡は大きく、その後を継いだ佐野への期待は少なからぬものがあった。佐野正一は安井亡き後も多くの特色ある建築作品を生んで、全国的に屈指の設計事務所に育てあげてきている。

佐野正一は会長に就任する前、同31、32年度の編集委員長、同38年から43年まで法規委員長、同53年から58年まで副会長を歴任していて、協会への貢献度の高い建築家のひとりであった。

佐野会長の就任間もなく、同62年に協会創立70周年を迎え、次々と記念行事を計画した。例えば日本建築協会賞の制定、桜ケ丘住宅改造博覧会に因んだ“住宅近代化への歩みと日本建築協会”の刊行、“昭和生まれ―関西の建築家50”の出版、“住まいの絵本”の発行などである。さらに75周年を機に「建築と社会」の復刻版が不二出版㈱より刊行された。これは建築協会の永年にわたる活動を通覧できるものであり、その学術的意義は大きく、改めて建築協会が近代史上で果たしてきた役割の重みを汲み取ることができるものである。佐野会長は平成７年３月数々のユニークな企画をたて、これを実行に移して会勢の拡大に努力を払い、現会長にその席を譲った。

第８代会長となった市川宏は、現在、東畑建築事務所の会長であり、長年、東畑謙三の片腕として活躍してきている。市川会長は昭和25年の京都大学建築学科の出身で、協会との関係では、同48年から52年まで法規委員長、さらに同57年から平成５年まで副会長の地位にあった。市川会長は現在協会が置かれている環境の厳しさを認識して、それを打開するために、協会の活力と会員の増強に努力する姿勢を打ち出している。また80周年の記念事業として、この「建築協会80年史」の刊行にも熱心に取り組んでいる。

このように歴代会長の顔触れとその足跡を見ると、いずれも個性豊かで、関西の建築界をリードするにふさわしい人格と業績を持ち、協会創立の理念を掲げ都市と建築を通して社会に積極的に働きかけてきたことがうかがえる。

なお、会長、副会長の役職には就かなかったが、協会の活動に少なからぬ影響を与えた幾人かの建築家たちがいた。例えば滝沢真弓、岡田孝男、西山夘三、浦辺鎭太郎、村野藤吾らである。

滝沢真弓は、分離派の闘将のひとりで、最初、辰野葛西事務所に勤めるが、昭和の初め神戸高等工業学校教授として関西に移った。この東大大正９年組は、分離派の仲間として森田慶一や石本喜久治らが関西におり、お互いに親交を深めていた。滝沢は戦時中、建築学会との合併問題で、竹腰健造と共に協会側の代表として折衝に当たり、戦後になって協会の理事として協会の活動に参画した。昭和34年に開設された近代建築調査委員会では委員長として、多くの長老委員のまとめ役として活躍した。彼は“過去の建築圏から分離して”という分離派宣言をしたひとりであったから、様式建築には興味がないのではないかと思われたが、近代建築の調査には大きな関心を寄せていたことが思い出される。協会50周年の特別号では編集委員長となり、その全体を取り仕切っ

た。戦後は大阪市立大学の発足に際し、同大学へ移り、晩年は近畿大学でも教鞭をとっていた。名にし負う論客として知られ、小柄ながら知性に溢れた風貌であった。

帝塚山大学教授を長く勤めた岡田孝男も、協会の行事、なかでも茶室建築見学会では延べ50回に及ぶ催しに講師として参加し、案内、解説に当たった。

彼は京都大学で武田五一の薫陶を受け、「新建築」が大正14年創刊された時期、数年間にわたってその編集にたずさわった。そのころ、「新建築」がペーター・ベーレンスやメンデルゾーン、アアルトらと直接連絡をとって特集号を発行できたのは、彼の努力によるものであった。岡田はのちに三越住宅部に武田教授の薦めで移り、阪神間に多くの住宅を建てており、協会機関誌にも、“小住宅プランの研究”（昭和８年４月号）などを発表している。温厚で物静かな人柄は、茶室建築の研究者としてふさわしい存在であった。

西山夘三は“標準住居と我國の住居水準”（建築と社会、昭和11年５月号）を執筆して登場するが、同16年４月号では“住居の基本空間に対する一考察”なる論考を発表して、極小住宅の“食寝分離”についてその必要性を強調した。当時多くの建築家の関心が大邸宅の設計に向けられていた時代に、庶民住宅の水準向上のため科学的な考察を加え、住宅計画理論を展開した。彼の食寝分離論は戦後の公営住宅や住宅公団のダイニング・キッチン（DK）という新しい概念を生み出すうえで、多くの示唆を与えることとなった。また第二次世界大戦後の建築界に興った伝統論議の中で、“民族的伝統と国民的建築”（建築と社会昭和30年１月号）と題した西山の主張は、資本家におもねる無国籍の近代建築に対して、国民的建築の必要性を強調し、それは建築と国民との結合を強める闘いの中にこそ生まれると述べ、社会派学者の面目躍如たるものがあった。

西山より１年後の昭和９年、京都大学を卒業した浦辺鎮太郎は、倉敷の出身で卒業後、倉敷レイヨンに勤め、大原総一郎の打算抜きの共同社会、家族中心の町づくりに共鳴して、倉敷の町づくりに手腕を発揮した。協会には昭和29、30年に編集委員を務め、45周年記念事業として出版された『ふるさとのすまい』は、浅野清、白木小三郎、川島宙次らと協同でつくられ、昭和37年、毎日出版文化賞の栄誉を受けた。彼はまた建築協会の発展に関心をもち、“「建築と社会」の歩みと将来の展望”（1988年11月号）と題した一文を寄せ、協会の長年の業績を評価する一方で、創立者の達眼をもって、時世の進路と建築の活路を見出していくべきとした。

関西建築界の重鎮であり、関西の建築的土壌の中から育ったといってよい村野藤吾も、後に国際的評価の中で活躍するが、彼が若かりしころに寄稿した“様式の上にあれ”（大正８年）以来、協会の活動と無縁ではなかった。彼のモダニズムからスタイリッシュな作品に至るまで、そのユニークな作風や言動は、関西で活躍する協会の若い会員たちに少なからぬ刺激を与えた。

なお今回は詳しく触れる余裕がなかったが、「建築と社会」が特集した雑誌の中で、都市計画、地方計画、都市美観、田園都市など都市計画に関する論考や記述が数多く取り上げられていたことも、協会の持つ先見性と、関心の強さのあったことを裏付けるものであった。その中で大屋霊城、加藤善吉、亀井幸次郎らの執筆が盛んであった。

加えて協会の事務局で機関誌「建築と社会」の編集に35年にわたってたずさわり、戦後の同誌の名を高めた松井昭光編集長の活動も見のがすことはできない。

むすび

日本建築協会が今から80余年前に呱々の声をあげるに至った大きな理由の一つは、単なる親睦のための合同ではなく、当時の大阪の都市の姿があった。

大阪は日本最大の商業都市であり、第一次大戦の好景気を迎えて、都市への人口集中は著しいものがある反面、都市構造の前近代性は高く、そこには狭隘なる街路、過密な低層木造家屋など、改善すべき都市環境の問題があった。とくに明治42年の北の大火は11,365戸を焼失し、同45年の南の大火では4,779戸の焼失戸数を出すなど、その現状はきわめて憂慮すべき状況であった。

このような我が国の都市の現状について、関西に集う気鋭の建築家たちにとって、都市と建築、社会の問題は、座視するに忍びない状態にまで至っていたと言える。協会機関誌発刊の辞の中にもその使命感が読みとれ、片岡安の機関誌上における第一声も“都市大火の危険”であった。その警鐘は不幸にして６年後の関東大震災に的中する。片岡安の都市、建築に対する認識は、一大阪の問題にとどまらず、日本全体を視野に入れていたことは申すまでもない。それは、先に述べたように協会の発足に当たって最も大きな成果を上げた都市計画法、市街地建築物法の成立前後の片岡安の行動を見れば明らかである。

今から一世紀前の19世紀末は、セゼッションやアール・ヌーヴォーなど新しい芸術運動が盛り上がった時代であった。しかし今世紀末の動きはどうであろうか。新しい世紀を迎えるにふさわしい芸術運動の芽生えが見えないことに一抹の寂しさを感じざるをえない。

顧みると、20世紀は激動の時代であった。それは戦争の世紀であったとも言えるほど、世界の人類にとって厳しい不幸な時代であったといっても過言ではない。しかしその中でも日本建築協会は、常に高い理想を掲げて強く、たくましく生き続けてきた。

われわれはこのような時代に生き、また新しい世紀を迎えようとしている。このとき静かにわれわれの来し方を振り返ることは決して無駄なことではなく、その輝かしい伝統や多くの先輩たちの努力の跡に光を当てるとき、畏敬の念とともに、建築協会の活動の大きさを改めて感じとることができるのである。

日本建築協会の歩みは、まさに日本近代の歩みと一体であり、その投影はこの国近代の歴史に色濃く描き出されている。そこには多くの建築家や技術者、行政職、研究者、建設業関係者の群像があった。彼らの協会や社会に寄せたひたむきな努力とその成果は、機関誌「建築と社会」を通じて鮮やかに読み取ることができる。建築協会の遺産は真実、この機関誌の中に凝縮されていると言うことができよう。

＊

この80年史が協会の正史を伝えることを願うと同時に、協会の発展に貢献した歴代の会長、創立委員、副会長にまでその対象を広げることによって、改めてこれらの人々の足跡をたどることができたのは、“80年史資料研究会”を設け、研究会の諸兄にご尽力を願った結果であることを申し添えたい。この場を借りて、取材にご協力をいただいた、ご遺族や関係者に、研究会を代表して深く御礼を申し上げたい。

ただ紙数の都合もあって、協会の戦後の活動について多く触れることができなかった。また多くの先輩諸先生を紹介するに当たって、歴史的記述の例にならって敬称を省略させていただいた。

最後になったが、今回の記念誌への寄稿に際して、80年史編纂委員会（委員長・長谷部俐郎）、及び協会事務局には遅れた原稿を辛抱強く待っていただき、事務局の皆様にも何かとご助力を賜った。記して篤く御礼申し上げる次第である。

1999．3．31

（神戸芸術工科大学名誉教授／80年史資料研究会代表）

●参考文献

大阪のまちづくり―きのう・今日・あす―		大阪市計画局	平成３年３月31日
現代都市之研究	片岡安	建築工芸協会	大正６年２月１日
田園都市	内務省地方局有志編纂	博文館	明治40年12月10日
住宅問題と都市計画	関一	弘文堂書房	大正12年８月５日
関一日記	関一研究会編	東京大学出版会	1986年２月25日
関一―都市思想のパイオニア―	芝村篤樹	松籟社	1989年４月
池田宏都市論集	宮沢小五郎	池田宏遺稿集刊行会	昭和15年４月17日
船場	宮本又次	ミネルヴァ書房	昭和35年12月１日
関西財界外史（戦前篇）	関西経済連合会		昭和51年11月29日
都市計画パイオニアの歩み	都市計画協会		昭和61年９月９日
都市計画の誕生―国際比較からみた日本近代都市計画―	渡辺俊一	柏書房	1996年４月15日
第一次大阪都市計画事業誌	枝川正一	大阪市役所	昭和19年４月１日
都市計画要鑑	内務省都市計画局		大正11年３月28日
都市経営論	池田宏	都市研究会	大正11年８月31日
都市計画調査委員会議事速記録　附特別委員会会議録	内務大臣官房都市計画課		
内務省史第４巻	大霞会後藤文夫	地方財務協会	昭和46年11月１日
大阪工業会50年史	浅田敏章	大阪工業会	昭和39年12月10日
後藤新平第１～４巻	鶴見祐輔		昭和12年４月13日
懐旧譜	竹腰健造		昭和52年10月10日
近代大阪の建築	大阪府建築士会	ぎょうせい	昭和59年３月30日
建築のルール・大阪100年の歩み	大阪建築法制100周年記念誌編集委員会	大阪府建築士会	昭和62年３月31日
日本の建築［明治大正昭和］５、商都のデザイン	坂本勝比古	三省堂	昭和55年９月10日
日本建築協会主催住宅改造博覧会報告	日本建築協会		大正12年12月
関西の近代建築	石田潤一郎	中央公論美術出版	1996年
聞き書き関西の建築	佐野正一、石田潤一郎	日刊建設工業新聞社	1999年

第１編

日本建築協会
80年の記録

第1章　沿　　革

日本建築協会の創立は、大正６年（1917）３月である。そのころの大阪は、明治末期からの工業の発展により人口の集中化が始まり、特に第一次世界大戦勃発により列強諸国と肩を並べつつあった我が国の商都として大躍進を遂げ、近代都市としての基盤づくりが始まろうとしていた時であった。

一方、建築界においては、西欧建築直輸入の時期を終え、学卒者も官公庁への就職一辺倒から財閥会社への就職、また、自由なアーキテクトを目指す人々も増加し、東京偏重から、より自由な発展期の大阪で定着しようとする建築家の数も増加してきていた。

これらの人々は大阪で創作活動を行いながらそれぞれグループをつくり、グループごとに建築問題、社会問題等を論じあっていた。このような時、明治末期に東京から移って来た建築家たちが親睦団体として「オキナ会」を組織していたが、その中で関西の建築家を大同団結させる気運が生じ、片岡安、波江悌夫の連名で呼びかけを行い、大正６年（1917）３月17日の発起人会を経て、同３月30日、片岡安・波江悌夫・池田實・設楽貞雄および武田五一の５名を創立委員として大阪ホテルに30余名を集めて創立総会が行われ、関西建築協会の出発を見たのである。

この創立総会に参加した人々は少人数ではあったが、創立委員のほかにも関西建築界を育ててきた著名人が集まり、ここに関西建築界との一致が見られたのである。

そして「我が国建築界の堅実なる発展を期する」という目的を掲げて理事長に片岡安、理事に武田五一・池田實・葛野壮一郎・宗兵蔵を選出、事務所を片岡建築事務所内に設置した。

また、協会は大林組の大林賢四郎、松本禹象らの正会員をはじめ、地元の竹中・鴻池・錢高等の代表者や清水・大倉土木の支店長等を含め関西建設業のトップクラスを会員として和やかな社交的サロンの雰囲気を持ったことも注目され、東京の学会とはかなり異なった分野を目指すものがあった。

関西建築協会は大正８年（1919）１月に、今日と同じ日本建築協会と改称され、同15年（1926）10月20日をもって時の内務大臣浜口雄幸から社団法人として認可されている。

関西建築協会の会則によると、会頭をおくこととなっているが、当初片岡安は理事長、大正10年（1921）においても副会頭で、会頭席に空席が続いたのは、建築家ではない高名実力者に会頭をお願いする方針であったとも伝えられている。

本会を支えてきた人々

創立当時は片岡安理事長の下に理事制であったが、大正15年（1926）の法人組織後、会長、副会長、常務制とし、片岡会長ほか常務12名であった。

昭和21年（1946）片岡会長没後、竹腰健造が第二代会長となり、定款を改正。会長、副会長３名、理事28名、監事２名とした。平成４年（1992）には会長、副会長５名、理事47名、常務理事兼事務局長１名とし、現在に至る。

事務局は大正６年から11年までは専任者が少なく、主として熱心な会員中の数氏と外部嘱託であったが、大正11年桜ケ丘住宅改造博覧会ごろから庶務、編輯、会計係が選任され、漸次組織化して昭和16年（1941）書記長制を設け、昭和22年（1947）から常務理事兼事務局長を置くこととした。



片　岡　　安
昭21．５．26逝去　71歳



波　江　悌　夫
昭40．２．８逝去　79歳



池　田　　實
昭25．４．24逝去　72歳



設　楽　貞　雄
昭18．12．15逝去　80歳



武　田　五　一
昭13．２．５逝去　67歳

関西建築協会会則

「関西建築協會雜誌」（現「建築と社会」）第１輯より復刻

關西建築協會會則

第一條　本會ノ目的ハ我國建築界ノ堅實ナル發展ヲ期スルニ在リ

第二條　本會ハ關西建築協會ト稱ス

第三條　本會ハ事務所ヲ大阪市ニ置ク地方ニ支會ヲ設クルコトヲ得

第四條　本會ハ人格、學識、經驗アル建築家ヲ以テ會員トス會員ノ氏名住所ハ會員名簿ニ之ヲ記錄ス

會員タラムト希望スル者ハ會員五名以上ノ紹介ヲ以テ入會希望書及履歷書ヲ本會ニ提出スヘシ其諾否ハ理事會ノ詮衡ヲ經テ例會ニ於テ之ヲ議決ス

第五條　本會ハ其目的ヲ賛成シ事業ヲ援助スル者ヲ賛助員トス

賛助員ヲ分チテ左ノ四種トス

一　名譽賛助員―地位又ハ學識アル名望家

二　終身賛助員―金百圓以上又ハ之ニ相當スル物件ヲ本會ニ寄附スル篤志家

三　特別賛助員―建築ニ關聯スル特種ノ技術家又ハ事業家

四　普通賛助員―建築ニ關係又ハ趣味ヲ有スル者

賛助員ノ氏名住所寄附ノ金額又ハ物件ハ各賛助員名簿ニ之ヲ記錄ス

第六條　名譽賛助員ハ例會ノ決議ニ依リ本會之ヲ推薦ス

終身賛助員タラムトスル者ハ會員貳名以上ノ紹介ヲ以テ申込書及寄附ノ金額又ハ物件ヲ本會ニ提出スベシ其諾否ハ理事會之ヲ議決ス

特別賛助員タラムトスル者ハ會員二名以上ノ紹介ヲ以テ申込書及履歷書ヲ本會ニ提出スベシ其諾否ハ理事會之ヲ議決ス

普通賛助員タラムト欲スル者ハ會員ノ紹介ヲ以テ申込書ヲ本會ニ提出スヘシ其諾否ハ理事會之ヲ議決ス

第七條　會員ハ會内ニ於ケル其言行ニ付會外ニ於テ責ニ任ゼザルコトヲ得

名譽賛助員ハ本會ノ優遇及第十九條ニ基キ相當ノ利得ヲ受ク

終身賛助員、特別賛助員及普通賛助員ハ第十九條ニ基キ會誌ノ配布其他各相當ノ利得ヲ受ク

第八條　會員ニシテ脫會セムトスル者ハ其旨ヲ本會ニ申込ムベシ

前項ノ規定ハ賛助員ニ之ヲ準用ス

第九條　本會ハ會員ニシテ本則ノ規定ニ違背シ又ハ本會ノ名譽ヲ汚スノ行爲アリト認メラルル者ニ對シ理事會ノ決議ヲ經テ其權利ヲ停止シ若ハ之ニ脫會ヲ勸告シ又ハ例會ノ決議ノ經テ之ヲ除名スルコトヲ得

前項ノ規定ハ賛助員ニ之ヲ準用ス

第十條　脫會其他ノ事由ニ因リ會員タルノ資格ヲ失ヒタル者ハ既納會費ノ返還ヲ求メ又ハ其債務ヲ免カルルコトヲ得ズ

前項ノ規定ハ賛助員ニ之ヲ準用ス

第十一條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

一　會　頭　一　名

二　副會頭　一　名

三　理事長　一　名

四　理　事　六　名

會頭ハ會務ヲ總監シ本會ヲ代表ス

副會頭ハ會頭ヲ補佐シ會頭事故アルトキ其職務ヲ代理ス

理事長ハ會務ヲ總理シ會頭、副會頭事故アルトキ其職務ヲ代理シ理事會ヲ代表ス

理事ハ會務ヲ處理シ理事長事故アルトキ理事會ノ決議ニ依リ其職務ヲ代理ス

第十二條　役員ハ會員中ヨリ例會ニ於テ之ヲ選擧ス但會頭副會頭ハ名譽賛助員中ヨリ之ヲ選出スルコトヲ得

役員ノ任期ハ貳年トス

理事ノ改選ハ毎年半數トス但引續キ重任スルコトヲ得ズ

第十三條　本會ニ左ノ職員ヲ置ク

一　主　記　一　名

二　計　一　名

三　編　輯　三　名

四　編輯補　若干名

五　書　記　若干名

主記ハ庶務ヲ、主計ハ會計ヲ、編輯ハ編纂ヲ處理ス

編輯補ハ編輯ノ旨ヲ受ケ編纂ヲ分掌ス

書記ハ理事長理事ノ命ヲ受ケ會務ニ從事ス

第十四條　主記、主計、編輯ハ理事之ヲ互選ス

編輯補ハ會員中ヨリ理事會之ヲ指名ス

書記ハ理事會之ヲ任命シ有給トスルコトヲ得

第十五條　本會ハ調査研究ノ必要ニ應ジ例會ノ決議ニ依リ各部ノ委員會ヲ設ケ各部ニ委員長一名委員若干名ヲ置ク

委員長及委員ハ會員中ヨリ理事會之ヲ指名シ委員長ハ當該委員ノ互選トス

理事會ハ特殊事項ニ關シ會員外ノ專門家ヲ囑託委員トスルコトヲ得

第十六條　委員長ハ當該委員會ヲ代表シ委員長事故アルトキハ當該委員會ノ決議ニ依リ委員其職務ヲ代理ス

委員會ノ經過ハ例會ニ於テ之ヲ報告ス

委員會ノ調査研究報告ハ例會ノ決議ヲ經テ本會ノ名ヲ以テ之ヲ發表ス但シ緊急事項ニ付テハ理事會ノ承認ヲ經テ當該委員會ノ名ヲ以テスルコトヲ得

第十七條　本會ハ毎月一回會員ヲ召集シ例會ヲ開キ重要事項ヲ審議シ報告會、談話會、討論會又ハ講演會ヲ催ス但理事會ハ必要ト認ムルトキ臨時之ヲ開催スルコトヲ得

例會ニ於ケル議案其他ノ事項ハ理事會之ヲ會員ニ豫告ス但緊急事項ニ付テハ此限ニ在ラス

第十八條　本會ハ春秋二季大會ヲ擧行ス

第十九條　本會ノ行フ事業左ノ如シ

一　建築ニ關スル諸般事項ノ調査研究

二　調査研究報告ノ發表

三　建築ニ關スル重要事項ノ議決

四　決議事項ノ實行促進

五　會誌ノ發刊

六　建築ニ關スル圖書ノ刊行

七　建築ニ關スル講演會ノ開催

八　建築ニ關スル展覽會ノ公開

九　建築ニ關スル視察

十　理想的建築ノ計畫

十一　其他建築ニ關スル有益ナル事項

第二十條　會員ハ會費年額金貳拾圓ヲ本會ニ據出ス

但例會ニ出席シ繼キ地方ニ在ル會員ノ會費ハ半額トス

一時ニ金百圓以上ヲ出ストキハ爾後前項ノ會費ヲ免ル

會員タルノ承認ヲ得タル者ハ入會金貳拾圓ヲ本會ニ納付スベシ

特別賛助員ハ特別賛助費年額金六圓ヲ、普通賛助員ハ普通賛助費年額金參圓ヲ本會ニ前納スベシ

但六期以内ニ之ヲ分納スルコトヲ得

第二十一條　本會ノ經費ハ會費入會金寄附金賛助費其他ノ收入ヲ以テ支辨ス

本會ノ財產ハ理事長之ヲ監理ス

第二十二條　本會ノ財產債權債務及毎月ノ收支ハ主計其計算書ヲ作リ翌月理事會ニ報告ス

本會ノ財產債權債務及毎年ノ收支ハ理事會其決算書ヲ作リ翌年一月例會ニ於テ報告ス

第二十三條　本會及本則ニ關スル詳細ノ事項ハ例會ノ決議ニ依リ細則ニ之ヲ定ム

第二十四條　本則ハ例會ノ決議ニ依リ之ヲ變更スルコトヲ得

名誉顧問・名誉会長

推挙年月	推挙区分	氏　名	備　考
1958年4月 1971年4月	名誉顧問 名誉会長	竹腰健造	第2代　会　長（在任　昭和21年8月～昭和33年3月）
1964年4月	名誉顧問	尾崎久助	第3代　会　長（在任　昭和33年4月～昭和39年3月）
1971年4月	名誉会長	東畑謙三	第4代　会　長（在任　昭和39年4月～昭和46年3月）
1982年4月	名誉会長	塚本猛次	第5代　会　長（在任　昭和46年4月～昭和57年3月）
1994年4月	名誉会長	佐野正一	第7代　会　長（在任　昭和59年11月～平成6年3月）

歴代会長・副会長（副会頭・理事長）　（1917年度から1996年度）

年　度	会　頭	副会頭	理事長
1917～20	—	—	片岡　安
1921～26	—	片岡　安 宗　兵蔵	葛野壮一郎 横濱　勉 池田　實 松本　禹象 園部　文雄

年度	会　長	副会長
1927～35	片岡　安	宗　兵蔵　日高　胖 野村　一郎　古宇田　實 武田　五一　竹腰　健造 葛野壮一郎　松室　重光 松井貴太郎
1936～40		設楽　貞雄　安井　武雄 竹腰　健造　松本　禹象 中澤誠一郎　坂　靜雄 今林彦太郎
1941～45		井上　新二　今林彦太郎 竹腰　健造　松本　儀八
1946	片岡　安	竹腰　健造　松本　儀八 池田　宮彦　錢高　輝之
1946～50	竹腰　健造	中西　六郎　井上　新二 大林　芳郎
1951～55	竹腰　健造	東畑　謙三　大林　芳郎 鴻池　藤一　伊東　五郎

年　度	会　長	副会長
1956～57 1958～60	竹腰　健造 尾崎　久助	東畑　謙三　鴻池　藤一
1961～63 1964～65	尾崎　久助 東畑　謙三	東畑　謙三　竹中　錬一 塚本　猛次　鷲尾　健三
1966～70	東畑　謙三	塚本　猛次　竹中　錬一 錢高　輝之　松村　雄吉 鷲尾　健三　横尾　義貫
1971～75	塚本　猛次	福田　朝生　松村　雄吉 横尾　義貫　錢高　輝之
1976～80		福田　朝生　錢高　輝之 横尾　義貫　足立　孝 佐野　正一　松村　雄二
1981	塚本　猛次	福田　朝生　松村　雄二
1982～84	福田　朝生	足立　孝　佐野　正一
1984～85	佐野　正一	市川　宏　薬袋　公明
1986～88	佐野　正一	松村　雄二　薬袋　公明 足立　孝　市川　宏
1989～93	佐野　正一	松村　雄二　薬袋　公明 足立　孝　市川　宏 金多　潔　三品　哲夫 鴻池　藤一
1994～96	市川　宏	薬袋　公明　鴻池　藤一 金多　潔　三品　哲夫 岡本　行善　錢高　善雄

名誉正会員　（1917年度から1998年度まで。ただし、推挙該当者のない年度は省いている）

1998年10月1日現在

年　度	氏　名
1945以前	天沼　俊一　池田　實　小笠原祥光　置塩　章　古宇田　實　千賀　正人　武田　經一　田中　綱 谷　民蔵　日高　胖　松井貴太郎　松井　清足
1946	伊東　忠太　永瀬　狂三
1948	清水　釘吉
1949	石田　信夫　今林彦太郎　佐藤　四郎　清水　一雄　内藤　多仲　波江　悌夫　長谷部鋭吉　松本　儀八
1955	伊藤幸太郎　今津　吉兼　岡田　平蔵　岡村徳一郎　佐藤正次郎　島田　良馨　野中　実　安井　武雄 渡　実幸
1967	秋田喜代治　井上　福蔵　池田　宮彦　石川　寛三　久保田種吉　早良　俊夫　作間日出生　鈴木　末尾 滝沢　真弓　竹腰　健造　中澤誠一郎　伴　秀雄　伴野　貞三　坂　靜雄　藤木　正一　宮飼　克二 村野　藤吾　鷲尾　九郎　渡部　圭吾
1968	青盛　繁男　五十嵐芳雄　池村元之助　岩佐　信也　岩崎甚太郎　内田　成之　大倉　三郎　大下順三郎 岡田　孝男　岡本　茂樹　岡本　弘　亀井幸次郎　河合貞一郎　城戸　武男　黒木源次郎　設楽　貞三 篠原　太郎　白石登喜男　滝　邦一　玉置豊次郎　東畑　謙三　西沢　藤生　羽原　徳衛　堀口　甚吉 増本　栄六　松井清之助　松本　与作　山崎　英二　山田　文次　山手　研吾　山中　茂一　若林　季雄

1973	井手　正雄	伊藤　鑛一	小早川美武	島村佐次郎	白鹿　正徳	出村　治作	中野順次郎	永田　鼎三
	野田　清三	浜口幹三郎	藤岡　正一	藤阪捨治郎	本多　正道	松井　宗一	松田　昌平	道田泰治郎
	森定松之祐	若林　繁吉						
1979	青木　茂雄	井上　利男	小津　利一	笠井　正一	黒明　澄夫	守谷　茂	吉田光太郎	渡辺　幸蔵
1981	一圓　俊郎	今元　康彦	岡本豊治郎	佐々木米太郎	白井　周二	錢高　輝之	竹内　さく	竹中　錬一
	伴仲　信次	藤田　重治	堀井　啓治	藪本　芳一				
1988	浦辺鎭太郎	岡橋作太郎	川勝源兵衛	汲川　圭司	小林　清	四方　靖郎	高橋　慶夫	塚本　猛次
	野々村五四男	久田　良吉	前野慶太郎	水野長三郎	森　忠一	山田　芳雄	吉原九州男	
1993	浅井　泰	新井　辰一	井澤　善哉	井上　實	池田　達雄	石川　四郎	石倉　千満	犬伏　武芳
	今津　義勝	今西　茂雄	岩井金三郎	尾亀清四郎	越智　隆晴	大内　茂	大林　芳郎	沖田　誠一
	加藤　宜彦	亀岡　二郎	片山　一郎	川合　安平	川谷　勇	貴志　満二	工藤　雅三	熊澤　六朗
	黒川　巳喜	小林　得志	小山　武	小西　岬	鴻池　藤一	佐藤　重夫	坂本　忠義	後川　春雄
	杉山　廣吉	関原　猛夫	染木　正夫	高橋　保夫	谷口　尚武	玉木　一次	知見　義夫	佃　忠夫
	手賀　徹	富松　助六	中川　匠	中村　隆慶	服部　小虎	原川　一巳	廣瀬　勇	福永　薫
	堀内　三郎	松永　崇志	宮田　禮彰	南出　信雄	村上　孝一	森　定夫	森　茂樹	森岡　武夫
	矢野　豊作	山田　一義	山根正次郎	米田　良男	和田　精一			
1995	岡野　武司	岡本　俊輔	佐々木　保	佐野　正一	寺田　徳重	宮崎　辰敬	山崎和三郎	横尾　義貫
1996	岡田　利一	香取　禮三	近藤　正志	中島　一	林野　全孝	藤井　重信	八十島健二	山田　義行
1997	井原　巖	小笠原祥介	近藤　義雄	竹村　清	中原　茂	山本　康雄		
1998	岡本　博介	樫原　章雄	粂井　弥平	高田　秀三	西尾　介治	西山　茂	長谷川哲之助	松田　隆之
	元木　貞次	吉田　隆一	和田　眞一					

会勢の拡大へ向けて

戦後の社会情勢に即応するため定款の大改正が行われ、会員構成も広く建築界関係を網羅することとして、以来今日に至っているが、定款改正の背景は次のとおりである。

戦後、活動を再開した本会は、1947年３月25日に会誌「建築と社会」（第28輯第１号）を再刊することができたが、その中に竹腰健造第２代会長の就任に際しての一文が掲載されている。戦後の建築界の現状から、「我國の建築界は建築技術者のみならず、凡そ建築の事業に關心を持つ各方面人士が悉く一團となつて、現在並に將来の事を議し、廃墟と化した都市の復興に當らねばならぬ時期が來たと考へられる。從来の如く建築の技術者丈の團體とか、施工業者丈の團體、又建築材料商、設備業者丈の團體で我國の建築の各分野丈を個々別々に議して居ては、国家再建の用に立たない」ということで、定款の一部を改正し、建築業界の各方面の有力な人士を会員として網羅する団体とし、将来に寄与せんとしたものであり、本会の改組は社会的にも有意義となることを期待するとされたのである。

支部の沿革

本会の支部がはじめて京都に設立されたのは1947年４月のことである。1917年３月の本部創立以後31年を経過してのことであった。その後、同じ1947年４月に京都、広島、11月に兵庫、12月には九州と東海、そして1950年５月に和歌山と、合計６支部が次々と誕生していった。

本会創立時の関西建築協会会則第３条には、「本会は事務所を大阪に置く。地方に支部を設けることを得」とある。

さらに1926年の社団法人認可時に定められた本会定款には、支部に関する細則が加えられた。この細則第１条には、「会員50名以上居住する地方に於いては支部を設置することを得」とあって、その他設置の手続き、支部交付金等、現在の会則と同様の主旨がここで定められたことがわかる。

ちなみに、それ以後本会の定款は四度の改正を経て現在に至っているが、その中で支部設置に必要な支部居住会員は100名へと改められた。

支部設立の背景

1942年に催された創立25周年記念事業の中で、遠隔地に居住する各地の熱心な会員の中から支部設立の議が起こった。これをきっかけに各地の会勢幹事会により熱心な会員増強が図られることとなり、トップを切って京都支部が1947年４月の設立総会開催へとこぎつけることとなった。一方、広島では、原爆投下という人類がかつて体験したことのない悲惨な状況に遭遇しながらも、終戦２年後に設立にこぎつけるという驚くべき経緯でもって支部設立が果たされている。

また、第二次世界大戦さなかの1943年に、東海支部は各支部にさきがけて設立申請を果たしながら、学会との合併問題そして終戦といった出来事と重なって、ようやく1947年に設立の運びとなった。（会誌『建築と社会』第28輯３・４・５号より）

支部設立時の所属区域

京都支部	本会第4回常務会の議事第1号で議決。京都市を支部所属とする。
広島支部	広島において創立総会開催、広島県下一円を支部所属とする。
兵庫支部	神戸において創立総会開催、兵庫県下一円をその所属とする。
九州支部	福岡において創立総会開催、九州一円及び山口県下をその所属とする。
東海支部	名古屋において創立総会開催、愛知、三重、岐阜の三県を所属とする。
和歌山支部	和歌山において創立総会開催、和歌山県下を支部所属とする。

支部設立後の推移

支部が設立されて1996年で50年たった。その間、各支部間で活動の濃淡はあったものの、京都、広島（1949年より中国支部）、和歌山の各支部は順調に活動を続けている。

一方、九州支部は29年間の活動を経て1975年に支部を廃止。兵庫支部は36年間の活動を経て1982年に支部を廃止しているが、これは本部と至近の活動圏のための合流であって、その後も兵庫在住会員の活発な活動は続いている。

残る東海支部は、支部設立後9年目に当たる1955年から1959年までの5年間、会員数が支部設立定数未満となったため、連絡員を置いて支部に準じた会務を行うこととし、1960年に至って念願の支部復活を果たす。その後の38年間は極めて活発な支部活動を続けている。

参考までに、各支部の推移を簡単に下図に示す。

歴代正副支部長並びに会員数

支部設立時の支部長は、松井清之助（京都）、藤田定市（広島）、岡本茂樹（兵庫）、錦田直一（九州）、玉置豊次郎（東海）、そして奥村胖（和歌山）の各氏である。設立以来現在まで歴代正副支部長の名がすべて記録に残されているのは京都支部だけであって、その他の支部については程度の差はあるが、残念ながら一部その記録が不明である。

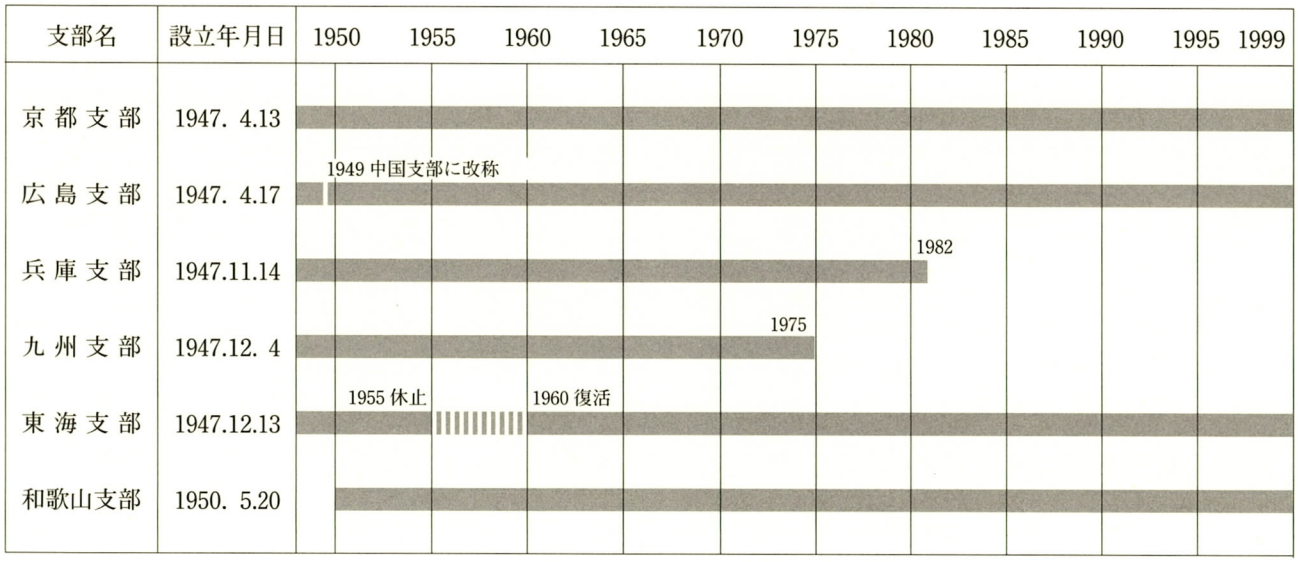
1955年には、京都支部は支部長に大倉三郎、副支部長に西山卯三、1960年に支部復活を果たした東海支部は支部長に一圓俊郎の名が見られる。記録に残る歴代正副支部長は、資料編（218 p）に示すので、参照されたい。

支部会員数について、現存する資料で見ると、京都支部では昭和40年代は個人会員85～95名程度、団体会員25社程度、50年代でやや減少し、昭和60年代で最小41名（18社）と相当の減少を見るが、1992年以後は一気に回復して100名（30社）前後を堅持している。

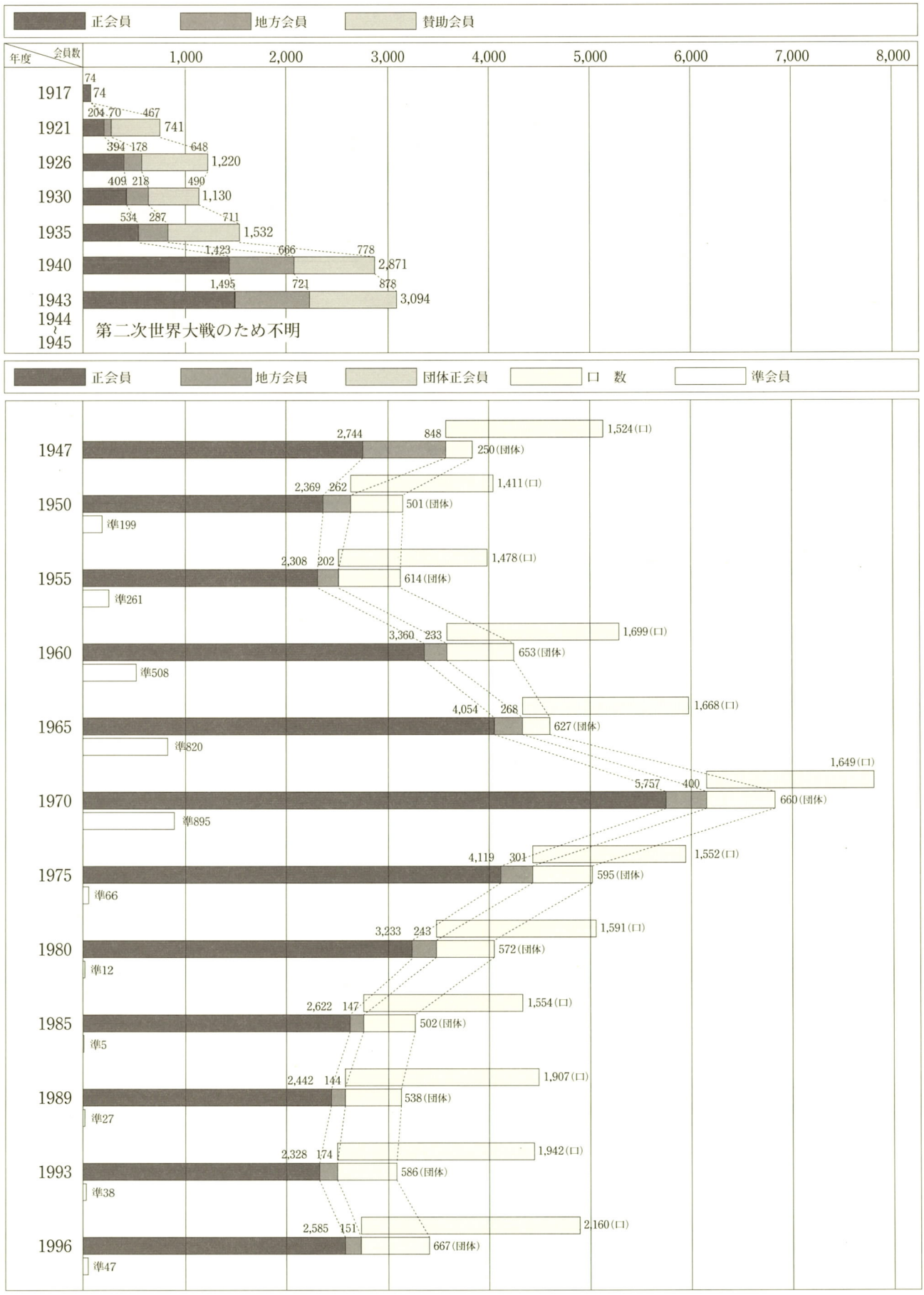
また、和歌山支部も昭和50年代では個人会員70～100名、団体会員20～40社程度を推移し、その後は不明、1994年以後には50名（10社）程度となっている。

東海支部では、昭和50年代には個人会員が100～140名、団体会員10社前後、昭和60年代にやや減少、1991年ごろより再び増加に転じ、現在200名近く（100社前後）の会員数を擁している。

支部設立とその後の推移



会員数の推移（1917年度から1996年度）



第2章　委員会活動

委員会の変遷

現在活動中の常設委員会は、編集・事業・教育・出版および建材の5委員会である。発足当初より時代の要求に応じて各種委員会が開設され、また終了しているが、その主な活動を、以下に列記する。なお、当初は、委員会は調査研究機関として、事業を実行するものは幹事会としたが、後年、委員会も事業を実行できることとなり、その区分がなくなった。

現在活動中の常設委員会

●編集委員会

会誌「建築と社会」は、会員相互の建築情報誌として本会の中心的役割を果たしてきた。そして現在、同誌の編集委員会は編集理事会の統括のもとに下記の4小委員会（特集・作品作風・会員企画・広告企画）が設けられ、月1回の全体会議によって毎号の特集内容が検討され、併せて編集作業および収支状況が報告されている。

1997年4月には、本会創立80周年記念号（vol.78、No.4、通巻901号）を発刊した。

編集委員会
- 特集小委員会
  - ・計画分科会（計画系、建築計画系、インテリア・住宅系）
  - ・構造分科会
  - ・設備分科会
  - ・施工材料分科会
  - ・法令分科会
- 作品作風小委員会
- 会員企画小委員会
- 広告企画小委員会

なお、「建築と社会」の総目録は、1953年12月号（1917年～1952年分）および1967年3月号（1953年～1966年分）に掲載されている。しかし、それ以降の総目録は、いまのところまだ作成されていない。

出版幹事會　編集委員会（1949年より）

年　度	委員長	委員会回　数	出　席延人員	幹事会小委員会	出　席延人員
1917	葛野壯一郎	7			
1918	野村　一郎	12			
1919	野村　一郎	11			
1920	池田　實	12			
1921	横濱　勉	12			
1922	竹腰　健造	12			
1923	竹腰　健造	11			
1924	本田　登	12			
1925	佐藤　彰美	12			
1926	伊藤　正文	12			
1927	波江　悌夫	12			
1928	波江　悌夫	12			
1929	松本　儀八	11			
1930	松本　儀八	12			
1931	本間　乙彦	12			
1932	高橋　榮治	12			
1933	高橋　榮治	12			
1934	秋田喜代治	12			
1935	岡田　孝男	12			
1936	新名　種夫	12			
1937	新名　種夫	12			
1938	吉田　信武	11			
1939	龜井幸次郎	12			
1940	龜井幸次郎	12			
1941	小林　清	－			
1942	小林　清	12			
1943	不　明	記録が見当たらない			
1944					
1945					
1946					
1947	中野順次郎	11			
1948	中野順次郎	12			
1949	大林　芳郎	12			
1950	大林　芳郎	12			
1951	白石　博三	12			
1952	中村　綱	12			
1953	中村　綱	11	79		
1954	浦辺鎭太郎	10	71		

年　度	委員長	委員会 回　数	出　席 延人員	幹事会 小委員会	出　席 延人員
1955	浦辺鎭太郎	11	103	1	3
1956	佐野　正一	12	125	10	40
1957	佐野　正一	12	92	13	50
1958	塚本　猛次	12	126	12	50
1959	塚本　猛次	12	111	12	58
1960	森　　忠一 (副)上林博雄	12	96	19	108
1961	森　　忠一 (副)上林博雄	12	101	17	94
1962	元吉勇太郎 恒岡　俊行	12	95	15	75
1963	恒岡　俊行	12	81	15	65
1964	片山　光生	11	85	15	68
1965	片山　光生 長谷川哲之助	11	92	27	127
1966	長谷川哲之助	12	96	30	136
1967	長谷川哲之助	12	124	45	200
1968	足立　　孝	12	138	41	212
1969	足立　　孝	11	107	22	105
1970	鳥田　家弘	12	149	38	169
1971	鳥田　家弘	12	146	47	217
1972	彦谷　邦一	12	168	43	212
1973	彦谷　邦一	12	179	41	187
1974	松村　慶三	11	61	58	305
1975	松村　慶三	9	70	76	367
1976	中村　甲一	11	99	59	286
1977	中村　甲一	10	84	51	294
1978	前川　陽一	11	102	70	360
1979	前川　陽一	12	105	77	394
1980	三輪　泰司	12	103	56	291
1981	三輪　泰司	12	101	47	281
1982	横山　誠一	12	106	62	315
1983	横山　誠一	12	112	74	417
1984	井上　　滉	11	129	108	574
1985	井上　　滉	12	98	99	555
1986	井上　　滉	12	97	116	676
1987	長谷部朔郎	12	101	119	748
1988	長谷部朔郎	12	116	119	718
1989	長谷部朔郎	12	90	125	637
1990	溝神宏至朗	12	92	122	660
1991	溝神宏至朗	12	72	105	552
1992	溝神宏至朗	12	66	107	623
1993	荒井　　清	11	75	98	579
1994	荒井　　清	12	84	94	643
1995	荒井　　清	12	93	82	485
1996	與謝野　久	12	119	95	559

●事業委員会

1917年、創草期の協会は大会（春秋）、例会、役員会で運営され、展覧会や講演会、見学会を企画・開催していたのは主として大会が指名した運営委員会であった。

昭和に入ると、協会の組織運営は片岡会長以下役員（常務）会をはじめ、第一部（法制）委員会、第二部（教化）委員会、第三部（資料）委員会および第四部（災害）委員会を設置するとともに、これら委員会に分科会を設けて、きめの細かい委員会活動が展開された。通俗大講演会やその他の講演会、展覧会、あるいは講習会、見学会は、これら各委員会活動の過程において、委員会単独か合同で適宜計画され実施されたようである。

講演会、見学会等を所管する組織が設置されたのは、1940年２月に設置された「會勢幹事會」であると考えられる。この會勢幹事會も1947年12月５日に改正施行された「新定款」の第41条の規程に従い會勢委員会と改称されているが、1949年２月には「事業委員会」という名称の委員会も設置され、會勢委員会は会員増強のほか主として見学会を、事業委員会は講演会、懇親会、見学会等を開催している。

1956年に至り、會勢委員会において種々検討の結果、會勢委員会を改組して、事業の企画実施を主とする委員会と、會勢発展を企画する審議会を設置することとして理事会に諮ったが、次年度への継続審議となった。

この會勢委員会改組の件は、その後、1956年４月11日開催の理事会において承認決定され、事業の企画実施を主とする委員会の名称は「事業委員会」とし、所管する事業の内容は見学会、映画会、講演会、展示会、懇親会、各種説明会、若い会員の集いのほか、他の委員会が所管しない事業を企画実施することとされた。そして、従来の會勢委員会の名称は會勢審議会となった。

1971年４月、事業委員会の見直しが行われ、小委員会は「見学会小委員会」、「広報小委員会」および「若い会員の集い小委員会」の３小委員会に整理統合され、現在も活発な活動を展開している。

(注)「広報小委員会」は1998年４月に「情報小委員会」と改称された。

會勢委員会（1947年～1955年）　**事業委員会**（1949年～）、1956年～現在

年　度	委員会 幹事会 委員長	主　な　活　動 講　演　会
1918	大会運営委ほか	第１回通俗講演会、都市住宅問題：関　一、家相論：葛野壯一郎、大阪市区改正について：片岡安、デモクラシーと建築：佐野利器、大阪港の将来：直木倫太郎

會勢委員会、事業委員会

年　度	委員会 幹事会 委員長	主　な　活　動		
		見　学　会	講　演　会	そ　の　他
1920	大会運営委ほか		市街地建物法について：池田、中西、井尻、置塩の各建築監察官	
1921	大会運営委ほか	北木島工場 大阪市新庁舎	●建築材料規格統一宣伝講演会 佐藤功一ほか 度量衡規格統一について、煉瓦について、木材について、文化生活と規格統一について	
1923	大会運営委ほか		●春季大会通俗建築大講演会 武田五一ほか 和風住宅と洋風住宅の長短、満朝視察土産、忘れられた住宅の平面、超過度期、照明の話、家相に対する疑問、アパートメントハウス、建築界の大勢について	
1924	大会運営委ほか		●春季大会通俗建築大講演会 古宇田實ほか 趣味の建築、日本における住宅の変遷とその将来、建築家の社会的地位、欧米旅行談、婦人に必要な住宅の知識 ●連合通俗講演会 古社寺建築について	
1925	大会運営委ほか		●震災通俗講演会 北但地方の震災視察談、豊岡地方震災状況幻燈、飛行機で但馬地方へ、城崎地方震災状況幻燈、毀れぬ先の用意	
1927	大会運営委ほか		●「地震と建築」通俗講演会 波江悌夫ほか 丹後地方震火災実地踏査報告、救護班到着前の震災地、地震と家	
1929	大会運営委	大阪中央電話局新庁舎		
1930	大会運営委ほか	大阪市電気局新庁舎	●震火災と建築大講演会 伊豆地方地震における地盤変動、伊豆地方震災視察報告、架構耐震論の発達、現在京都市における木造建築の不安、宝永・安政両度の大震と大阪、耐震耐火の建築	
1932	大会運営委ほか	大阪市営住宅、大阪織物㈱、㈱工英社		
1933	大会運営委ほか	満州見学旅行（大連港、満州大連医院、南山荘、水師営、昭和製鉄所、国務院、博物館他）		
1934	大会運営委ほか		●室生寺に関する講演／天沼俊一 ●函館市大火災実地視察談／鳥井信	
1935	大会運営委ほか		防空講演／小倉少佐ほか	
1936	大会運営委ほか		大阪における特殊建築物規則、神戸における特殊建築物規則／内務技師・小林	

會勢委員会、事業委員会

年　度	委員会 幹事会 委員長	主　な　活　動		
		見　学　会	講　演　会	そ　の　他
1937	大会運営委ほか	田村駒商店	大阪市の下水処理施設について／鈴木義一、鉄材について／栗本、積載荷重について及び木材の許容応力度について／伊藤、鉄骨及び鉄筋の許容応力度について／武藤ほか	
1938	都市武装促進委員会他	武川ゴム㈱工場 ㈱理研鋼材・尼崎工場 日鉄広畑工場	軍防空／末藤大佐、京都市と防空／京大・坂、木造都市防火改修方法／伊藤、神戸市の防空と建築／神高工・古宇田、都市防空上防火の重要性／東大・内田	
1939	都市武装促進委員会他	大阪市水道部浄水所	忠霊塔の建設／島内少佐、忠霊塔の設計と意匠／東大・岸田、映画「日本刀」上映 用材生産統制規則／大阪府・兵藤 木造建築統制規則／大阪府・宮脇	
1940	見学会は会勢幹事会の事業となる 会勢幹事会 都市武装促進委員会	四天王寺五重の塔、川島織物工場、日本郵船新工場、東洋製缶草間工場、グリコ製菓工場、高島屋天下茶屋工場、吉田家、吹田操車場大洞窟院展、タイガー計算機十三工場、神戸日産寸燐、島津マネキン工場、日活・新興スタジオ、大日本紡績貝塚工場、一心寺境内、京都稲畑邸、千年家・阪田邸庭園、市田邸、神武天皇遺跡ほか	空襲の実相と防空建築の着眼／陸軍航空大佐・柴田、満州方面特に新京を中心に／石川、北支方面特に北京を中心に：山田	
1941	会勢幹事会 都市武装促進委員会	水無瀬神宮―加賀邸洋欄妙喜庵茶席―、奈良佐保路廻り円福寺、神戸トキワ合板工場、能福寺・永福寺、大阪刑務所、妙国寺、南宗寺、大日本養豚㈱、池田高校、府立園芸高校、北野劇場	防空／中部軍司令部・桃井少佐、偽装／内務省・新海、防護室構造に関する力学の問題／京大・坂、防火／大阪府・井上、工場防空要綱／内務省・新海、工場の各設備防護法および灯火管制一般方針／内務省・小宮、映画「ロンドン爆撃」上映 防空壕及び待避所の築造要領／阿部、ヂベル工法並びに大梁間建築／織本、建築構造用釘／陸軍・高山少佐、時事問題／武藤	
1942	会勢幹事会 都市武装促進委員会	大和三山付近・室生寺、石井寺、赤坂古墳、忍阪等 ◇25周年記念見学会 京都市内庭園・茶室、枳穀邸、無憐庵、金地院、南禅寺、京大天文台 （第２回）東北・関東方面 大和路・万葉史跡、 （第３回）赤穂・大石神社、赤穂城址、製塩工場 （第４回）南九州方面 官幣大社・香椎宮箱崎八幡、熊本水前寺加藤神社、霧志摩神宮、宮崎神宮八紘ダイ照国神社磯島津邸	●都市防空大講演会 ドイツの防空に学ぶべきもの／東工大・田辺、防空と建築／内務省・井上、大東亜戦争と帝国海軍／海軍少佐・福元、現代の都市／片岡、都市防空の要諦／中澤、史上無比の大東亜戦争／衆議院議員・池崎、最近のソ満国境／井口	

年　度	委員会 幹事会 委員長	主　な　活　動		
		見　学　会	講　演　会	そ　の　他
1943	都市武装促進委員会		土建築界現下の情勢と今後の方針／商工省・伊藤、新釘打構法／陸軍・高山大尉	
1947 〜 1948	尾崎　久助	趣味の見学会、浜寺地区進駐軍家族宅見学会、西大寺見学会	懸賞図案の展示と講演会、経済学博士徳永清行講演会、都市復興講演会／大阪市長・近藤博夫	
1949	錢高　輝之	京都博覧会と鴨川踊見学会、修学院と曼珠院及び詩仙堂見学会		建築士法草案説明会
1950	松村　雄吉	日立造船桜島工場、大建並びに竹中支店工事現場見学会、大阪窯業セメント工場見学会、神戸博覧会見学会、アメリカ博見学会	大阪市換地と都市計画講演会、風水害対策講演会、時事問題、住宅金庫と基準法、建築新法令講演会	臨時規則説明会（稗田府建築課長）
1951	松村　雄吉	中座観劇会、キャバレードミノ並びにスタンドバーシスター石造建物見学会、南海球場見学会	通俗講演会、合成樹脂の建築資材について、潜函工法について、JIS K 5661と国産防火塗料について、発泡性耐燃について	建築士資格に関する懇談会
1952	淺沼猪之吉	松竹新喜劇観劇会、東洋リノリューム見学会、文化映画鑑賞会、住友電工工場見学会、近畿電気会館見学会、神戸銀行本店	沖縄の一般近況・施工法・衛生設備・電気設備の講演会	建材品質セミナー
1953	淺沼猪之吉	映画の会「アメリカ映画建設技術」開催、酒蔵「大関」見学会、日本板硝子特別見学会、神戸名糖工場並びに電話局見学会	フランス現代建築講演会「自然に帰れ」／リヒアルト・ノイトラ、材料説明会、不燃建築の促進、最近の欧米建築、原爆と建築物、建築設計と火災保険	
1954	淺沼猪之吉 藤木　正一	キャバレー富士、尼崎兵站補給廠、古建築（西本願寺、角屋、二条城、東寺）見学会	シリンダーシャーレの設計について講演会、グロピウス博士大阪講演会	新年観劇会（中座） 定例午餐会９回開催
1955	藤木　正一	梅田ビル見学会と座談会、トルコセンター見学会、工夫された小住宅見学会、東映撮影所と広隆寺見学会、桂修学院離宮見学会	芦原義信氏講演会、「主婦と台所展」講演と映画会、ノイフェルト教授講演会、「リミットデザインについて」／ワックスマン教授講演	OS劇場とシネラマを見る会、梅田大映劇場見学と映画鑑賞会、コンクリート映画会
1956	鷲尾　健三	市大付属病院見学会、梅田日活劇場見学と映画鑑賞、室生寺と大野寺見学会、阪神ビルの井筒基礎工事見学会、神戸国際会館と米国領事館、大阪テレビ社屋、コマミュージカルを観る会	「軽量鉄骨構造計算について」「軽量鉄骨構造に関する」講演会「プレストレストコンクリートの建築への応用」「メキシコとアメリカ建築」	米国建築士会訪日団歓迎晩餐会、AIAハワイ支部訪日観光団午餐会ほか、佐久間ダム工事建設記念映画会
年度	委員長	見学会小委員会	広報小委員会	若い会員の集い小委員会
1957	鷲尾　健三	公団千里団地見学会、毎日会館基礎電気固結工法見学会	「建築塗料について」説明会、デッカー教授講演会、「建築技術者のための原子力講座」、AIA会長歓迎晩餐会・午餐会、夏の会員懇親会、会員懇親ソフトボール大会	大阪の建物と建築家、「建築と社会」ーをめぐる放談
1958	岩崎甚太郎	新大ビル見学会、四天王寺五重塔、アサヒビール吹田工場、読売テレビ放送見学会、西長堀高層共同住宅見学会、新歌舞伎座、サントリー山崎工場見学会	説明会「スプレッドサテン」、坂静雄「プレストレストコンクリートについて」講演会、会館開館記念午餐会	青年建築家として望むものー懇談会ー

事業委員会

年度	委員長	見学会小委員会	広報小委員会	若い会員の集い小委員会
1959	岩崎甚太郎	大阪能楽会館見学と観能会、表千家・裏千家見学会、住友原子力研究所、大阪市中央体育館見学会、高麗橋潜函工事見学会、大徳寺の茶室を観る会	最近の基礎工法と新しい建材説明会、「コンクリートに関する最近の話題」講演会、創立記念日午餐会、夏期会員懇親会（生駒山上）	香里園団地見学と批評の会
1960	岩崎甚太郎	関電ビル見学会、新阪急ビル竹中式深礎工法見学会、京都会館と京都ホテル佳水園見学会、見学と批評の会（登美ケ丘分譲住宅）、コンクリート打放し見学会	「ハリス博士の建築と音響」講演会、明るい生活と建築展（神戸王子体育館）、ドームとシャーレ映画会、ル・コルビジェ展、陸屋根の防水説明会、夏の会員懇親会と見学会（ワールド）、第１回海外建築情報視察（欧米）午餐会、会員余技作品展	在日外国留学生と話合う会
1961	岩崎甚太郎	大和文華館見学会、武者小路千家ほか茶室見学会、野沢セメント工場及び彦根城見学会、欧米の施工技術とソ連の建築、クラブOTA見学会	鋼管構造講演会、これからのパーキング施設説明会、午餐会、夏の懇親（滋賀観光文化会館）建設記録映画を見る会、フランス美術展の鑑賞と講演会	プレジデントクリーブランド号を見る会
1962	岩崎甚太郎	新住友ビル見学会、クラブ千扇見学会、日本陶管とトヨタ自動車工場見学会、千里丘陵ニュータウン見学会	H形鋼建築講演会、防錆に関する講演会、欧州のプレハブ講演会	企業内における工業デザイン
1963	増井　敏克	小原流家之教場見学会、三神ビル全溶接構造見学会、キリンビール尼崎工場見学会、NHK大阪放送会館見学会、梅田地下街見学会	新しい建築技術開発の集い、ドッサ教授講演会、新しい照明型式、鉄筋化粧板説明会、第１回会員余技作品展	計画上から見た神戸ポートタワー
1964	増井　敏克	芭蕉庵、詩仙堂、曼珠院を見る会、長居陸上競技場見学会、永富邸、醤油工場、姫路城見学会、東海道新幹線基地現場見学会と試乗、兵庫県庁舎、相楽会館、神戸市埋め立て事業場、OWS地下工法見学会	地震と超高層講演会、「建築と色彩」講演と映画の会	建築の評価について／岩本博行、近作を語る／薬袋公明、建築と社会とのつながり／佐野正一
1965	増井　敏克	天理教病院、松下電器奈良工場、奈良県庁舎見学会、大和屋、大阪安土町駐車場見学会、大阪ロイヤルホテル見学会、関西電力学園と総合運動場施設見学会	講演と映画会（坂静雄氏講演）、説明会「最近のコンクリート」、新年観劇会「前進座を見る会」、午餐会	現場監理50年
1966	増井　敏克	朝日新聞本社地下工法見学会、国立京都国際会館見学会、二条陣屋、南禅寺、円通寺見学会、奥能登、京阪天満ビル見学会、中日ビル、明治村を見る会	建築法規の研究と討論の会、説明会「新しい防水工法と実例」、午餐会	大阪府青少年野外活動センターを見る会
1967	政岡　基次	西阪神ビル見学会、大阪市街地改造第１棟新築工事見学会、関西電力病院見学会、天理教おやさとやかた見学会、京の庭園と古建築を見る会、大阪厚生年金会館ビル見学会	最新のPC工法講演と映画会、実務に直結した建築工事別説明会「金属外装材の問題点」「新しい型わく工法」	ソ連青年建築家との懇談会、車輌と新幹線基地をみる集い

年　度	委員長	主な活動		
		見学会小委員会	広報小委員会	若い会員の集い小委員会
1968	政岡　基次	原子力発電所（美浜・敦賀）見学会、大阪駅前市街地改造ビル第1号見学会、大阪国際空港ターミナルビル見学会、大阪マーチャンダイズ・マート見学会	十勝沖地震の調査報告とＲＣ構造耐震対策講演会、超高層建築講演会ー神戸商工貿易センタービルの構造計画ー、実務に直結した建築工事別説明会	建築のライフ「建築の進歩と調和」西沢文隆・岩本博行
1969	政岡　基次	大和の古建築を訪ねて、伊藤忠ビル見学会、大徳寺の茶室見学会、日本万国博覧会会場見学会、東京の超高層建築見学会、修学院離宮拝観	ブルース・ガフ講演会、フリッツ・ボルネマン講演会、実務に直結した建築工事別説明会	建築のライフ「日本万国博の建築」上田稔ほか
1970	北垣　智造	京王プラザホテルの見学と新宿御苑の拝観、妙喜庵並びに水無瀬神宮の茶室見学会、朝日放送本社と大阪タワー見学会、清酒「白雪」の新社屋と四季醸造工場の見学会、サントリー本社ビルの見学会	実務に直結した建築工事別説明会「住宅のユニットシステム」、やさしい建築の知識講習会、新しい建築写真展示窓	座談会「万博を終わって」根津耕一郎ほか 座談会「都市と公園と人間」宮崎研一ほか
1971	北垣　智造	大石寺正本堂建立工事の見学と富士五湖めぐり、阪急ターミナルビル見学会、大阪国際ビルディング見学会、大阪ロイヤルホテル見学会	建築へのコンピューター利用講習会、新しい建築写真展示窓	ロサンゼルス大地震の教えるもの、「中国の古代美術と名園をみる会」、ふるいまちあたらしいまちシリーズ(1)、(2)、(3)
1972	北垣　智造	大阪大林ビル見学会、京都ロイヤルホテル見学会、慈光院の茶室見学の会、京都御苑内仙洞御所の拝観、修学院離宮の拝観、千里セルシー見学会	都市災害問題シンポジウム、建築技術者のために「千日デパートビル火災に学ぶ」、新しい建築写真展示窓	「伝統工芸をみる会」（川島織物）、航空機の製造工程を見る会、ふるいまちあたらしいまちシリーズ(4)、オリエンテーション「ヨーロッパの都市再開発事業について」
1973	北垣　智造	大阪高等裁判所合同庁舎事務所棟の見学会、新宿住友ビルの見学会、妙心寺の茶室見学会、灘の清酒「白鶴」の酒蔵を見る会、日商岩井㈱大阪本社ビルの見学会	実務に直結した建築工事別説明会、新しい建築写真展示窓	オリエンテーション「ヨーロッパの都市と歴史について」「ヨーロッパの団地について」高層ビルを考える会（第1回）大林ビル（第2回）大阪国際ビル、工業化による住宅産業工場をみる会（第1回）、当尾の秋をたずねる、解体修理中の古建築を見る、吉野の紙すきと史跡をみる会、建築家に話を聞く会
1974	窪田　　祐	復原工事中の薬師寺金堂見学会、中之島センタービル見学会、当麻寺の丸窓の席と5帖の席をみる、国宝東大寺金堂（大仏殿）昭和大修理見学会、新都ホテル見学会	新しい建築写真展示窓	工業化工法による建築部材生産工場を見る、建築家のための「みどり」学習会(1)(2)、中国の建築事情を聞く、コンピューターとの対話、解体修理中の古建築を見る、名古屋のふるいまちとあたらしいまちを見る
1975	窪田　　祐	吉本ダイヤビルの見学会、西山記念会館と旧ハンター住宅の見学会、大徳寺の茶室見学会、完成した薬師寺金堂の見学会、サントリー山崎ディスティラリーを見る	新しい建築写真展示窓	若手建築家に聞く(1)(2)、瓦の製造と古代瓦の見学、建築家のための「みどり」学習会(3)(4)、レクリエーション施設を考える(1)ー海とリクレーションー、ビル防災のゼミナールー防災計画に対するプロフェッションを問うー、解体修理中の古建築を見る(4)ー国宝東福寺三門その他

事業委員会

年　度	委員長	主な活動		
		見学会小委員会	広報小委員会	若い会員の集い小委員会
1976	窪田　祐	堺・南宗寺の茶室を見る、阪急グランドビル見学会、岡山・倉敷の新建築を見る、大阪駅前第２ビルの見学会、着々と進む南港開発を見る、南海難波駅建設工事の見学会、清酒「大関」本社工場の見学	「高層建物周辺の風の性状」講演会、「鉄筋コンクリート構造物の耐震安全性」講習会	建築と音楽ー形と音と空間とーヤニス・クセナキス講演＋演奏会、ディスカバー大阪(1)なにわのかくれた散歩道を歩く、歴史的環境保全を考える、ウォーターフロントー世界の都市と住まいを水際から見るー、高野山サマーセミナー「新しい学校風景」、「建築材料を見る」(1)ーステンドグラスー、ビル用水の再生プラントを見るー都市と水ー
1977	窪田　祐	日本経済新聞大阪本社見学会、国立循環器病センター見学会、国立民族学博物館見学会、茶室「京都・西翁院の淀看席」の見学、鴻池新田会所を見る	日影規制に関する講習会、ASTM研修会（１）	ディスカバー大阪(2)ー神戸北野町を行く、ディスカバー大阪(3)ー北浜・船場界隈の町家を見る、ー音響アコースティックデザイン、大阪芸能センター、丹波路を行くー栗拾いと城下町篠山散策、「伝統工芸を見る」神仏具・錺金物ー魔鏡ー、外空間作家・深谷光軌氏に聞く、建築材料を見る(1)ー木質材料とインテリアー
1978	三品　哲夫	外壁保存工事の京都中京郵便局の完成を見る、武者小路千家の茶室を訪ねて、大阪府立労働センター見学会、大阪駅前第３ビル見学会、ホテル「ホリディイン南海大阪」を見る	日影規制に関する講習会 1978年宮城県沖地震災害についての報告会 実務家のための日影研修会	建築家のための「みどり」学習会(6)、都市住宅を考えるー今何故タウンハウスかー、対談：建築を切るー渡辺豊和＋植田　実ー、ディスカバー大阪(4)、都市住宅を考えるー都市計画と住宅設計の接点ー、堺の伝統を訪ねて、玄から彩へー墨いろの世界ー、パネルディスカッション「歴史的環境と建築設計」
1979	三品　哲夫	大阪上六市街地再開発の経過と現状を聞く、宗教都市天理を訪ねる、薬師寺西塔再建工事を見る、京の詩仙堂と芭蕉庵を訪ねる、神戸女学院・タルカット記念館ほか見学	建築計画と新耐震設計法についての研修会	建築家のための「みどり」学習会(7)、都市住宅を考えるーコーポラティブハウスの問題点と展望ー、備前路を訪ねてー耐火レンガ・備前タイルの工場・閑谷学校・備前焼窯元ー、新春キャンパスを訪ねてー大阪芸術大学の建築、ディスカバー大阪(5)ー川面からみた大阪のまち・橋、旧下村邸を訪ねて、都市住宅を考える(4)ー古都タウンハウスを見る、新春放談「建築を語る」ー80年代に向けてー
1980	三品　哲夫	播磨・中国路を訪ねて、大阪駅前第４ビルの見学会、やまと・三輪の里を訪ねる、宝塚市庁舎見学会、ナビオ阪急の見学、表千家の名席を見る	建築設計と省エネルギーに関する研修会	建築家のための「みどり」学習会(8)、鉄の工芸ーロート・アイアンの世界、都市住宅を考えるー遠藤剛生、リクレーション施設を考える(3)ーグリーンピア三木を訪ねてー、大阪の教会建築を訪ねて、講演ー二川幸夫・世界の現代建築を語る

年　度	委員長	主　な　活　動		
		見学会小委員会	広報小委員会	若い会員の集い小委員会
1981	三品　哲夫	和歌山の新建築見学会、解体修理中の重文南禅寺三門の見学と金地院の茶室を訪ねる、大阪市庁舎（第1期工事）見学会、日生病院見学会	建築への太陽熱利用に関する研修会	ディスカバー大阪(6)ー大阪の新しいまち・南港ポートタウンー、建築家のための「みどり」学習会(9)、クラシック家具の世界
1982	三品　哲夫	新緑に近江・若狭を訪ねる、ザ・シンフォニーホールの見学会、西本願寺の名建築と茶室の見学、大阪ターミナルビル見学会、ホテル日航大阪見学会	マイクロコンピュータの建築への利用研修会	商業空間とデザインー岡山伸也の世界、大阪芸術大学芸術情報センターを訪ねて、日本の感性がいまー出江寛の作法ー逆瀬台の家、歴史環境を残す都市ー奈良・今井町を訪ねるー、晩秋の香川に「石」を見る、都市住宅を考える(7)ー大阪の都市住宅像を訪ねるー
1983	三品　哲夫	電通大阪ビル見学会、宗教都市天理を訪ねる、大阪城国際文化スポーツホールを見る、国立文楽劇場の見学会、晩秋に美濃・尾張を訪ねる	集合分譲住宅における品質保証に関する研修会	京の伝統工芸（錺金具）を見る・二条城と森本錺金製作所、藤井寺の小泉家を訪ねる、住みたくなる街づくりー西ドイツにおける街づくりのスライドとともにー、奈良県山添村を訪ねるー明治の名建築・春日小学校ほか、家具を斬るーデザイナー・垂見健三
1984	三品　哲夫	全日空ホテル見学会、大和路に新建築と建材工場を訪ねる、大阪市庁舎（第2期）見学会、出雲路の茶室見学、竹中大工道具館の見学、ツイン21		オーク・ヴィレッジの人びとを囲んでー飛騨、高山の工芸集団・その夢とロマンー、神戸ポートアイランドを見る(2)ーポートピア81ー、吉田保夫の世界「大阪展」、「住まいにおける空気」、建築家のための「みどり」学習会(11)ー滋賀の秋ー
1985	三品　哲夫	インテックス大阪を見る、都ホテル大阪見学会、守口駅前市街地再開発事業の見学、茶室黄梅庵と伸庵の見学、加古川総合文化センター見学会、大阪市庁舎（第2期）見学会		オーク・ヴィレッジの人びとを囲んで(2)、目神山の家々とカトリック大阪教区を訪ねて、「照明と造形」展ー岡幸男の世界ー、都市住宅を考える(10)ー「芦屋文化村」ー、家具シリーズ(3)ーニューインテリア時代の家具ー
1986	西村　良平	大阪阿倍野再開発事業を見る、奈良の茶室八窓庵を訪ねる、大阪府立体育会館見学会、ベル・パークシティの見学、梅田センタービルの見学	香港上海銀行本社ビル16ミリとスライド映写会、桂離宮ー昭和の大修理ー講演と映画会（16ミリ）	キャンパスを訪ねるー浪速短期大学の伊丹キャンパスを見る、建築家のための「みどり」学習会(12)ー日本の森林を学ぶー、展覧会ー建築家池上俊郎の5年間の仕事ー、講演会ー建築家・東孝光・都市住居の空間論を語るー
1987	西村　良平	陽明文庫「虎山荘」を訪ねる、播州備前路を訪ねて、マイドームおおさか見学会、大阪国際交流センター見学会、大徳寺の茶室を訪ねる会	シンポジウム「建築CAD」、ブラジルの建築家を囲んでー風土と建築（堀哲朗）	展覧会・出江寛建築展ー伝統美とポストモダン、同講演会
1988	西村　良平	大徳寺の茶室を訪ねる会、讀賣テレビ新社屋の見学、琵琶湖湖畔に歴史とロマンを訪ねて、OBPキャッスルタワー見学	「今、なぜ200Vなのか」講演会、クボタ（オール電化）ハウス見学会、話題建築を聞く	「建築工芸と空間」展（展覧会・講演会／作野旦平）

事業委員会

年度	委員長	主な活動		
		見学会小委員会	広報小委員会	若い会員の集い小委員会
1989	西村　良平	ホテルオークラ神戸見学会、関西国際空港建設工事見学会、神戸市新庁舎見学会、大阪市立科学館見学会、ライカ本社見学	これからのガラスーハイテクからローテクまで、「話題建築を聞く」ーアップリカビルー丹下憲孝・中川巌、芦屋の個性・小林恒、鰻谷チルドレンミュージアムー若林広幸	「音楽と建築」ーバロックをあなたにー渡部貞清、「北村陸夫建築展」カレイドスコープの世界
1990	西村　良平	東京話題建築見学会、天保山ハーバービレッジ講演と見学、クリスタルタワー見学会、大阪東京海上ビルディング見学会	「話題建築を聞く」ークリスタルタワー／本多友常、大阪東京海上火災ビルディング／押野見邦英	原広司講演会「都市の発想」ー新梅田シティ開発計画の出発点 海外建築視察旅行ーイスラムの建築を訪ねて
1991	西村　良平	RESORT ISLAND 淡路島見学会、大和銀行本店ビル見学会、九州話題建築見学会、知恩院三門大修理見学会	講演会「神戸ハーバーランドー新都心の事業計画と街づくりー」 「話題建築を聞く」ー芦屋市立美術博物館ー太田隆信ほか、カルチェ・ダムール／間野　博・小島　孜	シーラカンス作品展、坂本龍馬記念館の設計をめぐってー高橋晶子講演会ー
1992	多井　幸男	梅田スカイビル見学会、神戸ハーバーランド見学会、宝塚大劇場（Ⅱ期）見学会、ORC 200	「話題建築を聞く」ーホテル川久ー永田祐三ほか、風の万華鏡／新宮　晋、ビデオ映写会	構造設計者が語る「P＆G 本社ビル」、妹島和世講演会
1993	多井　幸男	けいはんなプラザ・住友ホール、曼珠院の書院と茶室、大阪府立近つ飛鳥博物館、アジア太平洋トレードセンター、常滑と志摩・早春の伊勢湾を巡る見学と懇親の集い	「話題建築を聞く」ー鎌谷憲彦ほか	講演「建築を学ぶことができるか」ー竹山聖、「光で生きる建築空間」ー岡幸男 30' sEYE①浜田有司、②三澤文子、③澤井健、④木下直之、⑤岸和郎、コンピュータグラフィックの可能性ー遠藤明彦ほか 海外視察旅行ー香港
1994	多井　幸男	仁和寺の茶室、京都ホテル、サントリーミュージアム天保山、近代建築見学会、銀閣寺の東求堂	グリーンセミナー「大阪市における民有地緑化推進と助成」 「話題建築を開く」ー渡辺光弘・平野忠人ほか	30' sEYE⑥堤展子、⑦花田佳明、⑧大谷弘明、⑨長坂大、⑩井上章一、⑪中川理
1995	多井　幸男	大徳寺の茶室、WTC 大阪ワールドトレードセンター、京都コンサートホール、大阪ドーム	阪神・淡路大震災における建築外装材の検証 「話題建築を聞く」ー渡辺豊和ほか、スライドレクチャー①～⑥／杉本真一	30' sEYE⑫辻正昭、⑬辻本智子、⑭橋爪紳也、⑮松政貞治、⑯井野瀬久美恵、⑰宮本佳明 講演「建築の生命」ー柳沢孝彦
1996	多井　幸男	大阪府立門真スポーツセンター、茶室・西翁院の淀看席、りんくうゲートタワービル、大阪松竹座見学会、近代建築見学会・旧古河邸と法務省	プランナーのための免震構法の基本／井上　豊 スライドレクチャ⑦～⑩／杉本真一	30' sEYE⑱堀木エリ子、⑲平山洋介、⑳山内靖朗、㉑松本正・梅林克、㉒橋本純 建築家に何ができるかー阪神大震災・被災地の現場から考える／布野修司、野崎隆一、林まゆみ
1997	多井　幸男	神戸ファッションプラザ、平城宮跡「朱雀門」、フェスティバルゲート、ハービス OSAKA、京都駅ビル、茶室「大徳寺・玉林院」、大阪倶楽部・中央電気倶楽部、扇町キッズパーク、市立泉佐野病院、市立豊中病院、日銀大阪支店 中国支部との合同見学会・広島美術館他、茶室「天然図画亭」、滋賀県立美術館・びわ湖ホール	講演会「オーガニックビルディング」 「話題建築を聞く」ー大阪ドーム／寺本敏則、ハービス OSAKA／苫名正	30' sEYE㉓吉本剛、㉔松井紫朗、㉕吉井歳晴、㉖山盛英司、㉗細田みぎわ 建築家に何ができるかー阪神大震災・被災地の現場から考える／森崎輝行、村上裕道、灘の酒蔵のまちを復興させる会

●教育委員会

建築教育の調査・研究、講座、並びに建築工事実務講習会、工高生デザインコンクール（別掲）などを企画・実施する。

教育委員会

年度	委員長	委員会回数	幹事会小委員会
1954	鷲尾健三	5	5
1955	鷲尾健三	6	14
1956	竹内成夫	8	7
1957	竹内成夫	7	22
1958	奥島正一	3	17
1959	奥島正一	3	34
1960	中原茂	4	20
1961	中原茂	6	20
1962	中原茂	2	7
1963	橋本忠保	3	5
1964	橋本忠保	5	12
1965	岩下久哉	3	9
1966	岩下久哉	1	2
1967	橋本忠保	4	12
1968	橋本忠保	2	6
1969	橋本忠保	3	8
1970	橋本忠保	2	8
1971	谷口尚武	4	18
1972	谷口尚武	3	22
1973	谷口尚武	2	7
1974	谷口尚武	2	9
1975	岡田光正	2	8
1976	岡田光正	3	8
1977	岡田光正	2	8
1978	岡田光正	2	13
1979	多胡進	2	11
1980	多胡進	2	10
1981	多胡進	2	9
1982	多胡進	3	9
1983	多胡進	2	4
1984	多胡進	2	8
1985	片倉健雄	2	—
1986	片倉健雄	2	10
1987	片倉健雄	2	5
1988	片倉健雄	2	11
1989	片倉健雄	2	11
1990	片倉健雄	2	11
1991	片倉健雄	2	14
1992	片倉健雄	2	14
1993	片倉健雄	2	12
1994	片倉健雄	2	7
1995	片倉健雄	2	6
1996	片倉健雄	1	5

教化委員会（現・教育委員会）

年度	委員長	内容
1923	—	臨時理事会において教化委員会の設置の件議決
1924	古宇田實	・講習会計画の件 ・建築職工教化事業の件 ・建築職工、幼年職工の教化法の件 ・講演事業に関する件 ・建築職工教化事業につき協議 ・鉄筋コンクリート職工教化実施
1925	古宇田實	・大阪市、建築業協会、本協会三者連合教化講習会の開催協議
1926	古宇田實	・大阪市より申し越しの三者講習会の原案（鉄筋コンクリート工事に関する諸問題）を可決
1927	古宇田實	※本委員会を2分科会に分割 ・高等女学校校長会を開催し、建築の普及につき意見交換 ・建築学会講習会の件協議 ・建築史料に関する調査事項決定の件 ・見学会ー泉南郡熊取村の中辰三助邸（目的は室町時代の遺物調査）
1928	古宇田實	・中辰三助邸見学報告書作成 ・大念仏寺の消失本堂写真複製の件 ・見学会ー南河内郡高鷲村北島泉、吉村彦次邸 ・青年技術者に対する講習会開催の件
1929	武田五一	・講習会（春季：青年技術者、秋季：職工）の件 ・見学会（東洋リノリューム伊丹工場など）の件
1930	武田五一	・見学会の件（住友製鋼所、日本ペイント、桃山病院現場、中央市場、甲子園ホテル、大阪窯業） ・春季講習会（近代建築様式概論、建築法規について、強度計算について） ・職工講習会（秋季）（鉄筋混凝土施工法、建築付帯設備）
1931	小笠原鈞	・春季講習会の件
1932	安井武雄	・春季移動講習会（京都、神戸） ・見学会（古建築実地調査見学会）
1933	古宇田實	・京阪神各女学校の家事科中、建築に関する教材教授の件 ・建築相談所の設置の件常務会に上程

年度	委　員　長	内　　容
1934	古宇田　實	・女学校の家事教材中「住居」に関する問題座談会開催 ・田原照氏所有の古文書鑑定に関する件 ・全国工業学校の各教科目の時間調査の件
1935	古宇田　實	・建築通俗講演会開催 ・本年度事業計画の件 ・各町村長の学校計画に関し相談指導する件 ・各校建築科卒業計画 ・設計募集図の展覧会開催の件 ・住宅設計図（各校建築科から募集）を各女学校家庭科の巡回展覧会開催の件 ・小学校建築相談所の規定起案の件 ・実業教育進行に関する意見開陳答申書取りまとめ草案決定の件
1936	永沢　毅一	・電気溶接講座開設
1937	永沢　毅一	・年度研究事項決定 ・郷土古建築の研究調査（大原八瀬の住宅・兵庫県庁） ・工業学校の教授内容を検討し改善案を考研 ・建築教育座談会開催 ・大工徒弟の教育及び資格につき調査研究の件
1938	永沢　毅一	・メートル法一元制実施に関する協会案立案 ・大工徒弟養成に関する件 ・大工資格検定試験制度に関する協議 ・大工徒弟資格試験制度成立方上申の件 ・高校制度研究
1939	永沢　毅一	・建築教育者に関する具体的研究 ・社会教化
1940	堀口　甚吉	・天王寺五重の塔に関する講演会の件 ・建築製図に関する研究

※1954年度以降は、「委員会活動」編の教育委員会において整理。

●出版委員会

1951年７月20日正午、朝日ビルで出版委員会が開催された。同年９月の「建築と社会」「会務」欄によれば、「奥山委員外６名出版委員長に小林清氏を互選事業企画意見交換法規のインデックス作成を議す」（原文）とある。

同号以前の「会務」欄には「出版委員会」の記載がなく*、この会合が同委員会としての最初の会議ではないかと推測される。ちなみに、翌10月号の「会務」欄（８月分）には、「７日２時於朝日小林委員長外５名出、法規索引原稿につき西島委員作成原案検討出版に関する詳細協議」（原文）と記載されている。

＊　1949年２月の「建築と社会」「會務報告」欄に「出版委員會」名の記載があるが、これは「建築と社会」出版のための委員會であり、また、戦後の再刊号（1947年１月号）以降に散見される「出版幹事會」名も同様のものである。

出版委員会発足当時のメンバーは次のとおりである。委員長に小林清、委員には井戸田重太郎・岩本博行・奥山清治郎・加藤宜彦・亀井貴一・木村精一・小西岬・斎藤暢・谷口尚武・西島勇・渡辺禎巳が就任している。また、当時の出版物は、“主として青年技術者を対象とした実際に直ぐに役立つ簡易要諦のパンフレット”として企画され、主なものとして『基準法規特殊建築物パンフレット』『プラスチックとビニロンパンフレット』『アスファルト防水工事とセメント防水工事』などが出版されている。

◆〈転換期〉その１

出版委員会の過去の経緯の中で、もし〈転換期〉があるとすれば、1964年度に設定された「専門部会」の設置による委員会運営をそのひとつに挙げることができる。

田中良太郎委員長のもと、四つの「部会」が設置された。「構造」部会・「意匠計画」部会・「設備原論」部会・「施工」部会である。それぞれの部会には部会長と幹事を配し、部会単位に編集委員会が設けられ、専門書の企画が行われていったのである。これにより、“有益で廉価な図書”が相次いで出版され、建築各界に好評を博したのである。

主な図書として、『建築技術者のための　電気設備』（1966年１月刊、編集委員長・羽馬栄夫）、『建築技術者のための建築の知識』（1969年７月刊、編集委員長・伊藤克三）、『鉄骨のデザイン　実例と考え方』（1970年４月刊、編集委員長・鷲尾健三）、『建築基礎工法と実例』（1972年１月刊、編集委員長・山肩邦男）などがあるが、残念ながら、いずれも絶版となって久しい。

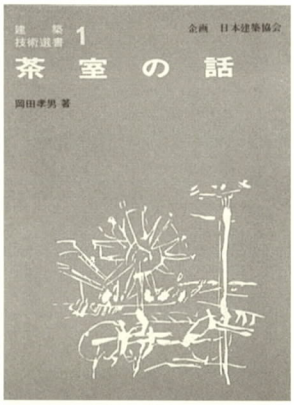
◆〈転換期〉その２

1971年11月９日、前年度から再び出版委員長に就任した小林清委員長を座長とし、伊藤克三・池田有隣・宮川達郎の３幹事及び６委員出席のもと、「図書の委託出版について」協議された。「委託出版」についてはこのあとも回を重ねて協議されるが、委託の趣旨については小林委員長に次のような言葉が残されている。

「…（中略）…会員なかんずく初級技術者のために有益なる図書の刊行、さらに一般人のため、建築知識の普及を目的とした図書を企画し、建築を通じて社会に貢献したいと念願



1972年発刊の『建築基礎工法と実例』



建築技術選書シリーズのスタート

している」(「建築と社会」1972年1月号)。

図書の発行を「自前」から専門の「出版社」へ委託したわけであるが、当然、図書の流通販路は飛躍的な変化を遂げることとなる。そして、このことにより、「企画」の中にもより一層の「市場性」が求められる結果ともなるのである。

出版委員会の活動の中に第2の〈転換期〉があるとすれば、この「出版事業の委託化」を契機とした委員会の運営を挙げることができるかもしれない。

1978年7月、建築技術選書の第1巻『茶室の話』(岡田孝男著) 刊行。企画：日本建築協会、発行：学芸出版社

「建築技術選書」は協会創立60周年記念出版として企画されたシリーズであり、企画の主体は出版委員会が担当した。以後、同書の姉妹編として企画された<プロのノウハウ>シリーズと創立70周年記念事業として企画された「選書特装版」を含め、既刊70数冊（1996年度現在）を数える一大企画となる。

◆出版委員会の現在

委託出版の実現に尽力し、「建築技術選書」のシリーズ化を定着させた小林清委員長、<プロのノウハウ>シリーズ、「選書特装版」の刊行に際し自らも健筆をふるった須賀好富委員長、この両委員長が果たした功績ははかりしれない。委員長在任期間はともに10年を越え、別表に示すとおり多数の図書の出版に携わったのである。

現在の委員会は両委員長が残された足跡を継承し、山田修委員長のもと委員21名を擁し、新たな活動が展開されている。わけても、協会創立80周年記念出版として企画された『建築を志す人びとへ』は出版委員自らが執筆者となったユニークな本で、若い読者層に好評を博した企画であった。

出版委員会では図書の企画とともに、著書を講師とした「講座」も実施されている。1996年度現在、延べ16回開催され、読者と著者の交流という独特の企画として定着している。

出版委員会

年度	委員長	委員会回数	幹事会小委員会
1951	小林　清	—	—
1952	谷口　尚武	—	—
1953	谷口　尚武	—	—
1954	谷口　尚武	4	1
1955	奥島　正一	5	4
1956	奥島　正一	2	6
1957	奥島　正一	2	3
1958	高橋　慶夫	5	1
1959	高橋　慶夫	3	5
1960	高橋　慶夫	1	14
1961	高橋　慶夫	—	4
1962	高橋　慶夫	2	8
1963	田中良太郎	3	20
1964	田中良太郎	8	20
1965	田中良太郎	5	51
1966	田中良太郎	5	31
1967	石崎　潑雄	2	8
1968	石崎　潑雄	1	22
1969	石崎　潑雄	2	13
1970	小林　清	1	9
1971	小林　清	2	29
1972	小林　清	1	1
1973	小林　清	1	1
1974	小林　清	1	—
1975	小林　清	2	4
1976	小林　清	4	5
1977	小林　清	3	9
1978	小林　清	3	13
1979	小林　清	3	5
1980	小林　清	3	3
1981	小林　清	7	1
1982	小林　清	4	3
1983	小林　清	6	2
1984	須賀　好富	9	8
1985	須賀　好富	9	6
1986	須賀　好富	10	—
1987	須賀　好富	9	3
1988	須賀　好富	11	—
1989	須賀　好富	10	—
1990	須賀　好富	10	—
1991	須賀　好富	10	—
1992	須賀　好富	10	—
1993	須賀　好富	11	20
1994	須賀　好富	11	—
1995	山田　修	11	—
1996	山田　修	11	3

●建材委員会

建材委員会の歴史は、1921年初代会長片岡安が自ら委員長となって設置された「材料委員会」に始まり、1944年戦局の悪化ともに一時中止の止むなきに至ったが、戦後1947年建材部会として復活、折しも諸種の新建材が誕生して関係者がその選択に迷った時期でもあったため、1949年10月より特に建材審査委員会を設けて、優秀な材料に対しては、申請により優良証明書を発行し、それを推奨するとともに、いかがわしい材料の排除や改善に当たってきた。

このように活発な活動は、1959年11月に建材委員会に改組した後も優良認定書を発行して通算11年間続き、その間に申請を受けたもの92件、優良証明並びに優良認定書を発行したものは、そのうち61件であった。

1962年、世の中も安定し、建材についても混乱期を終えたので、委員会も再び新しい方向に向かって転進することになり、建材メーカーに対してコンサルタント的な仕事をするとともに、建築技術者の建材への正しい知識を深める活動を行っているが、リサイクル問題も含めて、環境の視点より建築材料を見直す動きも始めている。

材料委員会

年度	委員長	主　な　活　動
1921	片岡　安	
1923	片岡　安	建築材料連合調査会より送付の木材規格統一案につき、案中一部改定し提出
1927	松室　重光	石材規格案に関する件、コンクリート骨材、砂利の規格統一を計る件、セメントの規格制定の件、関東地方産出石材及び関西地方石材の統一規格制定について、防水材料は規格試験に合格せし物を市場に販売を許すよう取締法規設定の件、メートルネヂ及びウイットウオースネヂの６角ボルト規格統一の件
1928	松室　重光	実際現場に用いるコンクリート試験方法研究、現場におけるコンクリートの分解、現場コンクリートブロック作製試験成績報告、工業試験所にて「セメントモルタル」強度調査、南洋材「ラワン」虫害、白色ペイント規格調査の件及びその他塗料に関し施工順序及び調合割合表作成、塗装標準規格、木材・鉄材・壁地につき１・２・３等級の工事に分け手間材料の標準単価調査、日米板硝子に関する各般の事項調査、旭硝子及び島田硝子につき製品の規格調査、衛生陶器類・洗面器について名古屋陶器の型録の調査・研究
1929	松室　重光	「ポルトランドセメント」及び「高炉セメント」規格改正の件、某現場コンクリート試験体作製の件、鉄筋コンクリート梁における鉄筋の応滑力試験方法研究、洋瓦・スレート及び洋石について、防火布の規格につき調査の件、内地産出市場品規格を調査、外壁セメントコーデレグの手間及び材料、坪当たり表作成、鋼製戸障子の資料蒐集研究の件、「スティールサッシュ」「ドアー」について、手洗器の規格につき研究結果サイズ大・中・小３種と決定、唖吐等の寸法その他について、居室・家具寸法及び図面調査整理の件
1932	松室　重光	メートル法・度量衡実行に関する件、量について、畳工作法及び標準品質につき奈良朝・平安・鎌倉・足利・元禄・徳川・明治時代の改革にわたり業者林氏より詳細説明、衛生陶器の各寸法
1933	須川廉太郎	スティールサッシュ規格案及びこれに伴う硝子の大きさ等について、大阪模様塗工業所の実験
1934	池田　宮彦	木材市場寸法調査の件、セロテックス代用品コルゲットテッドボードの研究、屋根瓦に関し座談会開催の件
1935	高橋　栄治	アスファルト防水施工に関する研究会の件、小倉石油・大道技師より「アスファルト」製造につき講話あり、アスファルト防水工事仕様書につき研究
1936	高橋　栄治	木材市場寸法規格案の実施促進建議の件、小田化学・小田正夫氏より防水剤について説明あり、セメント防水剤試験に関する具体案を協議、床板規格につき研究
1937	高橋　栄治	プラスターにつき研究、近時の建材暴騰に関して鉄材に対しその原因・対策につき調査研究、鉄材研究に関し製造業者側の意見を聴取、床板規格案の件報告案作成、建材暴騰に関する対策研究報告書作成着手
1938	高橋　栄治	銅使用制限につき当局に建議の件、銅使用制限規則に関する件、銅及び銅合金の代用金属に関する件、木材規格統一の件、木材寸法規格実行促進の件、建材代用品考案奨励の件、石綿スレート規格案の件、建築材料の代用品発明考案展覧会開催の件
1939	松久保敬三	日本瓦について、スレート工場見学の件
1940	松久保敬三	木材規格研究資料調査の件、辻製材協会理事長より用材生産統制規則につき意見開陳、品等規格につき協議決定、農林省木材規格を土台として検討の上単純化す、西島実業学校新築工事現場の釘打組立梁荷重試験を見学、木材市場品寸法規格決定につき会議発表の件
1941	松久保敬三	用材品等規格について、建具材規格につき農林省案を検討、挽角について、木材品等規格中板類につき研究、建築学会案木材寸法、木材寸法並びに品質等規格の再検討をなし修正の上建議案作成
1942	楠瀬　徹	基礎の問題、木材数量表の件、基礎、木材工事につき資料・数量について、屋根・蒐工事の資料蒐集検討
1943	楠瀬　徹	木材の寸法並びに品質等規格検討、木材寸法規格改正案の件

◀建材部会

1947年1月号の「建築と社会」において、2月6日開催の第2回常務会議事として、次のような記録が見られる。

議題　8．部会設置に関する件

今般下記の通り部会を設置することとなった。部会は全会員が各関係の部会を通じて本会に対し自由に希望や意見を開陳する機関であると共に、これによって縦の連絡を密にし本会事業の……（略）……建築材料一般を「建材部会」等五部門を設け各部門に於いてそれぞれの立場から調査、研究、立案等の事項を取り扱うこととする。

◇建材部會

欅田藤郎、志垣正次、野澤幸三郎、青木友一、大西幸七、奥村重兵衞、河津喜之助、桑田正一、平田武二、増田熊一、村井　毅、山本　潔、井場　績

建材部会

年度	幹事長	主　な　活　動
1947	青木　友一	・木材寸法及び規格等案作成の件
1948	青木　友一	・木材品等規格の既成案と農林省案を再検討
1949	青木　友一	・セメント瓦および厚型スレートについて ・技術、綜合、建材の三部会会合、座談会開催を協議 ・資材に関し業者と意見交換
1950	青木　友一	・事業計画、建材要覧発行の可否等協議 ・技術、綜合、建材の三部連合協議会開催 ・産業合理化につき通産省伊藤課長と協議し、関西大会開催を申し合わせ ・建材部大会を開催
1951	青木　友一	・技術部会と最近の資材の動向、価格需給等につき懇談 ・建材部大会を開催、関西建材会の結成を申し合わせ ・資材に関し業者と意見交換、関西建材会の会章図案公募
1952	青木　友一	・カタログ発行協会と協議

◀建材審査委員会

建材審査委員会設置の件

「建材の審査については本会多年懸案中のものでありましたが、今般之を実施する事とし、下記規程に基づき新設の建材審査委員会が実行に着手することになりました。復興途上に於ける建材並びに斯界の向上発達のため大方の御支援を得たいと存じます。」（以下略）

建材審査委員会規定

1．本委員会は一般建築資材の調査、研究、試験等をなし審査の結果良否を認定し以て斯界の向上発達を図ることを目的とする。
2．本審査を受けようとする者は一件毎に所定の申込書に別に定める審査会費を添え現品其の他本会が指定する資料を提出する。
3．審査の方法は依頼者より説明を聴取し調査、研究又は必要に応じた試験分析等をする。
4．本委員会の意見は全委員3分の2以上を以て決する。
5．審査の結果、優良品に対しては一件毎に別に定める調査費用を申し受け優良証明書を発行する。其の他のものに対しては意見を附けて申込者に通知する。
6．優良証明書を発行した場合は建築と社会に掲載する外、諸官庁、設計関係者に周知につとめ尚適当の方法で宣伝する。
7．優良証明書に対する責任は審査委員会に提出された現品について負うものである。
8．優良証明書は発行日より一ケ年有効とする。
9．本証明書を不正に利用された実状判明した時は直ちに取消の通知を発すると共に一般に公表する。
10．既納の会費其の他は如何なる場合でも返戻しない。
11．本規定の改廃は理事会で定める。
12．本規定は二十四年十月一日より実施する。

◇建材審査委員会委員　1953年度

委員長／置塩　　章

岡田　孝男、　小松　文明、　竹内　成夫、　西村　　勝、
井手　正雄、　奥島　正一、　加島信之輔、　桐本　楠雅、
神田　省三、　早良　俊夫、　島村佐次郎、　田村　正夫、
高山　　馨、　竹内　　孝、　竹腰　健造、　中野順次郎、
称屋　毅一、　古塚　正治、　眞口　愃夫、　增井　敏克、
水野喜一郎、　村野　藤吾、　元吉勇太郎、　山内　正一

建材審査委員会（1959年10月まで）

年度	委員長	主　な　活　動
1953	置塩　章	（建材審査）デコラ、キルコート、東洋波形スレート、日本スタッコ、門田式ボルトナット、ホモゲンホルツ、タイネン２号、ナニワＳ瓦、三星印石綿ルーフィング、アスファルトタイル、ニュースタンダードメタル、タクミ瓦、佐渡島金属タイル板、スレート（浅野網代板）（浅野大波板）（浅野小波板）
1954	置塩　章	（建材審査）ビフロ、サンウオール、積水ポリエステル板、エスロンパイプ、スチロールタイル、トルナード（鋲打機）、エバーソフト、久田塩ビタイプ
1955	置塩　章	（建材審査）ウォータイトＢ号、三星ビニリューム、ダイヤウォルペーパー、三星印石ギルソイドルーフィング
1956	置塩　章	（建材審査）ウォータイトＢ号、サーペーン複層硝子、ビニローゼNo 410、スロール
1957	置塩　章	（建材審査）スプレッドサテン、床張シートトヨサン、ヒッターライト
1958	置塩　章	（建材審査）スプレッドサテン、焼成ヒルコン、ゴーレックスEC、アサヒラス、ハッポーラス、ポロンACP
1959	置塩　章	（建材審査）ミラコート

建材委員会（1959年11月～現在）

年度	委員長	主　な　活　動
1960	置塩　章	（建材審査）ダイヤセム、ダイヤアルテックス、ダイヤローレル、ダイケンインシュレーション吸音板およびプランク
1961	竹内　成夫	アートボンド
1962	竹内　成夫 岡本　弘	衛生陶器 建築金物
1963	岡本　弘	鋼製足場
1964	岡本　弘	２階建プレハブ住宅
1965	政岡　基次	コーキング材、プラスチックを主とした床材、新建材および工場見学
1966	政岡　基次	化学防水、防露対策、見学会
1967	堀内　三郎	燃焼による有毒ガスと煙、防露対策のまとめ、軽量気泡コンクリート版、ALCの検討
1968	堀内　三郎	ALC版の検討、ALC工場見学、軽量骨材、軽量コンクリートの特性、日本セメントほか見学、外国における軽量骨材事情、人工軽量骨材、被覆鋼板「シリカチール」、バンクロス（難燃性パイプ外装材）、日照り割れ・熱割れ対策
1969	堀内　三郎	旭硝子・日本板硝子工場見学、硝子検討会、ガラスおよびガラスブロックのまとめ、接着剤、エマルジョン、シーリング材、ガスケット
1970	堀内　三郎	ガスケットの説明、耐火被覆材、「フジコート」吹付塗装材、耐火試験の見学、接着剤の検討、エマルジョン、シーリング材
1971	堀内　三郎	建材の検討、集成材のまとめ、難燃合板の耐久性、千代田建材工業㈱工場見学、軽量金属下地「ロンドロック」、繊維壁、混式建材
1972	堀内　三郎	繊維壁材、湿式建材のまとめ、カーペット、東洋リノリューム工場見学、防炎性センイの紹介、防炎性センイ、各種浴槽、ガス諸器具の見学、セントラルヒーティング
1973	山田　幸一	型枠材の検討、結露防止塗料の検討、打ち込みタイル検討会、建築吹付材ガイドブックの内容
1974	山田　幸一	断熱・吸音・遮音、コンクリート・岩盤破砕器、火薬・爆薬・火工品、コンクリート破砕器、ブラジルの建築事情、中国の建築事情
1975	山田　幸一	膨張セメント、「ラス」検討会、無音・無振動杭、アースアンカー
1976	山田　幸一	FRC、プラヒート、建築吹付材と「セラミタイト」、セルフレベリング性石膏系床下地材
1977	山田　幸一	防錆混和剤、ポリカーボネイトガラス、ファスニング機器、中国の建築事情、給湯器、モルタル接着増強剤、フロアヒーティングサンサニー、アルミニウム合金製プール、石綿炭酸カルシウム発泡板
1978	山田　幸一	アクリトーン、ユニットフロアL、木繊セメント板、ドアーチェック、無機質吹付材、モルタル下地合板、電線・ケーブル貫通孔充填材、FRC複合板、ソノボードＳ

建材委員会

年度	委員長	主　な　活　動
1979	山田　幸一	SLパネルについて、「アービフレックス」、厚ものの石膏板、ステンレスについて、サンペルカ、内装材「バンバン」、タクマの土壌硬化剤、ソーラーコレクター、コンクリートの高流動化剤、シーリング材
1980	牧田　顕治	エラスコーク・シーラント70（シーリング材）、防水石膏ボードの材料、アキレスホームボード、耐震スティールドア、モルタル100番、タイトレックスP
1981	牧田　顕治	耐候性鋼板 CR_2 による特殊屋根工法、ライオンプラスター、モルキープ、スエプコ・メンテナンス・システム、バクティニール
1982	牧田　顕治	ラムダ、ハイウォール、ダイヤフォーム、エースコン、東邦スカイモル、小野田リフリート工法、ボーマナイトプロセス、コンプラスト、ゴーエススラリー、SL—12工法・SLフネンパネル工法
1983	牧田　顕治	天然木化粧シート、セメンシャス#2000・セメンシャス#2500、マーカススライディングドア、セブンウォールの説明と工場見学、東伸パーキングシステム、サータイト、ザクロン
1984	牧田　顕治	アキレスボルネ、サンディウォール（弾性吹付材）、サーマックス、バッテリーシャッター・イースターカーテン、ハイキエース、「核シェルター・サバイバルルーム」、ラグストーン、P&Pステンレス防水工法、ライフロン
1985	牧田　顕治	ドアコン（自動閉鎖装置）、変成シリコーン、ルームラック、レミファルトT、プレコ・リターダー、アクアシール、アルウィトラ
1986	牧田　顕治	ハマキャスト、エスレベル、セブンCRシステム、熱線反射ガラス、シーストン、ナルファルトバスカル、ヘーベルグランデ、スタッコ・ベースネット工法、フィールドGRC、エースライト
1987	金井　弘次	アガトス（ファインセラミック建材）、ラムコシート、サン・ストップ、防カビ材、アーキスガーデンシステム、ステンレスノイズレスヒンジ、グレビティヒンジ・可変シリンダー錠、コルクタイル、瓦屋根防水工法、ネットワークフロア、フロールボンド、パワーシリコン
1988	金井　弘次	ハイドロサーム（劣化・吸水抑制剤）、テビロン（人工芝）、ヘーベルDR構法（ALCパネル）、ガードフロン（防蝕シート）、DRAMIX補強コンクリート無筋土間床工法、ソニック工法（ユニットバス）、ファイアライト、フレッシュマスト、ボルクレイパネル、ダンパ（システム天井）等
1989	金井　弘次	アーバンロック（舗装材）、左官モルタル用軽量骨材、ナイスタッド（間仕切）、電磁遮蔽ガラス、ロットデッキ（デッキプレート）、免震用積層ゴム、ISスプレイコート（外防水材）、デッキコーティング防水システム、アルミ鋳物と光ファイバーSシステム等
1990	金井　弘次	打放しコンクリートSEFシステム、コンクリート白華除去剤、超高圧少水量剥離・洗浄システム、大型陶板、アクリル系人工大理石、マルチプライマー（低臭塗料）、ウォールスター（大型陶板）、型枠兼用断熱パネル
1991	金井　弘次	溶融亜鉛メッキ、OM-ZP処理について、天然スレート屋根システム、湧水フォーム（湧水処理材）、アロンコートSQ（アクリルゴム塗膜防水材）、トイミエーヌパートⅡ—屋根瓦、鉄筋組込捨型枠、日本ペイント工場見学会、人工石材、カーテンウォール、セラミック外装材等
1992	和田　克朗	複合システム天井、簡易型自動消火装置、ダブルアール、HEX型立体駐車場、ベントナイト系止水材、アクソナイト&エルコ（超耐久性高分子エマルジョン）、カラートップSR（ウレタン樹脂系防水・耐久性床材）、偏光タイル
1993	和田　克朗	耐火鋼、天然極薄石材、シリカ系浸透性コンクリート強化剤、省エネ外装改修システム、内開き内倒し窓・木製（木質系）防火扉、立ち上がり防水層保護・化粧ボードシステム
1994	和田　克朗	床滑り止め加工、耐食ステンレス鋼、ドライブラスト工法、打ち込み式合成樹脂型枠
1995	和田　克朗	NWD工法、プレーナーフィッティングシステム、プラスティック製軽量型枠、RSL免震システム、樹木地下埋設型支柱
1996	和田　克朗	超抗菌・防汚・防臭タイル、一液水性反応硬化形塗料、断熱金属サンドイッチパネル、収納ユニット、ワンサイドボルト

活動を終了した常設委員会

▶建築データシート編集委員会

建築業務に携わる技術者は、建築工事の設計・積算並びに現場施工において適切な資材を選択するため、多くのカタログや資材メーカーの最新情報等を得るのに相当な時間を費やしている。このような建築界の要望に応え、本会では創立50周年記念事業として建築データシート編集委員会を設置し、取り組むこととなった。

本委員会は、官公庁をはじめ設計事務所、建設業者、設備業者および資材業者など斯界の協力を得ながら審議を重ねて「データシート」の出版を実現したが、とりわけ本データシートの総監修者を京都大学名誉教授で当時の日本建築総合試験所所長の坂靜雄博士にお願いできたことは、このデータシートに対する権威と信頼性が一層高まることとなった。

「建築データシート」は1967年３月号より「建築と社会」誌の付録として会員に無料配布され、1978年には創立60周年記念出版として、「建築データシートハンドブック」（２分冊）が刊行された。

年度	委員長	主　な　活　動
1967	中原　茂	第１回分（基礎・地業工事30シート）刊行、会員無料配布、３月号より20カ月（毎月30シート）
1968	中原　茂	299シート刊行（累計329シート）
1969	中原　茂	299シート刊行（累計494シート）
1970	中原　茂	91シート刊行（累計587シート）
1971	井上　滉	20シート刊行（累計607シート）、建築データシート「バックナンバー」有料配布１部20円、建築データシート・合本（新装帖４冊に収録、300部出版）
1972	井上　滉	69シート刊行（うち５シートは改訂）
1973	井上　滉	70シート刊行（うち35シートは改訂）
1974	井上　滉	80シート刊行（うち41シートは改訂）
1975	井上　滉	83シート刊行（うち20シートは改訂）
1976	井上　滉	18シート刊行（うち12シートは改訂）
1977	井上　滉	87シート刊行（うち28シートは改訂）
1978	井上　滉	創立60周年記念出版「建築データシートハンドブック」（２分冊1600頁）、3000部発行、定価：会員6000円、一般8000円
1979	井上　滉	記録なし。休刊につき委員会も休会

▶法制委員会

1921年６月20日の理事会において、「市街地建築に対する仮設物建物について建築物前歩道の使用許可を府庁に出願の件」を審議するため「法制委員会」を組織。1942年度以後1947年度までの詳細な記録はない。

また、戦後1947年以後の記録において具体的に法制委員会という名称は見当たらないが、規制関係の検討という事実行為の会務記録が残されていたので、ここに記載した。

年度	委員長	内　容
1921	大林賢四郎	・歩道使用に関する件
1922	大林賢四郎	・建築工事請負契約約款及び規定
1923	大林賢四郎	・建築工事請負契約案の連合調査会報告審議
1924	大林賢四郎	・研究事項不詳
1925	大林賢四郎	・研究事項不詳
1926	大林賢四郎	・研究事項不詳
1927	池田　實	・委員会規定の一部改正
1928	池田　實	・都市計画実施方法並びに計画 ・建築士法案 ・美観・風致地区指定促進研究 ・特別住居地域性の研究 ・都市計画諸問題 ・労働者災害扶助法案
1929	池田　實	・劇場取締規則取纏検討 ・労働者扶助法案作成の件 ・労働者扶助法案建議の件 ・実費精算式施行に関する連合調査委員会の件 ・美観・風致地区指定促進建議の件 ・大阪府令劇場取締規則一部改正に対する意見
1930	今林彦太郎	・六大都市病院規則研究 ・建築物の高さ最低限度に関する道路指定促進の件 ・第二次防火地区指定促進の件 ・工業地域内特別地区の指定促進の件 ・病院及び産院取締規則研究 ・労働者災害扶助法制要綱の研究 －最低扶助料の低下を要望－

年度	委員長	内　　容
1931	鳥井　　信	・土地区画整理組合公園存置の件 ・工業地域内特別地区設置の件 ・建築の合理化問題検討 ・市街地建築物法再建議 ・アパート建築取締規則制度の件 ・実地検分昇降機取締規則研究 ・定款改正検討 ・建築会館建設案研究 ・建築請負業者取締規則制定の件 ・建築代願人取締規則制定の件
1932	今林彦太郎	・全国都市問題会議提出問題検討 ・耐火構造家屋税率に関する意見書 ・都市防火建築振興奨励に関する陳情 ・建築競技執行基準草案研究 ・大阪駅前整理に関し大阪市長建議案検討
1933	津田　敏雄	・市街地建築物法令改正で建議の件 ・特別地区指定促進建議の件
1934	津田　敏雄	・建築代願人取締規則の研究 ・第4回都市問題会議提出意見 ・屋根瓦につき材料委員会と協議
1935	津田　敏雄	・鉄筋コンクリート柱に対する有効断面積の研究 ・市街地建築物法令一部改訂編纂の件
1936	池田　　實	・市街地建築物法令第6版発刊の件 ・防火地区完成促進建議案の件
1937	津田　敏雄	本年度は新企画なし
1938	玉置豊次郎	・市街地建築物法第8版発刊の件 ・学校法規教案決定の件 ・建築関係法規集録発刊の件
1939	玉置豊次郎	・中等学校における建築法規教授細則作表
1940	池田　　實	・15年度版建築法規発刊の件 ・建築関係訴訟、特許中建築関係条項で建議の件 ・新体制に関する座談会
1941	玉置豊次郎	・第11版市街地建築物法発刊の件 ・第2版建築関係法規抄纂発刊の件
1942	―	記事不詳
1943	（幹事） 影山　正明	・第13版市街地建築物法発刊の件
1944年～1947年まで記録不詳		
1948	尾崎　久助	・建築制限規則説明会
1949	稗田　　治	（請負規程改正委員会） ・4会連合工事請負規程改正案審議 ・4会連合案再検討
1950	稗田　　治	（請負規程改正委員会） ・請負規程最終案検討 ・建設省審議案と連携方法研究 （請負規程改正委員会） ・建築基準法、建築士法につき学会支部と協議 ・近畿建築法規委員会設置 ・学会支部及び建設省関係方面に提案 ・建築基準法、防火関係法規講習会
1951	中澤誠一郎	・4会連合請負規程改正最終委員会

▶法規委員会

1952年2月6日の理事会において、「建築基準法」について検討するため、中澤誠一郎氏を委員長とする「建築法規委員会」を設置することになった。委員には中西六郎、中野順次郎、稗田　治、吉田安三郎、鷲尾健三の各氏を選任している。1954年度から法規委員会と名称を改め、建築に関する法規の研究・普及並びに建議を行ってきた。

1970年代に入ると、建築学会、建築士会、建築家協会、建設業協会の委員会との交流により、活動の場を広げている。

年度	委員長	内　　容
1952	中澤誠一郎	・建築基準法再検討 ・建築士法、消防法、紡績協会陳情書の件
1953	中澤誠一郎	記録不詳
1954	鷲尾　健三	・検討すべき問題の提起（法規に関する苦情）
1955	中澤誠一郎	・都市における駐車場の問題研究
1956	中澤誠一郎	・建築手続き迅速化に対する意見 ・建築基準法に関する件
1957	恒岡　俊行	・建築基準法改正の検討
1958	恒岡　俊行	・大阪市の冷房用地下水使用防止条令案
1959	恒岡　俊行	・建築基準法改正の検討
1960	恒岡　俊行	・違反建築の是正に関する検討 ・違反建築防止運動 ・地域指定の修正に関する要望書提出 ・建設省建築研究所支所設置を要望 ・用途地域の改正および防火（準防火）地域の拡大指定に関し要望
1961	恒岡　俊行	・違反建築防止対策
1962	恒岡　俊行	・関係法の改正に関するアンケート ・建築基準法改正についての構想
1963	佐野　正一	・市街地改造事業 ・建築基準法改正
1964	佐野　正一	・建築行政関係懇話会の件 ・建築基準法改正に対する要望書提出 ・建築士法の改正

年度	委員長	内　　容
1965	佐野　正一	・万国博の建築規制の問題 ・建築士法の問題
1966	佐野　正一	・建築士法改正 ・建築基準法改正の問題点 ・法規特集協力 ・法規討論会
1967	佐野　正一	・建築行政懇談会の報告 ・都市計画法、都市再開発法案 ・法令コーナー ・建築士法改正法案 ・建築士法の問題点作成 ・建築基準法改正の建議
1968	佐野　正一	・建築基準法改正要望案検討 ・建築物の安全基準の研究 ・都市計画法、騒音規制法の研究 ・建築基準法説明会開催 ・安全基準案に対する意見書 ・法令コーナー ・容積地区 ・建築基準法施行令の一部改正 ・建築行政に期待するもの
1969	福田　朝生	・消防法施行令改正点討議 ・建築基準法改正に対する陳情 ・都市計画法の施行に伴う諸問題 ・大阪市の都市再開発 ・都市計画法の今後の問題点 ・大阪市の「建築確認申請書等の様式の簡素化」
1970	福田　朝生	・士会・家協会と三者合同の開催の件 ・開発許可の問題 ・改正建築基準法の解説 ・建築基準法政令改正に対する意見 ・単体規定関係改正案試案 ・確認申請不適合の訂正処理 ・建築基準法特集の件 ・二級建築士試験制度
1971	福田　朝生	・四会合同会議の件 ・建設省への要望 ・建築業務基準原案 ・法規に関する最近の動向
1972	福田　朝生	・「建築主事事務所」仮称登録制度案 ・大阪市における新用途地域制 ・防災対策における法規上の問題 ・大阪市のマスタープランの改正方向 ・法令事務所 ・新用途地域の決定
1973	市川　　宏	・建築と社会誌法規特集 ・京都市日照等に関する指導要綱 ・日照チャート ・日照確保のための建築規制基準 ・建築基準法改正の概要
1974	市川　　宏	・法令コーナー ・大規模建築物の建設計画の事前協議の取扱要領 ・消防法改正案 ・四会合同法規委員会開催の件 ・国土利用計画法の説明 ・工作物の指定と築造面積 ・開発許可制度の改正の件
1975	市川　　宏	・建築基準法と消防法のギャップについてのアンケート ・四会合同法規委員会の件 ・建築関係法令の研究 ・建築防災と法
1976	市川　　宏	・法令コーナー ・消防法の遡及規定の問題点 ・建築関係法規の問題点 ・確認申請業務のフローチャート
1977	市川　　宏	・大阪府下の日影規制に関する条例化の方向 ・近畿の電波障害の実態 ・風（風害）について
1978	岡本　行善	・法令コーナー ・日影規制の問題 ・防災と法の件 ・瀬戸内法による水質保全 ・日影規制特集
1979	岡本　行善	・法令アンケート文案 ・ヨーロッパ視察報告 ・行政と法規特集
1980	岡本　行善	・災害と法ー安全な環境を目ざしてー
1981	岡本　行善	・都市景観の特集テーマの企画

1982年２月の会合以後、記録はない。

▶住宅委員会

年度	委員長	内　　容
1929	日高　　胖	・研究方針について意見交換
1930	日高　　胖	・委員会を４分科に分かち、研究 第１分科／平面、外観、構造、材料 第２分科／採光、通風、暖房、衛生 第３分科／設備、装飾 第４分科／実行の促進、住宅の本質、外観、構造、材料
1931	葛野壮一郎	・1931国際住宅会議審議事項に提出材料作成の件 ・模範住宅の平面図に充てるべき台所設備プラン作成 ・気象年報に関し調査
1932	葛野壮一郎	・「実用小住宅」発行 ・建築に関する座談会開催 ・見学会 ・住宅建築の将来に対する希望等論ず

年度	委員長	内　　容
1933	葛野壯一郎	・防鼠についてその構造、設備、器材等を研究
1934	武田　五一	記録なし
1935	葛野壯一郎	・私室及び特殊住宅街 ・床（和洋）、床下、畳及び材料 ・通風、湯殿、便所（和風）、床敷物（洋風）について研究
1936	石川純一郎	・家相に関する研究と文献蒐集 ・家相研究の参考目録を作成し、方鑑大全、楽地準則、三才精義、住宅の設計（家相の点から） ・借家住宅の研究 ・住宅内部の設備調査及び借家住宅の平面型式の統計的分類に関する件 ・住宅読本刊行の件
1937	石川純一郎	・園田住宅地見学 ・住宅読本に関する件
1938	石川純一郎	・住宅防護室研究に関する件 ・住宅読本の完成
1939	石川純一郎	記録なし
1940	石川純一郎	・満州移民住宅の研究に関する件 ・住宅2600年史編纂の件
1941	岡田　孝男	・住宅問題に関し委員会設置 ・応急住居研究の件
1942	伊藤　和夫	・集合住宅案基本条件検討
1943	役員不明	・都市共同住宅仮装敷地案による見学の件 ・戦時組み立て住宅試作
1944年～1948年まで　記録不詳		
1949	元吉勇太郎	・堂島大橋南詰に建築中の佐々木式ブロック構造施工現場見学 ・住宅金庫設置運動の件 ・新工法の育成、住み方の改善、住居の水準向上等研究 ・農村住宅改善問題
1950	元吉勇太郎	・農村住宅台所指導の件 ・住宅公庫にある標準プラン作成の件
1951	桐本　楠雅	・家具建築心得につき新聞への掲載案を協議
1952	赤松　　修	・防火に関する映画会 ・住宅譲渡等誌上斡旋 ・住宅パンフレット発行
1953	赤松　　修	・住宅の見学 ・住宅問題座談会
1954	中野順次郎	・住まい方文献インデックスの作成準備 ・ローコスト住宅の研究
1955	中野順次郎	・住まい方文献インデックスの完成 ・新聞発表の啓発企画
1956	中野順次郎	・カラースライド（家ができ上がるまで）作成
1957	西嶋徳太郎	・住宅資料の国際的蒐集と交換
1958	西嶋徳太郎	・住宅のテレビ放送企画
1959	西嶋徳太郎	・テレビ委員会が設置され、これと協力して放送実施（毎日テレビ）
1960	海上　静一	・テレビ放送実施 ・住宅問題座談会開催
1961	海上　静一	・PR 冊子の発行企画 ・住宅問題座談会開催
1962	海上　静一	・プレハブ住宅の研究 ・ハウスコンサルセンターの計画 ・住宅設計コンクールの実施 ・記念住宅展委員会と協力
1963	海上　静一	・新住宅設計コンクール優秀作品集発行 ・ホテルおよび工場見学
1964	海上　静一	・住宅よろず相談所開設 ・アパートおよび民家見学
1965	海上　静一	・よろず相談住宅展実施 ・「すまいの手引き」発行 ・千里丘陵見学 ・建設記録映画鑑賞と座談会開催 ・照明学会住宅照明委員会に委員派遣
1966	岡橋作太郎	・よろず相談住宅展 ・生活形態の研究 ・外国住宅資料の蒐集企画 ・千里メゾネット・公団高層住宅見学
1967	岡橋作太郎	・よろず相談住宅展
1968	岡橋作太郎	・よろず相談住宅展
1969	岡橋作太郎	・よろず相談住宅展
1970	岡橋作太郎	・よろず相談住宅展
1971	岡橋作太郎	・よろず相談住宅展
1972	小西　　岬	・よろず相談住宅展
1973	小西　　岬	・よろず相談住宅展
1974	小西　　岬	・よろず相談住宅展
1975	小西　　岬	・よろず相談住宅展
1976	小西　　岬	・よろず相談住宅展
1977	小西　　岬	・よろず相談住宅展
1978	小西　　岬	・よろず相談住宅展
1979	小西　　岬	・よろず相談住宅展
1980	小西　　岬	・よろず相談住宅展
1981	小西　　岬	・よろず相談住宅展
1982	山下　聡清	
1983	山下　聡清	
1984～1989		委員会休会、1990年度以後の記録なし

▶都市計画委員会

年度	委員長	内　　容
1923	横濱　　勉	・帝都復興に関する分科会―四大都市計画促進に関する分科会設置 ・都市復興に関する建議案の件―四大都市都市計画促進に関する建議案
1924	中村琢治郎	・京都都市計画参考資料図書の研究
1925	池田谷久吉	記録不詳
1926	園部　文雄	・防火地域内における壁面の位置指定に関する件
1933	松室　重光	・大阪駅前整理事業に関する具体的審議―駅前一ブロックをいかに区画するかにつき与論喚起のため懸賞募集することに意見一致 ・都市計画執筆名士人選について協議 ・都市計画主任会議指示事項につき意見交換
1934	鳥井　　信	・各委員長及び幹事、理事、常務の連合競技会開催に関する件 ・函館大火災復興に関し道庁に建議の件 ・都市武装促進委員会を特設する件
1935	鳥井　　信	・阿倍野橋付近の改造懸賞募集の件 ・「都市美を語る」座談会開催の件
1936	鳥井　　信	・全国都市問題会議第５回総会に提出すべき研究問題－１．都市の公益事業、２．都市防空法－
1937	鳥井　　信	・住宅経営の具体案につき協議 ・住宅建築促進具体案 ・都市美観問題 ・住宅経営と都市計画との関係につき協議 ・建築社会法案及び住宅法案研究
1938	鳥井　　信	・都市工業地発展と専用地 ・市街地における空地 ・地方計画及び国土計画の根本に関する件
1939	鳥井　　信	・工業、住宅専用地の研究 ・工場の規模と職工数、職工の通勤距離 ・商店の分量 ・爆発物と建築物の距離 ・工業、住宅専用地区の位置指定資料に関する件
1940	井上　新二	・全国都市問題会議の総会議題研究 ・大阪東郊部の発達調査（主として今福労働者住宅の実情） ・都市人口増加に関する件 ・全国都市美協議会よりの招請に関する件 ・全国都市問題会議提出論文の要約に関する件

▶災害委員会　災害調査委員会（1949年より）

年度	委員長	内　　容
1917	（主査） 池田　　實	・天満青果市場災害調査報告
1927	波江　悌夫	・丹後地方大震災勃発 震源地付近実地調査、京阪神及び堺の震災調査、丹後及び大阪市内外各方面の調査報告、震災調査書蒐集に関する件、火災時の風位 ・木造家屋耐震構造範例作成 ・木造家屋耐震構造の細部 ・木造学校建築 ・和風住宅建築
1928	光安梶之助	・建築展覧会出品の件 ・地質と地耐力の研究 ・ボーリング地質調査の件 ・市内各地の OP 高低図の件 ・大阪市地質実測図の件
1929	光安梶之助	・高さによる風圧の変化に関し大阪測候所、中央気象台、海洋気象台につき審議調査 ・大阪市内地質ボーリング図、耐火耐震構造図
1930	光安梶之助	・鉄材の溶接に関する文献、実物より実験研究討議 ・電気溶接に関する研究 ・鉄筋試験方法ー強度に関し内藤博士に照会 ・土木試験報告蒐集の件 ・電気溶接試験法決定 ・大阪市防火地区の完成促進ー都市計画の防火地区に関する説明 ・実験中の丸鉄棒溶接強度の成績並びに供試材
1931	増田　　清	・建築規則改正の件 ・溶接に関し意見交換
1932	渡部　圭吾	・コンクリート調合合理化の一般普及化 ・生コン配給会社企画案 ・コンクリート調合合理化普及宣伝講習会 ・溶接手検定試験法 ・溶接規格、ドイツ溶接示方書プリントの件
1933	中澤誠一郎	記事不詳
1934	波江　悌夫	記事不詳
1935	波江　悌夫	・石崖、地盤沈下、型枠、混凝土用材料に関する研究 ・講演「台湾過去の地震記録に就いて」
1936	波江　悌夫	・振動コンクリート、地盤沈下、型枠、石崖、コンクリート材料等に関する研究

年度	委員長	内　　容
1937	渡部　圭吾	・ボーリングに関する資料蒐集方法 ・溶接工技術試験 ・連続鋸屋根に対する分布状況調査 ・地質調査等 ・地質調査図作成の件 ・風圧実験見学の件 ・型枠に関する件
1938	渡部　圭吾	・ボーリング、風圧に関して ・セメント規格改正案に関連せる新試験用機械器具標準型 ・溶接工試験法研究 ・阪神地方水害調査 ・ボーリング表増補原稿 ・神戸市大水害調査 ・兵庫県より寄贈の阪神水害調査の研究結果を雑誌に掲載の件 ・土留支保工のうち矢板に関する件 ・溶接手技倆検定試験方法比較実験 ・浸水地域地図雑誌掲載に関する件 ・無筋コンクリートの実測による調査研究の促進
1939	渡部　圭吾	記事不詳
1940	渡部　圭吾	・強度計算標準資料作成の件 ・無筋コンクリート造建物設計例作成 ・電弧熔接手技術検定方法に関する研究 ・風圧パンフレット ・釘接手に関する件、釘の強度に関する研究
1941～1948		記録記載なし
1949	堀口　甚吉	・耐震問題の意見交換
1950	池田　宮彦	・事業計画協議 ・地質調査表整備の件 ・建築物課税の低減を図る件 ・ジェーン台風風水害の緊急協議 ・学会、土木学会、協会合同災害対策講演会開催 ・地震常識に関する講演会開催
1951	池田　宮彦	・地質調査表資料採集 ・地震風水害とその対策等予防対策の件
1952	池田　宮彦	・地質表資料の整備に着手、20年前初版改訂再出版原稿作成
1953	池田　宮彦	記録記載なし
1954	池田　宮彦	・老朽住宅対策に関する陳情書を作成 ・戸、障子など建具の撓みの実験、調査、研究
1955	横尾　義貫	・「漏電とダクト火災とその対策」を編集
1956	横尾　義貫	・災害防止座談会「地下掘削工法」の企画・編集
1957	馬場　善雄	・土質試験の標準仕様書 ・簡易地耐力の調査方法 ・杭耐力の試験標準仕様書 ・鉄骨の構造計算便覧編集・企画
1958	馬場　善雄	・土質試験の標準仕様書 ・杭耐力の試験標準仕様書 ・鉄骨構造計算と実例 ・地震、建築現場の災害予防、風水害の災害調査についての研究
1959	越田　正勝	・大阪を中心にした建築地盤調査規準（簡易地耐力を含む）を「建築地盤調査規準案」としてまとめ、学会の「規準改訂委員会」に資料として提出 ・風水、地震などの災害資料を集め、その分類整理などを研究 ・「鉄骨構造計算と実例」を編集、発行
1960	越田　正勝	・建築地盤土質調査規準（案）を「建築と社会」35年4月号に掲載
1961	鬼武　信夫	・事業企画を検討・運営
1962	鬼武　信夫	・運営・事業の検討に着手、その後、委員会は自然休会

▶設備委員会

年度	委員長	内　　容
1933	小笠原　鋭	・地下室を設ける場合の掘方その他工事設備のリベッチングミキサーその他工事上騒音防止に関する設備
1934	小笠原　鋭	・潜函工事 工事上の騒音防止設備、設備工事設計上の注意、機械室面積、配管法等、衛生工事
1935	小笠原　鋭	・一般建築施工上に必要な設備の研究 ・デレッキその他機械 ・一般付帯設備施工上に関する件 ・設備工事において施工監督上特に留意すべき点 衛生設備工事、暖房、換気 電気・消火設備工事 機械設備・ガス設備工事 建築工事、仮設備に要する機械器具
1936	小笠原祥光	・昇降機につき大阪府の取締り方針に関する件 ・暖房設備に関する件 ・暖房業者招待座談会
1937	小笠原祥光	・大阪市大下水の講演会について
1923	横濱　勉	・土木建築工事場安全規則 ・土木建築工事場衛生規則 ・工事場安全規則中建築に関係ある条項を会誌に発表の件 ・消火設備

年度	委員長	内　　容
1938	酒井勇三郎	・洪水、高潮等に対する設備 ・防空用カーテン取扱方法 ・防空用落ち込み堰板 ・防災設備 ・防毒室用の換気装置 ・都市防空課研究発表
1939	岩尾　保衛	・防毒設備に関する講演会開催の件 ・換気暖房設備 ・中防の講師派遣要請の件、講演会開催の件 ・防護室問題の資料整理 ・衛生工業協会時局調査委員会の研究事項の内容 ・新設付帯設備概要紹介依頼の件 ・防空避難実験に関する件
1940	新名　種夫	・防空施設に関する件 ・工場防空施設研究会設置の件 ・防護室設備に関する座談会開催 ・工場建築越屋根の諸型式の資料蒐集 ・防空建築の具体的研究 ・建築諸設備工事用代用品 ・住宅の防空設備の研究 ・建築設備に用いる代用品 ・大阪市汚水処理場及び下水系統に関する参考事項調査 ・工場の換気及び遮蔽 ・大阪市水道部、私設下水道、水洗便所施設に関する件
1941～		記録記載なし

▶都市武装促進委員会

1934年３月12日、建築倶楽部別室において（特設）都市武装運動準備協議会が開かれ、①特設委員会設置および委員選詮の件、②実施要綱の決定の件、③予算編成並びに資金調達に関する件等について協議の結果、３月13日付けで、都市武装促進委員会を設置し、委員を委嘱することが決定された。

都市武装促進委員会の第１回会議を３月17日に開催。委員長に池田　實、副委員長に波江悌夫、および委員８名を委嘱した。

年度	委員長	内　　容
1934	池田　　實	・資金調達に関する件 ・防火防空建築の促進助成 ・防空大講演会(中央公会堂)　聴衆1000人 ・　〃　　(朝日会館)　聴衆2000人 ・　〃　(京都日出会館)　聴衆800人 ・〃(神戸市県会議事堂)　聴衆700人
1935	池田　　實	・防火防空建築の普及促進、避難施設の完備、都市航空港の建設 ・映画脚本懸賞募集 ・都市武装に関する建議 ・映画作成の件、脚本審査会開催
1936	池田　　實	・防火防空建築の促進対策 ・重要都市巡回講演 ・共同建築の調査及び奨励、法令改正
1937	竹腰　健造	・防空法案について研究の上建議の件 ・阪神防空演習に関する件協議 ・京阪神防空演習に関する調査結果
1938	竹腰　健造	・市街地建築物法令改正の意見提出 ・調査部設置並びに調査事項決定の件 ・防空実験すべき事項調査の件 ・防空訓練参加方に関する件
1939	竹腰　健造	・防空法施行経過概要報告の件 ・防火改修促進運動の件 ・工場防空施設 ・灯火管制困難工場の設備
1940	池田　　實	・静岡大火の報告 ・講演会「空襲の実相と防空建築の着眼」 ・「重要都市における建築物の防火方策急施に関する建議」総理・内務・商工・大蔵・陸軍・海軍・企画各大臣あて ・都市武装に要する資材必要を商工省に具申 ・婦女子避難所、防空壕パンフレット発刊について ・新聞の学芸欄を利用して防空対策を普及せしむること
1941	池田　　實	・木造家瓦防火改修促進の件 ・防火問題に関する座談会、講演会開催の件 ・有事の際における協会員の動員計画 ・防空壕構造指導の件
1942	池田　　實	・6/25～7/16 防火改修展覧会　入場　1215名 ・9/20～9/26 建築と防空展覧会　於　京都大丸

年度	委員長	内　　容
1942	池田　　實	・9／29～10／4 建築と防空展覧会　於　大阪大丸 両会場は毎日数万の参観者あり ・9／21～10／7 都市防空講演会（8地域巡回） 講師：軍人数氏、各府県関係部課長 協会：井上新二／池崎忠孝ほか ・11／12～11／14 防火改修技術講習会　聴講者300名

特別委員会活動

会勢審議会（1956年9月～1960年9月）

この審議会は会勢発展に資するため、各委員会については実績を高めるようにすること、また、会員の集会の機会を多くすること、さらに、全会員につながる会誌を良くし、会誌その他の方法で、より横の連携を深めるようにするために設置した。

年度	会長	委員会回数	主　な　活　動
1956	東畑　謙三	1	詳細の記録はない
1957	同	1	
1958	同	1	
1959	同	1	詳細の記録はない
1960	同	1	

会勢（理事）委員会（1966年6月～）

この委員会は、会勢発展に関する調査、提案を行い、会員増加に関する直接の活動を担当することとし、会誌への要望事項、会議のもち方、委員会のあり方、会員増強方法などを協議し、その実現に努めてきた。

年度	委員長	委員会回数	主　な　活　動
1967	鷲尾　健三	8	会勢拡張について協議
1968	—	5	〃
1969	—	1	〃
1970	—	4	〃
1971	—	4	〃
1972	—	10	〃
1973～1978			記録が見当たらない
1979	市川　　宏	4	会勢拡張について協議
1980	同	4	〃
1981	同	1	〃
1982	同	2	〃
1983	市川　　宏	2	会勢拡張について協議
1984	同	1	〃
1985～1991			記録が見当たらない
1992	鴻池　藤一	2	会勢拡張について協議
1993	鴻池　藤一	1	〃
1994	岡本　行善	1	〃
1995	岡本　行善	4	〃
1996	岡本　行善	6	〃
1997	岡本　行善	7	〃

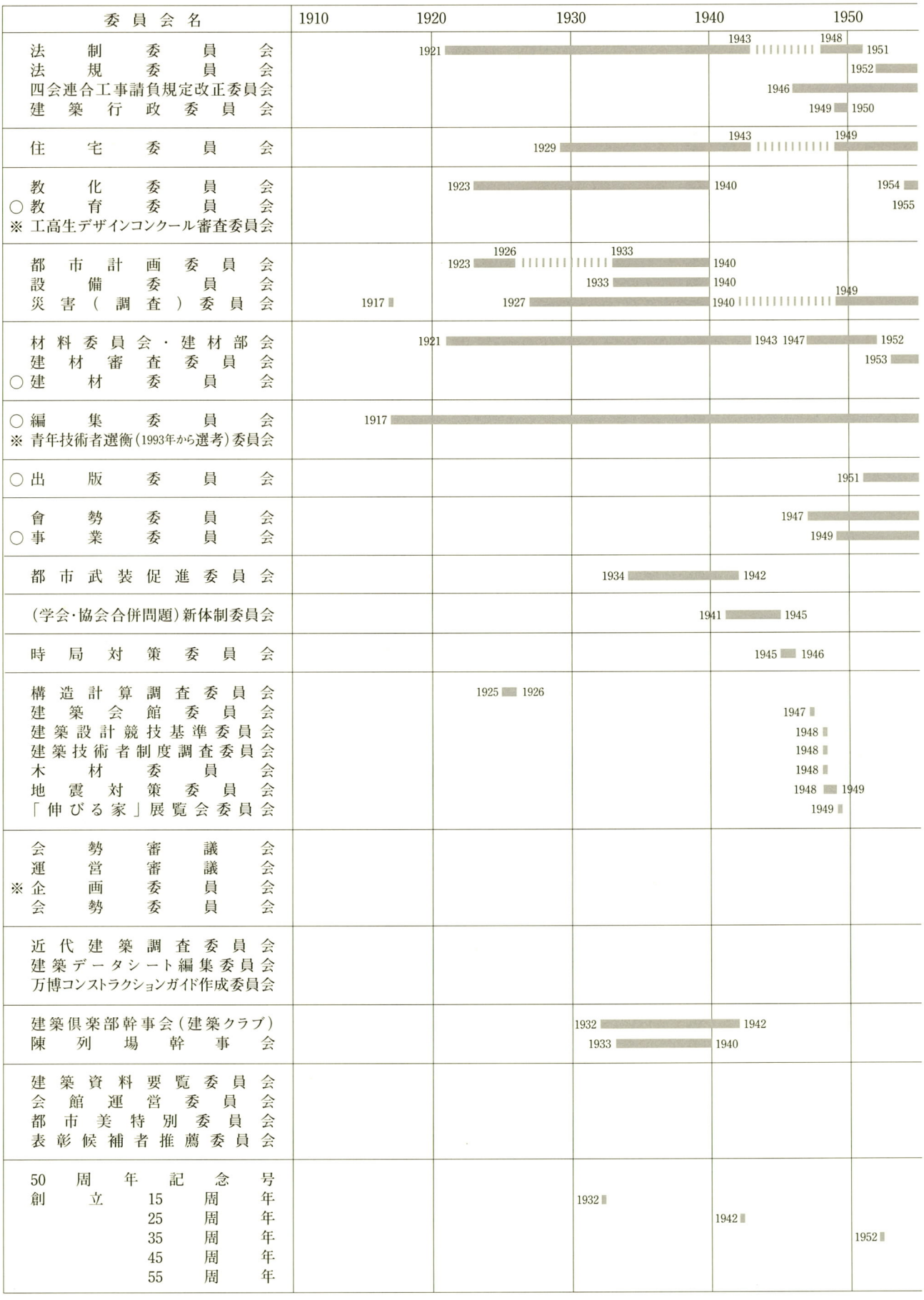
企画委員会

企画委員会は、常設委員会と異なり、本会の事業運営に関し会長または理事会の諮問に応じて委員会を設置し、会員の動向調査や本会の事業運営に対する意見調査を実施し、本会の将来の事業に対する企画等の提案あるいは改善点について報告・答申等を行うものである。

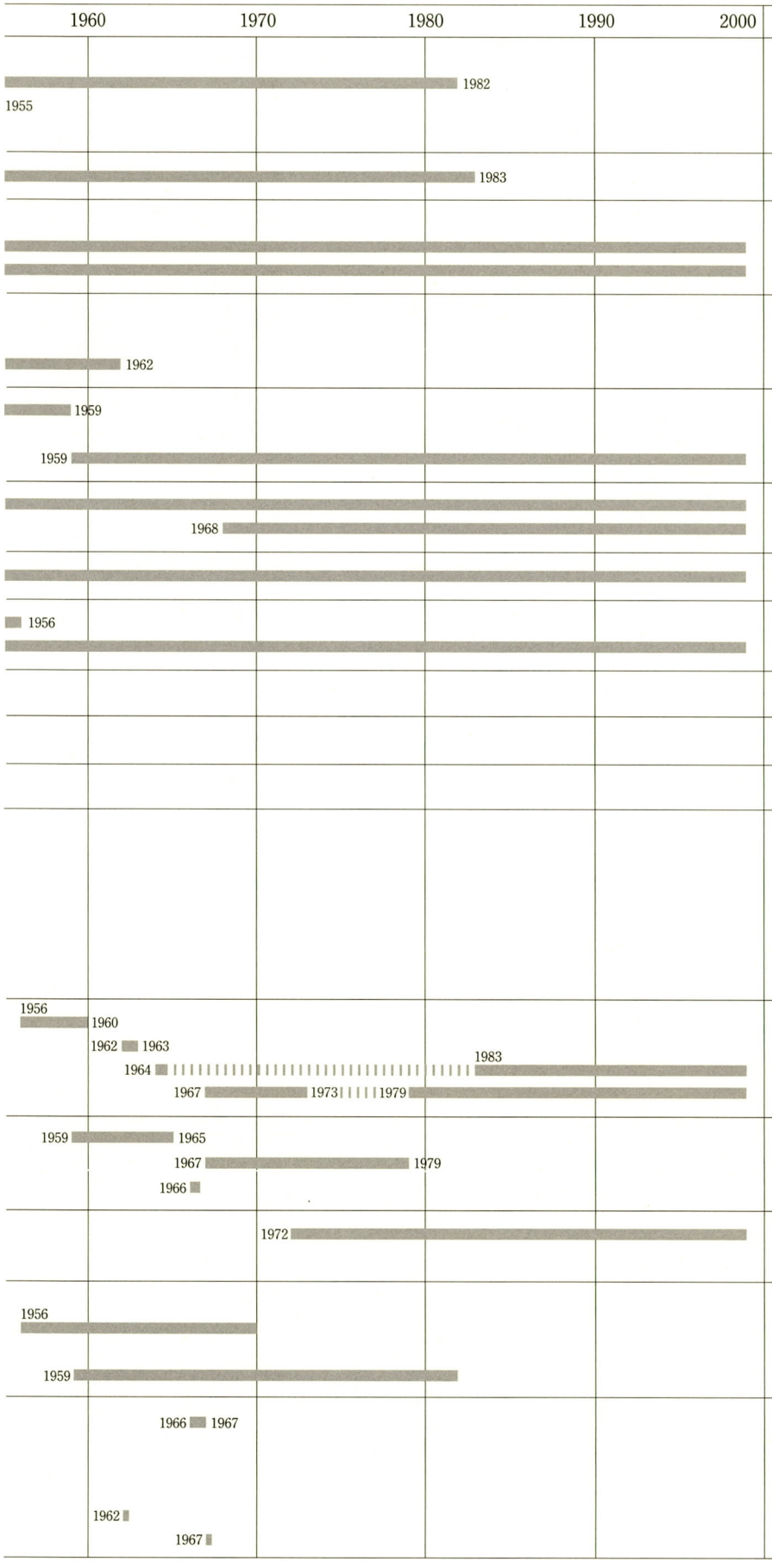
委員会は1964年度から活動しているが、1996年度以降、理事会の意見により、特別委員会とはいえ社会の動きに迅速に対応して調査活動等ができるよう、毎年年度当初から設置していくこととなっている。

年度	委員長	委員会回数	出席延人員	主　な　活　動
1964	塚本　猛次	—	—	会員の業種別・年齢別・地域別分布などを調査し、また、会員に対しアンケートによって本会入会の動機、会誌に対する意見、見学会、出版物の評価などを行ってこれを運営面に利用したほか、10月には報告を提出した。 以後、会議開催記録なし
1983	三品　哲夫	6	32	・協会の今後のあり方 ・事務所移転先の利用計画
1985	三品　哲夫	1	7	・創立70周年記念事業
1989	片倉　健雄	1	7	・第2回日本建築協会賞
1992	片倉　健雄	2	14	・第3回日本建築協会賞
1993	片倉　健雄	3	25	・会勢の拡大対策 ・個人会費の改訂
1994	片倉　健雄	1	8	・団体会費の改訂
1995	片倉　健雄	2	16	創立80周年記念事業
1996	片倉　健雄	3	20	協会80年史の編纂
1997	片倉　健雄	1	7	・80年史の編纂経過 ・日本建築協会賞の計画 ・記念事業基金の動向

委員会の変遷


委員会名
1910
1920
1930
1940
1950
法制委員会 1921 1943 1948 1951
法規委員会 1952
四会連合工事請負規定改正委員会 1946
建築行政委員会 1949 1950
住宅委員会 1929 1943 1949
教化委員会 1923 1940 1954
○教育委員会 1955
※工高生デザインコンクール審査委員会
都市計画委員会 1923 1926 1933 1940
設備委員会 1933 1940
災害（調査）委員会 1917 1927 1940 1949
材料委員会・建材部会 1921 1943 1947 1952
建材審査委員会 1953
○建材委員会
○編集委員会 1917
※青年技術者選衡（1993年から選考）委員会
○出版委員会 1951
會勢委員会 1947
○事業委員会 1949
都市武装促進委員会 1934 1942
（学会・協会合併問題）新体制委員会 1941 1945
時局対策委員会 1945 1946
構造計算調査委員会 1925 1926
建築会館委員会 1947
建築設計競技基準委員会 1948
建築技術者制度調査委員会 1948
木材委員会 1948
地震対策委員会 1948 1949
「伸びる家」展覧会委員会 1949
会勢審議会
運営審議会
※企画委員会
会勢委員会
近代建築調査委員会
建築データシート編集委員会
万博コンストラクションガイド作成委員会
建築倶楽部幹事会（建築クラブ） 1932 1942
陳列場幹事会 1933 1940
建築資料要覧委員会
会館運営委員会
都市美特別委員会
表彰候補者推薦委員会
50周年記念号
創立 15周年 1932
25周年 1942
35周年 1952
45周年
55周年

○：現在の常設委員会　※：現在の特別委員会



委員会名
法制委員会
法規委員会
四会連合工事請負規定改正委員会
建築行政委員会
住宅委員会
教化委員会
○ 教育委員会
※ 工高生デザインコンクール審査委員会
都市計画委員会
設備委員会
災害（調査）委員会
材料委員会・建材部会
建材審査委員会
○ 建材委員会
○ 編集委員会
※ 青年技術者選衡（1993年から選考）委員会
○ 出版委員会
會勢委員会
○ 事業委員会
都市武装促進委員会
（学会・協会合併問題）新体制委員会
時局対策委員会
構造計算調査委員会
建築会館委員会
建築設計競技基準委員会
建築技術者制度調査委員会
木材委員会
地震対策委員会
「伸びる家」展覧会委員会
会勢審議会
運営審議会
※ 企画委員会
会勢委員会
近代建築調査委員会
建築データシート編集委員会
万博コンストラクションガイド作成委員会
建築倶楽部幹事会（建築クラブ）
陳列場幹事会
建築資料要覧委員会
会館運営委員会
都市美特別委員会
表彰候補者推薦委員会
50周年記念号
創立15周年
25周年
35周年
45周年
55周年

支部活動

支部事業の概要

支部事業の詳細については、残念ながら現存する資料がはなはだ少ない。成立当初より各支部において活発な事業活動が展開されたであろうことは十分に推測できるが、支部活動の全体像については、会誌「建築と社会」や東海支部で1976年以後５年ごとに編纂されている「東海支部復活記念号」等の資料により推測せざるを得ない状況である。

前述の会誌「建築と社会」第28輯３・４・５号（合併号）によると、第１回京都支部幹事会は1947年５月24日にミラノ工務店内の支部事務所で開かれており、そのときの協議事項は「建築美化運動の件」「請負資金融通の件」「無料相談所開設、出版計画、並びに都市衛生化運動の件」「耐震補強の普及に関する件」「見学会開催の件」「文化運動とのタイアップに関する件」「支部会館建設の件」と多彩である。

また、同号には、兵庫会勢幹事会主催で「姫路城見学会」が行われ、その内容が見学記として詳しく報じられている。

さらに、1976年に編纂された「東海支部復活15周年記念号」によると、「当支部は他の友好団体と緊密に連絡し、年々見学会、講演会、研究会等の行事が開催されており……」との記述があって、1960年支部復活以後における東海支部の活発な活動状況がうかがえる。

支部委員会活動

東海支部の記録によれば、支部委員会開催の記事がはじめて見られるのは、1981年度の事業報告書においてである。しかしながら1968年の事業記録には、すでに「鉄骨構造講習会１回、見学会２回、映画会２回」とあるので、委員会としての記述が見当たらないだけであって、1947年の支部設置以後、現在に至るまで活動そのものは連綿と続けられており、このことは他の５支部においても同様であろう。

（31Ｐ参照）

ちなみに「東海支部復活記念号」を一覧してみると、懇親会、研究会、会誌発行、５年ごとの記念事業、協力事業等々実に多種多彩な活動の記録が残されている。

支部による会誌「建築と社会」の編集

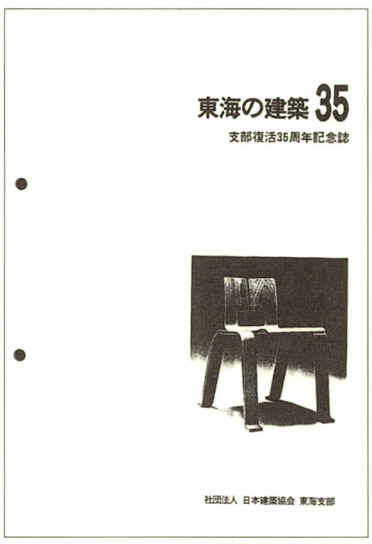
戦後間もない1950年ごろに、４つの支部によって会誌「建築と社会」３月号の原稿を順次引き受け発刊したとの記述が「東海支部復活15周年記念号」に見受けられる。その後の推移は定かではないが、東海支部では1983年８月号以後現在まで15年間にわたって、「東海特集特別編集委員会」を設置し、主として３月号の「建築と社会」の特別編集を担当している。

支部会誌

東海支部では、支部会誌建築と社会「東海の建築」の発刊を1978年よりスタートさせ、現在に至っている。第１号はＢ５判表紙ともで12頁横とじの簡易なものであるが、巻頭言（発刊の辞）、動き、論叢、支部の動きひとこと、Design あれこれ、建築紹介、随想、読者のひろば、編集後記により構成され、充実した内容となっている。

以後、最新の1998年11月１日発刊44号に至るまで、Ｂ５サイズで同種の内容を保っているが、ちなみに44号は巻頭言以下12のタイトルの下に表紙とも20頁構成で、発行部数は450部、支部会員はじめ本部、東海圏の主たる行政等に配布している。

なお、同支部では会誌とは別に1960年の支部復活を記念して1976年３月31日付で「東海支部復活15周年会誌」を発行。以後５年ごとに各周年記念誌を発行し、現在に至っていることを付記しておきたい。



東海支部発行の記念誌



中国支部交流見学会（宮島にて）

第３章　　事業と業績

建築界の発展向上のために

「我が国建築界の堅実なる発展を期す」との目的を掲げて発足した関西建築協会は、

１．都市計画と建築に関する法令の制定

２．住宅の改善

３．建築を通じて社会への貢献

を具体的課題として、活発な活動に入った。

当時、わが国は近代工業の勃興期にあり、特に大阪はアジア貿易で活況を呈していた。幕藩時代より単に建物の密集地に過ぎなかった町に人々が流入して活気は取り戻したものの、所かまわず工場が進出する。住宅地にはスラム化の危機が訪れ、ようやく近代商業都市への脱皮が模索され始めたころであった。

まず近代都市づくりの基となる都市計画法、堅固良質な建築建設に欠かせない建築法の制定を急務とし、当会としてはその研究・立案をなし、建築学会等と諮って建議し、法制定を実現した。

次いで、法制委員会はじめ各種委員会を開設し、種々研究を行って、建築の発展につくすとともに、その成果をもって講習会、見学会等を催し、会員の知識の向上につくした。さらに、住宅の改善、都市住宅問題、家相についてなど市民に関心のある事例を取り上げ、通俗大講演会をしばしば開催したり、住宅改善のためには、箕面桜ヶ丘での住宅改造博覧会に代表される博覧会、展覧会を協会独自で開催。広く社会への貢献を果たし、当初の目的を軌道に乗せることができた。

関東大震災は様々な影響を国内外に与えたが、協会は会誌で震災特集を出し、震災と建築、都市計画の問題について研究する一方、通俗講演会を催し、市民への啓蒙活動を行った。北但地震に際しても視察団を送り、実情報告を行っている。

第二次世界大戦中は臨戦体制活動が中心であったが、都市武装促進委員会を設置し、防火避難施設の設置、防火地区完備と、国策に沿った活動がなされた。

終戦を迎えると、荒廃した国土復旧のための活動がすぐに開始され、都市復興論文コンペ、大阪市天王寺区公館地区コンペ、大阪市南区公館地区コンペなど新大阪建設に向かっての提案が「建築と社会」誌に掲載される。また、いかがわしい建築材料の排除や改善のため、申請によって優良な建築材料には証明書を発行して、これを推奨する制度も考え出された。さらに住宅復興のために復興住宅展、これからの住宅展等を開催、住宅金庫設置問題の具体案も提出された。

協会自身も機構改革に必要な定款改正を行い、建築技術、建材、管工、電気などあらゆる分野を含めた総合団体の性格をそなえ、強力に建築界をリードできる態勢をととのえた。

その後も近代建築等の調査活動、万博コンストラクションガイドの作成、よろず住宅相談での息の長い活動など、委員会活動を通じて業績を積み重ね、創立当初の心をもって建築界の発展のための地道な活動が続けられている。

会誌の発行

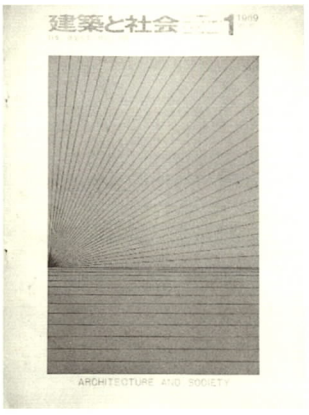
機関誌「建築と社会」は1999年をもって第80集を数えるが、収支のバランスの上に発行されてきた「建築と社会」が抱える問題は、日本の社会・経済の動きと無縁ではなかった。

「建築と社会」1947年９～12月合併号の会告に、「…会誌『建築と社会』も廃刊する訳にも行かず、さりとて、従来通り無料配布は経済上不可能となつたので、之を続刊して有料配布とした即ちこれを会の別途会計として、明春より概ね年４回発行、１部20円見当の購読料を徴することゝし、内容を充実し、且つ会員外一般にも発売するに適当な内容に変更したいと思ふ。…」とある。1999年の今日まで、会員以外の購読者の拡張、書店売りの努力は編集委員会で何度も繰り返し検討されている。

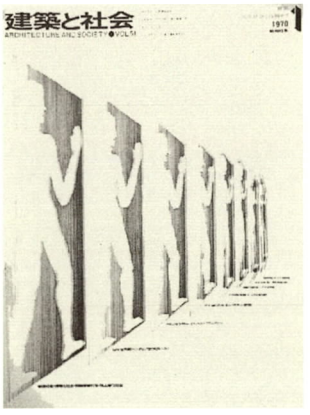
本稿では、このような「建築と社会」の歴史のなかで創刊号以来の歩みを振り返り、また、われわれの記憶を呼び戻す目的で、本誌の主たる表紙図案を示すことにした。なお、表紙図案については、日本建築協会創立50周年記念号（建築と社会、第48集３号、1967年）に創刊号～48集のものが掲載されている。したがって、ここでは第49集から創立80周年を迎えた第78集（1997年）までの図案を次頁に一括して示し、記念すべき図案は本文の流れに沿って掲げることにした。



第49集 1968年



第50集 1969年



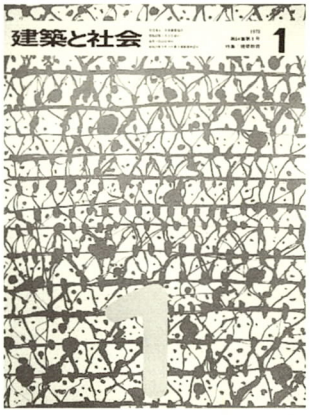
第51集 1970年



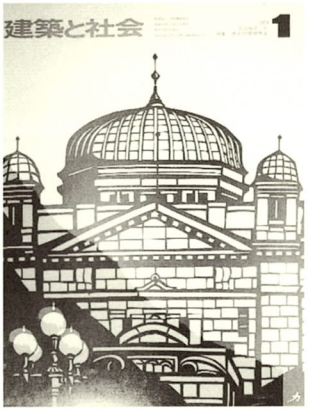
第52集 1971年



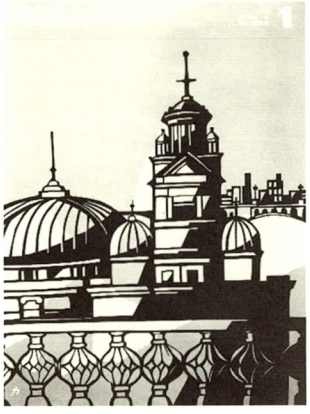
第53集 1972年

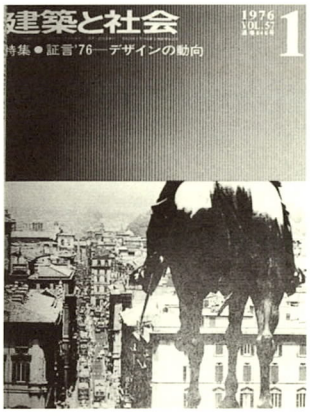


第54集 1973年



第55集 1974年

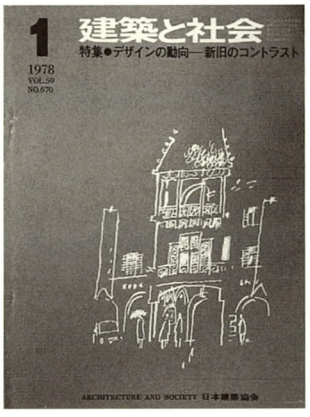

第56集 1975年



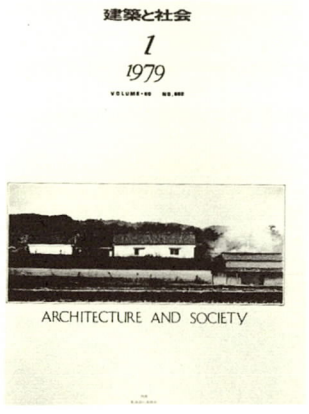
第57集 1976年



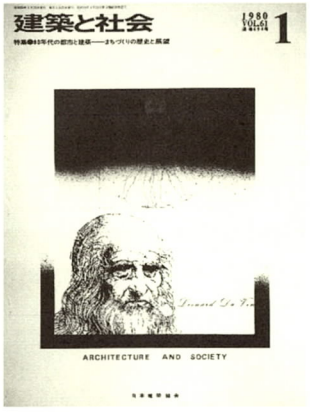
第58集 1977年



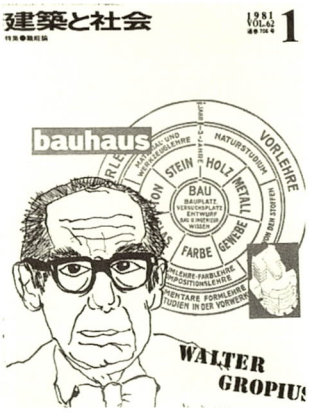
第59集 1978年



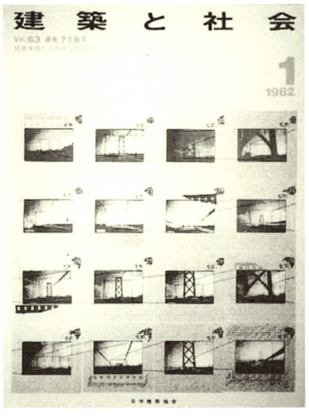
第60集 1979年



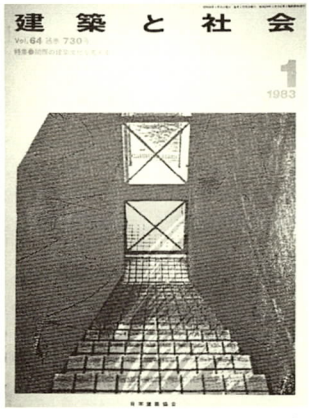
第61集 1980年



第62集 1981年



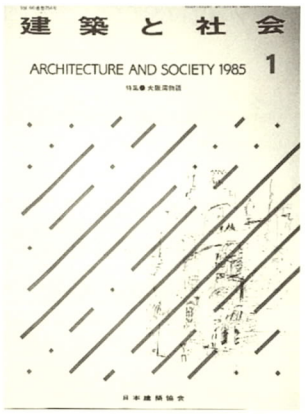
第63集 1982年



第64集 1983年



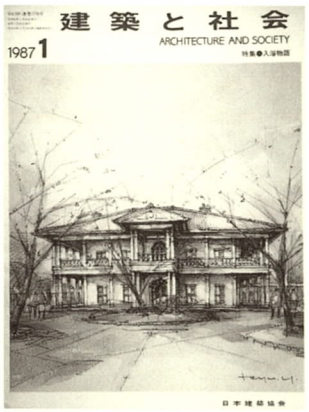
第65集　1984年



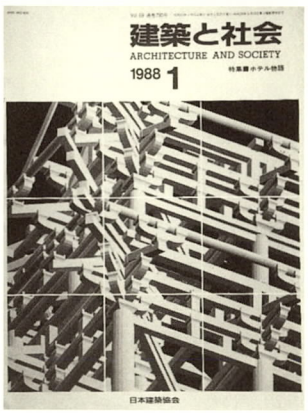
第66集　1985年



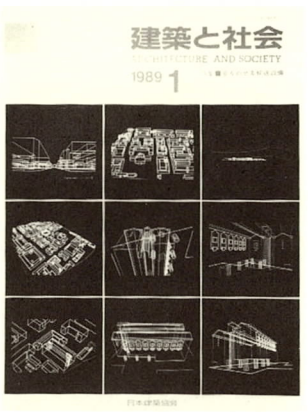
第67集　1986年



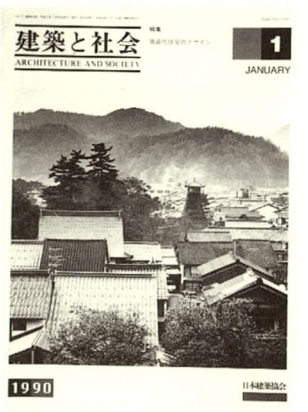
第68集　1987年



第69集　1988年



第70集　1989年



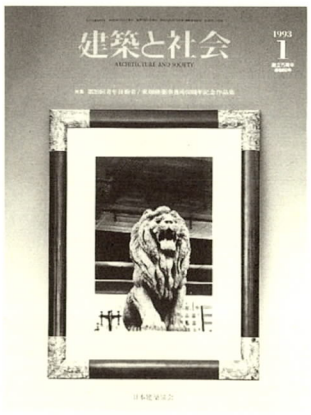
第71集　1990年



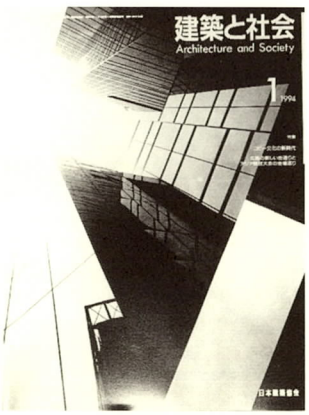
第72集　1991年



第73集　1992年



第74集　1993年



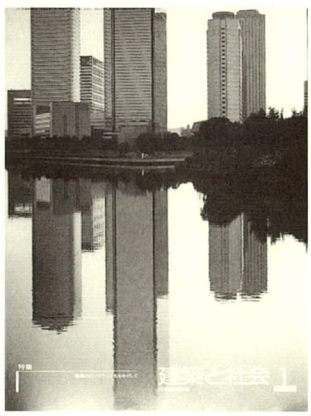
第75集　1994年



第76集　1995年



第77集　1996年



第78集　1997年

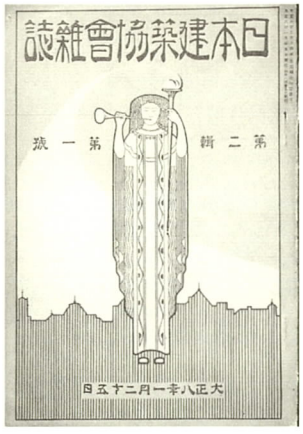
＊

「建築と社会」は創刊以来、組織名の改称にともない二度改題している。

1917年３月に関西建築協会として誕生したときの会名そのままに同年９月に「関西建築協会雑誌」が創刊され、1917年の10月と12月を除き、第１集は大正７年12月まで、14号が刊行されている。1919年、会名が日本建築協会となり、第２集は「日本建築協会雑誌」と改題され、１～12月まで12号を発行する。



第１集１号創刊号　1917年



第２集　1919年



第３集　1920年



第９集１号　通巻100号　1926年

1920年１号の表紙を開くと、「…されば、我協会活動の機関たり其表現たる『日本建築協会雑誌』は茲に再び誌名を更新して、一層、社会的触接を期するのを名実相充当せむことを冀ふと共に、駸乎たる躍進的機運に先むぜんことを欲す、維れ、爰に、我誌名を復び更改する所以也。」の一文が目に飛び込む。

＊

大正から昭和初期、当時の編集担当者の波江悌夫、佐藤四郎、須藤眞金、江村郊邨ら編集陣は創立当初の精神を生かし、その編集内容は巻頭言、論説、研究、漫録、俳句、時報など多岐にわたっている。

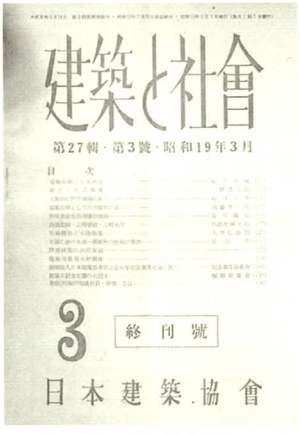
1927年から特集号の編集形式を採用し、10年ばかり続くが、会員層の増加とともに、その要望に応じて建築技術的な内容が目につく。1937年の「支那事変」以来「建築と社会」は次第に戦時色を帯び、時局協力の論調も目立つようになった。この昭和前期から戦中にかけて、池田谷久吉、伊藤正文、本間乙彦、高橋栄治、岡田孝男、新名種夫、亀井幸次郎、大下順三郎、小林清らが編集常務として活躍する。

1944年３月号の表紙には「終刊號」と刷り込まれている。巻末の「『建築と社會』を戰ひに送る」によると、「我が〔建築と社会〕も出版事業整備要綱に基いて一時発行の停止を命ぜられ、建築学会機関雑誌「建築雑誌」に統合を慫慂されるに至つたのも之亦現時局の下止むを得ざる措置」で、会員には「建築雑誌」が配布されたという。

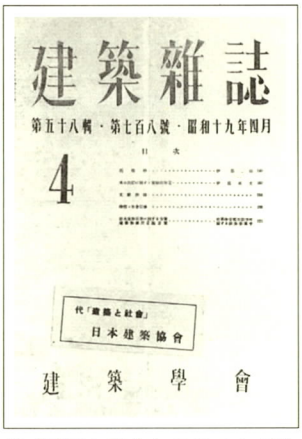
「建築と社会」の復刊が議題にのぼったのは、1946年３月。1947年３月にはＢ５判30頁足らずのザラ紙に刷った１・２月号合併号が発行される。この号の巻頭に「再刊の辞」がある。出版幹事長・中野順次郎の名で「…扨てこの際単なる会誌の復興とか再現とか考へることは最も警戒すべき



第25集１号通巻200号　1942年



第27集　３号　終刊号　1944年



代「建築と社会」のラベルが貼られ、1944年４月から再刊の1947年３月まで、建築協会会員には「建築雑誌」が配布された。

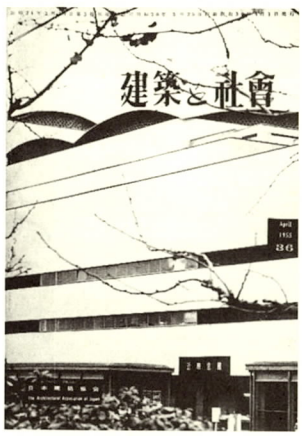


第28集１号　再刊号　1947年

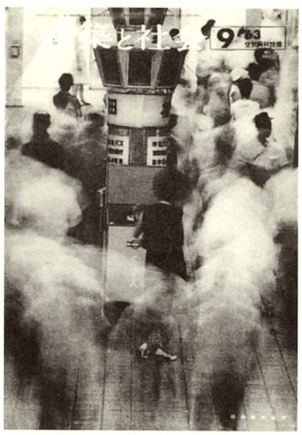
ことで願はくば会誌の新生と考へなければならぬ。こゝに構想を新にして広く建築界及び社会に向つて働きかける本会の使命をそのまゝに具体化したものとしたい…」と述べ「この会誌を通じ荒廃した日本文化の再建に大いなる努力を続けなければならぬと思う。」と結んでいる。

1949年3月に第三種郵便物の認可を受け、「建築と社会」はザラ紙に印刷という姿ではあるが、雑誌としての内容をそなえる。

1950年度以降、大林芳郎、白石博三、中村綱、浦辺鎭太郎、佐野正一、塚本猛次、森忠一（副委員長：上林博雄）、



第36集4号 通巻400号 1955年


第44集9号 通巻500号 1963年

元吉勇太郎、恒岡俊行、片山光生、長谷川哲之助、足立孝、鳥田家弘、彦谷邦一、松村慶三、中村甲一、前川陽一、三輪泰司、横山誠一、井上滉、長谷部朔郎、溝神宏至朗、荒井清ら歴代編集委員長そして編集委員の尽力により「建築と社会」は復刊後も、建築をとりまく社会を視野に入れて編集に取り組んできた。1997年3月には與謝野久委員長のもと日本建築協会は創立80周年を迎え、この3月に、「建築と社会」は通巻900号を数えている。

*

雑誌の大きさは創刊の1集、2集は菊判（150×220㎜）、1919年の第8集より四六倍判（188×258㎜）、さらにB5判へと移り変わる。

そして創立50周年を契機に、①誌面の刷新、②判型の国際サイズ化、③「作品作風」欄の迫力化、④文字や写真・図版の大型化、を意図して編集委員会での協議を重ね、A4変形判となり今日に至る。

*

創刊以来、「建築と社会」に課せられた問題の一つに、雑誌発行費がある。

雑誌を有料化したり、市販したりの努力は戦前・戦後の「建築と社会」の記事からも垣間見える。

しかし長年にわたる「建築と社会」の累積赤字は解消できず、ついに1973年8月に編集委員会の中に「編集方針検討小委員会」（主査：窪田祐、委員：石田繁夫、増渕昌利、毛利誠、西野孝、大橋一雄）が設けられ、現行誌の分析、会員層の職域や年齢、地域による分析、読者アンケートの結果、他誌内容との比較を検討材料に4回の会合を重ね、新編集方針を出し、理事会に答申した。

新編集方針は、①多様なジャンルの人々による会員構成を本会の特長ととらえて、会誌の中に少しずつでも関心のある記事が発見できるよう多様性を考慮した内容とする、②日本建築協会創立の趣旨をふまえ、本誌を建築と社会の接点に位置づける、③ローカリティーを生かしたい、④現行（1968年）程度の頁数および広告比率の維持を前提とし、経過を見ながら逐次躍進をはかる、と結んでいる。

この新方針のもと、①計画系の企画に偏在している内容を修正、②会員の参加意識を啓発し、かつ一般社会人の参加を得て社会とのつながりをもたせ、③会員構成の比率の高い実務家に向けて実務的記事を拡大させる、④機関誌としての使命を維持し、多年にわたる歴史と伝統を尊重する、⑤本文充実により広告メリットの増大をはかるため、編集委員会は専門別の分科会と小委員会システムをとることとなる。

1969年度編集委員会から、特集小委員会（計画系・構造系・設備系・法令系・施工材料系）＋作品作風小委員会＋投稿欄小委員会＋シリーズもの小委員会＋広告企画小委員会＋表紙デザイン小委員会でスタートした。

その後、編集委員会は小委員会名の変更、分科会の増設など小幅な改造を加え現体制（第2章・編集委員会の項参照）となるが、この25年間における建築諸団体の設立と各種建築情報誌の増加はめざましく、「建築と社会」も編集方針を再び見直すべき時期にあるように思われる。

たとえば、来し方80年の歴史のなかで、わが会誌は天変地異にどのように対処してきたか。関東大震災（1923年9月）、室戸台風（1934年9月）そして阪神間の大水害（1938年7月）がよい例になる。これらの災害のあと、「建築と社会」は調査団を現地に派遣、その翌月もしくは翌々月には調査、報告の形で災害特集を組んでいるのである。

しかるに、今回の阪神・淡路大震災（1995年1月17日）ではどうか。最も早い特集が同年9月号「新しい『建築・都市』の視点―阪神大震災を教訓として―」、次いで10月号「建築構造と社会の接点―阪神大震災を契機として―」、11月号「ライフラインと建築設備―阪神大震災を経験して―」と続くが、その間9カ月近く、会員及び読者の多くは他誌から情報を得ていたのである。

＊

当会の創立80周年を迎え、「建築と社会」編集委員会の経緯を概括した。そして、いまから20年後、100周年を迎えたときにも、本誌が当会の中核であることは間違いないであろう。その意味において、当委員会の責任は重大である。

変動する社会のなかで、当会会員と読者とが「建築と社会」に何を求めているのか。当編集委員会にいま必要なことは、当会の存続の意義を含む、四半世紀振りの論議であるように思う。

出版事業

創立60周年を記念して出版された「建築技術選書」以降、本会の出版物は主として出版委員会で企画されている。

戦後、他の常設委員会企画の図書も出版されているが、それらも含め一覧を下表に示す。

出版図書一覧表

発刊年	図書名	編・著者名
1949	実際に役立つ鋼構造の計算 地震とその対策の常識	伴　潔他 協会・災害委員会
1950	伸びる家と住まい方	左記表題の展覧会委員会
1952	プラスチックとビニロン アスファルト防水工事とセメント防水工事 建築衛生設備	協会・出版委員会 アスファルト同業会・近畿セメント防水協 上林博雄他
1953	これからの住宅図集（35周年記念出版） 大阪付近地質図表（35周年記念出版）	35周年記念事業委・出版部会
1954	建設資料便覧（　〃　）	〃
1954 1956	鉄筋コンクリート施工指針 〃	奥島正一他 〃
1955	漏電とビルのダクト火災とその対策	氏原岩雄・真砂野 昭・竹口信夫
1954 1956 1960	建物および設備の保全 〃 〃	奥島正一他 〃 〃
1959 1960	左官工法指針 〃	谷口尚武・山田幸一 〃
1957	建築塗料	左記表題の編集幹事会
1958	建築技術者のための空気調和と電気設備	左記表題の編集幹事会
1959	床の仕上 鉄骨構造計算と実例	左記表題の編集小委員会 石崎發雄・編集幹事会
1960	工高生デザインコンクール入選作図集	左記表題の編集委員会
1961	鉄骨・鉄筋コンクリート構造設計実例集	左記表題の編集委員会
1962	ふるさとのすまい（45周年記念出版） 建築基準法及び関係法規早見一覧表	45周年記念出版委員会 西島　勇
1963	新住宅設計コンクール優秀作品図集	住宅委員会
1965	住まいの手引	左記表題の編集委員会
1966	左官工法指針・改訂増補版 建築技術者のための電気設備	谷口尚武・山田幸一 左記表題の編集委員会
1967	建築の風力係数	石崎發雄
1969	設備技術者のための建築知識 鉄骨のデザイン（増刷） 鉄骨のデザイン（普及版）	左記表題の編集委員会
1970	鉄骨のデザイン（50周年記念事業）	左記表題の編集委員会
1971	建築基礎工法と実例	左記表題の編集委員会
1976	ふるさとのすまい（復刻版） 鉄筋コンクリート構造物の耐震安全性	出版委員会 山田　稔
1978	建築データシートハンドブック 60周年記念出版「建築技術選書」 1．茶室の話 2．ビルの省エネルギー 3．マイコンによる構造設計のすすめ 4．都市の下水処理 5．すまいの語録 6．コンクリート工事の管理 7．構造計画とやさしい力学(1) 8．建具の知識と意匠	建築データシート委員会 岡田孝男 中村　猛 魚木晴夫 松永一成 茶谷正洋 奥島正一 須賀好富 山片三郎
1979	9．エレベータ・エスカレータ・立体駐車場 10．構造計画とやさしい力学(2) 11．建築と設備の接点(1) 12．ソーラーハウス 13．医院・診療所の計画と設計 14．設計のコンピュータ手法 15．PC 建築の話 16．石垣と石積壁	木村利雄 須賀好富 日建設計・接点研究会 内山武夫 池田有隣・船越暉由 飯塚英雄 下伊豆隆三 窪田　祐
1980	17．基礎と地盤の手ほどき 18．ショッピングセンターの計画 19．住宅設計とインテリア 20．タイルの話 21．住宅の家具 22．建築と設備の接点(2)	中堀和英 西脇顕正 福岡喜久雄 田中　弘 光藤俊夫 宮脇 毅・久保富士治
1981	23．設備技術者のための建築再入門 24．鉄骨構造の話 25．建物の断熱と防湿 26．建物と地震災害 27．初級技術者のための建築積算業務 28．建築金物の知識	光安義光 金多　潔・甲津功夫・西澤英和 宮野秋彦 竹内吉弘・島田耕一 生島道春 立野一郎
1982	29．瓦と屋根構造 30．住宅三備心得帳 31．住宅のエレクトロニクス 32．建物塗装の手引 33．建築式典の実際	佐藤滋朗 平田純一 監修／小林　郁 児島修二 若林嘉津雄
1983	34．建築設計と高齢者・身障者 35．高層集合住宅の維持管理 36．日本壁 37．身近な耐震設計法	吉田あこ 福嶋孝之 山田幸一 前川陽一

発刊年	図書名	編・著者名
1984	＜プロのノウハウ＞シリーズ	
	・TQCから見た建設業	荒木睦彦
	・建物の値打ちの高め方	小林清周
	・躯体工事監理のチェックポイント100	須賀好富
	・パソコン会計術	西部明郎
1985	・空調設備のトラブル50	建築設備トラブル研究会
	・衛生設備のトラブル50	〃
	38．住宅の照明	監修／大島　博
	＜特装本＞	
	・火災安全学入門	岡田光正
	（再版）近代建築ガイドマップ	協会･若い会員の集い小委
1986	＜プロのノウハウ＞シリーズ	
	・現場マンのアイデア発想	合原一夫
	・建築基準法の実際	矢吹茂郎
1987	「建築技術選書」＜特装版＞	
	・構造コストと経済設計	須賀好富
	・建築設備の健康診断	牧野　茂
	・新・建築と設備の接点	宮脇　毅・南部　武
	・外壁構法チェックリスト	飯塚五郎蔵
	＜プロのノウハウ＞シリーズ	
	・工務店の税金対策100ポイント	建設税務研究会
	・工業化住宅・考ーこれからのプレハブ住宅	松村秀一
	・鉄骨工事の現場学	石田満裔
	・建築紛争の実際	岡本辰義
1988	＜プロのノウハウ＞シリーズ	
	・仕上げ工事監理のチェックポイント	日建設計･監理業務研究会
	・ゼロ災への道ー建設現場の安全管理活動	表　一郎
	・木造住宅のしくみー在来工法の基本と応用	浅野平八・東　敏博
1989	＜プロのノウハウ＞シリーズ	
	・コンクリート工事のチェックポイント100	加賀秀治
	・インテリアコーディネート100ポイント	町田ひろ子監修／松本　茂・村元俊子
	・建築基準法を読みこなすコツ	高木任之
1990	建築技術選書＜特装版＞	
	・場所打ち杭の設計と施工	阪口　理
	＜プロのノウハウ＞シリーズ	
	・ニュー組積建築のすすめ	福嶋孝之他
1991	＜プロのノウハウ＞シリーズ	
	・木づくりの常識非常識	上村　武
	75周年記念事業	教育委員会工高生教
	・工高生デザインコンクール入選作品集	育小委員会
1992	建築技術選書＜特装版＞	
	・建築と緑	瀧　光夫
1993	建築技術選書＜特装版＞	
	・入門・建築積算	生島道春
	＜プロのノウハウ＞シリーズ	
	・建築物の消防法を読みこなすコツ	高木任之
	・新版・建築基準法を読みこなすコツ	高木任之
	編集委員会企画	
	・建築設計者のための設備知識	協会編集委員会設備分科会
1994	建築技術選書＜特装版＞	
	・建築・都市・住宅・土木／情報アクセスブック	菊岡倶也
	・水にまつわるトラブルの事例・解決策　＜建築編＞	「建築漏水」編集委員会
	・水にまつわるトラブルの事例・解決策　＜設備編＞	「建築漏水」編集委員会
1995	＜プロのノウハウ＞シリーズ	
	・建築基準法を読みこなすコツ	高木任之
	・都市計画法を読みこなすコツ	高木任之
	・鉄筋工事・本音の現場学	荒川治徳
1996	＜プロのノウハウ＞シリーズ	
	・建築基準法の難解条文を読みこなすコツ	高木任之
	建築技術選書	
	39．先輩からのメッセージー建築を志す人々へー	出版委員会

講習会活動

■講習会等

下表は、主として教育委員会が主体となって実施した講習会である。現在も開催されている「実務講習会」については、P.69に示す。

年度	事業の内容
1920	「第一回講習会」　11月4日～11月20日
	・古代エジプトの文化と建築(西洋建築史)／佐藤四郎
	・大倭時代の文化と建築（日本建築史）／置塩　章
	・住宅に就いて／葛野壮一郎
	・鉄骨構造法／本多二郎
	・鉄筋コンクリート構造法／増田　清、鉄筋コンクリート施工法／波江悌夫
1922	「建築に関する講習会」　3月20日～3月31日
	・鉄筋コンクリート強度計算法／伊藤正文
	・建築法規／池田　實、中澤誠一郎
	・鉄筋コンクリート施工法／増田　清
1923	「建築に関する講習会」　3月19日～3月31日
	・鉄筋コンクリート構造主要部の耐震的強度計算法／八木幸次郎
	・鉄骨構造主要部の耐震的強度計算法／関場茂樹
1924	「建築職工教化講習会」　11月4日～11月18日
	・鉄筋コンクリート起源其他概論／波江悌夫
	・局部仮枠構造法／下浦光衛
	・仮枠用材及器具、仮枠材仕上及接手／中島智喜
	・仮枠取外期限並びに其他取外方法／本多二郎
	・仮枠施工法のコンクリート建築に及す影響／八木幸次郎
	・鉄筋用材及び其種類と強度／井上新二
	・鉄筋用器具並びに取外方法／渡部圭吾
	・鉄筋の配置と接合方法／中島智喜
	・鉄筋施工法の建築に及ぼす影響／八木幸次郎

年度	事業の内容
1925	・コンクリート用材及び其調合と強度／下浦光衛 ・コンクリート器具並びに其取扱方法／渡部圭吾 ・コンクリート施工法の建物に及ぼす影響／増田　清 ・コンクリート施工法／谷口廉児 ・震災時に対する鉄筋コンクリート建築物の成績実例／波江悌夫
1926	「混凝土施工法講習会」　11月８日～11月13日 ・混凝土施工上の注意に就いて／下浦光衛 ・コンクリートの調合に就いて／八木幸次郎 ・地震と建築／波江悌夫
1927	「建築職工講習会」　10月24日～10月29日 ・技術者の責務に就いて／下浦光衛 ・壁構造の種類／池田宮彦 ・壁の仕上／松本儀八 ・内外美的装飾工法／安井武雄
1928	「地下室基礎工事及び防火施工法講習会」 10月22日～10月27日 ・工人と其責務／古宇田　實 ・隣家養生に関する法規上の諸問題に就いて／服部 ・ショベル及び其他掘方器具の研究、土砂運搬器具機械及び装置に就いて／渡部圭吾 ・土留工及び掘方／下浦光衛 ・地形及び杭打ち工事／池田宮彦 ・アスファルト防水施工法／松井 ・防水材料の種類及び其施工法／矢中
1929	「建築職工講習会」　５月10日～５月16日 ・鉄筋コンクリート構造法（基礎の設計）／落藤藤吉 ・最近木造建築／東畑謙三 ・積算一般／芝田知重 ・家具の意匠構造様式の関係／松本儀八 「建築職工講習会」　10月21日～10月26日 ・工人の責務／武田五一 ・建築用機械に対する一般的注意／大原源次郎 ・最近仮枠の施工法／池田巳之助 ・塗工種及び工法上の注意／藤岡英太郎 ・杭打機械ミキサー、エレベーター、シュート、デレッキ等の種類及び使用法／大原源次郎 ・プラスター漆喰等の実際的工法、施工器具／亀井芳松 ・塗工仕上げ法に関する各種法／亀谷開作
1930	「建築講習会」　５月19日～５月24日 ・近代建築様式概論／岡田孝男 ・強度計算／落藤藤吉 ・建築法規／玉置豊次郎 ・建築工事設計及び施工上の注意／葛野壮一郎、小笠原釗・安井武雄 ・建築付帯工事／原田正逸・萩原　貞・中島彦六・椎原兵市
1931	「建築職工講習会」　10月９日～10月14日 ・規矩術の概要／小島淳吉 ・プラスター工事／渡部圭吾 ・最新の防水工事／坂口芳三郎 ・輸入木材／芝田知重
1936	「建築に関する電気溶接講座」　10月５日～10月10日 ・電気溶接概論／岡田　実 ・電気溶接建築設計及び法規／浅野新一 ・電気溶接施工法／関場茂樹

年度	事業の内容
1942	「防火改修技術講習会」　11月12日～11月14日 ・火災の話／川勝技師 ・関係法規(1)／岡田技師 ・関係法規(2)／中村（吉）技師 ・防火改修工事概要／中村（収）技師 ・防火改修設計の方法に就いて／小泉技師 ・工事監督に就いて／栗本技師
1948	「セメント新規格講習会」　12月16日 ・セメント、雑用セメント、石灰スラブセメントに就いて／笠井 ・セメント代用土標準施工、コンクリートモルタル試験方法に就いて／浜田　稔
1949	「建築代理業者受験講習会」　10月３日～10月９日 「実際すぐ役立つ鋼構造の講習会」　11月18日 ・部材力の算定に就いて／小泉　昇 ・断面決定／高橋慶夫 ・細部の計算／小西　岬 「実際すぐ役立つ鋼構造の講習会」　12月７日
1950	「簡易耐火構造施工講習会」　８月21日～８月26日 ・一般概説／堀口甚吉 ・法規関係／五百蔵芳明 ・施工関係／酒井勇三郎、作間日出生、徳洋、佐々木俊明
1951	「建築講習会」　10月17日～11月12日 ・建築計画／足立　孝・田中良太郎 ・建築構造／馬場善雄・布施忠司・伴潔 ・設計製図／岡橋作太郎・城武三郎 ・建築施工／菅田豊重・作間日出生・岡　肇・政岡基次 ・建築関係法規／越田正勝・五百蔵芳明
1952	創立35周年・記念事業各地建築講習会 ５月～11月まで、松江、下関、福岡、長崎、熊本、和歌山、神戸、鳥取、岡山、広島、名古屋、大阪で開催
1953	「建築講習会」　５月25日～６月９日 「防災と予防のゼミナー」　７月20日 「建材と設備ゼミナー」　８月13日 「建築技術映画研究の夕」　９月４日 「アメリカ建設技術映画の会」　９月24日 「建材セミナー」　12月５日 「色彩管理技術講習会」　３月29日～３月31日
1954	「建築講習会」　５月28日 「コンクリート技能講習会」　８月20日～８月29日 「コンクリート技能講習会」　11月２日～11月６日
1955	「トリゾール説明会」　６月10日 「建築講習会」　７月８日～７月21日 「コンクリート技能講習会」　９月10日～９月30日 「新しい防水説明会」　10月７日
1956	「左官工法（工事）講習会」　10月25日、11月５日 「コンクリート技能講習会」　11月26日、11月30日 「コンクリート技能講習会」　12月３日、12月７日
1957	「左官工法（工事）講習会」　11月19日、11月22日 「コンクリート技能講習会」　10月14日、10月25日
1958	「左官工法（工事）講習会」　７月15日、７月17日 「コンクリート技能講習会」　10月６日、10月14日 「空気調和設備と電気設備講習会」　11月17日、11月21日

年度	事業の内容
1959	「鉄骨計算と実例講習会」　2月27日 「鉄骨計算と実例講習会」　3月11日
1960	「鉄骨計算と実例講習会」　4月25日、4月27日 「鉄骨計算と実例講習会」　5月11日、5月13日 「空気調和設備と電気設備講習会」　11月17日、11月29日
1962	「左官工法（工事）講習会」　7月31日
1963	「左官工法（工事）講習会」　7月31日
1964	「現場主任講習会」　8月21日、8月23日
1965	「現場主任講習会」　8月5日、8月6日
1966	「左官工法（工事）講習会」　7月28日

■実務講習会等

建築技術者を対象にした実務講習会は、1957年に第1回を実施、以来毎年開催されている。また、出版を記念した講座や法改正にともなう実務的な講習会も適宜開催されている。

年度	事業の内容
1957	「現場管理実務講習会」　9月3日～11月29日
1958	「現場管理実務講習会」　10月2日～11月29日
1959	「現場管理実務講習会」　6月16日～7月14日
1960	「現場実務講習会」　8月8日～8月22日
1961	「現場実務講習会」　6月12日～6月26日
1962	「現場実務講習会」　9月17日～10月2日 「現場実務講習会」　10月22日～11月10日
1963	「現場実務講習会」　6月11日～6月29日
1964	「現場実務講習会」　6月4日～6月11日 「現場実務講習会」　6月12日～6月19日
1965	「現場実務講習会」　6月14日～6月21日 「現場実務講習会」　6月25日～7月1日
1966	「現場実務講習会」　6月13日～6月18日 「現場実務講習会」　6月20日～6月25日
1967	「現場実務講習会」　11月6日～11月11日 「鉄骨構造設計講習会」　2月9日
1968	「鉄骨構造設計講習会」　5月11日～5月24日 「建築工事実務講習会」　6月17日～6月22日 「建築工事実務講習会」　7月1日～7月6日 「鉄骨構造設計講習会」　8月25日～8月27日 「鉄骨構造設計講習会」　10月25日
1969	「建築工事実務講習会」　6月30日～7月5日 「建築工事実務講習会」　7月7日～7月12日 「建築工事実務講習会」　10月29日 「建築工事実務講習会」　11月6日
1970	「やさしい建築の知識」　5月14日～5月15日 「建築工事実務講習会」　6月15日～6月20日 「建築工事実務講習会」　6月27日～7月3日 「鉄骨構造設計講習会」　8月20日 「鉄骨構造設計講習会」　10月8日～10月9日 「実務に直結した建築工事講習会」　1月27日 「実務に直結した建築工事講習会」　3月5日
1971	「建築工事実務講習会」　7月19日～7月24日 「建築工事実務講習会」　7月26日～7月31日 「実務に直結した建築工事講習会」　9月22日
1971	「建築へのCAD利用講習会」　11月1日～11月25日 「実務に直結した建築工事講習会」　3月8日 「建築基礎工法と実例講習会」　3月31日
1972	「建築工事実務講習会」　6月28日～7月4日 「建築の風力係数」　7月17日 「建築基礎工法講習会」　8月25日～8月26日 「建築基礎工法講習会」　9月22日 「建築基礎工法講習会」　10月2日 「建築基礎工法講習会」　10月28日 「建築基礎工法講習会」　11月28日 「建築工事実務講習会」　3月27日
1973	「建築工事実務講習会」　6月11日～6月16日 「建築工事実務講習会」　6月25日～6月30日 「実務に直結した建築工事説明会」　10月19日 「建築基準法令等改正説明会」　11月28日 「建築基準法令等改正説明会」　12月11日 「実務に直結した建築工事説明会」　3月5日
1974	「建築工事実務講習会」　5月24日～5月30日 「建築工事実務講習会」　6月20日～6月28日 「建築基準法令等改正説明会」　11月29日
1975	「建築工事実務講習会」　10月15日 「建築工事実務講習会」　10月21日
1976	「鉄筋コンクリート構造物の耐震安全性」　8月30日 「鉄筋コンクリート構造物の耐震安全性」　9月21日 「建築工事実務講習会」　10月19日
1977	「建築工事実務講習会」　10月12日 「建築基準法令等改正説明会」　10月19日 「建築基準法令等改正説明会」　10月24日
1978	「日影規制に関する講習会」　4月11日 「日影規制に関する講習会」　5月15日 「宮城沖地震災害報告会」　9月7日 「建築工事実務講習会」　10月3日 「建築技術選書講座「茶室の話」」　10月20日 「ブロック塀設計施工技術講習会」　11月24日～12月8日 「実務家のための日影研修会」　2月20日
1979	「構造計画とやさしい力学」　6月19日 「建築設計と新耐震設計法」　9月12日 「建築工事実務講習会」　10月12日 「建築とコンピュータ」　10月19日
1980	「ソーラーハウスについて」　5月22日 「建築と設備の接点1」　6月12日 「建築計画における省エネ法案の実践的対応」　7月3日 「病院・診療所の計画と設計」　8月19日 「建築工事実務講習会」　10月14日 「コンクリート工事の管理」　11月19日 「構造計画とやさしい力学」　2月19日
1981	「建築と設備の接点2」　7月24日 「建築工事実務講習会」　10月20日 「建築工事実務講習会」　11月11日 「建築への太陽熱利用研修会」　11月25日 「四会連合『建築工事請負契約説明会』」　3月4日
1982	「鉄骨構造の話」　8月24日 「建築工事実務講習会」　12月7日 「コンピュータの建築への利用」　3月8日 「建築工事実務講習会」　3月28日

年度	事業の内容
1983	「建築工事実務講習会」　10月19日 「集合分譲住宅における品質保証に関する研修会」　11月16日 「建築工事実務講習会」　11月29日
1984	「建築工事実務講習会」　９月11日 「建築工事実務講習会」　11月13日 「建築工事実務講習会」　２月26日
1985	「建築工事実務講習会」　９月19日 「建築工事実務講習会」　11月27日
1986	「建築工事実務講習会」　10月21日 「建築工事実務講習会」　３月18日
1987	「建築工事実務講習会」　12月６日
1988	「建築工事実務講習会」　12月２日 「建築工事実務講習会」　２月３日
1989	「建築工事実務講習会」　12月６日 「これからのガラスーハイテクからローテクー」　２月５日 「建築設備の健康診断」　２月27日
1990	「建築工事実務講習会」　７月11日 「建築工事実務講習会」　９月27日
1991	「建築工事実務講習会『施工計画』編」　８月28日 「建築工事実務講習会『積算・仮設見積』編」　９月25日 「建築工事実務講習会『施工計画』編」　10月９日 「建築工事実務講習会『積算・仮設見積』編」　〃 「建築工事実務講習会『施工計画』編」　10月30日 「建築工事実務講習会『積算・仮設見積」編」　〃
1992	「建築工事実務講習会『施工計画』編」　９月２日 「建築工事実務講習会『積算・仮設見積』編」　９月16日 「建築工事実務講習会『施工計画』編」　10月14日 「建築工事実務講習会『積算・仮設見積編』」　〃
1993	「建築工事実務講習会『施工計画』編」　６月22日 「建築工事実務講習会『積算・仮設見積編』」　６月30日 「建築工事実務講習会『施工計画』編」　９月８日 「建築工事実務講習会『積算・仮設見積編』」　９月21日 「建築工事実務講習会『施工計画』編」　９月29日 「建築工事実務講習会『積算・仮設見積編』」　〃
1994	「建築工事実務講習会『積算・仮設見積編』」　６月15日 「建築工事実務講習会『施工計画』編」　６月22日 「建築工事実務講習会『施工計画』編」　９月８日 「建築工事実務講習会『積算・仮設見積編』」　９月21日 「建築工事実務講習会『施工計画』編」　10月６日 「建築工事実務講習会『積算・仮設見積編』」　〃 「建築工事実務講習会『施工計画』編」　11月９日 「建築工事実務講習会『積算・仮設見積編』」　〃
1995	「建築工事実務講習会『施工計画』編」　６月27日 「建築工事実務講習会『積算・仮設見積編』」　６月30日 「建築工事実務講習会『施工計画』編」　９月14日 「建築工事実務講習会『積算・仮設見積編』」　９月19日 「建築工事実務講習会『施工計画』編」　10月３日 「建築工事実務講習会『積算・仮設見積編』」　〃
1996	「建築工事実務講習会『施工計画』編」　９月12日 「建築工事実務講習会『積算・仮設見積編』」　９月19日 「建築工事実務講習会『積算・仮設見積編』」　10月３日 「建築工事実務講習会『施工計画』編」　〃 「建築工事実務講習会『施工計画』編」　２月25日 「建築工事実務講習会『積算・仮設見積編』」　〃

創立記念事業一覧

■創立15周年記念事業　1932年度

（１）住宅博覧会開催

・緑ケ丘博覧会　1932年10月10日～11月10日

・大美野田園都市住宅博覧会　1932年10月

・上野芝住宅博覧会　1933年５月15日

・瑞光住宅博覧会　1933年９月15日～10月１日

（２）建築博覧会開催

住み良い家の博覧会　1932年11月１日

（３）建築通俗大講演会　1932年11月２日

（４）各地並びに海外視察旅行

・大阪を中心とした近畿地方／九州方面見学／東京方面見学

・四会連合建築大会及び満州見学旅行

・台湾見学旅行

（５）「建築と社会」記念特輯号の発行

（６）記念図書の出版

（７）建築会館建設企画（実現せず）

■創立25周年記念事業　1942年度

（１）展覧会

・厚生住宅展　1942年10月10日～11月10日

・住宅展　1942年10月

・防火改修展　1943年５月15日

・建築と防空展　1943年９月15日～10月１日

・南方建築展

・女性と住生活展

（２）防空講演会

（３）戦乱の欧州から帰りて

（４）防火改修講習会

（５）見学会

（６）記念式典

（７）慰霊祭

（８）防空研究事業への参加

■創立35周年記念事業　1953年度

（１）慰霊祭

（２）住宅展

（３）見学会

・名古屋方面／岐阜白川方面／小豆島／京都

（４）表彰式

（５）祝賀会

（６）講演講習会

松江、下関、福岡、熊本、長崎、和歌山、神戸、鳥取、岡山、広島、名古屋、大阪の各地区で開催

■創立45周年記念事業　1961年度

（1）記念式典、表彰式、祝賀会
（2）慰霊祭
（3）会員余技作品展ー油絵、墨絵、水彩画、日本画、生け花ー
（4）特別見学会
・大阪市内建築見学／京都名園巡り／鎌倉と鞆のタイ網を見る会／黒部峡谷と発電所を見る会
（5）運動会
・懇親ゴルフ大会／懇親ソフトボール大会
（6）住宅講演会の開催
（7）記念講演会の開催
（8）記念出版「ふるさとのすまい」日本民家集

◇　創立50周年記念事業　1967年度

（1）記念式典、表彰式、祝賀会
（2）展覧会「関西の建築50年回顧展」
（3）慰霊祭
（4）運動会
・懇親ソフトボール大会／懇親ゴルフ大会／ボーリング大会
（5）記念講演会／講師：西山夘三
（6）見学会
・モントリオール万国博視察
・東京見学／淡路と高松の見学／阪神地方見学／京都地方見学／中国地方見学／信州路の民家見学
（7）記念出版
・建築データシート発行
・「鉄骨のデザイン」刊行
（8）「建築と社会」50周年記念号の発刊
（9）50周年記念物建造のための大阪城公園内に建つ休憩所のデザインコンクール

■創立60周年記念事業　1976年度

創立60周年の記念日を迎えたが、時節柄、ささやかな祝賀会のみを開催。

日時/1977年3月30日(水)午後6時～7時　場所/太閤園

■創立70周年記念事業　1986年度

（1）記念式典、表彰式、祝賀会
（2）講演会／講師：山崎正和
（3）日本建築協会賞の創設
（4）「住まいの絵本」の編集、出版
（5）「昭和生まれ関西の建築家50」の出版
（6）「住宅近代化への歩みと日本建築協会」の出版
（7）「建築と社会」記念号・会員名簿の発行
（8）ヨーロッパ研修旅行「ふたつの世紀末の建築を訪ねて」
（9）プロのノウハウシリーズセット記念セール

■創立75周年記念事業　1991年度

（1）「建築と社会」創刊～昭和30年12月号復刻
（出版：不二出版）

■創立80周年記念事業　1996年度

（1）記念式典、表彰式、祝賀会
（2）講演会／講師：清家　清
（3）日本建築協会賞の顕彰
（4）「建築と社会」記念特集号の発行
（5）「建築を志す人々へ」の出版
（6）大阪市事業の受託および協賛
（7）協会80年史の編纂

社会活動

■博覧会・展覧会

創立わずか5年後、日本建築協会は大正時代最大の活動「住宅改造博覧会」を自ら企画立案し、開催にふみ切った。

当時、日本経済の成長によって、東京・大阪への人口流入が進み、また、中産階級、知識階級が拡大する時代であった。しかし、欧米文化に刺激され、生活改善運動が叫ばれていたものの、生活様式、建築計画方法はいまだ混沌として、住宅は量的にも不足していた。

一方、当協会は創立時代より社会とのかかわりのもとに住宅政策、都市計画の研究に積極的に参画していた。

そのような空気が芽生えて、この大事業に踏み切ることになったものと思われるが、当初は天王寺公園で開催を予定していたものが、当時郊外住宅地として開発経営されつつあった箕面市桜井につながる敷地を借り入れることに決定した。ここに住宅に関する陳列場を設けるほか、実物住宅として建設業者、設計事務所より出品を協賛させるとともに、協会が懸賞募集した改良住宅案に基づいた住宅25棟を展示、博覧会終了後一般に分譲するという異色の事業を行ったのである。

この博覧会が、全く国の力を借りないで一つの協会の主導のもとに建築関係業者が奮い立って寄付金を集め、協賛を得てわが国の建築界の近代化を示したことはまことに有意義であり、日本建築協会を世に知らしめた出来事であった。

この博覧会は好評を得て、その後、私鉄沿線住宅開発地において本会主催または共催による住宅実物出品、図面及び模型その他参考品の出展は、戦時下の一時期を除いて終戦後の復興展覧会を含め、しばしば開催され、住宅の質の向上、合理化改善に大いに貢献することができた。このころについての詳細は、本会の70周年記念出版「住宅近代化への歩みと日本建築協会」に詳述されている。

年度	主な活動
1920	改良住宅設計展覧会 生活改造博覧会
1922	桜ケ丘住宅改造博覧会
1923	第２回家庭博覧会 能率展覧会
1924	大阪記念博覧会
1925	神戸納涼博覧会
1928	建築知識普及展覧会 生活改善展覧会
1929	貸家建築展覧会
1930	名古屋庁舎設計図案展 産業合理化展覧会 婦人と住宅に関する展覧会
1931	香里園改善住宅博覧会 神戸鈴蘭台生活改善住宅展
1932	大美野田園住宅博覧会 緑ケ丘保健住宅博覧会 住みよい家の展覧会
1933	上野芝住宅博覧会 瑞光住宅博覧会 千里山住宅博覧会
1934	大空への武装展覧会
1939	時局と建築材料展
1940	建築文化展覧会
1941	市民防空濠展覧会 戦時体制下の建築展覧会
1942	菖蒲池厚生住宅展覧会 建築と防空展覧会
1943	南方建築展覧会 女性と住生活展覧会
1946	復興住宅展覧会
1947	大阪市公館懸賞入選図案展示会
1949	これからの住宅展
1950	伸びる住宅展覧会
1952	羽衣住宅展示会 これからの住宅展
1953	燃えない都市建築展

■講演会

本会創始時の理想は、都市計画と建築法規の制定並びに住宅改良等、建築家として取り組まねばならない問題とさらに社会と建築のかかわりをいかに市民に理解してもらうかということであった。そのため、博覧会、展覧会とともに、市民を対象とした通俗講演会が考えられ、1918年12月５日、第１回講演会が聴衆2000人を集めて大阪市中央公会堂で開催された。その後、都市計画、住宅の知識、欧米旅行談、また、但馬地震の後にはその報告等が数年にわたり催され、市民の啓蒙に役立った。このように、昭和初期までは通俗講演会が主流で、その講演会内容は、第２章委員会活動の項「會勢委員会」で触れている。

■よろず相談住宅展

戦後、荒廃した国土復興のため、都市復興論文コンペ、天王寺区復興コンペと次々に新大阪建設のための提案が、再刊をはたした「建築と社会」の誌面を賑わせたが、住宅委員会も早々に復活し、住宅復興のために“住宅金庫設置”についての具体的提案を行った。また、単に住宅供給だけにとどまらず、『これからの住宅展』や『羽衣住宅展』などを開催。積極的に、これからの住宅のイメージを提案、戦前からの住宅改善運動を復活、さらに前進させた。

昭和30年代も半ばになると、戦後の住宅復興も一段落し、本格的な住宅環境を目指しての、千里丘陵の開発をはじめとする大規模団地開発が軌道に乗ってきた。一方、高度成長により大都市への人口の集中が起こり、乏しい給与、わずかな貯えで、何とか家を求めたいという層も増加した。

このなかで、どこへ、誰に相談したらよいのか悩んでいる人々に、何らかの解決の足掛かりがつくれないかとの思いが重なり、住宅委員会で1964年、住宅相談所の開設が企画された。

相談員は住宅委員の無料奉仕ということで理事会の承認も得たが、具体化には、会場、開催期間、資金面と困難なことが多かった。しかし、委員の努力で６月18日・19日の２日間『住宅よろず相談所』として、阪神百貨店７階を会場として無料相談所の開催にこぎつける。当時の記録によると、理事会での承認を得て、２日間ぐらい開いて反響を見ようとしたが、心配も杞憂に終わり、午前10時のデパート開店に相談員の委員が到着するより早くお客がどっと入場して、受付係がてんてこ舞いのうれしい悲鳴を上げる朝の状況。どちらを向いても相談を目的とした人たちで、真剣な質問に答える委員も、ひと休みのお茶すら飲まず応対が続く。なかには２～３時間もねばられ、家の図面持参であれこれ質問される等々…。

第１日250件、第２日224件の各種相談があり、この企画



は大成功であった。そして、8月には高島屋デパートの朝日新聞社主催の「くらしの夢新しい住まい展」住宅相談コーナー、10月には国際見本市会館の大阪建設業協会主催の「建設資材展」住宅相談コーナーにも招聘を受け、委員一同出席、協力活動を行った。

翌1965年からは、前回の実績をふまえ、住宅相談所と材料・資材等を展示した住宅展を併設する形で、毎年開催することとなった。

1967年の記録によると、第4回よろず相談住宅展は7月13日～18日の6日間、阪神百貨店8階で開催された。住宅よろず相談所では、マイホームの夢を描いた設計図を携えて、3時間余りも熱心に指導を受ける人たちや、増改築の諸問題、建設コスト、分譲住宅、分譲宅地、資金融資、税金、登記手続き、民事事件などの相談で連日活況を呈した。また、分譲住宅会社の相談コーナーにおいても具体的な実のある相談も多かったようで、高価なパンフレット類も相当量配付され、材料および資材の展示小間も入場者で賑わった。会期中の総入場者は4万人を超え、「住宅よろず相談所」で扱った相談は1603件を数えたとある。

このように市民の期待に応え大盛況であった「よろず相談住宅展」も、昭和50年代のマンションブームや、ハウスメーカー、住宅機器メーカー等に常設の住宅相談窓口が開設されて、年に一度の協会主催展への期待も減じたことから、1981年18回展を最後に幕を閉じ、住宅委員会もまた1983年度でその役割を終えた。

その後、バブル期に人手不足等のため欠陥住宅問題がクローズアップされたとき、協会として、住宅問題をさらに継続していれば、欠陥問題にも早く対処し、社会に奉仕できたのではなかったかと惜しむ声も多い。

建議・陳情・意見書

当時、世界の共通現象である都市膨張の傾向はわが国においても同様で、特に第一次世界大戦の影響で工業の発展はその勢いを加え、多くの都市が急激な膨張を始めた。しかし、わが国には都市計画的にはこれに対処する準備がなかったため、工場は所構わず濫設され、郊外地もまた不用意に開発されたため住宅の不足はスラム地区の発生を誘発する。また、大都市においては建築物に高層化の傾向が生じ、局部的には交通の集中化を来してきた。

当協会は発足時よりこのような現象を考え、都市問題、住宅政策、良好なる住宅の研究を目指していたため、建築学会、都市協会、日本建築士会等と相はかり、また、独自で都市改造の急務、建築を具現化するための法的根拠となるものの立法化について建議・陳情を行った。そのことが実り、市街地建築物法、都市計画法が1919年4月に公布された後も、建築の重要事項、安全対策等について研究を行い、国に対し、大阪府に対してしばしば建議・陳情を行って都市の正常な発展に寄与してきた。

以下に、「建築と社会」1953.Vol.34　No.12「創立35年記念史」特集より、発送先、建議、陳情および申請するについての理由、主旨等を復刻する。

△　**大正7年2月**

内閣総理大臣　伯爵　寺内正毅　殿

日本建築学会長、工学博士　辰野金吾。日本建築士会々長　工学博士　長野宇平治。関西建築協会理事長　片岡　安。都市協会幹事　藤原俊雄。

△　**都市建築法令調査会に関する建議**

意見書（概略）　我国重要都市に対し速かに建築法令制定を希ひ其制度に関する調査会を設置するの要なるを認め上記各会連合の決議を齊らし、茲に建議す、願わくば清鑑を垂れさせられ御採納あらん事を切望の至りに勝えず。

理由（概略）　今后当然被る可き都市大火、震災、戦争等に依る大破壊を思い、我国重要都市の建築物の改良、制限、統一を以て都市の健全なる発達を計る事の急務を痛感するものである。故速かに我国の重要都市建築条令公布を希ひ、其制定備準の為調査会設置の急要なるを唱えるの所以なり。

△　**大正8年2月**

内閣総理大臣　原　敬　殿

日本建築学会々長　工学博士　曾弥、日本建築士会々　工学博士　長野宇平治、日本建築協会理事長　片岡　安、都市協会幹事　藤原俊雄

△　**都市計画法並に建築法案と陳情書**

陳情書（省略）都市計画法並に建築法の制定に依り我国の重要都市の改善せられん事の急要なるを認め、上記各会連合の決議を齊し茲に之を陳情す。

理由、都市発展は国力増進の重要なる基礎をなす、その発展の為に之が対策を講ずるは経国の要務にして都市利福の問題たるに止まらず、故に都市計画法並建築法の速かなる制定、実施を願ふものである。

△　**大正10年1月17日.**

大阪府知事　　池松時和　殿

日本建築協会理事長　　葛野壮一郎

建築物法施行細則に関する建議

建議書　日本建築協会は市街地建築物法施行令第拾四条に依る建築物の高さの最低限度を規定せられ、速かに実施せられん事を切望す。

理由（省略）欧米諸都市建築物の発達に鑑み、耐火

耐震、耐久建築物が要望される今日、土地利用を画策す可き機運到来し、地区整理　街路整屯と相俟ち高層建築物を必要とする時代となれり、茲に於て重要通路に面する建築物の高さの最低限度を規定する事の必要は勿論にして、之に於て速かなる実施を要望す。

△　大正10年8月

大阪府知事　池松時和　殿

日本建築協会副会頭　工学博士　片岡　安

市街地建築施行に関し仮設物建築許可の儀に付建議

建議書　市街地建築物の建築工事に関し其の建築線に接したる道路敷地上の空間に当該建築作業用仮設物（露台）の建設を許可せられん事は最も必要なる事と認む。以上本協会の決議に基き茲に仮建議候也。

理由（省略）　従来に於ける御取扱は建築工事に関する板囲及通路敷地使用の範囲は僅かに三尺以内に限定せられし為作業上の動作に極めて不便と不統一を感じ、之が為屢々事故等有り。然て大阪府下市街地建築施行に関し仮設物建築許可の御取扱を得度、茲に建議書提出す。

△　大正12年12月28日

当路各大臣

復興院総裁　宛

日本建築協会副会頭　工学博士　片岡　安

帝都復興に関する建議

建議書（省略）　日本建築協会は帝都復興に関し、下記事項を顧慮せられ速に適当の処置を採られん事を希望す。

理由（省略）　帝都復興に関しては国都百年の計を樹て之を理想となすの必要あると共に其実施せんとするには絶好の機会なりと確信す、故に茲に之を強張す。

△　大正14年12年23日

大阪府知事　中川　望　殿

日本建築協会々頭　工学博士　片岡　安

建築物構造強度計算の標準風圧力に就て建議

建議書。別記理由に依り下記風圧力を以て建築物構造強度計算の標準風圧力とせられん事を希望す。

（風圧力数字は省略す）

（理由省略。大正拾五年１月号　会務　参照）

△　昭和5年7月11日

大阪府知事　柴田善三郎　殿

日本建築協会々長　工学博士　片岡　安

大阪府劇場、寄席、観物場各取締規則改正に付建議

当協会に於て大阪府劇場、寄席、観物場各取締規則に関し調査研究の結果下記の通改正の必要之有と存じ茲に改正意見を具し及建議候也。

下記（省略）現在大阪府劇場其他興行場に対する取締規則は其構造設備等に於て木造建築物を主眼として制定せられたるものなる事は明かなる処にして、耐震耐火構造の進歩せる今日に於ては世の進運に伴ひ、根本的改正を加へ時代に適応したる取締方法を講ぜられん事を切望する次第なり。

（理由省略。昭和５年７月号参照）

△　昭和5年11月20日

内務大臣　安達謙蔵　閣下

日本建築協会々長　工学博士　片岡　安

大阪都市計画第二次防火地区指定の件建議

大阪都市計画第二次防火地区の指定は大阪市の現状に鑑み之が急務たるを認め当協会に於て調査研究の結果その指定区域に関し別紙図面表示の成案を得たるを以て上及建議候也。

理由（省略）現行防火地区は其の範囲狭少なる為、防火の目的を達成せんには不徹底なるを免れず、速かに第二次防火地区を指定し、都市防火の目的を達成する事は最も重要且つ緊要なりと確信し、以上強張す。（図面建議書中）

△　昭和6年2月3日

大阪府知事　柴田善三郎　殿

日本建築協会々長　工学博士　片岡　安

病院、産院取締規則改正の件建議

現行私立病院規則は数十年前の制定に係り、現行世態に沿わざるを認め之が改正は最も急務なりとし、当協会に於て研究審議の結果　同取締規則にして建議の構造並に設備に関する部分に対する改正の成案のものを得たるを以て上及建議候也。

理由省略（昭和６年３月号参照）

△　昭和6年3月30日

内務大臣　安達謙蔵　閣下

日本建築協会々長　工学博士　片岡　安

市街地建築物法令及規則改正の付に付建議

市街地建築物法令施行規則の改正の案成り、近くその発令せらるるやに聞く、関西に於ける建築関係者を以て組織せる我協会は曩に昭和２年２月及４月当局に対し該法規改正に関する意見希望を述べ其改正を促したり、今やその気運に際会し調査研究の結果別記の通改正意見及希望に開陳し、併せて当局の改正案を提示し当協会に諮問せられん事を懇請致候条、可然御詮議有之度此段及建議候也。

理由（省略）

近年建築物の構造設備は自ら著しき進境を伴い従来の法令及規則に付ても種々不便を生ずるを免れず。茲に当局に於て同法規則改正の要を認められたるは最も時宜を得たるものと信ず、此の機に当り従来の警視庁、学会偏重を排し、意見を広く天下に求め、且つ関西建築界発展に長年尽力し、唯一の民間建築家の代表機関たる当協会へ諮問を発せられん事を懇請するものなり。

（意見及希望　省略）（昭和６年５月号参照）

△　昭和6年11月

内閣総理大臣　男爵　若槻礼二郎　殿

内務大臣　安達謙蔵　殿

大蔵大臣　井上準之助　殿

日本建築協会々長　工学博士　片岡　安

建築職工夫失業救済に関する意見書

失業救済は我国目下緊急の社会事情たるは言を俟たず。

然るに救済事業の多くは日雇労働者の救済に限られ、熟練工を主体として施行せらる可き建築工事は全く閑却せらるるの実情にある事は憂慮に堪えず、建築工事関係熟練工には其種類数百に分れ、多年の日子と多大の努力に依り養成されたるものにして、彼等全般を通して失業者続出する時には社会不安、思想悪化を醸成するのみか、国家産業上一大損失たるを失わず、政府に於て斯かる窮状打開の為方途を講ぜられん事を要望す。

上総会決議に依り意見具陳候也。

△　昭和6年11月17日

大阪市長　法学博士　　関　一　殿

日本建築協会々長　工学博士　　片岡　安

大阪市下水道計画施設に関する建議

大都市衛生施設の改善進歩に従い、特に高層建築部の使用水量は予想せざる驚く可き多量に上りつゝあり。然るに大阪市に於ける下水道は従来雨水及諸用水の如きものの排水を基準とし計画施設せらるたるもの残存し、驟雨到る毎に市の中心地例へば梅田曾根崎警察前の如きに在りては想像に余りある状態なり。加ふるに高層建築物よりの多量の排水を合流する場合は推して知るべきのみ。斯くの如きは市民負担の増大、交通の阻害、道路の堀鑿等への支障を生ずべし。先般都市計画として決定せる下水道実施に対しては従来の施設の改良と、支流と雖も相当多量の排水に支障なき様万全を期せられん事を切望するものなり。上及建議候也。

△　昭和6年5月20日

大阪市長　　関　一　殿

日本建築学協会々長　　片岡　安

土地区画整理地区に於ける公園留保地に公園実施の件建議

大阪都市計画として既に公園計画決定し、当局に於ては着々その施行に努力せられ、之が実施の暁には市民の保健衛生及教化に寄与する処大なるものある可く実現の一日も早からん事を期して待ち居る次第に候、然し公園留保地は必ずしも公園計画計にあらずして単なる指定に止り公園を設ける何等の強制力もあるものにあらず、又将来に於ける其土地の維持管理に関しては何等の規定又は指示なく之が処分は組合の権限に属するを以て土地区画整理組合の解散に当り打算的立場より不当の処分をなさんと計画中のものあるやに聞く、依つて公園留保地を公園計画地として確実性を有せしめるの緊要なると同時にその土地を完全に公園として実現せしむるの方策を講ずるは急務中の急務と確信す。事情御賢察の上適当なる措置を講ぜられん事を切望する次第に御座候

△　昭和7年10月19日

内閣総理大臣　子爵　斎藤　実　閣下。　大蔵大臣　高橋是清　閣下　　男爵　山本達男　閣下。　外務大臣　伯爵　内田康哉。　鉄道大臣　三土忠造。　陸軍大臣　荒木貞夫　閣下。　海軍大臣　岡田啓介　閣下。　文部大臣　鳩山一郎　閣下。　司法大臣　小山松吉　閣下。　逓信大臣　南　弘　閣下。　商工大臣　男爵　中島久万吉　閣下。　農林大臣　後藤文夫　閣下。　拓務大臣　永井竜太郎　閣下。

日本建築学会々長　工学博士　大熊喜邦

日本建築協会々長　工学博士　片岡　安

各官庁司掌営繕事業促進に関する陳情書

要旨。　建築関係失業者救済上焦眉の急を要する方策として各官庁司掌新規営繕事業の企画並に既定継続営繕事業施行年度繰上等に依り全国に亘り建築を促進せられん事を望む。

△　昭和7年10月21日

内閣総理大臣　子爵　斎藤　実　閣下。　内務大臣　男爵　山本達雄　閣下。　大蔵大臣　高橋是清　閣下。逓信大臣　南　弘　閣下。

日本建築学会々長　工学博士　大熊喜邦

住宅建築助成並不良住宅改良促進に関する陳情書

要旨。時局匡救並建築関係の失業者救済に焦眉の急を要する方策として住宅資金の融通、都市の不良住宅地区改善事業及農漁村の不良住宅改善事業を促進せられん事を望む。

△　昭和7年12月19日

内務大臣　男爵　山本達雄　閣下

日本建築協会々長　工学博士　片岡　安

百貨店建築に関する建議

最近都市に於ける百貨店は急速に発展し、其の建築は漸次規模の大なるを競い、日夜数万の顧客を包容し都市大衆に最も密接なる関係に在る大機関たるに至れり、然るに本年16日帝都白木屋に於ける災害の報一度至るや全国民を恐怖せしめたる事多大なるものあり。思うに此の種建築物に対しては取締に関し、特殊の考慮を要するものなるを痛感す。須らく市街地建築物法令第14条に基き速かに百貨店建築の構造設備其他に関する特別規定の制定あらん事を切望して止まず。上及建議候也。

△　昭和8年1月9日

内務大臣　男爵　山本達雄　閣下。　大阪府知事　県忍　閣下。　大阪市長　法学博士　関　一　殿。

（各通）

建築協会々長　工学博士　片岡　安

大阪駅前整理事業に関する建議

大阪駅は大大阪の玄関として都市の相貌を印象する最も重要なる位置に拘らず附近一帯は実に名状すべからざる醜状を現出して交通繁激にして道路之に伴はず。建築物は矮小醜悪にして都市の美観を損し、１日も現状の儘に放任するを許さざるものあり。故に速かに之等の醜状を矯正し交通の緩和を図り建築物の整理を行う可き改善施設を為すの要を痛感す。上及建議候也。

△　昭和9年4月12日

北海道長官　佐山信一　殿

日本建築協会々長　片岡　安

函館市復興に関する建議

過去の災害の状況に鑑み防火地区等に相当厚みを有する集団式防火地区の必要なる事極めて明瞭なり。と存じ、

之が復興計画に当りてはシビックセンター及中央商業地区に対して数ヶ所の集団式防火地区を設定する事を以て災害防備の骨子とせざる可からずと存じ候。此段建議候也。

△　昭和9年9月18日

内閣総理大臣　岡田啓介　閣下。　内務大臣後藤文雄　閣下。　大蔵大臣　藤井真信　閣下。　大阪府知事　県　忍　閣下。　大阪市長　関　一　殿。　東京府知事　香坂昌康　閣下。　東京市長　牛塚虎造　殿。　京都府知事　斎藤宗宣　閣下。　神奈川県知事　横山助成　閣下。　兵庫県知事　白根竹介　閣下。　愛知県知事　篠原英太郎　閣下。　京都市長　大森吉五郎　殿。　横浜市長　大西一郎　殿。　神戸市長　勝田銀次郎　殿。　名古屋市長　大岩勇夫　殿。　（各通）

都市武装に関し防火防空建築物の普及促進に付建議

建議書　現下の非常時に鑑み本協会に於ては慎重研究の結果都市の武装に関し防火防空建築物の普及促進の上下記具体的項目を実施せらるる事極めて緊要なりと確信するものにして速かに機宜の方策を樹立せられん事を切望す、上及建議候也。

。１、現行防火地区を拡大する事。　１、防火地区に於ける耐火建築促進の為、下記方法を実現する事。

イ、耐火建築物に対する補助金の交附　ロ、耐火建築物に対する低利資金の融通　ハ、耐火建築物に対する家屋税の減額　ニ、耐火建築物に対する不動産、収得税の減免。　ホ、防火地区完成を都市計画事業に依り促進する事。

理由省略（昭和９年10月号参照）

尚上記の方々の他、総計2200通の本建議書を添え夫々実現に関し援助方依頼したり。

△　昭和9年9月

大阪府知事　県　忍　閣下。　京都府知事　斎藤宣宗　閣下。　兵庫県知事　白根竹介　閣下。　（各通）

日本建築協会々長　片岡　安

今回の近畿地方に於ける大風水害・建築倒壊の惨禍に徴し特殊建築物に付下記の通り建議書を提出せり

建議書、　近畿地方に於ける風水害の建築物倒壊の惨禍に徴し、少くとも特殊建築物に就ては斯かる被害を根絶せしむるが為、下記方策を至急実施せらるるは極めて緊要なりと信ず、上及建議候也。

記、及理由省略（昭和９年10月号　参照）

△　昭和9年10月20日

内閣総理大臣　岡田啓介　閣下　（外26各通）

日本建築協会々長　　片岡　安

大阪土木建築業組合長　大林義雄

副組合長　銭高久吉　有山福重郎

近畿風水害被害に付陳情書

今次近畿未曾有の大風水害に因る惨害は京阪地方に於て特に甚大なるもの有之強風に加ふるに海嘯に襲われ大阪府に在りても其産業中枢たる工業地一帯に亘る各種物資生産機構に大打撃を蒙りたるのみならず土木建築工作物又倒壊浸水の災禍に遭いたるもの数うるに遑なく為に多数の人命を犠牲とし巨額の貨材を損失するに至り候事は洵に遺憾至極に有之痛嘆に堪えざる所に御座候。

刻下緊急事態に臨み罹災地域の我国産業上に占位する重要性に鑑みその復興救済の促進に付別紙陳情仕候事項は又土木建築請負業者として焦眉緊要、復興助成に資せられる可く格別の御詮議を以て願意御採納賜り度偏に奉懇願候、上、本組合理事会決議に依り茲に謹みて陳情仕候也。

△　年　月　日

議会へ提出

奥村要太郎、森下亀太郎、山本藤助、上田弥兵衛の四代議士他多数の議員の賛助を得る。

「六大市制特別市制速施に関する建議」

東京、大阪、京都、横浜、名古屋、神戸各市は帝国の所謂大都市として近時商工業の発達と共に諸般の施設著しき膨張を来して居るに拘らず市政は依然として諸都市と同一制度下に置きたる為行政上、其他諸般面に於て煩雑なるのみならず市政運用に多大の障害を来たすものと認む。先に第43回議会に於て六大都市に対する特別市制に関する建議案の大多数を以て通過したるに鑑み政府は速に以上六大都市に対し特別市制を制定し市民の繁栄発達の実を挙げられん事を望む。

△　昭和10年10月10日

内閣総理大臣　岡田啓介　閣下。　内務大臣　後藤文夫　閣下。　大蔵大臣　高橋是清　閣下。

日本建築協会々長　片岡　安

阪神防空演習に際し、防火防空建築物の普及促進に関する建議

建議書

現下の時局に鑑み都市防備に関し防火防空建築物の普及促進方に就き慎重研究の結果下記具体的項目を実施せらるる事極めて緊要なりと確信するものにして速かに機宜の方策を樹立せられん事を切望す、上記建議候也。

記以下　昭和10年11月号参照

△　昭和12年10月16日

政府並地方長官　184名に縦展（速達便で発送）

日本建築協会々長　片岡　安

鉄鋼工作物築造許可規則運用に関する意見書

（昭和12年11月号参照）

陳情書　（昭和12年12月号　参照）

△　昭和12年11月4日

大蔵大臣　賀屋興宣　閣下。　商工大臣　青野信次　閣下。　（その他関係当路に送附す）

日本建築協会々長　片岡　安

拝啓　愈々御清適の段奉賀候。陳者今般臨時資金調整法並鉄鋼工作物建造許可規則運用に関し意見書を提出致候に就ては何卒御高覧の上何分の御高配を賜度此段得貴意候　　敬具

意見書　（昭和12年12月号　参照）

△　昭和15年10月1日

内閣総理大臣以下、内務、商工、大蔵、陸軍、海軍各

大臣閣下、並、企画院総裁、東部軍司令官、及西部軍司令官閣下。他、六大都市所在地府県知事及六大都市市長

主要都市に於ける建築物の防火方策急施に関する建議

刻下の急迫せる国際情勢に鑑み、防空上の見地より我国重要都市に於ける建築物の防火方策就中下記事項は焦眉の急務なりと確信す、依て速かに之が実施に関する方途を講ぜられん事を切望す。上及建議候也。

記。重要都市に於ける既存木造家屋の防火改修事業は都市重要部の全般に亘り急速に之を完成せしむるの必要あるも尚特に防火地区内に於ては木造建築物を撤去又は改築せしめ諸統制法令の取扱に特例を設け所要物資を優先的に配給し、以て積局的に建築物の耐火構造化を促進する事。

昭和15年度以後

△　昭和16年2月5日

農林大臣　石黒忠篤　閣下。　大阪府知事　三辺長治　閣下　（各通）

日本建築協会々長　工学博士　片岡　安

用材規格規程改正に関する建議

昭和14年10月13日付農林省告示第367号を以て御制定相成候用材規格規程は種別複雑にして業者側並需要者側共に不便不渺之が改正方に付速に適当なる方策を講ぜられん事を切望す。以上建議候也。

△　昭和16年2月5日

大阪府農林産物検査所長　兵藤時次郎　殿

農林省山林局木材統制課長　毛利葛一　殿

内務省計画局第二技術課長　中沢誠一郎　殿

大阪材木商同業組合　　日本農林新聞社　（各通）

日本建築協会々長　工学博士　片岡　安

粛啓　愈々御清穆奉賀上候

陳者現事適用中の用材規格改正方に関し今般農林大臣並大阪府知事に対し別紙の通り建議書提出仕候に就ては1日も速かに上目的達成の為め何分の御高配相煩し度此段御依願申上候　　敬具

△　昭和17年5月14日

海軍大臣　鳩田繁太郎　閣下

日本建築協会々長　工学博士　片岡　安

建築技術者採用に関する建議

今次南方建設其他の為建築技術者多数要望せらるるに当り本会は主務官庁よりの希望に応じ欣然之が目的達成に協力し、本会員及一般に檄を飛ばし、日々相当数の応募を受け夫々進達致しつつ有之候処、既往に於ける徴用の結果並現在御採用の条件等に鑑み当局の要求を充たすには尚遺憾の点不少と被存候条下記意見書の通り此際速かに法令の改廃等を断行し、以て将来の募集に供へ進んで超非常時国策に順応する方途を講ぜられん事を謹而建議仕候也

意見書　　官等報給に関する事項。勅任者採用に関する事項。技術者の能率増進を図り人的資源の節約の事。

△　昭和17年6月15日

文部大臣　法制局　企画院　技術院

学会長　内藤多仲。　協会長　片岡　安。　士会長　中村伝治。

建築施行組織の再編成に関する建議

下記三会に於ては昨年来建築連合協議委員会を設け、時局下建築界の体制問題に付研究中の処、建築工業新体制要旨の成案を得、邦家の為一日も速かに之が実現を痛感致候に就ては事情御賢察の上、何分の御高配を賜度右御調を建議仕候。　　要旨略

△　昭和17年11月26日

各省大臣　法制局　企画院　技術院

内藤学会長　片岡協会長　中村士会長　横河業会長

建築新体制に関する建議

△　昭昭18年5月　日

日本建築協会々長　工学博士　　片岡　安

拝啓　愈々御清穆奉賀上候

陳者木材の要給調整に関し今般内閣　農林　商工　陸軍　海軍各大臣並企画院総裁に対し別紙の通意見書提出仕候に就ては何卒右目的達成の為何分の御高配相賜度此段御依頼申上候　　敬具

△　昭和18年5月　日

内閣総理大臣以下農林、商工、陸軍、海軍各大臣、企画院総裁

社団法人　日本建築協会々長　工学博士　片岡　安

木材の需給調整に関する意見書

大東亜戦争完遂の為め必要なる軍関係産業生産拡充物資たる木材の増産に当りては当局の御懇心なる御指導の下に適切なる方途を講ぜられつつあるは誠に慶す可き事なり。

△　昭和20年12月

復興院　内務省　其他関係方面宛

日本建築協会々長　片岡　安

時局対策に付下記要項建議　（建議写不詳）

住宅並復興建築。都市計画と法規。建築資材。建築の迅速施行。技術家の取扱。

△　昭和21年7月23日

内務大臣　復興院総裁　其他

社団法人　日本建築協会副会長　松本儀八

戦災都市復興並に重要建設事業に関する建設行政に付建議

戦後最も重要且緊急を要する都市復興は先づ建築の復興に在る。本会に於ては予て建築事業を総覧せられる行政面の在り方に付慎重考案して来たが茲に結論を得たのでその要点を披瀝し閣下の清鑑に供する。幸に御採択を賜り適切迅速な方途を講ぜられん事を切に翼ふ次第である

以上謹而建議す。

復興院設行政界に対する要望。　1、中央及地方庁に於ける復興建設事業担当機組の明確化と強化。　1、復興建築促進。　以上

△　昭和21年7月25日

社団法人　日本建築協会副会長　松本儀八

拝啓　愈々御清穆奉賀上候
陳者戦争都市復興並に重要建設事業に関する建設行政に付今般内務大臣　復興院総裁其他に対し別紙の通り建議書提出仕候に就ては何卒上目的達成の為何分の御高配を賜度此段御依頼申上候　　敬具。

△　昭和23年2月　日

社団法人　日本建築協会々長　　竹腰建造

主要都道府県建築部設置に関する建議

政府は地方自治法改正にい府県に於ける部制を限し実施せんとしている。之依ると府県には建築部が設けられぬ事となる。本協会は本措置を経済復興促進上、遺憾とし茲に協会員の総意に基き記の通り建議する。

記。　政府に於ては地方自治法を速急に再改正し、主要府県に建築部を設置し得る如き措置執る事。府県に於ては次の措置を講ずる事。愛知県に於ける既設建築部は之を存置すると共に、北海道、京都府、大阪府、神奈川県、兵庫県、広島県、福岡県に建築部設置す事。

△　昭和23年7月26日

大阪府知事　赤間文三　殿。　副知事　大塚兼紀　山村庄之　殿。　総務部長　大森通考　殿。　土木部長　鈴木健二　殿。　議事課長　大島　清　殿。

社団法人　日本建築協会々長　竹腰建造。　社団法人　日本建築士会近畿支部長　松井貴太郎　大阪土木建築業協会々長　鴻池藤一

建築部設置建議

都市復興の重要性に鑑み、先に重要府県に建築部を設置し得る様地方自治法の改正を要望していました所、去る国会に於て希望達せられ　9月1日より改正地方自治法が実施せられ建築部設置可能となりました事は御同慶に堪えぬと同時に之に付、格別の御尽力を賜りました事に対しては厚く感謝し、敬意を表する次第であります。就ては8月末日を以つて建築省地方建築出張所が廃止せられますので9月1日より建築部が発足する様重ねて要望するものであります。即ち下記事項を急速に実施せられ此の目的達成の為有終の美を為されん事を望みます。

記、　速かに府県に於て建築部設置に関する条令を制定せられん事を望みます。　　以上建議します。

△　昭和23年9月20日

社団法人　日本建築協会々長　竹腰健造
同　　日本建築士会近畿支部長　渡辺　節
日本建築設計監理協会関西支部長　松井貴太郎
大阪土木建築学協会々長　　鴻池藤一

礼状

拝啓　愈々御清祥此段慶賀に存じます。陳者下各等曩に大阪府に建築部設置されん事に建議いたしました所今般その実施を見るに至り都市復興の為誠に快に堪えません。

事此処に至りたるに就ては貴下格別の御尽力の程を深く感謝と敬意を表する次第であります。茲に乍略儀書中を以て御厚礼旁御挨拶申上げます。

△　昭和27年2月20日

日本建築学会々長　伊藤　滋。　日本建築協会々長　竹腰健造。　日本建築設計管理協会理事長　中村博治。
全国建築業協会々長　安藤清太郎。　都市不燃化同盟会長　高橋竜太郎。

防火建築帯造成促進に関する陳情書

政府に於かれては都市の不燃化促進を図らんが為　助成策として首題の法案を準備せらるるやに見聞しますがその速かなる実現と今後の増進を期待して止みません。

記、　防火建築帯の造成促進の為、同地帯内の被助成建築物及補補しない耐火建築物は既存新築を問はず之等に対して地方自治体は固定資産税を木造並又はそれ以下に軽減する措置を講ぜられる事。住宅金融公庫融資に依る同地帯内の耐火建築物に対しても補助の対象とする事防火建築帯造成促進の為、土地所有権並建築物の所有を目的とする地上権者及賃借権者が公益に資する為　助成を受けて共同の耐火建築物を建築し様とする場合、それに支障を与えるものに対しては土地収用を行える措置を講ぜられる事。防火地域外に於ける学校、病院、公衛等の公共建築物を不燃化する為、之に対し適切な助成方途を速かに確立する事。　以上陳情致します。

△　昭和27年4月15日

社団法人　日本建築協会々長　竹腰健造

主要都道府県建築部設置に関する陳情書

拝啓　益々御清栄の事と御慶び申上げます。扨て最近当局は行政機構改正の一環として地方自治法第158条規定の改正を行う様準備中の趣でありますが、その案文に依りますと都を除く道府県の標準部中に「建築部」が揚げられないで僅かに同条第2及第3項規定に依つて予め内閣総理大臣に協議の上、条例を以て局部数を増加する事が出来る様になつて居ります。（中略）　当協会は多年建築諸政策の立案実施に微力を致してきましたが貴下に陳情して「主要道府県（人口250万以上）」には建築物を標準部として設置せられる様何分の御高配を御願ひ申上げる次第であります。　　敬具

△　昭和27年5月1日

社団法人　日本建築協会々長　竹腰健造

主要都道府県建築部設置に関する陳情の件

拝啓　陳者4月15日附を以て御願い致しました標記の件に関しましては格別の御配慮を煩して居ります事を厚く御礼申上げます。何卒邦家の為一層の御高配を賜り主要都道府県に建築部設置されます様重ねて御願い申上げます。　　敬具　　（追て前回提出陳情書中23年以来建築部の設置されている現行の10都道府県とは「北海道、東京、神奈川、愛知、京都、大阪、兵庫、広島、山口、福岡、以上）

△　昭和27年8月14日

地方自治庁長官　岡野清豪　殿
衆議院議長　林　譲治　殿
社団法人　日本建築協会々長　竹腰健造

礼　状　　（以下略）

日本建築協会賞の表彰

■日本建築協会賞

日本建築協会賞は、1986年の協会創立70周年を記念し、これを契機に「建築を通じて広く社会に貢献する」という当協会の目的を反映した「日本建築協会賞」を創設した。

本賞は、建築のあらゆる分野において社会に貢献している個人または団体を顕彰することとし、かつ、基本的には建築物等作品を除き、主として「業績」を対象として行うこととしている。

「日本建築協会賞」の実施状況

回	年度	受賞業績	受賞者名
第1回	1986	◇日本建築総合試験所の設立と運営 ◇技能訓練校の設立と運営 ◇「季刊大林」の刊行と「復元と構想」の出版 ◇建設業界へのTQCの導入 ◇H形鋼の開発	㈶日本建築総合試験所　理事長　前田敏男 近畿電気工事㈱　取締役社長　若山　繁 ㈱大林組　取締役社長　大林芳郎 ㈱竹中工務店　取締役社長　竹中統一 新日本製鐵㈱　取締役社長　武田　豊
		（特別賞） ◇大阪駅前市街地改造事業の完成 ◇ポートアイランドの建設	 大阪市長　大島　靖 神戸市長　宮崎辰雄
第2回	1990	◇大阪市の総合設計制度 ◇電気工事士技能競技大会の継続実施 ◇RC造超高層建物の建設システムの確立 ◇大阪ビジネスパークの開発推進	大阪市長　西尾正也 ㈳大阪電業協会　会長　若山　繁 鹿島建設㈱　代表取締役社長　鹿島昭一 大阪ビジネスパーク開発協議会（大阪市）
		（特別賞） ◇神戸市北野、山本地区の都市景観保全	 神戸市長　笹山幸俊
第3回	1993	◇「コモンシティ星田」における全地中配電方式の技術開発および適用 ◇耐火鋼による無被覆鉄骨造建物の実用化 ◇INAXギャラリーの活動とブックレットの刊行 ◇まちづくり会社「黒壁」の事業展開とその成果 ◇大型美術陶板等の開発と施工法の技術確立	関西電力㈱　取締役社長　秋山喜久 新日本製鉄㈱　代表取締役社長　齋藤　裕 ㈱ＩＮＡＸ　代表取締役社長　伊奈輝三 ㈱黒壁　代表取締役　長谷定雄 大塚オーミ陶業㈱　代表取締役社長　大塚正士
		（特別賞） ◇制震構造の研究とダイナミックインテリジェントビルの開発	 京都大学　名誉教授　小堀鐸二
第4回	1996	◇織物文化への貢献 ◇免震建物と免震効果の実証 ◇工高教育におけるCADの有効利用と普及に関する研究 ◇膜構造建築物の技術開発とその実用化ならびに普及	㈱川島織物　取締役社長　南　荘郎 ㈱松村組　代表取締役会長　松村雄吾 秋田県立大曲工業高校　教諭　黒沢一元 太陽工業㈱　代表取締役副会長　能村博正
		（特別賞） ◇実験集合住宅　NEXT 21	 大阪ガス㈱　取締役社長　領木新一郎

青年建築家・青年技術者の顕彰

組織、グループ等から推薦された人、自薦の人を選考委員会で選考し、会誌「建築と社会」の青年建築家（後に「青年技術者」）特集で顕彰している。

戦後間もない建築界において、希望をもった有能な若い建築家に勇気を与え、社会に押し出し、このことで古い世代の既成建築家との交流の場を与え、建築の歴史的発展と建築家の人間的成長の一助にしたいとの願いのもとに、1953年度の編集委員会で企画され、1954年度よりスタートしたものである。

第15回（1968年）からは、建築の専門分化に対応するため、各分野ごとに推薦を受け、選考委員会で選考する制度を導入し、現在に至っている。

制度が生まれて40年以上を経過した今日では、顕彰を受けた人々のなかから会長、副会長、役員、委員として多くの方々が会の活動を支える存在となっているのは頼もしいことである。

青年建築家（青年技術者）の選考

回・開催年	選考委員長（編集委員長）	応募者数	顕彰者数
第1回（1954）	（浦辺鎭太郎）		13
第2回（1955）	（浦辺鎭太郎）		10
第3回（1956）	（佐野　正一）		10
第4回（1957）	（佐野　正一）		14
第5回（1958）	（塚本　猛次）		35

回・開催年	選考委員長（編集委員長）	応募者数	顕彰者数
第６回（1959）	（塚本　猛次）		25
第７回（1960）	（森　　忠一）		19
第８回（1961）	（森　　忠一）		16
第９回（1962）	（元吉勇太郎）		20
第10回（1963）	（恒岡　俊行）		18
第11回（1964）	（片山　光生）		15
第12回（1965）	（片山　光生）		15
第13回（1966）	（長谷川哲之助）		14
第14回（1967）	（長谷川哲之助）		15
第15回（1968）	足立　　孝	25	15
第16回（1969）	足立　　孝	20	14
第17回（1970）	鳥田　家弘	22	15
第18回（1971）	鳥田　家弘	27	13
第19回（1972）	彦谷　邦一	23	14
第20回（1973）	彦谷　邦一	22	14
第21回（1974）	松村　慶三	21	12
第22回（1975）	松村　慶三	17	12
第23回（1976）	中村　甲一	25	12
第24回（1977）	中村　甲一	20	14

回・開催年	選考委員長（編集委員長）	応募者数	顕彰者数
第25回（1978）	前川　陽一	21	11
第26回（1979）	前川　陽一	22	16
第27回（1980）	三輪　泰司	20	11
第28回（1981）	三輪　泰司	18	11
第29回（1982）	横山　誠一	16	11
第30回（1983）	横山　誠一	22	12
第31回（1984）	井上　　滉	26	13
第32回（1985）	井上　　滉	32	16
第33回（1986）	井上　　滉	26	14
第34回（1987）	長谷部朔郎	18	13
第35回（1988）	長谷部朔郎	29	14
第36回（1989）	長谷部朔郎	23	14
第37回（1990）	溝神宏至朗	23	13
第38回（1991）	溝神宏至朗	24	16
第39回（1992）	溝神宏至朗	29	15
第40回（1993）	荒井　　清	33	19
第41回（1994）	荒井　　清	29	16
第42回（1995）	荒井　　清	39	25
第43回（1996）	與謝野　久	38	26

工高生デザインコンクールの実施

1954年11月６日、今橋クラブにおいて、本会主催の座談会「これからの建築教育はどうあるべきか」が開催された。この座談会の狙いは、一つは、最近の建築卒業生に対する使用者側、学校側として改善すべき点は何か、二つには建設業者や設計事務所からの建築教育に対する多くの意見が出されていること等を踏まえ、今後の工高教育について語り合う場を設けることであった。

この座談会において、デザインの基本教育について「自分の考えを自在に表現できる技術の習得が肝要」との意見があり、これを受けて全国の工業高校建築科生徒の設計技術の向上と奨励のため、昭和30年度において規定を整備し、第１回の工高生デザインコンクールの実施以後、今日まで毎年継続中である。

工高生デザインコンクールの応募状況

回及び開催年	設計課題	応募校数	応募点数	審査委員長
第１回（1955）	これからの住宅	30	119	森田　慶一
第２回（1956）	観光案内所	21	94	足立　　孝
第３回（1957）	学校図書館	25	69	鳥田　家弘
第４回（1958）	公園内に建つ公衆休憩所	26	87	岡橋作太郎
第５回（1959）	駅前に建つポリスボックス	24	89	佐野　正一
第６回（1960）	ガソリンスタンド	26	94	伊藤　貞亮
第７回（1961）	都市の公園に建つ野外音楽堂	19	51	西嶋徳太郎
第８回（1962）	湖畔に建つ学生のためのボートハウス	24	94	清水　和彌
第９回（1963）	有料道路のゲート	24	97	森　　忠一
第10回（1964）	市民のためのスポーツハウス	29	108	渡辺　道輝
第11回（1965）	明日の住宅	29	147	海上　静一
第12回（1966）	博覧会場に建つゲート	19	106	西沢　文隆
第13回（1967）	博覧会場に建つ公衆休憩所	25	123	彦谷　邦一
第14回（1968）	日本万国博覧会モノレール・ステーション	10	40	増田　友也
第15回（1969）	ユースホステル	19	96	浦辺鎭太郎

回及び開催年	設計課題	応募校数	応募点数	審査委員長
第16回（1970）	セカンドハウス	20	133	上林　博雄
第17回（1971）	住宅団地の集会所	13	66	扇田　　信
第18回（1972）	庭にひろがりをもつ住宅	21	117	今西　茂雄
第19回（1973）	自然公園の中に建つ休憩所	9	74	徳永　正三
第20回（1974）	ユニットを組み合わせた「プレハブ住宅」	12	94	野々村五四男
第21回（1975）	団地内に建つ「特定郵便局」	18	162	池田　有隣
第22回（1976）	野外スポーツ施設の「センターハウス」	18	103	横山　誠一
第23回（1977）	ショッピングプラザに建つ「ドーナツショップ」	12	106	吉田　隆一
第24回（1978）	公園に建つ「公衆便所」	10	70	向井　正也
第25回（1979）	児童図書館	18	97	嶋田　勝次
第26回（1980）	幼稚園	22	100	川﨑　　清
第27回（1981）	ファミリーレストラン	17	116	坂内　幾男
第28回（1982）	公民館	15	94	片倉　健雄
第29回（1983）	四季を通じて利用できる「ビーチハウス」	17	114	柳　　眞也
第30回（1984）	街並みを考えた住宅	18	91	小角　　亨
第31回（1985）	郷土資料館	16	99	高口　恭行
第32回（1986）	テニスクラブハウス	34	158	徳岡　昌克
第33回（1987）	学校に隣接して建つ同窓会館	32	194	太田　隆信
第34回（1988）	カフェテリアのあるポケットパーク	18	99	東　　孝光
第35回（1989）	リゾート地に建つ「ペンション」	30	134	狩野　忠正
第36回（1990）	タウンハウス	18	69	吉村　篤一
第37回（1991）	景勝地に建つ「駅」	26	110	中川　洋一
第38回（1992）	郊外に建つショールーム	23	136	西村征一郎
第39回（1993）	地域に建つスポーツ施設	20	148	森本　正一
第40回（1994）	駅前広場に建つ市民ギャラリー	23	158	川道麟太郎
第41回（1995）	公園に隣接して建つ公民館	26	101	北浦かほる
第42回（1996）	工房	29	131	三谷　幸司

工業高校・高専等の優秀卒業生の表彰

1952年度から、全国の工業高校の優秀卒業生に対し本会より表彰状を授与した。当初は東海地区、近畿地区、中国地区、四国地区および九州方面の学校からの申請であったが、近年は、北は北海道から南は九州方面まで全国各地域に所在する工業高校・高専から数多くの優秀卒業生の推薦がある。

なお、1952年度から1972年度までの表彰件数は資料不足のため確認できなかった。

年度	学校数	人数
1973	155	155
1974	139	139
1975	131	134
1976	143	143
1977	142	144
1978	136	138

年度	学校数	人数
1979	150	151
1980	151	155
1981	158	162
1982	159	161
1983	165	172
1984	167	173

年度	学校数	人数
1985	178	186
1986	172	181
1987	169	175
1988	177	187
1989	186	197
1990	191	284

年度	学校数	人数
1991	197	202
1992	209	235
1993	209	232
1994	224	252
1995	233	260
1996	232	265

第4章　諸団体と協会

関連諸団体と協会

本会は、その定款に「建築関係各部門の連携協力によって建築に関する学術、技芸、事業の進歩発達を図ると共に建築を通じ、広く社会に貢献すること」を目的として掲げているように、その行う事業は建築の各部門間並びに建築と社会との連携を第一としている。そのため、戦後10年、わが国産業経済が飛躍的成長を迎えたとき、近畿建築界のいちだんの隆盛をめざすとともに、将来大阪における理想的建築センター設立の第一歩として関連諸団体の協力のもとに近畿建築会館の建設を企画した。1956年10月10日、関係諸団体と友好裏にこれを完成させ、1947年11年に京都に設置されていた日本建築学会近畿支部がここに事務局を移転。また、日本建築材料協会（当時は関西建築材料協会）の事務局も併設されるなど、当会と関係諸団体との連携は一層その緊密化が図られた。また、建築士法によって新しく生まれた大阪府建築士会が1957年12月に正式に発足することになると、その事務局もまた近畿建築会館に設置されたのである。ちなみに近畿建築会館の建築は1926年10月完成の伊藤邸を増築したもので、当時、宗建築事務所の所員であった大倉三郎が設計を担当した。



近畿建築会館

その後、わが国の産業経済の高度成長にともない建築界と、協会はもちろん、各関係団体の発展は目ざましく、事業の増大により会館内の事務室は狭隘となり、日本建築材料協会は1960年８月に西区京町堀へ、また、大阪府建築士会は1959年５月に北区樋上町へ事務局を移転し、つづいて建築学会近畿支部も西区の科学技術センタービルへ移転し、当協会自身も1983年12月22日、現在の大阪駅前第３ビルに移転した。

しかし、その後も協会とこれら関係諸団体とは緊密な連携を続け、友好関係を保っている。また、日本建築設計監理協会関西支部（日本建築家協会の前身）の事務も、1953年ごろまで当協会が取り扱っていたようである。

このように本会および関連団体は順調に発展したかのようであるが、本会は一時的にもしろ解散に追い込まれるような事案が持ち上がったことがある。それは、わが国が第二次世界大戦に突入し、国を挙げて戦時体制を固めなければならなかったとき、建築界においても国策に沿って新しい体制を急いで樹立することとなり、1942年１月、四会連合協議会が東京において会合し、わが国建築界の二大団体である建築学会と本会がまず統合すべきだとの流れが起こり、この問題について種々検討された。協会内においても、先に設置されていた新体制委員会の第５部会（建築技術団体事項担当）において前記合併問題について検討が重ねられた結果、本会は学会と同様建築の技術者団体であるが、多年本会主張に基づいて建築の社会問題、建築家の団体としての社会奉仕に重点を置き、新団体の設立については、その形態を改組させるのが適当であるとの消極的意見に傾きつつあった。

しかしながら、各分野における戦時体制への要請は日を追って厳しく、協会・学会合併案を両会においてそれぞれ研究することとなった。

1943年２月13日、第１回協議会が開催され、以後、1944年３月28日まで８回にわたって会合が持たれて協議の結果が４月に取りまとめられたが、新会名については決定に至

らず保留のままであった。

新会名については、その後紆余曲折の末、合併問題は一時デッドロックに乗り上げたかのようであったが、1945年１月、小林政一学会会長が来阪。片岡会長と懇談が行われた結果、合併後の会名は「日本建築学会」にすることとし、合併に関する基礎事項については特設される実行委員会によって再審議することで合意を見る。こうして、難航した学会との合併問題は国策の線に沿って、いよいよ実行段階に入った。

しかし、当時戦局はすでに敗戦の様相が濃く、合併に至ることなく８月15日の終戦を迎えた。

終戦直後の11月、協会は常務会を開き、学会との合併問題は終戦による社会情勢全般の変化から考えて延期されるべきと終止符をうち、協会側実行委員会は11月29日委員長に通達した。

合併が自らの意思ではなく国策のためという大義によって行われることになったことは忌まわしい戦争がもたらしたもので、過ぎ去った夢であり、今日では考えられないことである。

参考：

1956年10月に本会は近畿建築会館に移転しているが、その当時の印刷物によれば、①日本建築協会、②日本建築学会近畿支部、③大阪府建築士会、④日本建築家協会関西支部、⑤関西建築材料協会の５団体が同居していた時期がある。

・日本建築学会近畿支部
　1956年10月～1963年８月まで。
・大阪府建築士会
　設立準備のころから1959年５月まで。なお1959年ごろまで本会が士会の事務も取り扱っていたが、その後、士会に専任の中村昌作氏が就任した。
・日本建築家協会関西支部
　～1962年12月まで。なお、日本建築設計監理協会は1947年４月に設立、1953年ごろまで本会が事務を取り扱っていた。
・日本建築材料協会(関西建築材料協会)
　設立準備のころから1960年８月まで同居。

日本建築協会と建築学会との合併問題に関する記録

本会と建築学会との合併問題が起こり、両会で種々協議された時期からすでに半世紀もたち、このことは忘れ去られようとしているが、この問題に関する記録は「建築と社会」Vol.34.1953年12月号の「創立35年記念史」特集に収録されていた。ここに復刻することとした。

合併問題に関する両会協議経過大要

⊙昭和17年１月より建築界の新体制問題につき東京に於て四会連合協議会（学会、協会、士会、建設業協会）が開催され、それに関連して第五部会にて両会合併問題起る本協会内にも同様新体制委員特設し第５部会分科に於て新体制に関し検討を重ねた結果協会は学会と同様、建築技術者の団体であるが多年本会主張に基いて建築の社会問題、建築家の団体としての社会奉仕に重点を置き、新団体の形態を改組し之を利用するのが最も便宜であるとの意見に達した。

⊙昭和17年６月22日、東京、日本工業倶楽部にて「建築協会対学会の将来を語る会」を開催。

学会側　内藤多仲、北沢五郎、佐野利器、中沢誠一郎
　　小林政一、伊藤滋、田辺泰。

協会側、片岡安、井上新二、中西六郎

世話係　佐藤弓葛

此際何等かの方法にて合同する様に進むべきことと意見一致を見た。

⊙昭和17年９月２日、大阪倶楽部にて東京より小林政一伊藤滋両氏協会側片岡安氏外13名出席

合併問題の案に付協議す。

合併に関する折衝委員

（学会側）　田辺泰、武富英一、浜田稔、松井清足、吉田安三郎。

（協会側）　谷民蔵、竹腰健造、滝沢真弓、渡中一良松久保敬三

（建築連合協議委員会選出斡旋委員）
　　伊藤滋、井上新二、小林政一、中沢誠一郎、中西六郎

⊙昭和18年２月13日、東京、大東亜会館に於て第一回協議会が開催され、同19年３月28日迄前後八回に亘つて新大阪ホテル、日本建築協会、丸ノ内会館等で開催された。

協　議　内　容

（協会側意見）資産問題法的研究要望、会名日本建築界主張、関東支部設置要求（関西と同格）。本部は支部より維持する案。事業は会費主義。一方的解散考慮。支部基金、寄附単独行為主張。全国支部設置要望。学を入れる事反対。学が絶対なれば進行不可。会名第三案日本建築技術会提案。会名回答なくば中止主張。役員選挙、評議会員制度。地方無視とならざること主張、大阪・京都・兵庫の如き独立性ある地区の運営につき希望。会名、所管、新団体の結成の順序、方法の二項を一括して斡旋委員に於て善処されん事を希望。

（学会側意見）　資産一応本部集中主義但し関西特別扱諒承。所管文部省主張。一方的解散希望。会員学会主張。関東支部設立努力。無任所理事設置案。事業は会費に重きを置かず寄附による案。学会定款を新団体機構に改め尚協会の面目を保ち得る様声明其他方法を講ずる故一方的解散を望要。本部重点主義、学を入れる事不可なら取纏め回答。役員選挙総会主義。

（申合事項）　主務官庁文部省又は技術院。建築会館処置問題論議。双方より定款起草案提出すること。会費額研究のこと。資産、本部支部関係、主務省は学会並中沢氏調査研究すること。定款要綱案中目的及事業項目決定。会名は会長一任とす。会員、役員決定。会長、副会

長は正会員中より投票すること其他。両会より本部及関東及関西支部の採構と財政計画を立案の斡旋委員に提出し同委員にて適当取纏ること。

（協議したるうち決定事項）

（会名）保留（会費）正員年額18円、賛助員年額30円、准員年額９円。（名誉員）正員にして総会の推薦に依り名誉員を称することとする。（役員）理事10名の内８名は役付2 名は無任所。（支部）九支部を予想、支部会計は特別会計とす。其他一部字句修正。

（以上８回にて一応協議打切、以後書面を以て両会委員宛回答或は照会を発することを約し解散す。）

⊙昭和19年４月　両会協議委員及斡旋委員出席のもとに「両会合併に関する基礎要綱」を決定。

両会合併に関する基礎要綱。

主　旨

皇国の重大時局に際し建築技術報国の実を挙ぐるため両会は合併し真に現下の要請に即応し得る新団体を結成すべきものと認む。

新団体の組織

別紙「定款要綱」に依る。

新団体の財政

別紙「予算要綱」に依る。

新団体の所管官庁

新団体の如き団体は技術院の所管たるべきを理想と認めらるるを以て将来右気運致来の節は其措置を講ずべきも差当りは新団体結成の結果自ら決定せらるべきものと認む。

新団体結成の順序、方法

新団体結成の順序、方法は両会合併の精神に即し両会が共に解散し同時に新団体を結成すべきものなるも法律上の手続に関し最も容易なる方法として一方が解散し一方が改組して新団体を結成するの止むを得ざるものとす、但し此の場合には両会に於て内外に対し其の理由を詳し、両会合併の精神を明かにすべく最善の処置を採るものとす。

新団体の設置際に於ける建築学会正員及日本建築協会員並地方会員の取扱。

新団体の正員は其定款に依り更めて詮衡せらるべきものたる所、新団体設立の際に於ては建築学会正会員及日本建築協会会員並に地方会員は之れを正員として認むるものとす。

両会の資産処分

両会の資産は全部新団体に移譲するものとす。

但し日本建築協会の特殊基金に就ては其性質の特殊なるに鑑み所有権は新団体に移すも関西支部基金として其管理乃至運営は同支部に委任すべきものと認む。

⊙昭和19年７月27日　斡旋委員より会名決定資料を添え白紙委任方申来る。

同19年８月４日　協会側委員斡旋員案に関し協議延期（不賛成）することに決定。

同19年８月12日　斡旋委員宛財局の定る迄協議保留方通達。

同19年９月６日　佐野利器氏より片岡会長宛両会長と会見慫慂あり。

同19年10月７日　両会協議すること通達。

⊙同20年１月16日　正午北浜つるやにて、小林学会長西下、片岡会長と会見懇談、中西斡旋委員、大和書記長列席（内容）日本建築学会とすること。合併方法は法律上手続に関し尤も容易なる方法を執ること。既往申合決議事項及要綱は別に特設する実行委員に於て再審議を重ねること、等々。

昭和20年２月３日　斡旋委員宛公文発送、両会長会見内容に従て進行するも協会側より今後の進行方法につき希望附記す。

両会合併問題につき両会より実行委員二名を挙ぐ。

（学会側）　伊藤滋、鳥井捨蔵。

（協会側）　中西六郎、藪中一良。

昭和20年　常務会に於て

建築学会との合併は戦時中、両会実行委員にて進捗を計りつつあつたが、終戦後に於ける社会状勢は万般に亘り著しき変化を来たし居り従来研究されたるのは根本的に再検討を要するものと認められる、就ては両会の合併の儀は当分延期することが妥当なりとの意見に到達したるを以て実行委員より此の旨20年11月29日附にて佐野委員長宛文書を以つて通牒を発す。

建築倶楽部（建築クラブ）

協会事務所が大同ビルにある時代、会員相互の会合に物足りなさを感じていたので有志が相計り、倶楽部設置の議題賑やかとなった。記録が判然としないが、昭和７年暮れ某日、有志約90人が美津濃７階の食堂に会し、「建築倶楽部」設置促進を申し合わせ、役員会に伝達された。時の副会長池田實は、片岡会長漫歩中なりしも主記・常務鳥井信、大和書記に命じて朝日ビル小早川支配人と交渉の結果、朝日ビル４階に事務所を移転することとし、同時に倶楽部室を開設した。

開設当初は会員組織とし会費を徴して別途会計としたが、設備その他経済的に困り、翌年故人となった設楽貞雄、そして須賀藤五郎が奔走して寄付金を集め、その年にはスペースを拡張し、事務室を別に移して小さいながらもバーも設け、ダンスの講習会を行うやら、一応形が整った。

夏の天神祭には家族も冷房の中で参観し、冬は暖房と屋上のスケートなどで賑わい、随分利用された。

一面、業界の新聞記者なども毎日のごとく入り浸り、なかには芳しからぬデモ記者や協会の品位を云々されるようなこともあるなど苦悩も多かった。が、結局経済的に行き詰まり、

建築クラブ役員

年度	代表	運　営　委　員
1972～1975	塚本猛次	今村　騰、小川　正、尾亀清四郎 海上　静一、小西　岬、小林　清 小林　四郎、小林　得志、田中　弘 畠中　繁、平田作太郎、星　廣文
1976～1980	塚本猛次	浅海　正雄、姉川　正男、小山　年光 梶山　宗夫、加納　秀雄、小泉　豊 佐々木森一、杉村正三郎、仙田　四郎 高橋　保夫、田中　政二、堤　兼雄 中川　藤一、中村　正一、橋本　晃芳 浜口幹三郎、原田　重信、伴　一郎 久田　良吉、福永　薫、村石　秋吉 松村志津男、八十島健二、吉岡源治郎 渡辺　恵
1981～1985	塚本猛次	姉川　正男、伊藤　俊夫、大墨　正 大武照三郎、大槻　国秋、梶山　宗夫 木原　正雄、木村　俊彦、小菅　滋夫 志賀　修一、白石　静二、羽場　健一 冨岡　久男、浜口幹三郎、原田　重信 林　昭八郎、平城　勧、福田　朝生 細野　松雄、松村志津男、三木　敏男 村上　秀夫、森　淳、吉田　賢
1986～1988	塚本猛次	伊藤　俊夫、多井　幸男、大武照三郎 木村　俊彦、熊澤　六朗、佐倉　光夫 塩脇　昭司、田中　昭一、羽場　健一 前田　善介、松岡晃一郎、三浦二三男 道田泰治郎、山岸雄次郎、山口　安男
1989～1994	塚本猛次（1989～） 佐野正一（1992～）	板井　亨介、大墨　正、大辻眞喜夫 金井　弘次、兼平　賢司、木村　俊彦 向後　定男、佐倉　光夫、里村　年人 澤井　敏郎、白石　静二、新開　信之 田中　昇、辻野　昭夫、得田　芳宏 西川　秀信、本田暢志郎、前田　善介 牧田　顕治、松岡晃一郎、松村　慶三 三浦二三男、三木　敏男、三村　康 村上　秀夫、八木　重喜、山崎　博之 山地　英雄、吉田　賢、和田　克朗
1995～1998	佐野正一	今井　忠臣、江原　吉明、金田　宏 氣谷　英博、桑原　拓造、澤井　敏郎 新開　信之、鈴木　雅夫、田村　真二 得田　芳宏、橋本　武彦、樋口　重敏 福島　健、福嶋　孝之、福原　栄一 福岡喜久雄、本郷　聡、三村　康 村西　哲郎

協会に合併、暫時縮小、戦争と同時に自然消滅することとなった。

現在の「建築クラブ」は、本会とは別組織となっているが、当会の役員、委員、会員の有志が相寄り、戦前の「建築倶楽部」復活をめざして取り敢えずホテルを利用して朝食会を行うこととし、1972年６月13日、新大阪ホテルにおいて設立の会を開催し、現在に至ったものである。

陳列場

1917年、本会事務所が不動ビルにあったころ、建材業者からいろいろの建材サンプルを持ち込まれるようになり、戸棚の一部に陳列したのが陳列場の始まりである。

その後、事務所移転のつど材料を寄せられたが、1932年朝日ビルに移ってからもクラブ室の書棚にいつかしら雑然として持ち込まれるという状態であった。時の副会長池田實がクラブの一隅に陳列棚設置を計画。片岡会長（欧米旅行中）帰朝を待ち、役員会に諮り、片岡会長からの本格的に開設せよとの指示に、1933年９月、北浜野田屋に材料業者を招いて本協会の企画を発表し、多数賛成を得た。予定の小間数に達したので朝日ビル４階クラブ室の隣に約80小間を設備、1935年さらに廊下も取り入れ、南側一室を借入。約40小間増設。大小130の陳列小間及び小さな棚を設けて建材陳列場とした。

当時は東京の陳列場とともに、本邦有数の陳列場として内地はもちろん、朝鮮、満州、上海辺りからも視察に来るなど、世に益するところが多かった。

第二次大戦で空襲を受けるに至り利用度も減じ、一面、ビル内の防空体制等の関係もあり、1943年には閉設。展示物には参考となる資料が多かったので大部分、西野田、都島工業学校等に寄贈した。

・1933年12月～1935年
幹事長／徳政金吾、幹事／石田信夫、岡部顕則、坂口芳三郎、須川廉太郎、中西六郎、伊東宗太郎、渡部圭吾
・1936年　徳政金吾逝去、幹事長／岡部顕則となる
・1937年　幹事長／今林彦太郎
・1939年　幹事長／中西六郎、幹事／伊東宗太郎、小川陽吉、黒田茂、小林清、池田宮彦
――時局と建築材料展示会開催
・1940年　幹事長／池田宮彦、幹事／小林清、滝邦一、亀井幸次郎、北垣熊之介、桐本楠雅、鈴木金太郎、保園源三、松久保敬三、矢田鉄蔵
――満州、中華事情研究会開催、製造工場見学、材料知識普及講座開設、同業者座談会
・1941年　防空壕展覧会、資材統制、新興材料座談会並びに展示会
・1942年　幹事長／松久保敬三、幹事／野中駒市、道田泰治郎、楠瀬徹、伊東宗太郎、大下順三郎、柳　弘美、中西六郎、西沢藤生、吉田呉助、矢田鉄蔵、藪中一良

・1943年　井上新二内務省建築課長、玉置／愛知、堀井／大阪、松井／京都、山内／兵庫各課長と協会役員、並びに出品者、空襲必然、防火改修、偽装防弾、材料問題を検討。
・同年11月　事変後の情勢に鑑み南側陳列場閉設。事務所とした。
・1944年7月　非常体制に備えるため、陳列場全廃を決議。ビル側と協議の結果、ボックス解体閉鎖。この間、菊倍判の綜合型録並建築材料集成（綴込み式）を発行したほか、出品者2日会を設け、協会側と接触、向上発展に努力、出品者の親睦のため見学懇親会を催し、各地工業学校と連絡、見学実習に資した。

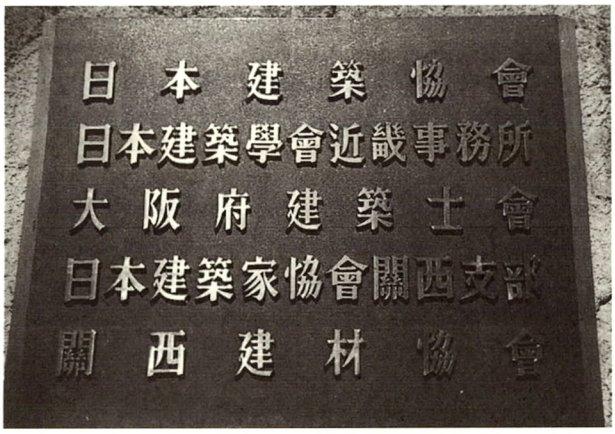
調査研究業務の受託

年度	名　称	委　託　者
1984	大阪市の人口動態及び住宅需給モデル調査	大阪市、大阪市住宅サービス公社
1985	中間所得者層の賃貸住宅需給に関する調査	大阪市住宅サービス公社
1986	「ハウジング・デザイン賞」基礎調査	大阪市
1987	大阪府営貝塚半田住宅再生計画策定	大阪府
	賃貸住宅供給の新動向と公団賃貸セクターの役割に関する研究	住宅・都市整備公団関西支社
1988	需要者参加型住宅供給の基礎調査研究	大阪府住宅供給公社
1989	府営住宅の管理における居住者参加に関する研究	㈶大阪府住宅管理センター
	市営住宅の居住性に関する調査	大阪市住宅整備公社
1990	公社住宅住まい方調査研究	大阪府住宅供給公社
1991	公共賃貸住宅における公社賃貸住宅の位置づけに関する研究	大阪府住宅供給公社
	今後の住宅政策推進のための基礎的研究	大阪市住宅整備公社
1992	公社集合分譲住宅住まい方調査研究	大阪府住宅供給公社
	高層住宅の計画に関する調査研究	㈱竹中工務店
	国際文化公園都市住宅・住環境形成計画調査	大阪府、国際文化公園都市建設協議会、住宅・都市整備公団
	今後の都市居住ニーズの動向に関する調査(2)	大阪市住宅整備公社
1993	公社賃貸住宅における住環境評価基準の設定に関する研究	大阪府住宅供給公社
	建替計画策定に係る従前居住者の動向調査(その1)	㈶住宅管理協会関西支部
	建替計画策定に係る従前居住者の動向調査(その2)	㈶住宅管理協会関西支部
	建替実施計画に係る建替前後の計画諸元等の整理	㈶住宅管理協会関西支部
	高層集合住宅の供給手法に関する調査研究	㈱竹中工務店
	大規模複合開発の機能複合の研究	㈱竹中工務店
	公社集合分譲住宅住まい方調査研究	大阪府住宅供給公社
	共同住宅地区の類型化と変容予測の研究	㈶大阪府住宅管理センター
	住宅供給システムに関する調査	大阪市住宅整備公社
1994	関西建築・都市センター構想検討調査	大阪府
	木造賃貸住宅居住者の住み替え意向調査に係る委員会運営	㈶大阪府まちづくり推進機構
	大規模複合開発の機能複合に関する研究	㈱竹中工務店
	複合型供給手法の住宅事例・利用実態の調査研究	㈱竹中工務店
	都心居住に対応した公団再開発事業の展開方策に関する調査(その1)	住宅・都市整備公団
	建替計画策定に係る従前居住者の動向調査(その3)	㈶住宅管理協会関西支部
1995	複合型供給手法の住宅事例・利用実態の調査研究(その2)	㈱竹中工務店
	今後の公共賃貸住宅の管理システムのあり方に関する検討調査	㈶大阪府住宅管理センター
1996	複合型住宅供給の施設要件・サービス要件調査	㈱竹中工務店
	大阪ガスNEXT21における都市型集合住宅に関する居住実験調査	大阪ガス㈱
	戦前長屋等建替モデル提案募集業務	大阪市
1997	公営住宅における高齢者の共生型居住方式に関する研究	㈶大阪府住宅管理センター
	ネットワーク型ライフスタイルに関する調査研究	㈱竹中工務店技術研究所
	大阪ガスNEXT21における都市型集合住宅に関する居住実験調査(2)	大阪ガス㈱

事務所・事務局の変遷

本会の創立時の動き

関西建築家の有志は、1917年の２月以来、春夢閑眠からようやく醒めてそれぞれ期するところがあった。集まれば斯界の前途を語ることが多く、このため片岡、波江両氏の名によって一片の檄文を52名の有志に送った。期せずして北区魚岩楼に集まった建築学会正会員の関西在住者39名は、要するに関西の建築家は団結して相互の意思疎通を諮りながら建築界の向上発展を期さねばならないということで意見が一致して、５名の委員を選び、協会の創立案づくりを委嘱することになった。



設置・移転年月日	所在地	建物名	備考
1917年３月30日	東区今橋1丁目11番地	片岡事務所内	冒頭の沿革にも記載のとおり、協会の創立は片岡事務所において出発したと記されている。
1920年４月１日	西区京町堀上通1丁目5番地	不動貯金銀行ビルディング3階	（会誌、1920年５月号会報）
1921年９月15日	北区絹笠町9	大江ビルヂング37号室	（会誌、1921年９月号会報、10月号に写真）
1924年２月１日	北区堂島浜通1丁目1番地	堂島ビルディング	（会誌、1923年９月号会報）
1926年９月15日	北区中之島2丁目25番地	江商ビルディング5階514号室	（会誌、1926年10月号会報）
1927年９月１日	西区土佐堀通1丁目1番地	大同生命ビル7階20号室	（会誌、1927年10月号会報）
1932年５月７日	北区中之島3丁目3番地	朝日ビル4階事務室	（会誌、1932年６月号会報）
1946年12月24日	〃	〃　6階の1室	
1948年12月19日	北区天神橋	大阪建設会館内に分室を設置	（会誌、1949年１月号会報）
1956年10月10日	東区北浜3丁目37番地	近畿建築会館内	（会誌、1956年10月号会報）
1983年12月22日	北区梅田1丁目1番3-2100	大阪駅前第3ビル21階	（会誌、1983年12月号会報）

支部事務所の所在地

支部名	所在地	所属区域	TELおよびFAX
京都支部	〒604-0944 京都市中京区押小路通柳馬場東入橘町641　京都建設会館別館内	京都府、滋賀県の区域	TEL 075-211-2857 FAX 075-255-6077
中国支部	〒730-0042 広島市中区国泰寺町1-8-4 ㈱日興内	鳥取県、島根県、岡山県、広島県および山口県の区域	TEL 082-244-2111 FAX 082-244-2193
東海支部	〒460-0008 名古屋市中区栄町4-3-26 愛知建築士会内	愛知県、三重県、岐阜県、静岡県の区域	TEL 052-261-1451 FAX 052-261-0251
和歌山支部	〒640-8045 和歌山市ト半町38 建築士会館内	和歌山県の区域	TEL 0734-23-2562 FAX 0734-33-2772

事務局職員名簿

年度	職員名簿
1917	山本辰次郎
1918	小谷　信蔵　　岡部　顕則(嘱託)
1919	江村　郊邨(編集)　　越山　　達(会計)(嘱託)　　武波　　泰　　山崎万寿夫
1921	江村　郊邨　　西谷　　節　　山崎万寿夫　　清川　伊佐　　武波　　泰(会計嘱託)
1922	江村　郊邨　　西谷　　節　　大谷　政蔵　　三谷　良造　　山崎万寿夫　　山田　静吾
1923	江村　郊邨　　西谷　　節　　清川　伊佐　　山田　静吾　　伊藤二世子　　田村　春松(嘱託)　　大和　栄衛

年　度	職　員　名　簿
1924	江村　郊邨　西谷　節　清川　伊佐　大和　栄衛　伊藤二世子　田村　春松(嘱託)　鷹取　陽 薦田夏次郎
1925	江村　郊邨　薦田夏次郎　西谷　節　鷹取　陽　大和　栄衛　田村　春松　山口　スエ
1926	江村　郊邨　薦田夏次郎　西谷　節　鷹取　陽　大和　栄衛　山口　スエ
1927	薦田夏次郎　西谷　節　鷹取　陽　大和　栄衛　山口　スエ
1928	薦田夏次郎　西谷　節　鷹取　陽　大和　栄衛　川崎虎之助　山口　スエ　高谷　まさ　深町　俊子
1929	西谷　節　三宅　保男　鷹取　陽　高橋　靖　大和　栄衛　山口　スエ　高谷　まさ　深町　俊子
1930	西谷　節　三宅　保男　鷹取　陽　高橋　靖　深町　俊子　土屋　ふみ　家鋪　文枝　曽我　佳音
1931	西谷　節　三宅　保男　鷹取　陽　大和　栄衛　土屋　ふみ　家鋪　文枝　曽我　佳音　南田　鶴
1932	西谷　節　三宅　保男　鷹取　陽　大和　栄衛　家鋪　文枝　曽我　佳音　南田　鶴
1933	西谷　節　三宅　保男　鷹取　陽　大和　栄衛　家鋪　文枝　曽我　佳音　南田　鶴
1934	西谷　節　三保　深男　大和　栄衛　南田　鶴　戸川　弘　吉田　仲子　小坂　常男　山北　保郎 長沢発太郎　栗本　利代　平本　花子
1935	西谷　節　大和　栄衛　南田　鶴　戸川　弘　吉田　仲子　小板　常男　山北　保郎　長沢発太郎 栗本　利代　平本　花子　植田志津子　井上　常　中村サワ子　井上　喜美
1936	西谷　節　大和　栄衛　戸川　弘　吉田　仲子　小板　常男　山北　保郎　長沢発太郎　栗本　利代 平本　花子　植田志津子　井上　常　中村サワ子　井上　喜美
1937	西谷　節　大和　栄衛　戸川　弘　小板　常男　山北　保郎　長沢発太郎　栗本　利代　平本　花子 植田志津子　井上　常　近藤寿賀子　渡辺　繁子　大西　拡子　小田みゆき　山本　房江
1938	西谷　節　大和　栄衛　戸川　弘　小板　常男　植田志津子　大西　拡子　小田みゆき　山本　房枝 山内　潔水　小野まさを　白江ミネコ　渡部　文子　西村貴代恵
1939	大和　栄衛(書記長)　戸川　弘(編集)　小板　常男　植田志津子　山内　潔水　小野まさを　石田　雅美 林　カク子　小川　好江　石原　房子　三島マスエ
1940	大和　栄衛(書記長)　戸川　弘　近藤壽賀子　小板　常男　石田　雅美　山内　潔水　田畑辰五郎 氏田　静枝　藤井　精二　豊島　悦子　松浦　久子　阿部　香　寺浦比奈子
1941	大和　栄衛(書記長)　戸川　弘　近藤壽賀子　石田　雅美　山内　潔水　片木宇佐男　田畑辰五郎 氏田　静枝　藤井　精二　松浦　久子　竹内美代子　網島　敏枝　豊岡　種子　福島　貞子　山形　憲一
1942	大和　栄衛(書記長)　戸川　弘　近藤壽賀子　松井　芳勝　高林　照芳　小野　正夫　朝倉 加藤　奥　弘綱　成宮　九一　阿部　香　永田チヨ子　杉本　セン　田　スミエ　福島　貞子
1943	大和　栄衛(書記長)　近藤壽賀子　戸川　弘　板井　泰一　田中　清子　福地　和子　東本　柳谷　久栄
1944	大和　栄衛(書記長)　近藤壽賀子　戸川　弘　柳谷　久栄　山下
1945	大和　栄衛(書記長)　近藤壽賀子　戸川　弘　柳谷　久栄　勝田　貞子
1947	大和　栄衛(書記長)　戸川　弘　西川　總一　祖川　重文　新田　英夫　徳光　柳谷　久栄　九西
1948	大和　栄衛(書記長)　戸川　弘　新田　英夫　祖川　重文　柳谷　久栄　石本　博　高原　黒木 東出　清光　福永　喜一
1949	大和　栄衛(常務理事)　戸川　弘　新田　英夫　福永　喜一　石本　博　下河原　川口美代子 岡野　幸子　森本　祖川　重文　東出　清光　龍谷　(臨時)中村千恵子　板井
1950	大和　栄衛(常務理事)　戸川　弘(庶務係長)　新田　英夫(会計係長)　沖田　誠一(編集係長)　石本　博 川口美代子　岡野　幸子　東出　清光　中村千恵子　西田　亀次　児島　育子
1951	大和　栄衛(常務理事)　戸川　弘　沖田　誠一　安達　英男　岡野　幸子　山田　唯美　平木　育子 朝倉　純子　西田　亀次　児島　育子　(広告)東出　西田　吉田
1952	大和　栄衛(常務理事)　戸川　弘　山田　唯美　岩下　明正　鹿内　武三　(会計)安達　英男　平木　育子 (編集)沖田　誠一　朝倉　純子　児島　育子　(広告)東出　吉田　(集金)宇都宮　安原
1958	手島　政男(常務理事・事務局長)　〔会計〕安藤　省三　黒田　顕真　笹川シズエ　空　宏　松本　守行 沖田　誠一(書記長)　〔庶務〕吉田　悦二　三木ちえ子　篠田　勝代　〔会合〕山田　唯美　鎌尾　淑子 大和　栄衛(嘱託)　〔編集〕松井　昭光　池田　トシ　〔嘱託〕東出　清光　吉田　晃

年　度	職　員　名　簿
1961	手島　政男(常務理事・事務局長) 沖田　誠一(書記長) 大和　栄衛(嘱託)
	〔会計〕安藤　省三　笹川シズエ　空　宏　妹尾　森造　植村　明 〔庶務〕吉田　悦二　鎌尾　淑子　篠田　勝代　〔会合〕山田　唯美　三木ちえ子 〔編集〕松井　昭光　佐々木千年世 〔嘱託〕黒田　顕真　東出　清光　吉田　晃　鹿内　武三　畑　忠治
1964	手島　政男(常務理事・事務局長)
	〔庶務係〕吉田　悦二　三木ちえ子　岡田由美子　西崎セキ子　篠田　勝代 〔会計係〕安藤　省三　妹尾　森造　善金加寿子　福原　直美　向当　昌弘 〔事業係〕山田　唯美　三木ちえ子(兼務)　今西　洋子 〔編集係〕松井　昭光　空　宏　佐々木千年世 〔嘱託〕黒田　顕真　東出　清彦　吉田　晃　鹿内　武三
1967	福中定三郎(常務理事・事務局長) 岩崎甚太郎(参与)
	〔庶務係〕吉田　悦二　岡田由美子　西崎セキ子　小石原千代乃 〔会計係〕安藤　省三　斎藤　直美　板東三喜子 〔事業係〕山田　唯美　三木ちえ子　北川　敏子　福本　健也 〔編集係〕松井　昭光　東出　輝彦　佐々木千年世 〔嘱託〕黒田　顕真　東出　清彦　吉田　晃　鹿内　武三
1969	福中定三郎(常務理事・事務局長) 岩崎甚太郎(参与)
	〔庶務課〕吉田　悦二　岡田由美子　佐々木京子　杉谷　和子　小石原千代乃 〔会計課〕佐藤　寛　西崎セキ子　板東三喜子 〔事業課〕山田　唯美　三木ちえ子　宇藤　光子　渡辺　晃英 〔編集課〕松井　昭光　竹添　通徳　佐々木千年世 〔嘱託〕黒田　顕真　東出　清彦　吉田　晃　鹿内　武三
1971	福中定三郎(常務理事・事務局長) 岩崎甚太郎(参与)
	〔庶務課〕吉田　悦二　上田セキ子　渡辺　美和　小石原千代乃 〔会計課〕佐藤　寛　杉谷　和子　板東三喜子 〔事業課〕山田　唯美　三木ちえ子　芥川美智子　中平　昌三 〔編集課〕松井　昭光　吉崎　裕子　宇藤　光子　佐々木千年世 〔嘱託〕黒田　顕真　東出　清彦　吉田　晃　鹿内　武三
1973	福中定三郎(常務理事・事務局長)
	〔庶務課〕吉田　悦二　上田セキ子　以倉久美子　佐々木千年世　小石原千代乃 〔会計課〕板東三喜子　江口美智子 〔事業課〕三木ちえ子　芥川美智子　中平　昌三 〔編集課〕松井　昭光　吉崎　裕子　朽木　克己　梅村　繁人 〔嘱託〕黒田　顕真　東出　清彦　吉田　晃　鹿内　武三
1976	福中定三郎(常務理事・事務局長) 吉田　悦二(事務局次長) 松井　昭光(事務局次長)
	〔総務課〕吉田　悦二　上田セキ子　佐々木千年世　杉谷　和子　福本　泰子 板東三喜子　小石原千代乃 〔事業課〕三木ちえ子　芥川美智子　宮竹　正次 〔編集課〕松井　昭光　吉崎　裕子　伊藤　和夫　長井　敏明 〔嘱託〕東出　清彦　黒田　顕真　鹿内　武三
1978	福中定三郎(参与) 吉田　悦二(事務局長) 松井　昭光(事務局次長)
	〔総務課〕吉田　悦二　上田セキ子　佐々木千年世　杉谷　和子　福本　泰子 板東三喜子　小石原千代乃 〔事業課〕三木ちえ子　芥川美智子　宮竹　正次 〔編集課〕松井　昭光　吉崎　裕子　伊藤　和夫　大福　逸夫 〔嘱託〕東出　清彦　黒田　顕真　鹿内　武三
1980	福中定三郎(参与) 吉田　悦二(事務局長) 松井　昭光(事務局次長)
	〔総務課〕吉田　悦二　上田セキ子　杉谷和子　板東三喜子　石川百合子 〔事業課〕三木ちえ子　宮竹　正次 〔編集課〕松井　昭光　吉崎　裕子　池田　成男　大島　正樹 〔嘱託〕東出　清彦　黒田　顕真　鹿内　武三
1982	福中定三郎(参与) 吉田　悦二(事務局長) 松井　昭光(事務局次長)
	〔総務課〕吉田　悦二　上田セキ子　杉谷　和子　板東三喜子 〔事業課〕三木ちえ子　宮竹　正次 〔編集課〕松井　昭光　吉崎　裕子　池田　成男　大島　正樹 〔嘱託〕東出　清彦　黒田　顕真　栗谷　茂
1984	吉田　悦二(事務局長) 松井　昭光(事務局次長)
	〔総務課〕吉田　悦二　上田セキ子　杉谷　和子　板東三喜子 〔事業課〕三木ちえ子　宮竹　正次 〔編集課〕松井　昭光　吉崎　裕子　森ノ木徳信　大島　正樹 〔嘱託〕東出　清彦　黒田　顕真　栗谷　茂

年　度	職　員　名　簿
1986	吉田　悦二(事務局長) 松井　昭光(事務局次長)
	〔総務課〕吉田　悦二　上田セキ子　杉谷　和子　青野　明子 〔事業課〕宮竹　正次　森本　勉 〔編集課〕松井　昭光　吉崎　裕子　大島　正樹　森ノ木徳信 〔嘱託〕東出　清彦　黒田　顕真　栗谷　茂
1988	松田　至弘(専務理事) 吉田　悦二(常務理事・事務局長) 松井　昭光(事務局次長)
	〔総務課〕上田セキ子　杉谷　和子　青野　明子 〔事業課〕森ノ木徳信　森本　勉 〔編集課〕吉崎　裕子　宮竹　正次　大島　正樹 〔嘱託〕東出　清彦　黒田　顕真　栗谷　茂　増田栄一郎
1989	松田　至弘(専務理事) 吉田　悦二(常務理事・事務局長)
	〔総務課〕青野　明子　上田セキ子　杉谷　和子 〔事業課〕森ノ木徳信　森本　勉 〔編集課〕大島　正樹　増田栄一郎　宮竹　正次　吉崎　裕子 〔嘱託〕東出　清彦　黒田　顕真　〔ゴルフ〕三木ちえ子
1990	松田　至弘(専務理事・事務局長) 首藤　一夫(事務局次長)
	〔総務課〕青野　明子　上田セキ子　杉谷　和子 〔事業課〕森ノ木徳信　森本　勉 〔編集課〕大島　正樹　増田栄一郎　宮竹　正次　吉崎　裕子 〔嘱託〕東出　清彦　黒田　顕真　〔ゴルフ〕三木ちえ子
1991	松田　至弘(専務理事) 首藤　一夫(事務局次長)
	〔総務課〕青野　明子　上田セキ子　杉谷　和子 〔事業課〕森ノ木徳信　森本　勉 〔編集課〕大島　正樹　増田栄一郎　宮竹　正次　吉崎　裕子 〔営業等〕東出　清彦　黒田　顕真　三木ちえ子
1992	松田　至弘(専務理事)1992.6.4まで 1992.10.1から 野上　淳二(常務理事・事務局長) 首藤　一夫(事務局次長)
	〔総務課〕青野　明子　上田セキ子　杉谷　和子 〔事業課〕森ノ木徳信　森本　勉 〔編集課〕大島　正樹　増田栄一郎　宮竹　正次　吉崎　裕子 〔営業等〕東出　清彦　黒田　顕真　三木ちえ子
1993	野上　淳二(常務理事・事務局長) 渡辺　勝(事務局次長)
	〔総務課〕青野　明子　上田セキ子　杉谷　和子 〔事業課〕森ノ木徳信　森本　勉 〔編集課〕大島　正樹　増田栄一郎　宮竹　正次　吉崎　裕子 〔営業等〕東出　清彦　黒田　顕真　三木ちえ子
1994	野上　淳二(常務理事・事務局長) 渡辺　勝(事務局次長)
	〔総務課〕青野　明子　上田セキ子　杉谷　和子 〔事業課〕森ノ木徳信　森本　勉 〔編集課〕大島　正樹　増田栄一郎　宮竹　正次　吉崎　裕子 〔営業等〕東出　清彦　黒田　顕真　三木ちえ子
1995	野上　淳二(常務理事・事務局長)
	〔総務課〕青野　明子　上田セキ子　杉谷　和子 〔事業課〕宮竹　正次　森ノ木徳信　(嘱託)南　次郎 〔編集課〕大島　正樹　森本　勉　吉崎　裕子　(嘱託)増田栄一郎 〔営業等〕東出　清彦　黒田　顕真　黒田　能弘　三木ちえ子
1996	加藤　三郎(常務理事・事務局長)
	〔総務課〕青野　明子　上田セキ子　杉谷　和子 〔事業課〕宮竹　正次　森ノ木徳信　(嘱託)南　次郎 〔編集課〕大島　正樹　森本　勉　吉崎　裕子　(嘱託)増田栄一郎 〔営業等〕東出　清彦　黒田　顕真　黒田　能弘　三木ちえ子
1997	加藤　三郎(常務理事・事務局長)
	〔総務課〕青野　明子　上田セキ子　(杉谷　和子)　森本　勉 〔事業課〕宮竹　正次　森ノ木徳信　(嘱託)南　次郎 〔編集課〕大島　正樹　(森本　勉)　永山　夏美　吉崎　裕子 (嘱託)増田栄一郎 〔営業等〕東出　清彦　黒田　顕真　黒田　能弘　三木ちえ子
1998	加藤　三郎(常務理事・事務局長)
	〔総務課〕青野　明子　上田セキ子　森本　勉 〔事業課〕宮竹　正次　森ノ木徳信　(嘱託)南　次郎 〔編集課〕大島　正樹　永山　夏美　吉崎　裕子　(嘱託)増田栄一郎 〔営業等〕東出　清彦　黒田　顕真　黒田　能弘　三木ちえ子

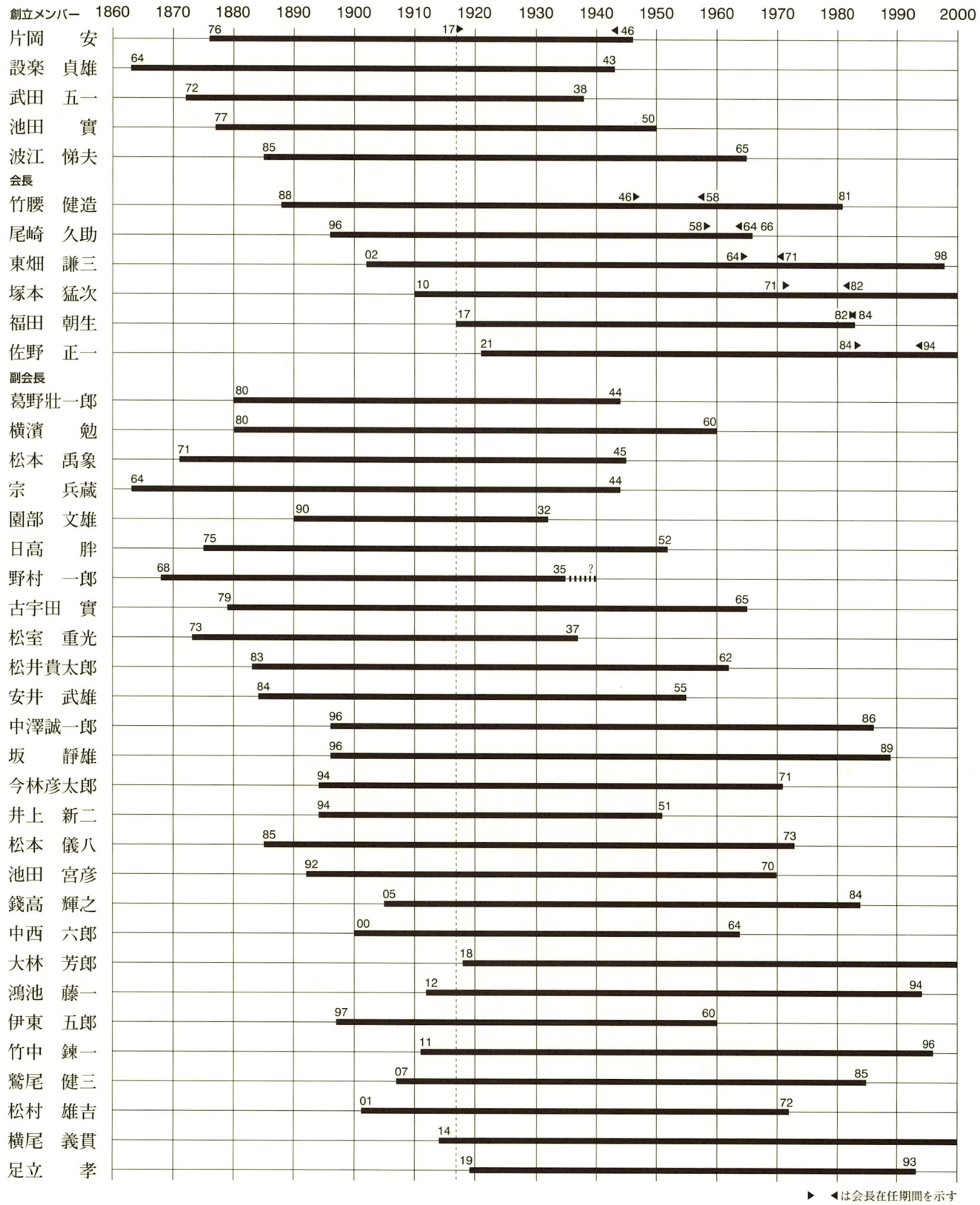
※一覧には、1998年度までを掲載。　※残された資料をもとにしているため、記録のない年度は掲げていない。

第２編

それぞれの時代を担った人々の活動

第１章　　草創期の人々

人物年表



▶ ◀は会長在任期間を示す

片岡　安（かたおか　やすし）



●略歴
1876　６月４日、加賀前田藩士細野直重の次男として金沢に生まれる
1897　東京帝国大学工科大学造家学科卒
　　日本銀行技師となる
1899　大阪支店建築工事中、日本生命保険株式会社副社長片岡直温の婿養子となる
1903　第三十四銀行技師に転ずる
1905　辰野片岡建築事務所開設。大阪を中心に多くの建物の設計監理にたずさわる
1912　大阪市公会堂指名コンペの一員に選ばれる
1915　12月“大阪辰野片岡事務所の事業概要”を建築雑誌に寄稿
1916　12月“現代都市之研究”刊行
1917　３月“同窓建築技術家に告ぐ”を建築雑誌が紹介
　　３月30日、関西建築協会創立。初代理事長となる
　　大阪市都市改良計画調査会委員
1918　内務省都市計画調査会委員
1918　社団法人大阪工業会常務理事
1919　２月、日本生命保険株式会社取締役となる（～1927年５月）
　　11月、片岡松井建築事務所を開設（～1924年）
1920　都市計画大阪地方委員会委員
　　７月26日、東京帝国大学より工学博士号授与される
　　論文名“都市計画ノ科学的考察”
　　９月、アメリカ外遊

片岡安の足跡をみていくと、なぜ彼はあのようなバイタリティ溢れる行動がとれたのかと思わざるをえない。彼が大学を終え、日銀大阪支店の工事監理のため大阪に赴任して居を構えるようになったとき、彼には二つの幸運に巡り合う機会があった。

その一つは、彼が片岡家の婿養子となったことであり、他の一つは彼が明治38年に建築界の大御所であった辰野金吾と連名で建築事務所をはじめたことである。

最初の一つはプライベートなことであったが、片岡家が大阪財界で築きあげた地位と関連して、決して見過ごすことができない、重みをもっていたと言える。片岡家は土佐の山深い高岡郡葉山村の郷士で、兄の直輝は安政３年生まれ、明治６年東京に出て海軍主計学校に学び、明治19年西郷海軍大臣に随行して欧米を視察し、さらに同21年から24年までフランスに滞在している。帰国後、同26年から３年間大阪府の書記官となり、同29年６月、日銀に入って同30年大阪支店長の地位についた。直輝は気骨のある人物で、当時日銀総裁に就任した山本達雄が独断専行することに反発した理事河上謹一、植村俊平、志立鉄次郎らと連名で辞任し、のち明治36年大阪瓦斯社長に就任する。

この直輝が日銀大阪支店長時代に目を付けたのが片岡安であった。直輝は弟で日本生命副社長の地位にあった直温に男子がいなかったことから、直温の長女の盈衛の婿に安を推薦したのである。直温は日本生命の社長を経て衆議院議員となり、大正13年内務政務次官、翌14年商工大臣となり、同15年には大蔵大臣にまでなった人物である。

直輝はまた大正６年阪神電鉄の社長になるほか、大阪株式取引所、大林組など多くの会社の重役にもなっており、大阪経済界に大きな影響力をもっていた。このような片岡家の関西財界における地位は、建築家片岡安としての仕事の受託のうえでもプラスになることが多かったであろうし、さらに彼が実業界との太いパイプをもつうえでも役立ったと言える。

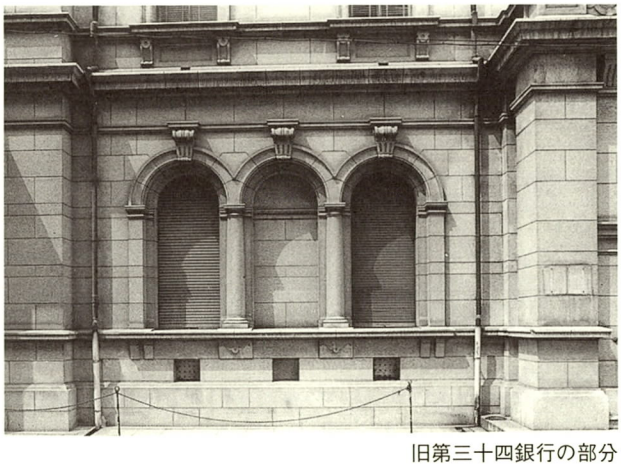
その二については改めて申すまでもないことであるが、28歳の彼にとっては、大変名誉あることであった。このとき片岡安の関西での建築活動の基盤はつくられたといってよいであろう。ただ片岡も明治36年に日銀を辞して、第三十四銀行に転じており、そこで本店の建築に関係している。第三十四銀行は、最初国立銀行であったが、同32年頭取に小山健三（もと東京高等商業学校長）を迎えてさらに発展し、関西における有力銀行の一つとなる。このことが縁で、片岡は事務所を開いてからも第三十四銀行の支店のいくつかを手がけるほか、後に関一との深い協力関係を生む要因となる。

片岡安の建築家としての手腕は、辰野金吾の名声に隠れて目立たないが、この三十四銀行本店は、明治37年の竣工であるから、彼が三十四銀行在職中の作品とみられ、高麗橋にあったルネッサンス調の端正なたたずまいは、デザインについても才能のあったことを伺うことができる。

また辰野と連名で事務所を営んでからも、関西で最も大きな建築事務所として、主要な銀行、会社、公会堂、工場、住



旧第三十四銀行（左の建物）外観


旧第三十四銀行の部分

1922　１月、片岡建築事務所単独経営
　　２月、京都帝国大学工学部建築学科講師嘱託（～1929年３月）
　　４月、社団法人大阪工業会理事長（～1946年５月）
　　10月１日関西工学専修学校開校初代校長となる
1923　帝都復興評議会委員
　　大阪府信用組合聯合会会長（～1943年）
1927　石本喜久治と片岡・石本建築事務所を設立（昭和５、６年ごろまで）
1932　２月～７月、第16回国際労働会議本邦使用者代表として伊国ジェノヴァに派遣。帰途欧州・米国視察
1933　大阪商工会議所副会頭
1934　７月、金沢市名誉市長に就任（～1936年４月）
1940　大阪商工会議所会頭
1941　訪伊経済使節団副団長として渡伊、独逸、ソ連を経て帰国
1946　５月26日逝去、享年70歳
　　11月、日本建築協会会報第６号“故片岡会長を憶ふ”追悼号が出る

宅など数多くの建築作品を手がけており、当時の状況について安は、事業概要の中でつぎのように述べている。“当事務所員一同の事務に従事するや、常に博士の意を体し、誠実と勤勉を以て一貫し、世に所謂美術家風の放逸を許さず、殊に創業以来五年間は日曜祭日と雖も事務を廃せず、孜々として設計の細密なる調査と監督の周到とを期したり。云々”と。

この事務所には波江悌夫、吉木久吉、徳永庸らがいたが、その空気は大変厳格であったと言われる。

しかし彼は、単に建築事務所長の役柄で満足する人物ではなかった。

大正３年に設立された大阪工業会は、大阪工業界の発展のため、工業家の大同団結を図るため活動するが、大正11年からはその理事長に就任し、「その徹底した自由思想により、官憲に対しては、これにおもねることなく強い態度を取り、昭和21年５月まで困難な時代にあって本会の活動を指導した」（大阪工業会50年史）と記されている。

また、大阪財界における活動でも昭和８年３月大阪商工会議所副会頭となり、当時の財界の中で土木建築業界は後発的な存在であったため、その地位向上に積極的に取り組む。

宮本又次はこのことについて、“工業会派の会議所なぐりこみである”と評している。

彼は昭和15年11月から同18年９月まで安宅弥吉の後をついで同会議所の会頭を務めた。当時技術系出身の会頭は珍しく、この点について森平兵衛はその追悼文の中で“君は技術家出身のためか直情径行で、恰も設計図の正しきが如く規格に合わぬことは飽く迄排撃するという性格の持ち主であった故、実業家の如く妥協や譲り合う等の行為は全く出来なかった。併し中途から実業家に転身而も大阪商工会議所会頭就任以来円熟せる社交と蘊蓄せる抱負を以て財界の指南者として自他共に許さるるに至った。”と述べている。このように彼はその個性的な性格によって、いろいろな評価がなされたことも事実であったようだ。

また彼は、昭和９年７月13日から同11年４月20日まで約１年10カ月の間、郷里であった金沢市の名誉市長を務めた。



これは金沢市議会の推薦に基づくものであり、その短い在任期間中に、都市計画の推進、市街美化運動、隣接市町村の市部編入、大阪商工会議所、大阪工業会との議員の交流など各種の事業にその敏腕を振るっている。彼が金沢市の名誉市長を辞任することについて、それは大阪での激職との両立がむずかしく、健康上の理由で自ら辞職を申し出たゆえであった。

彼の業績の中にさらに加えると、大正11年に設立された関西工学専修学校（現大阪工業大学の前身）があった。この学校はかねてから工業教育の重要性を認識していた片岡安が、大阪の事業家本庄京三郎の発案に協力したもので、彼は初代理事長兼校長となり、さらに当時大阪府建築課長であった池田實らにも参加を求め、加えて私財を投じて教育や運営に努力を払っている。

片岡安の住まいについてみると、明治30年代の初め家庭をもったころは大阪の上本町７丁目に住むが、同39年に南海沿線の浜寺海岸に居を移している。彼が浜寺に移った理由について、自らが記した“余の住宅に就いて”の中で、つぎのように述べている。

“住居を都会の真ん中に選ぶ事は、今日では時代遅れとなって居るが、自分も大阪市内の生活を嫌い浜寺はその当時その地相が健康に適し光線、通風、井水共に清浄を極め海水浴に便であったためで、その頃電灯もなく電話も開通していない純然たる田舎の生活であった”と。しかしそのような浜寺ののどかな時代も、都市郊外地の発展によって俗化が進んでしまったので、大正４年京都伏見桃山の山麓の地に再び居を移した。この二つの住宅はいずれも和風であった。

上に掲げた、片岡安の浜寺時代のくつろいだ家族との団らんの写真は、彼の私生活の一面を伺えるものとして興味深い。また、明治30年代後半から大阪市民が郊外へ移動を開始する時代とも符牒するのである。　（坂本勝比古）

設楽 貞雄（しだら　さだお）



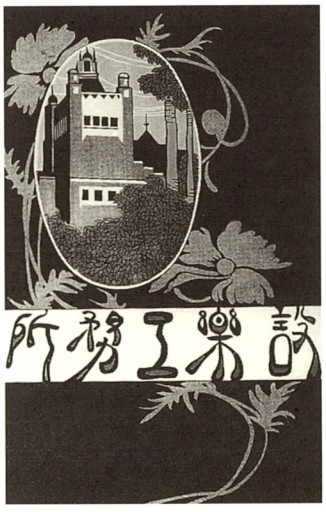
●略歴

1864　７月３日、福島県二本松本宮で設楽弥兵衛の次男として出生
1889　工手学校造家学科の第１回卒業生となる。同期生に山本鑑之進がいた
1891　日本土木会社に入社。華族女学校、東京郵便電信局の工事に参加
1892　宮内省内匠寮に出仕し、帝室京都博物館の現場に勤務
1896　桑原政工業事務所に招かれ、建築部長山口半六の下で働く
1899　山口半六が独立し事務所開設に従い、その下で所長代理となる
1900　請われて山陽鉄道株式会社の建築係長となり、山口事務所を辞任
1907　神戸建築事務所を設立。のち、設楽建築工務所と改名
1911　大阪土地建物会社顧問
　　新世界娯楽場計画に参加
1917　関西建築協会創立委員理事
1919　日本建築協会理事（９年度、13年度）
1928　ヨーロッパ視察旅行
1933　設楽建築工務所を閉鎖
1936　日本建築協会副会長
1943　12月15日、神戸で死去。享年80歳

設楽貞雄は関西で活躍した民間建築家の草分けのひとりであった。彼は元治元年福島県二本松藩士設楽弥兵衛の次男として生まれ、父は戊辰の役で討幕軍と戦い戦死した。幼くして父を失った貞雄は向学心に富み、郷里で代用教員をしながら学資を蓄え、明治21年25歳で東京の工手学校に入り翌年、第一回卒業生として２番の成績で卒業している。

彼は日本土木会社に入るが、翌年宮内省内匠寮に出仕し、京都の帝室博物館で現場を受け持ち、このとき宗兵蔵と知り合ったと思われる。彼はこの後、桑原政工業事務所に招かれた。桑原政は工部大学校鉱山学科を明治13年に卒業し、助教授を務めたあと民間コンサルタントを開設したもので、その建築部門を担当していたのが山口半六であった。山口半六はフランス留学から帰国後、文部省の建築掛長在任中病のため退官。神戸の須磨で療養生活後の復帰であった。山口半六は明治32年独立して工学博士山口半六事務所を大阪に開設するのに合わせ、設楽もその支配人兼所長代理となるが、翌33年山陽鉄道会社の建築係長となり、山口半六の事務所を去る。山陽鉄道では駅舎、工場、ホテル等の建築に従事し、同40年神戸建築事務所を設立。後に設楽建築工務所と改名し、本格的な建築設計活動を開始した。

設楽貞雄の名を高めたのは、大阪の新名所となった新世界の建設である。その中央に建てられた高さ250尺の通天閣は鉄骨造で、パリのエッフェル塔を模したと言われ、その独特のスタイルは浪花っ子の話題をさらった。この楽園地は通天閣を中心に周囲に活動写真館、各種興行場が並び、高塔の南にはルナパークと呼ばれる遊園地が設けられた。これは、アメリカのコニーアイランドにヒントを得たという。

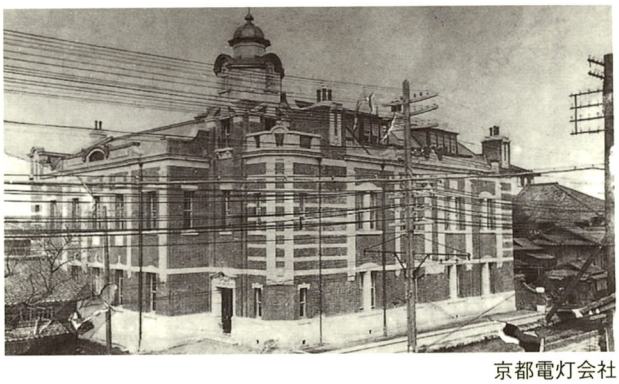




日本毛織本社

大阪市が発展するうえで、娯楽施設の乏しいことに着眼した、当時大阪米穀取引所の理事長だった宮崎敬介が、大阪の財界人や実業家に働きかけて、明治43年大阪土地建物株式会社を興し、社長に大阪財界の重鎮・土居通夫をたて、一大娯楽場の建設事業を展開したものであった。設楽貞雄は、その中で技師長として采配を振るった。彼の事務所の経理簿によると、このとき大阪土地建物会社より明治44年上半期から大正２年上半期まで５期にわたって6,250円の顧問料を受け取っている。当時としてはかなりの額であった。設楽がこの新世界の大きな規模の事業を引き受けたのは、明治42年に完成する大阪米穀取引所の設計を行い、理事長であった宮崎敬介の信任を得たからにほかならないであろう。

設楽が明治末から大正期にかけて大きな活動ができたのは、彼の堅実な性格と誠実な態度が、大阪や神戸の実業家たちの心証をよくしていたからと言える。例えば事務所を開設するに当たって、山陽鉄道の社長であった牛場卓蔵、副社長の村



京都電灯会社

●作品
山陽鉄道時代（1900年６月～1906年）に下関山陽ホテル、下関鉄道旅館、下関工場、鷹取工場等に関係するが、年月は不詳。
1906　広島軍用停車場前凱旋門
1907　牛場卓蔵邸（神戸塩屋）、村野山人邸（神戸須磨）、武藤邸玉突場（神戸舞子）
1908　日本毛織本社、日本毛織加古川工場、鳴尾速歩競馬場、御影小学校　網干セルロイド人造絹絲 KK
1909　大阪堂島米穀取引所
1910　京都電灯会社、神戸電灯会社
1911　近松座（大阪）、新世界の建築計画、南海鉄道浜寺ホテル
1912　新世界通天閣
1913　新開地聚楽館（神戸）
1914　千日土地楽天地
1916　大阪貯金銀行、日本商業銀行
1918　兵庫県農工銀行、岡崎邸洋館
1919　キャバレー・デパノン
1920　西尾類蔵邸（神戸須磨）
1922　内田信也邸和館（神戸須磨）
1924　沢野邸、沢田邸（神戸須磨）
1926　江商ビルディング
1929　長瀬商店（大阪）

野山人、工学士桑原政らを相談役に迎えたほか、牛場、村野両氏の邸宅の設計を行っている。先の新世界の設計に当たっては、事務所員伊達陶二郎（工手学校卒）の活躍があった。伊達陶二郎はアメリカ人建築家ガーディナーや下田菊太郎、ドイツ人建築家デ・ラランデの事務所で働いたのち、東京市、横浜市に勤めるなど、多彩な経歴の持ち主で、同44年大阪土地建物株式会社に入り、新世界の建築に携わった。彼はそれのみでなく、この新世界に近い千日前に建てられた楽天地の娯楽施設のコンペに入賞し、大阪千日土地株式会社による千日楽天地なる娯楽施設の建築にも貢献した。伊達はしかし大正７年１月病のため倒れる。彼の死は建築協会機関誌に訃報として紹介されている。

設楽貞雄の活躍を支えたのは、もちろんその下にあって励んだ事務所員の努力によるところが大きいが、そのなかには優れた才能をもった人も少なくなかった。また、彼らは伊達をはじめ、多くの所員が建築協会のメンバーでもあった。

篠田進（明治42年名古屋高工卒）は同43年より設楽事務所に入り、新世界等の設計にかかわり、大正３年名古屋へ戻るが、後に愛知県建築士会長を務める。彼の後任として田代守次（大正３年名古屋高工卒）、宮飼克二（大正５年名古屋高工卒）、小川正徳（大正９年名古屋高工卒）らがいた。このうち宮飼克二は、設楽事務所に大正15年まで在籍しているが、宮飼は神戸一中の出身で、井上新二と同期であったという。また東大出身者として萩一郎（明治44年卒）と、原田俊雄（大正５年卒）がいた。原田は設楽夫人の甥であった。

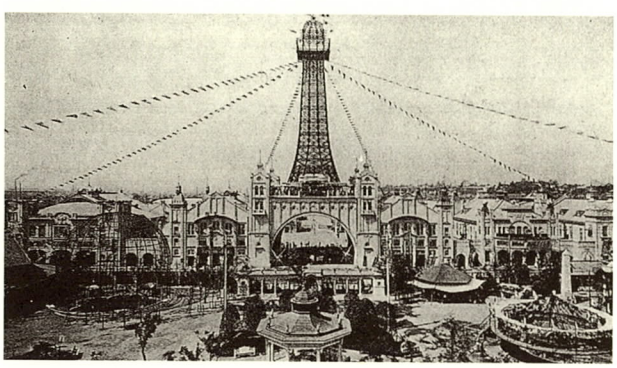
また異色の存在として森山伊望がいた。彼は東京明治学院在学中に渡米し、ニューヨークの有名なデザイン学校プロット・インスティテュートで学び帰国した。のちに、東京に移り、手がけたのが横浜山手のフェリス女学院校舎である。さらに大正12年京都大学の建築学科の第一回卒業生だった設楽貞三（旧姓神尾）は、貞雄の婿養子となった人物で、卒業後設楽事務所に勤務して中之島の江商ビルなどを手がけた。彼の子息設楽貞樹は、現在安井建築設計事務所に勤め、親子三代の建築家である。

設楽事務所には、その発足のとき以来支配人として木村梅次郎がいた。木村は山口半六事務所時代から山陽鉄道においても設楽貞雄とともに仕事をした間柄で、設楽事務所設立に際し番頭役として入所した。彼は和風建築を得意とし、設楽事務所の優れた和風住宅、例えば内田信也邸和館、須磨離宮道にあった沢田清兵衛邸（大正13年）は、主として木村梅次郎が担当したと言われる。

設楽貞雄は、その豊富な経歴と、信頼の置ける人柄によって、関西における経済界に確固たる地位を築いた建築家であった。関西建築協会の設立に当たって、その創立委員のひとりとなったことは、片岡安をはじめ他の設立委員らがその力量を十分評価していたことを示すものであった。彼は昭和８年に事務所を閉じるが、同11年に協会の副会長を務めたのち、同18年12月15日須磨の自邸で死去した。

（坂本勝比古）


新開地聚楽館


新世界通天閣

武田　五一（たけだ　ごいち）



●略歴

1872　11月15日広島県に生まれる
1897　東京帝国大学工科大学造家学科を卒業
　　同大学大学院に入学
1899　東京帝国大学工科大学助教授に就任
1901　図案学研究のため英独仏留学へ出発
1903　京都高等工芸学校教授に転任
1904　京都府技師を兼任
1907　京都帝国大学文科大学講師嘱託
1908　大蔵省臨時建築部技師を兼任
　　帝国議会および諸官衙建築調査のため欧米へ出張
1912　パナマ万国博のため米国へ出張
1914　東京大正博覧会審査官として米国へ出張
1915　工学博士の学位を授与
1916　法隆寺壁画保存法調査委員
1917　古社寺保存会委員
1918　名古屋高等工業学校校長に転任
　　臨時議院建築局技師を兼任
1919　京都帝国大学工学部建築学科創設委員
1920　京都帝国大学教授に転任
1929　国宝保存会委員
1931　海外出張
1932　国宝保存会委員
1934　法隆寺国宝保存工事事務所長
1938　2月5日逝去

関西建築界の父として知られる武田五一は、明治5年11月15日、広島県に生まれた。明治27年に第三高等中学校を卒業し、同年東京帝国大学工科大学造家学科に入学する。同級生に松室重光、片岡安らがいた。明治30年、卒業。このとき卒業論文に選んだテーマは「茶室建築」であった。この研究は、現在から見れば非常に拙いものではあるが、当時の若き建築家の茶室に対する、あるいは茶室を通して建築というものに対する考え方がよく表れているものである。この論文には次の二つの観点が存在する。一つは、利休の創造した侘茶の空間を絶賛していることであり、もう一つは、利休以後の茶室の展開はその亜流でしかないという、いささか退歩的な観点である。つまり武田は当時、明治の茶室に対して負の捉え方をしていたのであった。またその後、武田は積極的な形として茶室建築の設計を行わなかった。しかしながら武田の、利休による侘茶の空間の創造への憧憬は、自らの作品制作の精神的な意味において昇華することになる。

明治34年から2年余り、図案学の研究のためヨーロッパに渡る。インド洋からマルセイユ、パリ経由でロンドンに向かった。この留学の大半はロンドンを中心にイギリスで過ごすことになる。そしてこのときアーツ・アンド・クラフツ運動やC.R.マッキントッシュの作品と接するのであった。

明治36年、帰国後、新設の京都高等工芸学校図案科教授に赴任する。この時期の作品として、わが国におけるアール・ヌーヴォー建築の白眉として知られている福島行信邸が挙げられる。2年にわたりヨーロッパで学んだ武田ならではの作品といえよう。グラスゴー派やウィーン・ゼツェッシオン等の影響を強く受けたとされるこの作品には、しかしながら和室が設けられ、細部においては例えば襖の引き手にはアール・ヌーヴォーと数寄屋建築の融和を感じさせる意匠が採用されている。一見ミスマッチとも思えるこのデザインを理解するには、武田の留学の目的が図案学研究となっていることに注目せねばならない。つまりこのヨーロッパの新芸術運動においては浮世絵等の日本の影響が、特に図案において強く見いだされるということであり、武田がそのことを理解し、日本文化に対する自負を感じ、そういった観点を持ってこれらヨーロッパの新しい動きを捉えていたということである。つまり武田にとって、これらの新しい運動は決して異国に発生した未知の芸術というのではなく、むしろ日本文化の流れをも包含した動きと捉えられるもので、日本建築の今後の展開を模索していたこの時代においては、日本建築の伝統的な系譜上におけるあるべき方向を示すものの一つとして理解していたと考えられるのである。それを裏付ける一つのエピソードがある。明治38年にF.L.ライトが初来日し京都を訪れるのだが、このとき武田より浮世絵が贈られたのであった。F.L.ライトの浮世絵コレクションは有名であるが、また武田も西洋における浮世絵の意味するところを十分に理解していた一人なのであった。

明治42年の京都府記念図書館（京都府立図書館）は、当時としては大胆にも装飾を排した作品となっている。しかし一方では装飾的要素を完全に消し去りはしなかった。これは様式建築から装飾を排した近代主義建築への過渡期の作品として位置づけられようが、また別に茶室研究より導かれた考え方に基づくものである、との見方もできる。それは無駄な装飾を排すること、しかしながらもっとも効果的な部分に装飾を施すこと、という考えであった。そのあたりに武田の建築装飾の扱い方が表れているようである。大きな窓の採用や平板的な意匠など、当時においてこの建築は、見る人に新し



清水寺本坊（兵庫県）

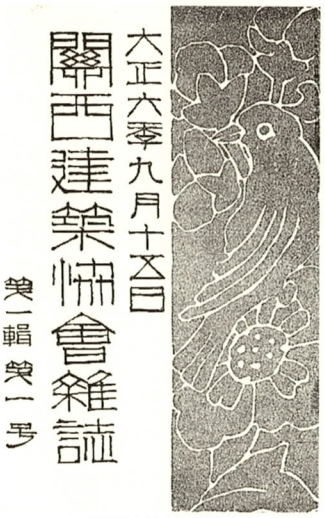
●主要作品
1899　日本勧業銀行（東京市、妻木頼黄の助手として）
1907　福島行信邸（東京市）
1909　京都府記念図書館（京都市）
1910　京都商品陳列所（京都市）
1911　同志社女学校清和館（京都市）
1912　芝川邸（兵庫県）
1913　同志社女学校ゼームス寮（京都市）
1913　二条橋（京都市）
1914　京都帝国大学文学部陳列館（京都市）
1916　山口県庁及び県会議事堂（山口市）
1917　関西建築協会雑誌表紙図案
1917　清水寺根本中堂・大講堂・本坊・宮殿（兵庫県）
1920　自邸（京都市）
1922　京都大学建築学教室（京都市）
1922　勝田邸（神戸市）
1924　京都帝国大学本館（京都市）
1926　藤井美術館（京都市）
1928　大阪毎日新聞社京都支局（京都市）
1928　春日文化集合住宅（名古屋市）
1930　東方文化学院京都研究所（京都市）
1930　桜宮大橋（大阪市）
1932　同志社女学校栄光館（京都市）
1932　日本建築協会賞賞牌
1934　高野山金剛峯寺金堂・根本大塔（和歌山県）
1936　法隆寺觚文庫（奈良県）

い時代の予感を与えたに違いない。

明治41年には二度目の洋行をする。この旅はアメリカ、イギリス、ドイツ、フランスなどを巡るもので、その目的は帝国議会及び諸官衙建築調査のための出張であった。明治22年に明治憲法が制定公布されてから、議院建築（国会議事堂）は国を代表する建築になるものと考えられ、当時の建築家たちの関心の的であった。そして明治30年代にはいると議院建築にかかわる各種の委員会や調査会が発足し、あるいはそれが廃止されるなど、にわかに慌ただしさを増してきたのである。そして武田が大蔵省臨時建築部技師を兼任し、海外出張を命じられたのであった。

大正７年より名古屋高等工業学校校長として転任するが、同年、京都帝国大学建築学科創設委員として学科創設に尽力し、翌大正８年より京都帝国大学建築学科教授となる。このころ、年齢も40代半ばを過ぎ、教育や設計活動のほか、各種の委員を嘱託され、急に忙しくなったようである。したがって設計スタッフに教え子たちを起用することも多くなった。京都高等工芸時代の吉武東里や松本儀八、あるいは京都帝大時代の東畑謙三、岡田孝男らであった。

和服を着こなし、風流を好んだ武田は、幾たびかの洋行を経験したがゆえに、さらに強く日本人としてのアイデンティティーを確立していったのかもしれない。明治の建築家の分類ではいわゆる第二世代と呼ばれ、江戸時代に生まれた第一世代の建築家に対して、建築の理想を西洋建築のみに求めるのではなく日本の伝統を大切にした世代である。この世代にあって武田は、西洋の新しい建築の動きの中にも日本の影響を認めているし、伝統的な日本建築の発展には外からの刺激が必要であることも説いている。



関西建築協会雑誌表紙図案

武田はまた文化財保護の仕事にもかかわる。明治37年から京都府技師を兼任し、最初に鹿苑寺金閣の修理と平等院鳳凰堂の半解体修理にかかわる。晩年は昭和９年より始まる法隆寺国宝保存工事の所長を委嘱され、昭和13年に急逝するまで在任する。大陸の建築が日本的に理解され、飛鳥様式として日本の寺院建築の第一頁に記される法隆寺とのかかわりは、まさに武田の建築への取り組みの象徴とも言えるだろう。　（桐浴邦夫）

参考資料
・武田博士還暦記念事業会：武田博士作品集、1933
・武田博士を弔ふ、建築雑誌、1938.6.
・足立裕司：武田五一の建築観とその形成期について 武田五一研究Ⅰ、日本建築学会計画系論文報告集 No.354、1985.8
・博物館明治村：武田五一・人と作品、1987


京都大学本館



日本建築協会賞賞牌

この賞牌は、武田五一が1932年にデザインしたもの。
設計競技の入賞者らに贈られたものらしく、賞牌の裏に「創立二十五年記念　菖蒲池厚生住宅展覧会設計競技入賞」と刻印された１枚が日本建築協会に残されている。

池田　實（いけだ　みのる）



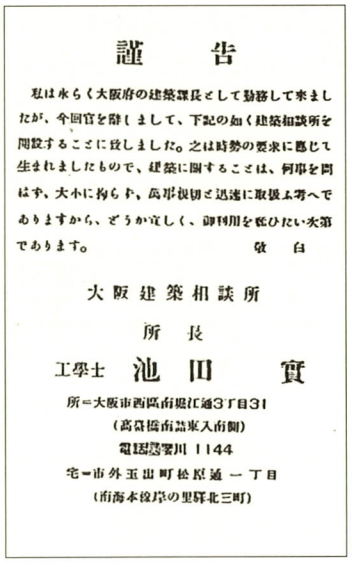
●略歴
1877　福島県福島市に生まれる
1904　東京帝国大学工科大学建築学科卒
　　大阪府警察部保安課技師
1909　大阪府「建築取締規則」の制定に働く
1917　片岡安、武田五一らとともに関西建築協会（日本建築協会）を創立
1919　市街地建築物法の公布に重要な働きをする
1920　大阪府建築部保安課建築係が建築課に昇格後の初代建築課長
1922　関西工学専修学校の開校にあたって、校長片岡安の斡旋にて講師に就任
1923　日本建築協会副会長（～1924年）
1923　都人社創立、雑誌『都人』発刊
1924　大阪府依願免官、池田建築事務所開設
　　浪速高等学校予備校校長など教育界で活躍
1925　大阪市西区南堀江通にて大阪建築相談所開設
1928　大阪高等予備校（1926年創立）校長
1929　京都帝国大学講師（片岡安の後任として建築行政担当1936年まで）
1932　日本建築協会副会長（1933年まで）
1940　日本建材協会会長、池田佐久間建築事務所開設
1950　4月24日逝去
　　高等官二等従四位勲五等を授けられる

池田實は明治37年東京帝国大学を卒業し、大阪府警察部に就任した。折しも日露戦争が勃発したときであった。池田實の評価を高めた一つに、明治42年7月31日の北区の大火の後わずか18日間で4章と付則を含めて88カ条にも及ぶ大阪府「建築取締規則」の草案を作成していた功績が挙げられる。彼は機会を見ては何度となく立案を試みていたが、なかなか日の目を見るにいたらなかった。当時、帝都においてさえ建築規則の制定が行われていないときだけに、彼の建築行政における手腕は絶大なものがあった。大正8年制定の市街地建築物法の促進にも影響を与え、戦後の建築基準法まで約40年間、彼の建築規則の理念が生き続けた。明治末以降の大阪の街並みは池田が創ったといっても過言ではない。

池田は、大正6年3月、片岡安らとともに、建築家の社会的役割を自覚し、講演会や機関誌などによる調査、研究活動を行うことを目的に「関西建築協会」（大正8年「日本建築協会」と改称）を創立し、機関誌「関西建築協会雑誌」（大正9年「建築と社会」に改題）を発行した。池田は日本建築協会という場を通して、建築界に対するさまざまな問題点を指摘し、改善しようとしていた。

彼の考えは「官公署に於ける建築課の独立」（大正7年3月）、「市街地建築物法の施行に際して」（大正10年1月）、「建築の意義と建築家の責務」（大正13年1月）、「協会の進むべき途と雑誌の執るべき方針に就て」（昭和2年7月）、「建築士法の制定に就いて」（昭和2年11月）、「建築の重要性を認識せよ」（昭和10年1月）など多岐にわたり、建築家の職能の確立、建築家の地位の向上、官公署における建築課の独立、建築規則の普及などを発表した。特に池田は、「建築の重要性を認識せよ」の中で「…（中略）…例へば私共が設計でもやるといふことになりますと貴方の職業は何ですかとかう問はれましても、私は建築の設計監督をやっているんですといふので一言にして盡せるやうな公的の名称さへもないのであります…（中略）…」と述べ、建築士法の制度の必要性を力説し、建築家の職能の確立のために奔走した。

池田は大正13年12月大阪府を依願免官するが、その時すでに彼の個人的な会社都人社を創立し、雑誌『都人』を発刊していた。おそらく、彼が期待していた日本建築協会という場が、彼の意図した活動と異なる路線を採っていたからである。池田は協会に対して「…（中略）…兎に角対社会と云ふ

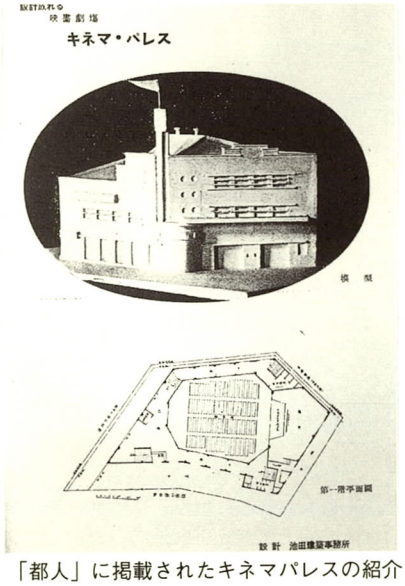

謹　告

私は永らく大阪府の建築課長として勤務して来ましたが、今回官を辞しまして、下記の如く建築相談所を開設することに致しました。之は時勢の要求に應じて生まれましたもので、建築に關することは、何事を問はず、大小に拘らず、萬事親切と迅速に取扱ふ考へでありますから、どうか宜しく、御利用を願ひたい次第であります。　　敬白

大阪建築相談所
所長
工學士　池田　實
所＝大阪市西區南堀江通3丁目31
（高島橋南詰東入南側）
電話農業川1144
宅＝市外玉出町松原通一丁目
（南海本線岸の里驛北三町）



「都人」第一星第五光の表紙



「都人」に掲載されたキネマパレスの紹介

●作品（雑誌『都人』に掲載）
1926　私立梅花女子専門学校本館
1927　枚方町大矢邸離
　　大阪府産業信用組合
　　園南浴場
1929　旭浴場
1930　新世界第二朝日劇場
　　パーク浴場
1931　世界館
　　東湯
　　加州銀行小松支店
　　キネマ・パレス
　　新世界公楽座

方を重要視して進むべきものではなかろうか…（中略）…」（「建築と社会」昭和２年７月）を求め繰り返し訴えていた。その想いを、池田は都人社で実現しようとした。大正12年７月の社告に彼の姿勢が読み取れる。その内容は、「都人社の目的１、都市人の趣味向上に基いて生洲改善を計り併せて精神修養に資すること。２、住家、商店、事務所、工場、その他一般の都市建築に関する攻究を遂げて、その改良発達を図ること。３、都市計畫及その事業並都市に関する諸般の事項を研鑽して、その進化進展を計ること」に表れている。また、社則を設け12條で構成したその第１條には「本社は都市に関する諸般の事項を研究し都市建築の改良、発達を図り都市人の生活改善、趣味向上及精神修養に資するを以て目的とす」を掲げるなど、池田の思想が凝縮されている。雑誌『都人』では、年を星とし、号を光として表し、自分の号を秋峯または霊峯と称して自由闊達に持論を発表したり、俳句を詠んだり、審査していた。その雑誌を通じて、彼が追い求めていた社会を重視するという立場から大阪建築相談所の開設（第三星第三光、大正14年１月）を宣伝したり、紙上を借りて建築法規問答、市街地建築物法の詳細、女性に必要なる建築常識などを執筆したり企画して、社会を重視した姿勢を打ち出している。さらに、『増訂三版　市街地建築物法令』を編纂し、発行している。

池田は退官後、池田建築事務所を開設して、その作品13棟を雑誌『都人』に発表している。作品の内容は、学校建築、娯楽施設、浴場、住宅などで、そう規模は大きくないが庶民に直結した建物を設計し、社会の範としていた。池田は昭和15年ごろ佐久間逸治と建築事務所を開設したが、そこで何をしようとしていたかは明らかではない。佐久間とともに戦中における防火対策や建築法規の普及に努めていたものと推察される。

池田の人物像を、「池田實氏を偲ぶ」座談会（「建築と社会」、昭和25年７月）から見いだすと「文字の吟味は殊更厳格であったが夫は種々研究された結果であろう易学、俳句、霊学、晩年は生長の家等も研究されていた。また連珠、囲碁等にも趣味深かった」（中澤誠一郎）、「常に書類の検閲は書類の大項、型式、内容と順に應じて調べよとあり、型式と仮名遣いはやかましかった」（竹中景一）、「役所時代に遅刻する者と30分早く来る人とをひそかにノートし、早く来る人は通勤列車の都合でやむをえず早く来るのだとわかっていても、ともかく早いということに対して特に表賞せられたということをきいたが、これは上司としてのあたたかい心遣ひのあらわれと思って大変感心したのである」（佐久間逸治）などに語られているように、几帳面で多種多芸の持ち主で、人情味あふれる性格であった。

何事に対しても研究熱心であった池田實は、明治37年大阪に赴任してから没するまでの46年間、大阪の建築行政の草分けとして活躍し、建築法規の普及、建築家の地位向上や教育に一生を捧げた偉大な都市計画家であり、建築家であった。

（和田康由）

●論文
・「官公署に於ける建築課の独立」　『関西建築協会雑誌』第１輯第15号　関西建築協会　大正７年３月
・「市街地建築物法の施行に際して」　『建築と社会』第４輯第１号　日本建築協会　大正10年１月
・「都市の火災防備に就いて」　『建築と社会』第７輯第２号　日本建築協会　大正12年２月
・「建築の意義と建築家の責務」　『建築と社会』第７輯第１号　日本建築協会　大正13年１月
・「建築士法の制定に就いて」　『建築と社会』第10輯第11号　日本建築協会　昭和２年11月
・「協会の進べき途と雑誌の執るべき方針に就て」　『建築と社会』第10輯第７号　日本建築協会　昭和２年７月
・「防火建築に関する法規的考察」　『建築と社会』第12輯第12号　日本建築協会　昭和４年12月
・「都市武装促進に関する対策案」　『建築と社会』第17輯第７号　日本建築協会　昭和９年７月

波江 悌夫（なみえ　やすお）



●略歴
1885　７月９日東京市小石川区水道端町に生まれる
1907　東京高師付属中学を経て熊本の第五高等学校第二部卒業
1910　東京帝国大学工科大学建築学科卒業
　　安田商事会社大阪支店詰技師
1913　片岡建築事務所技師
　　（自宅住所：大阪市天下茶屋）
1917　日本建築協会の設立委員
1919　米国・カナダに建築視察（～1920）
1922　住宅改造博覧会の常務幹事（建築係）
　　博覧会終了後、櫻ヶ丘に居住
　　（自宅住所：大阪府豊能郡箕面村櫻ヶ丘）
1925　大阪市営繕建築課長（40歳）
1927　日本建築協会災害部委員長
1928　大阪城天守閣復興の基本設計に従事（～1930）
1931　合資会社清水組大阪支店長
1934　波江悌夫建築事務所（大阪瓦斯ビル内）
　　日本建築協会災害強度委員長
1942　東亜鉄工所及び東亜航空電気会社建築顧問技師
1946　進駐軍技師嘱託（～1954）（羽田東京座間等の営繕関係に関与）
　　この間、関東学院大学建築科講師
1960　置塩建築事務所顧問
1965　２月８日逝去（79歳）

波江は、明治18年東京小石川に生まれた生っ粋の江戸っ子で、波江家は旧福山阿部藩の江戸詰めの家柄であった。

明治43年、東京帝国大学工科大学建築学科を卒業し、同期には安井武雄・内藤多仲などがいた。卒業後、安田商事大阪支店詰め技師となり、３年後の大正２年には片岡建築事務所に席を置くことになった。

当時、関西の建築家の集まりとして「オキナ会」があったが、それに準じて若年層建築家グループとして「建坊会」が結成されていた。波江はこの会を池田實、木子七郎らとともに協会的組織化することを目指していた。大正６年、波江は片岡安と連名で関西の建築家に団結を呼びかけることになり、それが関西建築協会創立に繋がった。関西建築協会創立当時の委員のうち最も若かったのが波江悌夫（32歳）であった。当初、建築協会事務局は片岡建築事務所内に置かれ、波江は専従のように当たっていた。

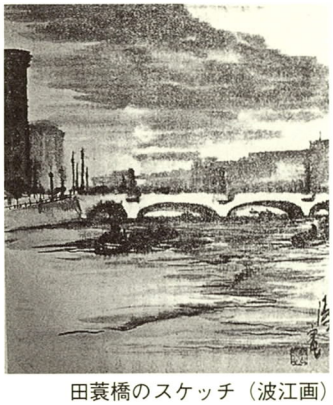
波江は、他の創設委員の武田五一（昭和13年没）、設楽貞雄（昭和18年没）、片岡安（昭和21年没）、池田實（昭和25年没）らの逝去後も、昭和40年に至るまで日本建築協会の発展を見届けた人物でもあった。

片岡建築事務所時代、波江は大正８年11月～９年２月まで３カ月間、オフィスビルの建築視察のため米国、カナダへ出かけた。その様子は機関誌「建築と社会」（大正９～10年）に連載された。それはパスポートの申請に始まり、カナダ・バンクーバーのビクトリヤ港到着の様子、シアトル滞在中のホテルでの失敗談、ポートランド市役所の都市計画課を訪れ、図らずもこの市の都市計画事業と地域制度の概略を聞いて心躍らせたこと、大陸横断鉄道で単独でニューヨークまでの旅のことなど、「漫録」と題して、会話を交えた楽しげな紀行文となっている。

大正11年には、日本建築協会主催で大阪箕面櫻ヶ丘で「住宅改造博覧会」が開催されたが、常務幹事（建築係）としてその進行に当たった。片岡建築事務所設計の住宅（２軒）も出品され、住宅博終了後、波江はここに居住することになった。

大正14年４月、波江は招聘されて大阪市役所の営繕建築課長（40歳）となった。『大阪新人大観』（大正14年５月）によると、「片岡博士の推挙によるとは言え異例の抜擢であった」ようである。

また就任後の波江については「営繕課長は元来多忙な仕事であり、各部課との交渉も頻繁で、大抵の人物なら神経衰弱を免れない処だが、（波江）氏は専門の造詣も深く実際的の経験にも富んでいるだけ、果断明敏、見事な切味を見せ、上司の信認を博くして居る。悠々迫らざる態度と云ひ、荘重な言語と云ひ、堂々たる體軀と云ひ、課長として充分の貫録もあるが、淡白で、運動好きな気の置けない人で親しみを持たれるのは、持って生まれた氏の徳だ、当年四十歳、全幅を示すは寧ろ今後にあろう」として、波江氏の実力と人物像を伝えている。



田蓑橋のスケッチ（波江画）



大阪毎日新聞社本社



天王寺公園音楽堂

●作品
1922　大阪毎日新聞社本社（片岡建築事務所、基本設計を波江が担当）
1928　天王寺公園音楽堂（大阪市建築課・波江悌夫）
1931　大阪城天守閣（大阪市建築課・基本設計）
1935　大阪市東区役所
1935　大阪商業大学谷岡記念館（早稲田大学清水と共同）
●著作・記事（『建築と社会』）
1917　「神殿建築と高天原」（１輯１号）
「神戸郵便局の火災に就いて」
「安田倉庫の経験せる火災について」
「仏寺建築の将来（上・中・下）」
「演劇と建築（上・中・下）」
1918　「計画と設計」（１―14）
1919　「建築様式の意義を論ず（１～２）」
1920　「漫録・米国に行くまで（１～２）」「漫録・太平洋を横ぎりて（１～５）」
1920・1921　「漫録・大西洋を見る日まで（１～８）」
1923　「満鮮紀行（１～３）」
1927　「地震と家」（災害部委員長波江悌夫）
1929　「都市の防火と耐火構造の建築」
1929　「都市の震火災と防水建築」
1931　「宝永安政両度の大震と大阪」
1932　「天守閣の由来」（大阪城天守閣）
1933　「都市建築改造の急務」（前大阪市建築課長）
1934　「都市の武装構築に就いて」（都市武装促進委員会副委員長）
1934　「非常時の都市と重要建築」（災害強度委員会委員長）


大阪城天守閣

その後の建築課長として大仕事は、大阪城天守閣復興計画であった。大阪城天守閣の復興は昭和３年11月天皇即位の大礼記念事業として、関一市長の発案で行われたものである。波江は昭和４年５月の「復興の声明」で、大阪城天守閣復興にかける決意を次のように表明した。

「大坂城天守閣建築は弐百萬市民が昭和の聖代に於て曠古の御大典に際会し、一大記念事業として清資を聚め浄財を積み、以て衷心の赤誠を傾けんとするの一大工事たり」「本建築の完成に助力貢献せんとする工務員並びに従業員諸君、本建築の復興的計画の如何に至難なりしものかを推察理解し、各自与えられたる職責を遂行すべく、最も熱心に事に励むは勿論、設計の大綱を良く尊重し、日本建築史上の燦爛たる桃山時代の旧観を其再現せんとするの主旨を體し、更に進歩する現代の科学と技量とを以て、渾然たる特異の大建築を建立するに際し、則ち全員の一致協力を希望する而已ならず、本事業の本質に不朽の意義の存在するを達観して、着実なる努力を傾注し最も光栄ある完成を見んことを期待す」

しかし、昭和５年３月18日、当初の責任者波江悌夫は一身上の都合により「本設計のため献身的努力を払われたにも拘わらず、設計半ば前途尚幾多の難問題を残して」辞職した。復興天守閣は、昭和５年５月６日地鎮祭、昭和６年４月24日上棟式、同年10月30日竣工した。工期17カ月25日であった。

古川重春（設計意匠研究係、工事監督で、波江とは片岡安建築事務所で共に肩を並べて働いた仲である）は、波江のことを次のように述べている。「課長は建築家中稀に見る雅寛に富む人格の士であったが故に、研究的論争をうるさがる傾向は少しも窺われなかった」。

このころの波江の、日本建築協会における活躍は「建築と社会」の記事によって知ることができる。昭和２年には災害部委員長として都市防火、震災に対して耐火構造の建築を奨励した。また昭和９年には、大阪を襲った室戸台風後の11月、都市の非常時に備えて、学校建築を鉄筋コンクリート造とし、地区の「保護、防護の中心陣地」とすべきことを説いた。

昭和９年６月発行の『大阪新人物誌』によると、波江は「氏は多能多芸で、性格一見粗豪の様だが、それは体軀の堂々たるに依るもので、自ら持する事極めて厳粛、旅行中と雖も決して手に書巻を繙かぬ事なく、専門の建築方面に造詣深いばかりでなく、古来我国建築の粋を聚めたと言ふ『築城』に関しては氏の観察の鋭敏なる事、史実の確実なる蓋し右に出るものがないと称せられる。この他余技としての洋画は既に一家を成し実に堂々たるものがある。根が楽天主義、浄土宗の他力本願だけに自らを責めて決して人をうらまず悠々と闊歩して居る」とある。

また波江氏が晩年の昭和35年８月以来、顧問として席を置いた置塩建築事務所の置塩章氏は、彼とは50数年の交わりを持つが、波江氏について次のように懐古している。

「彼は常々悠々としてせまらず、事務所より帰途私が彼の姿を見ずに歩くと、彼は100ｍも後方にノッシノッシと歩いている」「都市計画にはなかなかの意見を持っている。大通りの次の道路は繁栄の萌しがあるから気をつけろとよくいっていた。彼は物知りの名人であった。デザインについてはなかなかよい手腕を持っていた」　（吉田高子）

参考資料：『錦城復興記』　古川重春著　昭和６年

竹腰　健造（たけごし　けんぞう）



●略歴

1888　６月25日、石川県金沢市に生まれる
1897　福岡旧小笠原藩士竹腰虎太郎の養子となる
1909　第一高等学校を経て東京帝国大学工科大学建築学科に入学
1912　同校を卒業
1913　ロンドンのアーキテクチュラル・アソシエーション・スクールに学ぶ
1915　英国 R.I.B.A の試験に合格。オースティング・ホール建築事務所に勤める
1917　英国留学を終えて帰国。住友総本店営繕課に入社する。この年、ロイヤル・アカデミーへ出品した“キング・ジョージ雪中像”が入賞の栄に輝く
1920　聖徳記念絵画館懸賞設計競技で３位に入選
1922　住友ビルディング建築に関する用務で渡米
1926　住友合資会社工作部工作課長兼建築課主査となる
1930　“我が家”を「建築と社会」に発表（２月号）
1933　住友工作部解散。新たに株式会社長谷部竹腰建築事務所を設立する。この年、大阪市土木部臨時ホテル建設事務所副主幹を委嘱され、新大阪ホテルの設計監理に従事する。また日本建築協会副会長となる
1942　日本建築学会と日本建築協会合併問題で、協会側代表者のひとりとなる
1944　長谷部・竹腰建築事務所は住友土地工務株式会社に吸収合併され、同社の専務取締役となる
1945　同社社長となり、社名を日本建設産業株式会社に変

日本建築協会の歩みをふり返るとき、片岡安の強力な個性と主張があって協会の発展があったと言えるが、同時に片岡安亡きあと、その偉業を支える後継者がなければ協会の前途はどのようになったかとも思わざるを得ない。しかも、その時期は日本の敗戦によって、大阪をはじめ日本の各都市が廃墟に等しい状況に置かれ、もっとも厳しい社会情勢の下にあったことも忘れてはならない。しかし協会では幸いなことに、このような厳しさに耐え新たな展開を遂げるにふさわしい人物が存在した。

その人物こそ、竹腰健造であった。

しかし考えてみると片岡は、自分の後任には竹腰健造を、という思いがなかったのであろうか。

竹腰は昭和８年と12年から14年度に理事兼副会長を務め、さらに18年から４期続けて副会長の任にあった。いわば片岡が亡くなった年も、竹腰は副会長の地位にあったのである。

18年ごろは戦争が苛烈となり、軍部主導による業界、学界再編の動きが高まり、協会では建築学会との合併問題が起こっている。この問題はもともと性格の違う二つの団体が合併することはお互いに好むことではなく、戦時下に強要された事態であった。その協会側の代表になったのが竹腰と滝沢眞弓であった。結局この問題は曲折を経て最終決着しないうちに敗戦となって、白紙に戻されてしまう。

また片岡安の突然の死によって、竹腰健造は滝沢らの説得があってやむなく２代目会長を引き受けることとなる。竹腰は会長を引き受けるに当たって直ちに大きな改革を行い、会勢を発展させるための措置を講じた。それは昭和22年の定款改正によって会員の対象の幅を拡げたことである。従来の“建築技術者たる会員”を主としていた組織を改め、“建築事業界の有力な人士を会員”としてその範囲を拡げることにより、会員及び団体会員の数を増やすことに成功した。また建築を取り巻く諸団体との関係が一層緊密になって協会独自の性格を強めるうえで役立つこととともなったのである。



大阪株式取引所

このように竹腰は戦後の混乱期の中で協会の会勢を進展させるために努力を払うのであるが、彼にはもうひとつの不遇な時代があった。それは昭和22年に始まる公職追放の時期である。これによって彼はせっかく組織した日本建設産業株式会社社長の地位を追われることになった。この会社は後に日建設計工務という日本最大の設計事務所となり、その建築資材販売を目的に設置された商事部は後に住友商事という日本有数の商事会社に成長した。これは、竹腰健造の先見の明のあったことを物語るものでもある。

また彼はこの追放令に屈することなく、自ら翌22年双星社竹腰建築事務所を設立して建築家としての活動を開始する。それは不死鳥とも言える彼の不屈の精神であった。ここで、彼の生い立ちと、その経歴について触れてみたい。

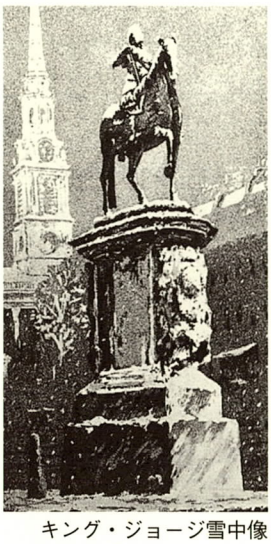
竹腰健造は明治21年金沢に生まれ、父岩村高俊は当時石川県知事であった。健造が８歳の年、父は福岡県知事の職に在り、９歳のとき健造は福岡の竹腰家へ養子に迎えられた。健造は幼少のころから英才の声が高く、豊津中学から一高、東大へと順調に進み、明治45年に東大の建築学科を終えた。同期に渡辺仁や西村好時、山下寿郎らがいた。彼はこの年に就職せず、翌大正２年イギリスに留学する。彼のこの留学は長兄である岩村透のアドバイスによるものであった。岩村透は当時欧米の美術に長じた東京上野の美術学校の教授であり、建築を学ぶうえでイギリス留学の大事さを説いたという。健造はロンドンでA.I.A. に学び、余技で始めたエッチングでたちまちロイヤル・アカデミーに入選する腕前を示した。A.I.A.を終えた健造は、R.I.B.Aのテストを受け見事に合格する。これは桜井小太郎に次いで日本人としては二人目であったと思われる。しかし彼の場合は外国人留学生であったとして、なぜかアソシエートの資格を得るには至らなかった。

更する
1946　片岡安の逝去にともない日本建築協会会長に就任
1947　公職追放令により、日本建設産業株式会社取締役社長を辞任
1948　株式会社双星社竹腰建築事務所を開設
1950　公職追放解除。大阪府建築審査会委員を委嘱され会長に互選される
1958　日本建築協会会長を退任。“能楽三昧”を執筆刊行
1961　大阪府芸術賞受賞
1962　日本芸術院賞受賞
1968　日本建築協会名誉会長
1971　勲三等瑞宝章を授与さる
1977　“懐旧譜”を出版する
1981　７月28日逝去。正五位に叙せらるる。享年93歳
●作品
1930　六甲の我が家
1930　今村幸男邸
1933　新大阪ホテル設計監理（合作）
1936　大阪株式取引所
1952　神戸海星女子学院礼拝堂
1958　聖心女子大学、大阪市長公館
1960　法隆寺聖徳会館
1961　大阪市立中央図書館
1965　小林聖心女子学院礼拝堂

大正６年に５年間の留学から帰国した竹腰は、住友総本店営繕課に入るのである。その時の住友営繕は、野口亡き後、日高胖が統率して東京支店の建築に主力が置かれていたが、本店建築についても前年にゴーサインが出ていて、竹腰はその重要な一員として採用されたと言える。しかし竹腰の住友営繕での役割は、多数の技術者を抱えての実務的な業務を受け持つことが多かった。彼の上司として日高がおり、先輩としてデザインの名手と言われた長谷部鋭吉がいた。したがって彼の本店建築に対する役割は、軀体の鉄骨をアメリカで購入し、得意の英語で入札により請負人を決め、さらに金庫、エレベーターの買い付け、機械電気設備の設計者を決定することであった。

このようないわば縁の下の力持ちのような仕事を彼は淡々とこなし、長谷部に存分なデザインへの取り組みの余裕を与えたのであった。昭和６年日高が定年で去り、長谷部が工作部長になってのちも、その姿勢は変わらなかった。昭和不況の余波を受けて工作部を解散し、新しく長谷部竹腰建築事務所を始めることになったときも、彼は部下の解雇や再就職、新会社の設立などの困難な業務を進めたという。部下の解雇は彼にとって大変つらい役割であったと語っていた。

竹腰は住友在職中に数多くの住宅の設計をしている。その主なものは、住友系各社の重役クラスの私邸であった。彼の英国仕込みのデザインセンスと日本の風土を意識したデザインは、地味なものであるが、多くの依頼者たちの期待に応えるものであった。


キング・ジョージ雪中像

彼は建築家としての優れた素質のほか、多芸な才能の持ち主であった。そのひとつに能楽があった。彼の能楽歴は明治42年の一高時代にさかのぼるという。その見事な演技は、“道成寺”や“卒都婆小町”など素人としては最高の曲を数々演じ、また自ら“世阿弥”“恋塚”などの新作能をつくり自演して、住友の歌人として知られた川田順をして感嘆させる才能を示した。例えば、“君の能楽も容易なものではない。野口兼資や金剛巌などと一緒に公開の能を舞ったのだから、世間にありふれた旦那芸とは選を異にする”（川田順“竹腰健造君を語る”）とある。


聖心女子大学

また80歳から始めたと言われる陶芸も美濃大萱に窯場を置いて芸術性ゆたかな魅力ある作品を制作している。

彼は昭和33年協会会長の職を退くが、会長在任12年の間、先に述べた会員資格の拡大のほか、各府県に建築部設置の陳情をはじめ支部の設置、建設会館設立への働きかけ等々、数多くの施策の立案とその実行を行った。また協会はそのような業績に応えて、同34年１月号で竹腰健造特集号を組み、その功を讃えた。

彼は同37年日本芸術院賞を受賞し、同43年協会の名誉会長に推挙された。同52年には自叙伝と作品集ともえいる“懐旧譜”を刊行している。

筆者は生前に西宮松園町の私邸を幾度か訪れて、謦咳（けいがい）に接する機会があり、また自ら設計した南郷山の岡橋林邸（住友銀行頭取）、古田俊之助邸（住友総理事）を案内していただいた思い出がある。枯淡の風采のなかに芸術家としての知性のひらめきときびしさに加えて温容を感じさせる人柄であった。会うたびに、もうこのような建築家は二度と現れないのではないかと思ったものである。昭和56年７月28日93歳の天寿を全うして逝去された。　（坂本勝比古）

尾崎　久助（おざき　きゅうすけ）



●略歴
1896　5月4日静岡県浜名郡に生まれる
1908　家業の満州進出にともない大連に移住
1914　第三高等学校（京都）入学
1917　東京帝国大学工学部建築学科入学
1920　東京帝国大学工学部建築学科卒業
1920　辰野葛西建築事務所技師（～1923）
1923　帝都復興院（のちに復興局）技師（～1927）
1927　日本銀行技師（～1938）
1938　長谷部竹腰建築事務所副所長兼東京事務所長（～1944）
1939　工学博士
1944　長谷部竹腰建築事務所は住友土地工務に合併、取締役建築部長兼東京事務所長
1946　日本建設産業（住友土地工務改称）、常務取締役兼建築部長（翌年専務取締役）
1950　日建設計工務取締役社長
1958　日建設計工務取締役会長。日本建築協会会長（～1964年）
1963　日建設計工務取締役相談役
1966　5月22日逝去。享年70歳

日本建築協会第三代会長をつとめた尾崎久助70年の人生は、昭和の建築の、実務としての側面を支えてきたのはまさにこのような人であったかと、強く印象づけられるものだ。優秀な構造技術者。謹厳実直を絵に描いたような会社人間。頑固で寂しがり屋の家庭人。こんな男の生き方は、現代では流行らないかもしれない。しかし、戦前・戦中・戦後と、そのときどきの現実が建築に要請する課題に真摯に取り組み、その成果を高度経済成長期へと受け渡したその背景にあったのは、こうした男たちの人生ではなかったか。

尾崎が在籍した東京帝国大学建築学科の1920年卒業組は、近代建築史上、ブリリアント・クラスとして知られる。日本における近代主義建築運動の嚆矢、分離派建築会がこのクラスから生まれたからだ。このグループは、石本喜久治、滝沢眞弓、堀口捨己、森田慶一、矢田茂、山田守の同級生6人によって1919年に結成された。矢田は夭折したが、建築家、建築学者として後世に名を残すことになる人びとである。芸術としての建築を標榜し、新奇な建築意想図をもって展覧会を開催するその活動は、規模としては東京の一隅の出来事に過ぎなかったが、草創期の岩波書店や建築雑誌の後押しで、ちょっとしたムーブメントになった。

メンバーの回顧談によると、グループ結成の経緯はこうだ。当時の東京帝大建築学科は、教授が中村達太郎、伊東忠太、塚本靖、助教授が関野貞、佐野利器、講師に内田祥三という陣容。学生は意匠と構造の専攻別にゆるやかに分かれていた。伊東、塚本の講ずる意匠は若い学生には新鮮味がなく、一方、佐野、内田の構造派が勢いを増しつつあった。意匠専攻の3名、石本、山田、堀口はそんな学科の雰囲気に不満で、太平洋画会の研究所にデッサンを習いに行ったり、夜それぞれの下宿を回っては建築のスケッチを見せ合ったりしていた。そういうなかから仲間でなにかやろうということになり、まず滝沢に、ついで森田と矢田に話をもちかけ、分離派建築会が誕生した。

尾崎について書くべきを、分離派建築会に紙幅を費やしすぎただろうか。そうは思わない。つまり分離派の連中は、たかだか十数人の小さなクラスで、尾崎には声をかけなかったということだ。構造専攻だったからか。それをいうなら、森田も矢田もそうだった。学生結婚の新婚家庭だったからか。それは、あるかもしれない。夜おそくまで芸術論を戦わす雰囲気でもなかろう。しかしなにより、分離派の連中は尾崎のことを自分たちとはちがうタイプの人間だと判断していたからだろう。ようするに、尾崎は合わないと考えたのではないか。

それでは当の尾崎は、どんな学生だったのか。同じ構造専攻で、デザイナー志向の強かった森田慶一は、構造学を原書で勉強していたのは彼だけだったと回顧している。滝沢は、勉強の鬼と評している。人の二倍も三倍も仕事をしてしまうので周りの人間がたいへんだとも。軟派の分離派に対して、硬派の尾崎というところか。高等遊民的な分離派に比して、着実で勤勉な尾崎の学生生活ぶりが感じられる。

好対照は、彼らのする人物評にもみてとれる。たとえば日本における耐震構造学の開拓者であり、当時政界や実業界にも乗り出した佐野利器について。滝沢は俗人と評し、堀口捨己は当時違和感を抱いたと回顧、その業績は不動のものとしても概して評価は低いのである。これに対し尾崎は「エライ人だったな。あの人は非常に魅力がある。人間として」と評する。一方、芸術家肌の建築家として西陣電話局などの数少ない作品を残しながら夭折した同窓の先輩岩本禄について、尾崎を囲むある座談会で、滝沢や森田がしきりに敬慕の念を表するのに対して、尾崎は「われわれより上（の学年）か？」と問い返す。そもそも知らないのである。

同じ人物に対する評価・印象がこうもちがう。それは、評する側の建築観が異なるということだろう。端的に述べるなら、分離派建築会にとって建築は、少なくとも結成当初は、理念だった。だから、建築の現実を批判し、実現しなくとも理想を夢見た。しかし、尾崎にとっては、建築は実務だった。それは徹底的に現実的な課題であり、解決できなければ意味のないものであった。

卒業後の尾崎は、この実務の道を邁進する。最初に勤めた

●作品
1953　長崎県庁舎
1956　広島県庁舎
1957　神戸市庁舎
1959　東京住友ビルディング
　　日本都市センター（1959年）
●論文
・「軸応力を無視せざる弾性アーチの解法とその階段形梁への応用」（1932）
・「対称垂直加重を受ける矩形架構における曲能率の、最下層柱脚部の固定状態如何による相違の比較」（1933年）
・「コンクリート構造建物荷重の分析的研究」（1937年）

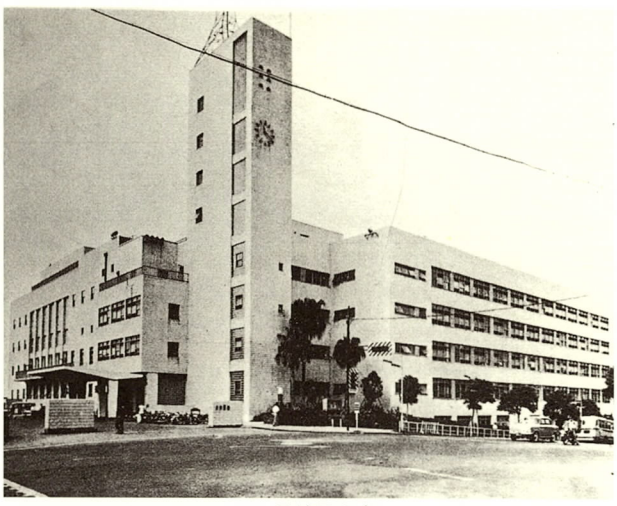
辰野葛西建築事務所時代に関東大震災に遭遇。勤務のかたわら焼け出された写真師をともなって建築物の火災状況を調査してまわる。帝都復興院（のちに内務省復興局）が設立され、建築局長に佐野利器が就任すると、このかつての師に呼ばれて復興院技師となり横浜の区画整理に従事する。復興がいちおうの完成をみたところで復興局を辞し、日本銀行臨時建築部に就職。このときは、佐野利器の耐震構造理論を発展させた当時の早稲田大学教授・内藤多仲の紹介だった。日銀臨時建築部は本店旧館に接続して新館を建てる大増築を担当する部署で、古典主義の大家長野宇平治を技師長に、構造は内藤に委嘱されていた。内藤は自分の下の構造担当チーフとして尾崎を引っ張ったのである。尾崎31歳のときである。日銀の新館建設は大事業だった。尾崎は、周辺建物の取り壊しにともなう地盤の弾性浮上、旧館に近接して深い基礎をつくる必要など、構造上、施工上の難問に立ち向かい、その調査・研究の成果をまとめて工学博士の学位を受けた。

10年の歳月をかけた日銀の大増築が完成した1938年8月、臨時建築部は解散となった。職を解かれた尾崎は、間をおかず長谷部竹腰建築事務所に入所する。この組織は、住友総本店の工作部にいた長谷部鋭吉と竹腰健造が部員を引き連れて独立してできた事務所である。おりしも日本が国力を中国大陸に及ぼしているこの時期、尾崎は副所長兼東京事務所長という立場で、中国における日系銀行の本・支店の設計監理に働いた。これらの銀行の首脳部には日銀から赴任した人物も多く、尾崎の日銀時代の人脈が有利に働いたという。戦時体制下も末期の1944年、この事務所は住友土地工務株式会社に買収され、尾崎は取締役建築部長となる。敗戦後の財閥解体で同社は日本建設産業に改組、つづく公職追放で当時の社長・竹腰をはじめ首脳部が退陣、その結果尾崎は社長となり、社名も日建設計工務と変わる。社業は日を逐って盛大におもむいた。1958年には会長となった。こうした背景について尾崎自身は「他から羨ましがられるほどよい建築の設計監理を沢山受注したが、その多くは多年の友情の自然の賜であった」と述べている。住友財閥のうしろだてに加え、戦後のこの時期には尾崎の復興院時代のかつての知己が地方長官や市長になっていたり、日銀時代の同僚が地方銀行の頭取や有力企業の首脳になっていたからというのである。

このようにみてくると、尾崎の人生は建築実務エリートの典型とはいえまいか。帝国大学、日本銀行、財閥系企業、大陸での活動……。彼は、明治以来の日本資本主義の発達と、戦後それがこうむった変容に、おどろくべき馬力で伴走してきたのだ。

1966年5月、尾崎は病のため亡くなった。その2年後に出た追悼集に寄せられた妻志んの随想は、細かな追憶の断片ながら、全体に楚楚として不思議な魅力をたたえた文章だ。病院での最期、尾崎は妻ひとりの付き添いを望んだという。「お前一人に居て貰いたいのだ」と。建築学科で構造学を学んでいたころからずっと、このひとは尾崎に付き添ってきたのだ。こんな女の人生も、現代では流行らないのだろうが、彼女もまた、時代の伴走者であったといえるだろう。

（梅宮弘光）



長崎県庁舎　1953年　設計　日建設計工務

東畑 謙三（とうはた　けんぞう）

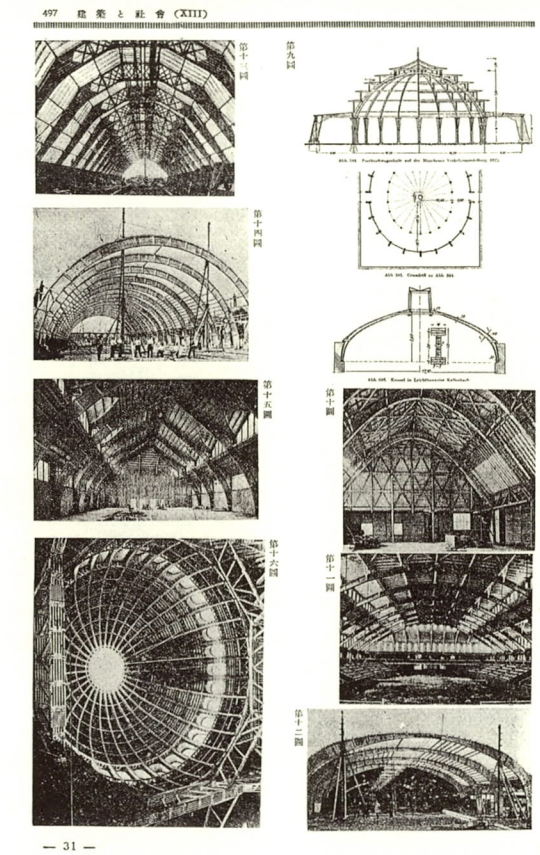


●略歴
1902　4月11日三重県に生まれる
1926　京都帝国大学建築学科卒業
1927　京都帝国大学大学院にて研究（～1931年）
1932　欧米建築界視察へ。帰国後、東畑謙三建築事務所を開設
1941　京都帝国大学講師。戦後も1947～1962年の15年間、京都大学の講師として建築計画を担当
1949　大阪大学講師
1951　日本建築協会副会長に就任（～1953、1956～1963）
㈱東畑建築事務所に改組。代表取締役に就任
1964　日本建築協会会長に就任（～1971）
日本建築総合試験所の設立に尽力し、副理事長に就任
1972　勲三等瑞宝章受章
1981　筑波研究学園都市で日本建築学会賞受賞
1982　㈱東畑建築事務所取締役会長に就任
1998　4月29日逝去。享年97歳

東畑謙三は京都帝国大学建築学科に4期生として入学し、大正15年に卒業している。京都では武田五一らに教えを受けており、東京とは違う、関西らしい建築教育を受けた最初期の人物の一人と言える。分離派の一人であった森田慶一も京都に赴任したころで、東畑も大きくその影響を受けた。

学部卒業後、引き続き大学院で研究を続けたが、そこでは京都大学で発行した『建築学研究』の編集に携わっている。この研究誌は、武田五一ら日本建築協会草創期のメンバーらの口添えもあったのか、一時期出版を日本建築協会で行っていたこともある。当時協会は、建築に携わり、学ぶ人々のための倶楽部のような存在だったようである。

東畑の入会のきっかけは、まだ院生のころに武田五一から新しい木造建築についての講演を依頼され、洋書から文献を探してまとめて発表したことにあるそうだ。この講演の記録かどうかは分からないが、『建築と社会』第13輯7号に“木造建築の将来ー桷式より拱式へ・組積法より膠着法へー”という論文が掲載されている。東畑はこの論文で網式屋根と合成材膠着材（ヴェニア）の製造を紹介し、説明文はないものの、写真によって集成材によると思われるドームやヴォールトの大架構の海外の新建築を数多く紹介している。この号は「木造建築の将来」と題する特集号であるが、木という材料を日本の伝統的な建築材料として尊重しつつも、近代の要求には耐えられない材料としてあまり積極的には「将来」が語られていない論文が多い。そのような中で東畑の論文は唯一





「建築と社会」
第13集7号
1930年
より復刻

●作品・業績
・東方文化学院京都研究所（現・京都大学人文科学研究所）(1929)
・新大阪ホテル（1934）：武田五一・竹腰健造・大阪市営繕の合作
・中央毛糸紡績四日市工場
・広畑製鉄所
・大阪駅前市街地改造事業〈大阪駅前第１ビル（1970)、第４ビル（1983)〉
・インテックス大阪（1985)
・国際花と緑の博覧会政府苑（1990)
・千里ライフサイエンスセンター（1992)

新しい木造建築の方向を示し、具体的に木材の活用法を明快に述べているものと言えよう。

このように西洋の文献からニュースを見つけて紹介することは、『建築学研究』の編集を進める中、埋まらないページを埋めていく工夫として東畑が度々用いた手法である。ル・コルビュジエを日本に初めて紹介したのも東畑だそうだ。簡単そうに思えるが、膨大な情報からこれと思えるものを選択するのは難しいことであろう。東畑のアンテナは、学生時代から的確に近代的、合理的なものを敏感に捉えており、また技術への関心が高かったと見ることができる。

学生時代には、武田五一や森田慶一など、指向こそ違え、建築を芸術と捉える先輩に指導を受け、在学中には武田五一の下で東方文化学院京都研究所（現・京都大学人文科学研究所）の設計に携わっている。

昭和７年に欧米へ視察旅行に出かけ、アメリカの技術力と合理性に多くのことを学んだと言う。帰国後、設計事務所を構え、工場などの産業建築を中心に合理的な建築を手がけた。東畑が事務所を構えた昭和初期には、昭和２年に関西建築界の草分けの一人である河合浩蔵が、また昭和６年に片岡石本事務所が事務所をたたんだ。一方、昭和５年には村野藤吾が独立している。関西の建築界においてもちょうど世代交代の時期だったと考えられる。

東畑の建築界での活躍は、これ以降50年を超えるのだが、東畑個人の建築「作品」として思い浮かべることができるものはあまりない。東畑自身、建築を芸術作品として考えてはおらず、自らを「建築技師」と位置づけていた。また「建築は技術のアッセンブリー、事務所は技術者の集団」を主義としており、自分自身は組織をまとめる役割に徹していたようである。いい建築をつくるには事務所経営の安定が必要と考え、資産蓄積と運用にも気を配った。

建築協会会長として在任した７年間には、日本建築総合試験所の設立や、昭和45年の大阪万博の建設計画に協力している。会長退任挨拶によれば、これらの大きな出来事のほかに、毎月の仕事として『建築と社会』がよくなったことと



東方文化学院京都研究所

建築材料資料集の発行を良き思い出としてあげている。若いころから出版物の編集に携わることの多かった東畑らしい所感と言える。

＊

東畑先生がお亡くなりになったのは、この80年史の編纂も決まり、資料収集も進めていた平成10年４月29日のことである。その経歴を見れば、まちがいなく草創期の日本建築協会の様子を知っていたであろう最後の人物であり、ご存命中に直接お話が伺えなかったことが悔やまれる。

（橋寺知子）

塚本 猛次（つかもと　たけじ）



●略歴
1910　10月16日静岡県藤枝市に生まれる
1934　東京帝国大学工学部建築学科卒業
　　長谷部・竹腰建築事務所入所
1950　日建設計工務株式会社発足。取締役大阪事務所長
1953　日建設計工務株式会社常務取締役
1961　日建設計工務株式会社取締役副社長
　　工学博士の学位を取得
1964　財団法人日本建築総合試験所常任理事
1965　日建設計工務株式会社取締役社長
　　建築行政に対する功労者として大阪府知事より表彰を受く
1969　建築技術の向上に尽くした功労により建設大臣より表彰を受く
1970　株式会社日建設計と改称
1971　社団法人日本建築協会会長
　　藍綬褒章受章
1975　大阪商工会議所議員
1976　社団法人大阪建築士事務所協会会長
　　大阪市市民表彰受賞
1977　株式会社日建設計相談役
1979　社団法人日本建築士事務所協会連合会会長
1980　建設省中央建築士審査会委員受嘱
　　勲三等瑞宝章受章
1981　株式会社日建設計最高顧問
　　大阪府建築審査会委員受嘱

塚本猛次は1910年10月16日、静岡県藤枝市に生まれた。静岡高校を卒業後、東京帝国大学工学部建築学科に入学。1934年、第54回生として卒業した。

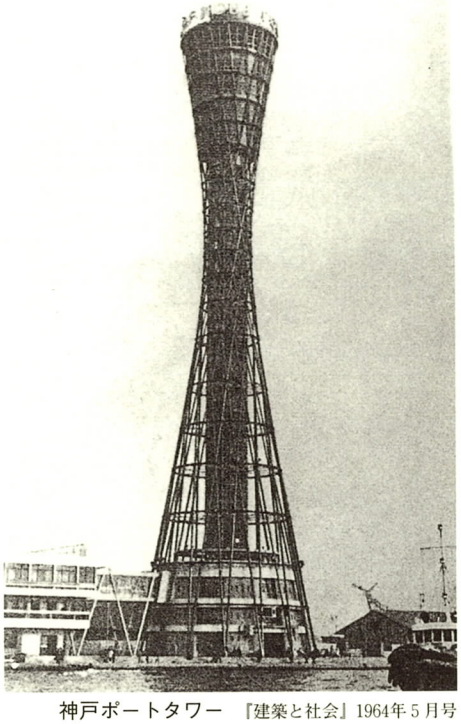
卒業の年、長谷部・竹腰建築事務所に入所。やがて長谷部鋭吉の次女と結婚し、清荒神の山の手にある長谷部邸の敷地内に住まうこととなった。そのときの自邸は彼自身の設計である。長谷部を追悼した文章で塚本は「いま考えると随分不便なところへ土地を求めたものだと思う。小林一三氏が宝塚へ電車をひいたことを考えたり、明治末年にはすでにガスがひけていたことを考えると、なんでもないようだが、おそらくいまの建築家では考えつかぬかも知れない。そして、水もはじめは荒神川からパイプでひいて濾過して使った。いまでは、かみ手の松茸山の水をせきとめて井戸をほってパイプをひいている。つまり自家水道である。」と述べている（『建築と社会』1961年3月号）。後には村野藤吾も長谷部を慕ってこの近くに移り住んだので、塚本も長谷部を通して村野らと交流していただろう。

塚本はもともと構造系の出身者であり、また組織内の統括者としてきわめて優れた人物であった。しかし彼自身の担当した建築設計に関してはあまり知られていない。担当した設計として、戦後初の本格的銀行建築の一つ、1953年竣工の愛媛県・伊予銀行本店（平成9年度BELCA賞受賞）の建物がある。当時、雑誌誌上などで取り上げられ、これがきっかけとなって入社を決めた人も多かったという。



新住友ビル　1962

ところで、塚本の入所した長谷部・竹腰建築事務所は、1944年、住友土地工務に合併された。また翌年の終戦後には日本建設産業に改組された。このころの論文に「復興住宅に就て」（『建築と社会』1947年1,2月号）がある。終戦直後は前川國男をはじめ多くの建築家がプレファブ住宅など戦災復興住宅の建設に熱意を注いでいたが、塚本もまた構造家の立場から復興住宅を論じていた。1950年、日本建設産業の建築部は日建設計工務株式会社として分離独立したが、このとき取締役大阪事務所長に就任している。重要な職に就きながらも「工場計画雑観」（『建築と社会』1954年3月号）などさまざまな文章を記しており、技術者としての面でも活躍している。1961年には学位論文『高層建築の構造設計に関する研究（鉄骨鉄筋コンクリート構造について）』を提出した。この論文では、大阪毎日放送会館、新住友ビルなどの構造設計を例に、実物大の供試体を用いた実験に基づきながら理論を構築し、鉄骨鉄筋コンクリート構造の合理的な設計理



神戸ポートタワー　『建築と社会』1964年5月号

1982　社団法人日本建築協会名誉会長
　　財団法人建築技術教育普及センター理事
1990　株式会社日建設計名誉顧問
1997　株式会社日建設計名誉顧問を退任

●論文・著作
・「復興住宅に就て」(『建築と社会』1947年1,2月号)
・「工場計画雑観」(『建築と社会』1954年3月号)
・「長谷部を追想して」(『建築と社会』1961年3月号　長谷部鋭吉特集)
・学位論文『高層建築の構造設計に関する研究（鉄骨鉄筋コンクリート構造について)』1961年

論を導くことを試みている。

ところで塚本は技術者としても優秀な人材であるが、その本領はなんと言ってもバランスのとれた人柄である。その人柄や経営感覚が、今日の日建設計の母胎をつくったといっても過言ではない。事務所の拡大に当たり、長谷部、竹腰の弟子筋ばかりでなく全国から優秀な学生を募るなど次代を担う人材を求めた。それもデザイン、構造、設備、工務・監理と幅広い分野におよんでいた。戦後しばらくの大手設計事務所にとって、デザイン、構造・設備、工務・監理の三位一体化の重要性は多くの経営者が認識していたであろうが、それを第一に実践し、設計技術を組織化し得たのはやはり塚本の功績と言えるだろう。もちろんこの背後には長谷部の卓越したデザイン力や竹腰の技術全般に向かう視点という伝統があったのだが、今日の日建設計における技術とあわせた設計思想の形成には、塚本の指導力が不可欠であった。

こうした経営者としても大きく手腕を発揮した塚本の人柄を、所員たちはどう見ていたのだろうか。「好みを発言する人ではなかった」という言葉が、彼の人となりを語っているだろう。組織の上に立つ人間として、自分の趣味を押しつけるのではなく、バランスよく所員たちの意見に耳を傾けたのだろう。また「まじめで太っ腹な人だった」という意見も興味深い。


日本万国博覧会会場　『建築と社会』1970年2月号

塚本は万国博覧会の翌年、1971年4月に東畑謙三の跡を継いで第5代の日本建築協会会長となった。このときの就任のあいさつでは「建築界におきましては、大学、高校の先生方、諸官庁の役職の方々、設計事務所、総合請負業、設備業、材料業、各種工事業の方々などそれぞれの職域において活動されておりますが、その職能は各異質のものがありませう。このような異質社会の結合発展こそ、本会のような複合協会の特徴ある活動の方式であると思います」(『建築と社会』1971年4月号）と述べており、諸先輩の築き上げた伝統を受け継ぎ、建築界が協力し発展することを目指していた。塚本は、1982年に名誉会長に就任するまで、12年にわたり会長を務めた。

このほか、建設省中央建築士審査会委員、大阪府建築審査会委員、㈳日本建築士事務所協会連合会会長など多くの公職を務めた。また1971年藍綬褒章、1976年大阪市市民表彰、1980年勲三等瑞宝章など多くの賞を受賞している。彼の人柄は、長谷部・竹腰建築事務所の気風を受け継ぎながら、関西ばかりでなく日本第一の設計事務所となった日建設計を均衡のとれた設計組織として育てあげたこと、また関西建築界の発展に大きく貢献されたことにあらわれている。

*

本稿作成にあたり、株式会社日建設計取締役寺本敏則氏および常任顧問大西孝夫氏よりご教示をいただきました。ここに記して感謝いたします。

（酒井　一光）

参考資料
・『建築雑誌　研究年報62』日本建築学会　1962
・小西隆夫『北浜五丁目十三番地まで』株式会社日建設計　1991
・『日建設計社内報』1998年1月号

福田　朝生（ふくだ　あさお）



●略歴
1917　4月29日誕生
1940　京都帝国大学建築学科卒業
　　同大学非常勤講師
　　兵役
1943　ビルマ駐屯
1947　京都工業専門学校講師
1949　京都工芸繊維大学講師
1951　同大学助教授
1956　双星社竹腰建築事務所常務取締役に就任
1966　同社社長に就任
1967　株式会社双星設計に改称、定款変更に伴い同社代表取締役に就任
1967　大阪万国博基幹施設配置設計協力建築家に選任
1971　日本建築協会副会長（～1981）
1982　日本建築協会会長
1984　10月18日逝去

福田朝生は1917年4月29日に長崎県に生まれ、京都市で育つ。1934年、京都府立一中(現洛北高校）から4年修了で旧制三高に合格、1937年京都帝国大学建築学科に進学し、森田慶一の薫陶を受ける。1940年に卒業し、そのまま母校で設計演習の非常勤講師を務める。しかし、同年末に出征、1943年以降ビルマに駐屯する。終戦後2年を経た1947年にようやく復員でき、この年の9月から京都工業専門学校（京都高等工芸学校が1944年に改称したもの）で教鞭を執ることとなる。同校が学制改革で1949年に京都工芸繊維大学工芸学部に改組されると、福田は当初は講師、1951年から助教授を務め、建築計画学を専攻する。

1956年4月、竹腰健造に招かれて双星社竹腰建築事務所に入所、常務取締役となる。事務所の後継者をさがしていた竹腰が京大教授の棚橋諒に相談し、棚橋が福田を推薦したのだと言われる。双星社は元来、長谷部竹腰事務所の住宅部門として出発した事務所だが、福田が入所したころには所員数は30名を超える大組織になっていた。住友工作部時代からのベテランも多く、まだ40歳にもならないうちに役員待遇で入社した福田はいささかの気苦労もあったようだ。

しかし、計画学の研究者としての蓄積を生かして、病院建築の設計を中心に大きな成果を収め、今日の基盤を築く。1966年には竹腰に代わって社長に就任し、翌67年に事務所名を双星設計と改める。

福田朝生の設計に対する関与のあり方は、初期には竹腰がスケッチを描き、福田がプランをまとめるというかたちが多かったようだが（典型的には大阪市長公館（1959年））、やがて福田が総合プロデューサーとしての役割を果たすようになっていく。すなわち、福田が配置計画・平面計画について基本的なアイデアを提示し、所員がそれを詰め、立面を考えるという手順であった。福田の場合、形態的イメージやディテールから発想するというようなことは好まず、常に計画学的な思考に基づいていた。彼は森田慶一門下ではあるが、吉武泰水や浦良一と親しく、設計手法の上では吉武計画学の嫡流に位置付けることができる。

双星社では竹腰健造の意向で作品をジャーナリズムに発表することが少なく、福田の業績も外にはあまり知られていない。先述のように、もっとも作品で多いのが病院、福祉施設であって、20件近くを数える。福田の病院建築の特徴とし



石川県立中央病院

●作品
1963　聖マリア病院
1964　大阪大学医学部付属病院第1期
1965　大阪市立住吉市民病院
1970　大阪万国博覧会シンボルゾーン大屋根（科学技術庁長官賞）
1971　大阪府立成人病センター
1976　石川県立中央病院（中部建築賞）
　　石川県児童会館（中部建築賞）
1978　大阪府立老人総合センター
1981　箕面市立病院
1982　大阪市立工業試験所
　　金蘭会学園短期大学
1994　石川県産業展示館1～4号館基本計画

て、病室の面積が日本の水準よりも余裕を持っていることが挙げられる。これによって、最近の拡大傾向にも無理なく対応することができ、今になってその先進性が再認識されている。福田の合理主義が単純な経済原則によるものではなく、施設の本質に立ち返って考えつめられたものであることがここからもうかがえる。

作品に石川県下に建つものが多いが、これは同県知事の中西陽一が三高の同級であった縁による。なかでも石川県立中央病院は特に精魂を傾けた作品とされる。また、石川県児童会館は自然の多い周辺環境になじむよう2階建てに抑え、色彩もモノトーンという落ち着いたデザインで、この種の施設にありがちな派手さを一切捨てている。そこに見られる控えめさ――人間が主役であり、建築は舞台にすぎないと考える謙譲――が福田朝生の何よりの特徴であろう。こうした発想は竹腰健造にも共通するものであり、今日の双星設計にも脈々と流れている。

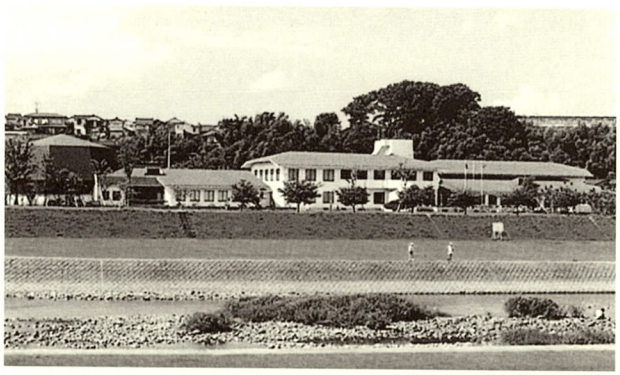
福田朝生を知る人はそろって、彼の性格はきまじめであり、几帳面であったと語る。いわゆる営業活動を嫌い、ボウリング場などは依頼があっても断るような職能意識を保持していた。その一方で、すこぶる面倒見がよく、温厚で、部下に対して頭ごなしに怒るようなことはなかった。

福田の活動のなかで特筆すべきは、1967年に大阪万国博覧会基幹施設配置設計協力建築家12名のうちの一人に選ばれたことだ。福田は神谷宏治とともにシンボルゾーンを覆う大屋根の設計を担当する。同時に丹下健三プロデューサーを補佐・代行する役割を受け持って、全体の調整にあたった。万博というだれもが未経験の大事業、しかも個性の強い建築家の協調設計という困難な課題であったが、福田は協力建築家12名中の最年長者として職務をリードし、円滑な運営を実現するのにあずかって力があった。

日本建築協会においては、1971年から81年まで副会長を務めたのち、塚本猛次の後を受けて82年に会長に就任した。その時点では協会の事務所は北浜の近畿建築会館にあった。この建物は、1925年に建設された旧伊藤邸を1956年に購入したものだが、同館を共同で購入した建築学会近畿支部、大阪府建築士会などはすでに転出し、建物自体の老朽化も目立っていた。福田会長はここにおいて強いリーダーシップを発揮し、1983年7月の名誉会長・正副会長打合会において、会館の売却と事務所移転の方針を決定する。そしてこの年の暮れには現在の大阪駅前第3ビルへの移転を遂行し、明けて1984年1月には新事務所の披露パーティを開催するにいたった。ところがその夏に福田は体調を崩して入院、10月18日急逝したのである。

万博での業績に対して1970年に日本建築学会万国博特別賞を授与された。また建築文化への貢献に対して1972年に大阪府知事表彰を受けた。

（石田潤一郎）


石川県児童会館


大阪市立工業試験所

佐野　正一（さの　しょういち）



●略歴
1921　1月10日誕生
1942　東京帝国大学建築学科卒業
　　鉄道省入省、出征
1945　鉄道省に復帰
1955　株式会社安井建築設計事務所に入所
1961　同社社長に就任
1978　日本建築協会副会長（～1984）
1984　同協会会長（～1994）
1989　安井建築設計事務所会長に就任
1994　日本建築協会名誉会長

●作品
1952　国鉄京都駅
1957　大阪ガス京都支社
1958　サントリー山崎醸造所（日本建築学会賞）
1959　野村證券本社ビル新館
1962　天王寺民衆駅
1964　東海道新幹線駅舎（日本建築学会賞）
1966　大阪ガスビル新館
1969・81　大阪国際空港ターミナルビル
1983　大阪ターミナルビル
1986　サントリーホール
1999　東京国立博物館平成館

佐野正一は1921年1月10日、佐野又郎、コハルの長男として大阪市南区悲田院町に生まれ、神戸市東郊の御影で育った。1933年、7年制の旧制大阪府立浪速高校に入学、ここで佐治敬三と相知る。

1940年4月に東京帝国大学工学部建築学科に入学する。絵が得意であったことから選んだのだという。ちなみに、家族ぐるみで交際のあった安井武雄に相談に行ったところ、特別な才能がないとだめだから、とあまり勧めなかったらしい。

入学後、太平洋戦争が勃発し、このため修学期間が半年短縮され、1942年9月に繰り上げ卒業となる。同期生には芦原義信、池辺陽、石原尚、大沢秀行、小幡祥一郎、吉野照蔵らがいる。佐野は在学中から設計製図に優れた能力を見せ、毎年辰野賞を得る。卒業論文は浜田稔の指導で軽量コンクリートの研究を行い、卒業設計は科学技術文化センターを題材とした。

卒業後は大蔵省営繕管財局への就職が内定していたが、同省技師から東大助教授へ戻っていた吉武泰水のアドバイスで志望を変え、鉄道省に就職する。しかし、任官後すぐさま海軍技術将校として軍役に就くこととなり、南太平洋のマーシャル群島で終戦を迎える。

復員後、鉄道省（のち運輸省、国鉄）に復職し、京都駅（1952年）などを担当する。この間、1946年に安井武雄の長女、理と結婚する。1955年、安井武雄が病に倒れ、佐野は請われて安井建築設計事務所に入社することとなる。監査役・取締役を経て、1961年に社長に就任、1989年に会長となり現在に至る。

佐野正一は安井事務所に入所後、実質的には事務所の運営を主宰してきた。彼によって、事務所の性格は安井武雄の個人事務所から、組織事務所へと転換していくことになる。その変化がもたらしたものについて、佐野自身は「事務所を構成する技術の各分野をバランスよく充実を図っていくこと」と「事務所の運営を経営的に考える姿勢」を挙げている。そして前者をさらに噛み砕いてこう語る―「私どもが目指してきたことは、組織を強化して多彩な提案能力を持つような事務所にしたい、ということでした。それは、意匠設計の部分だけでなく、構造技術でも設備の技術でもあるいはプレゼンテーションの技術、そういういろいろな部門で新しいものに蓄積をしていきたい。それによって、経済社会の信頼を確実なものにしていく」。そしてさらにまた「私らがやっている仕事は、最も完璧な建築技術をやろうとしている」と述べる（『建築画報』第25巻第215号）。

現実の社会において、建築はそれぞれに解決しなければならない多くの問題に遭遇する。その問題をいかに的確に把握し、いかに説得力のある解答を与えるか、この点において佐野が率いる安井事務所はきわめてすぐれた成果を上げてきた。業務の中心は金融機関のオフィスビルであったが、そこでは、あらゆる災害を想定してそれらに完全に耐える性能を獲得し、事務機構を支える複雑な機械設備を統御した上で、良好な執務空間を提供するという一筋の隘路を探る営為が要求される。佐野は最初期の野村證券本社ビル新館から大和銀行本店、新宿野村ビル、さくら銀行関西本部ビルにいたるまで、その困難な要請に応えつづけてきた。また、彼は建築計画学の発想をいち早く取り入れて、交通施設における乗客の移動・滞留をはじめて的確にコントロールする方法を確立した。天王寺民衆駅（1962年）、東海道新幹線駅舎（1964年）、大阪国際空港ターミナルビル（1969・81年）などがその成果である。構造面の実績でいえば、阪神大震災で損傷を受けた作品が皆無であったことがなによりの証左であるし、設備については、サントリーホール（1986年）の音響の良さが成果の代表であろう。

社会からの要請に技術でもって適切に応答することを第一義に置く姿勢は、終戦直後の貧寒たる時代に建築家として出発せざるをえなかったという世代的な特質でもあるだろう。だが、鉄道省時代に合理主義的建築論の旗手であった伊藤滋のもとで学んだところも大きかったと思われる。

ただ、彼が建築をすべて技術的所産と捉えているわけではないことは明らかである。サントリー山崎醸造所（1958年）では、茶褐色のタイルと金色のエンブレムでファサード

を構成して、天王山山麓の風致に配慮しつつ、格調のある大衆性とでもいうべき効果を得た。また、安井武雄の旧作に増築を加えた野村證券本社ビル新館（1959年）、大阪ガスビル新館（1966年）の2作品では、既存部分の意匠の美点を受け継ぎながら、さらに現代的な感覚を加えて、増築の手本というべき成果を上げている。そのような佐野は伊藤滋の合理性を高く評価しながら、一方で機能一辺倒の駅舎は機能が変化すると存在意義を失っていくと指摘するのである。こうした意匠に対する深い思いが、実務家としての明敏さを見事に支えているといってよい。

佐野は日本建築協会においては、1956年に理事に就任、1978年から副会長を務め、1984年に福田朝生急逝のあとを受けて会長に就任、以後約10年間の長きにわたってその重責を果たし、1994年に名誉会長となる。会長在任中の業績としては、70周年記念事業の一環としての「日本建築協会賞」の創設、委員会制度の活性化、事務局の充実、地方支部の整理、在阪建築13団体の協会技術分野への加盟推進などが挙げられる。

このほかの建築職能団体でも積極的に活動し、1956年ごろから日本建築家協会関西支部設立に尽力し、1960年同協会理事、1969年関西支部長に就任した。1974年には大阪建築士事務所協会の設立にあたり、1988年には同協会の全国組織である日本建築士事務所協会連合会副会長となり、1990年からは会長を務め（94年まで）、現在名誉会長である。この間大阪建築士事務所協会では1990年に会長に就任し、現在に至る。このほか㈱総合デザイナー協会副理事長、㈶日本建築総合試験所理事など広範な団体活動にたずさわっている。

彼の社会的功績に対しては、1972年に大阪府知事表彰、1985年に藍綬褒章、1991年に勲三等瑞宝章、1994年に大阪市民表彰が贈られている。

（石田潤一郎）



野村證券本社ビル新館



大阪ターミナルビル　撮影／東出清彦



サントリーホール

葛野　壮一郎（かどの　そういちろう）



●略歴
1880　大阪府豊島郡池田町に生まれる
1905　東京帝国大学建築学科卒業
　　横河工務所・神奈川県技師・大阪府技師を経る
1919　葛野建築事務所開設
1917　日本建築協会副会長・理事（～1921）
1944　１月18日逝去。65歳

●主な作品
旧大阪府庁舎増築、大阪府立貿易館、大阪府立医科大学病院、日本紙業、大江ビルヂング、丸善、東洋製罐、宮崎県公会堂及び議事堂、日本電力蟹寺発電所、日本伸銅、天王寺高等女学校、別格別院善福寺、中央電気倶楽部、明星商業学校、大阪偕行社小学校、日本電解製鉄所東京工場、発動機製造、守谷商会大阪支店、朝日神明社

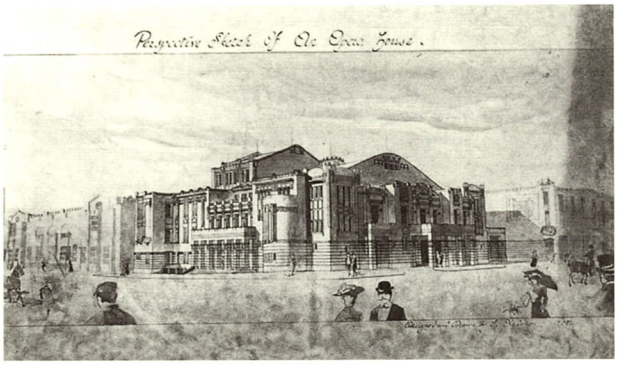
●主な論文
・「公立大音楽堂の創設を望む」（「建築と社会」（掲載誌以下同じ）1921年１月号）
・「住宅研究(1)～(6)」（1921年１～３、７、９、11月号）
・「共同住宅の経営」（1923年１月号）
・「イーストマン劇場及音楽学校」（1923年５月号）
・「婦人に必要な住宅の知識」（1924年８月号）
・「家相流布の原因と其本質原理」（1927年１月号）
・「住宅と家相問題」（1929年５月号）
・「小住宅の研究」（1931年４月号）
・「旧府庁舎の建築」（1931年５月号）

葛野氏の先祖は、平安時代に遣唐大使を務めた藤原葛野麻呂まで遡る。葛野姓は、後裔の藤原輝光が山城国葛野郡の領有を機に葛野兵衛輝光と改名したことにより、同家は葛野本家として、現在も池田市に託明寺として存続している。葛野壮一郎は、葛野分家の八代目にあたる。同分家は、和歌や絵の才に恵まれた家系で、ことに５代目宜春斉は、現在も池田の文化史に名を残す才人である（『託明寺の歴史』）。

葛野は、明治38年に東京帝国大学を卒業し、横河工務所・神奈川県技師・大阪府技師を経て、大正８年に大阪工務所（後に葛野建築事務所）を大阪市北区安治川大通りに開設した（牧田知子「近代住空間の理念」日本建築学会梗概集1994年）。また、日本建築協会創設時より、副会長・理事を務めるとともに、機関誌「建築と社会」に、住宅や家相などに関する多くの論文を発表し、「住」についての意識の向上、改革の啓蒙を行った。

葛野の作品は、屋根頂部以外は装飾をおさえ、平滑な壁面の意匠による大江ビル（大正10年）、エキゾチックなインド・東南アジアスタイル（石田潤一郎他『近代建築ガイドブック［関西編］』昭和59年）の別格別院善福寺（昭和４年）、タイル目地の陰影により豊かな表情を見せる中央電気倶楽部（昭和５年）、玄関周囲に文様を施した大阪偕行社（現追手門）小学校本館（昭和６年）、和風の朝日神明社（昭和６年）と、多様な手法でデザインされているが、装飾は全般にひかえめである。この傾向は、すでに卒業設計（オペラハウス）で見られ、装飾を抑えたデザインにはゼツエッションの影響が感じられる（写真）とともに、細部の意匠に彼の力量をうかがうことができる。

葛野については、「…油も水彩もやり、また三高時代には『くれなゐ』の号で明星派の歌に熱中した時代もあった」（伊達俊光『大大阪と文化』昭和17年）と、その多才ぶりが知られるが、大正７年には、「…大阪の資産階級や智識（ママ）階級の文化人を集めた楽友会」の設立に関係した（前掲『大大阪と文化』）。音楽との関係の深さは、彼の卒業設計がオペラハウスであることからもうかがえるが、大正10年には「公立大音楽堂の創設を望む」を発表し、劣悪な住環境のもとで生活する都市居住者に対し、「……其団体生活に於ける組織統一に対する根本自覚を培ふのは、音楽に勝る物は無いので有る」と、音楽の効用を高らかにうたいあげている。



葛野の卒業設計「オペラハウス」

楽友会は、大正８年には音楽文化宣揚のために公的な活動を行うが、同15年に金曜談話会（後、金曜倶楽部、錦耀倶楽部）として発展的に解消した。この間、同会は250回の講演会を催し、葛野は、「コンクリートと生活」「大阪と高層建築」の演題で講演を行っている。なお、講演者には、武者小路実篤、魚澄惣五郎、柳宗悦、会津八一など、多才な顔ぶれが見られる。また、女子教育にも熱心で、「…新女性主義の教育を施し、個性教養の実を挙」げるために創設された大阪文化女塾（前掲『大大阪と文化』）の講師を、東大の同窓生・本野精吾とともに務めている。

以上のように、葛野壮一郎は、建築家として「時代の要求に対する住環境に対する献身的な示唆」（前掲牧田論文）を行う一方で、知識人・文化人として西洋音楽の導入を機に、様々な文化活動に参加するとともに、女子教育にもかかわるなど、多方面にわたる活動を行った。

葛野には子息がなく、昭和20年シノ夫人逝去により葛野分家は絶家した。（植松清志）

本稿起草に際し、元関西大学教授肥田皓三先生、託明寺住職葛野勝規氏から多くのご教示をいただきました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

横濱　勉（よこはま　つとむ）



●略歴
1880　10月岩手県盛岡市に生まれる
1903　第二高等学校卒業
1906　東京帝国大学卒業
1908　司法省技師（～1922）
1920　大阪監獄建築場（～1922）
1922　横濱松下建築事務所設立
1930　日本エレベーター製造
1933　大阪橋本組
1936　鹿島組大阪営業所顧問
1940　鹿島組台湾営業所長
1944　本社（～1947）、同社顧問（～1956）
1960　12月23日逝去

●作品
1910　九十銀行本店（盛岡市）
1915　豊多摩監獄（後藤慶二と共同、東京）
1916　大阪控訴院・地方及び区裁判所（山下啓次郎と共同、大阪市）
1922　日本海上保険（大阪市）
1930　森岡興業 k.k.(東京都)

●論文・記事
1919　英国に於ける田園都市と其戦後（『建築雑誌』）
1921　都市改造と民衆保健（以下、『建築と社会』）
1923　文化生活と田園都市
1923　住宅改造博覧会の主命―我が女子の化学的知識の普及を切望す

横濱勉は明治13年盛岡に生まれ、第二高等学校から東京帝国大学建築学科に進んだ。明治39年卒業の同期生には岡田信一郎、松井貴太郎、本野精吾などがいた。

卒業後、東京市技師となるが、2年後の明治41年には司法省に移り、豊多摩監獄や、大阪控訴院・地方及び区裁判所等の設計監督に当たった。この間、大正7、8年ごろにはイギリスに視察に出かけ、「英国に於ける田園都市（リッチワース）とその戦後」として『建築雑誌』に調査報告がなされている。

大正9年には東京区裁判所の仕事に携わるが、その後大正11年6月に休職するまでのことは不詳である。

しかし大阪には在住していたらしく、日本建築協会の理事・理事長もつとめ、大正10年には『建築と社会』の編集に、大正11年には「住宅改造博覧会」の開催・運営に当たり、「好成績」をもって成功に導いた。横濱は住宅改造に女性の学習、意識なくしてありえないと考え、「実践家政」として生活科学を学ぶことを説いた。

また、横濱は櫻ヶ丘の住宅改造博終了後、大林組出品住宅（B）を購入、居住した。それは19,371.37円（土地建物、家具、暖房設備、庭園など外構を含む）と高価であったが、この洋風改造住宅での椅子式生活を好んだ。

戦後、この住宅を譲り受けた伊勢芳吉（元ダイハツ工業社長）は、横濱のことを知る数少ない人で、次のように語っている。「横濱さんは東大の建築科を出られた偉い方で、しかも大変ハイカラだった。家を譲っていただくとき、その横濱さんが一つだけ条件を出された。この家に愛着があるので、大阪に出てきたときにはぜひ泊めて欲しい、そういう条件です。私もとてもうれしく思って、横濱さんのために部屋を一つ空けておきました。…（中略）…

ずいぶんいろいろな方とお付き合いがあったらしく、この家が関西名士の社交場といった感じになっていたようです」（「大正『住宅博覧会』の夢」別冊 INAX BOOKLET）。

横濱は大正11年横濱松下建築事務所を、翌年には横濱建築事務所として設立するが、仕事は暇であった。しかし当時



大阪控訴院・地方及び区裁判所



大阪監獄



日本海上保険

「歳末漫話十題」として「建築と社会」昭和2年12月号に記された横濱の考えは、いずれもその後の建築と都市を見据えたものである。それは、建築機械のリース会社の設立、建築高の最低限度を定めて都市景観を整えること、都市へ小公園を設けることなど10項目に及んでいる。

横濱はその後、昭和11年には鹿島組（鹿島建設）大阪営業所に入社することになる。以後、同社の宮古出張所で鉱山関連の工事に当たり、昭和15年には台湾営業所長として業務に当たるが、昭和20年には本社に戻る。

しかし設計業務を離れてから、特に大阪を離れての活躍の姿はうかがい知ることができない。

（吉田高子）

*

東北大学記念資料室、鹿島建設社史資料室、並びに細野耕司氏の協力を受けた。

松本　禹象（まつもと　うぞう）



●略歴
1871　２月16日熊本県菊池郡龍門村に生まれる
1896　東京高等工業学校管理工学教員養成所建築科卒業。
　　郷里にて一時期教員として勤める
1897　熊本県内務部営繕課技手
1906　大林組に入社
1916　大林組建築部長
1918　大林組は合資会社より株式会社となる
1920　大林義雄社長に随行しアメリカを視察。
　　大林組取締役（現業部長兼務）
1922　日本建築協会主催「住宅改造博覧会」
　　大林組出品委員長
1924　大林組常務取締役
1927　大林組監査役
1930　大林組顧問
1945　９月16日逝去。享年74歳
●建築作品
1915　曽根崎新地歌舞練場（大阪市）
1919　平賀義美邸（現在、川西市郷土館）
1922　住宅改造博覧会出品住宅和風Ａ号（箕面市）

明治25年創業の歴史を持つ大林組は、明治37年に社名を「大林組」と定め東京事務所を開設し、明治42年に合資会社大林組を設立している。そうした時期の明治39年に大林組入りした松本禹象は、草創期の設計部門を先導する役割を担った建築技師であった。実際、その設計部門が建築部として組織づけられたのは大正５年で、松本は初代の建築部長に就き、大正年間を通じて建築部の活動を統括したのである。

松本禹象は明治４年２月16日熊本県菊池郡に生まれ、明治29年に東京高等工業学校管理工学教員養成所建築科を卒業して熊本県庁に奉職し、10年余り官庁建築にかかわる経験を持っていた。一方、大林組は日露戦争前後の時期に、その組織基盤を固めるため広く人材を求め、技術陣にも学士の技術者を採用している。その一人が松本であり、先年の明治38年には工部大学校出身の船越欽哉、明治41年には富田義敬、明治42年には東京帝大卒の岡胤信が入社している。

入社後の履歴によると、明治末に舞鶴、尼崎での外勤がつづいたが、大正２年に本店に戻るや曽根崎新地歌舞練場を担当し、大正４年に竣工させている。それは鉄骨トラスなど近代的工法を用いた和風建築で、特色ある演舞場建築として世に知られ、松本の初期代表作品に挙げられるものである。この仕事で設計施工の一貫性による利点を強く印象づけたと言われ、大正５年に建築部長に就いている。

ところで創業者の大林芳五郎は大正５年１月に没し、嗣子の大林義雄が２代社長に就いていた。大正７年に至り、株式会社大林組が設立されるが、松本はその設立発起人として名を連ねている。そうした時期に松本は平賀義美博士邸という珠玉のような西洋館の設計を行っている。博士は明治11年に大学校南校卒業後、英国オーエンス大学で化学染料に関する分野を学び明治14年に帰国した化学者で、教育及び産業界にも広く貢献した人であった。氏が関西での活動に本腰を入れるに際して計画されたもので、建築工事を託された鴻池組より求められて設計を担当したと言われている。松本はこの西洋館の近くに敷地を得て、昭和２年に自邸を建てている（設計は三原清治）。

さて、松本の履歴によると、大正後半期における社内での主なる活動に、次の２件が挙げられている。一つは大林義雄社長に随行して大正９年に米国建築視察に出たことである。そしてその知見を下に「実費加算報酬式請負奨励に就て」（『建築と社会』大正10年８月）述べている。

つぎに大正11年、日本建築協会主催の住宅改造博覧会出品委員長に任命され、社内の鈴木甫、木村得三郎とともに尽力したことである。この博覧会は当時協会屈指の事業で、大正10年２月に準備委員会が組織されて始まる。その委員に大林組からは大林賢四郎、白杉嘉明三、そして松本禹象の三氏が名を連ね、積極的にかかわっていた。松本は委員長として社内で設計コンペを行い、スパニッシュ様式の三木栄逸案を１等に選出した。大正11年に建ったこの住宅は、大林組が阪神間に建てた最初のスパニッシュ住宅としての栄誉を担うものとなる。もう一棟の出品住宅は松本自身の設計によるもので、和風を現代風に改良した「ジャパニーズ・バンガロー」と称した和洋折衷住宅であった。



出品住宅和風Ａ号「住宅改造博覧会　大林組出品Ａ号住宅出品住宅図集」より

なお松本禹象は大正14年日本建築協会理事長として、昭和12年副会長としてその任を果たしている。　（山形政昭）

資料　足立裕司「平賀義美邸の歴史と意匠」1988年
　　大林組設計本部設計技術部『大林組建築家列伝』平成９年

宗　兵蔵（そう　ひょうぞう）



●略歴
1864　３月29日、江戸の藩邸に生まれる
1885　東京大学予備門卒業
1887　第一高等中学校卒業、帝国大学工科大学造家学科入学
1890　帝国大学工科大学造家学科卒業、同期に横河民輔、葛西万司がいた
1891　帝国奈良博物館設計のため宮内省に入る
1894　帝国奈良博物館及び帝国京都博物館の工事に関係する
1895　東京市技師。淀橋浄水場の建築工事に関係する
1898　海軍省技師となり、横須賀鎮守府経理部建築課員となる
1904　英米独各国に出張
1905　帰国後、横須賀海軍経理部建築課長となる
1906　高等官三等となる。６月海軍省を退職し、合名会社藤田組に入る
1907　合名会社藤田組臨時建築主任となり、本店の建築工事に係る
1913　本店の完成により藤田組を退社、独立して宗建築設計事務所を開設する
1917　関西建築協会創立総会に出席、理事となる
1923　大阪市美術協会美術会員に推薦される
1925　日本建築協会副会長
1931　事務所を閉鎖する
1944　１月30日静岡市にて逝去。享年81歳

“清軀鶴の如しとは実に宗さんを形容したような言だ。温順玉のやうな性格とその風采は、何びとにも畏敬と欣慕の念を起さしめる。全く宗さんは関西建築界の長老として唯ひとりしかない人である。謙譲の人でもあり徳望の人でもある”。これは昭和２年の“新建築”３月号にのった“宗兵蔵氏の作品と懐旧談”の一節である。

まことに適切に彼の人柄の一端を伝える記述と言えよう。

宗兵蔵は旧福島藩士宗龍九郎の長男として元治元年江戸の藩邸に生まれ、第一高等中学校から帝国大学工科大学造家学科に進み、明治23年に卒業している。彼は片岡安の７年先輩であるのみでなく、年齢も12歳年上であった。それにもかかわらず、彼は建築協会の創設に関して片岡安に協力し、この会の運営や指向について、多くの助言を行ったのではないかと思われる。これはこの協会の建築界や社会に対する役割について、その重要性を深く理解していたからにほかならない。彼は協会の第１回大会が大正７年12月５日開かれるのに際し、その準備から実施までを担当した。この大会は、第１回であったので大阪市高級助役関一、建築学会から佐野利器副会長らが講演し、会場となった完成間もない中央公会堂に約2,000名の聴衆が集まったとされる。

宗兵蔵は明治39年横須賀鎮守府の建築課長の職を退き、大阪にあった藤田組の本店建築のため、来阪することとなった。この建築は戦災を受けるが、近年まで堂島川出入橋の際に堂々とした格調の高い洋風建築として残っていた。彼の作風をみると、洗練された様式建築の味わいが濃厚に出ていて、見る人に心地よい印象を与える作品が多い。

宗兵蔵は大正２年藤田組を辞して、自ら建築設計事務所を開くこととなる。その作品の範囲は、大阪市役所関係で、久宝尋常高等小学校、南区役所庁舎、柴島浄水場喞筒室のほか、中之島に架かる獅子像をもつ難波橋の設計を手がけた。民間の建物でも生駒時計店、千代田生命保険、北浜ビルなど多数に上っている。

宗建築事務所には、住友営繕から転じた設計の上手な佐藤彰美、本田二郎（東大、大正７年）、京大第１回卒業生の大倉三郎、その後輩の脇永一雄らがいた。脇永は大倉が昭和２年京大営繕に移ったため、その後任として入所している。堺筋に面して建つ生駒時計店は、大倉の原案に脇永がその後を引き受けて仕上げたものと言う。宗事務所の作品には住宅も多く、須磨の内田信也邸、住吉村の松岡道治邸などがそれである。宗兵蔵は明治末から阪神間の住吉村に住み、同地に住む大阪の財界人との交流も深く、旧制甲南高等学校校舎、旧制灘中学校校舎も彼の作品であった。昭和６年事務所を閉鎖した後、静岡市に移り、同地で没した。

（坂本　勝比古）



藤田組本店



大阪回生病院本館



大阪難波橋

園部　文雄（そのべ　あやお）



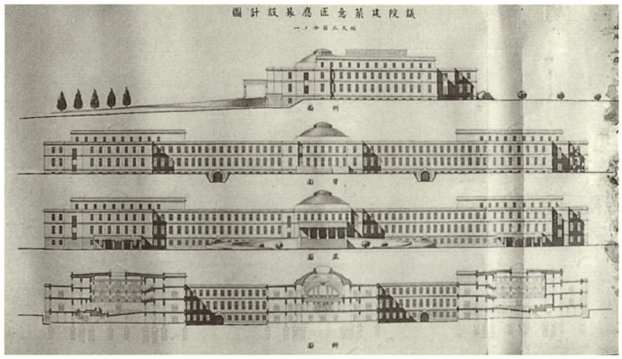
●略歴
1890　3月23日、和歌山県海草郡有功村大字園部に生まれる
1910　第三高等学校予科第二部甲類卒業
1913　東京帝国大学建築学科卒業
1914　第1師団経理部雇員
1915　青島守備軍陸軍経理部臨時雇員
1916　陸軍技師（大阪砲兵工廠付）
1919　青島守備軍陸軍経理部附
1920　第16師団留守経理部附
1921　第16師団経理部附
1922　大阪市技師（都市計画部技術課設計係）
1924　日本建築協会理事（～1925）
1927　欧米各国へ出張
1931　大阪市を退職
1932　12月17日逝去
●論文
「青島の市街建築」（『建築雑誌』大正5年7～12月号）

園部家は、和歌山県海草郡有功村（現和歌山市園部）において古くから庄屋を務めた家柄で、嘉永年間に建築された家屋は風雪に耐えその歴史を刻んでいる。園部文雄は、明治23年同地に生まれ、第三高等学校を経て東京帝大へ進んだ。上級学校への進学がまれであった当時において、三高から帝大まで進んだことは、地元においても有名であった。

帝大在学中の学生生活については詳らかにしないが、テーマが「Memorial Art Gallery」という卒業設計が残されている。平面は、中央部にホールを設けた左右対称形で、立面は、中央ホールの上部にパリのパンテオンを思わせるドームを載せ、正面にはコリント式オーダーを用い、壁面やペディメントなどを単純化したネオクラシシズム様式でまとめている。

大正2年東京帝国大学卒業後、第一師団経理部などを経て、同11年大阪市に勤務するとともに、同年10月に開校した関西工学専修学校において、都市計画を講じている（『大阪工大摂南大学70年史』1992年）。さらに、大正13・14年には日本建築協会の理事を務めている。市役所では、「…学殖あり、経験あり、才気あり…村正の名刀を以て目され…恬淡活調の人…市役所内に於ても氏の如きは最も未来ある第一人者…」と評価されている（升谷天恵『大阪新人大観』大正14年）。

園部の活動については不明な点が多いが、ここでは、園部家に残されている図面と、設計に関与した中央卸売市場について紹介したい。



議院建築コンペ応募作品

図面には「議院建築意匠応募設計図」とレタリングされ、「収受番号六四号」というラベルが貼られていることから、大正7年9月の議院建築コンペに応募した作品であることが分かる。このコンペは、与えられた平面図をもとに立面を提案するデザインコンペで、200m余におよぶ建物の高さが3階に限定されるため、立面の変化をどのように付けるかが大きなポイントであったと言える。園部は、中央部にドームを載せる案を示している（写真）。なお、図面には、当時のコンペの慣習に従い「山桜」という暗号が記されている。

昭和2年10月にパリ、ロンドン、ハンブルグ、ミュンヘン、ローマ、フランクフルト、ボストンなどの欧米の主要都市へ市場界の視察に出かけ、同3年4月27日に横浜に帰港した。その結果、パリは、肉と野菜が中心であるが、少し狭い、建物も古く、掃除も不行き届きである。ロンドンは、肉市場が盛んであるが、港から約11km余も離れている点を指摘している。ハンブルグでは、荷揚場や高架線などが設けられている点に、改良の工夫を見ている。また、ヨーロッパでは、地下鉄道や高架鉄道があるからそれを利用すれば「随分面白い設計が出来る」と建築家らしい感想を述べているが、参考になる点が少なかったらしく、「…日本は日本として国民性に合致した独特のものをつくらねばならない」ことを痛感している。そこに新しい都市施設としての中央市場をつくろうとする心意気が感じられる。彼が中央市場設計のどの部分に関与したかは具体的には不明であるが、視察同行者が産業部長であったことを考慮すると、設計の統括的立場にあったと考えられる。昭和6年に、ホテル、デパート、銀行さらには西成線を引き込んだ中央市場駅をもち、電力消費量は西宮市に匹敵するという、東洋一の中央市場が完成した。

しかし、園部はこの時すでに病魔におかされ、翌7年42歳で逝去する。卒業設計作成時の過労がその遠因ではないかとの話が伝わっている。

（植松清志）

本稿起草に際し、園部俊治氏から種々ご教示と資料の提供をいただきました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

日高　胖（ひだか　ゆたか）



●略歴
1875　６月15日、幕府の旗本だった日高圭三郎為善の子として東京に生まれる
1900　東京帝国大学工科大学建築学科を卒業、同年住友本店臨時建築部に入り技師に任ぜられる
1904　神本理髪店の設計でアール・ヌーヴォー・スタイルを用いる
1908　欧米出張を命ぜられ、翌42年帰国
1911　茶臼山建築事務取扱所委員を兼務する
1913　住友銀行東京支店の建築に従事する
1915　野口孫市の死により、住友営繕の全責任者となる
1916　住友総本店及住友銀行本店新築調査委員となる
1918　建築材料調達のため渡米する。翌８年帰国
1918　関西建築協会理事となる。翌８年まで
1921　住友合資会社技師長となる。大阪府立図書館増築並びに旧館模様替え工事に従事
1922　宝塚雲雀丘に自邸建築
1926　住友合資本社ビルディングの建築に従事
1928　工作部長を命ぜらる
1929　日本建築協会理事副会長となる（1931年度も）
1931　住友を定年退職する
1932　鎌倉の腰越に自邸を建て移る
1935　東京渋谷区大山町に東京別邸を建てる
1946　日本建築協会名誉正会員に推薦せらる
1952　鎌倉の自邸で逝去。享年79歳

明治33年に発足した住友本店臨時建築部の三分の一世紀に及ぶ歩みを顧みると、合資会社としての事業の拡大と、住友家の本邸及び別邸の建築工事などがあって、順調な発展を続けた。当初建築部の技師長として部員を率いた野口孫市が大正４年に逝去したあとは、日高胖がその遺業を継ぐこととなる。


神本理髪店

野口が亡くなったとき住友銀行の東京支店は工事の真っ只中にあった。日高はこの工事を完成させるため東京詰めとなるが、一方、住友本邸の鰻谷から茶臼山への移転についても建築委員となり、これを大正５年にほぼ完成させる。この本邸は慶沢園と呼ばれた日本式回遊庭園をもつ大邸宅で、近世の大名屋敷を思わせる書院造風の格式ある邸宅であった。

また、この時期に念願であった住友総本店及び住友銀行本店新築計画が進み、その調査委員となり、いよいよ本店の建築に取りかかる。この本店の建築は大正11年12月に着工し、同15年に第１期工事が完成した。現在の土佐堀川畔に建つ建物がそれである。この建物の建築に当たっては、長谷部鋭吉、竹腰健造ら工作部の総力を挙げて進められ、その総指揮をとったのが日高であった。またこの間、住友家が大阪府に寄付した府立中央図書館が手狭となったため、その両翼に増築することとなり、これも住友家の寄付で行われるが、この増築工事も日高の下で長谷部が担当し、本館と見事に調和したルネッサンス・スタイルで設計され同11年に完成している。

日高胖は第16代住友家の当主住友吉左衛門春翠の信頼が厚く、大正３年京都の鹿ケ谷に建てられた和風別邸の建築にも携わった。

さらに先に茶臼山に建った住友本邸の敷地を大正11年大阪市に寄付することとなり、春翠は新しい移転先を阪神間住吉村の反高林に定めた。このため日高は茶臼山本邸の部材を解体して移築を行う事業の委員となり、住友家住吉本邸の建築を遂行して、同14年５月これを完成させた。

このように、彼の半生は住友家と住友合資工作部と共に歩んだと言ってよい。昭和６年57歳で定年を迎え、永年勤続の功で二等末家に編入された。彼はまたこの年に、協会の副会長を務めている。昭和７年永らく住んだ宝塚雲雀丘花屋敷の自邸を手放し、鎌倉腰越に移り、さらに東京渋谷区大山町にも自宅を建てている。

昭和27年12月20日、鎌倉の自邸で没した。享年79歳であった。

（坂本勝比古）


住友ビルディング


雲雀丘の自邸

野村　一郎（のむら　いちろう）



●略歴
1868　生まれる
1895　東京帝国大学造家学科卒業
1900　台湾総督府民政部土木課技師
1902　台湾総督府民政部営繕課技師
1904　台湾総督府民政部営繕課技師・課長
1907　総督府庁舎建築設計審査委員を兼務
1911　市区計画委員を兼務
1912　工事部技師を兼務・茂庄五郎のもとで働く
1913　橋本勉とともに茂野村事務所を共同経営
1926　野村一郎建築事務所を開く
1928　日本建築協会副会長
逝去年不詳

●論文・著作
・「台北市の市区改正に就いて」
（『建築と社会』1918年5月号）
・「都市計画と建築界の任務（上）」
（『建築と社会』1918年11月号）
・「一般工場建築に就て」
（『建築と社会』1930年10月号）

●作品
1901　台湾総督官邸（福田東吾、宮尾麟と共同設計）
1925　東託ビル（木子幸三郎と共同設計）
1926　東洋ビルヂング（木子幸三郎、阿部美樹志と共同設計）
朝鮮総督府庁舎（デ・ラランデ、國枝博と共同設計）
1931　大阪市電気局乗合自動車梅田第二車庫

野村一郎は1895年、第15回生として東京帝国大学造家学科を卒業している。同期には、建築史学者として有名な関野貞がいた。卒業後、1900年から1913年までの14年間、台湾総督府の営繕に勤め、台北の都市計画のほか、台湾総督官邸（1901年、福田東吾、宮尾麟との共同設計）などの建築作品を残した。その後は大阪の茂庄五郎（東大、1891年卒）の事務所で設計に携わった。茂の事務所は東梅田にあり、大阪で最初に成功した本格的な設計事務所で、洋風工場建築を多く手がけていた。1913年、茂の死後は橋本勉（東大、1906年卒）とともに茂野村事務所を共同経営。その後、大阪市北区曾根崎に野村一郎建築事務所を開設している。

彼の作品中、注目されるのは1926年竣工の朝鮮総督府庁舎である。全体の構成から内部空間、細部装飾に至るまで極めて質の高い建物であり、戦前の日本の版図内でつくられた西洋館の中では、赤坂離宮とならんでトップにあると評されている。基本設計をゲオルグ・デ・ラランデが担当、朝鮮総督府営繕課が実施設計をしたものである。計画当時の記事（『建築雑誌』1918年9月号）をみると、「設計」として「朝鮮総督府囑託　正員　野村一郎／朝鮮総督府技師　正員　國枝博」と記されている。デ・ラランデは基本設計を担当し、野村と國枝の二人が実質的な設計を行っていたことがうかがえる。しかし竣工時の記事（『建築雑誌』1927年2月号）には、「建築顧問　野村一郎／前主任技師　國枝博」と書かれていることから、現場監理などは当時の朝鮮総督府技師主任・富士岡重一らがかかわったのだろう。残念ながら、この建築は1996年に取り壊された。その部材の一部は現在、韓国の独立記念館の庭に残されている。



朝鮮総督府庁舎　『建築雑誌』1927年2月号

野村は近代建築史上に残る数々の名作を残しながら、一方で植民地の都市計画にも関心を持っていた。彼は台湾総督府に在職中、台北市の市区改正に関係しており、それに関する講演を行っている（「台北市の市区改正に就いて」『建築と社会』1918年5月号、「台北の市区改正に就て」『建築雑誌』1918年6月号）。台湾が日本の植民地となった当初の台北の人口は51,428人、それが8年後には81,040人に急増している。これは日本人が一攫千金を夢見て台湾に多く流入したことも一因である。そうした当時の台湾では近代的な都市計画が急務であった。野村は優れた建築家であったばかりでなく、都市計画を策定する先進的な目を持っていたことがうかがえる。

建築協会副会長に就任した1928年ごろには工場建築など、合理的な建築に興味を寄せていた（「一般工場建築に就て」『建築と社会』1930年10月号）が、これは茂庄五郎の影響であろうか。野村一郎設計事務所の名で発表した「大阪市電気局乗合自動車梅田第二車庫」（『建築と社会』1931年2月号）がある。1、2階を立体駐車場とした構成で、外観に大きなスロープを巡らせる機能的な構成の建築であった。

このように野村は台湾、朝鮮といった旧植民地において主要な建築を設計した経歴を持つ。また関西建築事務所の草分けである茂庄五郎のもとで働き、1928年、日本建築協会副会長を務めた。彼は日本と朝鮮、台湾を拠点に精力的に設計活動を展開し、主要な作品を残した建築家として記憶されるが、同時に都市的なスケールで物事を考えていた人物であった。それは当時、アジアを中心に世界との交易も盛んになり、東京をしのぐ人口を抱えた「大大阪」にあって、まさにふさわしい人物であったといえるだろう。

（酒井一光）

古宇田 實（こうだ　みのる）



●略歴
1879　1月13日東京に生まれる
1902　東京帝国大学建築学科卒業
　　築庭学研究のため同大学院入学
1905　東京美術学校教授就任
1912　大阪市公会堂（現・中之島公会堂）指名設計競技参加
1919　インド、英国、フランス、イタリア、アメリカ留学
1922　帰朝。神戸高等工業学校教授兼任
1929　神戸高等工業学校校長就任
1930　日本建築協会副会長就任
1945　神戸高等工業学校退官
1950　杉野学園女子短期大学学長就任
1952　東京都立大学講師。文化財専門審議会専門委員就任
1965　逝去。享年86歳

東京で生まれた古宇田が関西にやってきたのは1922年、新設直後の神戸高等工業学校教授としてだった。このとき43歳。すでに東京美術学校教授として、建築装飾のオーソリティとして一家をなしてからのことである。

来神の事情については、こんなエピソードが伝えられている。1919年から足掛け3年にわたる洋行で古宇田が日本を留守にしている間、二つの新設建築科が古宇田の教授獲得に動いていた。京都帝国大学と、1年遅れて設立された神戸高工である。京都の方では、外遊中の古宇田に連絡をとりたくても居場所がわからない。そうこうしているうちに、神戸に決まってしまったというのである。1929年には第二代校長に就任。日本建築協会副会長に推されたのもこのころである。以来1945年の退官まで、神戸高工の発展を先導、新制神戸大学工学部への橋渡しに尽くした。

古宇田校長をめぐる逸話には事欠かない。なかでも多いのが、洒落たいでたちと脱線授業である。ある時はキャメルのマントに赤いリボン、またある時は黒上着に縞ズボン、式典には礼服にサーベルを下げて現れ、学生は腰を抜かしたという。建築史の授業では、自らが訳したフレッチャー建築史のプレートを使うのだが、年度の終わりでやっとルネサンスの初めといった具合。遅れているので本筋を急ぐといって始まった授業も、いつのまにかイタリアの横丁をうろうろ。脱線の内容も、外国での見聞から食事のマナーまで多種多様。建築を歴史文化として広く語ろうとしたのだろう。

こういう様相は、昭和10年代後半になると、微妙なニュアンスを帯びてくる。たとえば古宇田が提唱して学校に祀ることになった「高工三社」という神社。その御霊移式に古宇田は神官の正装をまとったという。一方で、国民服を勧め、自らもそれで教壇に立った。またこのころ、しばしば「大楠光精神」という表現を用いたという。尊皇攘夷思想を表す言葉である。時局柄というのも、もちろんあろう。しかし、単純な迎合だったとも思えない。洋行帰りのハイカラ紳士、正装の神官、そして国民服の校長。これらに、古宇田なりの国家主義を読み取ることもできるのではないか。その源は、古宇田の青春期の建築思潮に求められるように思われる。

古宇田が美術学校の若き教授として活動を始める明治末の日本の建築界における一大関心事は、議院建築計画に端を発する「我が国将来の建築様式」であった。西洋建築の学習時代に終わりを告げ、日本独自の様式創造がまたれていたのである。

このころ、東京帝大建築学科の卒業生グループ「和敬会」が、議院建築をめぐって活発に議論していた。伊東忠太、長野宇平治、塚本靖、大沢三之助、関野貞、古宇田、佐野利器、田辺淳吉、大江新太郎、岡田信一郎らである。この顔ぶれは、まさに前述のテーマで行われた建築学会の討論会における対立する見解双方の発表者たちであり、大阪市公会堂コンペへの参加者たちである。彼らは、それぞれに自分の主張を、後のコンペや実作において具体化しようとした。様式論争における古宇田の主張は新様式創造であったが、大阪市公会堂コンペでの落選古宇田案は、西洋風全体構成の細部を日本の木組意匠で満たそうというものであった。この方向性が具体化されたのが、古宇田の数少ない実作「神戸商工会議所」と「神戸松竹座」である。

こうした独特の作品を前に、古宇田が関西に来ていなかったならと、考えずにはおられない。美術学校時代の同僚森井健介は追悼文で、古宇田の神戸高工行きは世間的には栄転だが「美術建築家としての前途をつぶす」ことになり「同情に堪えない」と述べている。高工の校長ともなれば、建築科だけの面倒をみているわけにもいかない。事実、文部省からの予算獲得の手腕もなかなかのものだったようだ。なまじ実務能力に長けていたことが災いしたというべきか。

この間、関西生活は20年あまり。戦後は鎌倉に住み、当地の文化財保護行政に尽力する一方、梵鐘のデザインなどを楽しんだという。確認されている古宇田の建築作品は、すべて失われた。今はささやかな小品から、様式論争時代に青春を過ごした明治人の気概を偲ぶのみである。

（梅宮弘光）

松室　重光（まつむろ　しげみつ）



●略歴
1873　４月26日誕生
1897　東京帝国大学造家学科卒業
　　大学院進学、京都市嘱託技師
1898　京都府技師
1904　京都府を退職
1905　九州鉄道株式会社技師
1908　関東都督府技師
1923　同府　依願免官
　　電気博覧会嘱託
1927　片岡建築事務所に入所
1930　松室建築事務所開設
1934　日本建築協会副会長
1937　１月30日逝去
●作品
1899　京都市武徳殿
1903　京都ハリストス正教会聖堂
1904　京都市水利事務所
1904　京都府庁舎
1918　関東都督府博物館
1918ごろ　関東都督府大連逓信局
1920　大連市役所
1923　大連取引所
1926　大阪電気博覧会施設
1928　武田薬品本社
1931　武田長兵衛邸

松室家は酒の神様として名高い京都の松尾大社の摂社・月読神社の神官を代々務めてきた家系である。松室重光は1873年４月26日、京都府愛宕郡下鴨村に生まれ、第三高等中学校を経て、東京帝国大学造家学科に進学する。同級に片岡安・武田五一がいた（武田は三高でも一緒）。1897年に卒業すると、大学院に進学するが、すぐに在籍のまま京都市の嘱託技師に任用され、翌1898年に京都府技師に正式に採用される。

京都府技師としての松室の職務は二つあった。ひとつは文化財建造物の修理である。明治30年に古社寺保存法（現在の文化財保護法の前身）が公布され、京都府と奈良県には古社寺保存事業のための技師を置くことになった。松室は、奈良県の関野貞と並んで文化財保護事業の先陣を担ったわけである。これとともに、松室は新しい建築の設計にも従事している。京都市武徳殿（1899年）、京都市水利事務所（1904年）、京都府庁舎（1904年）を担当し、また業余には京都ハリストス正教会聖堂（1903年）を手がけている。これらは当時の建築界の水準を大きく超える出来栄えを見せており、松室の才幹を十分にうかがわせる。特に京都府庁舎とハリストス正教会はそれぞれ府県庁舎とギリシア正教会会堂のプロトタイプと位置づけられるものであった。

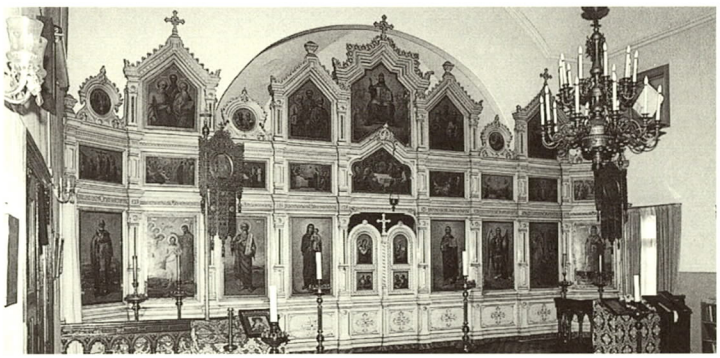
ところが、これらが竣工する直前の1904年８月、部下の公金着服に連座して辞職する。彼は無実であったが結局、京都を去ることになり、九州鉄道技師を経て1908年に関東都督府技師に転じる。松室はここでは存分に能力を発揮し、旅順の関東都督府博物館・大連市役所・大連逓信局などの大作を手がける。

1923年に勇退し、18年ぶりに京都へ戻る。1926年に大阪電気博覧会を取り仕切ったのち、片岡事務所で所長代理的な役割を担い、主に武田薬品関係の依頼を担当した。同社の本社屋（1928年）、武田長兵衛邸（1931年）が代表的なものである。1930年に京都で自分の事務所を持ったが、健康がすぐれず、その多彩な意匠力を発揮できぬまま1937年１月30日没する。人となりは謹厳実直で、また明治人らしい慨世家でもあった。

日本建築協会では1934年に副会長を務めた。（石田潤一郎）



京都市武徳殿



京都ハリストス正教会聖堂

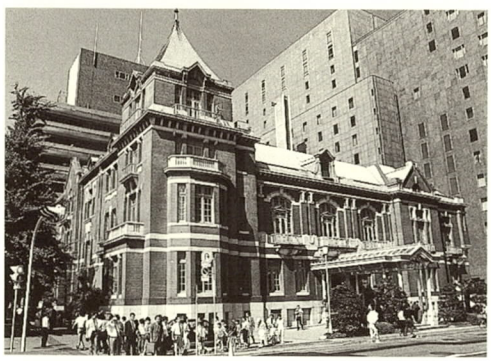


京都府庁舎

松井　貴太郎（まつい　きたろう）



●略歴
1883　1月16日、大阪市に生まれる
1906　東京帝国大学工科大学建築学科を卒業、同期生に岡田信一郎、永瀬狂三、橋本勉、本野精吾、横濱勉らがいた
　　横河工務所に入所、大阪出張所勤務となる
1914　欧米に建築視察旅行をする
1916　東京銀行集会所及び同倶楽部
1917　三越呉服店西館建築
1920　日本工業倶楽部
1928　三信ビル日比谷設計のため米国建築視察旅行
1935　日本建築協会副会長に就任
1943　横河工務所の組織変更により横河民輔退き、中村伝治、横河時介とともに横河工務所の経営に当たる
1946　日本建築協会名誉正会員
1954　日本建築設計監理協会本部理事
　　日本赤十字社顧問（建築）
　　横河工務所代表取締役
1956　黄綬褒章授与
　　日本建築家協会関西支部長就任
1957　日本建築協会理事
1959　大阪府建築士会顧問
1960　日本建築家協会終身正会員
1961　㈱横河工務所会長
1962　11月2日逝去。享年79歳



東京銀行集会所

大阪の堆朱職の家庭に育った松井貴太郎は、六高を経て、明治39年東京帝国大学の建築学科を終えた。彼は同年7月横河工務所に入るが、この年に設けられた大阪出張所へ派遣されている。横河工務所は、同35年三井総本店を仕上げた横河民輔が、翌36年に三井を退社して設立した設計・監理事務所で、以来、松井は大阪、東京を股にかけて活躍する。

松井の建築家としての才能は作品を通して明らかであるが、代表的な例は、大正5年に完成する東京銀行集会所及び同倶楽部に表れている。この建物は丸の内の濠端に一部保存されて残っているが、近世ルネッサンスを基調として、ゴシック風の尖塔をもつ華麗な建築で、松井の意匠力の高さを存分に示した作品である。因みに、この近く東京駅寄りに建つ日本工業倶楽部（大正9年）も横河工務所の作品であり、その室内装飾は銀行集会所の内部と酷似しているので、レベルの高さをうかがうことができる。外観はこれも松井が関与したと言われるが、セゼッション風の趣をもつものである。



三信ビル（日比谷）

大阪での作品は、三井銀行大阪西支店（大正5年）、三井物産大阪支店貸事務所（大正9年）、三井物産大阪支店（大正12年）などがあった。とくに三井物産の貸事務所は6階建で、わが国のオフィス・ビルの先駆的作品である。横河工務所と日本建築協会とのかかわりは、大正11年の協会主催桜ケ丘住宅改造博覧会へのモデル住宅一戸の出品に始まる。

彼の作品にはほかに東京日比谷の三信ビル（昭和3年）が震災復興ビルとして建ち、彼はこのためアメリカのオフィス・ビルの調査に出かけている。さらに戦後になっても彼の創作欲は衰えず、大阪中之島の三井ビル（昭和34年）の設計にも参画した。

松井はまた、浪和会なる中堅建築技術者たちがつくった研究会の機関紙“建築”の編集にも関与し、大正の中ごろ活発な評論活動も行っていた。その評論はかなり手厳しいもので、並み居る先輩、同僚の建築作品をなで斬りにして、なかでも大御所・辰野金吾の代表作の一つに数えられる東京駅をこき下ろす有様であった（「建築」178号、180号、建築時言、大正4年1月、3月号）。辰野金吾は当時まだ存命中であり、松井はそのころ近くで銀行集会所を手がけていて、彼の意気軒昂振りがうかがえる。

旧田中岩吉邸（芦屋）



松井は大正期の終わりごろ、阪神間の芦屋に木造ながらフラット・ルーフのモダーンな自邸を建てていた。東西に細長い敷地に似たスタイルの家を三軒建て、お互いの庭には塀を設けず、開放的な庭園をデザインしていた。

筆者は生前幾度かお目にかかったことがあったが、いつもステッキをもっていて、教養の高い英国型紳士の風采をみせていた。

（坂本勝比古）

安井 武雄（やすい　たけお）



●略歴
1884　2月25日誕生
1910　東京帝国大学建築学科卒業
　　南満州鉄道入社
1919　片岡建築事務所入所
1924　安井武雄建築事務所開設
1936　日本建築協会副会長
1945　野村建設工業株式会社社長就任
1946　安井建設株式会社社長就任
1951　株式会社安井建築設計事務所代表取締役就任
1955　5月23日逝去

●作品
1911　大連税関長官舎
1924　大阪倶楽部
1926　野村銀行京都支店
1927　高麗橋野村ビル
1930　日本橋野村ビル
1931　安井武雄自邸
1932　山口吉郎兵衛邸
1933　大阪ガスビル
1935　野村元五郎邸
1936　満鉄東京支社
1938　京都競馬場
1952　大和紡績本社ビル

安井武雄は、1884年2月25日、千葉県佐倉市に生まれた。父信胤は陸軍軍人。父の転勤に伴い、愛知県豊橋市で少年期を送る。第一高等学校を経て、1907年、東京帝国大学建築学科に進学する。同期に高松政雄・内藤多仲・波江悌夫・木子七郎ら13名がいた。

1910年7月卒業を迎えるが、卒業設計で木造住宅をテーマとしたことが教師連の不興を買って、南満州鉄道工務課への就職を余儀なくされる。満鉄では大連税関長官舎（1911年）、大正天皇御大礼記念奉祝博覧会・満州館（1914年）など6件を手がける。そこではアール・ヌーヴォー的な有機性と東洋風の土俗性をないまぜにした意匠を展開し、その個性の片鱗を見せている。1919年、かつての級友・波江悌夫の誘いを受けて、片岡事務所へ転じる。ここには5年間在籍して大阪倶楽部、野村銀行本店などを担当する。大阪倶楽部には安井武雄の発想の原形質がそのままかたちになっている。すなわち軀体における肉厚の構築性と、細部装飾における独創性である。

1924年4月、満40歳の安井武雄は片岡事務所を辞し、部下の川村種三郎らとともに安井武雄建築事務所を開設する。

野村財閥の創始者・野村徳七の後援にもとづいての独立であった。初期の野村銀行京都支店（1926年）、高麗橋野村ビル（1927年）などでは装飾性と組積造性が強調されていたが、日本橋野村ビル（1930年）を画期として極力装飾を排除し、幾何学形態化を進める。大阪ガスビル（1933年）にいたって、モダニズムの語法を個性的に展開することに成功する。その境地を彼は「使用目的及び構造に基づける自由様式」と呼んだ。その後も満鉄東京支社（1936年）、京都競馬場（1938年）などの秀作を残すが、軍人嫌いでアメリカ嫌いの安井は戦中戦後期には辛酸をなめる。1952年の大和紡績本社ビルで健在ぶりを示すが、1954年5月、心臓弁膜症を起こして病床に臥し、1955年5月23日、ついに世を去る。71歳であった。

1936年に日本建築協会副会長を務め、1955年4月には名誉会員に推挙されている。　（石田潤一郎）



大阪倶楽部



大阪ガスビル（左側の南館が安井武雄設計）



大和紡績本社ビル

中澤 誠一郎（なかざわ　せいいちろう）



●略歴
1896　1月24日京都府亀岡市に生まれる
1916　旧制第三高等学校卒業
1920　東京帝国大学工科大学建築学科卒業
　　内務大臣官房都市計画課雇
1921　大阪府警察技師
　　大阪府技師
1924　愛知県警察部建築課長
1932　大阪府警察部建築課長（三代目1939年まで）
1937　京都帝国大学講師（池田實の後任、建築行政担当　1939年まで）
1938　日本建築協会副会長（1939年まで）
1939　内務技師、計画局第二技術課長
1941　内務省防空局施設課長
1942　内務省防空研究所長
1949　大阪市立大学理工学部教授（1956年定年）
1950　大阪府建築審査会委員会会長代理（1956年まで）
1955　近畿都市学会会長（1970年まで）
1957　株式会社中澤建築事務所開設（1976年まで）
1958　大阪工業大学客員教授（1977年まで）、京都工芸繊維大学講師
1966　勲三等瑞宝章を授けられる
1986　8月29日逝去

中澤誠一郎は、大正8年市街地建築物法と都市計画法の公布に伴って担当官として大阪府に赴任する。そのころのことを中澤は、「僕が学校を出たのは、大正9年7月、大正デモクラシーの華やかな頃で、卒業式の日の門前には、資本論やらクロポトキンなどの立て看板がズラリと並んでいた。僕らも河上肇とかエンゲルスの住宅問題入門などは一応読んでいました。学生時代、僕は余り体が丈夫ではなく、出席率もそんなによくなかった。製図も上手ではなかった。卒業のとき、当時、建築行政は警察部がやっていましたが、東京と大阪で一人ずつ、合計二人の予算がつき、一人は森田慶一君が決まり、もう一人が決まらなかった。ちょうど、病気で学校を休んでいて、出ていったら、学校にいるのと同じくらいいろんな資料があり、勉強できるところだといって、内務省を内田先生にすすめられた。これは面白いと思って、内務省に決めた。そして森田君が東京に残り、僕は大阪の警察部に赴任した」（建築と社会、「歴史に学ぶ・インタビュー都市計画の先輩に聞く」昭和55年1月）と語っている。

中澤は大阪で建築法規の普及、指導が一段落すると愛知県警察部に転任するが、昭和7年大阪府建築課長（三代目）として再び大阪で活躍する。特に中澤は、わが国はじめての空地地区を指定するなど美観地区、高度地区など市街地環境形成に取り組むとともに、生涯の研究テーマの一つでもある都市防災に関して先駆的な業績を残す。中澤は愛知県時代から都市防災に関する論文「名古屋都市計画防火地区」（建築と社会　昭和5年9月）、「大火に對する都市の防備」（建築と社会　昭和9年7月）、「都市計画より地方計画」（建築と社会　昭和11年8月）、「都市計画界の回顧と展望」（建築と社会　昭和16年1月）、「防火改修業當面の問題」（建築と社会　昭和16年3月）などを発表した。内務技師、計画局第二技術課長に就いたとき、大阪駅前で実物を使った大火災実験（昭和15年1月8～10日）を行うなどの徹底ぶりは高く評価されている。中澤が都市防災に打ち込んだのは「防火地区の完成に熱心な片岡博士は政府のフガイナサを痛烈に非難されていた。私も、直接つかまって、防火地区を、即時都市計画事業として完成することに努力するようとの話をきかされたも一再ではなかった」（「都市不燃化の思ひ出と将来」建築と社会　昭和27年8月）、片岡安の影響もあったと推察される。

中澤は行政官として着実に実績をあげるかたわら、内務省防空研究所長を退官後、昭和21年「建築敷地の零細化と其の防止策（特に木造住宅の建築敷地について）」住宅営団『研究並調査果報・第1号』と題する学位論文をまとめるなど、多数の論文を発表する学者肌の人であった。中澤は戦前は京都帝国大学、戦後は大阪市立大学、京都工芸繊維大学、大阪工業大学で教鞭に立つなど教育者として数多くの学生を育てるとともに、晩年『都市学と総合アセスメント』（昭和57年8月）をまとめ都市問題解決の新しい手法を発表し、専門家に発想の転換を促した。

中澤は都市計画研究の第一人者であったが、バイオリン、民謡を得意とし、好きなお酒を嗜むと佐渡島の民謡相川音頭をよく謡っていた。

（和田康由）

●業績
・学位論文
建築敷地の零細化と其の防止策（特に木造住宅の建築敷地について）
住宅営団『研究並調査果報・第1号』　昭和21年
・建築敷地の零細化と其の防止策〔要約〕　都市計画学会『都市計画・第18号』　昭和32年5号

●論文・著書
・「名古屋都市計画防火地区」　『建築と社会』第13輯第9号　日本建築協会　昭和5年9月
・「大火に對する都市の防備」　『建築と社会』第17輯第7号　日本建築協会　昭和9年7月
・「都市計画より地方計画」　『建築と社会』第19輯第8号　日本建築協会　昭和11年8月
・「都市計画界の回顧と展望」　『建築と社会』第24輯第1号　日本建築協会　昭和16年1月
・「防火改修業當面の問題」　『建築と社会』第24輯第3号　日本建築協会　昭和16年3月
・「都市不燃化の思ひ出と将来」　『建築と社会』第33輯第8号　日本建築協会　昭和27年8月
・『都市学と総合アセスメント』　昭和57年8月発行ほか
・「特集　80年代の都市と建築」　『建築と社会』第61輯第1号　日本建築協会　昭和55年1月

坂　静雄（ばん　しずお）



●略歴
1896　東京に生まれる
1921　東京帝国大学工学部建築学科卒業
1922　同大学院退学。京都帝国大学着任、助教授
1933　同教授
1939　日本建築協会副会長（1940年12月まで）
1947　日本建築学会副会長
1950　神戸大学教授（兼任）
1959　京都大学定年退官、同名誉教授
1964　日本建築総合試験所副理事長、所長
1971　日本学士院会員
1974　日本建築総合試験所理事長
1989　逝去

鉄筋コンクリート技術が、日本で紹介され、初歩的な応用が始まるのは、明治20年代末頃。その後、この新技術は10年きざみで急速に発展してゆく。1905年に、東京帝国大学の若手講師でこの技術の開拓者となる佐野利器が、鉄筋コンクリート構造の講義を始めたことは、この時期に理論的研究が本格化し始めたことを物語っている。大正期にはいって、この技術は次第に定着し、とくに関東大震災以降、耐震技術として活発な研究状況が生まれてくる。

佐野の講義を聴いた学生のなかから、研究の次代を担う若手研究者が輩出する。東京帝大で佐野の跡を継ぎ後には総長となる内田祥三、創立間もない早稲田大学で耐震構造研究を発展させ、戦後は東京タワーの設計でも知られる内藤多仲らである。そして、さらにひとまわり若い研究者として草創期の京都帝国大学に、最新の鉄筋コンクリート構造学をもたらしたのが坂静雄である。

赴任した坂は、助教授として構造演習や材料論を講ずる一方、京都帝国大学営繕課の技師を兼務し、学舎の設計にもかかわる。折しもこの時期は、1889年に発する第三高等中学校以来整備拡充が続けられてきた京大キャンパス計画の歴史において、建築学科が開設されその主任教授・武田五一が営繕課の設計顧問に就任して、若手の技師を抜擢して意匠・構造両面において学舎の建物に新しい方向性を打ち出す時期であった。つまり、ゼツェション、表現主義、モダンスタイル風意匠と鉄筋コンクリート構造である。坂は、京大の顔ともいえる時計台のある本部本館をはじめ、少なからずの鉄筋コンクリート造学舎の構造設計を担当している。新技術としての定着期とはいえ、それまでの学舎建築の多くが煉瓦造と木造であったから、新進の構造学者としての坂に期待がかかったのであろう。

坂の建築構造学者としての業績は広範にわたっている。初期において注目されるのは、鉄筋コンクリート長柱に関する研究（1924年）や長柱の振動を考慮した限界荷重に関する研究（1931年）である。これらは、大正時代には鉄骨造長柱に関する研究が主であったのが、関東大震災を契機として、信頼性があり、より高層で複雑な鉄筋コンクリート構造が要請されたことを背景としている。またこの時期に、先導的な研究者たちによって実際的な応用のための各種の計算図表が開発されるが、坂は許容応力度と断面力を与えて容易に断面決定が行える計算図表を提案発表している（『偏心荷重を受ける鉄筋コンクリート材の応力計算法及び断面決定法』1928年）。こうした研究に引き続き、1930年には高層ラーメンの解法に関する著書『高層架構論』では、後に本格的に展開するリミット・デザイン（終局耐力設計法）の思想を示唆し、さらに架構における耐震壁の横力負担に関する研究で日本建築学会賞を受けている（1937年）。また、欧米で展開されつつあった平面・曲面版構造、いわゆるシェル構造に関しても早くにその理論を紹介（『平面と曲面の構造』1937年）。戦後には、材料としての鉄筋コンクリート構造のクリープ性状を解明するなど理論の精緻化を進めると同時に、プレストレストコンクリート構造の材料や設計・施工法の開発にも力を注いだ。そして、こうした研究は、京大退官後に請われて財団法人日本建築総合試験所の設立に参画し初代所長などの要職を通じて、さらに社会的な広がりとなっていったのである。

坂の厳格な性格と言動は、多くの回顧や証言が指摘するところだ。坂は、1935年に書いた文章「理屈から産れた構造」（『建築と社会』第18巻第8号）で、折板構造の将来を語るなかで、それまでの鉄筋コンクリート構造では理論化はいつも遅れてついてきたが、これからは理屈から構造がうまれるのだと、「素晴らしい理屈っぽさ」を力強く称揚している。まさにこの表現が、彼の研究者としての人生を象徴しているように思われる。

（梅宮弘光）

今林　彦太郎（いまばやし　ひこたろう）



●略歴
1894　1月27日、京都府宮津町に生まれる
1912　第三高等学校大学予科第二部卒業
1915　東京帝国大学工科大学建築学科卒業。同期に久留弘文、永沢毅一、野田俊彦、三浦耀
1916　大阪橋本組に入社
　　松田亥作建築事務所へ入所
1917　大阪市技手となり、大阪市庁舎新築の設計、監督に従事
1919　大阪市技師
1921　大阪市庁舎を完成させて辞任
1922　大林組に入社
1924　大林組設計部長事務取扱い
1939　住宅部部長兼務となる
1940　日本建築協会副会長となる
1944　建築技術長となる
1945　本店建築部長
1946　大林組辞任
1948　大阪瓦斯嘱託
1971　3月25日逝去　享年79歳

●作品
1921　大阪市庁舎（片岡安、牛村喜勇らと設計監理に当たる）
1929　大阪歯科医学専門学校、その他、大林組が設計した建物の指導に当たる

今林彦太郎は明治27年京都府宮津の旧家に生まれ、三高を経て大正4年東京帝国大学建築学科を終えた。このクラスには“建築非芸術論”を唱えた野田俊彦、京都大学建築学科で日比教授の後をついだ三浦耀教授、神戸高工の永沢毅一教授らがいた。

今林は最初、大阪橋本組に入るが、すぐ先輩の松田亥作の事務所に移り、翌6年片岡安の薦めで大阪市庁舎新築の設計監督に従事することになった。このとき今林は片岡安の太っ腹な温かい人柄に触れると同時に、仕事や時間に厳しい側面にも接したと語っていた。

今林は同8年大阪市技師となり、同10年市庁舎の落成後辞任して翌11年大林組に入り、同13年には設計部長事務取扱となった。

当時の大林組は総合請負業者として全国的な地位を確立していたが、設計部門についてはいまだ弱体であった。今林は初代設計部長としても活躍する。今林が入社した同じ年に小田島兵吉（大正11年東大卒）も入社して、設計部門の強化が図られた。今林は小柄な体軀であったが、気さくでひょうひょうとした人柄は親しみ深く、多くの友人に恵まれていた。なかでも伊藤正文、古塚正治、小川安一郎、永沢毅一らとの交友は深かったようだ。生前、筆者も親しく関西の建築界の動きや多くの建築家たちの動静について語ってもらったことがある。

大正13年ごろ阪神電鉄芦屋駅に近い深江に自邸を建て、筆者も幾度か招かれたことがあった。大変几帳面な性格で、内外の文献を丹念に分類整理されていたのが印象的であった。

また彼は昭和34年から40年にかけて協会内に設けられた近代建築調査委員会（委員長：滝沢眞弓、幹事：政岡基次、林野全孝）の有力メンバーで、筆者もその末席を汚していたが、協会設立当初の裏話など、実に克明に記憶していた人であった。

彼が語った片岡安へのエピソードとして、彼が大阪市庁舎の現場にいたころ、夏休みに郷里への墓参を申し出たところ、“郷里に帰るなら懐が寒くてはどうにもならないだろう”として、金一封を貰ったことがあったという。片岡安はそんなおおようで、親分肌のところがあった。

今林は昭和15、16年度協会の副会長を務めた。同20年大林組本店建築部長就任を最後に、辞任するが、その間、設計部長、住宅部長（兼）、建築技術長、本店建築部長、資材部長（兼）を歴任し、理事、監査役、取締役の地位にあった。また設計部長として昭和2年にできる大林組本店、大阪歯科医学専門学校、小田島兵吉の上司として、近鉄上本町駅、大阪歌舞伎座、甲子園野球場、木村得三郎主任の先斗町歌舞練場を指導するなど、文字通り大正、昭和戦前期の大林組の中枢にあって、活躍した。同23年から大阪瓦斯の嘱託として、同社の営業所、出張所、工場、社舎等の設計監督に当たった。

なお、作品を特定しがたいため、彼が副会長時代にしたためた片岡会長への一文を掲載する。　（坂本　勝比古）

副會長　今林彦太郎

本會々長片岡博士、此度命を受けて遠く伊太利國へ經濟使節として派遣せられ花の四月十日神戸出帆榛名丸にて斯の地へ鹿島立ちせられんとす、誠に慶賀の至りにて此名會長を戴く吾々も亦不勘光榮とする處なり。會長は十數年前より私生活を殆ど放擲して本會を初め工業界諸團體の長として又商工會議所副會頭に或は諸會社重役、信用組合長等、財界にも重きをなし最近は專ら公人會のため貢獻所謂二六時中席の溫る暇なく東奔西走活躍せらる、我建築界出身として社者として稀に見る人格識見共に高く關西に其仁ありとは豫而より東西相共に認むる處なりしが果せるかな政府は曩に會長を煩すに資本家代表としてゼネヴァに派し、今亦日伊親善のため經濟使節として關西代表の重任を以つてす、誠に當を得たる人選にて申分なき代表なるを信ずるものなり。素より使命の內容は吾人の知悉する所に非ざるも必ずや充分にその重責を果され効を納めて目出度歸朝せらるゝ事を確信するも若干老域に達せられたるの身を以つて長途の旅行に如何やと微ながら憂を抱くものなるが既に數度に亘り米國に歐洲に渡洋經驗を有せられ加ふるに平素より健康に十二分の注意をせられ居り壯者を凌ぐの慨あり斯の政治家の七十歲以上の人多きに比すれば會長も壯年の組なるべく氣を案じて可なるべきか、吾々は目出度無事任務を果され一日も早く其潑剌たる英姿に相まみゆる日を待望するものなり。

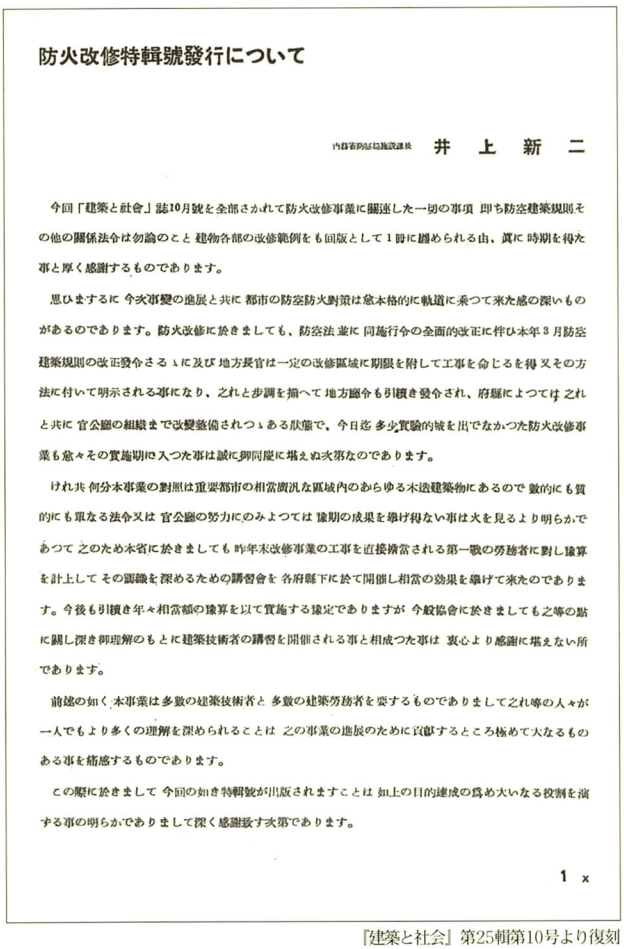
井上 新二（いのうえ　しんじ）



●略歴
1894　1月29日大阪に生まれる
　　旧制第三高等学校卒業
1921　東京帝国大学工学部建築学科卒業
　　陸軍省
　　内務省
1931　愛知県建築課長
　　大阪府営繕課
1939　大阪府建築課長（中澤誠一郎の後任、四代目、1942年まで）
1941　住宅営団理事
　　日本建築協会副会長（1942年まで）
1942　内務省防空局施設課長
1947　大阪市建築局長（初代）
1948　日本建築協会副会長（1950年まで）
1949　摂南工業専門学校理事
1951　1月11日逝去

井上新二は、建築行政官として、もう一つは構造学者として活躍していた。

井上は行政官として都市防火に取り組み、「防火改修の緊急性」（「建築と社会」昭和16年3月）、「防火について」（「建築と社会」昭和16年9月）、「都市防火の根本施策」（「建築と社会」昭和16年6月）、「防火改修特輯号発行に就いて」（「建築と社会」昭和17年10月）の論文を発表し、特に昭和17年『建築と社会』の場を借りて「防火改修特輯号」と題して10月号を企画している。内務省防空局施設課長の井上は、その企画の目的を、「思ひまするに今次事變の進展と共に都市の防空防火對策は愈本格的に軌道に乘って來た感の深いものがあるのであります。防火改修に於きましても、防空法並に同施行令の全面的改正に伴ひ本年3月防空建築規則の改正發令さるゝに及び地方長官は一定の改修區域に期限を附して工事を命じるを得又その方法に付いて明示される事になり、之れと歩調を揃へて地方廳令も引續き發令され、府縣によつては之れと共に官公廳の組織まで改變整備されつゝある狀態で、今日迄多少實驗的域を出でなかつた防火改修事業も愈々その實施期に入つた事は誠に御同慶に堪えぬ次第なのであります」と語り、防火建築規則の改正（昭和17年3月27日内務省令第15号）、防火改修規則（昭和17年3月27日内務省令第16号）の施行の実施と普及を行っていた。



防火改修特輯號發行について

内務省防空局施設課長　井　上　新　二

今回「建築と社會」誌10月號を全部さかれて防火改修事業に關連した一切の事項　即ち防空建築規則その他の關係法令は勿論のこと　建物各部の改修範例をも回版として1冊に纏められる由、眞に時期を得た事と厚く感謝するものであります。

思ひまするに今次事變の進展と共に　都市の防空防火對策は愈本格的に軌道に乘つて來た感の深いものがあるのであります。防火改修に於きましても、防空法並に同施行令の全面的改正に伴ひ本年3月防空建築規則の改正發令さるゝに及び地方長官は一定の改修區域に期限を附して工事を命じるを得又その方法に付いて明示される事になり、之れと歩調を揃へて地方廳令も引續き發令され、府縣によつては之れと共に官公廳の組織まで改變整備されつゝある狀態で、今日迄多少實驗的域を出でなかつた防火改修事業も愈々その實施期に入つた事は誠に御同慶に堪えぬ次第なのであります。

けれ共何分本事業の對照は重要都市の相當廣汎な區域内のあらゆる木造建築物にあるので數的にも質的にも單なる法令又は官公廳の努力にのみよつては豫期の成果を擧げ得ない事は火を見るより明らかであつて之のため本省に於きましても昨年末改修事業の工事を直接擔當される第一線の勞務者に對し豫算を計上してその認識を深めるための講習會を各府縣下に於て開催し相當の効果を擧げて來たのであります。今後も引續き年々相當額の豫算を以て實施する豫定でありますが今般協會に於きましても之等の點に關し深き御理解のもとに建築技術者の講習を開催される事と相成つた事は　衷心より感謝に堪えない所であります。

前述の如く本事業は多數の建築技術者と多數の建築勞務者を要するものでありまして之れ等の人々が一人でもより多くの理解を深められることは　之の事業の進展のために貢獻するところ極めて大なるものある事を痛感するものであります。

この際に於きまして今回の如き特輯號が出版されますことは　如上の目的達成の爲め大いなる役割を演ずる事の明らかでありまして深く感謝致す次第であります。

1 ×

『建築と社会』第25輯第10号より復刻

戦後、井上は大阪に戻り、大阪市の復興局を改変した建築局の初代局長に就いた。焦土大阪の復興のために活躍するとともに、戦後初の大相撲本場所（秋場所）を大阪福島公園仮設国技館での開催（昭和23年10月15日）や、大阪プール日米対抗水泳大会（昭和25年8月14日）開催のために働いた。また、住宅不足の解消を図るために、公営住宅建設システムの整備の一環として西成区岸の里に試験住宅を50戸建設（昭和23年12月）するなどに尽力した。

井上は行政官の執務のかたわら、建築構造計算の著書『鉄筋混凝土構造計算　表と図表　第一　床版』をシリーズものとして大正末から昭和初めまで5冊執筆したり、『建築パンフレット』（大正末）15冊を編集したり、「鉄筋混凝土實用計算講座」（昭和4年）を開くなどの活動をしている。

井上は浜寺の水練学校で泳ぎ、古代日本泳法を得意とし、相撲が好きであった。（和田康由）

●著書
『鉄筋混凝土構造計算　表と図表』　発行所「表と図表」研究會
　第一　床版（大正14年1月15日）　第二　矩形梁（大正15年3月10日）　第三　T形梁（昭和2年11月1日）　第四　柱（昭和3年12月1日）　第五　基礎（昭和4年9月25日）
・工学士井上新二編『建築パンフレット』（発行所「表と図表」研究會　大正末）
　第一輯　鉄筋鉄骨構造（全十四冊）
　第二輯　特殊建築設計法（全十一冊）
・工学士井上新二講「鉄筋混凝土實用計算講座」（昭和4年4月～12月）

松本 儀八（まつもと　ぎはち）



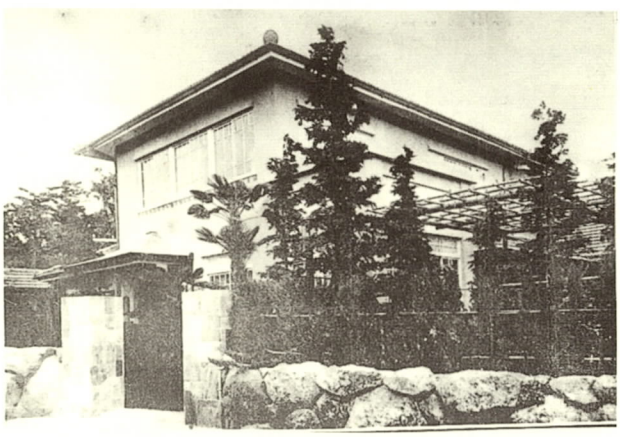
●略歴
1885　12月３日佐賀市高木瀬町に生まれる
1901　佐賀県立工業学校（土木建築）入学
1904　京都高等工芸学校（図案科）入学
1908　京都高等工芸学校卒業後、広島県立工業学校教諭
1912　大阪府立西野田工業学校へ転任
1925　株式会社大林組に入社
1928　大林組住宅部長
1936　内外木材工業株式会社代表取締役
　　大林組住宅部顧問
1956　兵庫県住宅建設株式会社取締役社長
1963　株式会社三木組相談役
1973　８月31日逝去、享年87歳

●建築作品・業績
1919頃　自邸
1925　黒田邸、長谷川邸（神戸住吉）
1929　浜甲子園健康住宅地の開発（～1935）
1953　信貴山朝護孫子寺本堂
●著書・論文
1920　『最新和洋住宅別荘建築法』武田五一と共著発行
1971　自伝『せせらぎ』
1922　「子供室と其の家具類の一考察」
　　『建築と社会』５輯９号
1926　「統計の上から見た住宅建築の傾向」
　　『建築と社会』９輯３号
1932　「住宅地経営に就て」（『建築と社会』15輯４号）

大阪北浜に本店を構えていた大林組は昭和３年、他の建設会社に先駆けて住宅部を発足させ、住宅の設計施工に積極的に取り組む組織を整えている。松本儀八はこの住宅部創設を前にした大正14年に入社し、昭和11年まで初代住宅部長として活躍した。その間、600棟に上る住宅の設計、後進の指導育成に当たり、邸宅建築における大林組の名声を高めた。

その中で特筆すべき事業に、阪神電鉄とともに昭和４年に着手した浜甲子園住宅地の開発がある。海浜に接する５万６千坪を住宅地として整備し、建築販売したもので、健康住宅設計コンペと当選案の建築と博覧会の実施、加えて幼稚園や倶楽部を住宅地の一角に建てて寄贈するなど注目される住宅開発であった。その事業の終盤も近い昭和11年、松本は大林組の工作所より独立した内外木材工芸社の代表取締役として転任し、昭和23年までその経営に当たっている。

松本は晩年の昭和46年に『せせらぎ』と題した自伝を残している。小冊子であるが、数葉の風景画や吾山という雅号をもって嗜んでいた俳句を織り交ぜた趣味の表れたものである。それによると、郷里の佐賀県立工業学校を経て、明治37年に京都高等工芸学校図案科に入学し、師となる武田五一に出会う。この学生時代に国の奨学金を得ていたため、卒業後の教職が義務づけられており、広島県立工業学校、大阪府立西野田工業学校での20余年の教員時代を経験している。その時期、武田の自邸（京都、大正９年）の実施設計を担当し、また武田の指導で松本が実質的に著したといわれる『最新和洋住宅別荘建築法』を出版するなど、師弟の関係を密にしていた。住宅建築に広く視野を広げていた松本に、大林組副社長の大林賢四郎は白羽の矢を立てたのであろう。



長谷川峯造邸（1925年）『建築と社会』大正14年12号



浜甲子園倶楽部（1931年）『せせらぎ』より

ところで先に触れた住宅部の担当業務は住宅、集合住宅、旅館、ホテル、社寺の設計施工、そして住宅地の開発等であったが、部長に就いた松本が尽力したのは、当時大林組が指向していたスパニッシュデザインを一層展開させたことと、そして建築主の意向、趣味に沿って幅広く良質の近代住宅を生産することであった。

昭和10年、大林組傍系会社の内外木材工芸社が設立され、翌11年に松本は住宅部長を２代目の河合貞一郎（大正７年、東高工卒）に託し、その代表取締役に就いた。松本は直ちに社名を内外木材工業と改めて業務の拡張を図った。そこでの仕事には朝香宮邸、新大阪ホテルの内装家具工事など数多いが、戦中の一時期、三菱本社と提携して木製飛行機の開発に当たったこともあった。やがて終戦を迎えて、業務建て直しを果たした昭和23年に勇退した。

その間の昭和14年より日本建築協会監事、そして昭和17年より昭和21年まで副会長を５期にわたって務めている。戦後は、大阪府家具商工業協同組合理事長、日本家具協会副会長など多くの公職を果たし、昭和28年には信貴山朝護孫子寺本堂再建工事の設計工事監督に当たり、その要職を数年にわたって務めている。その後、二葉屋装備工業、兵庫県住宅建設、三木組、大橋化学工業での職務を果たし、昭和48年８月31日に享年87歳の長寿にて他界した。　（山形政昭）

池田 宮彦（いけだ　みやひこ）



●略歴
1892　11月7日生まれ
1915　名古屋高等工業学校卒業
　　住友総本店営繕課に就職
1933　長谷部・竹腰建築事務所に改組
1944　住友土地工務株式会社常務取締役
1946　株式会社鴻池組常務取締役
　　社団法人日本建築協会副会長
1948　株式会社大阪設計事務所設立。代表取締役社長
1963　株式会社池田宮彦設計事務所設立
　　代表取締役社長
1970　4月7日逝去

●論文・著作
・「大阪の地盤と杭打基礎工事」
　（『建築と社会』1928年5月号）
・「地震国に建てる家と住む人の覚悟」
　（『建築と社会』1929年2月号）
・「鋲接合に代わるべき電弧熔接に就て」
　（『建築と社会』1930年9月号）
・「工場建築の床と屋根」（『建築と社会』1930年10月号）
・「鉄骨電弧鎔接工事実施上の注意並検査の方法」
　（『建築雑誌』1932年2月号）
・「建築事務所に於ける設計事務」
　（『建築と社会』1937年10月号）
・竹腰健造特集「旅の思い出」（『建築と社会』1959年1月号）

池田宮彦は1915年、名古屋高等工業学校を卒業するとすぐ、住友総本店営繕課に就職した。住友総本店の設計に際し、1922年9月16日から翌年10月26日にかけて、竹腰健造とともに渡米し、現地の事情を視察している。竹腰は池田より4歳年上だったが、池田の方が先に入所し、経験も豊富であった。渡米時には、住友総本店の鉄骨加工の請負がベスレヘム鉄骨会社に決定していたので、そのショップドローイングを手伝っていたランゲ鉄骨設計事務所で設計に携わった。この経験は、当時まだ揺籃時代を出ていなかった日本の鉄骨設計に大いに役立った。住友総本店の竣工した年以降、住友総本店営繕課は、1933年長谷部・竹腰建築事務所、1944年住友土地工務株式会社と改組している。池田はその中で主に技術面をリードし、かつ最高幹部のひとりとして設計事務所の経営や若手育成に尽力した。ところで技術者としての彼の代表的な功績は、鋼構造物の接合への溶接の使用である。溶接による接合は当時日本で行われていた鋲接合よりも、かなりの鋼材が節約でき、加工手間が楽だった。欧州ではすでに試みられていたが、池田は日本で早くからこの点に着眼、研究を進め、汽車製造大阪工場動力室などに応用している。

池田は設備、環境、防災、構法と幅広い分野で活躍した技術者として知られているが、書かれた論文には単に技術者という枠組みには収まりきらない部分が見られる。特に日本建築協会の災害委員を務めていた昭和初年の論文は、災害を地形や歴史的な観点から述べようとしており、興味深い。「大阪海岸線の変遷と西大阪の地盤」（『建築と社会』1927年7月）では、大阪市にも被害の及んだ奥丹後地震の教訓から、とくに被害のひどかった埋立地について、その歴史的変遷を追いながら考察している。また、その一部をさらに詳しく掘り下げた「元禄年間に於ける大阪市の埋立工事の概要」（『建築と社会』1927年9月）では、“大坂”の治水工事や埋め立てが集中的に行われた元禄年間に焦点を当て、河村瑞賢の指揮した安治川の開削や、それに伴う川口の新田開発など、埋め立て地の形成を述べている。歴史的変遷を追いながら地盤や埋立地形成を述べるという、さながら歴史系の論文を思わせる記述である。

ところで、こうした建築技術にかかわってきた池田の、意匠的な好みはどのようなものだったのだろうか。『建築と社会』が1927年1月から5月にかけ、4回にわたって行った「吾が家を建てるには」というアンケート形式の連載では片岡安、武田五一といった当時の有名建築家をはじめ、当時の『建築と社会』によく登場していた面々が顔をそろえ、池田の名前も見られる。これによれば池田の「吾が家」の理想は、山間部に建つ木造和風二階建てとし、「書斎ハ様式応接室ハ折衷、但日本間ヲヤ、天井高クシ椅子テーブルヲ設クル程度客間ハ日本式」と記している。また室内の好みは「木材ノ生地ノママニテ壁ハ鶯茶灰色又ハ白」と、全体に簡素で自然な趣を尊重していたようである。ただ「台所と便所の設備」は、「瓦斯、電気、水道ノ設備ヲ要シ、タイル貼リトス便所ハ洗浄式」とほかの回答者に比べてこだわりが見られる。

終戦とともに、池田は長く勤めた職場を離れ、1946年に鴻池組常務取締役に就任した。また同年、日本建築協会の副会長にも就任している。その後も1948年大阪設計事務所の設立、1963年池田宮彦建築事務所の設立と、主に設計事務所の代表者としてその運営に手腕を発揮した。

（酒井一光）

参考資料　小西孝夫『北浜五丁目十三番地まで』（株式会社日建設計　1991）



1923年、米国よりの帰途エンプレス・オブ・オーストラリア号甲板にて。
右が池田宮彦、左が竹腰健造
『建築と社会』1959年1月号

錢高 輝之（ぜにたか　てるゆき）



●略歴
1905　10月９日、岡山県上道郡富山村に屋葺友次郎の三男として生まれる
1930　東京帝国大学経済学部卒業。神戸海上火災保険に入社
1931　姫路野砲第10連隊に入隊
1934　錢高組に入社、錢高久吉の長女善子と結婚
1936　錢高組取締役に就任
1945　錢高組取締役社長に就任
1947　日本建築協会副会長に就任
1962　大阪建設業協会会長に就任
1980　錢高組会長に就任
1984　11月22日急性肺炎で逝去、享年80歳

●作品（錢高組の作品）
・新旧２代の大阪市庁舎（1921年、1985年第Ⅱ期工事）の施工を担当
・堂島川可動堰（水晶橋）（1925年）
・渡辺橋（1927年）
・肥後橋（1927年）
等、大阪を代表する近代建築や橋梁の工事を、大正期より現代に至るまで数多く担当している。

錢高組は、明治20年に大阪で最初に創業した建設会社である。工場・倉庫等の施設や軍関係施設の建設工事を皮切りに、順調に発展を遂げ、大正期には様々な都市建築の施工を担当した。大正10年に中之島に竣工した旧大阪市庁舎は、大正期の大阪を代表する近代建築であった。また「橋の錢高組」とも呼ばれ、先進的な技術で多くの橋を架けている。関東大震災後、東京に新たに架けられた勝鬨橋や吾妻橋などの近代的な橋梁の多くが、錢高組の手によるものであった。水の都・大阪には錢高組による橋は多い。堂島川に架かる堂島川可動堰（水晶橋）は大正15年に竣工し、今も川面に優美な姿を映し、中之島の景観形成に寄与している。



堂島川可動堰（水晶橋）



大阪市庁舎（第Ⅱ期工事部分）の施工

錢高輝之の入社は昭和９年で、錢高組が得意の分野を生かして大陸への進出を果たしたころである。略歴から明らかなように、輝之は経営の専門家である。大正期に技術的な基礎を固めた錢高組が近代経営へ転換しようとする時期に必要な人材であった。昭和11年にはヨーロッパへ建設業界の視察に約１年間出かけ、その後、戦中には自ら先頭に立って、外地での難しい事業をこなした。昭和20年８月の敗戦によって軍事関係の建設工事が多かった建設業者は大きな混乱に見舞われた。錢高組も例外ではなかったが、同年12月には輝之がいよいよ社長に就任し、新時代にふさわしい新しい、錢高組の基礎をつくった。戦後の大阪での、大きな出来事の一つに1970年万博の開催があるが、このとき錢高輝之は、大阪の建設業界の代表として、万博会場建設工事のスムーズな進行に大変尽力した。

戦前の協会初代会長・片岡安が、個人を基礎とした、倶楽部的な会をイメージしていたのに対し、第２代竹腰健造会長は職業別グループとしての協会像を描いていたそうだ。昭和22年に定款の改正を行い、個人会員に加えて団体会員、つまり企業も正会員とした。竹腰のそのような構想の下、大阪の建設業の草分けである錢高組の社長が副会長の一人に就任したのであろう。錢高輝之が副会長を務めたのは２年間で、そう長くはなかったが、それ以来、協会の役職者には必ず企業人が含まれている。厳しい社会状況の中で新しい協会をつくろうとしていた時期であり、そこで錢高輝之をはじめとする企業人が協会に果たした役割は大きいと言えよう。

（橋寺知子）

中西　六郎（なかにし　ろくろう）



●略歴
1900　大阪に生まれる
1922　早稲田大学卒業。大阪市営繕課勤務
1926　大阪市退職。欧米に渡航。フランスでアンリ・ソヴァージュ事務所勤務
1929　帰国
1930　漫欧、バウハウスで講演
1931　摂南工業専門学校講師
1933　設計事務所開設
1940　樟蔭女子専門学校講師
1947　日本建築協会副会長
1959　大阪府建築士会副会長
1964　死去

●主要作品
タイガー計算機株式会社社屋
和歌山文化ニュース館
同志社今出川幼稚園
紀南病院
海南市民病院
宝塚病院

中西六郎は、1920年代の関西におけるほとんど唯一の近代主義建築運動である日本インターナショナル建築会（1927年結成）のオリジナル・メンバーのひとりである。ほかには、自営建築家の上野伊三郎、中尾保、大阪市営繕課の技師伊藤正文ら関西出身の早稲田大学同窓生に、京大出身でやはり大阪市営繕課の新名種夫、そして顧問格でかれらより一まわり年長の京都高等工芸学校教授・本野精吾らであった。中西の１年後輩である黒田茂の回顧によると、中西や中尾は早稲田のキャンパスでも「声が大きく関西弁丸出し」だったというし、晩年の上野は、中西の追悼座談会で当時を回顧し、建築運動は関西が先鞭をつけたのであって「東京は２・３年ぐらいおくれている」と述べていることからすると、日本インターナショナル建築会結成の背景には、その名に反して関西ナショナリズムがあったのかもしれない。

中西の経歴で目をひくのは、1920年代後半の豊富な外遊経験である。日本インターナショナル建築会結成時には外遊中であったが、彼の参加が要請されたのも、こうした豊かな海外経験と無縁ではあるまい。

日本インターナショナル建築会は、結成時の宣言や、1930年の帝室博物館コンペへの応募拒否声明にみられる尖鋭的な理念に比して、活発な具体的な活動はなかったとされる。しかし、会の名を冠することはなくとも、実質的に彼らが画策した活動もあった。それは、ブルーノ・タウト来日時に日本建築協会が行った次のような行事である。

1933年５月３日、タウトは福井県の敦賀に到着した。タウトの名は、ヨーロッパにおける近代主義建築の主導者として日本にも知られていたが、1932年に第一党となったナチスの弾圧を逃れて、ヒトラー政権成立直前にベルリンを脱出、イタリア、ギリシア、トルコと迂回し、モスクワ、ウラジオストック経由で日本にたどりついたのだった。このときタウトが頼りにしたのが、前年に受け取っていた日本インターナショナル建築会からの招聘状だった。

日本建築協会はタウト来日を契機とするふたつの企画を行った。ひとつは協会主催による「新興建築講演会」（５月10日）、いまひとつは朝日新聞社主催に後援した「新興建築展覧会」（５月８～12日）である。講演会は、当時の協会副会長・竹腰健造の開会の辞にはじまり、ル・コルビュジエ監修のフランス映画「現代フランス建築」の上映と中西六郎による解説、中尾保「日本に帰れ」、滝沢眞弓「神話より空想へ」、そしてタウトが上野の通訳で「日本建築と西洋建築との関係に就ての第一印象」を話し、もうひとりの副会長池田實の閉会の辞で終わるというものだった。一方、展覧会は「日本の新興建築」「外国の新興建築」「タウト氏記念室」「特別出品：満州農業移民に対する居住地計画」の写真パネルを中心とした展示に加えて、「モデル・ルーム」がつくられた。とくに中西の作は鋼管椅子を用いた新味のあるものだ。これらの行事はそれぞれ日本建築協会と朝日新聞社の主催とはいえ、実質的な内容と陣容からみて、日本インターナショナル建築会のメンバーなど、若手が主導したことは明らかであろう。

中西は日本インターナショナル建築会のメンバーの中では、積極的な言論活動は行っていない。むしろ彼は、戦前、戦中、戦後を通して旺盛な設計実務をこなした。「設計事務所というものは仕事をもらいにいくべきものではない。医者がお宅病人ありますかと言うていくか」が持論で、所長としては決して商売上手ではなかったというが、その作品は住宅から商業建築、工場と多岐にわたる。戦前では和歌山文化ニュース館のようなモダニッシュな意匠の商業建築が目をひくが、戦後はとくに病院建築を多く手がけた。

上野伊三郎の回顧談によると、戦後に日本インターナショナル建築会の再結成話がでたとき中西は反対したという。また弾圧されるというのがその理由だったという。元所員の星廣文は後にその一件を振り返って、そのころの中西は日本建築協会や建築士会などで老大家との関係ができていたため、波風をたてるのを避けたのではないかと分析している。

1947年、日本建築協会副会長。大阪府建築士会の設置に尽力し、理事をへて1959年、同会の副会長。

（梅宮弘光）

大林　芳郎（おおばやし　よしろう）



●略歴

1918　４月17日、大林賢四郎と大林ふさの次男として、西宮市夙川の大林家に生まれる
1941　東京帝国大学工学部建築学科卒業、大林組に入社（本店設計部）
1942　召集により中部第24部隊に入営
1943　大林義雄の死去にともない養嗣子となり大林家本家を相続し、大林組社長に就任
1945　終戦により、12月に復員
1948　大阪建設業協会理事に就任、その後会長を歴任
　　全国建設業協会理事に就任、副会長、会長を歴任
1987　大林組取締役会長・社長に就任
1989　大林組取締役会長、現在に至る

●主な団体公職と受賞歴

1950　関西経済同友会幹事
1957　大阪商工会議所常議員
1958　関西経済連合会常任理事
1960　全国建設業協会会長
1961　海外建設協会理事（副会長）
1967　日本建設業団体連合会理事
1972　経済団体連合会常任理事
1982　大阪商工会議所地域振興委員会委員長
1988　大阪日仏協会会長（名誉会員）
1964　内閣総理大臣賞受賞
1988　フランス、シュヴァリエ章受章

大林芳郎は、大林組創業者の大林芳五郎の長女ふさの次男として、大正７年に夙川の大林家で誕生した。父は大正３年大林家に婿養子入りした賢四郎で、旧姓藤泉賢四郎である。賢四郎は明治18年、福島県に生まれ明治44年、東京帝国大学建築学科卒業後に入社していた技師であった。やがて技術畑で手腕を発揮し力量が認められたのであろう。大林家入りして、大正７年株式会社改組に伴い常務取締役、大正13年には副社長に就任している。一方、大林芳五郎の長男義雄は早稲田大学商科在学中の大正５年、芳五郎の没後に二代社長を継いでいた。

昭和18年大林義雄が急逝するに及び、大林義雄の養嗣子となっていた大林芳郎が社長に就任し、以来、戦中より戦後にかけて大林組トップとしての重責を果たし、今日に至っている。

ところで大林芳郎は昭和16年に東京帝国大学工学部建築学科卒業後入社し、本店設計部に籍を置いたが、翌年召集を受け、中部第24部隊に入営している。その軍務の中、時に25歳の若さで大林組社長に就任したのであった。社長不在の戦中に社内を指揮したのは白杉嘉明三と中村寅之助であったと言われるなか、昭和20年暮れに復員し、本務に就き、昭和22年に大林組は東京駅の戦災復旧工事など注目すべき公共工事を受注している。

そして昭和25年の朝鮮戦争特需を契機に産業界、建築界も挙げて発展期に入る時期、政府の所管官庁として建設省が設置されたことと前後して、建設業界は日本建設工業会、全国建設業協会が組織されている。そして日本建築協会副会長を昭和24年より28年まで二期にわたって務めるなど、大林芳郎は進んでこうした団体役員を引き受け、業界の向上発展に尽力した。

昭和25年に、氏は鴻池藤一とともに２ヵ月にわたって米国建築界の視察を行い、わが国建設会社の向かうべき方向を見定めたものと思われる。昭和31年の年頭における社内訓示において、大林社長は将来を見通して建設業の合理化の要件について語り、科学的経営、施工の科学化、標準化、規格化等の必要性を指摘している。つまりビル建設時代の到来という好況を背景にして、社を支えた機構と技術面にわたる合理化と組織化を進める先頭に立つ意志を明らかにしたのであった。

昭和30年代に入ると、新大阪ビルヂング、大阪新歌舞伎座など著名な建築工事を相次ぎ手がけ、「黄金の六十年代」といわれる隆盛期を迎えている。そして昭和48年１月に超高層の大阪大林ビルを建て、大林組の新時代を画したのである。

（山形政昭）

資料　『大林組八十年史』昭和47年



大阪大林ビル　昭和48年

鴻池 藤一（こうのいけ　ふじかず）



●略歴
1912　１月23日大阪市此花区伝法で誕生
1930　大阪府立北野中学校卒業
1937　早稲田大学理工学部建築学科卒業
1944　代表取締役社長（32歳）
1948　大阪建設業協会会長、全国建設業協会理事
1955　日本建築協会副会長
1970　藍綬褒章受章
1972　全国建設業協会会長
1982　勲二等瑞宝章受章
1985　株式会社鴻池組会長
1990　勲二等旭日重光章受章
1994　３月９日逝去、享年82歳

●主な作品
1950　扇町国際プールスタンド・飛込み台工事
（同年夏の「国際水上選手権」会場）
1950　キャバレー・メトロポリタン設計施工
1952　東京銀行船場支店工事（設計／村野、森建築事務所）
1953　立命館大学研心館工事・図書館回転移動工事
（設計／内藤建築事務所）
1954　名古屋精糖神戸工場工事
1958　島根県立博物館工事（設計／菊竹清訓）
1969　日本万国博覧会協会本部ビル本館・別館工事
（銭高組、間組、三井建設と共同）
1970　住友童話館工事（鹿島建設、住友建設と共同）

鴻池藤一は、明治45年鴻池忠三郎（株式会社鴻池組の初代取締役）の次男として大阪市此花区伝法で誕生した。

長男忠義の早世のため、幼いころから後継者として育てられた藤一は、北野中学校から早稲田大学に進み、建築構造力学を専攻した。

昭和12年卒業と同時に鴻池組に入社したが、しばらくは現場見習いのため大林組にいた。

昭和14年には太平洋戦争で中国からフィリピンに転戦、鉄道復旧に従事し、昭和18年に陸軍中尉で除隊、復職した。

昭和19年、２代代表取締役社長の鴻池小六が健康上の理由で辞任し、副社長であった藤一は32歳で代表取締役社長となり、昭和20年には創業者の鴻池忠治郎が、後を託して92歳で死去した。

同じころ、大林芳郎（鴻池藤一夫人敏子は、芳郎の妹）は昭和18年先代の急死により26歳で大林組社長となり、早稲田で１年先輩の竹中錬一も、昭和20年に33歳で竹中工務店取締役社長にと、いずれも若き社長による時代の転換期を迎えていた。

昭和23年、戦後の荒廃と混乱の中で、関西の復興を目指して大阪土木建築業協会（大阪建設業協会）が設立され、鴻池藤一は会長に就任した。

昭和25年には大林芳郎と、アメリカ建設業界の視察にでかけた。これは、戦後の進駐軍工事、沖縄工事など機械化施工に触発され、建設業の技術革新に備え、最新の技術と経営を学ぼうとしたものであった。建築中の国連ビル、エンパイヤステートビル、ブルックリン下水道、ハドソン河トンネルなどを見学。約３カ月に及んだ視察は、その後の経営近代化や技術向上に大きな影響を与えた。（『鴻池組社史』）

昭和28年３月から翌29年４月にかけて鴻池組が建設した名古屋精糖神戸工場の工事に当たり、全工程にわたる詳細な工事計画書が初めて作成されたのも、その成果の一つであろう。

昭和47年、鴻池藤一は全国建設業協会会長に就任した。第１次オイルショック後の資材価格や人件費の異常な高騰という深刻な事態の中にあり、既契約公共工事の請け負い代金にスライド制を実現した。政府や関係省庁に訴え続け、業界打開への努力を惜しまなかった。

長年の友人でゴルフ仲間であった西川磐（大阪ガス株式会社相談役）は、氏の想いを伝えて、次のように記している。

「鴻池さんは昭和十九年に名門鴻池組の３代目社長に就任され、爾来、約四十年もの長きにわたって社長の重責を全うされて、同社の業績の拡大や経営の多角化に不滅のご功績を残された。正に人格、識見ともに稀に見る偉大な経営者であられた。そしてその後も会長として大いに活躍されるとともに、大阪工業会の会長を務められるなど、関西経済界の為に、長年ご尽瘁されたことは普く知られるところである」

（『追想　鴻池藤一』）

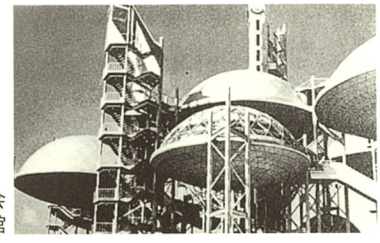
しかし鴻池組の総帥や経済界のリーダーということから連想される「大経営者」「実業家」という雰囲気は微塵も表に出さず、むしろ厳粛にして寡黙、まさに古武士の風格を彷彿とさせるところがあった。

鴻池さんは何事にも公正、無私で、言葉を飾ることもなく、常に赤心をもって人に接する方であった。そしてそこにおられただけで人々の衆望が自然に集まってくる貴重な存在であった。鴻池さんがご生前数々の公職、要職に就かれたのもむべなるかなと思うのである。

（吉田高子）



島根県立博物館



日本万国博覧会
住友童話館

伊東　五郎（いとう　ごろう）



●略歴
1897　11月３日東京に生まれる
1922　旧制第三高等学校卒
1925　東京帝国大学工学部建築学科卒。同級に武藤清警視庁技手
1936　内務技師
1940　ドイツの都市防災行政を視察のため約１年渡欧
1945　戦災復興院建築局
1948　建設院建設局長
1949　建設省住宅局長（初代）
　　住宅問題をNHKラジオ第一放送でシリーズで講演
1950　大阪府建築審査会委員（～1960年）
1951　大阪市長の要請により大阪市建築局長に転任
1959　大阪市住宅協会理事
　　（大阪市住宅供給公社の前身）
1960　鹿島建設株式会社常務取締役
1960　７月11日逝去
　　勲三等瑞宝章を授かる

●著書、論文
伊東五郎、小野薫、清水一　『建築工学便覧』1951年版　㈱コロナ社　昭和26年３月20日初版
「警視庁に於ける建築線指定の状況」　『建築雑誌』第46輯・第553号・㈳日本建築学会　昭和７年１月
「住宅問題解決策」　『建築と社会』第33輯１号pp.24～26　㈳日本建築協会　昭和27年１月

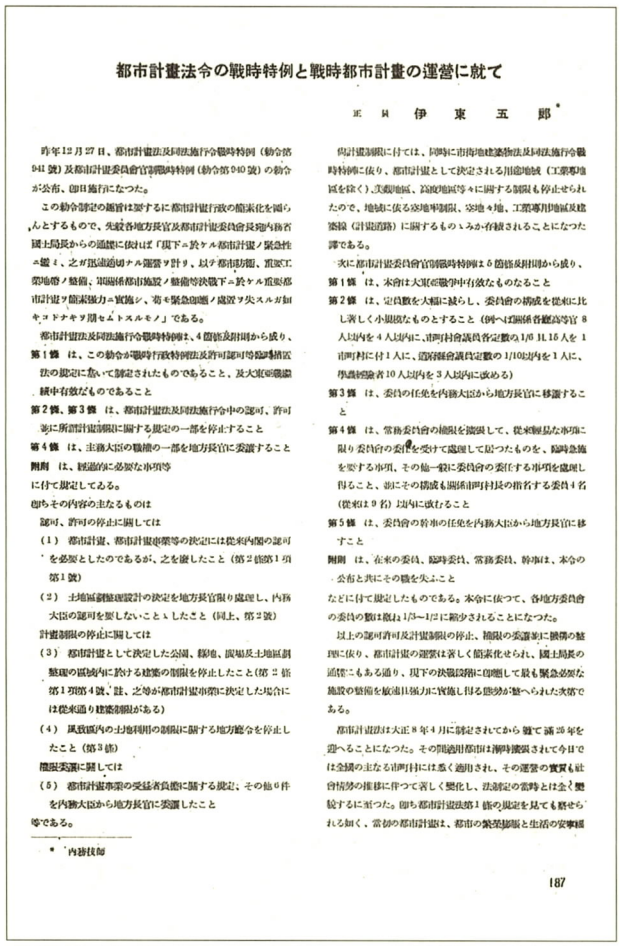
伊東五郎は力量を認められて、ドイツで都市防災行政を学んだ後、戦災復興院建築局、建設院建設局長、建設省住宅局長（初代）と、重要なポストに就いて成果を上げた。第二次世界大戦後、伊東は積極的に住宅問題に取り組み、昭和24年NHKラジオ第一放送で住宅問題をシリーズで講演し実績を上げる。当時としてはめずらしいことであった。

昭和26年７月、大阪市建築局長に就任と同時に㈳日本建築協会に入会し、協会とかかわりを持ち、没する直前まで監事を務めていた。伊東の功績は、当時大阪市建築局長桐本楠雅が「故伊東五郎氏を偲ぶ」（「建築と社会」昭和35年８月）で紹介している。その内容は「伊東さんが建築界に残されたご功績については、今さら改めて申し上げるまでもないと存じますが、本省局長在任僅々４年間に、建築基準法、公営住宅法、住宅金融公庫法等、今日わが国の建築行政施策の基本となっている重要法律を次々と実施せられ、戦後の混乱していたわが国の建築行政の行くべき筋道を示されたのであります。また本市建築局長になられても、前者と全く立場の異なる地方行政において、献身市政発展のため市営住宅を始め、種々の市設建築物の復興に挺身せられ、一方には大阪市住宅協会の今日の基盤を確立せられるなど、民生安定への功績は極めて大きく、わが国建築界に不朽の足跡を残されたのであります」である。

昭和28年度から大阪市城東区古市の一角に建設され、計画的団地開発として注目をあびた大阪市営古市中団地は、伊東が久米建築設計事務所（主宰久米権九郎）に委託したものと伝えられている。

伊東は沈思寡言、研究熱心な技術家であったが、ゴルフ、スキー、スケート、柔道（３段）を趣味としていた。特に伊東のゴルフは草分け的存在で、関西屈指のゴルファーである。酒に強く、酔うと必ず「黒田節」を好んで吟じていた。

（和田康由）



都市計畫法令の戰時特例と戰時都市計畫の運營に就て

正員　伊東五郎*

昨年12月27日、都市計畫法及同法施行令戰時特例（勅令第941號）及都市計畫委員官制戰時特例（勅令第940號）の勅令が公布、即日施行になつた。

この勅令制定の趣旨は要するに都市計畫行政の簡素化を圖らんとするもので、先般各地方長官及都市計畫委員會長宛內務省國土局長からの通牒に依れば「現下ニ於ケル都市計畫ノ緊急性ニ鑑ミ、之ガ迅速遂行ヲ期スル爲都市防衛、重要工業地帶ノ整備、耶國係都市施設ノ整備等決戰下ニ於ケル重要都市計畫ヲ簡素強力ニ實施シ、若モ緊急御用ニ處置ヲ失スルガ如キヨトナキヲ期セムトスルモノ」である。

都市計畫法及同法施行令戰時特例は、4箇條及附則から成り、第1條　は、この勅令が戰時行政特例法及許可認可等臨時措置法の規定に基いて制定されたものであること、及大東亞戰爭中有效なものであること

第2條、第3條　は、都市計畫法及同法施行令中の認可、許可等に所謂計畫制限に關する規定の一部を停止すること

第4條　は、主務大臣の職權の一部を地方長官に委讓すること

附則　は、施行期日等

に付て規定してゐる。

扨もその內容の主なるものは

認可、許可の停止に關しては

（1）　都市計畫、都市計畫事業等の決定には從來內閣の認可を必要としたのであるが、之を廢したこと（第2條第1項第1號）

（2）　土地區劃整理設計の決定を地方長官限り處理し、內務大臣の認可を要しないこととしたこと（同上、第2號）

計畫制限の停止に關しては

（3）　都市計畫として決定した公園、緑地、廣場及土地區劃整理の區域內に於ける建築の制限を停止したこと（第2條第1項第4號、註、之等が都市計畫事業に決定した場合には從來通り建築制限がある）

（4）　風致區內の土地利用の制限に關する地方廳令を停止したこと（第3條）

權限委讓に關しては

（5）　都市計畫事業の受益者負擔に關する規定、その他6件を內務大臣から地方長官に委讓したこと

等である。

* 內務技師

偖計畫制限に付ては、同時に市街地建築物法及同法施行令戰時特例に依り、都市計畫として決定される用途地域（工業專用地區を除く）、災害地區、高度地區等々に關する制限も停止せられたので、地域に依る容地率制限、容地々地、工業專用地區及建築線（計畫道路）に關するものゝみが存續されることになつた譯である。

次に都市計畫委員會官制戰時特例は5箇條及附則から成り、

第1條　は、本會は大東亞戰爭中有效なものなること

第2條　は、定員數を大幅に減らし、委員會の構成を從來に比し著しく小規模なものとすること（例へば關係省廳高等官8人以內を4人以內に、市町村會議員各定數の1/6以內を1人に、準職經驗者10人以內を3人以內に改める）

第3條　は、委員の任免を內務大臣から地方長官に移讓すること

第4條　は、常務委員會の權限を擴張して、從來輕易な事項に限り委員會の委任を受けて處理して居つたものを、臨時急施を要する事項、その他一般に委員會の委任する事項を處理し得ること、並にその構成も關係市町村長の指名する委員4名（從來は2名）以內に改むること

第5條　は、委員會の幹事の任免を內務大臣から地方長官に移すこと

附則　は、在來の委員、臨時委員、常務委員、幹事は、本令の一部施行と共にその職を失ふこと

などに付て規定したものである。本令に依つて、各地方委員會の委員の數は概ね1/3～1/2に縮少されることになつた。

以上の認可許可及計畫制限の停止、權限の委讓等に關係の整理に依り、都市計畫の運營は著しく簡素化せられ、國土局長の通牒にもある通り、現下の決戰段階に即應して最も緊急必要な施設の整備を敏速且強力に實施し得る態勢が整へられた次第である。

都市計畫法は大正8年4月に制定されてから玆で滿25年を迎へることになつた。その間適用都市は漸時擴張されて今日では全國の主なる市町村には悉く適用され、その運營の實質も社會情勢の推移に伴つて著しく變化し、法制定の當時とは全く變貌するに至つた。即ち都市計畫法第1條の規定を見ても察せられる如く、當初の都市計畫は、都市の繁榮擴張と生活の安寧圖

187

『建築雑誌』第58輯第709号・㈳日本建築学会　昭和19年５月より復刻

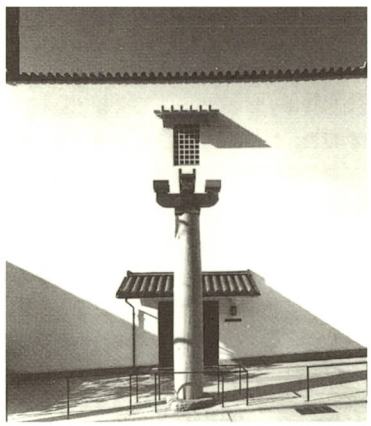
竹中　錬一（たけなか　れんいち）



●略歴
1911　３月１日誕生
1934　早稲田大学大学院卒業
　　㈾竹中工務店入社
1939　㈱満州竹中工務店社長就任
1945　㈱竹中工務店社長就任
1954　㈳大阪建設業協会会長
1961　㈳日本建築協会副会長（～1966）
1977　㈱竹中工務店会長就任
1996　12月31日逝去

●作品
・新阪急ビル（1962）
・御堂ビル（1965）
・国立劇場（1966）
・朝日新聞ビル（1968）
・大阪国際ビル（1973）
・竹中大工道具館（1984）

竹中大工道具館が、神戸市内に1984年に開館している。これは、明治32年に竹中藤右衛門が事業を始めて85周年を記念した建物である。竹中工務店はそのマニエラ（手法）やマニエリスト（職人）を残すため、どんなに近代化しても、棟梁の精神としての大工道具にこだわる。道具館は、その象徴でもある。


竹中大工道具館（神戸市）

●

竹中錬一は、竹中藤右衛門の長男として1911年３月１日神戸市山手通りで生まれる。生家は織田信長の普請を担当する宮大工で、創業380余年の第15代棟梁として50年以上経営に携わる。

幼いころは父に伴われ現場に親しみ、旧制甲南高等学校卒業後、早稲田大学で建築設計を学ぶ。学生時代からラグビーやスキー、山登りなどのスポーツに親しみ、そのときに培ったフェアプレーや、一度始めたことをやり通す不屈の精神は、経営者としての大切な資質となる。

●

その作風はどちらかというと、モダニズムの建築で、生涯建築の意匠に対する情熱と憧憬を絶やさなかった。竹中工務店設計部の充実にも心を砕き、小川正（関電ビル）、岩本博行（国立劇場）、狩野忠正（三輪そうめん山本本社）、出江寛（瀧定ビル）、永田祐三（長瀬産業ビル）といった建築家を輩出した。

●

槇文彦の幼少期の住宅は竹中錬一の処女作である。彼は竹中の作品について、玄関先に大きなポーティゴがあり、壁面は白のモダーンなもので、多大な影響を受けたと、のちに振り返っている。

●

経営の理念は「誠実に勝る知恵なし」。常に品質の管理に心を配り、その維持に努力した。建設業界における品質管理（TQC）で、デミング賞の実施賞を受賞する。（1979年）

また、竹中個人に対して、1988年デミング賞本賞が与えられている。

●

1961～1966年の６年間、日本建築協会の副会長を務め、建築業界の代表としてその発展に協力した。

（安達英俊）


御堂ビル（大阪市）


ナビオ阪急（大阪市）

鷲尾 健三（わしお　けんぞう）



●略歴
1907　4月24日誕生
1930　京都帝国大学工学部建築学科卒業
1931　京都帝国大学講師
1933　南満州工業専門学校教授
1945　工学博士
1947　4月22日大阪帝国大学講師
1947　11月大阪大学教授
1971　3月大阪大学定年退官
　　4月大阪大学名誉教授
1972　4月明石工業高等専門学校校長
1978　4月明石工業高等専門学校退官
1978　4月大阪工業大学大学院・摂南大学教授
1985　3月大阪工業大学大学院・摂南大学退任
1985　5月28日逝去

●業績
・不静定骨組解法理論の研究
　（昭和18年度日本建築学会賞）
・結線位法
・集団応力理論の基礎
・デッキプレートの実験的研究
・高張力ボルトに関する研究

鷲尾健三は、建築構造計画確立に強い意識を持っていた。そのことは次の文章より読み取れる。

●

「構造計画」に関する最後の基本的な問題として、その出来上がった計画の「価値判断の尺度」をあげた。計画ということが、価値判断を含む作業である以上、その「ものさし」の必要なことはいうまでもない。共通な「ものさし」がないと、見解が違うばかりで混乱するだけです。

「建築と社会」1957年5月号

●

鷲尾は1964～1969年までの6年間、日本建築協会副会長として、建築構造の社会における重要性を説きつづけた。時代はやがて、建築計画のうちに建築構造計画及び建築設備計画を求めるようになる。

鷲尾は1907年（明治40年）兵庫県明石町（現明石市）に生まれ、京都帝国大学、同大学院卒業後、同校の講師を務め、その後大阪大学にて20余年の研究及び教育に携わった。

彼の研究姿勢は、基礎研究に重きを置き、最先端技術に鋭い批判を浴びせることもあった。鷲尾はクリスチャンだったこともあり、バベルの塔に集まる人々の言葉が違うことは人類の崩壊につながる、とよく比喩的に語っていたそうだ。

鷲尾は日本のラーメン学会に大きな足跡を残している。最初の論文は、「結線位法」。これは定点法系の解法に新しい視点を加えたものであり、後に「集団応力概念」に発展し、「集団応力理論の基礎」に結実される。

大阪大学建築工学科の前身は、鷲尾率いる構築工学科であり、その功績には多大なものがある。

鷲尾の研究業績の重要なものは、骨組みの力学に関するもので、1930年代において、たわみ角法、定点法が根本的原理を欠き多様なる意見があった。彼はたわみ角法における節点角、部材角が古典解析力学の一般化座標に相当していることを見抜き、部材の収縮や曲線材の拡張も変分原理に従って定まることを体系化した。こうした一連の業績において、昭和18年度の日本建築学会賞を受けている。

晩年は、鋼構造の接合部の挙動に関する研究に充てられた。工場生産の構造物の問題点は現場施工時で、信頼性が欠け応力分布等が複雑な接合部分で、問題が起こりそれを解決する方法として、ボルト接合、溶接接合に重点を置き基礎的な研究を進めた。上記の施工基準の作成を通じて、建築業界に多大な業績を残している。

●

鷲尾の教育に対する姿勢は、講義時間の延長で次の講義が1時間ほど遅れて始まったこともあるほど熱心で、情熱的だった。その講義内容が綿密でしかも難解で、黒板にはびっしりと数式が並び、ノートを取るのが追いつかない量であることもしばしばだった。鷲尾は、研究者としても教育者としても、傑出していた。（安達英俊）

ある「天の邪鬼」の告白
超高層建築随想

鷲　尾　健　三

編集部から，「（超）高層建築随想」という題が与えられたが，わたしの専門ではなく，また，よくは知らないから，お断りしたかった。しかし，先頃，日本建築学会近畿支部主催の「高層建築」講習会に引張り出されたこともあり，わたしは，狙われているらしい。

たしかに，わたしには，門外漢の癖に，自分の専門以外のことに，よく，批判めいた口をきく悪い癖がある。しかし，実は，わたし自身にとって，これが，一つの良い修業なのである。自分の専門のこととなると，とかく，先入観にとらわれて独断に走りやすいが，あまり知らない方面のことを，あれこれと一生懸命考える時には，そんな余地はなく，おかげで，頭は軟かくなるし，テーマとの取組み方も正攻法に近ずくように思えてならない。ところが，そうして考えた結果を確かめようとして，その道の方々に，無躾にも，議論を吹きかけて，ご迷惑をおかけすることが多いが，それは，ただそれだけのことであって，門外漢の無責任な放言の気安さを楽しむといったような不心得な気持など，毛頭ない。時によっては，そのような放言が，どなたかのお役にたっているとしても，それは，万が一の予期しない結果であり，ただただ望外のしあわせというよりほかはないようである。

「建築と社会」1970年6月号
「高層建築問題」より
一部復刻

松村　雄吉（まつむら　ゆうきち）



●略歴

1901　６月２日和歌山県に生まれる
1919　福知山中学を卒業
1920　二代目松村雄吉を襲名し、松村組に入社
1931　松村組第四代社長に就任
1935　大阪土木建築業組合副組長に就任
1941　陸軍の軍建協力会副会長に就任
1941　大阪土木建築工業組合理事長に就任
1943　近畿土木建築統制組合理事長に就任
1944　日本土木建築統制組合副理事長に就任
1945　日本建設工業統制組合大阪支部支部長に就任
1948　日本建築協会理事に就任
1953　ジュネーブでのILO（国際労働機構）の総会に使用者代表として出席（このとき、日本が同機構への再加入が認められる）
1955　藍綬褒章を受章
1959　建築業協会理事に就任
1960　労働大臣より安全功労賞を受賞
1962　「国民安全の日」に総理大臣より表彰
1966　大阪建設業協会会長に就任
1967　大阪府建設業雇用促進協会協会長に就任
1969　日本建築協会副会長に就任
1970　建設大臣表彰を受ける
1971　松村組代表取締役会長に就任
1971　勲三等瑞宝章を受章
1972　７月30日逝去、享年72歳

二代目松村雄吉は、松村組創業者である初代松村雄吉の実兄田中魯一の次男、田中勇として明治34年、和歌山県周参見に生まれた。そして２歳のとき、初代松村雄吉の養子として松邨家に入ることになった。

まず始めに初代松村雄吉と松村組の創業に触れておこう。初代の松村雄吉は、田中茂助の次男、田中岩吉として明治元年に和歌山県周参見に生まれる。13歳で大工見習いとなり、明治16年には、松邨家の再興のため養嗣子となる。またこの年16歳で大阪に出て、材木商の店員となった。その後19歳で大阪の第四師団の定用大工の畠山平吉に弟子入りする。明治26年、畠山は福知山の歩兵第二十連隊の工事を請け負うのであるが、その代人として松邨を登用するのであった。工事は無事完成し、この功が畠山に認められ、松邨は独立することを許された。

そして明治27年10月に福知山を本拠として松村組を創業するのである。明治35年には岩吉を雄吉と改名し、明治43年には姓も松村と改め、ここに松村雄吉の名が誕生するのである。その後軍関連の建築を多く手がけ、事業を拡大していった。大正４年には福知山の由良川のほとりに和館と洋館の並び立つ新宅が完成した。これは住居であるとともに福知山の迎賓館としての役割を担うものでもあった。大正８年には株式会社として松村組が発足し、それに伴い本社も大阪へ移る。その後大正９年８月、初代松村雄吉は永眠した。

さて初代の松村雄吉没後、20歳の勇が二代目松村雄吉を襲名し、松村組に入社。そして昭和６年３月、二代目雄吉は松村組第四代社長に就任する。その後、昭和10年９月には大阪土木建築業組合の副組長に就任する。このとき当面する課題は戦時体制が進むにつれ払底しつつあった建築資材の確保とその割り当て供給であった。さらにこの組合は、資材、資金、労務の国家的動員計画に対応するため、昭和18年７月に施行された商工組合法により統制組合に改組し、中央組織の日本土木建築統制組合の副理事長に二代目雄吉が就任した。やがて終戦の時を迎え、日本建設工業統制組合の大阪支部長に推され、特に建設労働問題については労務研究会を組織して、調査研究に当たることとなった。

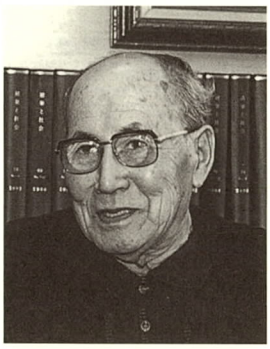
このように戦中戦後を通じ、二代目雄吉は現場作業員との雇用関係を主とした労務問題に深くかかわることになった。そして昭和28年10月にはジュネーブで開かれたILO（国際労働機構）の総会に日本代表団の使用者代表の一員として出席するのである。この総会は、日本にとって同機構への再加入が承認された重要な会議であった。その後、高度経済成長期を迎え、昭和45年には大阪で万国博覧会が開催されるのであるが、この万博を前にした昭和42年、二代目雄吉は大阪建設業協会会長に就任する。この時期は万博関連工事などで、労務事情がひっ迫していた時期であった。また昭和41年秋には大阪府建設業雇用促進協会が誕生し、二代目雄吉が協会長に就任した。このときテレビ出演した二代目雄吉は、労務者の募集について「賃金支払いは協会が保証する」との大胆な発言で注目を浴びた。昭和44年には日本建築協会の副会長に就任し、特に建築関係各部門との連繋、協力を必要とする問題について積極的に意見を出していた。このように二代目松村雄吉は松村組の社長であると同時に、業界の公職を歴任し、建設業を牽引する役割を担ってきたのであった。

囲碁が趣味で、こんなエピソードが残っている。札幌のホテルでは宴席もそこそこに、その後、夜中の２時３時まで対局を楽しむのであった。そして興が乗ってくると大声で「斬った」「殺した」などと大声でやり合い、心配した隣室からフロントに電話があったそうである。また「大阪建設業協会60年史」「21世紀への創造」「欧米の建設労働事情」は二代目松村雄吉の三部作と呼ばれている。これらは単著ではないが、それぞれの出版には多大なる情熱が注がれていたのである。特に「欧米の建設労働事情」は、建設労務問題に生涯取り組んだ総括であった。その思いを巻末の「所感」に寄せている。

（桐浴邦夫）

参考資料
・松村組：松籟 No. 189、1972
・松村組100年史編纂委員会：松村組100年史、1996

横尾 義貫（よこお　よしつら）



●略歴
1914　7月13日佐賀県に生まれる
1939　京都帝国大学工学部建築学科卒業
　　佐世保海軍建築部に勤務
1942　京都帝国大学助教授
1948　工学博士（京都大学）
1949　京都大学教授
1964　名古屋大学教授（京都大学教授を併任）
1967　京都大学教授（名古屋大学教授を併任）
1968　文部省学術審議会専門委員
1969　日本建築センター鉄鋼系委員会委員長
1970　日本建築協会副会長
1971　建設省技術審査会委員
1975　建設省住宅局建築審議会委員
1976　文部省大学設置審議会専門委員
　　日本学術会議構造研究連絡委員会委員
1977　京都大学退官。豊橋技術科学大学副学長
　　京都大学名誉教授
1978　日本学術会議第11期会員
1980　豊橋技術科学大学教授
1985　豊橋技術科学大学退官。豊橋技術科学大学名誉教授
1987　勲二等瑞宝章受賞
1991　日本建築総合試験所理事長
1994　京都国際木造建築カレッジ校長
1996　日本建築総合試験所顧問

横尾義貫は大正３年、佐賀県に生まれた。昭和14年に京都帝国大学工学部建築学科を卒業し、同助教授を経て、昭和24年、京都大学教授に昇任する。専門は建築構造学である。昭和20年代は、曲面板構造の弾性理論と解析法の研究を展開、その後は、極限解析法、建築基礎地盤の支持力特性の解析と震害解析、鋼構造部材の靭性と鋼骨組の弾塑性安定等の研究を進める。

この間、教育においては、昭和39年からは京都大学教授を併任しながら名古屋大学教授として建築学科創設に尽力し、昭和52年に京都大学を退官後、豊橋技術科学大学副学長に就任し、建設工学課程創設の任に当たった。

昭和45年度には日本建築協会の副会長に就任し、昭和52年度まで務める。この間にも、昭和45年度には土質工学会関西支部長、昭和46年度からは日本建築学会の副会長、昭和50年度からは同会長を務める。また平成３年より日本建築総合試験所理事長、平成８年より同顧問となる。そして文部省学術審議会、文部省大学設置審議会の各専門委員、日本学術会議会員等を務め、建築学とその関連分野の学術および技術の振興に尽力するのである。また建設省、日本建築センター等を通じて、建築行政の分野にも多大の貢献を行う。

これらの活躍に対し、昭和29年に「殻理論に関する研究」により日本建築学会賞を受賞、そして昭和61年、「建築構造学・基礎工学の発展とその関連分野の振興への貢献」により日本建築学会大賞を受賞することになった。

以上の輝かしい業績のほかに、幅広く多方面にわたる見識を忘れてはならない。専門の構造学のみならず、幅広く建築学やその関連分野としての土木工学はもとより、地理や歴史といった分野にも造詣が深い。「力感論」は構造家と建築家をつなぎうる一つの帯として提案された横尾の建築論であり、友人との閑談の中より次第に成長していったものであった。物体に働く力はさまざまであり、これらすべてに対して人間の感覚がついてゆけるものではない。しかし永劫に働き続ける重力の作用について、あるいはそれに抗する構造の働きについては、人間はかなりシャープな感覚を備えており、構造に対して多少とも一つの生々しい力の働きを感受することができると考える。これを力感と呼ぶのである。この力感は恒常的であり、建築の表現の基底をなすものである。そして均整ある力感を原点とし、多少の偏倚が表現においてさまざまな効果をもたらすとも説明される。この力感論は人類の体験の観察から、雰囲気の体験という見方を生み、さらには空間論へと発展するのである。

昭和49年より京都大学において歴史建造物保存調査専門委員会の委員長に就任し、建築史研究室のメンバーとともに昭和52年に『京都大学建築八十年のあゆみ』を刊行した。また昭和51年より、京都大学農学部構内および瀬戸臨海実験所構内の遺跡発掘調査会の会長も務めた。歴史に対する旺盛な好奇心がうかがえる。豊橋技術科学大学時代には『東三河の戦国時代』を執筆した。歴史書としてまとめられた同書は、東三河という地域への着心、すなわち豊川水系という地理的な立場を重視している。またこの観点は専門の震害解析においても見いだされる態度である。昭和51年にまとめられた「新潟震害の歴史的背景」は、昭和39年の新潟地震における液状化現象について、新潟付近の地形形成史として信濃川・阿賀野川の歴史的変遷よりその地盤特性に迫るものである。

また、古都京都の景観や遷都1200年における提案は興味深いものである。特に伝統的木造建築は日本文化の母体であると捉え、修理と改造を加えながら存続する伝統的木造建築を守るためには、技術の伝承が不可欠であると説く。そして一般市民への啓蒙、学習と技能者育成のため「木造文化センター」のごときものの設立を強く望んでいた。その後、京大工の育成のために京都国際木造建築カレッジが設立されるや否や、その校長を兼職することになる。これらの活躍や見識が示すこの幅の広さ、これがまさに横尾義貫と言えるであろう。

（桐浴邦夫）

●参考資料
横尾義貫先生京都大学退官記念事業会：建築構造随想、1978

足立　孝（あだち　たかし）



●略歴

1919　４月９日、兵庫県に生まれる
1941　京都帝国大学工学部建築学科卒業
1942　大阪市技術職員を経て兵役
1950　大阪大学工学部講師に着任、同年８月助教授
1957　工学博士の学位を授与される（京都大学）
1959　大阪大学工学部教授
1978　日本建築協会副会長に就任、'90年まで13年間にわたって永くその職を務める
1983　大阪大学を退官、４月より摂南大学教授に着任（～1991年）
1992　勲二等瑞宝章受章
1993　７月16日逝去。享年74歳

●研究業績・著書・作品

・学位論文“設計計画における機能拡張に関する研究”（1957年）
・“室空間の基底的機能－美学と心理学との接触－”（『建築と社会』1958年10月号）
・『歩いてきた道』（1992年の叙勲に際して出版、非売品）
・大阪大学の吹田地区移転計画において中心的役割を担い、1962～72年のあいだ長期計画委員長を務め、基本計画から実施計画・設計まで行う

足立孝が京都大学工学部建築学科に入学したのは昭和14年で、日本工作文化連盟が発足し、機関誌『現代建築』が発刊され、モダニズムの芽生えが感じられるころであった。京都大学では分離派建築会に属していた森田慶一に師事し、ゼミではリーグルの原書を講読した。ここで唯心論的美学者であるリーグルに接したことから人間の心理に興味を持つようになり、後の研究テーマへとつながっていったそうである。

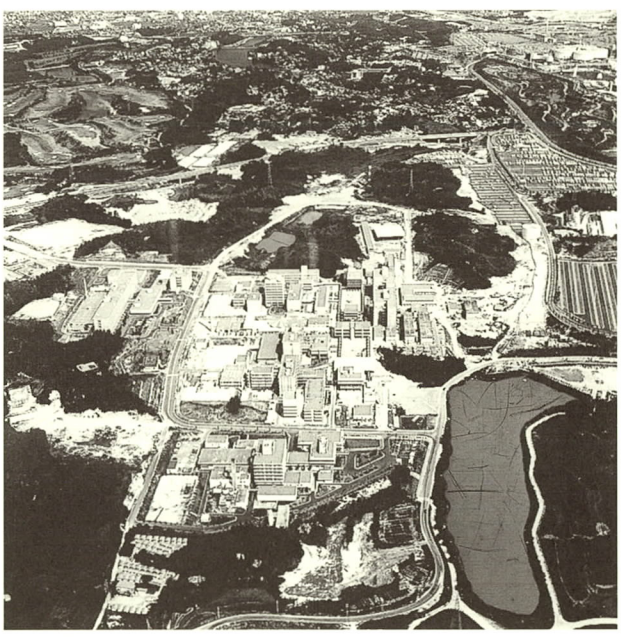
太平洋戦争の影響で卒業が短縮され、昭和16年12月に卒業、大阪市の臨時雇員を経て入営した。南満州の錦西では建築設計のほか、RC 造の輸送船の設計にも携わった。やがて終戦を迎え、シベリア抑留を経て昭和22年４月に復員した。

大阪大学に新設された構築工学科に講師として着任したのは昭和25年１月で、昭和58年の退官まで30年以上にわたって研究教育活動を続けた。研究テーマは、学生時代の関心から受け継がれたものであった。多くの卒業生を送りだしているが、その中には現在、大学などで足立孝と同じく教鞭をとる者も多い。教育者としての足立は、普段は放任主義で、大局的な助言を与える程度であったが、ゼミ旅行の折には学生と将棋などに興じ、親しみの感じられる先生だったようである。

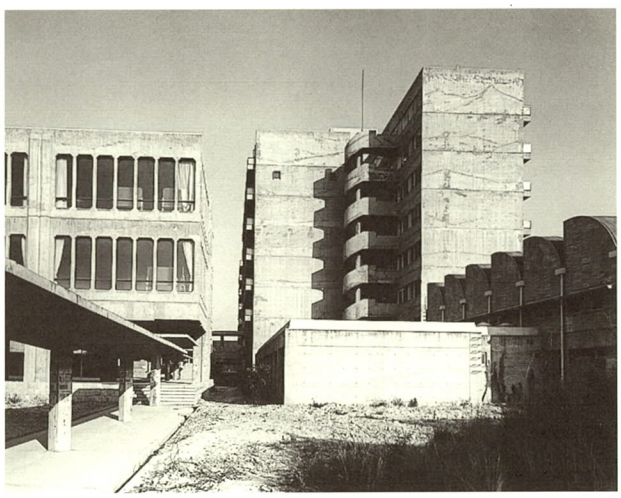
大阪大学で足立の果たしたもう一つの大きな業績は、吹田千里丘陵へのキャンパス移転である。足立はキャンパス移転計画の長期計画委員会の委員長となり、さまざまな問題に粘り強く対処し、現在の吹田キャンパスの実現に大きな役割を果たした。

大学での研究教育活動とともに、足立は社会において、コンペの審査や建築審議会委員などの任を数多く果たした。日本建築協会では昭和37年より理事、昭和43年から２年間は編集委員長、そして昭和53年から平成２年まで12年間の長きにわたって副会長を務めている。もっとも、これらの役職につく前から協会の仕事を手伝い、協会を介して関西建築界の主要な人物と知りあうことができたと語っている。専門の建築計画にとどまらず、広く都市と建築のあり方を考え、社会的に活躍したのも、若いころからの協会での経験が生かされていたのかもしれない。

（橋寺知子）



大阪大学吹田キャンパス



大阪大学吹田キャンパス共同講義棟

第２章　座談会　21世紀へ語り継ぐ激動の昭和
―戦中戦後の協会活動をふり返って―



三品（司会）　今日は、協会の大先輩の皆様に集まっていただきました。戦前、あるいは戦後まもなくご入会になり、いろいろな波を乗り越えてこられた功労のある方ばかりであります。80年史は、ワーキンググループ代表で、ここにご同席の坂本（勝比古）先生にご苦労をいただき、まとめにかかっておりますが、そこに、この座談会が掲載される予定です。もうすぐ来るであろう100周年に向かって、協会の歴史を今の段階で引き継いでおかねばならないということで、とりかかった編纂でありますが、この座談会も、内容を会員の方々にご覧になっていただき、思いを新たにしていただきたいという気持ちで開催いたしました。

今日は市川（宏）会長がご挨拶を申し上げる予定でしたが、風邪で残念ながらご欠席であります。くれぐれもよろしくとのご伝言がありました。

今まで、協会の創立15周年、25周年、35周年、50周年に当たって、その当時の重鎮の方々に座談をしていただいた記録があり、創立当時の意気盛んなころの懐古、その時点での将来の展望について、貴重なご意見をいただいておりますので、できれば、本日は主として昭和42年の50周年以降のいろいろなことについて、お話をいただきたいと思います。

その間の協会の歴史を簡単に申し上げますと、昭和39年から会長が東畑（謙三）先生、46年から塚本（猛次）先生、57年から福田（朝生）先生、59年から佐野（正一）先生、平成６年から現在の市川会長という経緯であります。また、会員の数の一番のピークは、昭和45年の個人会員6600人、団体会員660。現況から思えば夢のような隆盛でありました。

事務所は、昭和31年から北浜の近畿建築会館に、昭和58年から現在の大阪駅前第三ビルに移っております。

市川会長が去年の「建築と社会」の80周年特集号の巻頭で、昭和初期の黄金時代を第一の節目とすれば、第二期が戦後まもなくの定款改正などがあった新体制のころ、そして現

出席者（50音順、敬称略）

尾亀清四郎　（㈱三晃空調相談役、協会監事）
大林芳郎　（㈱大林組会長、協会元副会長）
小西岬　（㈱小西設計会長、協会元理事）
佐野正一　（㈱安井建築設計事務所会長、協会名誉会長）
横尾義貫　（京都大学名誉教授、協会元副会長）
三品哲夫　（元大阪市局長、協会副会長）―司会―

日時　平成11年１月21日　午後２時～午後４時
場所　（社）日本綿業倶楽部本館３階・中会場

在が第三の節目、ある意味では大切な時期ではないかと言っておられますが、今の時点での協会のあり方については、新しい認識が必要ではないか、あるいは100周年に向かってしっかりと展望を見据えての協会活動の活発化が必要ではないか。そういう意味で私も第三の節目ではないかと思います。これからの協会活動について大きな指針となるご意見を頂戴できたらと思います。

建築諸団体誕生のきっかけ

―― 佐野名誉会長は永年協会の要職にあり、高い視点から協会をご覧いただいていると思いますが、協会の活動をどのようにとらえてこられたでしょうか。

佐野　会長で一番重要なのは片岡（安）先生で、大正６年から昭和21年に竹腰（健造）先生に替わられるまで会長をやっておられた。その間に、新しい関係団体をつくられ、関西の建築界が非常に盛んな時代に、何かをやろう何かをやらなければならないと声をあげた、その一人が片岡先生でした。

片岡先生は名門の出で、日銀の大阪支店の設計を担当し、京都大学の大ボスの武田（五一）先生とも同窓のつながりがあって、関西には関係が深かった。そういう眼で見て、関西の建築界のあり方を具体的に実践していかれた。

忘れてはいけないのは、昭和20年、戦争末期に建築学会と日本建築協会の合併の話が出てきた。これは途方もない話です。その時代の人たちからすると、統制経済下で行政を簡素化しなければならない、学会も協会も同じことをやっているではないかという程度の認識。戦時体制の中ではその程度に見られても仕方がなかったでしょうが、歴史の古い学会から話があって、片岡さんはもてあました感じで、竹腰さんが折衝役になっておられた。

竹腰さんには合併の気持ちはなかった。表向きには合併を前提にいろいろな話もやっておられたが、実際にはのらりくらりと、片岡さんの意見も聞かなければならないということで逃げていて、昭和20年になって、片岡さんと東京の佐野利器さんとの間で最終の話が出て、やろうと、そのときはほとんど合併に近い答えは出ておったが、戦局が悪くなり、世話役および建設省もそれどころではなくなってしまって、しばらく待とうではないかということで、そのままずるずるときてしまった。しかし僕はそれでよかったと思います。

厳密にいえば、学会は学術的な団体として発足した、それがベースになっていた。建築協会は片岡さんの方針、竹腰さんの示唆もあって、最初から民間活動にふれて、建築の社会的啓蒙をはかるのが活動方針であり、ちょっと両者のニュアンスが違う。会員の構成も、学会は主として設計事務所、協会はゼネコンも建築材料屋さんも引き受けて会員にして、ちょっと違う。もともと合併しにくい条件があった。それをむりやり合併しようとした。無理のある話はやめとこうと、僕はそれでよかったと思います。

第一の創設の苦労は片岡さん、協会としてのベースをつくられた。社会的活動をやって、いろいろ新しい事業をやらなければならないと、住宅関係の博覧会をやったり、熱心に講演会や説明会や討論会をやられた。その時期は、明治の技術輸入時代が終わって、新しいヨーロッパの新建築運動を入れなければならないという時代で、急速に日本でも進行した。代表は武田先生だったと思います。デザイン的にもかなり新しい構想が目立つようになったが、戦争になった。そこでモダニズムをかかげた新建築運動は終わってしまって、いわば戦後空白時代に入る。約10年ぐらい空白時代があって、ポストモダン時代を迎えるわけです。



佐野正一

戦後、竹腰さんが昭和22年から会長になられて、新しい復興をおやりになったんですが、実質的には仕事をやろうという条件は整っていなかったので、ずいぶん苦労があったと思います。

その後、日建の尾崎（久助）さんが第三代目の会長になられた。期間的には短く６年で、実質的には副会長の東畑さんが随分支えとしておやりになった。東畑さんが第四代会長に就任されるのは、そのあとです。

昭和25年に建築士法、建築基準法の制定があり、これは革命的な出来事であった。それ以後は建築士会ができるし、建築家協会もできる。明治時代からの建設業協会も近代的な姿で名乗りをあげるのは戦争末期になってからで、いよいよ活躍を始めるのは戦後です。戦後に顔触れが全部揃って、いろいろなことが始まった。そういうものと全部関係がある建築協会を今後どうするか、非常に問題になっていた。

その辺は竹腰先生も東畑先生も非常に苦心された。塚本さんが東畑さんの後を継いで会長をやられますが、このころに僕が聞いたのは、各団体が独立した会をつくってしまえば、建築協会は貸し座敷業みたいになってしまう、雑誌を出すこと以外はやめたらどうかと言われた。それは極論で、あまり現実的ではない。世話役の団体としての建築協会は総合性を持った団体として、各団体は仲良くやって、新しい発展をしていかなければならない。雑誌もちゃんと出さなければいけません。

塚本さんの時代には、いろいろとやられたことがあります。まず、事務所の確保の問題。北浜に近畿建築会館があった。これは宗事務所の大倉三郎さんの設計です。竹腰さんの時代は、朝日ビル時代まで事務所を転々として苦労をしておりましたので、そこに早く移ろう。そのためには金が必要で、会員の間でお金を集めた。これを何年かして償還するのですが、割合にうまく金が集まりました。実行委員長は東畑先生で、改修工事をして4階を増設しました。その段階で、各団体で自分の財産の事務所を持っているのは日本建築協会だけだったんです。

学会も困っておりまして、学会の事務所も入り、新しくできた建築士会へも、建築家協会へも、事務所としてお貸しするということで、建築会館にみんなが集まった時代があった。これが昭和30年代です。

この土地はもともと大阪府の河川敷だったと思われるんですが、昭和55年なって、大阪府の財政の都合でしょうが、大阪府から敷地の買い取りを言ってきまして、協会もお金がないので借入金で買いました。お金を集めるのに、情勢があまりよくなかったので苦労がありましたが、土地つきの財産を持ったわけです。数年後にお隣のヒサヤ大黒堂が事業拡張のために土地建物一切を買い取りたいと、錢高さんの仲介で話がありました。これは条件がよかったので、塚本さんの会長の代になっておりましたが、まだ東畑先生もおられて、思い切って駅前で再開発工事が進行していた大阪駅前第三ビルに移りました。これは買い取りですが、そのときの市の開発担当者が三品さんでした。このときは、ヒサヤ大黒堂の金で内装まで一切をまかなって、借り入れはなかった。

戦後、こういう団体が一斉に勢揃いするということでは、総合試験所を吹田につくろうと建設省から話があり、もっぱら東畑先生が担当してこれを推進された。5年ぐらい大変な苦労で、早く早くということで大阪の各団体の協力でやりました。家協会、士会ともに新しい団体でしたから、建築協会が中心になってやってくれるからということで、協力し合った、そういうことの最後です。

横尾　東畑先生が建築協会の立場から、大きな努力を払って実現されたのが、財団法人日本建築総合試験所です。当時建築基準法関連の認定、建築材料の試験などの業務機関を東京および大阪に設立したいとする建設省の勧奨に従って、大阪では建築協会が関係建築諸団体と連絡しながら、具体化の調査検討が始められました。東畑先生が推進役となり、塚本猛次さんが補佐役となって、建設省の三宅俊治指導課長、松谷蒼一郎技官らと接触し、また大阪府建築部が山本康雄指導課長、日本建材協会等と連絡して官民の出資、土地建物機材の手配、人材確保等重要事項が逐一具体化されていきました。その間には、通産省担当の建材試験センターとの調整など、曲折した経過もありました。資金は公共的補助金が国約1億円、大阪府、大阪市各1億円、計3億円、民間寄付が3億2千万円、計約6億2千万円として、土地を千里丘陵に取得、建物2億2千万円、機械器具など3億円の施設を整備するという計画を立て、昭和39年4月、建設省の認可が下り、日本建築総合試験所は、まず大淀分室で業務を開始しました。土地は大阪府の斡旋で千里の現在地に確保することができ、昭和42年12月には本館等が完成し構造、材料、耐火、防火等の試験ができるようになりました。資金については必ずしも計画通りには進まず、補助金は結局昭和39年～47年度合計で、国が485万円、大阪府が1億1千万円、大阪市が5千5百万円、合計約1億7千万円でしたが、その後、日本小型自動車振興会と兵庫県から計約1億1千7百万円の投資を受け、ほぼ計画額に達しています。これに対し民間寄付は当初の計画をはるかに超えて、4億9百万余円が寄せられていますが、民間の期待の大きさを語るものでしょう。

初代理事長には建材協会会長の中村文雄氏、専務理事には元防衛施設局長の錦田直一氏、試験所長には京大名誉教授坂静雄先生が就任されました。昭和47年には、建設・通産の共管となり、関西でかねて必要とされていた公的試験研究機関が誕生しました。その意義はすこぶる大きいものがあり、関西建築界戦後の画期的な出来事と思います。

佐野　もう一つ覚えておいた方がいいと思うのは万博で、この会場で第2回の日本建築祭がありました。第1回は東京オリンピックのときにやったので、第2回はここでお祭りとして少し賑やかにやろうと各団体申し合わせをして、その世話役をやったのが建築協会で、東畑さんが会長としての最後の年でした。各団体の長がそれぞれ役をもらい、指導役が東畑先生で、式次第を読みあげたり、意気軒昂たる日本の建築界の復興ぶりを大いに宣伝いたしました。

ちょうど日本の戦後体制から復興をしてモダニズムの声を上げた最後の段階が万博のころで、この後はポストモダンの

時代に変わってゆく。経済体制も、社会体制も大阪は万博が終わったとたんに不景気のどん底に陥って、全然違う大阪がそこからまた始まるわけですが、建築の歴史から言えば、昭和45年は大きい分かれ道になった。

その後は建築の各業務関係は、それぞれ独立した姿で活躍する。何となく全体が集まっている建築協会はきわめて珍しいのではないか、それなりの行き方を見つけないといかんという気がします。

建築会館をつくろう

―― 今、建築会館のお話や学会と協会の合併話も出ましたが、横尾先生いかがですか。

横尾　学会と協会の合併については、僕はもう少し違った印象を持っている。戦争末期にはあらゆる団体、学・協会も似たような統合へのプレッシャーを受けたのではないか、そんな印象を持っている。僕は当時、戦時体制の大学にいましたが、そういうことが行われていたことはいささかも知らなかった。

協会と私が関連を持つようになったのは戦後で、僕の印象深いのは昭和29年、30年に浦辺鎮太郎さんが編集委員長であったころ、編集委員をやっていて、非常に面白かった。「建築と社会」で今も続いている「建築の眼」という頁は、僕らの提案です。総合雑誌に何々の眼というのがあって、それを真似した。僕も匿名でかなり書いた記憶があります。

その前にちょっと学会の話を申し上げますと、建築学会は明治19年設立の古い歴史を持っておりますが、大阪で大正６年に関西建築協会ができた、これに対し東京は非常に関心を持っていた。その一つの資料として「日本建築学会百年史」が1990年に出ておりますが、日本建築協会についての記事があります。執筆者の村松貞次郎さんは、「関西建築協会は大正８年に日本建築協会と改称し、大正９年に機関誌名を『建築と社会』に改めた。私は日本建築学会の委員会にときどき顔をだしているが、何か関西はいつも気にかかる」と述べておられます。何となく関西が気にかかるというのは、片岡安先生がつくられた日本建築協会を中心にした一つの建築界のかたまりだろうと思います。大正３年に東京大学で佐野利器先生が構造の講座を持ちますと、そのショックで建築家協会の前身の全国建築士会ができた。面白いことに、それと同時に土木学会ができている。土木には、土木工学は母なる工学という意識がありますが、明治10年、工部大学校ができ、その第１回卒業生が集まって、明治12年に「工学会」を設立します。やがて工学会からいろいろな工学会が独立して参ります。もちろん建築学会もできておりますが、大正３年に建築学会が、もとは土木工学の分野である構造をやることを鮮明にした。

佐野利器先生は本来デザインが好きではなく、ああいう婦女子のやるようなことはしたくないと…。辰野金吾先生が、そうではない、日本には地震があるから君は地震の勉強をしたらどうかということで、一念発起して勉強をされた。佐野さんは、「日本の建築はエンジニアリングである。スクールオブアーキテクチャーのような考えはいけない。ストラクチュラル・エンジニアリングである」という思想の持ち主で、この先生が東京大学で講座を持たれるということは大変なショックであろう。佐野先生がドイツから帰ってこられて講座ができるんですが、プロフェッショナルアーキテクトを目指していた中條（精一郎）さんらが中心になって、家協会の前身、全国建築士会ができた。

一方、土木学会がその年にできるんですが、創立時の記事を見ますと、建築学会が構造をやるようになったからとは書いていない。しかし、おそらく建築屋が構造をやるようになれば、土木の構造工学の重要な部分が削られてしまうので、土木学会が独立したんではないかと想像しています。

ちなみに京都大学の土木教室には土木出身の建築構造学者、日比忠彦先生がおられ、武田五一先生と京大建築教室をつくられた。しかし、創設後まもなく逝去されます。なお、佐野利器先生の弟子である建築構造学者の三浦耀先生、坂静雄先生が日比先生の後を継がれます。全国建築士会ができたとき、関西の片岡先生も顔を出されている。同会は、建築家協会は今でもそうだと思うんですがプロフェッショナル・アーキテクチャーの団体ですから、ゼネコンや材料業分野に属する建築家を除く、純粋の自分のオフィスを持ってやっている建築家の集団を目指した。

しかし、それは日本の現実に合わない。日本の建築学は、建築業の支えでできてきた。第一、佐野先生はむしろ清水建設にも近い方で反対、お弟子さんの内田（祥三）先生も反対、東京大学の先生方もおそらく反対、片岡先生も現実的でないというお考えだったようだ。そういうことがあって今日の建築の流れが出来上がっていったようです。

それはそれとして、関西の建築協会は何か凄い団体であるという意識が東京にはあったと思います。建築学会が関東にあり、支部ができるとすれば関西にできるのが順当であるのに、関西に対して何かを感じているものですから、最初の支部は戦争前に名古屋にできた、次は九州、新京（満州）、広島にできています。ようやく終戦になって、関東支部と近畿支部ができたのは昭和22年です。関西にできたのは京都大

学の旧本館の地下室に学会用の本箱が一つあっただけです。最初の支部長は坂先生、それから森田慶一先生、村田治郎先生がおやりになって、棚橋諒先生に順番が回ってきたのは昭和29年、30年です。私はそのころ「建築と社会」の編集委員であった関係で、よく大阪の協会に出かけました。佐野さんがおっしゃっていたように、協会でも家を持ちたいという気運があつた。朝日ビルでは手狭になったので、大林組から木造の三階建ての分室を借りてやっておったんですが、朝日ビルは通うのが大変だという状況にあったとき、学会支部長の棚橋先生が僕に言われたのは「学会のために建築会館をつくろう」ということでした。

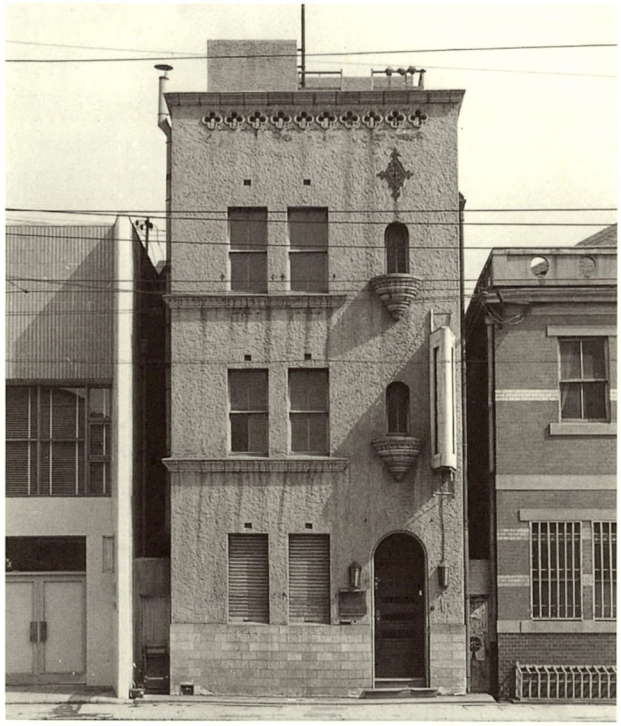
たぶん学会が何がしか金を出すと言ったんでしょうね。そして募金でもしようという考えだったと思います。僕は、協会も同じ意向があるので竹腰先生に会ってくださるようお勧めした。

昭和29年の１月３日に夙川の竹腰邸にお伺いした。年賀の席でお歴々がおられまして、棚橋君の言うことはよくわかった、一緒にやろうではないかということで、協会がお考えになっていたものを学会と合体して建築会館をつくることになったと僕は思っています。そのあとはどうなったかよくわからなかった。ところが先月、協会のOB職員の吉田悦二君、編集をやっていた松井昭光君、三木ちえ子さんの三人に集まってもらって懐古談をやったら、お金の手帳が出てきた、これは吉田君が管理しておりまして様子がわかりました。概略申し上げますと、学会が５百万円、協会が１千２百万円を集めた（約２百社弱）。お金は後でみんな返した、学会にも何年かのちに返したらしい。ところが返したと言いながら、業界の方々にはご寄付を願っているものが相当あるようでした。

近畿建築会館の思い出

横尾　近畿建築会館の絵が今の協会の事務所に飾られていますが、協会のOB諸君は第三ビルに移るまで近畿建築会館でけっこう長いこと働いたものだから、凄い愛着を持っている。あれは、三木さんが友達に建物の絵をかかせて、協会に寄付したものだそうです。これはなかなかいい絵です。松井君も壊してしまうのはもったいないと、階段親柱のふくろうの彫刻をもってきている。もう一つ銘板も持ってきたかったんだけれども外れなかったそうです。

銘板の写真をよくよく見ますと、“日本建築協會、大阪府建築士會、日本建築家協會關西支部、關西建材協會、そして学会は日本建築學會近畿事務所”とあり、近畿支部とはなっていません。これは学会本部が500万円、金を出して動きだして集まったものですから、そこにこんな名前をつけたんではないかと思っています。会館の企画は棚橋支部長のときですが、ここであらためて強力な支部長ということで坂先生にもう一度お願いをしている。学会を大阪にも移したことを強く受け止めてたのでしょう。



増築前の近畿建築会館

もう一つ申し上げたいのは、大林組から来られた手島さん、その頃常務理事になって事務局長をやられた。その下で学会を沖田（誠一）君がやり、ということで、みんないろんな団体の仕事を手分けしてやっている。あそこで７、８年ぐらいみな一緒だった時期がある。僕は外から見ていて、手島学校ではないかと。そこでいろんな団体の事務の人が育って、それぞれの事務局長クラスになっていった。例えば中村（昌作）君もあそこにおりましたが、二代目の士会の事務局長になっています。

僕は協会の副会長もやっていますが、学園紛争と重なって、ときどき出席していたと思うんです。ただ雑談をしていたということで、さしたる貢献もしていない。しかし、そのころは会員もピークだったし、何か盛んだった、みな意気軒昂たるものがあったという気がします。

OB職員の松井君の描いた建物の絵をお配りします。松井君をして言わしむれば、大正11年の「住宅改造博覧会」は非常に大きい事業ではなかったかと。10年前の70周年のときにこれの詳しいレポート『住宅近代化への歩みと日本建築協会』が出ていますが、松井君がなぜこの建物のスケッチを

したかというと、建物の前に箕面市が立てた看板が立っており、それに住宅改造博覧会のことが、建築協会が主になってやったことが書かれているからです。きちっと文言をお調べになって、この際、記録しておいた方がいいかと思います。

―― ある意味ではよき時代の建築協会だったなと…、建築会館も懐かしいですね。ただ４階は継ぎ足しで、会議には階段をあがらなければならないので、事務的には不便でしたね。

横尾　あの階段が僕は懐かしい。50周年記念号で、第Ⅲ回座談会のとき昭和後期が語られますが、僕は名古屋大学におり座談会には参加していません。が、学会と協会の協力時代についての記述は弱いように思います。

戦中戦後の建築界

横尾　手島さんは非常に功績があったと思います。大林組は近くにありますから、大林組には何とかお世話になった。切っても切れない関係があるような気がします。

―― 戦時中の統制時代は、いろんな面でご苦労なさったと思うんですが…。

大林　ハワイの攻撃の直前に私は学校を出ました。昭和16年の春ですから、ほとんど戦争に必要な軍の仕事を民間でやらせてもらうという仕事ばかりで、協会も大変だったと思います。われわれの業者の組合も勝手に変えられて、戦時建設団などと、政府の言うとおりでしたね。なかなか思うようにできなかったと思います。

私も学校を出たばかりですから、細かなことはあまり記憶にはないんですが、とにかく軍というか政府に振り回されていた…建設業者にとってはそういう時代でしたね。

戦前は建築関係の管轄は内務省で、建築協会も内務省から正式に許可をもらっているんです。戦後は割合に早く建設省ができましたから、建設省の肝入りで関係の法律ができてから、だいぶん様子が変わって参りました。完全な自由とは言えませんが、かなり自由に仕事ができた。それでも昭和40年近くまで高層建築は許されなかった。地震もときどきあって、福井地震は大きかったですね。



大林芳郎

日本建築協会は学会とはちょっと違って、もう少し幅の広い考え方をしておられたんではないかと思います。私は戦後の昭和25年の占領中にはじめてアメリカに行きました。パスポートをもらったのが外務省ではなくマッカーサー司令部で、10、11、12の３カ月でアメリカ中をずっと回ったんですが、何でこんな国と戦争をしたんだろうというのが感想でした。アメリカは機械化が進んでおり、とくに日本ではまだ土木は現場でコンクリートを練っている時代でしたが、向こうは生コンでした。建設関係も技術に力を入れないといかん、それ以外に手はないと私は確信しました。

帰国してからは、やかましく言って、割合に早く技術研究所もつくりましたし、昭和30年代には留学生をアメリカに随分送り込みました。ハーバードにも何人か送りましたが、一番多く出したのがスタンフォード大学で、現在までに30人以上の留学生を行かせておりますが、相当いい勉強をしてきたと思います。

―― 戦争直後の建築関係法制の整備が、今までの建築各部門の発展をもたらしたわけですが、現在は第三の節目になると考えられます。その一番大きいモメントは、この度の建築基準法の新改正ではないか。その意味では、戦争直後と同じような運命を現在は担っているのではないかと思うんです。建築界にとって今は非常に大事な時期ではないか。設計事務所の方も建築関係の方も、材料関係の方も、それから建築界をトータルして、どうしたらいいかということを考えたら、私はそういう感じを受けるんです。そういう意味も含めて、戦後の設備関係の発展に関連して、お考えがありましたら…。

尾亀　私は須賀工業におりまして、戦争中は鉄鋼工作物規定で建築と同じように設備も鉄管や非鉄金属が要りましたので、その配給をするために団体をつくらされたわけです。次々に名前が変わって、今は社団法人日本空調衛生工事業協会として全国的な活動を続けています。

戦争中は軍関係、軍需工場、徴用工員関係は、ボイラーを据えて厨房、浴槽に蒸気を送って風呂を沸かしたり、飯を炊いたりしておったんですが、こんなことを海軍の施設部で沢山やりました。

戦争がすんで、焼け跡の鉛管でも拾って整理しないとしようがないと思っていたら、駐留軍がやってきて市内の各建物の接収が始まり、その設備をする。私は上六の赤十字病院にちょっと来いと言われて、これをすっかり改修した。便所は

腰掛け式で仕切りがない、彼らは新聞を見ながら座ってやっている。建築の改修は清水建設でしたが、アメリカ軍曰く、設備の方に金がかかるんやから、おまえのところが元請けになったらいいんやと。日本ではそんなことはできないと、清水建設の下請けとして膨大な突貫工事をやりました。

そうこうしているうちに、沖縄で工事が始まる。私のところは昭和21年に三晃空調をつくりました。新店ですから、従来の会社の得意先を荒らしてはいかんと沖縄に参りました。



尾亀清四郎

バッチャープラントは軍が持っておりまして、ゼネコンから注文をしますと、時間をきめて何㎥と運んでくる。そんなことで、昭和25年から5年間ほど沖縄で仕事をしましたが、ここで新しい空調工事の勉強ができました。

昭和30年には住宅公団ができて、業界あげて協力せよということで随分仕事がきまして、団地をやらせていただきました。

―― 設計事務所関係も、戦中戦後にいろいろご苦労があったと思いますが…。

小西　私が協会に入ったのは昭和13年の4月でした。私は長谷部・竹腰建築事務所に就職したんですが、当時大阪でできていたビルは宇治電ビル、中之島3丁目の大ビルの新館、北浜の株式取引所、日本橋3丁目の松坂屋（今は高島屋になっている）ぐらいです。2、3年後には工事中の建物は戦争のためストップさせられ、丸紅の本社ビルは1階の鉄骨が立ちかけたところでストップして、戦後長い間そのままになっておりました。

当時は軍需工場の仕事ばかりで、住友金属、日本製鉄株式会社広畑製鉄所の設計などでした。

私は昭和14年から軍隊に入り、幸いに京都の師団司令部勤務になり、建築に携わっておりました。しかし、戦争が激しくなってきますと資材がない。鉄、セメント、木材、トラック用のガソリンなどは支給で、民間でも軍需工場でないと一切支給がないという状態でした。

京都府の祝園で、山のどてっ腹に洞窟を掘り、弾薬庫をつくることになり、それも鉄筋をなるべく使わないようにということで、無筋コンクリートのアーチで設計しました。これは京都師団、大阪師団を全部総括する中部軍司令部で、その工事を担当しました。あるいは三重県の四日市で軍服をつくる工場の工事などの仕事をしておったんですが、戦争が激しくなると、はじめのうちは日本が攻めていく方でしたが、だんだん受け身になり、アメリカ軍が上陸してくるかもわからないから、山のどてっ腹に洞窟を掘ってそこにこもってアメリカ軍の上陸に備えようと、19年の秋から20年の春にかけて兵隊を連れていって志摩半島全域で工事をやりました。

引き続き20年5月ごろまで鳥取から福井の間の日本海沿岸で、そういう施設をやりました。穴を掘るとき、鑿の材料となる鋼がないので非常に困った思い出があります。その他高射砲陣地を枢要なところにつくる、例えば伊勢の内宮、外宮、あるいは交通の重要な拠点である米原、桑名の近鉄とJRの鉄橋などへ参謀と視察に行ったりしましたが、実際は高射砲がなかったので、伊勢の内宮と外宮を守るための高射砲陣地をつくったにとどまりました。

民間では召集でどんどん人が減ってくる、ゼネコンでも人手不足で仕事ができなくなってくるので、師団ではいろいろな職種の者を100人ほど徴用して、それで何とか要望を賄っておったという次第です。

20年12月に復員して参りました。長谷部・竹腰事務所は日本建設産業という名前になっておったんですが、仕事がありませんでした。しばらくして住友銀行の支店の復旧に2階建ての木造の店舗の設計をしました。その後、米軍関係の仕事が出てきて、伊丹の米空軍の設計業務をしたり、奈良の黒髪山の136戸の将校用住宅の設計をして現場に行ったりしました。ここは一つの村で、住宅以外に劇場、診療所、PXなどをすべて整えるために、1年ほどかかって建築に携わりました。

まだ若く建築協会の動きもあまり知らなかったのですが、この間の記録を見せていただきますと、昭和19年に建築協会も住宅委員会以外の活動を停止しています。「建築と社会」は22年に復刊しています。私が建築協会とつながりができましたのは昭和24年11月からで、戦争中は鉄がなかったので民間で構造計算をやる人は少なく、「すぐに役に立つ鋼構造」の講習会を、竹中工務店の小泉昇さん、大阪建築事務所の高橋慶夫さんと私と3人でやりました。これは建築協会の主催です。小泉さんが部材力の算定についての講義、高橋さんが断面決定の講義、私は細部設計の講義をやったの

です。記録では大阪で１回やったということしか残っていませんが、確か大阪で２回やりました。続いて昭和25年にかけて名古屋、京都、神戸、広島、福岡でやったと記憶しております。これがはじめて私が建築協会のためにお役に立てたことだと思っております。

―― 昭和22年に「建築と社会」が復刊し、現在はかなり自慢できる雑誌になっていると思います。昭和22年といえば新体制ができ、定款の改正もなり、22年から25年にかけて支部も６支部できました。当時、新しく評議員制ができ、尾亀さんは評議員第１号とうかがっております。協会が定款改正とか、支部をつくったとかいうことで、大きく背伸びをしようという時期の協会の動きについて、何かご記憶はありませんか。

尾亀　私の入会は昭和10年12月ですが、会社が学費を出してくれましたので、須賀工業に勤めながら夜学で大阪工業大学（当時は関西高等工学校）で建築の勉強をしました。当時、大阪市から見えていた元良（勲）先生と新名（種夫）先生のお二方に卒業設計を見ていただきましたが、そのとき新名先生が協会に入れと勧めてくださったんです。卒業設計は昭和10年12月、卒業は11年３月で、12年にすぐ編集幹事会に引っ張り出され末席をけがしておりました。そういえば評議員に当選した覚えがありますが、池田（實）先生が副会長を長いことやっておられたでしょう。あの先生からいろいろと建築法規などをならったんですが、大阪府の建築課長をしておられた時分に、北の大火のあとで、大阪府建築取締規則を、それまでに用意しておったがなかなか出せなかったものを、出したといった話を聞かせていただきました。それが市街地建築物法になり、建築基準法に変わっていくわけです。

池田先生が戦争中に都市武装論を盛んに言われ、「建築と社会」で随分特集をやりました。先生は建材も設備もみな一緒にやらないかんのやと、あらゆる機会に言っておられた。そういうのが定款改正になったんだろうと思います。

支部ができて、和歌山に行ったり、名古屋に行ったりしましたが、現地で交歓会をやったり、見学をしたり、いろいろ思い出があります。

―― 昭和22年に定款改正をしたり、団体会員をつくったり、新体制は竹腰先生のかねがねの持論だったんでしょうか。

佐野　団体会員は竹腰先生ですね。新体制はどうでしょうかね。定款改正はやられたかも分かりませんね。

「建築と社会」の発行をふり返って

―― 定款改正以後、建築協会の事業活動も活発化して諸先輩もいろいろ各方面でご苦労いただきました。その中で、とくに編集関係、雑誌その他の出版関係で、それぞれご苦労いただいていると思うんですが、昭和24年に編集委員長をお願いしていました大林会長、その辺のご記憶は…。

大林　ほとんどないんです。ただいろいろ過去のものを見ますと「建築と社会」に「時の言葉」というページ、タイミングのよい題目を取り上げて、約800字ほどの文章にまとめて毎月載せるという、簡単なようでなかなか難しいことですが、２年ほど続いています。編集委員長は24年、25年とやらされているんですが、ほとんど事務局でやっていただいたと思います。

―― 編集関係でとくに力を入れられたことはありますか。

佐野　一つは大判に切り替えた。42年からです。写真が組みやすくなるからいいんだが、写真や原稿が集まるかとだいぶ心配をした。広告を集める体制も変えないと維持できなくなる。大判になってもぺらぺらの雑誌になっては困るから、重さのあるぐらいの本にしなくちゃいけない。これは僕が委員長をやりましてからの、最大の仕事です。休刊をしないこと、必ずその月のうちに出版する。放っとくと次の月の半ばぐらいまで遅れる、それを毎号合わせるようになりました。

尾亀　私が編集をやらせてもらったときは広告集めが大変で、小林清さんの広告企画小委員会をつくらなあかんという意見でできました。特集記事に合わせて広告をとるため、いろいろな工夫をした。そのうち私に広告小委員長が回ってきました。毎年12月末には１月号は出ていたんですが、その調子でいけと事務局になんぼ言うてもあきません。原稿の遅い先生がある、そんな者に頼むなと言うんですが、遅れてきて３月にならな２月号が出ん、何をしているんやといつも言っておったんですが、平成８年度から與謝野さんが編集委員長になってえらい一生懸命になって、月の初めに出るようになっています。

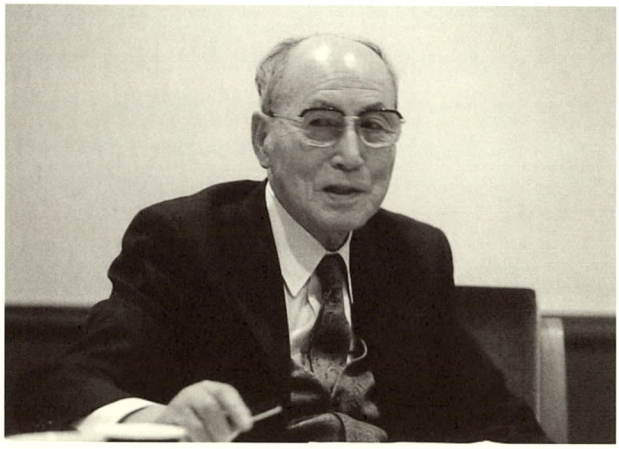
―― お金の心配もしないといかん、委員長の中で一番エライ委員長ですよ。

尾亀　一番の目玉は「建築と社会」ですね。

佐野　会員層が大阪だけではなく、京都もおれば兵庫もいる。そういう会員にサービスするのは雑誌だけですからね、どうしても雑誌を続けないといかん。非常に重要だと思います。

横尾　戦争から10年ぐらいは、ある意味ではブランクの時代だったでしょう。しかし米軍の仕事で、もの凄い勉強をしているんです。向こうのマニュアルを翻訳したり、米軍の仕事とくに沖縄の工事は勉強の場だった。コンクリート工学、土質工学などいろいろな方向の技術を吸収している。

僕が編集委員当時企画した地盤特集が読者に受けました。



横尾義貫

新しいことを入れてやったものですから…。そういう勉強の時代で、僕は早耳学と称していました。

尾亀　一番会員の多かったのは昭和45年の6600名。データーシートを出して、あれで会員が凄く増えたんですよ。データーシートは会員の一番のピークの２、３年前から出しております。

事業委員会でそれをはかったわけで、金をとって頒布するというから、ぼくは建築協会で金をとったらあかん、広告をもらったらできると…。内容によって広告をもらって、かつ権威をもたせるために坂（静雄）先生に見てもらおうということになって、坂先生のところへ毎月持っていったんです。克明にチェックされまして、毎月なかなか原稿が返ってこない、資料のないときですから、会員がわっとふえたんです。

佐野　昔は京都大学でも、先生は学生に会員になれと勧めたもんです。

尾亀　「建築と社会」で朝日ビルができた、瓦斯ビルができた、新大阪ホテルができたというと、特集をやるんですよ。貴重な資料でした。

建築協会の対社会活動

尾亀　いま一つ、協会の歴史として記録しておいて欲しいのは、創立70周年記念を契機に創設した「日本建築協会賞」のことです。建築界の総合団体として団体活動70年の古稀を祝える団体は、他に例がない。しかも建築を通じて社会に貢献しようという理想を掲げて70年。そこで、このような本会の特性を生かして、学術や技術の業績（建築作品は対象ではない）に光を当てるような賞を出してはどうかという意見が盛り上がり、当時としては一応注目されるような賞金（総額200万円）と賞牌を出そうということになった。

はじめは、果たして対象となる業績についてどのぐらい推薦が出てくるか心配する向きもありましたが、黙々と努力をしている建築関係者はどこかで必ずいるはずであり、むしろ、そういった方たちを顕彰して励ますことにより、一層頑張って社会にさらに貢献する働きをしてくれると思う。そのような業績は必ず見いだせると思うという会長の意向が伝わったのか、ふたを開けてみるとやはり手応えはあった。

短い期間ではありましたが、22件（団体18件、個人４件）の応募があり、東畑謙三先生が選考委員長で委員13人が大いに議論して選考の結果、７件の業績がみごとに受賞することになった。以来、先般の80周年には、その第４回目の募集選考が行われているが、すでに18件の協会賞と５件の特別賞がでている。

聞くところによると、最近では、次の協会賞の募集はいつ予定されているか、というような問い合わせもしばしばあるようで、日本建築協会賞も建築界の名誉ある賞として定着してきたように思います。

――　住宅委員会では、非常にご苦労なさったとうかがっていますが…。

小西　委員会は昭和４年の発足で、はじめのうちは、婦人と住宅に関する展覧会、神戸の改善住宅展、住みよい家の展覧会とかいろいろやっていました。

私が委員長を仰せつかりましたのは昭和45年で、それから10年間、これは私が住宅委員長になる３年前ぐらいからやっておったんですが、よろず相談住宅展を阪神百貨店やそごう百貨店でやりました。当時は戦争で住宅が壊されたり、焼かれたりしていたのが、人の気持ちも平常に戻って、だんだん建築資材も出回るようになり、加えて核家族の風潮から、住宅に関する関心が深くなってきました。また住宅専門のナショナル住宅、大和ハウス、小堀住建などいろいろ住宅会社もできてきました。住宅展は阪神百貨店で600㎡の面積を無料で提供していただき、そごうでも同じ程度の提供を受け、住宅委員会としては非常に力を入れて１年に１回やってきました。

この事業の主催は日本建築協会ですが、後援が大阪府、大阪市、住宅金融公庫、住宅公団などで、委員が出て設計上のいろいろな相談に答えたり、資金面、契約面等の相談は会計士とか司法書士の方に出ていただき相談にのっていただきました。展覧会は６日間で5000名を超える人が訪れて、７～800件の建築に関する相談を受けました。

非常に好評で、私たち委員も力を入れてやりました。委員会で新しいことをやろうと、太陽熱を使って冷暖房をする建物をつくりました。くずはの住宅の展示場の200坪のセンターハウスにソーラーによって冷暖房をやり、朝日新聞社と矢崎総業の協力を得ました。



小西　岬

これはガス、水道の約60～70％の節約になりましたが、残念ながら雨の日や曇りの日は用をなさないので、従来の空調設備プラスソーラーの設備を二重にしなければならず、ランニングコストでいうと10年ぐらいで元を取り返して、以後はソーラーの方が得という結果が出るんですが、はじめに二重の設備をしないといけないので、今はあまり普及していません。やがてツーバイフォーが日本に入ってきましたので、この研究もやりました。

―― 当時としては一般市民への啓蒙ということがあったようですが、協会の唯一の対外的活動で、貴重な経験だったと思うのです。現在では他の団体でも取り上げておられますが、現在の住宅の課題というものが非常に大きいと思いますので、協会としての新しい事業活動の一つの例になるのではないかと、私は思っております。

小西　住宅は女性に関係が深く、建築士会でも女性部会でいろいろと住宅を研究しておられます、身障者、老人問題もありますから。

―― 住宅委員会を復活せよという声も上がってきております。

小西　士会では私が会長のときに力を入れて女性会員をふやして、現在、会員7250名のうち女性会員は550名おります。協会のこれからの行き方として、女性会員に活動してもらえるようにもっていくことがいいのではないかと思います。

建設各部門の交流を協会の柱に！

―― 戦前は関係団体といっても４団体ぐらいしかなかったが、現在は友好団体と称する団体が14もあり、設備、構造、材料などの専門化した団体ができております。建築協会の目的をみると、関係各部門の連携協力による建築の進歩発展とありますが、各部門の連携協力は10いくつある団体との連携協力ということだけなのか、私ちょっと疑念を感じます。もう少し新しい各部門の連携協力のあり方を考えてみる必要があるのではないか。また、建築協会は職能団体ではなく、トータルな団体だけれども独自性がないというか、そういう弱みがあるように思います。魅力がないということもよく聞くわけですが、諸先輩の方々はそれぞれの立場でそういう問題、あるいは東と西の関係、東の学会か西の協会かというとらえ方をされておりますが、諸団体等の関係で協会をどう位置づけをするかということについて、お話をうかがいたいのですが…。

佐野　戦前は、新しい建物が出来上がるとみんな見たがる。単に紹介だけでなく批判も出る、言われる方はそれに対抗して、そうじゃないんだ設計の主旨はこういうことだという説明をしなくてはならない。各部門の交流が自然にできるのですね。今はそういうことをやっても人は集まらない。建てている方は、そんなことで無責任な悪口を言われたら迷惑だ、そうなるとあまり悪口を言う会合になるものは、会としてはやれない、考える必要があるかもしれませんね。

交流とは何をやるかといえば、現物によるのが一番手っ取り早いんですが、そういうやり方が今後できないとすると、テーブルの上の交流というやり方になるのではないか。われわれは交流、交流といっているが、どうやって交流するのか、それを見いだしていかなければならない。

もう一つは、この協会に入った独自の専門分野の人が、いろいろな立場の人…いわゆる世間でいう偉い人も偉くない人も、対等にいろいろ話ができる機会になる。しかしそういうシステムをこしらえないと、放っておいては、なかなかそうはいかない。それぞれの分野の人はそれぞれに自信があるから、それをひっくり返すようなことに関しては反発する、感情論になってしまう。それをなんとか交流にまでもってきたのが戦前の状態ではなかったかと思います。だから、もう少し具体的な方策を研究していただいたらどうか。建物はふえていますし、関係する技術屋さんもふえています。仕事はうんとふえているので、今は話題には困らないはずなのに、みんな批判をしない。うっかり批判すると問題が起こるから見逃してしまう。明らかに欠陥だと思うことも、誰もが批判しない。それでは名建築が一人歩きすることを許すようなことになる。おかしいことを直すべきだということは、あっても当然だと思います。私は設計と施工と設備の三者の交流はやり得ると思います。

―― 私は何のためらいもなく上司、先輩のご指示で協会に入りました。平の会員なんですが、ところが委員会に行きますと、偉い先生がおられるんですが、空気として自由にもの

が言えたという経験をさせていただきました。協会のああいう雰囲気はよかったなという印象があります。

いささか話が外れるかも知れませんが、今年２月号の「建築と社会」の大阪市都市整備局特集号で、ある大学の先生のご寄稿を読ませていただいて、ショックを受けたんです。建築作品という表現がよくない、建築物は社会的財産ではないか。それを一建築雑誌が建築作品という次元の取り上げ方をするのはまちがっている。いやしくも建築協会が建築物を紹介するのならば、市民財産であるという観点に立った紹介があってもしかるべきではないかというご意見なのですが、私は聞くに値するご意見ではないかと思うんです。



三品哲夫

横尾　作品という言い方がいつから登場したか、戦前はあったのか、丹下（健三）先生の設計でも作品という言い方はしましたか。

佐野　私は国鉄の出身ですが、私がいたころの国鉄の駅の建物は作品と言わなかった。京都ではじめて作品になった。あれは完全に作品という扱いですね。その職場での建物について、固有の呼び方でははなくて、出来上がる過程で誰の手によってやったかによって作品に変わるんです。僕らプロの立場から言えば、作品に値しないものまで作品と言っているということに、むしろ反発をしたい。

共々に生きる

――　最後に、建築協会の現状に対するご意見、将来どうあるべきかということについてお聞かせいただきたいと思います。

横尾　雑誌に評論を書きたいときがある。大判になる以前は割に文章が多かった。僕も「建築と社会」にいくつか投稿させてもらった。適当にフリーに書けた気持ちがしますね。

尾亀　昔、「建築と社会」に紫烟室というコーナーがあって、私が編集をやっているころ、私もだいぶ書きましたが、メンバーが決まってきてね、みな書いてくれるといいんですが。戦争中です。

横尾　歴史的なことで、どこか活字にしておいて記録したいので、「建築と社会」にそんなスペースがあればいいなと思います。昔は関西のオピニオン雑誌みたいなところがあったでしょう。

――　自由投稿はあるんではないですか。

佐野　自由投稿をつくっても、投稿が継続しない。一、二回はいいんですが、だんだん指名しないと書いていただけなくなる。

小西　建築士法や基準法の改正で、士会、建築士事務所協会、日本建築家協会とかで会合する機会はたびたびあるんですが、その点、建築協会はないわけですね。私は国際交流を考えたらどうかと考えます。例えば建築士会連合会は中国及び韓国の建築士会と交流をやっているんですよ。大阪府建築士会も釜山建築士会と交流していますが、同じ性格の建築士会と交流を深めているかというとそうではない。韓国で建築士会といっても、昔の日本の建築家協会に近い専業の設計事務所の会です。それでもお互いに毎年総会のときに交替で行き来して、そのうち青年ばかりでディスカッションをやろうということで、集まったときに会合を持って韓国と日本で議論をやっているんです。また、向こうの新しい建物を見学に行くことをやっています。

建築協会も建築事務所、建設業者、設備業者とかがおられますので、そういう機会があればお互いに親しくなりますし、交流しているうちに何か一緒にやろうじゃないかということも出てきます。今後、国際的な事業をおやりになるのも、建築協会の一つの道かと存じます。向こうに行くことでいろいろ勉強しますし、若い人で向こうに行く機会のない人も協会のお世話で行けます。

もう一つは、建築士会は45名の理事のうち、女性理事が５名います。協会の女性会員は100人ぐらいいると思うんですが、女性が中心となり、活躍してもらいたいと思います。介護のことも問題になっていますから、それに伴う住宅の研究なども必要になってきます。

横尾　共々に生きるということを考えなくちゃいかんと思います。ソサエティ・オブ・ソサエティズという感覚でね。

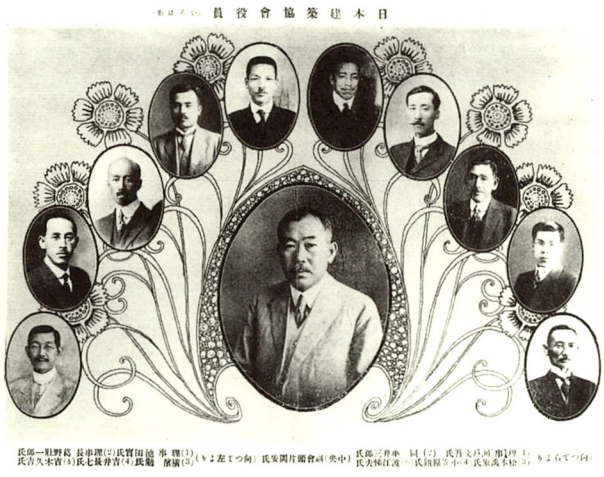
尾亀　大阪には学会は別にして、技術者団体はなかった。建築士法ができてから、建築士会ができ、事務所協会も独立するし、家協会もできる。昔の協会は盛んなものでしたが、今はどこでもやりますから、その辺は難しい。

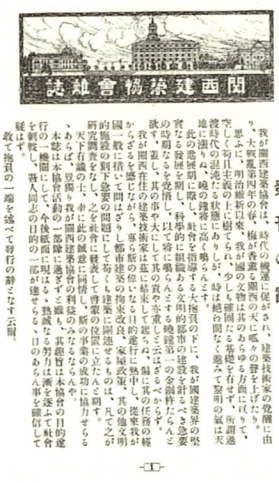
三品　いろいろありがとうございました。

第３編

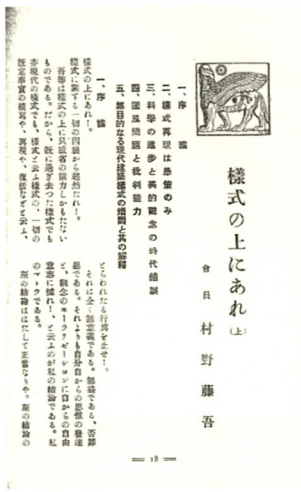
年表(1917～1996)

	日本建築協会	関西
1917	**3/30関西建築協会（現・日本建築協会）設立** **（片岡建築事務所内）** 関西建築協会雑誌発刊	三越大阪支店（横河工務所） 日本郵船大阪支店（曾彌・中條）
1918	**大阪市区改正について（片岡安）** デモクラシーと建築（佐野利器）	大阪市中央公会堂（辰野・片岡） （岡田信一郎）
1919	〈日本建築協会と改称〉 東京大改造論（片岡安） **様式の上にあれ（村野藤吾）（5～8号）**	横浜正金銀行神戸支店（長野宇平治） 十五ビルディング（片岡安）
1920	改良住宅設計展覧会 大倭時代の文化と建築（置塩章） 会誌を「建築と社会」と改題	神戸海洋気象台（渡邊節） 廣岡邸（W.M.ヴォーリズ）
1921	煉瓦について（大熊喜邦） 法制委員会成立	大丸大阪店（W.M.ヴォーリズ） 大阪市庁舎（大阪市建築部） 大江ビルヂング（葛野壮一郎）
1922	桜ヶ丘住宅改造博覧会	大阪毎日新聞社（片岡安） 大阪商船神戸支店（渡邊節） 山邑邸（F.L.ライト）
1923	都市計画委員会発足 帝都復興案検討	三井物産大阪支店（横河工務所） 大阪松竹座（大林組）
1924	**日本における住宅の変遷とその将来（武田五一）** （大阪大江橋コンペ）	大阪倶楽部（安井武雄） 野村ビルディング（片岡安）
1925	大阪記念博覧会	大同生命ビルディング（W.M.ヴォーリズ） 京大本館（武田五一） 大阪ビルディング（渡邊節）
1926	協会社団法人認可 会誌・米国建築界の紹介	第一銀行大阪支店（西村好時） 住友ビル（住友合資工作部）





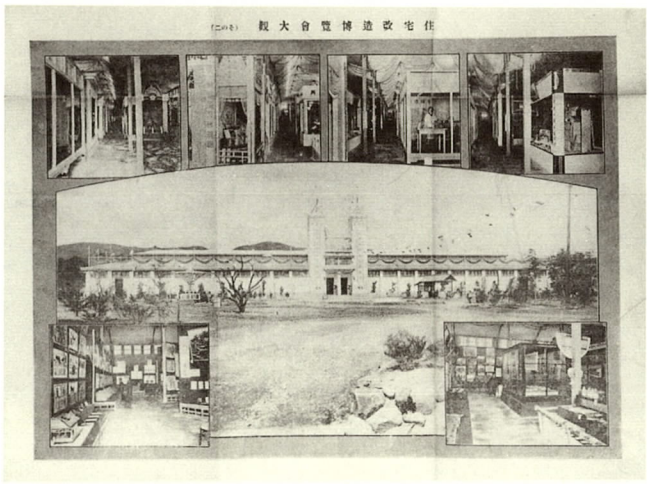
発刊の辞　1917



様式の上にあれ（村野藤吾）　1919

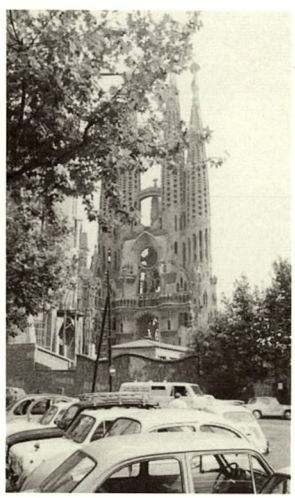
1917-1926 年表

日本	海外	
三菱第21号館（J.コンドル）	工業都市（ガルニエ） 〈ロシア構成主義〉 〈デ・スティール誌発刊〉	**1917**
東京海上ビル本館（曾彌・中條） 白木屋（木田保造）	**第一次世界大戦終戦** ヘルシンキ都市計画（E.サーリネン） レッドアンドブルーチェア（リートフェルト）	**1918**
国会議事堂コンペ（渡邊福三） 台湾総督府（長野宇平治）	フリードリッヒ街のオフィスビル（ミース.V.ローエ） 第三インター記念塔（タトリン） ベルリン大劇場（ペルツィヒ）	**1919**
〈分離派建築会発足〉 明治神宮（伊東忠太・大江新太郎）	国際連盟 アインシュタイン塔（メンデルゾーン） ワイマールバウハウス設立	**1920**
自由学園（F.L.ライト・遠藤新）	ガラスの摩天楼案（ミース.V.ローエ）	**1921**
帝国ホテル（F.L.ライト） 建築耐震構造論（内藤多仲）	パリ都市計画（ル・コルビュジエ）	**1922**
丸の内ビル（三菱地所） 東大工学部講堂（内田祥三） **関東大震災（9/1）**	ストックホルム市庁舎（エストベルヒ）	**1923**
同潤会設立 歌舞伎座（岡田信一郎） 平和記念東京博覧会（堀口捨己）	ワイマールバウハウス閉鎖 シュールレアリズム宣言（A.ブルトン）	**1924**
東京中央郵便局（内藤・山田守） 東大講堂（内田祥三・岸田日出刀） 東京朝日新聞社（石本喜久治）	デッサウバウハウス設立 ヌーボー館（ル・コルビュジエ） **〈アールデコ様式〉**（装飾工業芸術展覧会）	**1925**
帝都復興法公布 青山アパート（同潤会）	サグラダファミリア教会（A.ガウディ） 記念碑（ミース.V.ローエ）	**1926**



桜ケ丘住宅改造博覧会　1922—10


帝国ホテル（F.L.ライト）


サグラダファミリア（A.ガウディ）

	日本建築協会	関西
1927	震災特集 庭園と建築特集	聴竹居（藤井厚二） 大阪中央電信局（逓信省） 先斗町歌舞練場（大林組・木村得三郎）
1928	建築士法案について 建築知識普及展覧会	日本勧銀京都支店（渡邊節） 神戸ユニオン教会（W.M.ヴォーリズ）
1929	住宅委員会発足	関西学院（W.M.ヴォーリズ） 神戸商工会議所（古宇田實） 神戸モダン寺（葛西万司）
1930	建築物の高さに関する研究 メートル法か尺法かの検討 婦人と住宅に関する展覧会	甲子園ホテル（遠藤新） 南海ビル（久野節） 南大阪教会（村野藤吾）
1931	神戸鈴蘭台生活改善住宅展	朝日ビルディング（石川純一郎） 綿業会館（渡邊節）
1932	15周年記念号(10) 緑ヶ丘保健住宅博 大美野田園都市住宅博	京都洛東アパート（土浦亀城） 大阪パンション（村野藤吾）
1933	千里山花壇附近住宅設計図案懸賞募集による博覧会 上野芝住宅博 建築講演会（ブルーノ・タウト）	大阪ガスビルディング（安井武雄） 三井ビルディング（高橋貞太郎） 地下鉄御堂筋線（梅田～心斎橋）開通
1934	大空への武装展覧会	琵琶湖ホテル（岡田信一郎） 京都文化研究所（村野藤吾） 日赤京都支部病院（武田五一）
1935	防火・避難施設について	そごう百貨店（村野藤吾） 京都朝日会館（石川純一郎） 大阪株式取引所（長谷部・竹腰）
1936	特殊建築物規制に関する講演会 タウト寄稿	大阪放送会館（渡辺仁） 大阪市美術館（大阪市建築課） 都ホテル本館（村野藤吾）



白井晟一卒業作品　1928－05



大美野田園都市住宅博覧会会場　1932－10


大美野田園都市鳥瞰写真　1936－08

1927-1936 年表

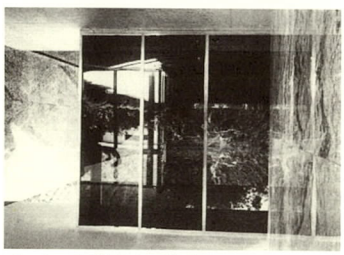
日本	海外	
不良住宅地区改良法公布 日本インターナショナル建築会設立 代官山アパート（同潤会）	シュツッツガルトワイセンホフジードルンク建設 連盟会館コンペ・ガルシュの別荘（ル・コルビュジエ） 工業生産住宅（フラー）	**1927**
日本橋白木屋（石本喜久治） 東大図書館（内田・岸田） 徳川公爵邸（中條精一郎）	CIAM 結成 プレストレストコンクリートを発明	**1928**
国宝保存法公布 名古屋市庁舎コンペ（平林金吾） ニコライ堂再建（岡田信一郎）	CIAM 第 2 回総会　**世界大恐慌** バルセロナ博ドイツ館（ミース.V.ローエ） パイミオサナトリウム（A.アアルト）	**1929**
新興建築家連盟結成 日本生命館コンペ（高橋貞太郎） 東京海上ビル（曾彌・中條）	CIAM 第 3 回総会 英テクトン結成 組立住宅（グロピウス）	**1930**
森五ビル（村野藤吾） アメリカ大使館（A.レーモンド） 虎屋商店（岡田信一郎）　**満州事変**	デ・スティール解散 エンパイヤステートビル（シュレヴ・ハーモン・ネプ） サヴォイ邸（ル・コルビュジエ）	**1931**
日本第一生命本社コンペ（渡辺仁） 聖ロカ病院（A.レーモンド） 御茶ノ水駅（伊藤滋）	合板家具（A.アアルト） ベルタ競技場（ネルヴィ）	**1932**
日劇（渡辺仁） フランス大使館（A.レーモンド） 明治ビル（阿部・渡辺）	CIAM 第 4 回総会　バウハウス閉鎖（ベルリン） 金門橋・シュバントバッハ橋（マイヤール） アルジェラスのマーケットホール（トロハ）	**1933**
日本建材協会設立 東京市庁舎コンペ（宮地二郎） 築地本願寺（伊東忠太）	ハーグ美術館（ベルラーヘ） ベラブイスタ団地（ヤコブセン） ロンドン動物園ペンギンプール（テクトン）	**1934**
東京映画劇場（清水建設） 雲仙観光ホテル（竹中工務店） 乾式構造（前川國男）土浦自邸（土浦亀城）	A.E. コンクリート開発 ハイポイントアパート（テクトン） 円形校舎（ノイトラ）	**1935**
パリ万博日本館計画（前川國男） 国会議事堂（営繕管財局） 東京中央放送局（山下寿郎）	落水荘ーカウフマン邸ー（F.L.ライト） 自邸（A.アアルト） ブリストルの展示住宅（ブロイヤー）	**1936**

1917 1927 1937 1947 1957 1967 1970 1973 1976 1979 1982 1985 1988 1991 1994

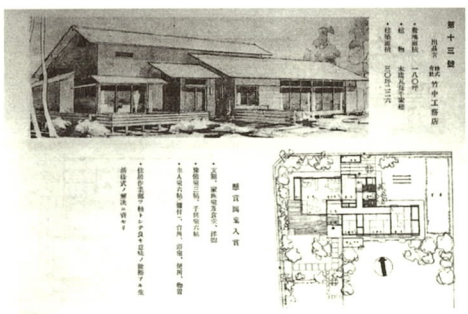

綿業会館（渡邊節）


大阪ガスビルディング（安井武雄）


サヴォイ邸（ル・コルビュジエ）


バルセロナ博ドイツ館（ミース.V.ローエ）

	日本建築協会	関西
1937	大阪下水に関する講演会 市街地建築物法についての講演会 鉄材に関する講演会	和歌山県庁舎（内田・増田） 丸物百貨店（渡邊節） 比叡山ホテル（村野藤吾）
1938	防空と建築展 都市防火講演会 木造都市防火改修方法	日本生命本社・丸紅京都支店（長谷部・竹腰） 京都競馬場（安井武雄） 造幣局庁舎（大蔵省）
1939	灯火管制困難の工場設備について 時局と建築材料展 忠霊塔に関する講演会	滋賀県庁舎（佐藤武夫） 神戸海洋気象台（堀口捨己） 神戸三越（横河工務所） 平野澄水閣（大林組）
1940	建築関係訴訟について 満州移民住宅の研究 空襲に関する講演会 満州北支建材界の事情を聴く会	橿原神宮駅（村野藤吾） 四天王寺五重塔（天沼俊一） 生駒山航空道場（石川純一郎） 新大阪駅（鉄道省）
1941	防空壕築造指導 市民防空壕展覧会	石原産業本社（村野藤吾） 蛍ヶ池蛍雪寮（早良俊夫） 宇治山田神宮皇学館
1942	四会合併問題起こる 集合住宅研究 **25周年記念**菖蒲池厚生住宅展 会旗制定	大阪絹人絹会館（渡邊節） 甲子園竹中寮（竹中工務店）
1943	南方建築展覧会	川西航空甲南工場（竹中工務店）
1944	四会合併・新団体発足決定 住宅委員会のみ活動他は活動停止 会誌３月号をもって休刊	
1945	建築学会との合併は延期することに常務会で決定	文楽座焼失
1946	復興住宅展を市内天王寺動物園で開催 片岡安会長死去 竹腰健造、会長に就任	関西文化建築連盟結成 新住宅創刊 神戸サッスーンアパート（武田五一） 神戸高砂倉庫建設

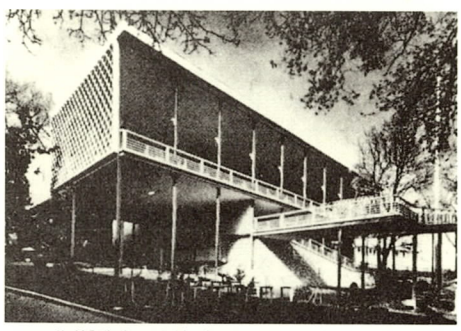


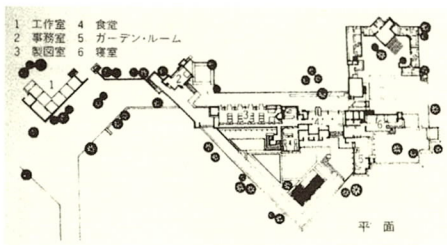
25周年記念菖蒲池厚生住宅展　1942

1937-1946 年表

日本	海外	
名古屋汎太平洋博開催 東京帝室博物館（渡辺仁） パリ博日本館（坂倉準三）	CIAM第5回総会 パリ博土木工学館（ペレー） ヴトベックの住宅（シュリーゲル）	**1937**
東京女子大チャペル（レーモンド） 強羅ホテル（土浦亀城） 第一生命館（渡辺仁）	ダッチトラック工場（A. カーン） タリアセン・ウエスト（F.L.ライト） フィンスベリー保健センター（テクトン）	**1938**
ニューヨーク万博日本館（山脇巌） 大島測候所（堀口捨己） 出版／日本美再発見（タウト）	ニューヨーク世界博 ニューヨーク近代美術館（ストーン・ゴットウイン） 世界博スイス展セメント館（マイヤール）	**1939**
日光観光ホテル（栃木県営繕課） 日本化学八戸工場（宮崎謙三）	米SOM事務所開設 ストックホルム火葬場（アスプルンド） イリノイ工科大学（ミース.V.ローエ） **日独伊三国同盟**	**1940**
岸記念体育館（丹下健三） 山口画伯邸（吉田五十八） 日光竜頭山荘（市浦健）　**真珠湾攻撃**	ユトレヒト市立劇場（デュドック） オルテベロ格納庫（ネルヴィ）	**1941**
坂倉準三構成ダヴィンチ展 大東亜建設記念造営計画コンペ（丹下） 食寝分離論（西山夘三）	ローマ博 ブラジル教育保健省舎（ニーマイヤー） ジョンソン邸（P.ジョンソン）	**1942**
登呂遺跡発見 在バンコック日本会館コンペ（丹下） 日独会館（ペッツオールド・久米）	聖フランシスコ教会（ニーマイヤー） グランブルック芸術大学博物館と図書館（サーリネン） 出版／存在と無（サルトル）	**1943**
国民住居論（西山夘三）	ノルマンディ上陸作戦 パリ解放	**1944**
住居緊急措置令　**終戦** 戦災復興院設置 住居不足430万戸	コミュニティの再建（グロピウス） サン・ディエ都市計画案（ル・コルビュジエ） コペンハーゲン放送局（ラウリッツェン）	**1945**
銀座風月堂（村田政真） 引揚孤児ホーム（中村・遠藤）	グロピウスTAC組織 ジェファーソン記念碑コンペ（サーリネン） ヴァヴィスタ銀行（ニーマイヤー）	**1946**

1917 1927 1937 1947 1957 1967 1970 1973 1976 1979 1982 1985 1988 1991 1994


パリ万国博覧会日本館（坂倉準三）



タリアセン・ウエスト（F.L.ライト）

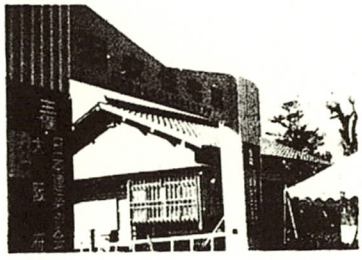

ストックホルム火葬場（アスプルンド）

	日本建築協会	関西
1947	「建築と社会」再刊 都市復興講演会 大阪市天王寺区公館地区復興コンペ 大阪市南区公館地区復興コンペ	大阪大学構築学科設置
1948	天神橋大阪建設会館に分室設置 建築制限規則説明会	大阪土木建築業協会設立 大阪平和博開く
1949	住宅金庫設置運動 建材審査委員会設置	大阪市立大学建築学科設置 近畿工専連合建築展 京都公楽会館（村野藤吾）
1950	住宅金庫の標準プラン作成研究 住宅金庫と基準法について 建築新法令講演会	神戸銀行協会（日建設計） 大阪高島屋（坂倉建築事務所） 大阪モータース（浦辺鎭太郎）
1951	プラスチックについての講演会	志摩観光ホテル、アポロ座（村野・森建築事務所） 阪急航空ビル（竹中工務店） 大阪女学院（W.M.ヴォーリズ）
1952	沖縄事情講演会35周年記念大講演会 ノイトラ講演会	大阪産経ビル・第一生命ビル（竹中工務店） 大阪金属会館（竹腰健造）
1953	これからの建築技術教育はどうあるべきか 欧米の住宅について 創立35周年記念史	富士フィルムビル（東畑建築事務所） 日綿実業ビル（安井建築設計事務所） 真珠会館（光安義光）
1954	ローコスト住宅・住まい方について研究 第１回コンクリート技能講座開催	近映会館・近鉄会館（村野・森建築事務所） アシベ劇場（清水建設） 倉敷紡績本社新館（浦辺鎭太郎）
1955	主婦と台所展講演と映画会	阪神都市協議会設立 三和銀行本店（山下寿郎） 伊丹市庁舎（久米建築事務所）
1956	軽量鉄骨構造について講演会	香里ニュータウン着工 通天閣（内藤多仲） 神戸新聞本社（村野・森建築事務所）



大阪市天王寺区公館地区復興設計当選図案／入選・西山卯三　1947－03・4・5

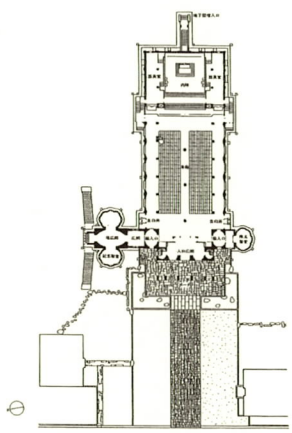
羽衣住宅展


羽衣住宅展　1952－12


通天閣

1947-1956 年表

日本	海外	
これからの住まい（西山夘三） 出版／ヒューマニズムの建築（浜口隆一） 紀伊國屋書店（前川國男）	CIAM 第 6 回総会 大ロンドン計画着手 ブロイヤー邸（M. ブロイヤー）	**1947**
建設省設置 仙台市公会堂コンペ（武基雄） 藤村記念館（谷口吉郎）	UIA 発足 モリス商会（F. L. ライト） フォード自動車会社（L. カーン）	**1948**
法隆寺金堂焼失 戸山ハイツ（建設省） 慶応大学学生ホール（谷口吉郎）	CIAM 第 7 回総会 ガラスの家（P. ジョンソン） 実験住宅（C. イームズ）	**1949**
建築基準法・建築士法制定 八勝館御幸の間（堀口捨己） 山口市庁舎（蔵田周忠）	国際連合本部（ハリスン他） ファンズワース邸（ミース. V. ローエ） トリノ展示ホール（ネルヴィ）	**1950**
森邸（清家清） 鎌倉近代美術館（坂倉準三） 日活国際会館	CIAM 第 8 回総会 ゼネラルモータース技術本部（E. サーリネン） 繭の家（P. ルドルフ）	**1951**
法隆寺五重塔竣工 日本相互銀行（前川國男） 新丸ビル（三菱地所）	出版／芸術と技術（マンフォード） レバーハウス（S. O. M.） セイナツサロ町役場（A. アアルト）	**1952**
愛知県文化会館コンペ（小坂秀雄） 丹下邸（丹下健三） 法政大大学院（大江宏）	CIAM 第 9 回総会 マルセイユ共同住宅（ル・コルビュジエ） MIT オーディトリアム（E. サーリネン）	**1953**
国立図書館コンペ（田中・大高） 神奈川県立音楽堂（前川國男） 世界平和記念聖堂（村野藤吾）	カラカス大学都市（ヴェラニュヴァ） ウルム造形大学（マックスビル） インランド・スチールビル（S. O. M.）	**1954**
住宅公団発足 八雲小学校（吉武泰水） 羽田国際空港（松田・平田）	IIT 建築科教室（ミース. V. ローエ） MIT 礼拝堂・講堂（E. サーリネン） ミラノ近代美術館（カルデラ）	**1955**
日本建築家協会発足 延暦寺大講堂焼失 松井田町役場（白井晟一）	CIAM 第10回総会 シャンディガール最高裁判所（ル・コルビュジエ） メキシコ大学都市（M. パニ）	**1956**

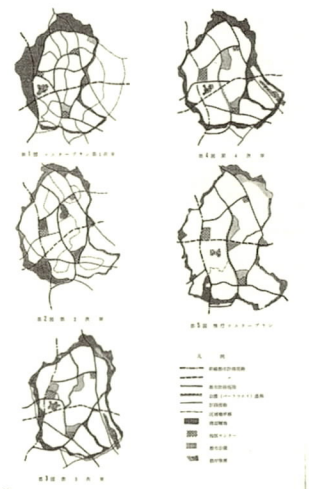


世界平和記念聖堂平面図（村野藤吾）



モリス商会内部（F. L. ライト）

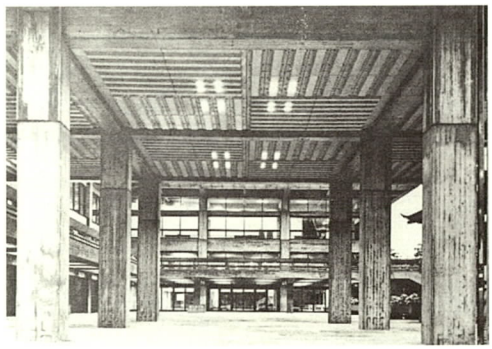
	日本建築協会	関西
1957	住宅相談所設置	神戸市庁舎、新桜橋ビル、住友ビル別館（日建設計） 竹中工務店本社（竹中工務店） 京都ガスビル（安井建築設計事務所）
1958	尾崎久助会長に就任	新朝日ビル、関西テレビ（竹中工務店） 新大ビル、大阪歌舞伎座（村野・森建築事務所） キリン会館、味の素ビル（三菱地所）
1959	基準法の改正について研究	都ホテル佳水園、泉州銀行（村野・森建築事務所） 壽屋山崎工場（安井建築設計事務所） 大阪三井ビル（横河工務所）
1960	テレビ放送実現 欧米建築視察団出発	京都会館（前川國男） 電通大阪支社（丹下健三） 久保田鉄工（日建設計）
1961	違反建築防止の啓蒙運動の実施方法を検討審議	阪神高速道路公団設立 丸善石油本社ビル（石本建築事務所） 都ホテル（村野・森建築事務所）
1962	**創立45周年記念事業** 出版／ふるさとのすまい	出版　ガイドブック大阪の建築（大阪府建築士会） 堂島開発計画（槇・竹中・小川・田村） 小原流家元会館（清家清）
1963	南海住宅設計コンペ	近畿圏整備法案成立 大阪放送会館、大阪神ビル（大林組） 大阪府農林技術センター（東畑建築事務所）
1964	東畑謙三会長に就任	京都計画（京大西山研） 京都タワービル（山田守） ㈶日本建築総合試験所設立
1965	よろず相談住宅展開催	1970万博会場大阪千里丘陵に決定 奈良計画（京大西山研） 史都計画（沖他）
1966	日本万博コンストラクションガイド作成 基準法・士法制定15周年記念講演会	1970年万博会場計画最終案決定 国立京都国際会館（大谷幸夫） 朝日放送本社（大成建設）



千里ニュータウン―マスタープランまで―　1962－01



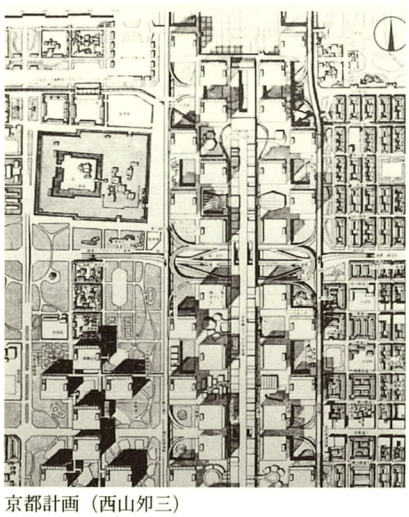
ふるさとのすまい

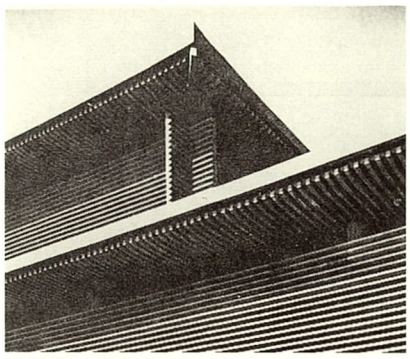


京都会館（前川國男）

1957-1966
年表

日本	海外	
中央公論本社（芦原義信） ヴィラクウクウ（吉阪隆正） 東京読売会館（村野藤吾）	フィラデルフィア・リビング・シティ計画(L. カーン) ブラジリア計画（O. ニーマイヤー） シドニーオペラハウスコンペ（J. ウッツォン）	**1957**
国立陸上競技場（建設省） 香川県庁舎（丹下健三） 東京タワー（内藤多仲）	ブロードエーカーシティ（F. L. ライト） シーグラムビル(ミース. V. ローエ、P. ジョンソン) 文化の家（アアルト）	**1958**
国立西洋美術館（ル・コルビュジエ） 塔状都市案（菊竹清訓） 善照寺（白井晟一）	グッゲンハイム美術館（F. L. ライト） ユネスコセンター（M. ブロイヤー／P. ネルヴィ） サラソタ高校（ルドルフ）	**1959**
外務省庁舎（小坂秀雄） ホテル日光（芦原義信） 名古屋大学豊田記念講堂（槇文彦）	ルクセンブルグ国際劇場コンペ（ブールボン） ダラス劇場（F. L. ライト） ブラジリア議会場（ニーマイヤー）	**1960**
傘の家（篠原一男） 東京文化会館（前川國男） 東京計画1960（丹下健三）	WHO 本部指名コンペ（B. チュミ） ルーズベルト記念碑コンペ（ペダーソン） ヘルシンキセンター計画（A. アアルト）	**1961**
アテネフランセ（吉阪隆正） 資生堂ビル（谷口吉郎） 三愛ドリームセンター（日建設計）	マリン郡庁舎（F. L. ライト） TWA エアポート・ダラスエアポート(サーリネン) 空軍大学礼拝堂（S. O. M.）	**1962**
国立劇場コンペ（竹中工務店） 国立国際会館コンペ（大谷幸夫） 出雲大社庁舎（菊竹清訓）	IBM シアトルオフィスビル（M. ヤマサキ） ベルリンフィルハーモニックホール（シャロウン） レスター大学工学部校舎（J. スターリング）	**1963**
国立屋内体育館（丹下健三） 帝人中央研究所（ポルシェック） 南山大学（A. レーモンド）	ニューヨーク世界博開催 アリゾナ州立大学記念劇場（F. L. ライト） ハインツ会社ビル（パーキン）	**1964**
山口銀行（圓堂政嘉） 蛇の目ビル（前川國男） 花泉町農協会館（大高正人）	スコピエ計画国際コンペ（丹下健三） ベルリン図書館コンペ（シャロウン） クラーク大学生センター（TAC）	**1965**
津山文化センター（川島甲士） 内之浦 M ロケットセンター（池辺陽） ソニービル（芦原義信）	出版／建築における複合性と対立性(R. ヴェンチューリ) ソーク生物学研究所（L. カーン） ホイトニー美術館（M. ブロイヤー）	**1966**


京都計画（西山夘三）

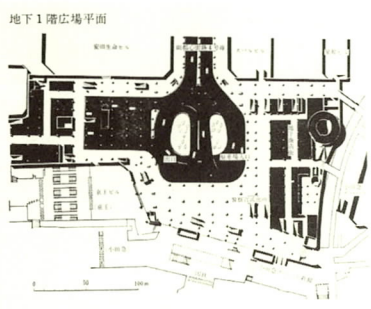

国立劇場（竹中工務店）


香川県庁舎（丹下健三）

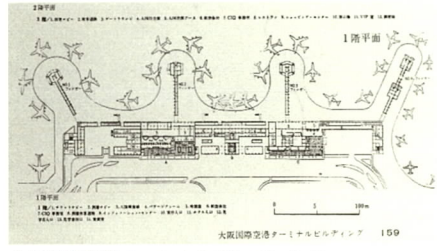
	日本建築協会	関西
1967	**日本建築協会50周年記念号**　(03) 社会と建築　(04) モントリオール万博　(08) 関西の建築50年回顧展 よろず相談住宅展 モントリオール万博視察団派遣 最近のP・C工法講演 見学会／霞ヶ関高層ビル 国立劇場 香川県庁舎	大津市庁舎（佐藤武夫） 宝塚カトリック教会（村野藤吾） 大阪銀行協会（日建設計） 梅田第一ビル（清水建設） 桜井市庁舎（久米建築事務所） 桜井寺本堂（村野藤吾） 戦没学徒記念若人之広場（丹下健三） 大阪万博起工式
1968	都市生活　(01) 教育施設　(05) 医療施設　(06) 都市交通施設　(07) 群としての住居　(09) 都市のアクセサリー　(10) よろず相談住宅展 見学会／日本の伝統工芸を見る会 出版　／建築データシート	大阪芸術大学第3期（第一工房） 朝日新聞ビル（竹中工務店） 箕面観光ホテル（坂倉建築研究所） 大阪商工会議所ビル（日建設計） 臨海センタービル（槇文彦） 豊中市立市民会館（池田宮彦） 河原町カトリック教会（富家宏泰）
1969	建築産業の構造と方向　(01) 建築史の方向　(05) 民家の系譜と保存計画　(10) ブルースガフ講演会 超高層建築講演会 日本万博お祭り広場について 見学会／神戸商工貿易センタービル 日本の伝統工芸 ホテルプラザ 出版　／設備技術者のための建築の知識	花山の家（篠原一男） 日本コカコーラ大阪プラント（圓堂政嘉） 毎日放送記念会館ミリカホール（大林組） 大阪マーチャンダイズ・マート（竹中工務店） 新大阪センイシティ（RIA建築綜合研究所） 志摩観光ホテル新館（村野藤吾） ホテルプラザ（大成建設） ホテルブルースカイ（坂倉準三） 大阪国際空港ターミナルビルディング(安井建築設計事務所)



創立50周年記念号　1967－03



新宿西口広場（坂倉準三）

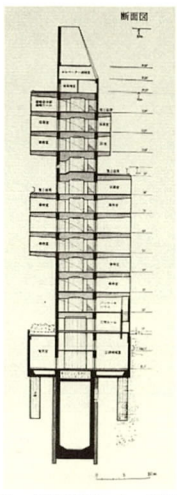


大阪国際空港ターミナルビルディング
(安井建築設計事務所)

1967-1969 年表

日本	海外	
新宿駅西口広場（坂倉準三） 佐渡グランドホテル（菊竹清訓） 大分県立図書館（磯崎新） 武蔵野美術大学（芦原義信） 山形ハワイドリームランド（黒川紀章） 千葉県立文化会館（大高正人） 旧帝国ホテル本館解体	モントリオール万博ハビタ67（M.サファディ） モントリオール万博アメリカ館（B.フラー） モントリオール万博日本館（芦原義信） クイーンズカレッジ（J.スターリング） ナイツ・オブ・コロンパス・タワー（K.ローチ） ハイアットリージェンシーホテル（J.ポートマン）	**1967**
霞ヶ関ビル（山下寿郎） 東京経済大学図書館（鬼頭梓） 静岡新聞・静岡放送ビル（丹下健三） 坂出人工土地（大高正人） 新宮殿（吉村順三） 普連土学園（大江宏） 福岡相互銀行大分支店（磯崎新） 東京国立博物館（谷口吉郎） 鹿島建設本社ビル（鹿島・岡田） 出版　都市の論理（羽仁五郎）	ベルリン国立近代美術館（ミース） ベネティアの議会堂（L.カーン） エバーソン美術館（I.M.ペイ） オークランド美術館（ケビンローチ） オーチェスタ工科大学（アンダーソン） ボストン市庁舎（コールマン）	**1968**
親和銀行本店（白井晟一） 萩市民会館（菊竹清訓） 東京カテドラル聖マリヤ大聖堂（丹下健三） 東京国立近代美術館（谷口吉郎） 代官山集合住宅（槇文彦） 久留米市民会館（菊竹清訓）	シドニーの超高層ビル（ネルビー） リンド・ハイマー天文台（S.O.M.） ミース.V.ローエ死去	**1969**


親和銀行本店（白井晟一）



静岡新聞・静岡放送ビル（丹下健三）


大分県立図書館（磯崎新）

日本建築協会	関西

1970

日本万国博と技術開発　(03)
設計のシステム化　(04)
グッドデザイン運動　(05)
高層建築問題　(06)
よろず住宅相談展
出版　／架構・空間・人間

万博お祭り広場（丹下健三）
エキスポタワー（菊竹清訓）
富士グループパビリオン（村田豊）
イタリア館（R.ピアノ）
芦屋ルナホール（坂倉建築研究所）
西宮トラピスチヌ修道院（村野藤吾）
生駒山宇宙科学館（吉阪隆正）
千里中央地区センター（槇文彦）

1971

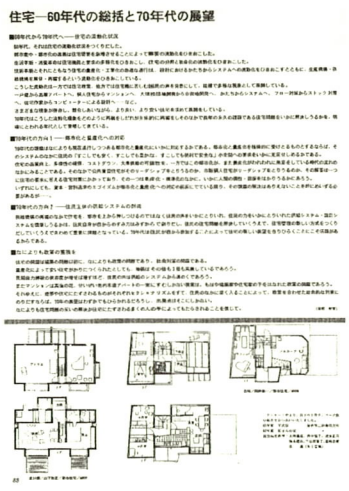
住宅―60年代の総括と70年代の展望　(01)
都市生活とみどり　(04)
転換期のニュータウン　(08)
軟弱地盤と震災　(09)
よろず住宅相談展
出版　／建築データシート
塚本猛次、会長に就任

小原流芸術館（清家清）
堺市立図書館(大阪市立大学栗原研・池田宮彦設計事務所)
京都市美術館収蔵庫（川崎清）
神戸市文化ホール（東畑建築事務所）

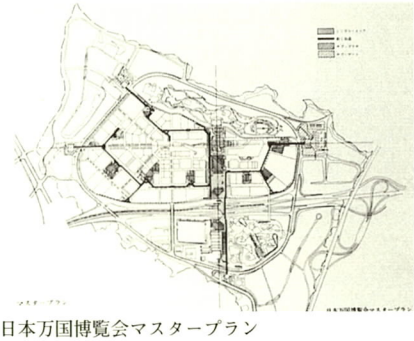
1972

600号記念　(02)
インテリアデザイン　(03)
都市交通問題　(04)
量産住宅の設備　(06)
都市住環境へのアプローチ　(09)
よろず住宅相談展
都市災害問題シンポジウム
伝統工芸を見る会
見学会／大阪国際ビルディング

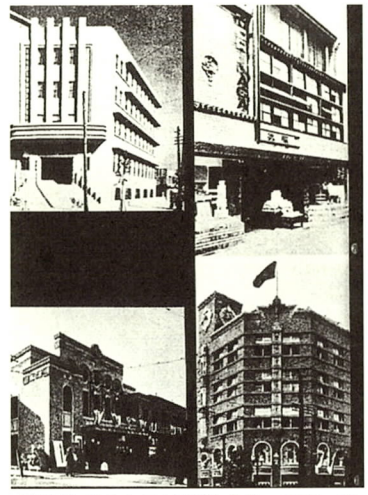
大同生命本社ビル（竹中工務店）
大阪府臨海スポーツセンター（槇文彦）
鳥羽・海の博物館（原広司）
西宮市役所（山下設計）
京都信用金庫修学院支店（菊竹清訓）


住宅―60年代の総括と70年代の展望

1971－01



日本万国博覧会マスタープラン



「建築と社会」600号記念より　1972－02

1970

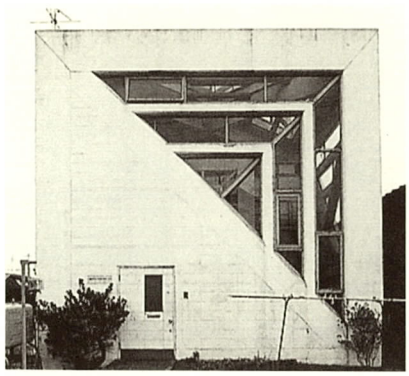
日本	海外
大阪万国博覧会開催	ジョン・ハンコックセンター（S.O.M.）
桜台コートビレッジ（内井昭蔵）	アルコ・サンティ（P.ソレリー）
日本ルーテル神学大学（村野藤吾）	ハーバード大学ガンドホール（J.アンドリュース）
第三スカイビル（渡邊洋治）	
秋田相互銀行盛岡支店（宮脇檀）	
新宿一番館（竹山実）	
栃木県議会棟庁舎（大高正人）	
青山タワービル（吉村順三）	
GAH 6812（鈴木恂）	
白浜中学校（池原義郎）	

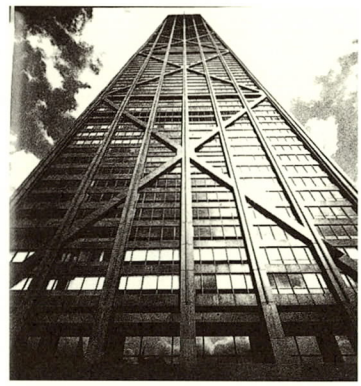
1971

五反田ポーラビル（日建設計）	フィンランドコンサートホール（A.アアルト）
北海道開発記念館（佐藤武夫）	オールドウエストパリの住宅（R.マイヤー）
愛知県立芸術大学（吉村順三）	ハイヤットリージェンシーオヘヤホテル（J.ポートマン）
金沢区総合庁舎（槇文彦）	
水無瀬の町屋（坂本一成）	
ブルーボックスハウス（宮脇檀）	
アルミの家（伊東豊雄）	

1972

反住器（毛綱モン太）	イリノイ工科大学体育館（S.O.M.）
埼玉県立博物館（前川國男）	カリフォルニア海岸の住宅（C.ムーア）
直方体の森（篠原一男）	ジャージー・スリー計画（P.ソレリー）
中銀カプセルタワービル（黒川紀章）	

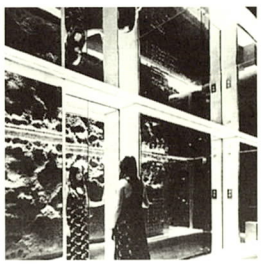

反住器（毛綱モン太）


ジョン・ハンコックセンター（S.O.M.）

	日本建築協会	関西
1973	建築教育　(01) 老人コミュニティ　(06) 構造と施工　(09) 仕上と材料　(10) ヨーロッパのまちづくり　(12) よろず相談住宅展（第10回） 高層ビルを考える 建築基礎工法と実例 見学会／解体修理中の法隆寺	大阪国際ビルディング（竹中工務店） 大阪大林ビルディング（大林組） 奈良国立博物館（吉村順三） 大阪ロイヤルホテル新館（吉田五十八） 大阪電信電話公社（大阪電電建築局） 千里セルシー（フジタ工業） 姫路市文化センター（日建設計） 野村證券ビル（安井建築設計事務所） 日商岩井本社ビル（東畑建築事務所）
1974	歴史的環境保全　(01) 明日の建築はどうなるか　(02) 保養所作品　(03) 北摂ニュータウン計画　(05) ビルの省エネルギ化　(07) みどり　(09) ビル防災に関する12章　(12) 見学会／東大寺金堂 　　山邑邸（ライト）	大阪芸術大学キャンパス（高橋靜一） 同志社大学図書館（大阪市大栗原研） 阪急梅田ターミナル（竹中工務店） 帝人ビルディング（鹿島建設） サントリー中央研究所（安井建築設計事務所） 梅田 OS ホテル（竹中工務店） 万博記念プール（大建設計） 豊中市立少年自然の家（坂倉建築研究所） 臨南寺本堂（大成建設） 川西市文化会館（昭和設計）
1975	図書館　(01) インテリア　(03) 社会・建築・法　(05) 都市の景観と施設　(06) 人間環境としてのターミナル　(09) 集合住宅の設備　(12) 見学会／大阪駅前市街地改造事業 　　大徳寺茶室 よろず相談住宅展 四会連合「工事請負契約定款の改正」	中之島センタービル（日本電電建築局） 近畿大学医学部付属病院（安井・富家） 江坂東洋ビル（竹中工務店） 京都労働会館（富家） 川崎製鉄西山記念会館（村野藤吾） 塩野義製薬本社（坂倉建築研究所）



北摂ニュータウン南地区第５住区　1974－05



インテリア　1975－03



大阪国際ビルディング（竹中工務店）



大阪大林ビルディング（大林組）

1973-1975 年表

1973

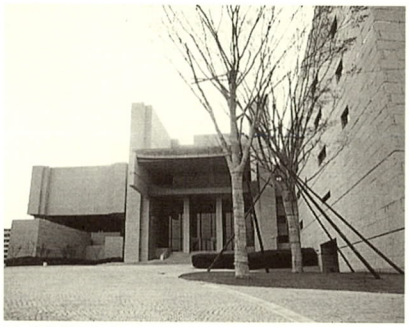
日本	海外
海の階段（篠原一男）	キンベル美術館（L. カーン）
日本歯科大学新潟歯学部（岡田新一）	フィリップス・エクセタアカデミー図書館（L. カーン）
川崎市河原町高層住宅（大谷幸夫）	ブリオン・ヴェガ墓地（C. スカルパ）
代官山集合住宅（槇文彦）	ミネアポリス連邦準備銀行（G. バーカーツ）
大石寺正本堂（横山公男）	スペイン国立文化会館（F. イゲーラス）
昨雪軒（白井晟一）	ミュンヘンオリンピック競技場（F. オット）
広島基町高層アパート（大高正人）	シドニーオペラハウス（J. ウッツォン）
栃木県立美術館（川崎清）	ジョン・ハンコック・タワー（I. M. ペイ）
瀬戸内海歴史民俗資料館（香川県建築課）	ダグラス邸（R. マイヤー）
所沢聖地霊園（池原義郎）	ガララテーゼの集合住宅（A. ロッシ）
YAH 6912（鈴木恂）	ニューヨークタウンハウス（R. スターン）
寿狸庵（木島安史）	リヴァ・サンビターレの住宅（M. ボッタ）
	マンハイムの多目的ホール（F. オット）

1974

日本	海外
東京海上ビル（前川國男）	イエール大学美術研究センター（L. カーン）
最高裁判所（岡田新一）	バングラディシュ国会議事堂（L. カーン）
迎賓館（村野藤吾）	シアーズタワー（S. O. M.）
迎賓館和風別館（谷口吉郎）	ルーバン・カトリック大学学生寮（R. クロール）
倉敷アイビースクウエア（浦辺鎮太郎）	
ノア・ビル（白井晟一）	
日本興業銀行（村野藤吾）	
丸亀武道館（大江宏）	
キャンティレバールーフの家（葉祥栄）	

1975

日本	海外
群馬県立美術館（磯崎新）	ミロ美術館（セルト）
トヨタ鞍が池記念館（槇文彦）	ペン相互生命保険会社（R. ジョゴラ）
福岡銀行本店（黒川紀章）	タッカー邸（R. ヴェンチューリ、ローチ）
山中湖の家（吉村順三）	
アクアポリス（菊竹清訓）	
東京大学工学部 6 号館増築（香山壽夫）	
幻庵（石山修武）	
54の窓（石井和紘）	
萩市庁舎（菊竹清訓）	
黒の回帰（伊東豊雄）	


最高裁判所（岡田新一）


キンベル美術館（L. カーン）


キンベル美術館（内部）

日本建築協会	関西

1976

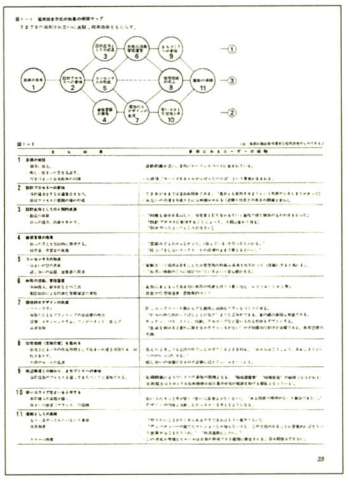
日本建築協会	関西
証言'76ーデザインの動向　(01)	ソニータワー大阪（黒川紀章）
建築防災と法　(05)	伊藤萬ビル（竹中工務店）
鉄骨構造のジョイント　(08)	姫路市市民会館（昭和設計）
集住体のハードとソフト　(09)	大阪マルビル（フジタ工業）
結露防止対策と断熱材料　(10)	藤井寺市立市民総合体育館（日建設計）
設備から見た建築の問題点　(12)	高石市庁舎（池田宮彦）
よろず相談住宅展（第13回）	住吉の長屋（安藤忠雄）
建築と音楽（クセナキス講演）	
出版／ふるさとのすまい（復刻版）	

1977

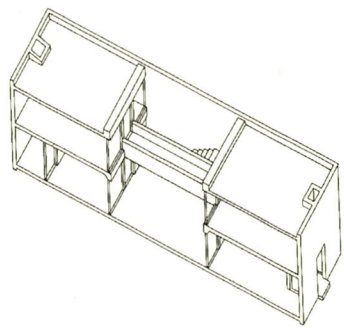
日本建築協会	関西
デザインの動向ー部分と全体　(01)	甲南女子大学（村野藤吾）
ニュータウンの管理　(03)	京都市伝統農業会館（川崎清）
建築と社会660号発行記念（日本建築協会60周年）　(03)	松ヶ崎の家（吉村順三）
身障者施設　(06)	ローズ・ガーデン（安藤忠雄）
埋立地における構造問題　(08)	阪急グランドビル（竹中工務店）
ミニ乱開発から計画的ミニ開発へ　(10)	雑創の森学園（六角鬼丈）
見学会／京都中京郵便局	
芦屋浜シーサイドタウン	
東大寺金堂	

1978

日本建築協会	関西
デザインの動向ー新旧のコントラスト　(01)	国立民族学博物館（黒川紀章）
組合方式による集合住宅計画　(06)	花山第３の住宅（篠原一男）
新しい耐震設計　(08)	都住創松屋町住宅（都住創プロジェクト）
CADー設計とコンピューター　(09)	伊東邸（渡辺豊和）
見学会／万博お祭り広場	帝塚山の家（安藤忠雄）
宝塚バウ・ホール	大阪芸術大学計画（高橋靜一）
	中京郵便局庁舎（郵政省建築部）



組合方式による集合住宅計画特集より　1978ー06



住吉の長屋（安藤忠雄）

1976-1978 年表

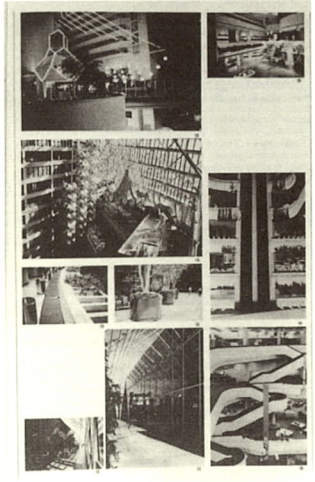
日本	海外	
善光寺別院（山崎泰孝） 段象の家（相田武文） 秀巧社ビル（磯崎新） フロム・ファースト・ビル（山下和正） 身延山宝蔵（内井昭蔵） 緑ヶ丘の家（長谷川逸子） 南海放送本町会館（日建設計）	ペンシルヴァニヤ州立大学（R.ヴェンチューリ） サン・カタルドの墓地（A.ロッシ） ハウス・ペアーの教会（J.ウッツォン） ワールド・トレード・センター（M.ヤマサキ） パシフィック・デザイン・センター（C.ペリ） フランクリン・コート（R.ヴェンチューリ） 出版／デリリアス・ニューヨーク（R.クールハース）	**1976**
東京YMCA野辺山センター（内井昭蔵） 上原通りの住宅（篠原一男） 直島町民体育館（石井和紘） 東京都立夢の島総合体育館（坂倉建築研究所） 日本赤十字本社ビル（黒川紀章） 西日本総合展示場（磯崎新） HOTEL.D（伊東豊雄） 計画・ハウス55プロジェクト	ポンピドーセンター（R.ピアノ／R.ロジャース） ブロンクスセンター（R.マイヤー） コーニング消防署（G.バーカーツ） デージー邸（S.タイガーマン）	**1977**
熊本県立美術館（前川國男） PMTビル（伊東豊雄） 大佛次郎記念館（浦辺事務所） 箱根プリンスホテル（村野藤吾） 神岡町役場（磯崎新） 八重洲ブックセンター（鹿島建設）	イタリア広場（C.ムーア） ノーストアングリア大学アートセンター（N.フォスター） ベルリン国立図書館（J.シャロウン） **中東和平会談**	**1978**


秀巧社ビル（磯崎新）

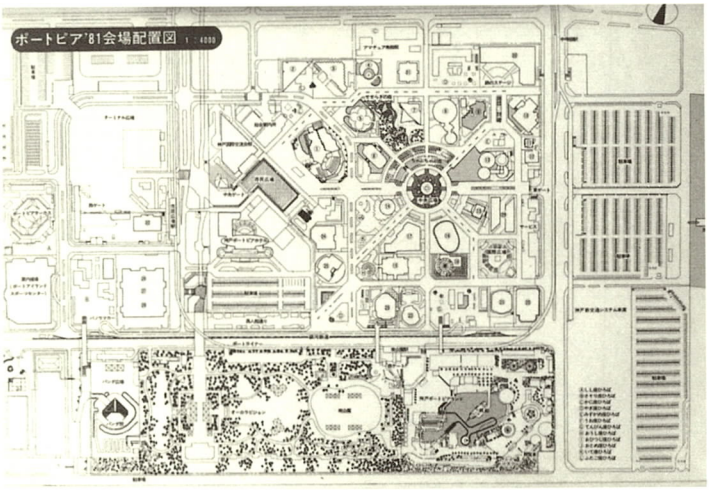

ワールド・トレード・センター（M.ヤマサキ）


ポンピドーセンター（R.ピアノ／R.ロジャース）

	日本建築協会	関西
1979	転換期の再開発　(01) 商業空間　(03) 庄内のまちづくり　(09) 80年代のインテリア　(10) これからの家具ー椅子 見学会／大阪芸術大学 中之島・道頓堀 大丸ヴィラ	石原邸（安藤忠雄） ドムス淀川（石井修） 芦屋浜高層住宅（ASTM）
1980	80年代の都市と建築　(01) 住宅の耐久性　(04) 都市景観とアメニティ　(07) 水ぎわのまちづくり　(09)	松谷邸（安藤忠雄） 正面のない家（坂倉建築研究所） 神戸ポートアイランド団地（坂倉建築研究所） 宝塚市庁舎（村野藤吾）
1981	職能論　(01) ポートピア'81　(03) 都市住宅ー住まい手からの発想　(07) 障害者の暮らしやすい環境づくり　(12) 見学会／大阪の教会建築 鶴見緑地	花山第4住宅（篠原一男） 西澤文隆自邸（西澤文隆） ドムス香里（石井修） 神戸ポートピアホテル（日建設計） ナビオ阪急（竹中工務店） 小篠邸（安藤忠雄） 織陣・Ⅰ（高松伸）



80年代のインテリア特集　1979ー10

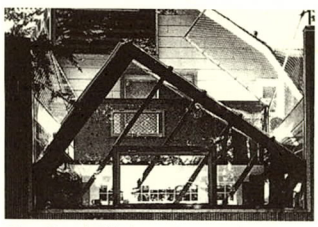


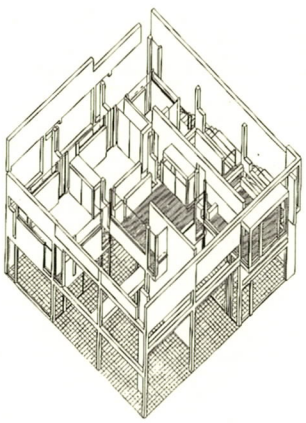
ポートピア'81特集より　1981ー03

1979-1981 年表

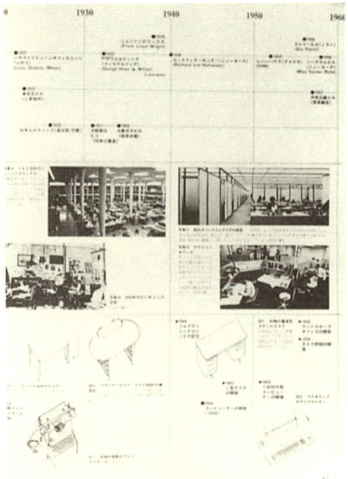
日本	海外	
草月会館（丹下健三） 岡山市立オリエント美術館（岡田新一） 直島中学校（石井和紘） 松川ボックス（宮脇檀） 資生堂アートハウス（谷口吉生） 積木の家（相田武文）	ゲーリー自邸（F. ゲーリー） リオラ村の教会（A. アアルト） 世界劇場（A. ロッシ） アセニーアム（R. マイヤー） **イラン革命**	**1979**
国立西洋美術館新館（前川國男） STEP（安藤忠雄） 生闘学舎（高須賀晋） 八ヶ岳美術館（村野藤吾） 警視庁本部庁舎（岡田新一） 倉敷市庁舎（浦辺建築事務所） 朝日新聞東京本社（竹中工務店）	住宅第10号（P. アイゼンマン） マイクロメガス計画（D. リヴェスキンド） アトランティス（アルキテクトニカ） **光州事件** **イラン、イラク戦争**	**1980**
利賀山房（磯崎新） 渋谷区立松涛美術館（白井晟一） 伊藤忠商事東京本社ビル（日建設計） 光格子の家（葉祥栄） るるるる阿房（斎藤裕） 高圧線下の住宅（篠原一男） 宮代町立コミュニティセンター（象設計集団）	コーヘン邸（モルフォシス） ORF 放送局ホール（D. バイヒル） メンフィス創立（ソットサス他）	**1981**


直島中学校（石井和紘）

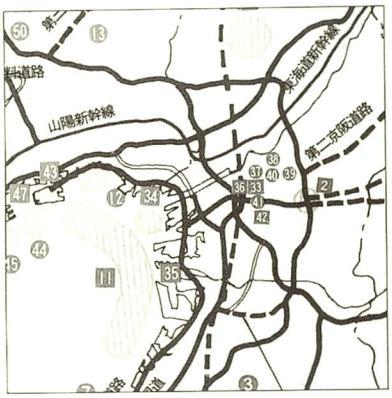

ゲーリー自邸（F. ゲーリー）


住宅（P. アイゼンマン）

日本建築協会	関西
1982	
新たな商業空間の展開　(01) 近畿の地盤と地質　(04) 都市景観ーまちなみ美観への誘い　(05) ホール建築と音　(07) 絵本にみるすまいとまちづくり　(10) 見学会／ザ・シンフォニーホール 西本願寺 福田朝生、会長に就任	大阪芸術大学塚本英世記念館（高橋靜一） 松蔭女子大学（竹中工務店） 西神ニュータウン和風タウンハウス（坂倉建築研究所） 逆瀬台の家（出江寛） 先斗町のお茶屋（高松伸） 向日町教会（内井昭蔵） 大淀のアトリエ（安藤忠雄） ザ・シンフォニーホール（大成建設） 神戸市立中央市民病院（伊藤喜三郎建築研究所）
1983	
関西の建築文化を考える　(01) 建築と品質管理　(04) 大阪駅とターミナルビル　(06) オフィスインテリアの変革　(09) 集合住宅と生活音　(12)	神戸市立博物館（坂倉建築建究所） 都住創徳井町（ヘキサ） 電通大阪ビル（槇文彦） 基督兄弟団西宮教会（出江寛） 九条の町屋（安藤忠雄） ARK（高松伸） 六甲の集合住宅（安藤忠雄）
1984	
21世紀への関西　(01) 関西の超高層ビル　(02) まちの活性化と商業空間　(06) みどりとそれをとりまく人々　(08) ディテールの思想　(11) 光応用システムと建築　(12) 佐野正一、会長に就任	目神山の家８（石井修） シャルレ本社ビル（石井修） 茂木邸（安藤忠雄） ファラオ（高松伸）



オフィス・インテリアの変革特集より　1983−09

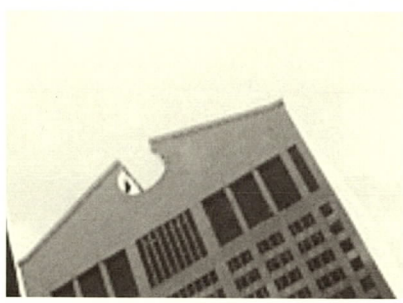


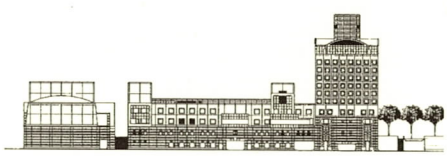
特集「21世紀への関西」より　1984−01

1982-1984 年表

日本	海外	
名護市庁舎（象設計集団） 笠間の家（伊東豊雄） 慶応義塾大学図書館新館（槇文彦） 新高輪プリンスホテル（村野藤吾） 日本浮世絵博物館（篠原一男） 金沢工業大学ライブラリーセンター（大谷幸夫） 成城バス停前の家（早川邦彦）	メンヘングランバック美術館（H.ホライン） IBM移動パビリオン（R.ピアノ） 香港ピークコンペ案（Z.ハディド） ラビレット公園案（B.チュミ） 出版／デコンストラクション（J.カラー） 映像／ブレード・ランナー（スコット、シド・ミード）	**1982**
建築会館（秋元和雄） 国立歴史民俗博物館（芦原義信） 東京大学総合研究資料館新館（香山壽夫） 風格子の家（葉祥栄） 赤坂プリンスホテル新館（丹下健三） 宮代町立笠原小学校（象設計集団） つくばセンタービル（磯崎新） 土門拳記念館（谷口吉生）	ポートランドビル（M.グレーヴス） ロヨラ法科大学（F.ゲーリー） サンドニ病院（シリアニ） トルレス邸（イゲーラス）	**1983**
国立能楽堂（大江宏） マガジンハウス（第一工房） 国立文楽劇場（黒川紀章） 直島町役場（石井和紘） 釧路市立博物館（毛綱毅曠） 伊豆の長八美術館（石井修武） 球泉洞森林館（木島安史） フェスティバル（安藤忠雄） 有楽町センタービル（竹中工務店）	シュツッツガルト美術館新館（J.スターリング） AT&Tビル（P.ジョンソン） イリノイ州センター（H.ヤーン）	**1984**


新高輪プリンスホテル（村野藤吾）


AT&Tビル（P.ジョンソン）


つくばセンタービル（磯崎新）

日本建築協会	関西

1985

大阪湾物語　(01)
自由様式への道・建築家安井武雄　(03)
情報化をめぐる建築・都市事情　(04)
建築と水の演出　(08)
村野藤吾の一断章　(11)
見学会／吹田市文化会館
　　目神山の家
　　芦屋文化村

TIME'S Ⅰ（安藤忠雄）
インテックス大阪（東畑建築事務所）
都ホテル大阪（村野藤吾）
西脇市岡之山美術館（磯崎新）
吹田市文化会館（東畑建築事務所）

1986

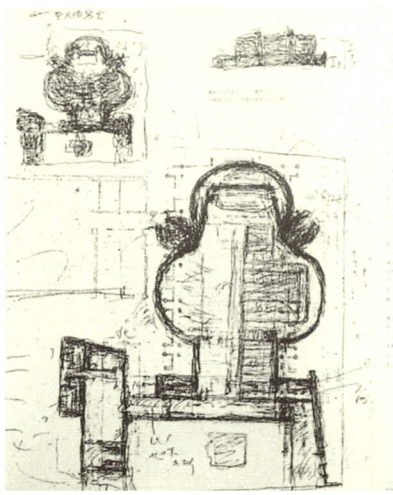
現代デザイン―ポストモダニズム10年　(03)
インテリジェントビルの建築・設備計画　(04)
CAD―その応用と展開　(09)
インテリア・イクステンションとリニューアル　(12)

六甲の教会（安藤忠雄）
都住創淡路町（ヘキサ）
大淀の茶室（安藤忠雄）

1987

入浴物語　(01)
腐食　(02)
創立70周年記念号　(03)
室内の仕上床　(06)
駅　(07)
宝塚の街づくり　(10)
見学会／大阪港を見る
　　旧山邑邸保存修理
出版　／昭和生まれ関西の建築家50

梅田センタービル（竹中工務店）
宝塚造形芸術大学（A.ヴォジャンスキー）
芦屋市立図書館（坂倉建築研究所）
フィッシュダンス（F.ゲーリー）
スパイヤー（ヘキサ）
マイドームおおさか（日建設計）
キリンプラザ大阪（高松伸）



村野藤吾のスケッチ　1985―11



ポストモダニズム10年　1986―03



70周年を記念して、業績を対象として
創設された「日本建築協会賞」賞牌

1985-1987
年表

1985

日本	海外
シルバーハット（伊東豊雄）	ランシーラ・ビル（M.ボッタ）
大正海上本社ビル（日建設計）	サーマイペーターソン邸（F.ゲーリー）
眉山ホール（長谷川逸子）	ゴルチエのブティック（R.アラッド）
盈進学園東野高等学校（C.アレグザンダー）	
牛窓国際芸術祭事務局（藤井博巳）	
東京遊牧少女の包（伊東豊雄）	

1986

日本	海外
SPIRAL（槇文彦）	香港上海銀行（N.フォスター）
長崎オランダ村（日本設計）	マンハッタン・トランスクリプト（B.チュミ）
世田谷美術館（内井昭蔵）	ピカソアリーナ（ヤノヴィスキー）
光十字の家（葉祥栄）	チェルノブイリ原発事故
GAZEBO（山本理顕）	映像／未来世紀ブラジル
開拓者の家（石山修武）	

1987

日本	海外
サレジオ学園（坂倉建築研究所）	アラブ世界研究所（J.ヌーヴェル）
名古屋市美術館（黒川紀章）	ルーヴル改造計画（I.M.ペイ）
東京工業大学百年記念館（篠原一男）	ロイズ・オブ・ロンドン（R.ロジャース）
お茶の水スクエア（磯崎新）	ダンス・シアター（R.クールハース）
結晶のいろ（高崎正治）	フランクフルト大学生物学センター（P.アイゼンマン）
東京都多摩動物公園昆虫生態園（日本設計）	ポツダム地区開発案（D.リヴェスキンド）
橋の博物館（上田篤）	ブラック・マンデー（N.Y.）
ROTUNDA（山本理顕）	


香港上海銀行


香港上海銀行（内部）

日本建築協会	関西

1988

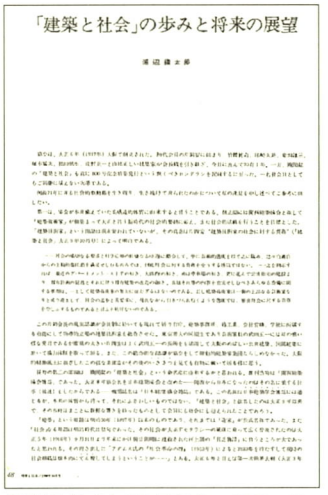
日本建築協会	関西
ホテル物語　(01)	流通科学大学（日本設計）
建物の外装リフレッシュ　(04)	河内長野市庁舎（佐藤武夫）
都心居住　(05)	播磨屋本店円山店（竹中工務店）
21世紀への照明　(07)	ガレリア・アッカ（安藤忠雄）
制振　(08)	花山の病院（篠原一男）
集合住宅のリフレッシュ　(10)	ダイキン OSAKA アトリオ（丹田悦雄）
「建築と社会」800号記念　(11)	新神戸オリエンタルシティ・C 3（竹中工務店）
話題建築を聞く	京都文化博物館（久米事務所）
シンポジウム「建築 CAD」	カーニバルショーケース（栗生明）
	なら・シルクロード博開催
	関西新空港ビル案（R. ピアノ）

1989

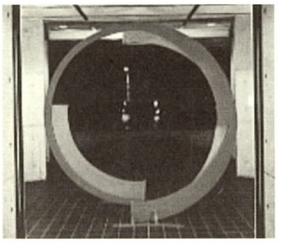
日本建築協会	関西
夢を乗せる輸送設備　(01)	D-HOTEL OSAKA（アモルフ）
リゾート事情　(02)	大津プリンスホテル（丹下健三）
色の復権　(03)	大阪音楽大学オペラハウス（日建設計）
まちづくりと法　(05)	光の教会（安藤忠雄）
博覧会とまちづくり　(06)	神戸市立須磨海浜水族園（大建設計）
都市環境創造と設備 I　(07)	森之宮スカイガーデンハウス（遠藤剛生）
建築とアート　(08)	神戸市新庁舎（日建設計）
ユーザー参加のハウジング　(10)	ライカ本社ビル（安藤忠雄）
講演会／いま一関西はおもしろい	
音楽と建築	

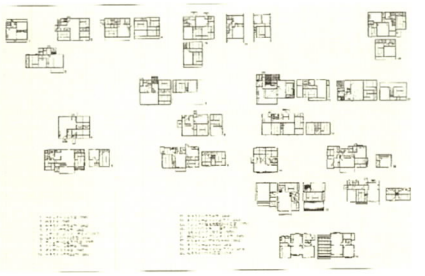
1990

日本建築協会	関西
商品化住宅のデザイン　(01)	南海サウスタワーホテル大阪（日建設計）
ニュータウン・ルネサンス　(02)	伊丹市立サンシティーホール（坂倉建築研究所）
スケール感　(04)	松下 IMP ビル（日建設計）
プレハブ住宅技術の現在と未来　(05)	K 2 ビルディング（篠原一男）
国際花と緑の博覧会　(06)	SYNTAX（高松伸）
高強度化ー設計の多様化をめざして　(08)	海遊館（ケンブリッジ・7・アソシエイツ）
都市のナイス・プレイス　(10)	大阪東京海上ビルディング（鹿島建設）
講演会／これからのガラス	クリスタルタワー（竹中工務店）
エコロジカルアーバンプランニング	芦屋市立美術博物館（坂倉建築研究所）
	余呉森林文化交流センター（渡辺豊和）


「建築と社会」の歩みと将来の展望

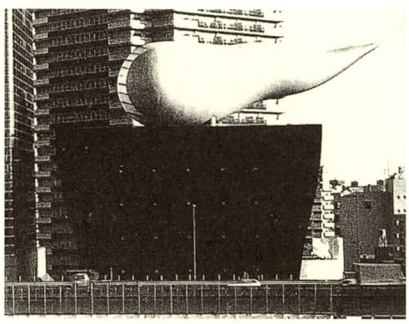
「建築と社会」800号記念　1988ー11


建築とアート　1989ー08


商品化住宅のデザイン　1990ー01

1988-1990 年表

日本	海外	
東京ドーム（日建設計・竹中工務店） 小国町民体育館（葉祥栄） 広島市現代美術館（黒川紀章） 水の教会（安藤忠雄） 牛窓国際交流ヴィラ（石井和紘） 中川一政美術館（TAK 建築・都市） 飯田市美術博物館（原広司）	デ・コンストラクティヴィスト展 （P. ジョンソン企画）	**1988**
幕張メッセ（槇文彦） 東京都葛西臨海水族園（谷口吉生） ラビリンス（早川邦彦） アサヒビール吾妻橋ホール（P. スタルク） 藤沢市湘南台文化センター（長谷川逸子） 神慈秀明会黄島神殿（栗生明） 小樽ホテル（N. コーツ） 釧路フィシャマンズワーフ（毛綱毅曠） TEPIA（槇文彦） 横浜美術館（丹下健三）	ヴィトラ家具博物館（F. ゲーリー） 新オペラ座 プライステ（B. プリンス） 新凱旋門 ルーブル美術館改造計画（I. M. ペイ） ラビレット公園（B. チュミ） **ベルリンの壁崩壊** **天安門事件**	**1989**
水戸芸術館（磯崎新） 東京武道館（六角鬼丈） 熊本北警察署（篠原一男） 横浜ガレリア（M. ペリーニ） 海のピラミッド（葉祥栄） 東京体育館（槇文彦） サッフォー（北川原温） 東京芸術劇場（芦原義信） **バブル崩壊**	中国銀行香港支店（I. M. ペイ） サンジョルディ・パレス（磯崎新） アトランタ（J. ヘイダック） **東西ドイツ統一**	**1990**


アサヒビール吾妻橋ビル（P. スタルク）


小樽ホテル（N. コーツ）

日本建築協会	関西
1991	
新しい都市空間づくりⅠ、Ⅱ　(01)(02)	ホテル川久（永田・北野）
オフィス・プレジャー　(02)	奈良市写真美術館（黒川紀章）
今、京都　(05)	新南座（杉山隆）
建築家のための設備知識　(05)	大阪国際平和センター（シーラカンス）
建築をめぐるトラブルとその解決　(08)	千里国際学園（長島孝一）
建築現場のイメージアップ作戦　(08)	神戸ファッションマート（昭和設計）
空間のアイデンティティ　(09)	姫路文学館（安藤忠雄）
建築と土木　(11)	
講演会／都市の発想	
1992	
夢物語　(01)	バロンベール（P.スタルク）
こだわりのインテリア　(02)	オーキッドコート（C.ムーア）
建築家のための設備知識　(04)	千里ライフサイエンスセンター（東畑建築事務所）
地球環境時代の建築　(05)	滋賀県立長浜ドーム（久米設計）
木構造を使ってみませんか　(07)	神戸ハーバーランドビル（日建設計）
屋台－仮設の魅力に学ぶ－　(10)	
いま建築教育に何が期待されているのか　(11)	
出版／「建築と社会」復刻版	
「建築と緑」（瀧光夫）	
1993	
市民劇場の舞台設備　(04)	ビッグステップ（環境開発研究所）
環境－限りある自然と建築との関わり　(05)	けいはんなプラザ（日建設計）
都市のスカイライン　(06)	オーガニックビルディング（G.ペッシェ）
映画の中のインテリア　(07)	兵庫県立先端科学技術支援センター（磯崎新）
建築の再生　(08)	大同生命大阪本社ビル
福祉のまちづくり　(10)	（日建設計・一粒社ヴォーリズ）
都市型住宅再考　(11)	P&G本社ビル（竹中工務店）
環境－人に優しい空間創造をめざして　(12)	一心寺念仏堂（高口恭行）
出版／「建築と社会」復刻版	梅田スカイビル（原広司）


オフィス・プレジャー特集より　1991－02

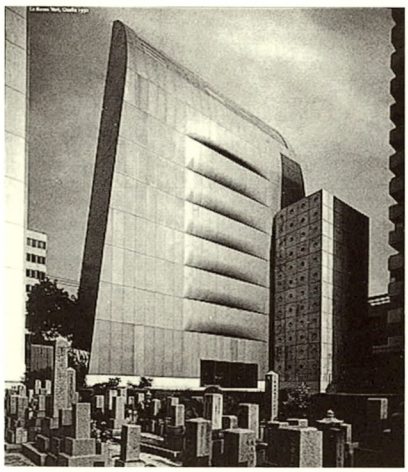


屋台－仮設の魅力に学ぶ－　1992－10

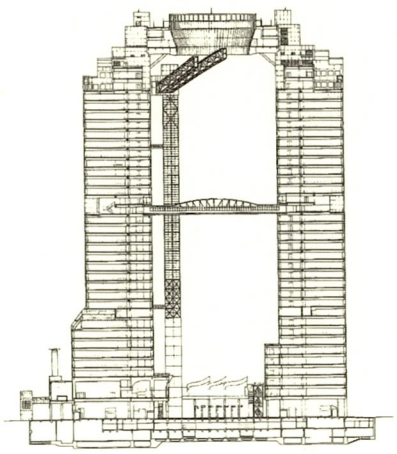

映画の中のインテリア特集より　1993－07
「ブレードランナー」

1991-1993 年表

日本	海外	
八代市立博物館（伊東豊雄） センチュリータワー（N.フォスター） 東京新都庁舎（丹下健三） 熊本県保田積第一団地（山本理顕） 目黒雅叙園（日建設計）	音楽都市（C.ボルファーバルク） 香港工科大学（S.クワン） ユウゼン自動車博物館（モーフォシス） **湾岸戦争** **ソ連解体**	**1991**
丸亀市猪熊弦一郎現代美術館（谷口吉生） 熊本県草地畜産研究所（T.ヘネガー） M 2（隈研吾） 海の博物館（内藤廣） 東京都江戸東京博物館（菊竹清訓） 内子町立大瀬中学校（原広司）	セビリア万博日本館（安藤忠雄） ブラッケンハウス（M.ホプキンス） **マーストリヒト条約（E.C.）**	**1992**
横浜ランドマークタワー（三菱地所） 出石町ひぼこホール（いるか設計集団） 島根県立産業交流会館（高松伸） 日本長期信用銀行本店ビル（日建設計） 福岡ドーム（竹中工務店） 幕張プリンスホテル（丹下健三）	ウォータールー国際駅（N.グリムショウ） ミスターチャンティールーム（A.チャン） 情報スーパーハイウェイ構想	**1993**



バロンベール（P.スタルク）



梅田スカイビル（原広司）

日本建築協会	関西

1994

コピー文化の新時代　(01)
伊勢・神宮式年遷宮と神宮界隈　(03)
建築のエネルギーシステム　(04)
いま、医療施設は　(06)
水と建築　(09)
構造美　(11)
集合住宅団地リニューアル　(11)
関西国際空港　(12)
市川宏、会長に就任
出版／「建築と社会」復刻版

関西国際空港旅客ターミナルビル（R. ピアノ）
アジア太平洋トレードセンター（日建設計）
京都ホテル（清水建設）
松伯美術館（村野藤吾）
ドーンセンター（安井建築事務所）

1995

光がつくる風合の世界　(01)
音ー騒音から操音／創音へ　(02)
飛騨・美濃　(03)
トイレ空間　(05)
接合　(06)
新しい「都市・建築」の視点　(09)
ライフラインと建築設備　(11)
出版／「建築と社会」復刻版

京都コンサートホール（磯崎新）
大阪ワールドトレードセンター（日建設計）
ふれあい港館（P. ブランシェ）
大山崎山荘美術館（安藤忠雄）
阪神・淡路大震災（1・17）

1996

阪神大震災から学ぶ　(01)
立体駐車場設備　(04)
いま、プールがおもしろい　(06)
住まいの未来像　(07)
マルチメディアがつくる世界　(08)
キーコンセプトの新時代　(09)

大阪プール（東畑建築事務所）
MIHO MUSEUM（I. M. ペイ）
なみはやドーム（昭和設計）
大阪市立中央図書館（石本建築事務所）
みやこめっせ京都市勧業館（川崎清）
アクア堂島（竹中工務店）
OAP タワーズ（三菱地所）


ライフラインと建築設備特集より　1995ー11



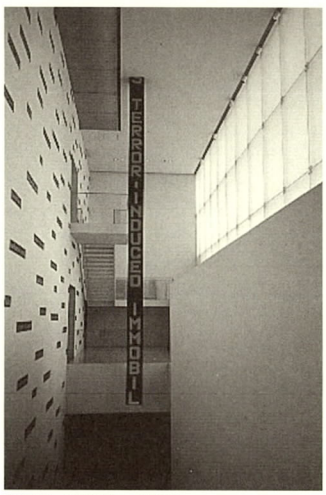
阪神大震災から学ぶ特集より　1996ー01


関西国際空港旅客ターミナルビル（R. ピアノ）

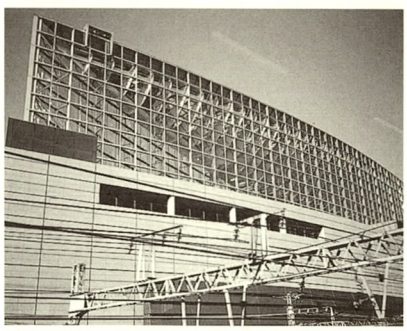
1994-1996 年表

日本	海外	
リアス・アーク美術館（石山修武） 奈義町現代美術館（磯崎新） 恵比寿ガーデンプレイス（久米設計） 東京都現代美術館（TAK 建築都市） 宮崎シーガイヤ（芦原義信）	フランス国立図書館（D. ペロー） 無限の塔（J. ヌーヴェル） ウエスカの体育館（E. ミラージェス） リヨン TGV 駅（S. カラトラヴァ）	**1994**
豊田市美術館（谷口吉生） DN タワー21（K. ローチ、清水建設） 養老天命反転地（荒川修作） シーホークホテルアンドリゾート（C. ペリ） **地下鉄サリン事件**	ヘラクレスビル（E. O. モス） チャイナタワー（K. ヤング） サトラス駅（S. カラトラヴァ）	**1995**
東京国際フォーラム（R. ヴィニオリ） キャナルシティ博多（ジャディパートナーショップ） 森舞台（隈研吾）	出版／S, M, L, XL（R. クールハース）	**1996**


豊田市美術館（谷口吉生）



豊田市美術館（内部）


東京国際フォーラム（R. ヴィニオリ）

参考文献「日本建築の現況」山本学治編著（彰国社）／TOTO 通信

年表作成者（安達、梅宮、酒井、橋寺、吉田）

資料編

日本建築協會會則（大正８年１月実施）

第一條　本會ノ目的ハ我國建築界ノ堅實ナル發展ヲ期スルニ在リ

第二條　本會ハ日本建築協會ト稱ス

第三條　本會ハ事務所ヲ大阪市ニ置ク
　地方ニ支會ヲ設クルコトヲ得

第四條　本會ハ人格、學識、經驗アル建築家ヲ以テ會員トス
　會員ノ氏名住所ハ會員名簿ニ之ヲ記録ス
　會員タラムト希望スル者ハ會員五名以上ノ紹介ヲ以テ入會希望書及履歴書ヲ本會ニ提出スヘシ其諾否ハ理事會ノ詮衡ヲ經テ例會ニ於テ之ヲ議決ス

第五條　本會ハ其目的ヲ賛成シ事業ヲ援助スル者ヲ賛助員トス
　賛助員ヲ分チテ左ノ四種トス
　一　名譽賛助員―地位又ハ學識アル名望家
　二　終身賛助員―金百圓以上又ハ之ニ相當スル物件ヲ本會ニ寄附スル篤志家
　三　特別賛助員―建築ニ関聯スル特種ノ技術家又ハ事業家
　四　普通賛助員―建築ニ関係又ハ趣味ヲ有スル者
　賛助員ノ氏名住所寄附ノ金額又ハ物件ハ各賛助員名簿ニ之ヲ記録ス

第六條　名譽賛助員ハ例會ノ決議ニ依リ本會之ヲ推薦ス
　終身賛助員タラムトスル者ハ會員貳名以上ノ紹介ヲ以テ申込書及寄附ノ金額又ハ物件ヲ本會ニ提出スベシ其諾否ハ理事會之ヲ議決ス
　特別賛助員タラムトスル者ハ會員貳名以上ノ紹介ヲ以テ申込書及履歴書ヲ本會ニ提出スベシ其諾否ハ理事會之ヲ議決ス
　普通賛助員タラムト欲スル者ハ會員ノ紹介ヲ以テ申込書ヲ本會ニ提出スヘシ其諾否ハ理事會之ヲ議決ス

第七條　會員ハ第十九條ニ關スル權利ヲ享有ス
　會員ハ會内ニ於ケル其言行ニ付會外ニ於テ責ニ任ゼザルコトヲ得
　名譽賛助員ハ本會ノ優遇及第十九條ニ基キ相當ノ利得ヲ受ク
　終身賛助員、特別賛助員及普通賛助員ハ第十九條ニ基キ會誌ノ配布其他各相當ノ利得ヲ受ク

第八條　會員ニシテ脱會セムトスル者ハ其ノ旨ヲ本會ニ申込ムベシ
　前項ノ規定ハ賛助員ニ之ヲ準用ス

第九條　本會ハ會員ニシテ本則ノ規定ニ違背シ又ハ本會ノ名譽ヲ汚スノ行為アリト認メラルル者ニ對シ理事會ノ決議ヲ經テ其權利ヲ停止シ若ハ之ニ脱會ヲ勸告シ又ハ例會ノ決議ヲ經テ之ヲ除名スルコトヲ得
　前項ノ規定ハ賛助員ニ之ヲ準用ス

第十條　脱會其他ノ事由ニ因リ會員タルノ資格ヲ失ヒタル者ハ既納會費ノ返還ヲ求メ又ハ其債務ヲ免カルルコトヲ得ズ
　前項ノ規定ハ賛助員ニ之ヲ準用ス

第十一條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク
　一　會　頭　　一名
　二　副會頭　　一名
　三　理事長　　一名
　四　理　事　　六名
　會頭ハ會務ヲ總監シ本會ヲ代表ス
　副會頭ハ會頭ヲ補佐シ會頭事故アルトキ其職務ヲ代理ス
　理事長ハ會務ヲ總理シ會頭、副會頭事故アルトキ其職務ヲ代理シ理事會ヲ代表ス
　理事ハ會務ヲ處理シ理事長事故アルトキ理事會ノ決議ニ依リ其職務ヲ代理ス

第十二條　役員ハ會員中ヨリ例會ニ於テ之ヲ選擧ス但會頭副會頭ハ名譽賛助員中ヨリ之ヲ選出スルコトヲ得
　役員ノ任期ハ貳年トス
　理事ノ改選ハ毎年半數トス但引續キ重任スルコトヲ得ズ

第十三條　本會ニ左ノ職員ヲ置ク
　一　主　記　一　名
　二　主　計　一　名
　三　編　輯　三　名
　四　編輯補　若干名
　五　書　記　若干名
　主記ハ庶務ヲ、主計ハ會計ヲ、編輯ハ編纂ヲ處理ス
　編輯補ハ編輯ノ旨ヲ受ケ編纂ヲ分掌ス
　書記ハ理事長理事ノ命ヲ受ケ會務ニ從事ス

第十四條　主記、主計、編輯ハ理事之ヲ互選ス
　編輯補ハ會員中ヨリ理事會之ヲ指名ス
　書記ハ理事會之ヲ任命シ有給ト爲スコトヲ得

第十五條　本會ハ調査研究ノ必要ニ應ジ例會ノ決議ニ依リ各部ノ委員會ヲ設ケ各部ニ委員長一名委員若干名ヲ置ク
　委員長及委員ハ會員中ヨリ理事會之ヲ指名シ委員長ハ當該委員ノ互選トス
　理事會ハ特殊事項ニ關シ會員外ノ專門家ヲ嘱託委員ト爲スコトヲ得

第十六條　委員長ハ當該委員會ヲ代表シ委員長事故アルトキハ當該委員會ノ決議ニ依リ委員其職務ヲ代理ス
　委員會ノ經過ハ例會ニ於テ之ヲ報告ス
　委員會ノ調査研究報告ハ例會ノ決議ヲ經テ本會ノ名ヲ以テ之ヲ發表ス但シ緊急事項ニ付テハ理事會ノ承認ヲ經テ當該委員會ノ名ヲ以テスルコトヲ得

第十七條　本會ハ毎月一回會員ヲ召集シ例會ヲ開キ重要事項ヲ審議シ報告會、談話會、討論會又ハ講演會ヲ催ス

但理事會ハ必要ト認ムルトキ臨時之ヲ開催スルコトヲ得

例會ニ於ケル議案其他ノ事項ハ理事會之ヲ會員ニ報告ス但緊急事項ニ付テハ此限ニ在ラス

第十八條　本會ハ春秋二季大會ヲ擧行ス

第十九條　本會ノ行フ事業左ノ如シ

一　建築ニ關スル諸般事項ノ調査研究
二　調査研究報告ノ發表
三　建築ニ關スル重要事項ノ議決
四　決議事項ノ實行促進
五　會誌ノ發刊
六　建築ニ關スル圖書ノ刊行
七　建築ニ關スル講演會ノ開催
八　建築ニ關スル展覽會ノ公開
九　建築ニ關スル視察
十　建築ニ關スル有志者ノ親睦會
十一　理想的建築ノ計畫
十二　其他建築ニ關スル有益ナル事項

第二十條　會員ハ會費年額金拾貳圓ヲ本會ニ據出ス但例會ニ出席シ難キ地方ニ在ル會員ノ會費ハ半額トス

一時ニ金百圓以上ヲ出ストキハ爾後前項ノ會費ヲ免ル

會員タルノ承認ヲ得タル者ハ入會金五圓ヲ本會ニ納付スベシ

特別賛助員ハ特別賛助費年額金六圓ヲ、普通賛助員ハ普通賛助費年額金參圓ヲ本會ニ前納スベシ

但六期以内ニ之ヲ分納スルコトヲ得

第二十一條　本會ノ經費ハ會費入會金寄附金賛助費其他ノ収入ヲ以テ支辨ス

本會ノ財産ハ理事長之ヲ監理ス

第二十二條　本會ノ財産債權債務及毎月ノ収支ハ主計其計算書ヲ作リ翌月理事會ニ報告ス

本會ノ財産債權債務及毎年ノ収支ハ理事會其決算書ヲ作リ翌年一月例會ニ於テ報告ス

第二十三條　本會及本則ニ關スル詳細ノ事項ハ例會ノ決議ニ依リ細則ニ之ヲ定ム

第二十四條　本則ハ例會ノ決議ニ依リ之ヲ變更スルコトヲ得

「建築と社会」大正８年１月号巻頭より転載

創立当時から法人組織となるまでは、任意団体としての会則で施行、必要に応じ例会、大会等で会則を改正・変更した。

1926年10月、社団法人の認可と同時に定款を作成し、以来、総会において会費、事務所の移転、役員選挙方法等が改正されている。1947年、戦後の社会情勢に即応するように全面的に検討を加え変更した定款は、３回の定款一部変更を重ねて、現行の定款につながる。

社團法人　日本建築協會定款

（昭和22年12月５日定款変更認可即日実施）

第１章　　總　　則

第１條　本會は、建築關係各部門の連繫協力によって、建築に關する學術、技藝、事業の進歩發達を圖ると共に、建築を通じ廣く社會に貢献することを目的とする。

第２條　本會は、社團法人日本建築協會と稱する。

英文ではThe Architectural Association of Japanとする。

第３條　本會の主たる事務所は、これを大阪市に置き、なお必要に應じ各地に支部を置くことができる。

主たる事務所の位置の變更、並びに支部の設置、變更若しくは廢止については評議員會の議決でこれを定める。

第４條　本會は、左の事業を行う。

１．建築關係各部門間並びに建築と社會との連繫
２．建築關係事業の改善發達に資する意見の決定並びに表明
３．建築に關する學術、技藝、施策の研究、調査及び社會指導並びに一般啓蒙
４．建築關係各部門の振興に資する施設並びに營造物の設置及び管理
５．建築に關する証明、鑑定、仲介、斡旋又は仲裁、檢定試驗の執行及び資格の認定
６．會員の向上及び相互の親睦に關する諸施設並びに會合
７．會報、雜誌、圖書及び印刷物の刊行並びに發賣
８．その他本會の目的を達するに必要な事業

第５條　本會の事業年度は、毎年四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る。

第６條　本會の公告は、會報又は官報若しくは總會の議決で指定した日刊新聞に掲げてこれをする。

第７條　本定款の施行に必要な事項は、細則でこれを定める。細則は、評議員會の議決でこれを定める。

第２章　　會　　員

第８條　會員は、正會員及び准會員の二種とし、正會員を以て民法上の社員とする。

第９條　正會員は、次の各號の何れかに該當するものとする。

１．建築又はこれに關係ある職務を有し相當の學識又は經驗を有する者
２．建築又はこれに關係ある業務を營む者又は團体

第10條　准會員は建築に趣味を有する者、若しくは建築又はこれに關係ある學科を專攻する學生、生徒とする。

第11條　正會員で次の各號のいづれかに該當する者は、總會の議決でこれを名譽正會員に推擧することができる。

１．學識名望がある者又は本會に對する功績顯著な者
２．三十年以上正會員であって年齢六十五を超えた者

第12條　會員となるには、細則の定める所によって入會申込

書に入會金を添へて本會に提出し、理事會の承認を經なければならない。

會員が退會するには、會費を完納して本會にその旨を届出なければならない。

第13條　會員の氏名は、これを會員名簿に登録し、會員の權利義務は、名簿登録をした日から生ずる。

會員の權利は、一身に專屬しこれを他人に移轉することができない。但し、第９條第２號による正會員で、本會の承認を經た場合はこの限りでない。

第14條　第９條第２號による正會員は、細則の定むるところに從って、本會の承認を經て會員を指名することができる。

前項により指名せられた會員は、これを正會員とみなす。

第15條　會員は、細則の定めるところにより、會費１口以上を前納しなければならない。但し、名譽正會員及び前條により指名せられた會員は、この限りでない。

第16條　會員が會費を滯納した場合には、その期間中會員權の行使を停止されることがある。但し、この場合會員は、既往の債務を免れることができない。

第17條　會員で次の各號のいづれかに該當する者は、評議員會の議決でこれを除名することができる。但し、第３號の場合に限り理事會の議決を以て、これに代へることができる。

１．本會の秩序を亂し又は本定款若しくは細則に違反する行爲があると認めた者

２．本會の名譽を汚損する行爲があると認めた者

３．會費の滯納が４ケ月に及びなを督促に應じない者

第18條　退會又は除名によって會員資格を失った者は、如何なる理由によっても既納の會費又は物件の返還その他本會の財産に對する一切の請求權を失う。但し、本會に對する債務はこれを免れることができない。

第３章　役員、顧問及び參與

第19條　本會に左の役員を置く。

會　長	１名
副會長	２名以上
理　事	16名以上
支部長	若干名
監　事	２名以上
評議員	若干名

會長、副會長、理事及び支部長を以て、民法上の理事とする。

第20條　監事及び評議員は總會で、會長、副會長及び理事は評議員會で、正會員中からこれを選任する。

支部長は、支部規程により、支部所屬正會員の互選によって選任する。

第21條　役員の任期は二年とし、選任年度の次期の事業年度初からこれを起算する。但し、評議員の任期は、選任年度の二月からこれを起算する。

會長、支部長、及び常務理事を除く役員は、毎年その半數を改選する。

役員に欠員を生じたときは、遲滯なくこれを補選する。但し、第19條の定數を欠かず、評議員會でその必要がないと認めたときは、この限りでない。

補選に依る役員の任期は、前任者の殘期間とする。

第22條　會長は、會務を總理し、本會を代表し、總會及び理事會の議長となる。

副會長は、會長を補佐し、會長事故あるときは、その職務を代理する。

第23條　會長、副會長、理事及び支部長は、理事會を組織して會務を執行する。

理事會の議事は、出席者の過半數でこれを決し、可否同數の場合には、議長の決するところによる。

理事會に出席できない者は、書面で議決に參加し又は他の出席者に委任して、議決權を行使することを妨げない。

第24條　理事會は、理事中から又は理事以外の者から、常務理事若干名を選任することができる。

理事以外から選任された常務理事は、これを第19條による理事とする。但しこの場合には選任後評議員會の承認を得なければならない。

常務理事は、會長、副會長を補佐し、常時會務を處理し、會長、副會長事故あるときは、その職務を代理する。

第25條　支部長は、支部を代表し、支部の會務を執行する。

第26條　監事は、常時會務及び財産の狀況を監査し、特別の事由ある時は、總會又は評議員會を招集することができる。

監事は、理事會に出席して意見を述べることができる。

但し、議決に加はることはできない。

第27條　評議員は、評議員會を組織し重要會務を議決する。

第28條　本會に、名譽顧問、顧問及び參與各若干名を置くことができる。

１．名譽顧問は、本會の事業遂行に、其の協力を求めるため理事會の推薦した者。

２．顧問は、建築に關係ある學識經驗者であって、理事會の推薦により總會の議決を經た者。

顧問は、會務の重要事項について、會長の諮問に應じ、又は意見を提出する。

３．參與は會員中から理事會で推薦委嘱した者。

參與は、會務に就て理事會の諮問に應じ、又は意見を提出する。

參與の任期については第21条の規定を準用する。

顧問及び參與は、役員に就任したときは、その位置

を退くものとする。

第４章　會　議

第29條　會議は總會及び評議員會の二種とし、更に總會を、通常總會及び臨時總會の二種に分ける。

會議は、會長これを招集する。

會議の議事録は、議事の經過の要領及び其の結果を記載し、總會の場合は議長及び出席正會員二名、評議員會の場合は議長及び出席評議員二名の署名を得て保存しなければならない。但し、書面表決のときは議長の署名で足りる。

第30條　總會は正會員を以て組織する。

總會に於ける正會員の表決権は、會費一口につき一個とする。但し、會員一名の口數が、總正會員の口數の貳拾分の一を超えるときは、その超過分には表決權はない。

第31條　通常總會は、毎年１回１月これを開く。

臨時總會は、評議員會又は會長が必要と認めたとき、若しくは正會員百名以上から、會議の目的事項を示して要求があったとき、これを招集する。

第32條　總會を招集するには、會日から１週間前に、會議の目的事項、日時及び場所を示して、書面又は公告によって正會員に通知を發しなければならない。但し、緊急の必要ある場合又は再度招集の場合は、この期間を短縮することができる。

第33條　正會員は、正會員10名以上の賛成を得て、總會に議案を提出することができる。

總會で正會員が動議を提出するには、出席者の二十分の一以上の賛成がなければならない。

前項の動議による議決事項は、次の總會で承認を經なければならない。

第34條　總會の議事は、特別の場合を除き、出席者の過半數でこれを決し、可否同數の場合には議長の決するところによる。

臨時總會は、會議によらないで書面表決によることができる。この場合會長は、その結果を遅滞なく公告又は書面によって、正會員に報告しなければならない。書面表決は、議決と同一の効力を有する。

第35條　次の事項については、總會の議決を經なければならない。

１．定款の變更
２．重要な財産又は基金の處分
３．本會の解散及び清算
４．收支予算及び決算

前項第４號の予算で、評議員會の議決を經たものについては、理事會は總會の議決がないときでも、原案を執行することができる。但し、この場合には次の總會に於て、承認を求めなければならない。

總會は、會議の延期又は續行を議決することができる。この場合には、第32條の規定を適用しない。

第36條　前條第１項第１號乃至第３號に關する議事については、總正會員の二十分の一以上が出席し、總表決權の二十分の一以上を行使し、三分の二以上の多數による議決を必要とする。

出席者が前項の定足數に達しないときには、出席者の表決權の過半數で、仮決議をすることができる。この場合には、遅滞なく再度總會を招集して、出席者の表決權の過半數で仮決議の認否を決する。

第37條　總會に出席しない正會員は、書面で表決をし、又は他の出席正會員をその代理人とすることができる。

第38條　評議員會は、毎年三月及び十一月に定時會議を開き、なお會長若しくは理事會が必要と認めたとき、又は評議員十名以上から、會議の目的事項を示して要求のあったとき臨時會議を開く。

第39條　評議員會に議案を提出するには、正會員は評議員５名以上の、評議員は評議員二名以上の賛成を得て、これをすることができる。

第40條　評議員會の招集及び議決に就ては、總會の規定を準用する。

評議員會の議長は、評議員の互選とし、その任期は一年とする。

評議員會は、總評議員の三分の一以上出席しなければ議決を行ふことができない。

第41條　本會は、その目的遂行のため、部會及び委員會を置くことができる。

第５章　資産及び會計

第42條　本會に基金を置く。

基金は、これに指定せられた寄附金、その他評議員會でこれに編入の議決を行ったものを、これに當てる。

第43條　本會の財産は會長がこれを管理する。但し、管理方法に就て評議員會が議決をしたときは、これに從う。

本會の財産又は收入は、之を會員に分配することができない。

第44條　本會の經費は、會費、基金收入又は事業收入、寄附金、補助金その他の收入で、これを支辨する。

第45條　財産目録及貸借對照表は、毎事業年度末現在により、これを調製する。前年度の收支決算、財産目録、貸借對照表及び事業報告書は、毎年六月迄に常務理事又は擔當理事がこれを調製し、理事會の議決を經て、監事に提出しなければならない。

監事は、前項の書類を受理したときは、これを監査し意見を附して、總會及び評議員會に報告しなければならない。

第６章　解散及び清算

第46條　本會の解散は、總會の議決による。

第47條　清算人は、總會でこれを選任する。

清算人は、就任の日から六月以内に清算及び財産處分の方法を定めて、總會に提出しなければならない。

附　則

本定款は、民法第38條による認可の日から、これを施行する。

從前の定款による正會員、維持會員及賛助會員は、本定款による正會員とし、名譽正會員及び准會員は、夫々本定款による名譽正會員及び准會員とする。

從前の定款による名譽賛助會員は、これを廢し、終身賛助會員はそのまゝとする。

從前の定款による役員は、本定款による役員の就任と同時にその任期を終了するものとする、但し、その以前に任期滿了する者は、新役員の就任までその任期を延長する。

本定款により最初に選任せられた役員中、會長、支部長及び常務理事を除く役員の各半數の任期はこれを一年とし、その人選は互選でこれを決める。

事業年度は、昭和二十二年度に限って、これを昭和二十三年三月三十一日まで延長する。

「建築と社会」昭和22年6・7・8月号より転載

社團法人　日本建築協會細則

（昭和22年11月20日細則變更決議、同年12月5日実施）

第1章　支　部

第1條　會員百名以上居住する地方では、支部を設置することができる。支部を設置するには、發起人を定め、地域を指定し、支部規程案及び賛成會員名簿を添付して、本會に支部設置の要求をしなければならない。

第2條　支部地域内に居住する會員は、その支部に屬するものとする。但し、會員からこれと異なる申出あるときにはこれに從う。

第3條　支部の會務は、その支部規程によってこれを執行する。

支部規程及びその變更は、支部總會の議決でこれを定め、理事會の承認を經てその効力を生ずる。

第4條　支部規程には、支部に關する次の事項を、記載しなければならない。

1．名稱
2．事務所の所在地
3．地域
4．事業
5．總會及び役員會に關する事項
6．役員の選任及びその權限に關する事項
7．其他必要な事項

第5條　支部の經費は、支部交附金、寄附金、支部事業より生ずる收入及びその他の收入で、これを支辨する。

本部は支部に對して、その支部所屬會員の納付した會費の十分の四以内を、支部交附金として交附する。但し、特別の場合には理事會の議決を經て、これを增額することができる。

第6條　支部の事業年度は、本會の事業年度に準ずる。

支部は、毎年2月末日迄に次年度の豫算を、5月末日迄に前年度の事業並びに決算報告書を、本會に提出し、理事會の承認を經なければならない。

第2章　會員及び會費

第7條　正會員として入會するには、正會員1名を紹介者とし、所定の入會申込書に入會金貳拾圓を添えて、本會に提出しなければならない。

但し、定款第9條第2項による正會員は、入會金を必要としない。

學生生徒で准會員として入會するには、前項の入會金を金拾圓とする。但し、當該學校の在學証明書を提出しなければならない。

第8條　會員種別の變更を希望する會員は、所定の轉格申込書を本會に提出しなければならない。但し學生生徒である准會員は、當該學校卒業と同時に、正會員に轉格するものとする。

第9條　定款第14條により指名せられる會員の數は、指名者を含み會費口數と同數以内とする。但し、會員一名の口數が總正會員數の二十分の一を超えるときは、その超過分に對しては指名することができない。

第10條　一口の會費は、次の通りとし、これを年三回以内に分納することができる。

1．正會員　定款第9條第1號による者
年額金百貳拾圓
但し、遠隔の地で且つ支部のない地方の正會員は前記の十分の八とする。
定款第9條第2號による者
年額金參百圓
2．准會員　年額金六拾圓

事業年度の中途で入會又は轉格した者の會費は月割計算とする。

會員に特別の事情が生じたときは、理事會の議決によって、その期間中の會費の減免、又はその他の措置をすることができる。

第3章　役員及び選擧

第11條　副會長、常務理事、理事及び監事の定數は、次の通りとする。

副會長　2名、　常務理事　1名
理事　28名、　監事　2名

第12條　評議員は、次の通り選出する。

1．支部に属せぬ地域の正會員は、その地域の正會員の表決權百個又はその端數毎に２名の評議員を、總會で互選する。

2．支部に属する正會員は、その支部所屬正會員の表決權百個又はその端數毎に２名の評議員を、支部總會で互選する。

評議員の數は、毎年十月末日現在の正會員表決權の數に應じ、評議員會でこれを定める。

第13條　選擧は、會長、副會長及び監事は單記、理事及び評議員は選擧する數の半數連記を以て、所定の投票用紙を用ひいづれも無記名投票で、これを行う。

投票による選擧で、得票同數の者二名以上あるときは、年長者を以て上位者とする。

第４章　　會務及び事務

第14條　理事は、互選に依って左の如く分ち會務を分掌する。

主記（十三名）事業並びに會務一般

主計（五名）會計

編集（十名）雜誌其他の編集、出版

第15條　本會の事務を處理する爲、事務局を置く。

事務局に局長１名を置き、常務理事を以てこれに充て、事務局を統轄せしめる。

事務局には、書記長及び職員若干名を置く。その任免並びに事務局長以下の給與は、理事會でこれを定める。

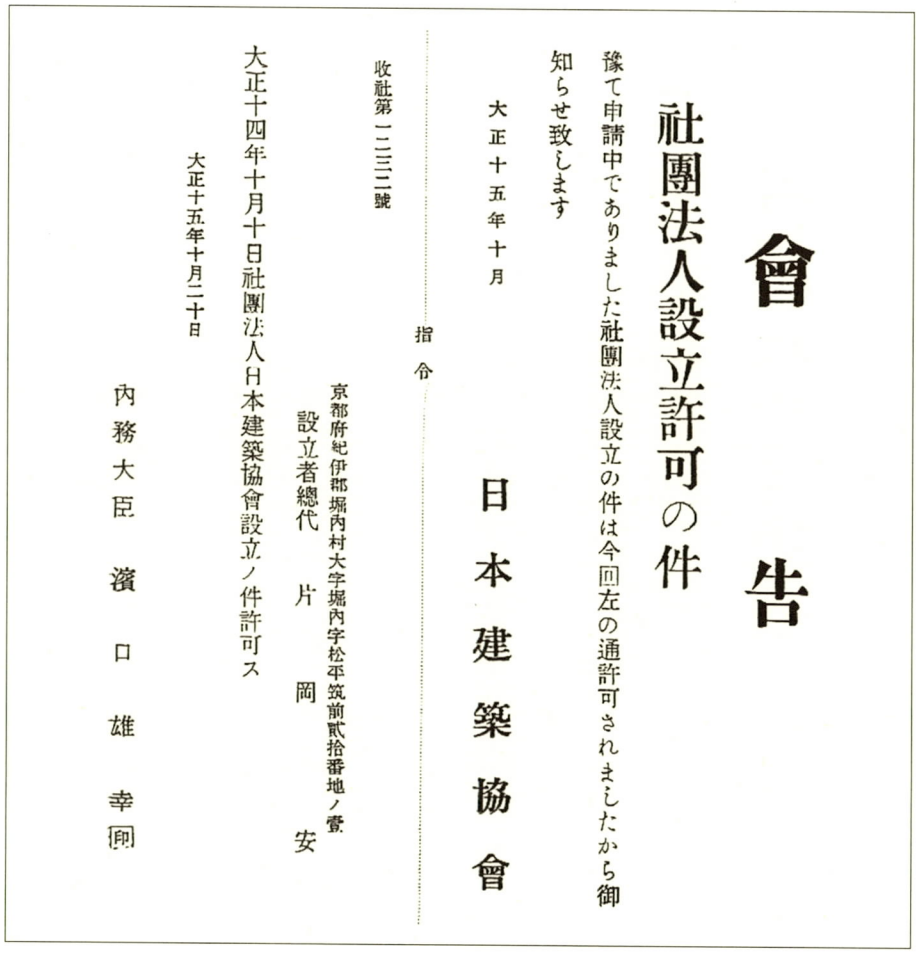
第16條　本會は、會報並びに雜誌「建築と社會」を發行する。

第17條　事務局規程、部會並びに委員會規程、その他定款及び本細則施行に必要な規程は、理事會で別にこれを定める。

附　則

定款第９條第２號による正會員の一口の會費は昭和二十三年三月三十一日までは年額貳百圓の割とする。

「建築と社会」昭和22年６・７・８月号より転載



會　　告

社團法人設立許可の件

豫て申請中でありました社團法人設立の件は今回左の通許可されましたから御知らせ致します

大正十五年十月

日本建築協會

指令

收社第一二三二號

京都府紀伊郡堀内村大字堀内字松平筑前貳拾番地ノ壹

設立者總代　片岡安

大正十四年十月十日社團法人日本建築協會設立ノ件許可ス

大正十五年十月二十日

内務大臣　濱口雄幸印

役員名簿

■歴代会長・副会長・理事・常務・監事等

年度	理事長・会長	(副会頭)副会長	理事　常務　監事
1917	片岡　安(初代理事長)		理事　武田　五一　池田　實　葛野壯一郎　宗　兵蔵
1918	同		池田　實　野村　一郎　武田　五一　日高　胖　波江　悌夫 松本　禹象　瀬戸　文吾
1919	同		宗　兵蔵　野村　一郎　設楽　貞雄　日高　胖　舟橋　喜一 松本　禹象
1920	同		宗　兵蔵　池田　實　設楽　貞雄　吉井　長七　舟橋　喜一 葛野壯一郎
1921	片岡　安(副会頭) 葛野壯一郎(理事長)		池田　實　小笠原　鈤　瀬戸　文吾　吉井　長七　波江　悌夫 葛野壯一郎　平井　三郎　松本　禹象　横濱　勉　吉木　久吉 ※会則改正により、理事の任期は2年とされ、理事長は従来どおり1年とした。
1922	同 横濱　勉		竹腰　健造　小笠原　鈤　瀬戸　文吾　内藤　太郎　舟橋　喜一 松本　禹象　野呂長四郎　中西　甚作　横濱　勉　吉木　久吉
1923	同 池田　實		竹腰　健造　内藤　太郎　舟橋　喜一　野呂長四郎　中西　甚作 園部　文雄　宮本　長治　佐藤　彰美　宮本　金七　池田　實 本田　登　設楽　貞雄
1924	同 同		竹腰　健造　伊藤　正文　田中　綱　(中澤誠一郎)　中村琢治郎 松本　禹象　本田　二郎　佐藤　彰美　池田　實　本田　登 設楽　貞雄　今林彦太郎　谷口　廉児
1925	同 松本　禹象	宗　兵蔵 (副会頭)	渋谷　五郎　伊藤　正文　田中　綱　園部　文雄　吉井　長七 松本　禹象　古塚　正治　松本　儀八　光安梶之助　和田貞治郎
1926	同 園部　文雄	宗　兵蔵	渋谷　五郎　小川安一郎　須川廉太郎　池田谷久吉　酒井勇三郎 古塚　正治　八木幸次郎　光安梶之助　和田貞治郎
1927	片岡　安 (初代会長)	宗　兵蔵 日高　胖 (副会長)	常務　坪井　誠一　松室　重光　坂口芳三郎　吉井　長七　池田谷久吉 徳政　金吾　野呂長四郎　八木幸次郎　谷　民蔵 監事　横濱　勉　松本　禹象
1928	同	宗　兵蔵 野村　一郎	常務　坪井　誠一　浦　英之助　岡部　顕則　吉井　長七　波江　悌夫 本間　乙彦　横濱　勉　八木幸次郎　木村　寛一　和田貞治郎 監事　池田　實　松本　禹象
1929	同	宗　兵蔵 日高　胖	常務　坪井　誠一　山脇友三郎　岡部　顕則　吉井　長七　波江　悌夫 徳政　金吾　古宇田　實　池田谷久吉　本間　乙彦　酒井勇三郎 監事　池田　實　横濱　勉
1930	同	宗　兵蔵 古宇田　實	常務　坪井　誠一　松本　儀八　岡部　顕則　吉井　長七　小川　陽吉 篠原　太郎　山脇友三郎　木村　寛一　本間　乙彦　高橋　栄治 監事　池田　實　横濱　勉
1931	同	日高　胖 古宇田　實	常務　阪井　米吉　松本　儀八　岡部　顕則　小川安一郎　小川　陽吉 徳政　金吾　大原　芳知　小西　一良　本間　乙彦　高橋　栄治 村野　藤吾　森本　藤吉 監事　波江　悌夫　光安梶之助
1932	同	池田　實 武田　五一	常務　伊東宗太郎　中山栄太郎　岡部　顕則　松井清之助　小川　陽吉 増田　清　大原　芳知　鳥井　信　富士岡重一　高橋　栄治 呼子　正　森本　藤吉 監事　小笠原　鈤　津田　敏雄
1933	同	池田　實 竹腰　健造	常務　坂口芳三郎　内藤　良雄　伴野　貞三　浦　英之助　清水　栄二 八木　盛二　今林彦太郎　鳥井　信　富士岡重一　高橋　栄治 中村　義雄　堀田猷太郎 監事　徳政　金吾　松室　重光
1934	同	葛野壯一郎 松室　重光	常務　井上　福蔵　中澤誠一郎　鈴木　末尾　浦　英之助　清水　栄二 加藤　善吉　今林彦太郎　秋田喜代治　新名　種夫　高橋　栄治 平塚　鎗吉　渡部　圭吾 監事　富士岡重一　岡部　顕則

年度	会長	副会長	常務　監事					
1935	片岡　安	武田　五一	常務	伊藤　和夫	中澤誠一郎	池田　宮彦	北垣熊之介	清水　栄二
		松井貴太郎		島田　良馨	伊東宗太郎	谷　隆夫	新名　種夫	岡田　孝男
				保田虎太郎	三浦　尚史			
			監事	岡部　顕則	渋谷　五郎			
1936	同	設楽　貞雄	常務	坂口芳三郎	中澤誠一郎	新名　種夫	北垣熊之介	清水　栄二
		安井　武雄		島田　良馨	内藤　亮一	中西　六郎	加田　安彦	作間日出生
				本多　正道	堀口　甚吉	三浦　尚史		
			監事	津田　敏雄	松本　禹象			
1937	同	竹腰　健造	常務	井上　福蔵	中澤誠一郎	新名　種夫	小川　陽吉	清水　栄二
		松本　禹象		堀口　甚吉	伊藤　正文	中西　六郎	加田　安彦	中村　義雄
				樋口辰太郎	吉田　信武			
			監事	富士岡重一	渡部　圭吾			
1938	同	竹腰　健造	常務	井上　福蔵	伊藤　和夫	鈴木　一幸	松井清之助	八木　憲一
		中澤誠一郎		堀口　甚吉	伊藤　正文	三浦　茂	中西　六郎	山手　研吾
				樋口辰太郎	吉田　信武			
			監事	清水　栄二	古塚　正治			
1939	同	竹腰　健造	常務	桐本　楠雅	久保田種吉	新名　種夫	石川　寛三	亀井幸次郎
		中澤誠一郎		堀口　甚吉	伴野　貞三	松井清之助	棚橋　諒	黒田　茂
				三浦　茂	藪中　一良			
			監事	松本　儀八	山脇友三郎			
1940	同	坂　静雄	常務	伊藤　正文	北垣熊之介	玉置豊次郎	岩尾　保衛	亀井幸次郎
		今林彦太郎		政岡　基次	桐本　楠雅	米倉　威夫	棚橋　諒	北川　正弥
				三浦　茂	藪中　一良			
			監事	井上　福蔵	鈴木　一幸			
1941	同	井上　新二	常務	池田　宮彦	北垣熊之介	玉置豊次郎	芝田　知重	大下順三郎
		今林彦太郎		政岡　基次	桐本　楠雅	岡田　孝男	中西　六郎	松久保敬三
				小林　清	藪中　一良			
			監事	松井清之助	鈴木　一幸			
1942	同	竹腰　健造	常務	伊藤　和夫	錦田　直一	佐藤正次郎	小林　三造	大下順三郎
		井上　新二		和田貞治郎	桐本　楠雅	西沢　藤生	中西　六郎	松久保敬三
				小林　清	藪中　一良			
			監事	池田　宮彦	鈴木　一幸			
1943	同	竹腰　健造	常務	伊藤　和夫	錦田　直一	佐藤正次郎	小林　三造	大下順三郎
		松本　儀八		松久保敬三	桐本　楠雅	西沢　藤生	中西　六郎	堀井　啓治
				小林　清	藪中　一良			
			監事	池田　宮彦	鈴木　一幸			
1944	同	竹腰　健造	常務	景山　正明	佐藤正次郎	中西　六郎	堀井　啓治	藪中　一郎
		松本　儀八		藤阪捨治郎	松久保敬三	三浦　茂		
			監事	池田　宮彦	松井清之助			
1945	同	竹腰　健造	常務	藪中　一良	中西　六郎	岩尾　保衛	佐藤正次郎	三浦　茂
		松本　儀八		松久保敬三	藤阪捨治郎	伊藤　和夫	中野順次郎	大下順三郎
				矢田　鉄蔵				
			監事	池田　宮彦	松井清之助			
1946	片岡　安	松本　儀八	常務	藪中　一良	中西　六郎	増井　敏克	長尾　清一	尾崎　久助
	竹腰　健造	池田　宮彦		三浦　茂	藤阪捨治郎	矢田　鉄蔵	中野順次郎	生田　五郎
	（第２代）			中島　喜平	松久保敬三			
			監事	宮脇　晴美	鈴木　末尾			
1947	同	錢高　輝之	常務	浅海　治平	尾崎　久助	木村　寛一	鴻池　藤一	志垣　正次
		中西　六郎		須賀豊治郎	東畑　謙三	中島　富造	長尾　清一	藤木　正一
				松村　雄吉	元吉勇太郎	藪中　一良	岩尾　保衛	大林　芳郎
				欅田　藤郎	佐竹　則蓊	菅谷　三郎	藤阪捨治郎	増井　敏克
				生田　五郎	石川純一郎	栗原　信虎	城口　亀吉	竹中　錬一
				中野順次郎	野沢幸三郎	西山　卯三		
			監事	大村己代治	妹尾　一夫		常務理事　西川　総一	

年度	会長	副会長	常務理事監事					
1948	竹腰　健造	錢高　輝之	常務	浅海　治平	尾崎　久助	木村　寛一	鴻池　藤一	志垣　正次
		井上　新二		城口　亀吉	東畑　謙三	池田　達雄	大林　芳郎	藤木　正一
				松村　雄吉	須賀豊治郎	藪中　一良	鈴木　一幸	辻　徳三郎
				羽原　徳衛	佐竹　則蓊	菅谷　三郎	竹中　錬一	中野順次郎
				青木　友一	森　忠一	栗原　信虎	松久保敬三	恒岡　俊行
				岩尾　保衞	野中　駒市	西山　卯三		
			監事	大村己代治	妹尾　一夫		常務理事	西川　総一
1949	同	井上　新二	理事	浅海　治平	尾崎　久助	木村　寛一	鴻池　藤一	大下順三郎
		大林　芳郎		錢高　輝之	東畑　謙三	池田　達雄	堤　耕作	藤木　正一
				松村　雄吉	羽原　徳衛	松浦勇太郎	鈴木　一幸	辻　徳三郎
				小川　正	佐竹　則蓊	菅谷　三郎	竹中　錬一	中野順次郎
				長尾　清一	伴　秀雄	栗原　信虎	森　忠一	大西　幸七
				星　廣文	西山　卯三	青木　友一		
			監事	妹尾　一夫	吉田安三郎		常務理事	大和　栄衛
1950	同	井上　新二	理事	淺沼猪之吉	尾崎　久助	桐本　楠雅	鴻池　藤一	大下順三郎
		大林　芳郎		錢高　輝之	白石　博三	團野由太郎	堤　耕作	藤木　正一
				松村　雄吉	小林　清	松浦勇太郎	山田　文次	小川　正
				佐竹　則蓊	山本竜太郎	竹中　錬一	高橋　慶夫	海崎喜美春
				伴　秀雄	栗原　信虎	日垣太市郎	星　廣文	吉田安三郎
				滝沢　真弓				
			監事	松久保敬三	妹尾　一夫		常務理事	大和　栄衛
1951	同	東畑　謙三	理事	桐本　楠雅	吉田安三郎	中野順次郎	松村　雄吉	鈴木　一幸
		大林　芳郎		山田　文次	日垣太市郎	小林　清	池田　達雄	日野　勝好
				錢高　輝之	山本竜太郎	斉藤　光夫	高橋　慶夫	岡田　孝男
				鴻池　藤一	竹中　錬一	佐竹　則翁	南　長吉	伴　潔
				滝沢　真弓	谷口　尚武	淺沼猪之吉	藤木　正一	浅海　治平
				團野由太郎	白石　博三			
			監事	松久保敬三	山邑　励二		常務理事	大和　栄衛
1952	同	東畑　謙三	理事	伊東　五郎	政岡　基次	中野順次郎	松村　雄吉	鈴木　一幸
		大林　芳郎		須賀豊治郎	山本　武雄	尾崎　久助	池田　達雄	日野　勝好
				錢高　輝之	栗原　信虎	斉藤　光夫	青木　友一	竹内　孝
				岡田　孝男	鴻池　藤一	竹中　錬一	佐藤　太	南　長吉
				伴　潔	中村　綱	谷口　尚武	淺沼猪之吉	藤木　正一
				浅海　治平	村田　経政	大倉　三郎		
			監事	吉田安三郎	山邑　励二		常務理事	大和　栄衛
1953	同	東畑　謙三	理事	青木　友一	淺沼猪之吉	伊東　五郎	上西　圭治	尾崎　久助
		大林　芳郎		栗原　信虎	鴻池　藤一	錢高　輝之	竹中　錬一	中野順次郎
				藤木　正一	山内嘉兵衛	岩崎甚太郎	小栗　賛吾	佐藤　太
				竹内　孝	伴　秀雄	政岡　基次	村田　経政	浅海　治平
				大倉　三郎	小泉　昇	越田　正勝	須賀豊治郎	中村　綱
				松村　雄吉	山本　武雄	尾亀清四郎		
			監事	吉田安三郎	田辺　信		常務理事	大和　栄衛
1954	同	大林　芳郎	理事	東畑　謙三	尾崎　久助	竹内　成夫	浦辺鎭太郎	波江　貞夫
		伊東　五郎		越田　正勝	尾亀清四郎	岩崎甚太郎	中野順次郎	小泉　昇
				鴻池　藤一	淺沼猪之吉	松村　雄吉	錢高　輝之	竹中　錬一
				藤木　正一	小栗　賛吾	栗原　信虎	佐藤　太	浅海　治平
				須賀豊治郎	上西　圭治	伴　秀雄	小早川美武	佐村木　実
				青木　友一	山内嘉兵衛			
			監事	田辺　信	中澤誠一郎		常務理事	大和　栄衛
1955	同	伊東　五郎	理事	東畑　謙三	尾崎　久助	竹内　成夫	浦辺鎭太郎	波江　貞夫
		鴻池　藤一		増井　敏克	駒　敬三	菅田　豊重	横尾　義貫	藤原　巧
				淺沼猪之吉	松村　雄吉	錢高　輝之	竹中　錬一	藤木　正一
				小栗　賛吾	大林　芳郎	栗原　信虎	佐藤　太	浅海　治平
				須賀豊治郎	山田　文次	南　長吉	小早川美武	佐村木　実
				鈴木　清市	宮飼　克二	高丘　治季		
			監事	中澤誠一郎	鷲尾　九郎		常務理事	手島　政男

年度	会長	副会長	理事 監事 他					
1956	竹腰　健造	東畑　謙三	理事	伊東　五郎	尾崎　久助	竹内　成夫	佐野　正一	鷲尾　健三
		鴻池　藤一		増井　敏克	駒　敬三	菅田　豊重	横尾　義貫	淺沼猪之吉
				松村　雄吉	錢高　輝之	竹中　錬一	藤木　正一	小栗　賛吾
				大林　芳郎	栗原　信虎	佐藤　太	浅海　治平	石田　憲二
				山田　文次	南　長吉	青木　友一	向井　保晴	鈴木　清市
				宮飼　克二				
			監事	鷲尾　九郎	中西　六郎		常務理事	手島　政男
1957	同	東畑　謙三	理事	伊東　五郎	尾崎　久助	竹内　成夫	佐野　正一	鷲尾　健三
		鴻池　藤一		桐本　楠雅	高橋　慶夫	岩崎甚太郎	布施　忠司	諫早　信夫
				淺沼猪之吉	松村　雄吉	錢高　輝之	竹中　錬一	藤木　正一
				小栗　賛吾	大林　芳郎	栗原　信虎	佐藤　太	山本竜太郎
				石田　憲二	浅野重太郎	内田　成之	青木　友一	向井　保晴
				室谷　山水	吉田　信武	井手　正雄		
			監事	中西　六郎	山邑　励二		常務理事	手島　政男
1958	尾崎　久助 （第３代）	東畑　謙三	理事	伊東　五郎	河東　義方	深尾　実郎	塚本　猛次	奥島　正一
		鴻池　藤一		桐本　楠雅	高橋　慶夫	岩崎甚太郎	布施　忠司	諫早　信夫
				淺沼猪之吉	松村　雄吉	錢高　輝之	竹中　錬一	藤木　正一
				小栗　賛吾	大林　芳郎	栗原　信虎	佐藤　太	山本竜太郎
				菅野　栄	浅野重太郎	内田　成之	青木　友一	向井　保晴
				室谷　山水	吉田　信武	井手　正雄		
			監事	山邑　励二	宮脇　晴美		常務理事	手島　政男
1959	同	東畑　謙三	理事	伊東　五郎	河東　義方	深尾　実郎	塚本　猛次	奥島　正一
		鴻池　藤一		越田　正勝	小林　清周	岩崎甚太郎	田中良太郎	諫早　信夫
				淺沼猪之吉	松村　雄吉	錢高　輝之	竹中　錬一	藤木　正一
				小栗　賛吾	大林　芳郎	栗原　信虎	佐藤　太	山本竜太郎
				菅野　栄	知見　義夫	菅谷　三郎	青木　友一	向井　保晴
				金光　五郎	設楽　貞三	佐々木米太郎		
			監事	宮脇　晴美	田辺　信		常務理事	手島　政男
1960	同	東畑　謙三	理事	設楽　貞三	佐々木米太郎	金光　五郎	越田　正勝	鴻池　藤一
		鴻池　藤一		村石　秋吉	桐本　楠雅	宮脇　晴美	森　忠一	浦辺鎭太郎
				上林　博雄	小林　清周	岩崎甚太郎	田中良太郎	諫早　信夫
				淺沼猪之吉	松村　雄吉	錢高　輝之	竹中　錬一	藤木　正一
				小栗　賛吾	大林　芳郎	梶本　秀尾	佐藤　太	山本竜太郎
				柴田　文三	知見　義夫	菅谷　三郎	青木　友一	
			監事	田辺　信	伊東　五郎		常務理事	手島　政男
1961	同	東畑　謙三	理事	桐本　楠雅	菅　陸二	森　忠一	浦辺鎭太郎	上林　博雄
		竹中　錬一		恒岡　俊行	岩崎甚太郎	滝本　義一	鴻池　藤一	淺沼猪之吉
				松村　雄吉	錢高　輝之	大林　芳郎	藤木　正一	城戸七太郎
				梶本　秀尾	佐藤　太	山本竜太郎	柴田　文三	仙田　四郎
				平山　京平	村石　秋吉	諫早　信夫	中原　茂	金光　五郎
				鳥田　家弘	市川　進男			
			監事	伊東　五郎	山邑　励二		常務理事	手島　政男
1962	同	東畑　謙三	理事	桐本　楠雅	浦辺鎭太郎	菅　陸二	元吉勇太郎	佐野　正一
		竹中　錬一		恒岡　俊行	中原　茂	岩崎甚太郎	滝本　義一	田中　弥一
		塚本　猛次		鴻池　藤一	淺沼猪之吉	松村　雄吉	錢高　輝之	大林　芳郎
				藤木　正一	城戸七太郎	梶本　秀尾	佐藤　太	山本竜太郎
				須賀豊治郎	仙田　四郎	平山　京平	村石　秋吉	室谷　山水
				金光　五郎	鳥田　家弘	池田総一郎		
			監事	山邑　励二	竹内　成夫		常務理事	手島　政男
1963	同	東畑　謙三	理事	桐本　楠雅	浦辺鎭太郎	菅　陸二	足立　孝	佐野　正一
		竹中　錬一		恒岡　俊行	岡本　弘	増井　敏克	田中良太郎	橋本　忠保
		塚本　猛次		鴻池　藤一	淺沼猪之吉	松村　雄吉	錢高　輝之	大林　芳郎
				藤木　正一	白井　周二	梶本　秀尾	佐藤　太	山本竜太郎
				須賀豊治郎	高須洪一郎	樋口　勝栄	村石　秋吉	室谷　山水
				横田喜一郎	光安　義光	中村　金三		
			監事	福知　秀夫	稲垣　皎三		常務理事	手島　政男

年度	会長	副会長	理事 監事 他					
1964	東畑　謙三 （第4代）	塚本　猛次 竹中　錬一 鷲尾　健三	理事	福知　秀夫	海上　静一	深尾　実郎	片山　光生	佐野　正一
				恒岡　俊行	岡本　弘	増井　敏克	田中良太郎	橋本　忠保
				鴻池　藤一	淺沼猪之吉	松村　雄吉	錢高　輝之	大林　芳郎
				藤木　正一	白井　周二	梶本　秀尾	菅谷　三郎	山本竜太郎
				菅野　栄	高須洪一郎	樋口　勝栄	村石　秋吉	田村　史郎
				横田喜一郎	光安　義光	中村　金三		
			監事	稲垣　皎三	中原　茂		常務理事	手島　政男
1965	同	塚本　猛次 竹中　錬一 鷲尾　健三	理事	福地　秀夫	海上　静一	深尾　実郎	片山　光生	佐野　正一
				西田　康治	政岡　基次	増井　敏克	田中良太郎	岩下　久哉
				鴻池　藤一	淺沼猪之吉	松村　雄吉	錢高　輝之	大林　芳郎
				藤木　正一	白井　周二	梶本　秀尾	菅谷　三郎	山本竜太郎
				菅野　栄	清水　愛明	吉永　義雄	村石　秋吉	田村　史郎
				横田喜一郎	光安　義光	木下　晴三		
			監事	中原　茂	山邑　励二		常務理事	福中定三郎
1966	同	塚本　猛次 竹中　錬一 鷲尾　健三	理事	西村　栄一	岡橋作太郎	深尾　実郎	長谷川哲之助	佐野　正一
				西田　康治	政岡　基次	増井　敏克	田中良太郎	岩下　久哉
				鴻池　藤一	淺沼猪之吉	松村　雄吉	錢高　輝之	大林　芳郎
				藤木　正一	白井　周二	梶本　秀尾	菅谷　三郎	佐藤　太
				伴　一郎	清水　愛明	吉永　義雄	田中　政二	安田　誠一
				横田喜一郎	光安　義光	木下　晴一		
			監事	海上　静一	山邑　励二		常務理事	福中定三郎
1967	同	塚本　猛次 錢高　輝之 鷲尾　健三	理事	西村　栄一	岡橋作太郎	後藤　典夫	長谷川哲之助	佐野　正一
				橋本　忠保	政岡　基次	中原　茂	長沢　徹夫	堀内　三郎
				鴻池　藤一	淺沼猪之吉	松村　雄吉	大林　芳郎	藤木　正一
				白井　周二	竹中　錬一	梶本　秀尾	菅谷　三郎	佐藤　太
				伴　一郎	尾亀清四郎	南　長吉	田中　政二	安田　誠一
				横田喜一郎	中川　文雄	芳山　保蔵		
			監事	海上　静一	五十嵐芳雄		常務理事	福中定三郎
1968	同	塚本　猛次 錢高　輝之 鷲尾　健三	理事	越田　正勝	岡橋作太郎	後藤　典夫	足立　孝	佐野　正一
				橋本　忠保	政岡　基次	中原　茂	石崎　潑雄	堀内　三郎
				鴻池　藤一	淺沼猪之吉	松村　雄吉	大林　芳郎	竹中　錬一
				白井　周二	松森　英雄	浅海　正雄	西村　庄市	佐藤　太
				須賀　栄一	尾亀清四郎	南　長吉	田中　政二	野田　武雄
				横田喜一郎	中川　文雄	芳山　保蔵		
			監事	五十嵐芳雄	高橋　慶夫		常務理事	福中定三郎
1969	同	塚本　猛次 松村　雄吉 鷲尾　健三	理事	越田　正勝	岡橋作太郎	後藤　典夫	足立　孝	佐野　正一
				橋本　忠保	政岡　基次	中原　茂	石崎　潑雄	岩下　久哉
				堀内　三郎	土田　光夫	福田　朝生	矢野　豊作	山田　義行
				鴻池　藤一	淺沼猪之吉	錢高　輝之	大林　芳郎	竹中　錬一
				白井　周二	松森　英雄	浅海　正雄	西村　庄市	今元　康彦
				須賀　栄一	石田　憲二	本田　知之	田中　政二	野田　武雄
				井上　浄夫	越智　隆晴	高橋　政吉		
			監事	五十嵐芳雄	高橋　慶夫		常務理事	福中定三郎
1970	同	塚本　猛次 松村　雄吉 横尾　義貫	理事	後藤　典夫	北垣　智造	岡橋作太郎	鳥田　家弘	佐野　正一
				西嶋徳太郎	橋本　忠保	中原　茂	石崎　潑雄	岩下　久哉
				堀内　三郎	荒　敏雄	福田　朝生	矢野　豊作	山田　義行
				鴻池　藤一	淺沼猪之吉	錢高　輝之	大林　芳郎	竹中　錬一
				白井　周二	松森　英雄	小林　四郎	山本　憲三	今元　康彦
				知見　義夫	石田　憲二	本田　知之	田中　政二	安田　誠一
				井上　浄夫	越智　隆晴	高橋　政吉		
			監事	五十嵐芳雄	小西　岬		常務理事	福中定三郎

年度	会長	副会長	理事 監事 他					
1971	塚本　猛次 （第5代）	福田　朝生 松村　雄吉 横尾　義貫	理事	北垣　智造	岡橋作太郎	宮脇　和正	鳥田　家弘	佐野　正一
				西嶋徳太郎	谷口　尚武	奥島　正一	井上　滉	小林　清
				岩下　久哉	堀内　三郎	西田　康治	寺田　徳重	山田　義行
				鴻池　藤一	淺沼猪之吉	錢高　輝之	大林　芳郎	竹中　錬一
				白井　周二	宮武伊三郎	小林　四郎	山本　憲三	今元　康彦
				知見　義夫	尾亀清四郎	清水　愛明	田中　政二	安田　誠一
				井上　浄夫	山田　勝成	佐藤　四郎		
			監事	小西　岬	神谷　新一		常務理事	福中定三郎
1972	同	福田　朝生 松村　雄吉 横尾　義貫	理事	北垣　智造	小西　岬	宮脇　和正	彦谷　邦一	佐野　正一
				市川　宏	谷口　尚武	奥島　正一	井上　滉	小林　清
				岩下　久哉	堀内　三郎	西田　康治	寺田　徳重	山田　義行
				鴻池　藤一	淺沼猪之吉	錢高　輝之	大林　芳郎	竹中　錬一
				白井　周二	宮武伊三郎	小林　四郎	菅谷　健児	今元　康彦
				高須洪一郎	尾亀清四郎	清水　愛明	室谷　山水	渡辺　恵
				井上　浄夫	山田　勝成	佐藤　四郎	松村　雄吉(副会長任期中)	
			監事	神谷　新一	浦辺鎭太郎		常務理事	福中定三郎
1973	同	福田　朝生 錢高　輝之 横尾　義貫	理事	市川　宏	小林　清	佐野　正一	寺田　徳重	宮脇　和正
				大沢徳吾郎	山田　義行	井上　滉	五十嵐定義	北垣　智造
				小西　岬	高野考二郎	谷口　尚武	彦谷　邦一	山田　幸一
				鴻池　藤一	淺沼猪之吉	松村　雄二	大林　芳郎	竹中　錬一
				白井　周二	宮武伊三郎	西田　義郎	小林　四郎	菅谷　健児
				今元　康彦	高須洪一郎	尾亀清四郎	隅田　正美	室谷　山水
				渡辺　恵	井上　浄夫	佐々木米太郎		
			監事	浦辺鎭太郎	奥村　俊夫		常務理事	福中定三郎
1974	同	福田　朝生 錢高　輝之 横尾　義貫	理事	北垣　智造	小西　岬	国則　一夫	松村　慶三	佐野　正一
				市川　宏	谷口　尚武	大沢徳吾郎	井上　滉	小林　清
				五十嵐定義	高野考二郎	寺田　徳重	山田　義行	鴻池　藤一
				淺沼猪之吉	松村　雄二	大林　芳郎	竹中　錬一	白井　周二
				宮武伊三郎	西田　義郎	小林　四郎	菅谷　健児	今元　康彦
				須賀　孝	尾亀清四郎	隅田　正美	室谷　山水	渡辺　恵
				井上　浄夫	山田　幸一	佐々木米太郎		
			監事	奥村　俊夫	彦谷　邦一		常務理事	福中定三郎
1975	同	福田　朝生 錢高　輝之 横尾　義貫	理事	北垣　智造	小西　岬	国則　一夫	松村　慶三	佐野　正一
				市川　宏	岡田　光正	大沢徳吾郎	井上　滉	小林　清
				窪田　祐	山田　幸一	寺田　徳重	山田　義行	鴻池　藤一
				淺沼猪之吉	松村　雄二	大林　芳郎	竹中　錬一	白井　周二
				宮武伊三郎	前野慶太郎	小林　四郎	菅谷　健児	今元　康彦
				須賀　孝	岩井　市郎	伴　一郎	室谷　山水	渡辺　恵
				井上　浄夫	佐々木米太郎			
			監事	奥村　俊夫	彦谷　邦一		常務理事	福中定三郎
1976	同	福田　朝生 錢高　輝之 横尾　義貫	理事	北垣　智造	小西　岬	国則　一夫	松村　慶三	佐野　正一
				市川　宏	岡田　光正	大沢徳吾郎	井上　滉	小林　清
				窪田　祐	山田　幸一	三浦二三男	寺田　徳重	山田　義行
				鴻池　藤一	淺沼　茂夫	松村　雄二	大林　芳郎	竹中　錬一
				白井　周二	宮武伊三郎	前野慶太郎	小林　四郎	菅谷　健児
				今元　康彦	清水　愛明	岩井　市郎	伴　一郎	室谷　山水
				渡辺　恵	井上　浄夫	佐々木米太郎		
			監事	奥村　俊夫	海上　静一		常務理事	福中定三郎
1977	同	福田　朝生 錢高　輝之 横尾　義貫	理事	北垣　智造	小西　岬	三浦二三男	松村　慶三	佐野　正一
				市川　宏	岡田　光正	大沢徳吾郎	井上　滉	小林　清
				窪田　祐	山田　幸一	寺田　徳重	山田　義行	鴻池　藤一
				淺沼　茂夫	松村　雄二	大林　芳郎	竹中　錬一	奥村　俊夫
				木下　正利	前野慶太郎	小林　四郎	菅谷　健児	今元　康彦
				尾亀清四郎	須賀　孝	室谷　山水	渡辺　恵	田中　政二
			監事	海上　静一	宮武伊三郎		参与	福中定三郎

年度	会長	副会長	理事 監事 他				
1978	塚本　猛次	福田　朝生	理事	三品　哲夫	小西　岬	松村　慶三	前川　陽一	市川　宏
		錢高　輝之		岡本　行善	岡田　光正	今西　祥郎	井上　滉	小林　清
		足立　孝		窪田　祐	山田　幸一	寺田　徳重	山田　義行	鴻池　藤一
		佐野　正一		淺沼　茂夫	松村　雄二	大林　芳郎	竹中　錬一	奥村　俊夫
				木下　正利	前野慶太郎	小林　四郎	菅谷　健児	今元　康彦
				平城　勧	尾亀清四郎	須賀　孝	渡辺　恵	川岸　繁夫
				田中　政二				
			監事	宮武伊三郎	杉本正三郎		参与	福中定三郎
1979	同	福田　朝生	理事	三品　哲夫	小西　岬	下山　丈彦	松村　慶三	前川　陽一
		松村　雄二		市川　宏	小松　正宏	岡本　行善	多胡　進	今西　祥郎
		足立　孝		井上　滉	小林　清	窪田　祐	山田　幸一	寺田　徳重
		佐野　正一		八十島健二	鴻池　藤一	淺沼　茂夫	錢高　輝之	大林　芳郎
				竹中　錬一	奥村　俊夫	木下　正利	前野慶太郎	小林　四郎
				菅谷　健児	今元　康彦	平城　勧	伴　一郎	松本　亮二
				渡辺　恵	川岸　繁夫	村上　二郎		
			監事	杉本正三郎	山形　幸一		参与	福中定三郎
1980	同	福田　朝生	理事	三品　哲夫	小西　岬	秋田　満	松村　慶三	三輪　泰司
		松村　雄二		市川　宏	小松　正宏	岡本　行善	多胡　進	今西　祥郎
		足立　孝		井上　滉	小林　清	窪田　祐	山田　幸一	寺田　徳重
		佐野　正一		八十島健二	鴻池　藤一	淺沼　茂夫	錢高　輝之	大林　芳郎
				竹中　錬一	奥村　俊夫	木下　正利	前野慶太郎	小林　四郎
				菅谷　健児	武田　恭一	斎藤　博	伴　一郎	松本　亮二
				渡辺　恵	川岸　繁夫	村上　二郎		
			監事	山形　幸一	杉村正三郎		参与	福中定三郎
1981	同	福田　朝生	理事	三品　哲夫	小西　岬	秋田　満	松村　慶三	三輪　泰司
		松村　雄二		市川　宏	小松　正宏	岡本　行善	多胡　進	今西　祥郎
		足立　孝		井上　滉	小林　清	牧田　顕治	安盛　壽一	寺田　徳重
		佐野　正一		八十島健二	鴻池　藤一	淺沼　茂夫	錢高　善雄	大林　芳郎
				竹中　錬一	奥村　俊夫	木下　正利	前野慶太郎	小林　四郎
				菅谷　健児	武田　恭一	斎藤　博	堀内　史郎	両角　保
				渡辺　恵	川岸　繁夫	村上　二郎		
			監事	杉村正三郎	山形　幸一		参与	福中定三郎
1982	福田　朝生	松村　雄二	理事	三品　哲夫	長谷部朔郎	今井潤之介	松村　慶三	横山　誠一
	（第6代）	足立　孝		平田　定男	小松　正宏	岡本　行善	多胡　進	今西　祥郎
		佐野　正一		井上　滉	小林　清	牧田　顕治	安盛　壽一	寺田　徳重
		市川　宏		八十島健二	鴻池　藤一	淺沼　茂夫	錢高　善雄	大林　芳郎
				竹中　錬一	奥村　俊夫	木下　正利	前野慶太郎	小林　四郎
				菅谷　健児	武田　恭一	仙田　四郎	堀内　史郎	両角　保
				渡辺　恵	川岸　繁夫	村上　二郎		
			監事	山形　幸一	尾亀清四郎		参与	福中定三郎
1983	同	松村　雄二	理事	三品　哲夫	長谷部朔郎	今井潤之介	松村　慶三	横山　誠一
		足立　孝		平田　定男	小島　雄	岡本　行善	宮脇　和正	金多　潔
		佐野　正一		多胡　進	今西　祥郎	橋本　正章	小林　清	牧田　顕治
		市川　宏		木下　正利	大岡　昇	八十島健二	村上　秀夫	鴻池　藤一
				淺沼　茂夫	藤木　鐵三	板井　亨介	今村祐三郎	志賀　修一
				山口　道博	錢高　善雄	大林　芳郎	竹中　錬一	奥村　俊夫
				寺田　徳重	前野慶太郎	小林　四郎	菅谷　健児	浅海　正雄
				武田　恭一	城口　庸平	仙田　四郎	蒲生　喜治	北澤　登
				渡辺　恵	川岸　繁夫	立野　一郎	村上　二郎	
			監事	尾亀清四郎	井上　滉			

年度	会長	副会長	理事　監事　他
1984	福田　朝生 佐野　正一 （第７代） 1984年11月から	松村　雄二 足立　　孝 市川　　宏 佐野　正一 1984年10月まで 薬袋　公明 1984年11月から	理事　三品　哲夫　長谷部朔郎　今井潤之介　松村　慶三　井上　滉 平田　定男　小島　　雄　岡本　行善　金井　弘次　金多　潔 多胡　　進　今西　祥郎　橋本　正章　山本　　晃　牧田　顕治 松岡　照夫　大岡　　昇　八十島健二　村上　秀夫　鴻池　藤一 淺沼　茂夫　藤木　鐵三　板井　亨介　今村祐三郎　志賀　修一 山口　道博　錢高　善雄　大林　芳郎　竹中　錬一　奥村　俊夫 宮武　保義　前野慶太郎　小林　四郎　菅谷　健児　浅海　正雄 武田　恭一　木内　清三　伴　　一郎　蒲生　喜治　北澤　　登 渡辺　　恵　川岸　繁夫　立野　一郎　村上　二郎 監事　尾亀清四郎　片倉　健雄
1985	佐野　正一	松村　雄二 薬袋　公明 足立　　孝 市川　　宏	理事　三品　哲夫　長谷部朔郎　今井潤之助　松村　慶三　井上　滉 平田　定男　小島　　雄　岡本　行善　金井　弘次　金多　潔 中島　　一　米田　元一　片倉　健雄　山本　　晃　牧田　顕治 松岡　照夫　大岡　　昇　八十島健二　村上　秀夫　鴻池　藤一 淺沼　茂夫　藤木　鐵三　板井　亨介　今村祐三郎　志賀　修一 山口　道博　錢高　善雄　大林　芳郎　竹中　錬一　奥村　俊夫 成瀬　　宗　前野慶太郎　小林　四郎　菅谷　健児　浅海　正雄 武田　恭一　木内　清三　伴　　一郎　城口　庸平　平城　　勧 渡辺　　恵　川岸　繁夫　立野　一郎　中西　　孝 監事　尾亀清四郎　多胡　　進
1986	同	松村　雄二 薬袋　公明 足立　　孝 市川　　宏	理事　三品　哲夫　長谷部朔郎　西村　良平　松村　慶三　井上　滉 平田　定男　小島　　雄　岡本　行善　金井　弘次　金多　潔 中島　　一　米田　元一　片倉　健雄　山本　　晃　牧田　顕治 松岡　照夫　大岡　　昇　八十島健二　村上　秀夫　鴻池　藤一 淺沼　茂夫　藤木　鐵三　板井　亨介　今村祐三郎　志賀　修一 加藤　久郎　錢高　善雄　大林　芳郎　竹中　錬一　奥村　俊夫 成瀬　　宗　前野慶太郎　小林　四郎　平尾　　勝　浅海　正雄 武田　恭一　織部　　壌　杉浦　敏郎　城口　庸平　平城　　勧 渡辺　　恵　川岸　繁夫　立野　一郎　中西　　孝 監事　尾亀清四郎　多胡　　進
1987	同	松村　雄二 薬袋　公明 足立　　孝 市川　　宏	理事　三品　哲夫　長谷部朔郎　西村　良平　松村　慶三　井上　滉 平田　定男　小島　　雄　岡本　行善　金井　弘次　金多　潔 中島　　一　原田　明治　片倉　健雄　原　桂一郎　高木　　登 松岡　照夫　大岡　　昇　八十島健二　村上　秀夫　鴻池　藤一 淺沼　茂夫　藤木　鐵三　板井　亨介　今村祐三郎　志賀　修一 加藤　久郎　錢高　善雄　大林　芳郎　竹中　錬一　奥村　俊夫 成瀬　　宗　前野慶太郎　小林　四郎　平尾　　勝　浅海　正雄 若山　　繁　織部　　壌　杉浦　敏郎　清水義一郎　堀内　史郎 渡辺　　恵　川岸　繁夫　立野　一郎　中西　　孝 監事　尾亀清四郎　牧田　顕治 専務理事　松田　至弘　常務理事　吉田　悦二
1988	同	松村　雄二 薬袋　公明 足立　　孝 市川　　宏	理事　三品　哲夫　長谷部朔郎　西村　良平　松村　慶三　須賀　好富 平田　定男　小島　　雄　岡本　行善　金井　弘次　金多　潔 中島　　一　原田　明治　片倉　健雄　原　桂一郎　高木　　登 平島　　治　大岡　　昇　八十島健二　村上　秀夫　鴻池　藤一 淺沼　茂夫　藤木　鐵三　板井　亨介　今村祐三郎　渡辺　　武 加藤　久郎　錢高　善雄　大林　芳郎　竹中　錬一　奥村　俊夫 成瀬　　宗　前野慶太郎　小林　四郎　平尾　　勝　浅海　正雄 若山　　繁　両角　　保　伴　　一郎　清水義一郎　堀内　史郎 渡辺　　恵　川岸　繁夫　立野　一郎　中西　　孝　鈴木　雅夫 監事　尾亀清四郎　牧田　顕治 専務理事　松田　至弘　常務理事　吉田　悦二

年度	会長	副会長	理事　監事　他					
1989	佐野　正一	鴻池　藤一	理事	三品　哲夫	長谷部朔郎	西村　良平	松村　慶三	須賀　好富
		薬袋　公明		平田　定男	小島　雄	岡本　行善	金井　弘次	金多　潔
		足立　孝		中島　一	和田　克朗	片倉　健雄	鈴木　雅夫	城　憲一
		市川　宏		平島　治	大岡　昇	八十島健二	村上　秀夫	淺沼　茂夫
				藤木　鐵三	板井　亨介	今村祐三郎	辰巳　興一	西川　秀信
				錢高　善雄	大林　芳郎	竹中　錬一	奥村　俊夫	成瀬　宗
				鴻池　一季	松村　雄吾	前野慶太郎	小林　四郎	平尾　勝
				浅海　正雄	若山　繁	井尻　勝	両角　保	城口　庸平
				堀　喜久治	渡辺　恵	川岸　繁夫	立野　一郎	中西　孝
			監事	尾亀清四郎	牧田　顕治			
						専務理事　松田　至弘		常務理事　吉田　悦二
1990	同	鴻池　藤一	理事	三品　哲夫	西村　良平	松村　慶三	須賀　好富	久徳　敏治
		薬袋　公明		小島　雄	岡本　行善	金井　弘次	井上　豊	溝神宏至朗
		金多　潔		中島　一	和田　克朗	片倉　健雄	鈴木　雅夫	城　憲一
		市川　宏		平島　治	大岡　昇	八十島健二	村上　秀夫	淺沼　禎夫
				藤木　鐵三	板井　亨介	今村祐三郎	辰巳　興一	西川　秀信
				錢高　善雄	大林　芳郎	竹中　錬一	奥村　俊夫	成瀬　宗
				鴻池　一季	松村　雄吾	前野慶太郎	小林　四郎	平尾　勝
				浅海　正雄	若山　繁	伊藤　良彦	堀内　史郎	城口　庸平
				堀　喜久治	深江　実	川岸　繁夫	立野　一郎	中西　孝
			監事	尾亀清四郎	牧田　顕治			専務理事　松田　至弘
1991	同	鴻池　藤一	理事	三品　哲夫	多井　幸男	松村　慶三	須賀　好富	久徳　敏治
		薬袋　公明		小島　雄	岡本　行善	金井　弘次	井上　豊	溝神宏至朗
		金多　潔		中島　一	和田　克朗	片倉　健雄	本郷　聰	川島　繁三
		市川　宏		平島　治	大岡　昇	田村　真二	村上　秀夫	藤川　和彦
				淺沼　禎夫	藤木　鐵三	板井　亨介	今村祐三郎	辰巳　興一
				西川　秀信	錢高　善雄	大林　芳郎	竹中　錬一	奥村　俊夫
				森井　哲也	鴻池　一季	松村　雄吾	前野慶太郎	小林　四郎
				平尾　勝	菅谷　節	栗原　信英	若山　繁	伊藤　良彦
				堀内　史郎	城口　庸平	堀　喜久治	深江　実	川岸　繁夫
				立野　一郎	中西　孝			
			監事	尾亀清四郎	牧田　顕治			専務理事　松田　至弘
1992	同	鴻池　藤一	理事	多井　幸男	松村　慶三	須賀　好富	久徳　敏治	小島　雄
		薬袋　公明		岡本　行善	金井　弘次	井上　豊	溝神宏至朗	市川　正美
		金多　潔		中島　一	和田　克朗	片倉　健雄	本郷　聰	川島　繁三
		市川　宏		三品　哲夫	大岡　昇	田村　真二	村上　秀夫	淺沼　禎夫
				藤木　鐵三	臼井　真三	今村祐三郎	辰巳　興一	西川　秀信
				錢高　善雄	大林　芳郎	竹中　錬一	奥村　俊夫	森井　哲也
				鴻池　一季	松村　雄吾	前野慶太郎	小林　四郎	菅谷　節
				栗原　信英	若山　繁	伊藤　良彦	伴　昭秀	城口　庸平
				堀　喜久治	深江　実	原田孝太郎	立野　一郎	中西　孝
			監事	尾亀清四郎	牧田　顕治			専務理事　松田　至弘
1993	同	鴻池　藤一	理事	多井　幸男	松村　慶三	須賀　好富	久徳　敏治	小島　雄
		薬袋　公明		岡本　行善	金井　弘次	井上　豊	溝神宏至朗	市川　正美
		金多　潔		和田　克朗	岡本　宏行	真鍋　正宏	田村　真二	村上　秀夫
		市川　宏		藤阪　利為	片倉　健雄	立成　良三	荒井　清	淺沼　禎夫
		三品　哲夫		藤木　鐵三	板井　亨介	今村祐三郎	西東　茂之	西川　秀信
				錢高　善雄	大林　芳郎	竹中　錬一	奥村　俊夫	森井　哲也
				鴻池　一季	松村　雄吾	前野慶太郎	小林　四郎	菅谷　節
				栗原　信英	若山　繁	伊藤　良彦	堀内　史郎	城口　庸平
				堀　喜久治	深江　実	原田孝太郎	立野　一郎	中西　孝
			監事	尾亀清四郎	牧田　顕治			常務理事　野上　淳二

年度	会長	副会長	理事　監事他					
1994	市川　宏 （第8代）	薬袋　公明 錢高　善雄 金多　潔 三品　哲夫 岡本　行善	理事	多井　幸男	松村　慶三	須賀　好富	小島　雄	金井　弘次
				井上　豊	溝神宏至朗	市川　正美	青柳　司	太田　隆信
				森口　雅文	和田　克朗	岡本　宏行	真鍋　正宏	田村　真二
				村上　秀夫	藤阪　利為	片倉　健雄	立成　良三	荒井　清
				淺沼　禎夫	藤木　鐵三	北村　武司	今村祐三郎	西東　茂之
				西川　秀信	金井　弘次	大林　芳郎	竹中　錬一	森井　哲也
				奥村　俊夫	鴻池　一季	松村　雄吾	前野慶太郎	小林　四郎
				菅谷　節	若山　繁	栗原　信英	伴　昭秀	宮内　朗
				城口　庸平	堀　喜久治	深江　実	原田孝太郎	立野　一郎
				中西　孝				
			監事	尾亀清四郎	牧田　顕治		常務理事	野上　淳二
1995	同	薬袋　公明 錢高　善雄 金多　潔 三品　哲夫 岡本　行善	理事	多井　幸男	松村　慶三	須賀　好富	小島　雄	金井　弘次
				井上　豊	溝神宏至朗	市川　正美	青柳　司	太田　隆信
				森口　雅文	荒井　清	坂　雅勝	片倉　健雄	田村　真二
				藤阪　利為	永田　幸夫	村上　秀夫	和田　克朗	淺沼　禎夫
				藤木　鐵三	北村　武司	今村祐三郎	西東　茂之	西川　秀信
				大林　芳郎	奥村　俊夫	鴻池　一季	竹中　錬一	松村　雄吾
				森井　哲也	立成　良三	前野慶太郎	小林　四郎	菅谷　節
				荒巻　恭士	栗原　信英	伴　昭秀	宮内　朗	井尻　勝
				清水義一郎	深江　実	原田孝太郎	恩庄　二郎	永原　義夫
			監事	尾亀清四郎	伊藤　俊夫		常務理事	野上　淳二
1996	同	薬袋　公明 錢高　善雄 金多　潔 三品　哲夫 岡本　行善	理事	多井　幸男	松村　慶三	山田　修	小島　雄	金井　弘次
				井上　豊	溝神宏至朗	市川　正美	真塚　達夫	太田　隆信
				森口　雅文	平本　俊秋	與謝野　久	坂　雅勝	片倉　健雄
				羽生　洋治	田村　真二	藤阪　利為	永田　幸夫	村上　秀夫
				和田　克朗	淺沼　誠夫	藤木　鐵三	久米　宏和	山下　晟
				西東　茂之	西川　秀信	大林　芳郎	奥村　俊夫	鴻池　一季
				竹中　錬一	松村　雄吾	森井　哲也	友原　譲	前野慶太郎
				小林　四郎	菅谷　節	荒巻　恭士	栗原　信英	伴　昭秀
				近藤　徹	井尻　勝	清水義一郎	立野　一郎	原田孝太郎
				恩庄　二郎	永原　義夫			
			監事	尾亀清四郎	伊藤　俊夫		常務理事	加藤　三郎

■評議員

年度	議　長	副議長	評議員
1945	鈴木　末尾	奥島　正一	本部　岩本　博行　以下57名
1946	—	—	—
1947	五十嵐芳雄	寺島　三雄	本部　相原　辨一　以下79名
1948	五十嵐芳雄	寺島　三雄	本部　青木　友一　以下42名 支部 京都　池田総一郎　以下８名 広島　井上　英彦　以下10名 兵庫　閑林　憲文　以下11名 九州　岩崎甚太郎　以下４名 東海　伊藤　鑛一　以下２名 計77名
1949	鈴木　末尾	中野順次郎	本部　石川　清　以下40名 支部 京都　佐藤　正堯　以下４名 中国　葛西　重男　以下４名 兵庫　加藤　太郎　以下６名 九州　黒木源次郎　以下２名 和歌山　宇治田政雄　以下４名 東海　染木　正夫　以下２名 計62名
1950	鈴木　末尾	中野順次郎	本部　片山　光生　以下42名 支部 京都　田丸　善則　以下４名 中国　佐藤　重夫　以下４名 兵庫　三田　一男　以下６名 和歌山　雑賀　孝夫　以下２名 東海　石原　巖　以下４名 計62名
1951	河合貞一郎	津村　重一	本部　青木　友一　以下48名 支部 京都　小崎　修　以下４名 中国　飯塚　源吉　以下８名 兵庫　桑田　正一　以下10名 和歌山　栗林　一馬　以下４名 東海　伊藤　鑛一　以下４名 九州　伊東　武文　以下４名 計82名
1952	神谷　新一	広瀬　勇	本部　青木　健一　以下81名 支部 京都　築紫善治郎　以下４名 中国　内輪善四郎　以下４名 兵庫　加藤　太郎　以下６名 九州　欠　員 和歌山　貴志　満二　以下４名 東海　西村　勝　以下２名 計101名
1953	鈴木　末尾	駒　敬三	本部　池　保以下103名 支部 京都　神谷　務　以下４名 中国　板井　康美　以下４名 兵庫　神田　省三　以下６名 九州　欠　員 和歌山　北野　誠造　以下４名 東海　石原　巖　以下４名 計125名
1954	河合貞一郎	田中良太郎	本部　池　保以下103名 支部 京都　神谷　務　以下４名 中国　奥井忠太郎　以下４名 兵庫　神田　省三　以下６名 九州　欠　員 和歌山　北野　誠造　以下２名 東海　石原　巖　以下４名 計123名
1955	神谷　新一	森川喜代之助	本部　井上　達明以下100名 支部 京都　相原　辨一　以下４名 中国　奥井忠太郎　以下４名 兵庫　神田　省三　以下６名 九州　欠　員 和歌山　北野　誠造　以下２名 東海　石原　巖　以下４名 計120名
1956	神谷　新一	森川喜代之助	本部　赤崎　尚信以下107名 支部 京都　相原　辨一　以下４名 中国　青盛　繁男　以下４名 兵庫　猪沢　徳忠　以下６名 和歌山　宇那木　勁　以下４名 東海　川口喜代枝　以下４名 計129名
1957	鈴木　末尾	奥島　正一	本部　岩本　博行　以下57名 支部 京都　池田総一郎　以下４名 中国　葛西　重男　以下６名 兵庫　設楽　貞三　以下６名 九州　黒木源次郎　以下３名 和歌山　宇治田政雄　以下４名 計80名
1958	鈴木　末尾	奥島　正一	本部　青柳　貞世　以下64名 支部 京都　池田総一郎　以下４名 中国　葛西　重男　以下６名 兵庫　芦田小二郎　以下６名 九州　黒木源次郎　以下２名 和歌山　宇治田政雄　以下２名 東海　欠　員 計84名

年度	議　長	副議長	評議員
1959	青木　貞世	滝本　義一	本部　石川　　清 以下69名 支部 京都　岡野　武司 以下４名 中国　葛西　重男 以下２名 兵庫　石井　一信 以下６名 九州　黒木源次郎 以下２名 和歌山 井崎　梁次 以下４名 東海　染木　正夫 以下２名 計89名
1960	五十嵐芳雄	寺島　三雄	本部　石川　　清 以下71名 支部 京都　岡野　武司 以下４名 中国　葛西　重男 以下４名 兵庫　石井　一信 以下６名 九州　黒木源次郎 以下２名 和歌山 宇治田政雄 以下４名 東海　染木　正夫 以下２名 計93名
1961	五十嵐芳雄	寺島　三雄	本部　石川　　清 以下72名 支部 京都　佐藤　正堯 以下４名 中国　佐藤　重夫 以下４名 兵庫　加藤　太郎 以下６名 九州　黒木源次郎 以下２名 和歌山 雑賀　孝夫 以下４名 東海　石原　　巌 以下２名 計94名
1962	神谷　新一	益尾　辰雄	本部　片山　光生 以下73名 支部 京都　田丸　善則 以下４名 中国　佐藤　重夫 以下４名 兵庫　三田　一男 以下６名 和歌山 雑賀　孝夫 以下２名 東海　石原　　巌 以下４名 計93名
1963	神谷　新一	広瀬　　勇	本部　金子有治郎 以下76名 支部 京都　築紫善治郎 以下４名 中国　内輪善四郎 以下４名 兵庫　加藤　太郎 以下６名 和歌山 貴志　満二 以下２名 東海　西村　　勝 以下４名 計96名
1964	五十嵐芳雄	小林　得志	本部　青木　健一 以下81名 支部 京都　築紫善治郎 以下４名 中国　内輪善四郎 以下４名 兵庫　加藤　太郎 以下６名 九州　欠　　員 和歌山 貴志　満二 以下４名 東海　西村　　勝 以下２名 計101名
1965	五十嵐芳雄	小林　得志	本部　池　　保以下103名 支部 京都　神谷　　務 以下４名 中国　高原　一秀 以下４名 兵庫　神田　省三 以下６名 九州　欠　　員 和歌山 北野　誠造 以下４名 東海　石原　　巌 以下４名 計125名
1966	神谷　新一	森川喜代之助	本部　池　　保以下103名 支部 京都　神谷　　務 以下４名 中国　奥井忠太郎 以下４名 兵庫　神田　省三 以下６名 九州　欠　　員 和歌山 北野　誠造 以下２名 東海　石原　　巌 以下４名 計123名
1967	神谷　新一	森川喜代之助	本部　井上　達明以下100名 支部 京都　相原　辨一 以下４名 中国　青森　繁男 以下４名 兵庫　神田　省三 以下６名 九州　欠　　員 和歌山 田村　隆資 以下２名 東海　川口喜代枝 以下４名 計120名
1968	谷口　尚武	星　　廣文	本部　赤崎　尚信以下107名 支部 京都　相原　辨一 以下４名 中国　青盛　繁男 以下４名 兵庫　猪沢　徳忠 以下６名 和歌山 宇那木　勁 以下４名 東海　川口喜代枝 以下４名 計129名
1969	谷口　尚武	星　　廣文	本部　赤井　一夫 以下98名 支部 京都　神谷　　務 以下４名 中国　奥井忠太郎 以下４名 兵庫　猪沢　徳忠 以下６名 九州　欠　　員 和歌山 貴志　満二 以下４名 東海　広瀬　臣一 以下４名 計120名
1970	小川　　正	中野　吉弥	本部　相川　三郎以下116名 支部 京都　神谷　　務 以下６名 中国　磯谷喜久一 以下４名 兵庫　猪沢　徳忠 以下６名 九州　欠　　員 和歌山 貴志　満二 以下４名 東海　荒川　市次 以下５名 計141名

年度	議　長	副議長	評議員
1971	小川　正	中野　吉弥	本部　相川　三郎以下121名 支部 京都　鈴木　覚也 以下６名 中国　磯谷喜久一 以下４名 兵庫　猪沢　徳忠 以下６名 九州　欠　員 和歌山 井崎　哲也 以下４名 東海　荒川　市次 以下６名 計147名
1972	小川　正	星　廣文	本部　石川　清 以下91名 支部 京都　大鳥居満也 以下６名 中国　磯谷喜久一 以下６名 兵庫　猪沢　徳忠 以下６名 九州　欠　員 和歌山 北野　誠造 以下４名 東海　中島　一 以下６名 計119名
1973	小川　正	星　廣文	本部　今村　騰 以下89名 支部 京都　大鳥居満也 以下６名 中国　磯谷喜久一 以下６名 兵庫　猪沢　徳忠 以下６名 九州　欠　員 和歌山 井崎　哲也 以下２名 東海　五十嵐　昇 以下６名 計115名
1974	小川　正	相川　三郎	本部　大西　幹郎 以下56名 支部 京都　高橋　政吉 以下４名 中国　磯谷喜久一 以下４名 兵庫　加藤　太郎 以下６名 和歌山 北野　誠造 以下４名 東海　小川　利光 以下６名 計80名
1975	小川　正	相川　三郎	本部　井上　久雄 以下52名 支部 京都　川瀬　啓郎 以下４名 中国　平本　俊秋 以下４名 兵庫　向井　正也 以下５名 和歌山 北山　俊 以下２名 東海　中島　一 以下３名 計70名
1976	野々村五四男	高橋　保夫	本部　坂井　茂信 以下50名 支部 京都　川瀬　啓郎 以下４名 中国　平本　俊秋 以下４名 和歌山 岩脇　数馬 以下４名 東海　中島　一 以下４名 計66名
1977	野々村五四男	高橋　保夫	本部　生島　道春 以下50名 支部 京都　前田　利典 以下４名 中国　香取　礼三 以下４名 和歌山 岩脇　数馬 以下４名 東海　中島　一 以下４名 計66名
1978	野々村五四男	高橋　保夫	本部　奥山清治郎 以下51名 支部 京都　高橋　政吉 以下４名 中国　平本　俊秋 以下４名 和歌山 東野　信義 以下２名 東海　中島　一 以下４名 計65名
1979	野々村五四男	高橋　保夫	本部　板井　亨介 以下48名 支部 京都　中山　保 以下４名 中国　平本　俊秋 以下４名 和歌山 井崎　哲也 以下４名 東海　菊池　利治 以下４名 計64名
1980	高橋　保夫	長田　正雄	本部　板井　亨介 以下46名 支部 京都　橋詰　一雄 以下４名 中国　平本　俊秋 以下４名 和歌山 野島　育夫 以下２名 東海　菊池　利治 以下４名 計60名
1981	高橋　保夫	長田　正雄	本部　板井　亨介 以下46名 支部 京都　川谷　勇 以下４名 中国　平本　俊秋 以下４名 和歌山 野島　育夫 以下４名 東海　宮崎　辰敬 以下４名 計62名
1982	高橋　保夫	長田　正雄	本部　板井　亨介 以下45名 支部 京都　川谷　勇 以下４名 中国　清田　幸夫 以下４名 和歌山 井崎　哲也 以下４名 東海　宮崎　辰敬 以下４名 計61名
1983	高橋　保夫	片倉　健雄	本部　辰巳　詢二 以下42名 支部 京都　神谷　治 以下４名 中国　清田　幸夫 以下４名 和歌山 岡　隆 以下２名 東海　宮崎　辰敬 以下４名 計64名

年度	議　長	副議長	評議員
1984	高橋　保夫	片倉　健雄	本部　大下　順良 以下42名 支部 京都　千原　宏 以下4名 中国　青盛　巖 以下4名 和歌山 岡　隆 以下4名 東海　森　鉦一 以下4名 計58名
1985	高橋　保夫	西村　良平	本部　福家　敬 以下40名 支部 京都　卯田　隆一 以下4名 中国　青盛　巖 以下4名 和歌山 日下　英雄 以下2名 東海　森　鉦一 以下4名 計54名
1986	高橋　保夫	西村　良平	本部　福家　敬 以下34名 支部 京都　井手　正己 以下2名 中国　青盛　巖 以下4名 和歌山 日下　英雄 以下4名 東海　宮崎　辰敬 以下4名 計48名
1987	高橋　保夫	多井　幸男	本部　福家　敬 以下40名 支部 京都　井手　正己 以下2名 中国　青盛　巖 以下4名 和歌山 小池　康雄 以下2名 東海　宮崎　辰敬 以下4名 計52名
1988	高橋　保夫	多井　幸男	本部　福家　敬 以下37名 支部 京都　井手　正己 以下2名 中国　稲葉　昇 以下4名 和歌山 小池　康雄 以下2名 東海　宮崎　辰敬 以下4名 計49名
1989	高橋　保夫	多井　幸男	本部　片田　俊彦 以下40名 支部 京都　井手　正己 以下2名 中国　稲葉　昇 以下4名 和歌山 雑賀　幹夫 以下2名 東海　森口　雅文 以下4名 計52名
1990	高橋　保夫	多井　幸男	本部　片田　俊彦 以下42名 支部 京都　山口　明 以下2名 中国　井上　弘美 以下4名 和歌山 雑賀　幹夫 以下2名 東海　森口　雅文 以下4名 計54名
1991	高橋　保夫	鶴田　昭一	本部　荒川　治徳 以下44名 支部 京都　神谷　治 以下2名 中国　稲葉　昇 以下4名 和歌山 雑賀　幹夫 以下2名 東海　森口　雅文 以下4名 計56名
1992	高橋　保夫	鶴田　昭一	本部　荒川　治徳 以下40名 支部 京都　神谷　治 以下4名 中国　稲葉　昇 以下4名 和歌山 雑賀　幹夫 以下2名 東海　小宮　三辰 以下4名 計54名
1993	高橋　保夫	鶴田　昭一	本部　荒川　治徳 以下39名 支部 京都　神谷　治 以下4名 中国　稲葉　昇 以下4名 和歌山 井村　眞哉 以下2名 東海　小宮　三辰 以下4名 計53名
1994	鶴田　昭一	三木　敏男	本部　甫出　裕紀 以下40名 支部 京都　神谷　治 以下4名 中国　井上　弘美 以下4名 和歌山 井村　眞哉 以下2名 東海　小宮　三辰 以下4名 計54名
1995	鶴田　昭一	三木　敏男	本部　甫出　裕紀 以下37名 支部 京都　神谷　治 以下4名 中国　井上　弘美 以下4名 和歌山 井村　眞哉 以下2名 東海　小宮　三辰 以下4名 計51名
1996	鶴田　昭一	三木　敏男	本部　甫出　裕紀 以下43名 支部 京都　神谷　治 以下4名 中国　井上　弘美 以下4名 和歌山 井村　眞哉 以下2名 東海　林　金之 以下6名 計59名

総会・評議員会・理事会の開催

年度	総会（大会）	例会 評議員会	理事会／回数
1917	創立総会 秋季 11/13	例会 11	定例 8 臨時(特別) 5
1918	春季 3/23	例会 7	定例 10 臨時(特別) 3
1919	春季 6/12 秋季 10/27	例会 10	定例 3 臨時(特別) 12
1920	春季 5/18 秋季 10/31	例会 12	定例 11 臨時(特別) 3
1921	春季 4/11 秋季 11/17	例会 10	定例 23 臨時(特別) 7
1922	春季 4/18 秋季	例会 9 評議員会 1	定例 20 臨時(特別) 2
1923	春季 6/ 3 秋季	例会 13	定例 13 臨時(特別) 22
1924	春季 4/12 秋季	例会 9	定例 10 臨時(特別) 16
1925	春季 秋季 10/25	例会 7	定例 6 臨時(特別) 6
1926	春季 5/16 秋季 10/21	例会 8	定例 11 臨時(特別) 11
1927	春季 4/24 総会5回	例会 5 評議定5回	定例 3 臨時
1928	春季1回、秋季1回、 総会2回	例会 5 評議定3回	定例 7 臨時
1929	春季1回、秋季1回、 総会2回	例会 2 評議定5回	定例 4 臨時
1930	第１回 5/ 5 第２回 11/28	例会 4 評議定 回	定例 6 臨時
1931	第１回 11/26	第１回 12/ 5 第２回 2/ 5	定例 5 臨時
1932	臨時 8/ 8 第１回 11/28	第１回 11/18 第２回 2/13	定例 11 臨時
1933	第１回 11/25	第１回 5/15	定例 8 臨時
1934	第１回 11/20	第１回 11/10 12/ 8	定例 6 臨時
1935	第１回 11/29 臨時 9/ 5 臨時 11/ 2	第１回 11/18 第２回 12/ 4 第３回 2/12	定例 9 臨時 その他
1936	第１回 11/30	第１回 11/11 第２回 12/ 3 第３回 2/20	定例 10 臨時 その他
1937	第１回 11/29	第１回 9/ 6 第２回 11/ 5 第３回 2/ 4	定例 12 臨時 その他
1938	第１回 11/25	第１回 11/ 7 第２回 12/ 5 第３回 2/17	定例 11 臨時 その他
1939	第１回 11/24	第１回 7/17 臨時 11/ 6 第２回 11/29 第３回 11/29	定例 11 臨時 その他
1940	第１回 11/25	第１回 5/ 9 第２回 11/12 第３回 12/ 2	定例 10 臨時 その他
1941	臨時 5/13 第１回 11/25 臨時 3/13	第１回 4/28 第２回 6/19 第３回 11/13 第４回 12/ 4 第５回 3/ 2	定例 12 臨時 その他
1942	第１回 11/28	第１回 11/ 2 第２回 12/ 3 第３回 1/26	定例 12 臨時 その他
1943	第１回 11/29	第１回 9/ 6 第２回 11/18 第３回 12/ 7 第４回 2/21	定例 12 臨時 その他
1944	第１回 11/28	第１回 6/ 5 第２回 11/11 第３回 12/12	定例 12 臨時 その他
1945	第１回 6/15 第２回 12/19	第１回 5/21 第２回 9/24 第３回 3/ 4	定例 12 臨時 その他
1946	第１回 6/17 臨時 10/10 臨時 11/27 第２回 12/27	6/ 4 8/ 5 第１回 9/27 第２回 11/20 第３回 12/13 12/24	定例 12 臨時 その他
1947	第１回 11/25 第２回 1/31	第１回 5/27 第２回 11/20 第３回 3/29	定例 12 臨時 その他
1948	第１回 1/29	第１回 9/ 3 第２回 11/18 第３回 3/29	定例 11 常任 その他
1949	臨時 5/21 第１回 1/27	第１回 5/18 9/19 第２回 11/24 第３回 3/28	定例 11 常任 その他
1950	第１回 1/30	第１回 5/16 第２回 11/28 第３回 3/29	定例 11 常任

開催日時と回数については、当時の残された議事録と当時の会誌の記事に齟齬があり、データには正確でない部分がある。

年度	総会（大会）	例会 評議員会	理事会／回数
1951	第1回 1/30	第1回 11/27 第2回 3/31	定例 11 常任
1952	第1回 1/30 第2回	第1回 7/29 第2回 11/29 第3回 3/31	定例 常任 その他
1953	第1回 1/29 第2回	第1回 11/29 第2回 3/28	定例 常任 その他
1954	第1回 1/31 第2回	第1回 11/29 第2回 3/29	定例 常任 その他
1955	第1回 1/30 第2回	第1回 11/12 第2回 3/29	定例 常任 その他
1956	第1回 1/30 第2回	第1回 11/28 第2回 3/28	定例 常任 その他
1957	臨時 5/28 第1回 2/26	第1回 3/25	定例 常任 その他
1958	第1回 6/20 第2回 2/26	第1回 6/20 第2回 1/28 第3回 3/24	定例 常任 その他
1959	第1回 6/16 第2回 2/24	第1回 6/16 第2回 11/20 第3回 3/29	定例 常任 その他
1960	第1回 6/22 第2回 2/28	第1回 6/22 第2回 11/25 第3回 3/25	定例 常任 その他
1961	第1回 6/27 第2回 2/22	第1回 6/27 第2回 11/28 第3回 3/20	定例 常任 その他
1962	第1回 6/27 第2回 2/28	第1回 6/27 第2回 11/21 第3回 3/28	定例 常任 その他
1963	第1回 6/20 第2回 2/28	第1回 6/27 第2回 11/28 第3回 3/31	定例 常任 その他
1964	第1回 第2回	第1回 第2回 第3回	定例 常任 その他
1965	第1回 第2回	第1回 第2回 第3回	定例 常任 その他
1966	第1回 第2回	第1回 第2回 第3回	定例 常任

年度	総会（大会）	例会 評議員会	理事会／回数
1967	第1回 第2回	第1回 第2回 第3回	定例 10 常任 その他 10
1968	第1回 第2回	第1回 第2回 第3回	定例 10 常任 その他 6
1969	第1回 第2回	第1回 第2回 第3回	定例 11 常任 その他 6
1970	第1回 第2回	第1回 第2回 書面表決 第3回	定例 10 常任 その他 4
1971	第1回 第2回	第1回 第2回 第3回	定例 10 常任 その他 6
1972	第1回 第2回	第1回 第2回 書面表決 第3回	定例 10 常任 その他 8
1973	第1回 第2回	第1回 第2回 書面表決 第3回	定例 8 常任 その他 5
1974	第1回 第2回	第1回 第2回 第3回	定例 8 常任 その他 7
1975	第1回 第2回	第1回 第2回 書面表決 第3回	定例 9 常任 その他 4
1976	第1回 第2回	第1回 第2回 書面表決 第3回	定例 9 常任 その他 3
1977	第1回 第2回	第1回 第2回 書面表決 第3回	定例 9 常任 その他 3
1980	第1回 第2回	第1回 第2回 書面表決 第3回	定例 9 常任 その他 2
1981	第1回 第2回	第1回 第2回 書面表決 第3回	定例 10 常任 その他 2
1982	第1回 第2回	第1回 第2回 第3回	定例 11 常任 その他 1
1983	第1回 第2回 臨時総会	第1回 第2回 書面表決 第3回	定例 12 常任 その他 3

年度	総会（大会）	例会 評議員会	理事会／回数
1984	第１回 第２回	第１回 第２回 第３回	定例 6 常任 5 その他 3
1985	第１回 第２回	第１回 第２回　書面表決 第３回	定例 6 常任 4 その他 1
1986	第１回 第２回	第１回 第２回　書面表決 第３回	定例 6 常任 5 その他
1987	第１回 第２回	第１回 第２回 第３回	定例 6 常任 5 その他 1
1988	第１回 第２回	第１回 第２回 第３回	定例 6 常任 5 その他 1
1989	第１回 第２回	第１回 第２回　書面表決 第３回	定例 6 常任 4 その他
1990	第１回 第２回	第１回 第２回　書面表決 第３回	定例 7 常任 4 その他
1991	第１回 第２回	第１回 第２回　書面表決 第３回	定例 7 常任 4 その他
1992	第１回 第２回	第１回 第２回　書面表決 第３回	定例 7 常任 4 その他
1993	第１回 第２回	第１回 第２回 第３回	定例 9 常任 2 その他
1994	第１回 第２回	第１回 第２回 第３回	定例 8 常任 2 その他
1995	第１回 第２回	第１回 第２回　書面表決 第３回	定例 7 常任 4 その他 6
1996	第１回 第２回	第１回 第２回　書面表決 第３回	定例 7 常任 4 その他 4

支部の設立と支部規程

各地区の会勢幹事会により会員増強が図られた結果、細則に定める支部設置要件（会員数50名以上）を満たす地区が続出し、支部設置の気運が高まり、昭和22年４月以降、京都支部、廣島支部、兵庫支部、九州支部、東海支部、和歌山支部が相次いで設立された。その詳細は、会誌「建築と社会」の第28輯第３・４・５合併号及び９～12号に掲載されている。

日本建築協会京都支部規程

第１條　本支部ハ日本建築協會京都支部ト稱ス
第２條　本支部ハ事務所ヲ京都市ニ置ク
第３條　次ノ地域内ノ日本建築協會會員ハ凡テ本部ニ屬スルモノトスル　京都市
第４條　本支部ハ日本建築協會定款第１条ノ目的ヲ達スル爲地方的ニ必要ナル諸種ノ事業ヲナスモノトス
第５條　本支部ニ役員トシテ支部長、副支部長、常議員、幹事若干名ヲク
第６條　支部長、副支部長、常議員ハ支部員ノ選擧ニヨルモノトス
第７條　幹事ハ常議員中ヨリ互選ス
第８條　支部長ハ會務ヲ統括シ、副支部長ハ支部長ヲ補佐シ、幹事ハ一般會務ヲ處理シ、常議員ハ常議員會ニ於テ會務ヲ審議ス
第９條　役員ノ任期ハ２年トシ重任スル事ヲ得、役員ハ任期滿了スルモ後任者ノ選任ニ到ル迄其職ニアルモノトス
第10條　通常總會ハ毎年１回臨時總會ハ役員會ノ決議ニヨリ若クハ支部員30名以上ノ請求アリタルトキ開ク
第11條　本支部ノ經費ハ本部交附金其他ノ収入ヲ以テ支辨ス
第12條　本支部豫算ハ通常總會ニ附議シ決算ハ次年度ノ通常總會ニ報告シ其承認ヲ經ルモノトス
第13條　本規定ニ於テ特ニ明示セザル事項ハ凡テ日本建築協會定款及規定ニ準據スルモノトス
第14條　本規定ノ變更ハ總會ノ議決ヲ得ルコト

附　則

本規定案ハ昭和22年４月13日ヨリ實施スル

日本建築協会京都支部細則

第１條　本支部ノ事務所ハ當分ノ間京都市中京區夷川通河原町東入ミラノ工務店内ニ置ク
第２條　本支部ノ役員ノ定數ハ當分左ノ通リトス
支部長１名、副支部長２名、常議員15名
第３條　會議ハ總會、常議員會及幹事會ノ３種トシ、支部長之ヲ招集シ、其議長トナル

京都支部役員

支部長　　松井清之助
副支部長　棚橋　諒、小崎　修
幹　事　　西山　卯三、山内　省三、林　太作、

大鳥居滿也、小瀧慶太郎、平尾茂一郎、
本川駒三郎

常議員　佐々木左坦、安間　立雄、山本礎十郎、
末松佐一郎、佐藤　正堯、館林　能司、
神野信次郎、高丘　治季

日本建築協會廣島支部規程

第１條　本支部ハ日本建築協會廣島支部ト稱ス
第２條　本支部ハ事務所ヲ廣島市ニ置ク
第３條　次ノ地域内ノ日本建築協會々員ハ凡テ本支部ニ屬スルモノトス　廣島縣
第４條　本支部ハ日本建築協會定款第一條ノ目的ヲ達スルタメ地方的ニ必要ナル諸種ノ事業ヲナスモノトス
第５條　本支部ニ役員トシテ支部長、副支部長、常議員幹事若干名ヲ置ク
第６條　常議員ハ支部會員ノ選擧ニヨルモノトス
第７條　支部長、副支部長ハ常議員ノ互選ニヨルモノトス
第８條　幹事は支部長之ヲ任命ス
第９條　支部長ハ會務ヲ統括シ副支部長ハ支部長ヲ補佐シ幹事ハ一般會務を處理シ常議員ハ常議員會ニ於テ會務ヲ審議ス
第10條　役員ノ任期ハ二ケ年トシ重任スルコトヲ得、役員ハ任期滿了スルモ後任者ノ選任ニ到ル迄其職ニアルモノトス
第11條　通常總會ハ毎年一回臨時總會ハ役員會ノ決議ニヨリ若クハ支部會員三十名以上請求アリタルトキ開ク
第12條　本支部ノ經費ハ本部交附金其他ノ収入ヲ以テ支辨ス
第13條　本支部豫算ハ通常總會ニ附議シ決算ハ次年度ノ通常總會ニ報告シ其ノ承認ヲ經ルモノトス
第14條　本規程ニ於テ特ニ明示セサル事項ハ凡テ日本建築協會定款及規程ニ準據スルモノトス
第15條　本規程ノ變更ハ總會ノ決議ヲ得ルモノトス

日本建築協會廣島支部細則

第１條　本支部ノ事務所ハ當分ノ間左記ノ所ニ置ク
廣島市國泰寺町　廣島土建會館内
第２條　本支部ノ役員ノ定數ハ當分左ノ通リトス
支部長　一名　　副支部長　二名
常議員　若干名
第３條　會議ハ總會、役員會の二種トシ支部長之ヲ召集シ其議長トナル

附　則

本規則ハ昭和二十二年四月十七日ヨリ實施スルモノトス

廣島支部役員

支部長　　藤田　定市
副支部長　古林　義敦、中山　文夫
常議員　　山中　　俠、井上　英彦、二村　四郎、
安東　忠士、勝谷　龜麿、近藤兵四郎、
谷川　政夫、藤岡　正一
幹　事　　高谷　與一、田坂　朝生

日本建築協會兵庫支部規程

第１條　本支部ハ日本建築協會兵庫支部トイヒ事務所ヲ神戸市内ニ置ク
第２條　兵庫縣内ノ日本建築協會員ハ本支部ニ屬スルモノトスル
第３條　本支部ハ日本建築協會定款第一條ノ目的ヲ達スル爲地方的ニ必要ナ事業ヲ行フモノトスル
第４條　本支部ニ役員トシテ支部長、副支部長、幹事竝ニ代議員ヲ置ク
第５條　役員ハ支部會員ノ選擧ニ依ルモノトスル
第６條　支部長ハ本支部ヲ代表シ會議ノ議長トナル
副支部長ハ支部長ヲ補佐シ支部長事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス
幹事ハ一般會務ヲ掌理スル
代議員ハ代議員會ニ依リ會務ヲ審議スル
第７條　役員ノ任期ハ二年トスル但シ再選ヲ妨ゲナイ
役員ハソノ任期ガ滿了スルモ後任者ノ選任ニ至ル迄ハソノ職ニアルモノトスル
第８條　本支部ノ會議ハ總會、幹事會、代議員會トシ支部長ガ之ヲ招集スル
通常總會ハ毎年一回臨時總會ハ幹事會ノ決議ニ依リ若ハ支部會員六分ノ一以上ノ請求アルトキニ之ヲ開ク
第９條　本支部ニ職員若干名ヲ置クコトガデキル
職員ハ支部長ガ之ヲ任免スル
第10條　本支部ノ經費ハ本部交附金ソノ他ノ収入ヲ以テ之ヲ支辨スル
第11條　本支部ノ豫算ハ通常總會ニ附議シ決算ハ次年度ノ通常總會ニ報告シソノ承認ヲ經ルモノトス
第12條　本規程ノ外必要ナ事項ハ支部長ガ別ニ之ヲ定メル
第13條　本規程ノ改廢ハ總會ノ決議ヲ要スル

附　則

本規程ハ昭和二十二年十一月十四日カラ之ヲ施行スル

日本建築協會兵庫支部細則

第１條　支部規程第一條ノ事務所ハ當分ノ中神戸市生田區楠町一丁目十一番地ノ六　雲濱荘内ニ之ヲ置ク
第２條　支部規程第四條ノ役員ノ定數ハ當分ノ中左ノ通リトスル
支部長　　一名
副支部長　二名
幹　事　若干名
代議員　若干名

附　則

本細則ハ昭和二十二年十一月十四日カラ之ヲ施行スル

兵庫支部役員

支部長　　岡本　茂樹
副支部長　岩尾　保衛、桑田　正一
幹　事　　浅尾　態雄、今津　重蔵、熊田　繁蔵
　　早良　俊夫、新名　種夫、瀧澤　眞弓
　　中島　富造、野田　清三、野澤幸三郎
　　長谷川武彦、廣田穣太郎、松浦勇太郎
　　山内嘉兵衛

日本建築協會九州支部規程

第１條　本支部は日本建築協會九州支部といひ事務所を福岡市内に置く
第２條　九州及山口縣の日本建築協會員は本支部に屬する
第３條　本支部は日本建築協會定款第一條の目的を達成する爲地方的に必要な事業を行ふ
第４條　本支部に役員として支部長、副支部長、幹事並びに代議員を置く
第５條　役員は支部會員の選擧に依る
第６條　支部長は本支部を代表し會議の議長となる
　副支部長は支部長を補佐し支部長事故あるときはその職務を代理する
　幹事は一般會務を掌理する
　代議員は代議員會に依り會務を審議する
第７條　役員の任期は二年とする但し再選を妨げない
　役員はその任期が滿了するも後任者の選任に至る迄はその職にある
第８條　本支部の會議は總會、幹事會、代議員會とし支部長が之を招集する
　通常總會は毎年一回、臨時總會は幹事會の決議に依り若しくは支部會員六分の一以上の請求があるときに之を開く
第９條　本支部に職員若干名を置くことができる
　職員は支部長が之を任免する
第10條　本支部の經費は本部交附金その他の收入を以て之を支辨する
第11條　本支部の豫算は通常總會に附議し決算は次年度の通常總會に報告しその承認を經る
第12條　本規程の外必要な事項は支部長が別に之を定める
第13條　本規程の改廢は總會の決議を要する

附　則

本規程は昭和22年12月４日から之を施行する

日本建築協會九州支部細則

第１條　支部規程第一條の事務所は當分の間福岡市今泉町四ノ一二七番地に之を置く
第２條　支部規程第四條の役員の定數は當分の中左の通りとする

支部長	一　名
副支部長	二　名
幹　事	若干名
代議員	若干名

附　則

本細則は昭和22年12月４日から之を施行する

九州支部役員

支部長　　錦田　直一
副支部長　松田　昌平、篠原政次郎
幹　事　　黒木源次郎、田中　勇雄、山手　研吾
　　岩崎甚太郎、古館　均一、池口　　凌
　　深澤七十郎、浦田　哲一、渡邊　藤吉

日本建築協會東海支部規程

第１條　本支部は日本建築協會東海支部といひ事務所を名古屋市内に置く
第２條　愛知縣、三重縣、岐阜縣の日本建築協會員は凡て本支部に屬する
第３條　本支部は日本建築協會定款第一條の目的を達する爲地方的に必要な事業を行ふ
第４條　本支部に役員として支部長、副支部長、幹事並びに常議員若干名を置く
第５條　役員は支部會員の選擧に依る
第６條　支部長は本支部を代表し會議の議長となる
　副支部長は支部長を補佐し支部長事故あるときはその職務を代理する
　幹事は一般會務を處理する
　常議員は常議員會に依り會務を審議する
第７條　役員の任期は二年とする但し再選を妨げない
　役員はその任期が滿了するも後任者の選任に至る迄はその職にある
第８條　本支部の會議は總會、幹事會、常議員會とし支部長が之を招集する
　通常總會は毎年１回、臨時總會は幹事會の決議に依り若しくは支部會員の六分の一以上の請求があるときに之を開く
第９條　本支部に職員若干名を置くことができる
　職員は支部長が之を任免する
第10條　本支部の經費は本部交附金その他の收入を以て之を支辨する
第11條　本支部の豫算は通常總會に附議し決算は次年度の通常總會に報告しその承認を經る
第12條　本規程に於て特に明示しない事項は凡て日本建築協

會定款並びに細則に準據する
第13條　本規程の改廢は總會の決議を要する

附　則

本規程は昭和22年12月13日から之を施行する

日本建築協會東海支部細則

第１條　支部規程第一條の事務所は當分の間名古屋市中區榮町三ノ六土木建築材料協會内に之を置く
第２條　支部規程第四條の役員の定數は當分の間左の通りとする

支部長	一　名
副支部長	二　名
幹　事	若干名
常議員	若干名

附　則

本細則は昭和22年12月13日から之を施行する

東海支部役員

支部長　　玉置豊次郎
副支部長　佐藤　四郎、染木　正夫
幹　事　　池田源三郎、池部　宗薫、伊藤　鑛一
　　大倉　由平、岡田　平蔵、鬼頭　昌文
　　佐久間寅秋、水野　金市、吉田　信武
　　吉川　清一、濱　　一郎、廣川誠三郎

日本建築協會和歌山支部規程

第１條　本支部は日本建築協會和歌山支部と稱し事務所を和歌山市内に置く
第２條　和歌山縣内の日本建築協會會員は本支部に屬するものとする
第３條　本支部は日本建築協會定款第１條の目的を達する為め地方的に必要な事業を行ふ。
第４條　本支部に次の役員を置く

支部長	１名、	副支部長	２名、
會計幹事	２名、	幹　事	若干名、
常議員	若干名、		

第５條　役員の選擧は支部會員の選擧に依るものとする、但し常議員は幹事會の議決を以て選挙に代へる事が出来る
第６條　支部長は本支部を代表し會議の議長となる
　副支部長は支部長を補佐し支部長事故あるときは其の職務を代理する
　幹事は一般會務を處理する常議員は常議員會で會務を審議する
第７條　役員の任期は２年とする、但し特別事情あるものは重任を妨げない
第８條　本支部の會議は總會、幹事會、常議員會とし支部長之を招集する、總會は毎年１回開く臨時總會は必要により開催する、其の他の會は支部長必要により適宜開催する
第９條　本支部に職員若干名を置く事が出来る、職員は支部長之を任免する
第10條　本支部の經費は本部交附金其の他の収入を以て、之を支辨する
第11條　本支部の豫算決算は通常總會に附議承認を經たるものを本部に提出し理事會の承認を求めるものとする
第12條　本規程の外必要な事項は幹事會で別に定むる
第13條　本規程の改廢は總會の決議を要する
第14條　本規程に洩れたるものは總て日本建築協會定款並びに細則に依るものとする

附　則

本規程は昭和25年５月20日から實施する。

和歌山支部役員

支 部 長　奥村　　胖
副支部長　栗林　一馬、島村佐次郎
會計幹事　今津　吉兼、田中　閑吉
幹　　事　布袋　國雄、栂野　正春、中原　英一、
　　前田　保永、藪本　芳一、松岡　新蔵、
　　松下　譽一、藤本　久雄

支部役員

年度	支部名	支部長	副支部長		
1947	京都	松井清之助	棚橋 諒	小崎 修	
	廣島	藤田 定市	古林 義敦	中山 文夫	
	兵庫	岡本 茂樹	岩尾 保衞	桑田 正一	
	九州	錦田 直一	松田 昌平	篠原政次郎	
	東海	玉置豊次郎	佐藤 四郎	染木 正夫	
1948	京都	松井清之助	棚橋 諒	小崎 修	
	廣島	藤田 定市	古林 義敦	中山 文夫	
	兵庫	岡本 茂樹	岩尾 保衞	桑田 正一	
	九州	錦田 直一	松田 昌平	篠原政次郎	
	東海	玉置豊次郎	佐藤 四郎	染木 正夫	
1949	京都	松井清之助	棚橋 諒	小崎 修	
	廣島	藤田 定市	古林 義敦	中山 文夫	
	兵庫	岡本 茂樹	松浦勇太郎	桑田 正一	
	九州	錦田 直一	田中 勇雄	松田 昌平	
	東海	玉置豊次郎	佐藤 四郎	染木 正夫	
1950	京都	松井清之助	棚橋 諒	小崎 修	
	中国	藤田 定市	古林 義敦		
	兵庫	吉田 信武	早良 俊夫	山内嘉兵衞	
	九州	宮脇 晴美	黒木源次郎	藤島哲三郎	
	東海	玉置豊次郎	佐藤 四郎	染木 正夫	
	和歌山	奥村 胖	栗林 一馬	島村佐次郎	
1951	京都	松井清之助	——	——	
	中国	——	——	——	
	兵庫	吉田 信武	——	——	
	九州	——	——	——	
	東海	——	——		
	和歌山	——	島村佐次郎	——	
1952	京都	——	林 嘉造	伊東 恒治	
	中国	——	——	——	
	兵庫	——	——	——	
	九州	——	——	——	
	東海	——	——		
	和歌山	——	籔本 芳一	——	
1953	京都	大倉 三郎	西山 卯三	高丘 治季	
			森口 清	大島居満也	
			木下 清司		
	中国	藤田 定一	古林 義敦		
	兵庫	吉田 信武	早良 俊夫	山内嘉兵衞	
			宮飼 克二		
	九州	宮脇 晴美	黒木源次郎	薄 與荘	
	東海	玉置豊次郎	佐藤 四郎	染木 正夫	
	和歌山	栗林 一馬	布袋 國雄	島村佐次郎	

年度	支部名	支部長	副支部長		
1954	京都	大倉 三郎	菅 陸二	高丘 治季	
			西山 卯三	木下 清司	
			大島居満也		
	中国	藤田 定市	古林 義敦		
	兵庫	吉田 信武	早良 俊夫	山内嘉兵衞	
			宮飼 克二		
	九州	宮脇 晴美	黒木源次郎	薄 與荘	
	東海	連絡事務所として支部に準じて会務を執行			
	和歌山	栗林 一馬	島村佐次郎	布袋 國雄	
1955	京都	大倉 三郎	菅 陸二	高丘 治季	
			西山 卯三	木下 清司	
			大島居満也		
	中国	藤田 定市	古林 義敦	中山 文夫	
	兵庫	吉田 信武	早良 俊夫	山内嘉兵衞	
	九州	宮脇 晴美	薄 與荘		
	東海	会員数が定款の支部要件未満となったため連絡員を置き支部に準じた会務を行うこととした。			
	和歌山	栗林 一馬	島村佐次郎	布袋 國雄	
1956	京都	大倉 三郎	菅 陸二	高丘 治季	
			西山 卯三	木下 清司	
			大島居満也		
	中国	藤田 定市	古林 義敦	中山 文夫	
	兵庫	吉田 信武	早良 俊夫	山内嘉兵衞	
	九州	欠員	薄 與荘		
	東海	会員数が定款の支部要件未満となったため連絡員を置き支部に準じた会務を行うこととした。			
	和歌山	栗林 一馬			
1957	京都	大倉 三郎	菅 陸二	高丘 治季	
			西山 卯三	木下 清司	
			大島居満也		
	中国	古林 義敦	奥井忠太郎	荒川 初雄	
	兵庫	山内嘉兵衞	早良 俊夫	宮飼 克二	
	九州	欠員	薄 與荘		
	東海	会員数が定款の支部要件未満となったため連絡員を置き支部に準じた会務を行うこととした。			
	和歌山	栗林 一馬			
1958	京都	大倉 三郎	井手 正雄	佐々木米太郎	
			市川 進男	山本 和夫	
	兵庫	山内嘉兵衞	早良 俊夫	宮飼 克二	
	九州	欠員	黒木源次郎	薄 與荘	
	中国	古林 義敦	奥井忠太郎	荒川 初雄	
	東海	会員数が定款の支部要件未満となったため連絡員を置き支部に準じた会務を行うこととした。			
	和歌山	栗林 一馬	堀田 好三	栂野 正春	

年度	支部名	支部長	副支部長
1959	京都	大倉 三郎	井手 正雄　佐々木米太郎 市川 進男　山本 和夫
	中国	古林 義敦	奥井忠太郎　荒川 初雄
	兵庫	山内嘉兵衛	早良 俊夫　宮飼 克二
	九州	欠員	薄 與荘
	東海	会員数が定款の支部要件未満となったため連絡員を置き支部に準じた会務を行うこととした。	
	和歌山	栗林 一馬	
1960	京都	井手 正雄	水野喜一郎　佐々木米太郎 市川 進男　山本 和夫
	中国	古林 義敦	奥井忠太郎　羽太 二男
	兵庫	山内嘉兵衛	早良 俊夫　宮飼 克二
	九州	小栗 治平	黒木源次郎　薄 與荘
	東海	一圓 俊郎	新居 恒人　城戸 武男
	和歌山	栗林 一馬	栂野 正春　井崎 梁次
1961	京都	井手 正雄	市川 進男　佐々木米太郎 山本 和夫　水野喜一郎
	中国	古林 義敦	奥井忠太郎　羽太 二男
	兵庫	山内嘉兵衛	早良 俊夫　宮飼 克二
	九州	小栗 治平	黒木源次郎　薄 與荘
	東海	一圓 俊郎	新居 恒人　城戸 武男
	和歌山	栗林 一馬	栂野 正春　井崎 梁次
1962	京都	井手 正雄	市川 進男　佐々木米太郎 山本 和夫　水野喜一郎
	中国	古林 義敦	奥井忠太郎　羽太 二男
	兵庫	山内嘉兵衛	早良 俊夫　宮飼 克二
	九州	——	——
	東海	一圓 俊郎	新居 恒人　城戸 武男
	和歌山	栗林 一馬	栂野 正春　井崎 梁次
1963	京都	井手 正雄	市川 進男　佐々木米太郎 山本 和夫　水野喜一郎
	中国	古林 義敦	奥井忠太郎　羽太 二男
	兵庫	山内嘉兵衛	早良 俊夫　宮飼 克二
	九州	——	——
	東海	一圓 俊郎	新居 恒人　城戸 武男
	和歌山	栗林 一馬	栂野 正春　井崎 梁次
1964	京都	井手 正雄	山本 和夫　佐々木米太郎 水野喜一郎
	中国	古林 義敦	松田 実　青盛 繁男
	兵庫	山内嘉兵衛	早良 俊夫　宮飼 克二
	九州	欠員	薄 與荘
	東海	一圓 俊郎	新居 恒人　城戸 武男
	和歌山	栗林 一馬	栂野 正春　井崎 梁次

年度	支部名	支部長	副支部長
1965	京都	井手 正雄	山本 和夫　佐々木米太郎 水野喜一郎
	中国	古林 義敦	松田 実　青盛 繁男
	兵庫	山内嘉兵衛	早良 俊夫　宮飼 克二
	九州	——	——
	東海	一圓 俊郎	橋本 忠保　水野 金市
	和歌山	栗林 一馬	栂野 正春
1966	京都	井手 正雄	佐々木米太郎　水野喜一郎 中村 金三
	中国	古林 義敦	松田 実　青盛 繁男
	兵庫	宮飼 克二	早良 俊夫　設楽 貞三
	九州	欠員	薄 與荘
	東海	一圓 俊郎	橋本 忠保　水野 金市
	和歌山	栗林 一馬	栂野 正春　山下 宗一
1967	京都	井手 正雄	佐々木米太郎　水野喜一郎 中村 金三
	中国	古林 義敦	松田 実　青盛 繁男
	兵庫	宮飼 克二	早良 俊夫　設楽 貞三
	九州	欠員	薄 與荘
	東海	一圓 俊郎	橋本 忠保　水野 金市
	和歌山	栗林 一馬	栂野 正春　山下 宗一
1968	京都	井手 正雄	佐々木米太郎　水野喜一郎 中村 金三
	中国	青盛 繁男	松田 実　松本 正夫
	兵庫	宮飼 克二	早良 俊夫　設楽 貞三 加藤 太郎
	九州	欠員	薄 與荘
	東海	一圓 俊郎	広橋 臣一　水野 金市
	和歌山	栗林 一馬	栂野 正春　藪本 芳一
1969	京都	井手 正雄	佐々木米太郎　水野喜一郎 中村 金三
	中国	青盛 繁男	松田 実　松本 正夫
	兵庫	宮飼 克二	早良 俊夫　設楽 貞三
	九州	欠員	薄 與荘
	東海	一圓 俊郎	水野 金市　広橋 臣一
	和歌山	栗林 一馬	栂野 正春　藪本 芳一
1970	京都	井手 正雄	佐々木米太郎　水野喜一郎 中村 金三
	中国	青盛 繁男	松田 実　松本 正夫
	兵庫	宮飼 克二	早良 俊夫　設楽 貞三
	九州	欠員	薄 與荘
	東海	一圓 俊郎	広橋 臣一　水野 金市
	和歌山	栗林 一馬	栂野 正春

年度	支部名	支部長	副支部長	
1971	京都	井手 正雄	佐々木米太郎	水野喜一郎
	中国	青盛 繁男	松田 実	松本 正夫
	兵庫	宮飼 克二	早良 俊夫	設楽 貞三
			加藤 太郎	
	九州	欠員	薄 與荘	
	東海	一圓 俊郎	広橋 臣一	水野 金市
	和歌山	栗林 一馬	栂野 正春	藪本 芳一
1972	京都	井手 正雄	佐々木米太郎	水野喜一郎
			市川 繁雄	
	中国	青盛 繁男	松田 実	松本 正夫
	兵庫	宮飼 克二	早良 俊夫	設楽 貞三
			加藤 太郎	
	九州	欠員	薄 與荘	
	東海	一圓 俊郎	小野 勉	相山 専二
	和歌山	藪本 芳一	栂野 正春	山下 宗一
1973	京都	井手 正雄	佐々木米太郎	水野喜一郎
			市川 繁雄	
	中国	青盛 繁男	松田 実	松本 正夫
	兵庫	宮飼 克二	早良 俊夫	設楽 貞三
			加藤 太郎	
	九州	欠員	薄 與荘	
	東海	一圓 俊郎	相山 専二	小野 勉
	和歌山	藪本 芳一	栂野 正春	山下 宗一

1974年以降は、次頁につづく

京都支部設立

昨年通常總會で決議された京都支部設置の件は其後地元發起人に於て着々準備を進めてゐたが機漸く熟し本年4月13日京都市上長者町木藤で其創立總會を開催盛會裡に終了目出度其スタートを切つた。當日會合せる者松井、棚橋兩發起人代表以下32名本部より會長代理中西副會長、常務代表尾崎久助氏、事務局代表大和書記長列席4時開會本川駒三郎氏司會の下に下記次第で進行した。

開會の辭、松井清之助氏、西山卯三氏經過報告を述べた後座長に松井氏推され議事に入り支部規程等を別項の通り審議決定。次に役員選擧に移り選擧方法を諮つた結果支部長を議場で推薦し副支部長以下役員は支部長指命一任を決議したので座長は多數の意見により支部長推薦方を諮つた所滿場一致で松井清之助氏を支部長に推薦決定した。松井氏は之を承諾し就任挨拶を述べた後副支部長以下の役員を選擧に代て指命する事を告げ棚橋諒小崎修兩氏を副支部長に其他の役員を別項の通り指名一同拍手決定承認した。

廣島支部設立進捗

戰前から地方會員の福利增進と會勢發展に尤も熱心であつた廣島在住の會員有志は早くから支部設置に努力されてゐたが、あの世界的悲慘な原子爆彈のため此の問題も一時どこかへ吹き飛んでゐた。數年間は草木も育たぬだろうと云はれてゐた廣島の街にも花は咲き野菜は生き生きと芽を出し都市の復興も漸次賑やかになつてゐる。四散した會員も吳に廣島にと逐日其數を增し再建の意氣に燃え活躍されてゐる。中にも古林義敦氏、奥迫唯一氏谷川政夫氏、藤岡正一氏等は全く死線を越へた方々で共に宮脇氏時代から支部問題につき非常に協力されてゐたが今般機熟せりと見て之等の人々十名が支部設立の再出發を協議され古林氏を發起人代表として關係方面に檄を飛ばした結果去る4月17日在廣の業界、官衙、學校、事務所等會員30餘名が廣島土建會館に會して協會支部設置問題に就て協議された。

東海支部設立準備進む

協會創立年記念事業の一として各地に支部設立の議が起つた際其トツプを切つて設立申出があつたのは東海支部であり夫は昭和18年の交であつた。處が時恰も學會との合併問題が著しく進展してゐたので本部では、暫く靜觀狀態になつてゐた裡に戰ひ峻烈を極め遂に終戰の暮となり協會も竹腰會長を迎え新發足と舞臺は變り、諸機構の改廢など忙殺各地との連絡も荏苒今日に及んだが過般大和書記長名古屋出張の砌り當時より發起人代表の佐藤四郎氏、玉置豊次郎氏並業界代表清水組、竹中工務店外有志會合され至急支部設置進捗方の申合せがあり其旨を受けて歸任したのである。

和歌山支部結成記

次に竹腰會長は各地の支部が數縣乃至は大都市をベツクにして200乃至500名の會員を容しているのに当和歌山支部が1縣で然も南海の一端にあつて120余名の會員を獲得され、茲にめでたく支部結成された各位の努力と其熱意に敬意を表すると共に同慶の至りであり、今後の育成發展を望んで止まぬ。先刻來發足から天候に惠れず云々とあつたが、災害の起る毎に建築家の任務はあらゆる面を通じて多端であり、又研究を要するから一面から見て之は當支部の將來の活躍發展を物語るものと自分は解釋している。復興途上に直面し本會のなすべき事業は山積している、各位は益々一致協力相互の向上發展を計ると共に益々斯界のため盡され、本會所期の目的達成に盡されん事を祈る旨を述べ祝詞と挨拶があつた。

以上4支部の動きは「建築と社会」1947年、1950年より復刻

年度	支部名	支部長	副支部長	会員数 10/31			収支決算状況		
				個人	団体		収入	支出	収支差額
1974	京都	佐々木米太郎	水野喜一郎　市川繁雄	92人	24団体	46口	1,164	961	223
	中国	青盛繁男	松田実　松本正夫						
	兵庫	宮飼克二	早良俊夫　設楽貞三						
			加藤太郎						
	九州	欠員	薄與荘						
	東海	一圓俊郎	小野勉　相山専二	145	13		501	351	150
	和歌山	藪本芳一	栂野正春　山下宗一						
1975	京都	佐々木米太郎	水野喜一郎　市川繁雄	92人	23団体	44口	1,614	1,228	386
	中国	青盛繁男	松田実　松本正夫						
	兵庫	宮飼克二	早良俊夫　設楽貞三						
			加藤太郎						
	九州	欠員	薄與荘						
	東海	一圓俊郎	相山専二　小野勉	145	13		501	351	150
	和歌山	藪本芳一	栂野正春　山下宗一	101	12				
1976	京都	佐々木米太郎	水野喜一郎　市川繁雄	87人	23団体	43口	1,639	1,201	438
	中国	青盛繁男	松田実　松本正夫						
	兵庫	宮飼克二	早良俊夫　設楽貞三						
			加藤太郎						
	東海	一圓俊郎	小野勉	142	12		433	346	87
							395	395	0
	和歌山	藪本芳一	栂野正春　北山俊	91	31				
1977	京都	佐々木米太郎	水野喜一郎　市川繁雄	151人	19団体	43口	1,639	1,201	438
	中国	青盛繁男	松田実　松本正夫	152	21	39			
	兵庫	宮飼克二	早良俊夫　設楽貞三	151	19	43			
			加藤太郎						
	東海	一圓俊郎	服部小虎　宮崎辰敬	130	12	20	320	217	103
	和歌山	藪本芳一	栂野正春　北山俊	112	42	42			
1978	京都	水野喜一郎	市川繁雄　前田利典	115人	27団体	30口	1,700	1,502	198
	中国	青盛繁男	松田実　松本正夫	116	21	39			
	兵庫	宮飼克二	早良俊夫　設楽貞三	135	18	42			
			加藤太郎						
	東海	一圓俊郎	宮崎辰敬　服部小虎	121	10	18	337	254	83
	和歌山	藪本芳一	栂野正春　北山俊	106	41	41			
1979	京都	水野喜一郎	市川繁雄　前田利典	115人	27団体	30口	1,566	1,288	278
	中国	青盛繁男	松田実　松本正夫	116	21	39			
	兵庫	宮飼克二	早良俊夫　設楽貞三	135	18	42			
			加藤太郎						
	東海	中島一	服部小虎　宮崎辰敬	117	10	18	367	274	93
	和歌山	藪本芳一	栂野正春　北山俊	99	40	40			
1980	京都	水野喜一郎	市川繁雄　前田利典	113人	31団体	37口	1,599	1,416	183
	中国	青盛繁男	松田実　松本正夫	106	20	36			
	兵庫	宮飼克二	早良俊夫　設楽貞三	125	19	43			
			加藤太郎				┌608	┌418	┌190
	東海	中島一	宮崎辰敬　服部小虎	114	9	16	└1,763	└1,763	└0
	和歌山	北山俊	寺地清　阪本良二	96	36	36			

年度	支部名	支部長	副支部長	会員数 10/31			収支決算状況		
				個人	団体		収入	支出	収支差額
1981	京都	水野喜一郎	市川 繁雄 前田 利典	109人	31団体	37口	1,869	1,625	244
	中国	青盛 繁男	松田 実 松本 正夫	106	20	36			
	兵庫	宮飼 克二	早良 俊夫 設楽 貞三 加藤 太郎	121	18	42			
	東海	中島 一	宮崎 辰敬 服部 小虎	106	8	15	576	332	244
	和歌山	北山 俊	寺地 清 阪本 良二	102	34	34			
1982	京都	井川 栄一	橋詰 一雄 佐藤 四郎	100人	31団体	37口	2,599	2,020	578
	中国	青盛 繁男	松田 実 松本 正夫	86	20	36			
	兵庫	宮飼 克二	早良 俊夫 設楽 貞三 加藤 太郎	115	17	40			
	東海	中島 一	太田 信二 宮崎 辰敬	107	8	15	742 760	538 760	204 0
	和歌山	北山 俊	島田 省造 野島 育夫	93	30	30			
1983	京都	井川 栄一	橋詰 一雄 佐藤 四郎	60	22	37	2,934	2,302	632
	中国	河内 義就	松本 正夫 平本 俊秋	78	20	36			
	東海	中島 一	太田 信二 宮崎 辰敬	99	8	17	772 746	674 746	98 0
	和歌山	北山 俊	島田 省造 野島 育夫	86	28	28			
1984	京都	橋詰 一雄	大原 正 山口 明	43	21	24	2,840	2,191	649
	中国	河内 義就	松本 正夫 平本 俊秋	72	19	35			
	東海	中島 一	宮崎 辰敬 太田 信二	99	8	17	584 1,028	547 1,028	37 0
	和歌山	北山 俊	島田 省造 野島 育夫	85	27	27			
1985	京都	橋詰 一雄	大原 正 山口 明	39	19	22	2,855	2,306	549
	中国	河内 義就	平本 俊秋 武藤 享	68	19	35			
	東海	中島 一	太田 信二 宮崎 辰敬	99	8	16	667 1,413	502 1,413	165 0
	和歌山	北山 俊	島田 省造 野島 育夫	75	23	23			
1986	京都	橋詰 一雄	大原 正 山口 明	38	17	20	2,646	2,090	555
	中国	河内 義就	平本 俊秋 武藤 享	64	18	34			
	東海	中島 一	宮崎 辰敬 広田 外雄	128	10	17	860 419	723 419	137 0
	和歌山	北山 俊	島田 省造 野島 育夫	58	19	19			
1987	京都	橋詰 一雄	大原 正 山口 明	36	17	20	2,700	2,223	477
	中国	平本 俊秋	稲葉 登 古林 敏郎	62	22	38			
	東海	中島 一	広田 外雄 宮崎 辰敬	93	9	16	652 243	620 243	32 0
	和歌山	北山 俊	島田 省造 野島 育夫	57	18	18			
1988	京都	井手 正己	神谷 治 山口 明	36	22	28	2,798	2,373	425
	中国	平本 俊秋	稲葉 登 古林 敏郎	86	28	45			
	東海	中島 一	宮崎 辰敬	86	10	22	911 750	790 750	121 0
	和歌山	北山 俊	島田 省造 野島 育夫	56	16	16			
1989	京都	井手 正己	神谷 治 山口 明	40	23	29	4,254	3,882	372
	中国	平本 俊秋	稲葉 登 古林 敏郎	94	38	57			
	東海	中島 一	宮崎 辰敬 岩田 正弘	81	10	22	1,066 866	894 866	172 0
	和歌山	北山 俊	寺地 清 野島 育夫	51	15	15			

年度	支部名	支部長	副支部長	会員数 10/31			収支決算状況		
				個人	団体		収入	支出	収支差額
1990	京都	井手 正己	神谷 治 山口 明	37	29	37	3,936	3,613	323
	中国	平本 俊秋	稲葉 登 古林 敏郎	98	43	62	2,448	1,466	982
	東海	中島 一	宮崎 辰敬 岩田 正弘	115	11	24	┌1,903	┌1,601	┌ 302
							└5,010	└5,010	└ 0
	和歌山	北山 俊	寺地 清 野島 育夫	51	16	17	1,397	1,286	111
1991	京都	井手 正己	神谷 治 山口 明	104人	30団体	38口	3,977	3,857	120
	中国	平本 俊秋	稲葉 登 古林 敏郎	94	47	67	2,622	1,355	1,267
	東海	中島 一	岩田 正弘 森口 雅文	119	12	26	┌3,591	┌3,069	┌ 522
							└1,620	└1,620	└ 0
	和歌山	北山 俊	寺地 清 野島 育夫	68	16	17	1,321	946	375
1992	京都	井手 正己	神谷 治 山口 明	104	28	35	4,995	4,677	318
	中国	平本 俊秋	稲葉 登 古林 敏郎	97	51	71	3,497	1,851	1,646
	東海	中島 一	岩田 正弘 森口 雅文	132	13	27	┌5,220	┌4,436	┌ 784
							└1,472	└1,472	└ 0
	和歌山	北山 俊	北山 泰秀 雑賀 幹央	65	15	16			
1993	京都	井手 正己	神谷 治 山口 明	103	28	36	5,483	4,887	596
	中国	平本 俊秋	稲葉 登 古林 敏郎	103	57	77			
	東海	森口 雅文	岩田 正弘 林 金之	146	44	59	┌5,845	┌4,808	┌1,037
							└1,220	└1,220	└ 0
	和歌山	北山 俊	北山 泰秀 雑賀 幹央	61	13	14			
1994	京都	井手 正己	神谷 治 山口 明	97	29	37	5,552	4,759	793
	中国	平本 俊秋	稲葉 登 古林 敏郎	103	56	76	3,701	1,902	1,799
	東海	森口 雅文	小宮 三辰 林 金之	158	68	92	┌7,154	┌5,868	┌1,286
			寺本 英一				└1,390	└1,390	└ 0
	和歌山	小池 康雄	北山 泰秀 雑賀 幹央	53	11	12	1,550	851	699
1995	京都	井手 正己	神谷 治 山口 明	102	30	38	5,962	5,235	727
	中国	平本 俊秋	稲葉 登 古林 敏郎	108	51	70	2,877	1,656	1,221
	東海	森口 雅文	小宮 三辰 林 金之	187	85	109	┌5,327	┌5,327	┌ 0
			寺本 英一				└1,050	└1,050	└ 0
	和歌山	小池 康雄	北山 泰秀 雑賀 幹央	56	7	8	1,444	720	724
1996	京都	望月 秀祐	秋山 明孝 神谷 治	101	35	44	5,849	4,960	890
	中国	平本 俊秋	稲葉 登 古林 敏郎	107	50	68	3,684	1,912	1,772
	東海	森口 雅文	小宮 三辰 林 金之	202	103	131	┌7,823	┌6,306	┌1,518
			寺本 英一				└2,156	└2,156	└ 0
	和歌山	小池 康雄	北山 泰秀 雑賀 幹央	53	8	9	1,526	902	624

会員数・収支決算等の推移

年度	会長	会員数							収支決算額			会費/年 正会員 地方会員 賛助員
		正会員	地方	名誉 (賛助員)	終身 (賛助員)	特別 (賛助員)	普通準 (賛助員)	合計 (名)	収入額	支出額	差引	
1917	片岡安 初代理事長	人 74	人	人	人	人	人	人 74	円銭 1,269.39	円銭 1,673.01	円銭 ▲403.62	正 12円 地 6 賛 6
1918	同	133	30	18	30	—	205	416	5,622.39	8,659.12	▲3036.73 累▲3440.35	正 12円 地 賛 6
1919	同	178	36	65	39	7	230	555	11,334.62	不明		正 地 賛
1920	同	176	51	72	41	9	250	599	会則第5条2号中の終身賛助員￥100円以上を→￥300円以上に			正 18円 特賛 9 普賛 6
1921	片岡安 副会頭 葛野壮一郎 理事長	204	70	70	50	15	332	741	資料不明			正 特賛 普賛
1922	同	229	79	70	52	18	371	819	——	——	——	正 賛
1923	同	261	94	67	55	26	484	987	——	——	——	正 賛
1924	同	303	114	86	56	29	466	1,054	——	——	——	正 賛
1925	同 松本禹象 理事長	390	162	72	55	29	519	1,227	——	——	——	正 特賛 12円 普賛
1926	同 園部文雄 理事長	394	178	70	53	27	498	1,220	——	——	——	正 特賛 普賛 9円
1927	片岡安 会長	409	199	80	52	30	354	1,124	——	——	——	正 賛
1928	同	394	204	79	53	33	345	1,018	——	——	——	正 賛
1929	同	377	223	44	52	38	366	1,103	——	——	——	正 賛
1930	同	423	218	43	52	54	341	1,131	——	——	——	普賛 8円
1931	同	450	224	40	52	68	363	1,197	——	——	——	正 賛
1932	同	511	226	39	51	94	495	1,416	——	——	——	正 賛
1933	同	476	232	38	49	125	494	1,414	——	——	——	正 賛

年度	会長	会員数							収支決算額			会費/年 正会員 地方会員 賛助員
		正会員	地方	名誉 (賛助員)	終身 (賛助員)	特別 (賛助員)	普通準 (賛助員)	合計 (名)	収入額	支出額	差引	
1934	片岡安 会長	501	230	35	48	134	513	1,461	——	——	——	正 賛
1935	同	534	287	33	45	132	501	1,532	——	——	——	
1936	同	822	308	27	42	158	463	1,820	——	——	——	
1937	同	932	335	23	38	176	480	1,985	——	——	——	
1938	同	933	335	23	38	175	488	1,992	——	——	——	正　12円 地方　8 特賛　12 普賛　6
1939	同	1,178	503	26	37	217	541	2,476	——	——	——	
1940	同	1,423	666	22	38	279	439	2,871	——	——	——	
1941	同	1,429	690	26	39	324	481	2,989	——	——	——	
1942	同	1,502	745	26	39	365	496	3,173	——	——	——	
1943	同	1,495	721	26	38	329	485	3,094	——	——	——	
1944	同	(不　明)							——	——	——	
1945	同	(不　明)							——	——	——	
1946	片岡安 会長 竹腰健造 (第2代)	(不　明)							——	——	——	

年度	会長	会員数					合計 (口数)		収支決算額			会費/年
		正会員	地方	準会員	団体 (口数)				収入額	支出額	差引	
1947	竹腰健造	(名誉16) 2,744	人 848	人 —	団体 250	口 1,524	人·団体 3,842	口 5,116	千円 946	千円 936	千円 10	円
1948	同	(名誉15) 2,270	251	—	500	2,038	3,021	4,559	1,892	2,068	△ 176	
1949	同	(名誉18) 2,107	236	—	811	1,573	3,154	3,916	4,111	4,120	△ 9	
1950	同	(名誉15) 2,369	262	199	501	1,417	3,331	4,247	5,071	5,073	△ 2	
1951	同	(名誉15) 2,389	248	199	547	1,380	3,383	4,216	5,815	5,749	66	
1952	同	(名誉15) 2,284	229	197	615	1,488	3,326	4,198	記念事業 3,388 6,287	1,868 6,190	1,520 97	
1953	同	(名誉17) 2,202	214	167	611	1,476	3,194	4,059	——	——	——	

年度	会長	会員数					合計（口数）		収支決算額			会費/年
		正会員	地方	準会員	団体（口数）				収入額	支出額	差引	
1954	竹腰健造（第2代）	人 2,215	人 234	人 189	団体 608	口 1,471	人·団体 3,246	口 4,109	千円 ——	千円 ——	千円 ——	個 1,200 地 960
1955	同	2,308	202	261	614	1,478	3,385	4,249	11,670	11,661	9	個
1956	同	2,396	196	340	605	1,442	3,537	4,374	——	——	——	個
1957	同	2,487	200	419	606	1,443	3,712	4,549	——	——	——	個
1958	尾崎久助（第3代）	2,772	198	455	616	1,460	4,041	4,885	——	——	——	個 団
1959	同	2,952	208	512	607	1,418	4,279	5,090	——	——	——	個 団
1960	同	3,360	233	508	653	1,699	4,754	5,800	——	——	——	個 団
1961	同	3,591	239	546	634	1,676	5,010	6,052	——	——	——	個 団
1962	同	3,873	237	547	641	1,679	5,298	6,336	——	——	——	個 団
1963	同	3,992	253	768	653	1,692	5,666	6,705	特2,545 31,976	特2,546 31,959	60 18	個 団
1964	東畑謙三（第4代）	4,063	272	867	647	1,690	5,849	6,892	特2,659 30,256	特2,534 30,643	125 △ 387	個 団
1965	同	4,054	268	820	627	1,668	5,769	6,810	特3,137 38,076	特3,138 37,905	△ 1 171	個 団
1966	同	4,136	296	506	636	1,627	5,574	6,565	41,692	41,059	633	個 団
1967	同	4,483	306	573	644	1,651	5,362	6,369	47,931	47,320	611	個 2,400 団 4,000
1968	同	4,962	345	796	661	1,656	6,103	7,098	50,603	50,520	83	個 団
1969	同	5,222	388	889	665	1,663	7,164	8,162	61,363	62,467	△ 1,104	個 団
1970	同	5,757		895	660	1,649	7,312	8,301	92,350	94,266	△ 1,917	個 3,000 団 5,000
1971	塚本猛次（第5代）	5,330	421	605	649	1,632	7,005	7,988	65,137	73,917	△ 8,780	個 団
1972	同	5,104		165	649	1,627	5,918	6,896	91,253	89,066	2,187	個 4,200 団 7,000
1973	同	4,593	359	136	616	1,593	5,704	6,681	78,180	75,999	2,181	個 団
1974	同	4,340	332	65	600	1,577	5,337	6,314	98,398	94,926	3,472	個 6,000 団 10,000
1975	同	4,119	301	66	595	1,552	5,081	6,038	100,828	97,097	3,730	個 団
1976	同	3,972	292	44	618	1,577	4,926	5,885	106,194	104,802	1,392	個 団

年度	会長	会員数					合計（口数）		収支決算額			会費/年
		正会員	地方	準会員	団体（口数）				収入額	支出額	差引	
1977	塚本猛次（第5代）	人 3,697	人 318	人 30	団体 596	口 1,537	人・団体 4,641	口 5,582	千円 86,940	千円 88,572	千円 △ 1,631	個 7,800 団 13,000
1978	同	3,467	278	14	593	1,536	4,352	5,295	134,088	132,536	1,552	個 団
1979	同	3,306	259	13	566	1,491	4,144	5,069	113,469	112,918	551	個 団
1980	同	3,233	243	12	572	1,591	4,060	5,079	114,240	113,102	1,138	個 9,000 団 16,000
1981	同	2,938	209	5	547	1,566	3,699	4,718	126,784	125,286	1,498	個 団
1982	福田朝生（第6代）	2,742	188	3	513	1,511	3,446	4,444	124,411	123,852	559	個 団
1983	同	2,670	179	6	519	1,583	3,374	4,438	（固定資産売却収入3億円を含む） 444,136	442,411	1,725	個 11,400 団 20,000
1984	福田朝生（第6代） 佐野正一（第7代）	2,538	157	1	504	1,563	3,200	4,259	135,106	134,263	843	個 団
1985	佐野正一	2,622	147	5	502	1,554	3,276	4,328	175,038	174,953	85	個 団
1986	同	2,453	146	6	488	1,536	3,093	4,141	143,038	143,482	△ 445	個 団
1987	同	2,467	142	12	514	1,870	3,135	4,491	197,613	195,547	2,067	個 団
1988	同	2,444	147	19	530	1,901	3,140	4,511	168,858	167,819	1,039	個 団
1989	同	2,442	144	27	538	1,907	3,151	4,520	178,527	174,710	3,817	個 団
1990	同	2,431	141	31	548	1,920	3,151	4,523	176,947	196,488	△ 19,541	個 団
1991	同	2,348	188	27	548	1,915	3,111	4,478	198,833	197,038	△ 1,795	個 団
1992	同	2,367	182	21	544	1,908	3,114	4,478	182,727	187,165	△ 4,437	個 団
1993	同	2,328	174	38	586	1,942	3,126	4,482	192,198	204,398	△ 12,200	個 団
1994	市川 宏（第8代）	2,425	155	53	605	1,948	3,238	4,581	195,088	203,943	△ 8,855	個 14,400 団
1995	同	2,672	157	36	668	2,142	3,533	5,007	190,777	188,524	2,253	個 団 25,000
1996	同	2,585	151	47	667	2,160	3,450	4,943	212,140	212,233	△ 93	個 団

青年建築家及び青年技術者の顕彰

注）所属組織名には、略称を用いているところもある

回・年	顕彰者　（所属等）			
第1回　1954年	富家宏泰（富家建築設計） 渡辺禎巳／藤森正之／巽　健治（大阪市） 長谷川元邸／吉田隆一（東畑建築） 片山光生（近畿地建） 近藤正志（村野、森建築）	坂田美郎（岐阜県） 宮武保義（清水建設） 太田伝一郎（電電公社）	今西茂雄（今西デザイン） 森下祐良（大林組） 松村慶三（倉敷レイヨン） 小林　章／小林盛太（建築世代）	三田一男（三田建築設計） 平生舜一（竹中工務店） 稲葉歳明（清水建設）
第2回　1955年	鈴木英夫（東畑建築） 薬袋公明（日建設計） 栄木一成（大林組）	梅田孝治（近畿地建） 佐久間宏（大成建設） 加藤啓治（清水建設）	浜田和夫（電電公社） 高橋則夫（竹中工務店）	富田三樹夫（三座建築） 櫛田　清（安井建築設計）
第3回　1956年	住田栄次郎（東畑建築） 小西敏哲（中国四国地建） 倉石秀夫（竹中工務店）	石中達夫（大阪建築） 八木　彰（中国四国地建） 力武利夫（清水建設）	井上　滉（大阪建築） 吉岡吉雄（大林組）	嶋村隆次（大成建設） 内藤薫男（三座建築）
第4回　1957年	市川　宏（東畑建築） 北田正利（円堂建築設計） 斉藤和夫／鎌田恭男／寺内 北村隆夫（竹中工務店）	三川栄吉（兵庫県） 山本俊介（清水建設） 信／水谷顕介（タウンデザイン研究会） 竹原義昭（竹中工務店）	山本智雄（松田平田設計） 宮川達郎（日建設計） 坂本勝比古（神戸市）	陶村　功（清水建設） 松浦直一/鍛冶延男（桂建築設計） 後藤攝二（直建築研）
第5回　1958年	外山　毅（日建設計） 根津耕一郎（日建設計） 木内新弥（大阪郵政局） 大辻眞喜夫（竹中工務店） 柏原　博（石原建築設計） 多田英之（日建設計） 池田武彦（東畑建築） 山本純孝（安井建築設計） 金沢弘真（住宅公団）	小西吉太郎（小西建築） 山本龍輔/下山柾和（近畿地建） 和田　保（村田大旗建築） 奥山　勝（竹中工務店） 山田　篤（中部地建） 松岡通夫（田中・小西建築） 猪沢徳忠（兵庫県） 武藤倫男（倉敷レイヨン）	若槻健一（中国四国地建） 田中孝男（日建設計） 森本光雄（田中・小西建築） 木村康彦（清水建設） 井関幹雄（三座建築） 日高輝雄（中川組） 江川好巳（山下寿郎設計） 上村　一／蓮佛　亨／吉野正治（京都建築研究所）	内藤一眞（大阪府） 横井良一（日建設計） 田村敏夫（住宅公団） 宮本千賀志（大成建設） 松井香路（三田建築設計） 池田彰一郎（東畑建築） 舟橋　巖（大林組）
第6回　1959年	山田勝成（兵庫県） 小坂隆次（大阪市） 坂内幾男（坂内建築設計） 朝野博文（田中・小西建築） 喜多村幸夫（大阪郵政局） 竹本昭三（円堂建築設計） 林　高明（中国電力）	井上凱敬（建築綜合計画研） 上田　稔（大阪市） 橋本喬行（日建設計） 辻本　豊（雑賀建築設計） 工藤隆昭（竹中工務店） 大津昭義（東畑建築）	片倉健雄／斎藤三郎（K構造研） 大海一雄（神戸市） 中野孝治（安井建築設計） 田村又夫（三座建築） 清水一造（住宅公団） 中路邦久（大林組）	岡　浩三（中沢建築） 中村銀之助（大成建設） 常石勝世（渡部建築設計） 三村浩史（大阪府） 木田幸夫（大林組）
第7回　1960年	森谷晋作（近畿地建） 南上　晃（東畑建築） 山田貞次郎（大林組） 平田宜広（安井建築設計） 浜崎海太郎（坂内建築設計）	宮崎君治（大林組） 山田新治郎（建築自営） 今井孝達（昌建築自営） 寺谷敏行（兵庫県） 大塚仁志（日建設計）	和田晋弥（大阪建築） 川辺　眞（日建設計） 後藤直信（日建設計） 吉岡凡夫（三座建築） 山口治男（大阪建築）	尾本　茂（渡部建築設計） 松原孝史（日建設計） 青木　繁（清水建設） 大国豊悦（住宅公団）
第8回　1961年	大倉秀明（住宅公団） 白井　剛（京都大学増田研究） 中島克己（安井建築設計） 堀　照男（兵庫県）	岡部幸蔵（日建設計） 高田　威（大成建設） 西田芳弘（清水建設） 松村健次（彦谷建築設計）	尾路義一（大林組） 鶴田昭一（大林組） 長谷部朔郎（日建設計） 宮崎八郎（三座建築）	柴田勝之（坂倉準三建築研） 東内　敏（東畑建築） 福井弘明（清水建設） 米井顕一（竹中工務店）
第9回　1962年	満野　久（京都大学） 高原稔也（東畑建築） 山形勝久（日建設計） 若野暢三（清水建設） 紙野桂人（大阪大学大学院）	高田十治（日建設計） 伊丹　孝（大林組） 松下濤一郎（兵庫県） 高武主計（高島屋工作所） 木原仁男（三座建築）	山田英夫（設計自営） 神出津嶺雄（安井建築設計） 小島将志（早稲田大学院） 徳岡昌克（竹中工務店） 西田隆雄（住宅公団）	倉田茂二（大江宏研究所） 山本正和（大阪府） 檜山吉平（東京大学大学院） 泉沢哲史（鹿島建設） 若林時郎（住宅公団）

回・年	顕彰者　（所属等）			
第10回　1963年	浅野雅彦（坂倉準三建築研） 喜多英介（中沢建築） 鋤納忠治（日建設計） 溝田幸男（三座建築） 村岡　実（１級建築事自営）	伊東哲郎（竹中工務店） 北野正志（富家建築設計） 野村輝雄（東畑建築） 宮川吉夫／信川好弘（兵庫県） 横山誠一（安井建築設計）	尾崎勝弘（清水建設） 小嶋　宏（大阪府） 畑　利一（建設省）	金本賢治（大阪建築） 芝淵荘夫（住宅公団） 原納藤一（小河建築設計） 宮本孝一（大成建設）
第11回　1964年	東　孝光（坂倉準三建築研） 小川博三（竹内建築） 小林昭夫（ナショナル住建） 畑　靖夫（清水建設）	上田宏二（大阪建築） 紙　克行（安井建築設計） 高松恭一（日建設計） 前田紹郎（住宅公団）	牛山　勉（ウシヤマ設計研究） 亀田喜世子（竹中工務店） 竹村吉高（大林組） 山田耕蔵（大阪府）	瓜本信之（日本国有鉄道） 久保田哲雄（大成建設） 西村正邦（近畿地建）
第12回　1965年	西村源之助（大阪建築） 鈴木幹司（清水建設） 池田　博（住宅公団） 恒成　恒（大阪府）	広瀬二郎（日建設計） 樋口元一（大林組） 能勢次郎（能勢建築） 山川忠良（中国地建）	出江　寛（竹中工務店） 園　　章（富家建築） 松下徳義（安井建築設計） 大谷竜起（岩崎建築設計）	増田和彦（坂倉準三建築研） 針崎権蔵（小河建築設計） 土井崇司（京都大学）
第13回　1966年	今倉邦彦（東畑建築） 奥田　実（竹中工務店） 白井義惟（住宅公団） 畑中成雄（共同設計）	小野栄士（日本万博協） 亀田正也（大阪建築） 田中雅俊（清水建設） 吉田千秋（安井建築設計）	大西孝夫（日建設計） 今野利直（竹中工務店） 恒川　弘（篠田川口建築）	岡崎甚幸（京都大学） 坂本　勉（近畿地建） 中島忠義（大林組）
第14回　1967年	伊藤敬祐（昭和設計） 栢本良三（安井建築設計） 辰己詢二（大阪府） 藤川重一（大阪府住宅公社）	石川　功（東畑建築） 小林　昭（清水建設） 田中　喬（京都大学） 山下信夫（大林組）	植田寿章（竹中工務店） 酒井蔚聿（大阪建築） 田畑　弘（日建設計） 山田義信（住宅公団）	太田隆信（坂倉準三建築研） 鈴木雅夫（大阪市） 辻野純徳（浦辺建築）
第15回　1968年	（設計部門） （構造部門） （施工部門） （設備部門） （計画部門）	千葉春海（日建設計） 藤沢　隆（兵庫県） 松井克俊（日建設計） 内山義治（錢高組） 滝川昌宏（竹中工務店） 堀　大成（大林組） 北川雅二（住宅公団）	芝山　昭（藤木工務店） 竹本丈太朗（安井建築設計） 長濱　忠（大林組） 池山壮一郎（竹中工務店） 斉藤有弘（近畿大学）	深谷浩一（大成建設） 竹延邦義（竹中工務店） 久保田継夫（間組）
第16回　1969年	（設計部門） （構造部門） （設備部門） （施工部門） （計画部門）	垣内健男（安井建築設計） 藪野宜美（日建設計） 青柳　司（日建設計） 上村幸之（大林組） 吉田勝彦（大林組） 島村　昇（住宅公団）	寺本敏則（日建設計） 美濃吉昭（大成建設） 竹内美智雄（大林組） 河野元昭（日建設計） 小西寿一（大林組） 郡山正久（大林組）	毛利喆夫（竹中工務店） 北村俊男（清水建設）
第17回　1970年	（設計部門） （構造部門） （設備部門） （施工部門） （計画部門）	谷口　望（日建設計） 山口哲夫（安井建築設計） 科埜僚宏（大阪建築） 高木正敏（大林組） 島貫　崇（竹中工務店） 大場若夫（大林組） 溝神宏至朗（安井建築設計）	萩原信行（東畑建築） 伊藤誠三（大成建設） 増田繁治（兵庫県） 中川　滋（竹中工務店） 木村　稔（大林組）	藤原一秀（久米建築） 上川真正（大林組） 首藤信夫（兵庫県）
第18回　1971年	（設計部門） （構造部門） （設備部門） （施工部門） （計画部門）	小角　亨（日建設計） 狩野忠正（竹中工務店） 小菅与三一（大林組） 松岡憲生（近畿電気工事） 岩田憲三（大成建設） 山本　清（日建設計）	岸　政司（安井建築設計） 田口彰宏（大林組） 山本　廣（建材社） 高島三郎（鹿島建設）	田中弘成（大林組） 真塚達夫（東畑建築） 伴城喜恵（竹中工務店）

回・年	顕彰者　（所属等）			
第19回　1972年	（設計部門）	藤縄正俊（大林組）	福田辰造（大建設計）	後藤　攻（大建設計）
		長沢丘幸（竹中工務店）		
	（構造部門）	金澤正明（大林組）	下伊豆隆三（安井建築設計）	加藤裕造（竹中工務店）
		飯田隆保（中部電力）		
	（設備部門）	井上良則（竹中工務店）	内山　昇（高砂熱学）	稲垣武久（東海設計）
	（施工部門）	高木嗣郎（大林組）	岡田善弘（鹿島建設）	
	（計画部門）	中田雅資（住宅公団）		
第20回　1973年	（設計部門）	横川隆一（日建設計）	遠藤剛生（遠藤建築）	赤木圀文（小河建築）
		中川洋一（安井建築設計）		
	（構造部門）	辻　英一（安井建築設計）	鵜飼邦夫（日建設計）	
	（設備部門）	嵐倉正章（近畿電気工事）	大林芳夫（日建設計）	高橋清久（竹中工務店）
	（施工部門）	和田貞男（竹中工務店）	宮脇克己（鹿島建設）	井上敬一（竹中工務店）
	（計画部門）	社本孝夫（住宅公団）	浅野　誠（日建設計）	
第21回　1974年	（設計部門）	野田泰弘（日建設計）	松山　新（安井建築設計）	山田耕治（大林組）
		森　忠彦（竹中工務店）		
	（構造部門）	内田直樹（日建設計）	橋本　健（大林組）	
	（設備部門）	藤本　健（日建設計）	小南義彦（竹中工務店）	
	（施工部門）	川崎一雄（竹中工務店）	三浦康夫（大林組）	
	（計画部門）	木村輝久（大林組）		
	（その他部門）	尾野雄三（大阪市）		
第22回　1975年	（設計部門）	高松　伸（匠設計室）	山口祥悟（日建設計）	矢作　茂（大林組）
		小川清一（竹中工務店）	伊藤　元（安井建築設計）	谷田庄司（東畑建築）
	（構造部門）	藤塚　敬（大林組）	佐々木照夫（竹中工務店）	
	（設備部門）	迫村隆毅（日建設計）	中嶋利治（竹中工務店）	
	（施工部門）	岡田正徳（竹中工務店）		
	（計画部門）	田辺一之（日建設計）		
第23回　1976年	（設計部門）	横山芳祝（竹中工務店）	池田恵次（安井建築設計）	竹山清明（兵庫県）
		江草泰造（大林組）	菊地　平（竹中工務店）	
	（構造部門）	植田雅敏（竹中工務店）	八木貞樹（大林組）	酒井和三（大成建設）
	（設備部門）	加藤　晃（日建設計）	堀内龍彦（竹中工務店）	
	（施工部門）	谷口　惺（竹中工務店）		
	（その他部門）	竹澤克彦（東畑建築）		
第24回　1977年	（設計部門）	中嶋　淳（藤木工務店）	岡本弘之（安井建築設計）	喜多隼紀（竹中工務店）
		小野為一（日建設計）	市嶋久嗣（大林組）	杉本浩康（兵庫県）
	（構造部門）	深井敬三（日建設計）	青野皓一（大建設計）	
	（設備部門）	喜多村義興（大林組）	赤松重則（日建設計）	
	（施工部門）	坂田雄二（竹中工務店）	勝　一弘（大林組）	
	（計画部門）	竹本俊平（住宅公団）	太田貞興（小河建築）	
第25回　1978年	（設計部門）	久保田秀男（日建設計）	羽生克彦（安井建築設計）	七字祐介（大成建設）
		鎌谷憲彦（竹中工務店）	中河克則（鴻池組）	室川康男（大林組）
	（構造部門）	斎藤幸雄（日建設計）	瀬川輝夫（竹中工務店）	田中　宏（大林組）
		小野徹郎（鴻池組）		
	（設備部門）	山脇久樹（安井建築設計）		
第26回　1979年	（設計部門）	與謝野久（日建設計）	松井康吉（東畑建築）	増田　仁（大林組）
		間野洋三（安井建築設計）	松村耕四郎（鴻池組）	三宗司郎（昭和設計）
	（構造部門）	北條稔郎（竹中工務店）	花島　晃（日建設計）	佃　安弘（鴻池組）
		福本早苗（大林組）		
	（設備部門）	長野光昭（竹中工務店）	猪岡達夫（日建設計）	
	（施工部門）	佐竹啓一（鴻池組）	山下隆司（清水建設）	喜安正秀（竹中工務店）
	（計画部門）	森　　薫（日建設計）		

回・年	顕彰者　（所属等）			
第27回　1980年	（設計部門）	北村恭一（大建設計）	八木俊樹（安井建築設計）	松本博俊（東畑建築）
		寺岡俊彦（日建設計）	沢田　伸（兵庫県）	
	（構造部門）	外園　隆（大林組）	山口　猛（日建設計）	
	（設備部門）	関根博史（大林組）	角南修平（近畿電気工事）	佐々木義隆（竹中工務店）
	（施工部門）	大内山正英（鴻池組）		
第28回　1981年	（設計部門）	奥廣宗玄（電電公社）	本間利雄（大林組）	三木省二（三座建築）
		横尾迪夫（安井建築設計）	澤　英雄（大建設計）	
	（構造部門）	小堀隆治（住都公団）		
	（設備部門）	大原千幸（日建設計）	坂田　進（東畑建築）	浦島澄男（近畿電気工事）
	（施工部門）	阪本保孝（大林組）		
	（計画部門）	藤野邦夫（住都公団）		
第29回　1982年	（設計部門）	大泉研二（日建設計）	苫名　正（竹中工務店）	岩下博美（大林組）
		宮下幹雄（大建設計）	駒田哲男（日建設計）	
	（構造部門）	岡本達雄（竹中工務店）	原　克巳（日建設計）	樫原健一（鴻池組）
	（設備部門）	森崎　実（日建設計）		
	（計画部門）	南　和人（アトリエ・アーバン・アーボア）		
	（その他部門）	中元三郎（安井建築設計）		
第30回　1983年	（設計部門）	林　達雄（竹中工務店）	浦山　哲（大成建設）	渡海紀三朗（日建設計）
		下前裕一（東畑建築）	高田　茂（安井建築設計）	佐藤　進（電電公社）
	（構造部門）	亀井　功（大林組）		
	（設備部門）	杉浦修史（竹中工務店）	工藤和夫（日建設計）	曽我幸夫（近畿電気工事）
	（施工部門）	斉藤悦夫（清水建設）	上條俊男（大成建設）	
第31回　1984年	（設計部門）	伊藤敏明（清水建設）	海野克則（大林組）	長尾　彰（昭和設計）
		猪子　順（日建設計）	高山司郎（大建設計）	玉置豊始（東畑建築）
	（構造部門）	田中耕太郎（大林組）	藤原君夫（昭和設計）	
	（設備部門）	端　景一（日建設計）	矢田史八（高砂熱学）	
	（施工部門）	柴崎　隆（大成建設）	久住友紀雄（大林組）	
	（計画部門）	川本得信（住都公団）		
第32回　1985年	（設計部門）	林　和久（日建設計）	川北　英（竹中工務店）	佐伯　博（東畑建築）
		前川　清（竹中工務店）	児玉一秀（清水建設）	小南一郎（竹内建築）
		木田伸一郎（安井建築設計）		
	（構造部門）	深野　慶（大林組）	下野直人（竹中工務店）	黒木安男（鴻池組）
	（設備部門）	遠藤正雄（竹中工務店）	西田英弘（大阪電気暖房）	
	（施工部門）	江崎　誠（松村組）	山辺秀夫（大林組）	
	（計画部門）	加藤　明（住都公団）	寺田高久（竹中工務店）	
第33回　1986年	（設計部門）	北村　潤（東畑建築）	中西博隆（日建設計）	茨木　保（竹中工務店）
		沼田　亘（昭和設計）	矢野　茂（不動建設）	平畑正人（藤木工務店）
	（構造部門）	山本　博（竹中工務店）		
	（設備部門）	片山淳一（高砂熱学）	山田祐三（安井建築設計）	
	（施工部門）	倉　良廣（清水建設）	中西一吉（竹中工務店）	
	（計画部門）	金澤成保（日建設計）	松島　清（昭和設計）	
	（その他部門）	中川佳久（安井建築設計）		
第34回　1987年	（設計部門）	久保清一（アルキービ建築）	赤木　隆（日建設計）	桜井則雄（大林組）
		桜井信雄（竹中工務店）		
	（構造部門）	浮田高志（安井建築設計）	長谷川保善（竹中工務店）	山本貞次（東畑建築）
	（設備部門）	大高一博（日建設計）	山崎慶太（竹中工務店）	
	（施工部門）	広瀬清豪（大林組）	高畑顯信（竹中工務店）	
	（計画部門）	山本光良（昭和設計）		
	（その他部門）	小杉正博（松村組）		

回・年	顕彰者　（所属等）			
第35回　1988年	（設計部門）	松川敏正（竹中工務店）	三木啓正（安井建築設計）	岡本　隆（日建設計）
		万野正明（大林組）	吉井和男（東畑建築）	見城辰哉（清水建設）
	（構造部門）	石倉秀敏（竹中工務店）	西村勝尚（大林組）	福森　享（東畑建築）
	（設備部門）	角　晴輝（竹中工務店）	古閑幸雄（大林組）	
	（施工部門）	三木敏則（竹中工務店）	志水史典（大林組）	
	（計画部門）	佐々木正人（竹中工務店）		
第36回　1989年	（設計部門）	大塚裕弘（東畑建築）	後藤浩美（竹中工務店）	田中滋典（大林組）
		池本　裕（昭和設計）		
	（構造部門）	和田雅洋（竹中工務店）		
	（設備部門）	楠本　望（竹中工務店）	織田邦男（高砂熱学）	後藤　康（大成建設）
	（施工部門）	西　博康（清水建設）	小島政章（竹中工務店）	児玉伸明（鴻池組）
	（その他部門）	廣瀬忠孝（竹中工務店）	田中達彦（大林組）	橋本　宏（鹿島建設）
第37回　1990年	（設計部門）	菅野忠司（鹿島建設）	進藤　明（フジタ）	渡辺豪秀（日建設計）
		松田善弘（昭和設計）	永島敏郎（安井建築設計）	
	（構造部門）	椿　英顯（竹中工務店）		
	（設備部門）	前田佳範（竹中工務店）		
	（施工部門）	片山　豊（鹿島建設）	山口　洋（藤木工務店）	新谷晃崇（錢高組）
	（計画部門）	石倉健彦（住都公団）		
	（その他部門）	北原英雄（竹中工務店）	古津彰宏（松村組）	
第38回　1991年	（設計・計画部門）	森島敬美（東畑建築）	花田佳明（日建設計）	勝原宏幸（安井建築設計）
		赤対清吾郎（鹿島建設）	吉田寛史（竹中工務店）	赤井富弘（近畿地建）
	（構造部門）	前野敏元（竹中工務店）	緑川　功（日建設計）	山浦晋弘（安井建築設計）
		田辺太一（鴻池組）		
	（設備部門）	金　泰彦（日建設計）	小島福生（竹中工務店）	
	（施工部門）	本谷　淳（大林組）	乾　重樹（竹中工務店）	河原慎治（鹿島建設）
	（その他部門）	松元秀信（竹中工務店）		
第39回　1992年	（設計・計画部門）	増田俊哉（竹中工務店）	米井　寛（東畑建築）	川島克也（日建設計）
		井ノ口誠（昭和設計）	宮地雄一郎（安井建築設計）	浪瀬朝夫（藤木工務店）
		仲井　誠（竹中工務店）		
	（構造部門）	多賀謙蔵（日建設計）	西郷慈師（東畑建築）	片山丈士（竹中工務店）
		神沢宏明（鴻池組）		
	（設備部門）	高　正明（安井建築設計）	福田　豊（NTT）	
	（施工部門）	阿知良充（鹿島建設）	平岡卓志（戸田建設）	
第40回　1993年	（設計・計画部門）	指田孝太郎（日建設計）	川合智明（竹中工務店）	大島弘資（安井建築設計）
		北森一弘（昭和設計）	徳岡浩二（徳岡昌克事）	関田　弘（大林組）
		竹田芳之（久米設計）	河端秀直（日建設計）	高梨雄二郎（竹中工務店）
	（構造部門）	藤井正則（大林組）	梶山　毅（鴻池組）	清水　斉（竹中工務店）
		阿蘇品尚士（東畑建築）		
	（設備部門）	吉川　淳（竹中工務店）	宮野理文（日建設計）	
	（施工部門）	福井茂和（大林組）	大橋直也（竹中工務店）	小笠原和博（INAX）
		甲野裕之（竹中工務店）		
第41回　1994年	（設計・計画部門）	山本勝彦（安井建築設計）	野田隆史（竹中工務店）	宮川　浩（日建設計）
		浜田　優（鹿島建設）	野村昌宏（竹中工務店）	
	（構造部門）	吉澤幹夫（日建設計）	森　裕重（鴻池組）	中平和人（竹中工務店）
		曽我　裕（竹中工務店）	林　隆治（昭和設計）	
	（設備部門）	堀川　晋（日建設計）	小谷祐一（竹中工務店）	
	（施工部門）	柳川隆一（大林組）	西口正人（竹中工務店）	間平只志（大成建設）
		福島　隆（鹿島建設）		

回・年	顕彰者　（所属等）			
第42回　1995年	（設計・計画部門）	登坂　誠（日建設計）	大谷直己（竹中工務店）	塩見浩一郎（鹿島建設）
		河﨑敦子（竹中工務店）	澤柳達男（竹中工務店）	藤城義丈（徳岡昌克事）
		中尾勝悦（大建企画）	若林　亮（日建設計）	上原　徹（日建設計）
		藤田尚也（鹿島建設）		
	（構造部門）	上田博之（竹中工務店）	陶器浩一（日建設計）	西川宏之（松村組）
	（設備部門）	小林陽一（安井建築設計）	澤田宗久（東畑建築）	寺田庄作（昭和設計）
		伊藤昌明（日建設計）		
	（施工部門）	川上宏伸（大林組）	牟田有宏（竹中工務店）	田村典正（大成建設）
		中西全一（戸田建設）	法貴慶人（鹿島建設）	
	（その他部門）	田中英嗣（安井建築設計）	中出　聡（昭和設計）	下川　弘（ハザマ）
第43回　1996年	（設計・計画部門）	秋田　浩（住都公団）	石川貴之（日建設計）	松岡尚志（竹中工務店）
		八幡健志（日建設計）	吉田賢一（鴻池組）	山田俊紀（昭和設計）
		丸林　哲（竹中工務店）	篠宮篤史（安井建築設計）	桜本敏樹（大林組）
		吉野博支（鹿島建設）	中川千裕（東畑建築）	小野彰子（東陶機器）
	（構造部門）	大氏正嗣（近畿地建）	夜船康司（竹中工務店）	白沢吉衛（日建設計）
		津田和征（安井建築設計）		
	（設備部門）	中田茂郎（日建設計）	源　邦夫（フジタ）	副野隆英（竹中工務店）
	（施工部門）	峯　勝彦（大林組）	市川敦史（竹中工務店）	奥畑浩一郎（大成建設）
		新實　伸（竹中工務店）	伊坂　大（鹿島建設）	
	（その他部門）	能勢浩三（竹中工務店）	岩戸利男（竹中工務店）	
第44回　1997年	（設計・計画部門）	堀井一孝（日建設計）	新谷依子（住都公団）	篠原佳則（安井建築設計）
		森下　修（竹中工務店）	大谷弘明（日建設計）	澤田英行（鹿島建設）
		門谷和雄（竹中工務店）	中村文紀（東畑建築）	藤岡慶子（大林組）
		河辺晴重（竹中工務店）		
	（構造部門）	徳田幸弘（日建設計）	佐藤裕司（藤木工務店）	山根一三（竹中工務店）
		坂口清隆（鴻池組）		
	（設備部門）	粕谷浩司（日建設計）	加藤浩司（竹中工務店）	
	（施工部門）	山口善史（大林組）	山本圭介（大成建設）	辻　千広（大林組）
		松田康史（鹿島建設）	森　康久（竹中工務店）	
第45回　1998年	（設計・計画部門）	八里正人（環境開発研究所）	佐々木由美（竹中工務店）	石井太志（昭和設計）
		小林直紀（安井建築設計）	林　　明（大林組）	児玉　謙（日建設計）
		竹村　晃（竹中工務店）	小野道也（鹿島建設）	
	（構造部門）	松本竹史（竹中工務店）	太田原克則（東畑建築）	田代靖彦（日建設計）
		小畠伸一（JR 西日本）	竹島　剛（鹿島建設）	
	（設備部門）	鍋島以宏（新日本空調）	石原憲司（竹中工務店）	山本啓史（日建設計）
	（施工部門）	中谷浩之（大林組）	永野　顕（竹中工務店）	仲田雅洋（鹿島建設）
		古川芳信（藤木工務店）		
	（その他部門）	飯島憲一（安井建築設計）	西村英夫（竹中工務店）	

日本建築協会紋章—図案募集・入選・図案決定—

會　　告

協會紋章ノ件

當協會ノ紋章ハ今回次ノ通決定致シマシタ



協會員胸章ノ件

當協會員胸章ヲ上記會告ノ紋章ニ從ヒ調製致シテアリマス壹個金壹圓也ニテ御頒チ致シマスカラ御佩用ヲ願ヒマス

追テ建築倶樂部會員胸章ハ當協會員タルコトヲモ兼ネ表ハスモノデアリマス

「建築と社会」昭和７年10月号 Vol.15 No.10より

會　　告

日本建築協會紋章圖案懸賞募集規程

第一條　本協會ハ日本建築協會紋章ノ圖案ヲ本規程ニ依リ懸賞募集ス
紋章ハ會員章、印刷物、會旗及其他ノ器具ニ應用シ得ルモノトス

第二條　應募者ハ本協會員（會員各賛助員）ニ限ル

第三條　應募圖案ノ提出期限ハ昭和七年三月末日正午迄トス

第四條　應募圖案ハ本協會事務所ニ提出セラルルコト

第五條　應募圖案ニ關スル條件左ノ如シ
1　意匠ハ本協會ノ特質ヲ表現スルモノトス
1　形式ハ簡明ナルモノ
1　文字及略字ヲ使用スル塲合ニハ日本語ニ依ルコト
1　圖案ノ寸法ハ直徑五糎トシ黒單色仕上トス
1　圖案ノ用紙又ハ素紙ハはがき大トシ原圖紙ヲ用ユルコト

第六條　應募圖案ニハ總テ署名ニ代フルニ暗號ヲ記載シ之ヲ密封シ別ニ暗號ノミヲ表記セル封筒内ニ當選ノ通知ヲ受クヘキ者ノ住所氏名及暗號ヲ明記シタル紙片ヲ封入シ右圖案及封筒ヲ一括シテ更ニ適當ナル包裝ヲ爲シ表面ニハ宛名ト應募者ノ暗號及應募圖案タルコトノミヲ表示スルコト

第七條　應募ニ要スル一切ノ費用ハ應募者ノ負擔トシ一人數案ノ應募ヲ爲ストキハ其ノ各應募圖案毎ニ暗號ヲ記載スルコト

第八條　審査ニ關スル事項左ノ如シ
1　審査員ハ應募ニ加ハリ又ハ應募者ニ指助ヲ與フルコトヲ得ス
1　審査ニ對シテハ說明ヲ求メ又ハ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得ス
1　審査ノ結果ハ直ニ當選者ニ通知シ且最近ノ「建築と社會」雜誌ニ之ヲ發表スルコト
1　審査員左ノ如シ（五十音順）

副會長	池田　寛氏
會長 工學博士	片岡　安氏
副會長 工學博士	武田五一氏
會員	瀧澤眞弓氏
會員	本間乙彦氏
會員	本野精吾氏
會員	安井武雄氏

第九條　當選圖案ノ賞金左ノ如シ

入選	金參拾圓　壹名
佳作	金五圓宛　若干名

第十條　當選圖案ニ關スル一切ノ權利ハ本協會ニ歸屬スルモノトス

第十一條　應募圖案ハ一切之ヲ返戻セス

昭和七年二月

日本建築協會

「建築と社会」Vol.15 No.2より



木村水　仙之助　　晴號（陽）

入　選



佳作１　光木徳松　晴號（春）



佳作２　光木徳松　晴號（黒）



佳作３　安田則世　晴號（虫）



佳作４　早真俊夫　晴號（工）

日本建築協會紋章懸賞當選圖案

「建築と社会」Vol.15 No.6より

日本建築協会80年史を編集して

1997年（平成９年）３月、日本建築協会は関西建築協会として呱々の声を上げてから80周年を迎えた。

それにつけても、明治維新で衰退し人口まで激減した大阪に、近代工業の勃興とアジア貿易によってようやく活力が生まれ始めたころとはいえ、建物の密集地に過ぎなかった街を近代的商業都市に転換させなければならないという思いを持った有志が集い、タイミングよく関西建築協会を誕生させ、建築関係各部門の連携協力によって建築の進歩発展を図るとともに、建築を通じて広く社会に貢献するという命題を持ちつづけ、戦中戦後の苦難を乗り切り、現在の協会発展につなげ得た先輩方の尊い教え、強い意思がわれわれの心に響き、感謝の念がわいてくる。

80年史の編集準備会がスタートしたのは1997年４月14日である。すでに80周年記念式典が終了した後であった。当会の機関誌「建築と社会」が、節目ごとに周年記念特集号として略史、思い出、将来像等を、その時代の角度よりとらえて読ませる記事として取り上げ、1997年４月号も80周年記念号として発刊されていることからして、単独での協会史の編纂は当初考えられなかった。しかし、いずれ企てねばならない協会史編纂を直視すると、すでに協会発足時を語れる人はなく、戦後の混乱期を見た人も少なくなっていることから、この際、“将来に向かってつながるように歴史を振り返り、略史としてまとめ、100周年に至る資料をととのえることが重要である”との結論に達した。

かかる事業は、数年の期間をとって発足するのが常道である。だが80周年の記念式典も終了しており、あまり遅延することは許されない。早速、編纂委員会を組織し数回の討議の結果、以下を編纂方針とし、作業にとりかかった。

１）可能なかぎり資料収集を行い、本会発展の経過、事業、業績等の資料を中心として簡潔に記す。

２）本協会を創立し育て、戦中戦後の混乱期を乗り切り、現在へとつなげた、各時代に協会を担って活躍した人々を紹介する。

資料収集は事務局の手をわずらわせたが、数次にわたる事務所移転、戦中戦後の混乱期での整理不足、さらに当時を記憶する人も少なく、完全な資料を求めるのは望み得ないことも判明した。各時代に活躍された人々を紹介する項については、幸いにも坂本勝比古先生のご協力により、先生をリーダーとして近代建築史を研究される方々でワーキンググループをつくり執筆、併せて年表作成までご尽力いただいた。この２点に加え、協会活動の本旨を総論で述べ、また、本会長老方による座談会を催すことで、資料では表せ得ない協会活動を生き生きと取り上げることが出来たと思う。

この80年をまとめて回顧すると、建築技術の進歩発展は著しいが、建築界は分野別に分化し、社会もまた、大きく変貌している。そして建築にも地球環境の保全を考えて、ノーマライゼイションの理念をもった家づくり、まちづくりが要求される時代となった。この変革の時代に、日本建築協会は建築関係の総合団体として、さらに関係諸団体と協力して時代の要望にこたえるとともに、一貫して守ってきた建築を通じて社会奉仕をという使命を守り抜く努力を惜しんではならない。

なお、本史編纂にご協力いただいた編纂委員、ワーキンググループの各位、また坂本先生には特にお骨折りをいただいたことを記して感謝を表したい。

80年史編纂委員長　長谷部朔郎

●80年史編纂委員会（50音順）

委員長	長谷部　朔　郎	（元編集委員長）
委　員	安　達　英　俊	（出版委員会）
〃	近　藤　達　夫	（建材委員会）
〃	谷　　淳之介	（支部代表）
〃	十　倉　　毅	（編集委員会）
〃	原　見　昌　志	（事業委員会）
〃	和　田　康　由	（教育委員会）
事務長	吉　田　悦　二	（元事務局長）

●事務局担当

加藤三郎／青野明子／宮竹正次／吉崎裕子

●ワーキンググループ

主　宰	坂　本　勝比古	（神戸芸術工科大学名誉教授）
研究員	安　達　英　俊	（安達英俊建築研究所）
〃	石　田　潤一郎	（滋賀県立大学）
〃	植　松　清　志	（大阪府立西野田工業高校）
〃	梅　宮　弘　光	（神戸大学）
〃	桐　浴　邦　夫	（京都建築専門学校）
〃	酒　井　一　光	（大阪市立博物館）
〃	橋　寺　知　子	（関西大学）
〃	山　形　政　昭	（大阪芸術大学）
〃	吉　田　高　子	（近畿大学）
〃	和　田　康　由	（大阪市立都島工業高校）

日本建築協会80年史

1999年3月31日　初版

非売品

編集著作人　社団法人　日本建築協会

発　行　所　社団法人　日本建築協会
〒530－0001
大阪市北区梅田1－1－3－2100
電話　06－6348－0635
郵便振替口座　00910－9－39975

印　刷　所　凸版印刷株式会社
大阪市福島区海老江3丁目22番61号

© 日本建築協会　1999

日本建築協会80年史 発刊によせて

社団法人 日本建築協会 会員有志

アスワン株式会社	大阪市西区新町3-5-10　TEL 06-6532-0171
株式会社 あめりか屋	大阪市北区中之島4-3-25　TEL 06-6444-1501
株式会社 淺沼組	大阪市天王寺区東高津町12-6　TEL 06-6768-5222
浅海電気株式会社	大阪市北区西天満3-7-4　TEL 06-6362-8711
株式会社 INAX 関西統括支社	大阪市西区新町1-34-15　大阪グレンチェックビル2階　TEL 06-6539-3500
株式会社 伊藤建築設計事務所	名古屋市中区錦2-2-13　名古屋センタービル　TEL 052-222-8611
株式会社 石渡康三郎塗装店	大阪市阿倍野区播磨町2-6-1　TEL 06-6693-2031
株式会社 浦辺設計	大阪市北区梅田1-12-39　新阪急ビル内　TEL 06-6341-1680
株式会社 エービーシー商会	大阪市中央区大手前1-7-31　OMMビル8階　TEL 06-6944-4900
財団法人 大阪市建築技術協会	大阪市阿倍野区旭町1-2-7-1300　あべのメディックス13階　TEL 06-6636-1777
大阪ガス株式会社 大阪事業本部	大阪市西区千代崎3丁目南2-37　TEL 06-6586-3242
大阪化工株式会社	吹田市山田東1-12-12　TEL 06-6876-2334
学校法人 福田学園 大阪工業技術専門学校	大阪市北区天満1-9-27　TEL 06-6352-0091（代表）
財団法人 大阪住宅センター	大阪市中央区南船場4-4-3　御堂筋アーバンライフビル4階　TEL 06-6253-0071～3
大阪装飾株式会社	大阪市西区京町堀1-13-24　TEL 06-6444-1410（代表）
大島応用化学工業株式会社	大阪市旭区太子橋1-15-22　TEL 06-6954-6521
株式会社 大林組	大阪市中央区北浜東4-33　TEL 06-6946-4578
王建工業株式会社	大阪市北区西天満6-1-2　TEL 06-6362-9402
株式会社 岡村製作所 関西支社	大阪市中央区南船場4-1-9　南船場第一東洋ビル　TEL 06-6282-4011
鹿島建設株式会社 関西支店	大阪市西区阿波座1-3-15　TEL 06-6536-3311（代表）
株式会社 金山工務店	大阪市中央区内淡路町1-1-8　TEL 06-6942-5461（代表）
株式会社 神崎組	姫路市北条口3-22　TEL 0792-23-2021
関西ペイント株式会社	大阪市中央区伏見町4-3-6　TEL 06-6203-5012
株式会社 きんでん	大阪市北区本庄東2-3-41　TEL 06-6375-6000
株式会社 北山組	和歌山市友田町3-83　TEL 0734-32-1155
協和建設工業株式会社 大阪支店	大阪市北区天神橋2-3-9　第一ビル　TEL 06-6351-9701（代表）
株式会社 熊谷組 大阪支店	大阪市都島区片町2-10-5　TEL 06-6352-1151
栗原工業株式会社	大阪市北区角田町1-1　TEL 06-6313-1101

日本建築協会80年史 発刊によせて

社団法人 日本建築協会 会員有志

コーナン建設株式会社　大阪市北区大淀南1-9-10　TEL 06-6456-4311（代表）

株式会社 小西設計　大阪市西区立売堀1-12-16　TEL 06-6532-4051（代表）

五洋建設株式会社　広島市西区西観音2-1　TEL 082-234-6200

株式会社 鴻池組　大阪市中央区北久宝寺町3-6-1　TEL 06-6244-3547

サンエス石膏株式会社　吹田市江坂町1-23-101　大同生命江坂ビル13階　TEL 06-6339-0870

株式会社 佐藤総合計画 関西事務所　大阪市中央区北久宝寺町2-2-13　TEL 06-6263-3889

才門建設株式会社　大阪府岸和田市下野町3-10-25　TEL 0724-38-2121

株式会社 坂倉建築研究所 大阪事務所　大阪市西区京町堀1-15-7　TEL 06-6443-0021

三機工業株式会社 大阪支店　大阪市中央区北浜2-2-21　TEL 06-6202-3071

株式会社 三晃空調　大阪市北区西天満3-13-20　TEL 06-6363-1671

三精輸送機株式会社　大阪府吹田市江坂町1-13-18　TEL 06-6385-5624

株式会社 山陽瓦　倉敷市中島2360-20　TEL 086-465-1988

ショーボンド建設株式会社 建築事業部　大阪市城東区永田3-12-15　TEL 06-6965-4350

清水建設株式会社 大阪支店　大阪市中央区本町3-5-7　TEL 06-6263-2800

株式会社 昭和設計　大阪市港区弁天1-2-1-800　オーク1番街　TEL 06-6575-5555

神東塗料株式会社　尼崎市南塚口町6-10-73　TEL 06-6426-3355

新日軽株式会社　大阪市淀川区西中島7-1-5　辰野新大阪ビル3階　TEL 06-6390-1313

住友建設株式会社 大阪支店　大阪市中央区北浜4-7-28　TEL 06-6220-8712

住友電設株式会社　大阪市西区阿波座2-1-4　TEL 06-6537-3430

株式会社 清和建築設計事務所　京都市中京区麩屋町二条下ル尾張町221　TEL 075-231-1492

株式会社 精研　大阪市中央区瓦屋町2-11-16　TEL 06-6768-5031

株式会社 錢高組　大阪市西区西本町2-2-11　なにわ筋ツインズウエスト　TEL 06-6531-6431

タケチ工業ゴム株式会社　大阪府吹田市朝日が丘町15-2　TEL 06-6378-3799

株式会社 タジマ 大阪営業所　大阪市西区京町堀1-10-5　TEL 06-6441-5951

ダイダン株式会社　大阪市西区江戸堀1-9-25　TEL 06-6441-8231

株式会社 大氣社 大阪支社　大阪市北区中之島3-2-18　住友中之島ビル7階　TEL 06-6448-5851

株式会社 大建設計　大阪市西区京町堀1-13-20　TEL 06-6449-6800

大成建設株式会社 関西支店　大阪市中央区南船場1-14-10　TEL 06-6268-8500

日本建築協会80年史 発刊によせて

社団法人 日本建築協会 会員有志

株式会社 大佛 京都市東山区今熊野池田町8-5 TEL 075-541-3344

第一法規出版株式会社 関西支社 大阪市西区新町2-15-24 TEL 06-6541-5921

株式会社 竹中工務店 大阪市中央区本町4-1-13 TEL 06-6252-1201

竹林塗装工業株式会社 大阪市淀川区新北野1-12-2 TEL 06-6301-9281

中央電設株式会社 大阪市福島区海老江1-1-31 TEL 06-6453-8720

株式会社 中電工 広島市中区小網町6-12 TEL 082-291-7411

中部資材株式会社 名古屋市港区入船2-4-31 TEL 052-661-7231

朝陽電気株式会社 大阪市北区中之島3-2-4 TEL 06-6385-1361

テクノ・ナミケン株式会社 大阪市西区新町1-4-26 栄泉四ツ橋中央ビル TEL 06-6533-3855

株式会社 トウペ 大阪府堺市築港新町1丁5-11 TEL 0722-43-6411

戸田建設株式会社 大阪支店 大阪市西区西本町1-13-47 TEL 06-6531-6095

東急建設株式会社 大阪支店 大阪市北区豊崎3-19-3 TEL 06-6377-6514

東光電気工事株式会社 中部支社 名古屋市中区新栄1-33-2 TEL 052-251-1531（代表）

東陶機器株式会社 大阪市北区曽根崎2-3-7 梅新第一生命ビル東館 TEL 06-6364-1181

株式会社 東畑建築事務所 大阪市中央区伏見町4-4-10 TEL 06-6202-0391

東洋シヤッター株式会社 大阪市中央区南新町1-2-10 TEL 06-6943-6571

株式会社 東洋製作所 中部支店 名古屋市西区中小田井4-175 TEL 052-505-0351

ナブコドア株式会社 大阪市西区西本町1-13-8 TEL 06-6532-5841（代表）

株式会社 中道組 大阪市都島区片町1-3-4 TEL 06-6352-4771

西日本三星シングル工事協同組合 大阪市西区京町堀1-10-5 TEL 06-6443-0431

株式会社 西原衛生工業所大阪店 大阪市北区中津6-8-4 TEL 06-6458-3625

株式会社 日建設計 大阪市中央区高麗橋4-6-2 TEL 06-6203-2361

株式会社 日興 広島市中区国泰寺町1-8-4 TEL 082-244-2111

日新工業株式会社 大阪支店 大阪市西区新町1-12-22 TEL 06-6533-3191

株式会社 日積サーベイ 大阪市中央区谷町3-1-9 MG大手前ビル TEL 06-6944-2755

日東金属工業株式会社 京都市上京区小川通中長者町下ル中橋詰町167 TEL 075-431-5351

日本建設株式会社 大阪市中央区備後町1-6-15 TEL 06-6226-0630（代表）

社団法人 日本建築材料協会 大阪市西区京町堀1-8-3 TEL 06-6443-0345

日本建築協会80年史 発刊によせて

社団法人 日本建築協会 会員有志

財団法人 日本建築総合試験所	大阪府吹田市藤白台5-8-1 TEL 06-6872-0391
株式会社 日本設計 関西支社	大阪市中央区淡路町3-3-7 興和淡心ビル TEL 06-6201-0321
日本設備工業株式会社 名古屋支店	名古屋市中区錦2-2-22 TEL 052-211-4126
野村建設工業株式会社	大阪市中央区高麗橋2-1-2 TEL 06-6226-9502
阪急エンジニアリング株式会社	大阪市北区芝田1-4-8 北阪急ビル4階 TEL 06-6359-2752
株式会社 平田タイル	大阪市西区阿波座1-1-10 TEL 06-6532-1239
株式会社 フジタ 大阪支店	大阪市北区堂島2-1-16 TEL 06-6348-4510
不二熱学工業株式会社	大阪市中央区南船場2-1-1 TEL 06-6261-2436
福西鋳物株式会社	大阪市西区南堀江4-25-17 TEL 06-6541-2924
藤井建設株式会社	大阪市中央区備後町1-5-10 藤井ビル TEL 06-6231-5731
株式会社 藤木工務店	大阪市中央区常盤町1-3-8 TEL 06-6966-0400（代表）
文化シヤッター株式会社	大阪市中央区北久宝寺町4-3-11 エーユー本町ビル6階 TEL 06-6282-0945
豊國建設株式会社	大阪市北区天満橋2-3-1 TEL 06-6353-1001（代表）
松尾橋梁株式会社	大阪市大正区鶴町3-4-18 TEL 06-6552-1551
株式会社 松村組	大阪市北区東天満1-10-20 TEL 06-6353-1131
株式会社 ミヤデラ 名古屋支店	名古屋市中区丸の内2-6-25 TEL 052-201-3551
株式会社 水間組	大阪市都島区東野田町1-1-4 TEL 06-6352-3121
ムツミ産業株式会社	大阪市西区鞆本町1-17-15 TEL 06-6441-0378（代表）
八木惣株式会社	堺市津久野町3丁28-10 TEL 0722-62-3838（代表）
八千代電設工業株式会社	大阪市中央区森ノ宮中央1-1-38 TEL 06-6941-6532
株式会社 安井建築設計事務所	大阪市中央区島町2-4-7 TEL 06-6943-1371
株式会社 安井杢工務店	京都府向日市上植野町御塔道42 TEL 075-933-0012
山本窯業化工株式会社	大阪府吹田市豊津町41-20 TEL 06-6338-8601
株式会社 ユニオン	大阪市西区南堀江2-13-22 TEL 06-6532-3188
寄神建設株式会社	神戸市兵庫区七宮町2-1-1 TEL 078-681-6662
有限会社 柳々堂	大阪市西区京町堀1-12-3 TEL 06-6443-0167～8

（50音順）

